津幡町刈安野々宮遺跡

国道８号線改築事業に係る石川県河北郡
津幡町刈安野々宮遺跡緊急発掘調査報告

１９８８

石川県立埋蔵文化財センター

津幡町刈安野々宮遺跡

国道８号線改築事業に係る石川県河北郡
津幡町刈安野々宮遺跡緊急発掘調査報告

石川県立埋蔵文化財センター

刈安野々宮遺跡全景

中・東地区調査区全景

東調査区の住居址群

東調査区の発掘風景

例　　言

1　本報告書は石川県河北郡津幡町刈安地内に所在する刈安野々宮遺跡の緊急発掘調査の記録である。

2　本遺跡の発掘調査は、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所管内の国道８号線改築事業（倶利伽羅バイパス）に係るもので、昭和５７年１２月に石川県立埋蔵文化財センター（担当　田島明人・谷内尾晋司・垣内光次郎）が試掘調査を実施し、昭和５８年５月３０日から１１月２６日まで本調査を実施した。

3　本遺跡の発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センター（西野秀和）が担当し、谷内尾晋司・戸間幹夫・三浦純夫（石川県立埋蔵文化財センター）の協力を受けたほか、竹田　学（津幡町教育委員会）、滋井　真、大藤雅男、本田秀生、北野博司（石川考古学研究会会員）、倉　直志、池田賢司の援助を受けた。

4　調査の実施に当たっては、建設省金沢工事事務所、津幡町教育委員会、地元刈安をはじめとする津幡町民助言、協力をうけた。

5　本遺跡出土遺物の整理作業は、石川県埋蔵文化財協会に委託して実施した。遺物整理作業に係わったのは、次の各氏である。

　尾田裕子・横山そのみ・馬場正子・北　洋子・黒田和子・渡辺洋子・河村裕子・戸澗かがり・滋井　真
　勝島栄蔵・

なお、遺構実測図の整理・トレースは西野が行った。

6　本報告書の編集・執筆は西野が当たり、次のように分担執筆をした。

　本田秀生（第 3章第 5・ 6節）

7　本遺跡の遺構・遺物実測図、現場写真、出土遺物などの資料は、本センターにて一括して保存管理に当たっている。

8　本遺跡の遺構・遺物挿図・写真図版の指示はつぎの通りであるが、適宜変更したものについては挿図内に明示した。

（１）　方位は全て磁北を表示する。

（２）　水平基準は、海抜高で表示する。（単位　m）

（３）　挿図の縮尺

　縄文時代土器拓影・実測図・石器実測図－１／３、土師器・須恵器実測図－１／３、珠洲焼・加賀古陶実測図－１／３、

（４）　写真図版中の復元土器の縮尺は統一してはいないが、土器破片および石器は約３分の１の縮小で掲載している。

（５）　写真図版中の遺物番号は、挿図に使用したものと統一している。

（６）　遺物の計測値の単位は、センチメートル、グラムを最小単位としている。

本　文　目　次

第１章　遺跡の環境 …… 1
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 4
第２章　調査に至る経緯と経過 …… 9
第１節　調査に至る経緯 …… 9
第２節　現地調査と遺物整理の経過 …… 9
第３章　検出された遺構と遺物 …… 13
第１節　検出された遺構の配置と層序 …… 13
第２節　西地区・古墳時代前期の遺構と遺物 …… 24
１　第29・30・32号住居址、２　第５号土坑、３　埋谷、４　不明落ち込みおよび谷地
第３節　中地区・古墳時代前期の遺構と遺物 …… 49
１　第１～３号住居址、２　第４号住居址・第５号掘立柱建物、３　第５号住居址、４　第６・31号住居址、
５　第７号住居址、６　第８号住居址、７　第９号住居址・第３号掘立柱建物、８　第10・19号住居址、
９　第22号住居址、10　第11・12号住居址、11　第14号住居址、12　第15号住居址、13　第16号住居址、
14　第17号住居址、15　第20号住居址、16　第１～３号土坑
第４節　東地区・古墳時代前期の遺構と遺物 …… 121
１　第13・21号住居址、２　第23号住居址、３　第24号住居址、４　第25号住居址、５　第26号住居址、
６　第27号住居址、７　第28号住居址、８　第10～18号土坑
第５節　縄文時代の遺物 …… 163
１　土器、２　石器
第６節　古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 170
１　中地区の掘立柱建物、２　古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構と遺物
第７節　中世の遺構と遺物 …… 176
１　西地区の掘立柱建物、２　第１号地下式坑、３　第２号地下式坑、４　第３号地下式坑、
５　第４号地下式坑、６　井戸、７　遺物
第４章　考　　察 …… 189
第１節　出土土器の分類と編年 …… 189
１　土器の分類、２　出土土器の位置、３　土器編年について
第２節　集落の構造と変遷 …… 214
１　住居址の分類、２　集落構成と変遷
第３節　中世地下式坑の位置について …… 221

挿　図　目　次

第１図　石川県津幡町の位置図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図（１／50,000） …… 2
第３図　周辺の地形　（１／5,000） …… 11
第４図　西地区の遺構配置図（１／750） …… 14
第５図　東・中地区の遺構配置図（１／750） …… 15
第６図　発掘区全体図（１／750） …… 16
第７図　西地区全体図（１／300） …… 17
第８図　東・中地区全体図（１／300） …… 18
第９図　土層断面図（１／120） …… 20
第10図　土層断面図（１／120） …… 21
第11図　土層断面図（１／120） …… 22
第12図　第29号住居址（１／80） …… 25
第13図　第29号住居址土層断面図（１／60） …… 25
第14図　第29・30・32号住居址（１／80） …… 26
第15図　第29・30・32号住居址遺物出土土器状況（１／120） …… 27
第16図　第29号住居址出土土器（１／３） …… 28
第17図　第29号住居址出土土器（１／３） …… 29
第18図　第５号土坑（１／30） …… 31
第19図　第５号土坑出土土器（１／３） …… 32
第20図　西地区埋谷遺物出土状況（１／120） …… 33
第21図　西地区埋谷土層断面図（１／80） …… 34
第22図　西地区埋谷出土土器（１）（１／３） …… 36
第23図　西地区埋谷出土土器（２）（１／３） …… 37
第24図　西地区埋谷出土土器（３）（１／３） …… 39
第25図　西地区埋谷出土土器（４）（１／３） …… 40
第26図　西地区埋谷出土土器（５）（１／３） …… 41
第27図　西地区埋谷出土土器（６）（１／３） …… 42
第28図　西地区埋谷出土土器（７）（１／３） …… 44
第29図　西地区埋谷出土土器（８）（１／３） …… 45
第30図　方形落ち込み土層断面図（１／60） …… 47
第31図　西地区谷地出土土器（１／３） …… 47
第32図　第１～３号住居址（１／80） …… 51
第33図　第１～３号住居址断面図（１／80） …… 52
第34図　第１～３号住居址遺物出土状況（１／120） …… 53
第35図　第１～３号住居址土層断面図（１／60） …… 54
第36図　第１号住居址出土土器（１）（１／３） …… 55
第37図　第１号住居址出土土器（２）（１／３） …… 56
第38図　第２号住居址出土土器（１／３） …… 58
第39図　第３号住居址出土土器（１／３） …… 59
第40図　第１～３号住居址周辺出土土器（１／３） …… 60

第41図　第４号住居址（１／80）……62
第42図　第４号住居址土層断面図（１／60）……63
第43図　第５号掘立柱建物（１／80）……63
第44図　第４号住居址出土土器（１／３）……65
第45図　第４号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……66
第46図　第５号住居址（１／80）……67
第47図　第５号住居址出土土器（１／３）……68
第48図　第６・31号住居址（１／80）……70
第49図　第６・31号住居址断面図（１／80）……71
第50図　第６号住居址遺物出土状況（１／120）……71
第51図　第６・31号住居址土層断面図（１／60）……72
第52図　第６号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……73
第53図　第７号住居址（１／80）……74
第54図　第７・32号住居址出土土器（１／３）……76
第55図　第31号住居址出土土器（１／３）……76
第56図　第８・９号住居址、第３号掘立柱建物跡（１／80）……78
第57図　第８号住居址土層断面図（１／60）……79
第58図　第８号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……79
第59図　第９号住居址土層断面図（１／60）……81
第60図　第３号掘立柱建物跡断面図（１／80）……81
第61図　第９号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……82
第62図　第９号住居址周辺出土土器（１／３）……84
第63図　第10・19号住居址（１／80）……85
第64図　第10号住居址及びその周辺出土土器（1／３）……86
第65図　第19号住居址出土土器（１／３）……87
第66図　第19号住居址出土土器（１／３）……89
第67図　第22号住居址出土土器（１／３）……91
第68図　第22号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……92
第69図　第22号住居址周辺出土土器（１／３）……93
第70図　第22号住居址周辺出土土器（１／３）……95
第71図　第11・12号住居址（１／80）……96
第72図　第11・12号住居址遺物出土状況（１／120）……97
第73図　第12号住居址土層断面図（１／60）……97
第74図　第11号住居址土層断面図（１／60）……97
第75図　第11号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……99
第76図　第12号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……100
第77図　第14号住居址・第６号掘立柱建物址（１／80）……101
第78図　第14号住居址土層断面図（１／60）……102
第79図　第14号住居址出土土器（１／３）……103
第80図　第14号住居址周辺出土土器（１／３）……104
第81図　第14号住居址及びその周辺出土土器（１／３）……105
第82図　第15号住居址（１／80）……107

第83図　第15号住居址周辺出土土器（1／3）……108
第84図　第16号住居址出土土器（1／3）……110
第85図　第16号住居址周辺出土土器（1／3）……111
第86図　第17号住居址（1／80）……113
第87図　第17号住居址周辺出土土器（1／3）……113
第88図　第20号住居址（1／80）……114
第89図　第20号住居址周辺出土土器（1／3）……115
第90図　第1号土坑（1／30）……116
第91図　第1～2号土坑出土土器（1／3）……117
第92図　第1～2号土坑周辺出土土器（1／3）……118
第93図　第3号土坑出土土器（1／3）……119
第94図　第13号住居址土層断面図（1／60）……121
第95図　第21号住居址（1／80）……122
第96図　第21号住居址土層断面図（1／60）……123
第97図　第21号住居址出土土器（1／3）……124
第98図　第21号住居址及びその周辺出土土器（1／3）……125
第99図　第23号住居址（1／80）……128
第100図　第23号住居址断面図（1／80）……129
第101図　第23号住居址土層断面図（1／60）……129
第102図　第23号住居址出土土器（1／3）……131
第103図　第23号住居址及びその周辺出土土器（1／3）……132
第104図　第23号住居址周辺出土土器（1／3）……134
第105図　第23号住居址周辺出土土器（1／3）……136
第106図　第23号住居址周辺出土土器（1／3）……137
第107図　第24号住居址（1／80）……138
第108図　第21号住居址土層断面図（1／60）……139
第109図　第24号住居址出土土器（1／3）……140
第110図　第24号住居址及びその周辺出土土器（1／3）……141
第111図　第25号住居址（1／80）……143
第112図　第25号住居址土層断面図（1／60）……143
第113図　第25号住居址土層断面図（1／60）……144
第114図　第25号住居址土坑（1／20）……144
第115図　第25号住居址特殊ピット（1／20）……145
第116図　第25号住居址床面出土土器（1／6）……145
第117図　第25号住居址及びその周辺出土土器（1／3）……146
第118図　第26号住居址（1／80）……148
第119図　第27号住居址（1／80）……149
第120図　第27号住居址土層断面図（1／60）……149
第121図　第26・27号住居址出土土器（1／3）……150
第122図　第28号住居址（1／80）……151
第123図　第28号住居址土層断面図（1／60）……151
第124図　第28号住居址床面出土土器（1／6）……152

第125図　第28号住居址出土土器（1／3）……154
第126図　第28号住居址及びその周辺出土土器（1／3）……155
第127図　第25号住居址他出土土器（1／3）……157
第128図　土坑・ピット実測図……159
第129図　土坑実測図（1／40）……160
第130図　石鏃・軽石・砥石（1／2・1／3）……161
第131図　縄文土器（1／3）……164
第132図　石器（1）（1／3・1／2）……166
第133図　石器（2）（1／3）……167
第134図　第1号掘立柱建物址（1／80）……171
第135図　須恵器（1）（1／3）……172
第136図　須恵器（2）（1／3）……173
第137図　須恵器（3）（1／3）……174
第138図　叩き目文の分類（花塚1984を転載、一部改変）……175
第139図　中世掘立柱建物址（1／100）……177
第140図　中世掘立柱柱穴断面図（1／30）……178
第141図　第1号地下式坑（1／80）……179
第142図　第2号地下式坑（1）（1／80）……180
第143図　第2号地下式坑（2）（1／80）……181
第144図　第3号地下式坑（1／80）……182
第145図　第4号地下式坑（1／80）……183
第146図　珠洲焼・加賀古陶（1／3）……185
第147図　珠洲焼・土師質土器・石製品（1／3）……186
第148図　木製品（1／3）……187
第149図　甕形土器の分類（I）……190
第150図　甕形土器の分類（II）……191
第151図　甕形・壺形土器の分類……194
第152図　壺形土器の分類……195
第153図　壺形・鉢形・小型土器の分類……198
第154図　高坏・器台形土器の分類……199
第155図　装飾器台・蓋形土器の分類……203
第156図　遺構内床面出土土器（1／6）……211
第157図　遺構内床面出土土器（1／6）……212
第158図　住居址の分類（1）……216
第159図　住居址の分類（2）……217
第160図　県内発掘の地下式坑（羽咋市柴垣ところ塚・加賀市天神山遺跡）……222
第161図　矢駄遺跡の坑……223

表　目　次

第1表　周辺の遺跡地名表 …… 3
第2表　縄文土器観察表 …… 165
第3表　石器計測表 …… 168
第4表　須恵器・土師器観察表 …… 172
第5表　住居址一覧表 …… 215
第6表　掘立柱建物計測値一覧 …… 215

図　版　目　次

巻頭図版　1　刈安野々宮遺跡全景、中・東地区調査区全景
巻頭図版　2　東調査区の住居址群、東調査区の発掘風景
図版 1　調査区全景航空写真（セントラル航業撮影）
図版 2　西地区主要遺構全景・西地区全景（セントラル航業撮影）
図版 3　第29～32号住居址（西から）・同住居址（東から）・同住居址（北から）・第 5号土坑（西から）・同土坑（北から）
図版 4　西地区近景（北から）・埋谷遠景（北から）・埋谷近景（西から）・埋谷発掘状況・珠洲焼甕出土状況・土師器出土状況・土師器出土状況・土師器出土状況
図版 5　台付壷出土状況・西端埋積谷土層断面・埋谷土器出土状況全景（北から）・埋谷土層断面（北から）
図版 6　掘立柱建物跡全景（西から）・掘立柱建物跡近景（西から）・柱穴検出状況（西から）・柱穴内遺物出土状況・柱穴土層断面
図版 7　第 1号地下式坑全景（東から）・同入口部（北から）・同内部・同土坑検出状況・同羨門部
図版 8　第 2号地下式坑全景（南から）・同発掘状況・同入口部土層断面・同玄室土層断面・馬遺骨出土状況
図版 9　第 2号地下式坑全景（北から）・同近景（北から）・同北側入口部（北から）・同玄室（北から）・同南側入口部・同羨門部
図版10　第 2号地下式坑羨門部・第 3号地下式坑全景（東から）・同羨門部・同入口部・同土坑検出状況・第 4号地下式坑全景（北から）
図版11　中地区北東部航空写真・中地区南東部航空写真
図版12　中地区南西部航空写真・中地区北西部航空写真
図版13　中地区調査直前の状況（西から）・中地区調査状況（西から）
図版14　中地区調査終了全景（西から）・中地区調査作業状況（西地区から）
図版15　中地区調査状況（南西部）・同調査状況（北西部）・同調査状況（第 1号住居址）・同調査状況（北東部）・同調査状況全景（東から）
図版16　第 3号住居址調査状況・第 1号住居址調査状況・第 3号住居址調査状況・第 2号住居址調査状況・第 1～ 4号住居址調査状況（東から）
図版17　第 2号住居址全景（北から）・第 2号住居址全景（北東から）
図版18　第 1号住居址全景（北から）・第 3号住居址全景（東から）
図版19　第 1～ 3号住居址近景（北から）・第 1～ 4号住居址遠景（東から）
図版20　第 4号住居址全景（東から）・同作業状況（北から）・同作業状況（南から）・同遺物出土状況（西から）・第 4号住居址北側の溝土層断面

図版21　第 6号住居址土層断面（北から）・同調査状況（南東から）・同調査状況（北から）・同全景（北東から）・同全景（南東から）

図版22　第31号住居址全景（北東から）・同全景（北西から）・第 5号住居址全景（北から）・同全景(西から)

図版23　第 9号住居址遠景（北東から）・同全景（東から）・第10・14・ 9号住居址（南から）・第 9号住居址の検出状況・第 9号住居址全景（東から）

図版24　第 8号住居址近景・同住居址甕出土状況・第22号住居址土層断面（南から）・第 3号掘立柱建物（北西から）・第14号住居址遠景（東から）・同近景（北から）・同ピット検出状況・同壁溝遺物出土状況

図版25　第12号住居址全景（北東から）・同遺物出土状況（西から）・第11号住居址遺物出土状況・第11・12号住居址全景（西から）・第11・12号住居址全景（北から）

図版26　第10・19号住居址全景（西から）・同全景（東から）

図版27　第19号住居址近景（西から）・同近景（東から）・同近景（南から）・壁溝遺物出土状況・壁溝遺物出土状況・第15号住居址全景（西から）・第 7号住居址全景（北から）

図版28　第16号住居址全景（東から）・同全景（南から）・第20号住居址全景（西から）・同全景（北から）中地区北東部をのぞむ

図版29　第17号住居址全景（北から）・第 1号土坑・第 3号土坑・第 1号掘立柱建物（北から）・中地区南西部をのぞむ

図版30　東地区航空写真

図版31　東地区航空写真

図版32　東地区北部航空写真・同南部航空写真

図版33　東地区調査開始状況・東地区調査状況（南西から）

図版34　東地区南部調査風景（北から）・東地区北部調査風景（南から）

図版35　東地区北東部調査風景（南から）・東地区北西部調査風景（南から）

図版36　第21号住居址全景（北から）・同調査状況（北から）・同遠景（北から）・同覆土遺物出土状況・同床面遺物出土状況

図版37　第23号住居址全景（北から）・同調査風景（北から）・同調査風景（南から）・同土層断面（南から）同北側斜面の遺物出土状況

図版38　第24号住居址全景（北から）・同住居址全景（南から）

図版39　第24号住居址土層断面・同床面遺物出土状況・同床面遺物出土状況・第26号住居址（東から）・第26・27号住居址全景（西から）

図版40　第25号住居址全景（北から）・同住居址全景（南から）

図版41　第25号住居址調査状況・同住居址全景（南から）・同住居址床面遺物出土状況・同住居址土坑検出状況・同住居址ピット検出状況・同住居址ピット遺物出土状況・同住居址床面遺物出土状況・同住居址壁溝遺物出土状況

図版42　第27号住居址全景（東から）・ピットと同住居址（南から）・ピット内甕出土状況・同住居址ピット検出状況・同住居址床面遺物出土状況

図版43　第28号住居址全景（西から）・同住居址全景（南から）

図版44　第28号住居址床面遺物出土状況・同床面遺物出土状況・同床面遺物出土状況・同床面遺物出土状況・同床面遺物出土状況・同床面遺物出土状況・同床面遺物出土状況・同検出状況

図版45　第13号住居址・第12号土坑・第10号土坑・第11号土坑・第17号土坑・第13号土坑・第15号土坑・第18号土坑・

第１章　　遺跡の環境

第１節　地理的環境

刈安野々宮遺跡は、石川県河北郡津幡町刈安地内の通称野々宮（ノノミヤ）に所在する、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。刈安集落の背後に位置する台地とそれに連なる丘陵上には、古墳時代初頭の集落と中世の掘立柱建物・地下式坑が、良好な保存状況をもって遺存していた。

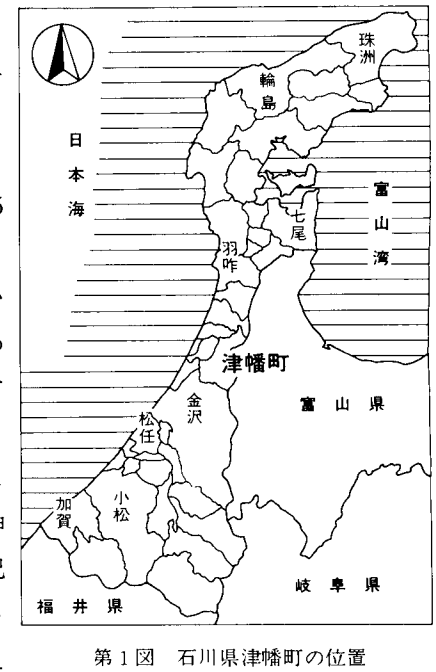
石川県は、単調な海岸線の続く日本海沿岸域のなかで、比較的目立って日本海に突出する能登半島と、その基部をなす標高 2,702mの白山に育まれた加賀平野からなり、南北に細長い形をとっている。南北約 199kmをはかるのに対して、東西幅は約 100kmであるが、能登、加賀の境界付近では隣の富山県境から日本海までの距離は約 8.4kmを測るにとどまり、いかに狭長な県域であるかがうかがえる。能登、加賀の境界は羽咋郡押水町の中央を西方に流れる大海川とされている。

津幡町は、南北に長い石川県のほぼ中央部にあたり、北加賀の北端近くに位置している。東は倶利伽羅峠の北にある礪波山（標高 277.1m）を主峰とする南北にのびる砺波丘陵をはさんで、富山県の小矢部市、福岡町と境を接している。北方は、宝達山（標高 637.4m）から派生している標高 4～ 500m前後の山地を介して羽咋郡押水町と接している。西方は、砺波丘陵が北西方向に高度をさげて標高50～80mの山麓を形成し、南北方向にのびる幅 2～ 3kmの沖積低地が旧河北潟岸までひろがっている。河北潟は昭和５６年に国営干拓事業が完成して、潟面積の６割以上が約 1,358㌶の耕地として生まれ変わっている。河北潟は蓮湖あるいは大清湖とも呼ばれ、東西約 4km・南北約 8km・周囲約28kmの規模を持つ、県下第一の湖沼であった。さらに西方は、幅約１km・延長約10km・標高約60mの内灘砂丘が北東方向にひろがり日本海から隔てられている。南方は、金沢市域と接していて、医王山系の山波に連なり、いわゆる森本断層崖をなして金沢平野に臨んでいる。

県境をなしている礪波丘陵や南能登丘陵は、標高は約 200mと比較的低く、西方に向けてゆるやかに傾斜し標高30～50mの中位段丘を形成しているが、これらを開析して能勢川、津幡川が西方に流下し河北潟にそそぐ。金沢市の金腐川・森本川や宇ノ気町の宇ノ気川・気屋川をふくめて中流域では、小さな開析谷がならび樹枝状水田がよく開発されている。津幡町の市街地や集落は、これらの河川の周辺に形成されているが、特に津幡川流域は、富山県へぬける北国街道と能登へむかう街道の分岐点として、古代から重要な位置を占めていた。

刈安野々宮遺跡は礪波丘陵の中位段丘に含まれ、津幡川の中流域である刈安川と吉倉川の合流点近くの台地および丘陵上に立地し、標高約35～45m、谷水田との比高差約15m以上を測る。谷平野が比較的ひらける地点を臨んで位置しているのであるが集落規模がきわめて大規模であるところから台地背後の丘陵尾根上およびその背面にまで住居址が展開しているために、台地および丘陵上からの平野部への展望は一部をのぞいて良好とは言い難いものの、集落形態は立体的であり集落内での展望は良好と言える。

遺跡のある台地は、南西にむいてひらけるところから刈安町の畑地として利用されているが、台地の中央東には、もと野々宮神社と称した笠間神社があり周囲は杉の大木でおおわれ背後の丘陵へも山林がのびていく状況をしめしていた。台地の南端部分をかすめて北陸本線が東西方向に施設されているが、本遺跡への影響は軽微なものと考えられる。北陸本線を越え



第１図　石川県津幡町の位置

第２図　周辺遺跡分布図(1/50,000)(「津幡・石動・粟崎・倶利伽羅」分載)

第１表　周辺の遺跡地名表（「石川県遺跡地図　1980」に拠る）

番号	県遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	現　況	時　代	出　土　品　他
1	1765	上河合滝谷横穴	津幡町上河合	山腹・山林	古墳	開口
2	1761	〃　和田横穴	〃　〃	〃・〃	〃	〃
3	1766	牛首１号横穴	〃　〃	〃・〃	〃	
4	1775	〃　後谷遺跡	〃　牛首	平地・水田	縄文	磨製石斧
5	1756	興津遺跡	〃　興味	台地・宅地	〃	打・磨製石斧
6	1755	二枚田横穴	〃　吉倉	山腹・山林	古墳	
7	5047	加茂池遺跡	〃　加茂	丘陵・〃	平安	須恵器（窯跡？）
8	1753	鳥越遺跡	〃　鳥越	台地端・寺地	縄文	石棒（単独出土）
9	6746	鳥越弘願寺	〃　〃	丘陵・社地	中世	
10	1754	蓮花寺遺跡	〃　蓮花寺	台地端・山林	不詳	
11	6745	鳥越城遺跡	〃　七黒	尾根・山林	戦国	
12	6744	田屋サイダイジ跡	〃　田屋	丘陵・水田	中世	
13	6743	田屋森山遺跡	〃　〃	丘陵端	南北朝	古銭約20貫出土
14	1750・51	刈安滝山遺跡	〃　刈安	台地・畑地	縄文・古墳	縄文土器、土師器
15	1752	刈安上野堂畑遺跡	〃　〃	丘陵・畑地	縄文	縄文土器、石鏃
16	**6742**	**刈安野々宮遺跡**	**津幡町刈安**	**丘陵・畑地**	**古墳・平安・中世**	**土師器、須恵器**
17	6741	倉見ドウノワキ遺跡	〃　倉見	丘陵裾・社地	縄文後・晩期	縄文土器・漆器
18	5051	尾屋遺跡	宇ノ気町上田名	平地・水田	中世	陶器片
19	5052	尾屋窯跡	〃　〃	〃・〃	不詳	須恵器
20	5049	カマヤチ遺跡	〃　鉢伏	山裾・ゴルフ場	〃	〃　、７ｍの土盛下
21	1796	カマヤチタタラ跡	〃　〃	〃・〃	奈良	羽口、須恵器
22	1795	気屋遺跡	〃　気屋	台地・畑地	縄文後期	土器、石器
23	1794	気屋古墳群	〃　〃	〃・〃	古墳	須恵器
24	6529	上山田東田遺跡	〃　上山田	平地・水田	中世	
25	1788	指江Ｂ遺跡	〃　指江	谷・水田	奈良・平安	土師器、須恵器
26	1784	多田横穴	〃　多田	山腹・山林	古墳	
27	6191	下矢田横穴	〃　下矢田	丘陵端・畑地	〃	
28	6194	多田１号塚	〃　多田	山林	中世	円形
29	1785	多田西ヶ峰１号横穴	〃　〃	山腹・山林	古墳	
30	1786	多田城跡	〃　〃	丘陵・	中世	
31	6190	御門白山神社古墳	〃　御門	〃・〃	古墳	
32	6528	御門遺跡	〃　〃	平地・水田	奈良～中世	土師器、須恵器
33	6527	御門ジャモジ遺跡	〃　〃	〃・〃	〃	〃
34	6526	領家ハシバ遺跡	〃　領家	〃・〃	〃	〃
35	6525	領家遺跡	〃　〃	〃・〃	〃	〃
36	1745・46	能勢イシヤマ遺跡	津幡町能勢	〃・〃	縄文	
37	6188	谷内石山遺跡	〃　谷内	丘陵・山林	古墳	1979年発掘
38	6189	石山古墳群	〃　〃	〃・〃	〃	３基
39	1747・48	谷内横穴	〃　〃	山腹・〃	〃	２基
40	1742	能勢クサヤマ遺跡	〃　能勢	台地・畑地	縄文・奈良～平安	石斧、須恵器
41	5046	能勢神社遺跡	〃　表能勢	丘陵・社地	中世	珠洲焼
42	1749	谷内遺跡	〃　谷内	山裾・山林	奈良・平安	杯、蓋
43	1741	加茂奥宮遺跡	〃　加茂	平地・水田	古墳	
44	5045	加茂明神遺跡	〃　〃	丘陵端・山林	〃	須恵器（古墳？）
45	6524	加茂ツチグラ遺跡	〃　〃	〃　裾・〃	〃	〃
46	1738・39	加茂遺跡	〃　〃	平地・水田	〃	杯
47	1740	加茂廃寺	〃　〃	〃・〃	平安	軒丸瓦、平瓦
48	6523	五月田遺跡	〃　五月田	〃・〃	奈良・平安	須恵器
49	6187	庄住吉神社遺跡	〃　庄	山腹・山林	弥生	
50	6522	津幡城跡	〃　津幡	丘陵・校地	中・近世	
51	1736	津幡スワヤマ遺跡	〃　〃	台地端・畑地	古墳	
52	6186	太白台古墳群	〃　表能勢	丘陵・山林	〃	
53	1737	津幡遺跡	〃　津幡	台地・宅地	〃	
54	5044	加賀爪遺跡	〃　加賀爪	平地・校地	〃	須恵器
55	6184	浅田古墳群	〃　浅田	山林	〃	
56	1726	南中条横穴	〃　南中条	山腹・社地	〃	
57	1690	浅丘遺跡	金沢市浅丘	丘陵・畑地	縄文	磨製石斧
58	1691	榎尾八幡神社遺跡	〃　榎尾	〃・社地	〃	打製石斧
59	6737	猪塚	津幡町杉瀬	〃・山林	江戸	1984年発掘調査
60	6736	東荒屋カンジャワラ遺跡	〃　〃	段丘・畑水田	不詳	土師器、須恵器
61	6735	旭山ポッコリ塚	〃　東荒屋	丘陵・山林	〃	
62	6734	東荒屋塚	〃　〃	〃・〃	〃	径７～８ｍ、高さ 1.5m
63	6739	竹橋サンツンザカ遺跡	〃　竹橋	〃・〃	弥生、古墳	弥生土器、須恵器
64	6738	竹橋油木谷遺跡	〃　〃	〃・〃	縄文	1984年発掘調査
65	1730～32	東荒屋遺跡	〃　東荒屋	〃・水田	縄文、古墳、平安	
66	1734	竹橋ジョウヤマ遺跡	〃　竹橋	丘陵端・畑地	縄文後期	
67	6740	倶利伽羅城	〃　倶利伽羅	丘陵・山林・寺地	中世	
68	1733	相窪遺跡	〃　相窪	台地端・畑地	縄文中期	
69	6185	北横根遺跡	〃　北横根	丘陵・山林	中世	珠洲焼甕
70	1710	朝日山城跡	金沢市加賀朝日	〃・〃	〃	

た南方は、標高62.8mの丘陵が東西方向に並んで立ち上がっていて、国道８号線の走る南方部へ急激に落ち込んでいる。遺跡の東方は、樹枝状の谷地形が開析されていて近年まで谷水田として耕作されていた。谷水田を越えた東方部は、緩やかな傾斜をもって立ち上がり開析の進んだ中位段丘地形の畑地・水田として等高線に沿う形で開けている。本遺跡の東方約 200mの位置に、縄文時代中期の刈安・上野遺跡が所在している。大正11年、石川県において最初に発掘調査が行われて遺跡として著名である。

刈安川と吉倉川が合流して竹橋川となり、下流域では河北潟にそそぐ津幡川と名前を変える。河北潟は、明治31年に開通した北陸線、同33年の七尾鉄道の完成までは、能登と加賀の物資と人の交流におおきな役割を占めていた。そして、明治20年頃までは、津幡川の川幅や水量も多く河口の川尻から中流域の竹橋までは、25石積の船が通い得たと伝えられている事などから、本遺跡が山間部に位置している点での閉鎖性は若干割り引いて考えて良いように思われる。

本遺跡へ行くには、ＪＲ西日本の北陸本線・倶利伽羅駅で下車、西方に約 300m徒歩約５分で笠間神社の鳥居前に着く。国道８号線は、北陸本線と平行して走り礪波山・倶利伽羅峠を抜ける倶利伽羅トンネルによって富山県に通じる。倶利伽羅トンネルが開通するまでは、北国街道の倶利伽羅峠や近年の天田峠を越えるものであり、交通の難所であった。特に冬期には積雪のために交通が途絶することも度々であった。

第２節　歴史的環境

津幡町は町域の大部分を占める丘陵地形と、河北潟とその潟岸平地という形に明快にわけて考えることができる。それらの中で、歴史的遺跡としてとらえられるのは、中小河川に開析された谷平地を含む丘陵と、潟岸平地であるといえるが、将来的には河北潟底にも遺跡が発見される可能性は高いと考えることができる。

県下で最初に発掘調査が行われた遺跡をもつ津幡町であるが、昭和50年代後半に至るまで組織的に取り組まれた遺跡の調査は少ないことから、河北潟周辺の発掘調査結果を含めて歴史的位置付けを記述していきたい。

１　縄文時代

明治35年に発見され、大正11年（1922）に上田三平氏によって発掘調査が実施された縄文時代中期の刈安・上野堂畑遺跡が本遺跡の東方約 200mの丘陵地に位置している。遺跡の周辺は、圃場整備事業や道路建設事業などによって大きく変貌しているが、事前に実施された津幡町教育委員会の試掘調査によって、遺跡は現状のままに保存されている。出土しているものは、打製石斧、磨製石斧、石錘、くぼみ石、スクレイパー、硬玉製玉などの石器があり、中期前葉の新崎式期から中期後葉までの土器片が出土している。その後、遺跡や出土遺物について十分な検討がなされてはいないが、本遺跡の南方約７kmの丘陵上に位置する相窪遺跡での試掘調査による出土資料もほぼ中期中葉に位置付けられ、丘陵にかこまれている遺跡の性格についての取組が求められていると言える。

ほぼ同時期に営われ始めた遺跡に、河北潟の北東岸を望む独立丘陵上（タチヤマ）の宇ノ気町上山田貝塚が有名である。昭和５年11月に発見され、同６年３月、宇ノ気町の医師久保　清氏によって発掘調査が行われている。その後、石川考古学研究会の発足や、昭和25年に来訪された山内清男氏によって、中期中葉の上山田式土器が設定されている。北陸における最初の土器型式名である。昭和35年、同50・51年に台地上や貝層部を含む発掘調査が実施され、北陸地域にあっては貴重な貝塚資料が出土し、縄文時代の河北潟の在り方を推定させる手掛かりも得られている。昭和54年に刊行された報告書は、自然遺物の綿密な報告や土器型式のとらえかたによって、その後の北陸縄文時代文化研究に与えた影響は大きなものがあると言えよう。上山田貝塚は国史跡として独立丘陵全体が指定され、数年内には史跡公園として整備工事が予定されている。

本遺跡から西方約５kmに位置する竹橋油木谷遺跡は、国道８号線や竹橋川を臨む標高約33mの丘陵上の遺跡で縄文時代に属する17基の土坑群が検出されている。平面形は円・楕円形を呈しており、長径85～ 156cmまでを測

り約 100cm前後のものが多く、深さは45～ 210cmまでの幅があるが、 120cm前後のものが多い。坑底には径５cm前後のピット数個が認められている。土坑の形状や分布の在り方から、落し穴としてとらえられている。津幡町の北端に位置する谷内石山遺跡は、能勢川を望む標高約27mの丘陵上の遺跡で、古墳時代初頭の集落址が検出されているが、調査区のなかで２基の土坑が発掘されている。やはり、平面プランが楕円形を呈しており、深さは、94～ 140cmと深く掘り込まれている。坑底に小ピットは認められないものの、落し穴と想定されるものである。出土遺物は少ないが、縄文時代中期中葉の古府式期に比定されている。県下には同様の遺構が各所で発見されているものの所属時期が確定されたものは少ない。底面施設として小ピットを持つものと、比較的大きなピットを１個ないしは数個もつものと、底面施設をまったくもたないものというふうに、大きく三つのタイプに分けて考えられるようだ。志賀町中村畑遺跡、羽咋市柳田シャコデ遺跡、志賀町代田営田遺跡、押水町免田一本松遺跡などでの検出が知られているものの、その形態的な変遷は今後の検討に待たなければならない。

縄文時代後期・晩期の遺跡の調査は津幡町においては皆無ではあるが、県下において重要な位置付けが与えられるものとして、竹橋ジョウヤマ遺跡と倉見ドウノワキ遺跡が上げられる。前者は本遺跡の南西約 2.5kmの位置にあり、後期前葉の酒見式に先行する土器が認められる。加曽利ＢＩ式に並行する土器型式は、加賀地域の加賀市横北遺跡や鶴来町白山遺跡などで散発的に出土しているものの、土着の土器の変遷がとらえきれず、それに付随して東日本系、西日本系土器群の内容も、県下においてはいまだ判然としていないのが実情である。加曽利ＢII式土器に並行すると考えられている酒見式土器は、東日本系土器の強い影響下にあり、注口土器などの特殊器形のものに西日本の影響が及ぶものと考えられてきたが、主要器形である深鉢のなかで波状口縁をなすものに西日本の影響を想定せざるをえない状況が現れつつあると考えている。安易な分離であるが、酒見式土器の標識遺である富来町酒見シンドウ遺跡が奥能登に位置していることから石川県の状況を十分に反映していないとみることはあながち的はずれとは思えないが、地域性に解消してしまうことには酒見式の内容が充分に吟味されていない現状においては、いささか性急とも考えられる。後期前葉の土器型式と地域性を見る上で、加賀の北端に位置し富山県に隣接している竹橋ジョウヤマ遺跡の歴史的位置は大きなものがあると言える。倉見ドウノワキ遺跡は、本遺跡の西方約６kmの倉見川を望む丘陵裾に位置している。数年前に町道工事の際に発見されたもので、出土遺物は地元住民の数人が採集されている。工事で損壊した部分は軽微なもので、遺跡の大部分は現状を遺存しているものと考えられる。出土遺物は中世に位置付けられるものを含むが、大半は後・晩期に属するものである。それらの中で、漆塗の木製品断片の出土が注目される。さらに、自然木の遺存が認められるところから、遺跡そのものが低湿地遺跡である可能性が高いものと考えられることである。今後、周辺地域の開発にあたっては、留意が必要と思われる。

津幡町の北端部にあたる大海川の上流、河合谷地域は谷が深く平坦地の少ない地形であるが、河合澄屋遺跡、河合宝徳遺跡、上大田ハザマ遺跡、上大田サンノ遺跡などが点在しているが詳細は不明である。

津幡町の縄文時代の遺跡は、おおむね山間部に立地しているもので占められ、平坦地が極めて少ないと言える。県下の他の遺跡群と環境が異なっている点に留意しておきたい。

2　弥生時代・古墳時代

津幡町において、弥生時代の明確な遺跡の調査例は皆無であるが、中小河川の流域で点々と当時の遺物の出土が報じられている。冷涼化した気候のために、河北潟は海退の影響を受け入江がとざされたものの、潟の水面は山裾近くにまでせまっていたものと考えられ、河北潟周辺は水稲耕作に不適な環境にあったものと想像される。能勢石山古墳の封土から蛤刃磨製石斧が、内灘砂丘からは磨製石鏃や石庖丁、銅鏃が採集されていて、伝世ではあるが銅鐸の出土も知られている。日本海側では最北の出土地点である。遺物の単独出土が目を引くが、宇ノ気町の宇気塚越遺跡では、弥生時代中期の竪穴式住居址１棟が検出されており、今後に期待が持たれる。

後期から古墳時代前期にかけては、河北潟に流れ込む宇ノ気川、能勢川、津幡川などの中小河川の中流域に形成された谷平野を中心にして、集落が定着していく。そして、発掘調査によって明らかとなる集落址の数が大巾

に増加するのはこの時期である。宇ノ気町では検出例が多く、宇気塚越遺跡、上山田貝塚と複合している上山田遺跡、谷ギザマヤシキ遺跡などで数棟づつの発掘が報じられている。さらに、鉢伏茶臼山遺跡では、北陸初の高地性集落が発見され、その位置付けをめぐって論議が高まるものと考えられる。調査は給水タンクの増設にかかるもので、標高約60m（平地との比高差約55m）の丘陵上には15棟の住居址、 2基の階段状遺構などの他に丘陵中腹には幅約 6m、深さ約 3m以上の規模を持つV字状の溝がめぐっていることが確認された。遺跡の規模は、長さ約 250m、幅約75～ 120mを測る大規模なものである。住居址の規模は一辺 4～ 5mの隅円方形ないしは楕円形をなすものが大部分で、最小 2.2m、最大 7mまでの幅がある。古式土師器の塚崎II式古段階に位置付けられるもので、北陸における最初の高地性集落の調査として注目を集めた。その後、同様の立地環境をしめす遺跡についてパターン化による分類が試みられているが、遺跡そのものの性格が判明している調査例が少ないこともあって、今後に課題として残されている。

津幡町においては、能勢川流域の谷内石山遺跡で、塚崎II式新段階の住居址 2棟が検出されている。土砂採取によって遺跡の過半以上が消滅していた。樹枝状に平野側にのびる丘陵端部に位置し、標高約28m、平地との比高差約20mを測る狭い尾根上に形成された集落遺跡である。集落の規模は不明であるものの、出土した土器から時期幅は小さいものと理解される。同じ丘陵の基部近くには 3基からなる谷内石山古墳群があり、また、平野部におりた位置には、鹿角装刀を含む豊富な鉄器が副葬されていた能勢石山古墳がある。

北加賀の中枢域である金沢市や野々市町では、弥生時代・古墳時代の大規模な遺跡が各所で調査されているが、学史的に重要な意味を持ち、距離的に津幡町に比較的近い金沢市森本町の塚崎遺跡と七ツ塚墳墓群の調査が意味深いものと思われる。ふたつの遺跡は共に北陸自動車道の建設工事に伴う調査で顕現されたものである。塚崎遺跡は、森本川を臨む標高約31m、平地との比高差約25mを測る舌状台地に形成された住居址25基、円筒土坑を多く含む土坑77基という多数の遺構が確認された。住居址には大量の管玉未成品を包含するものが見られ、玉造の集落址として北陸の地域性をしめすものとして注目を集めた。そして、同時に出土した大量の土器に因って、塚崎Ｉ～III式土器として編年が組み立てられ、いわゆる塚崎編年として北陸の古式土師器の研究に与えた影響は極めて大きなものとして評価されている。また、集落遺跡の全域を完掘した例でもあることから、集落の構造を考えていく上で今後の研究に占める位置は大きなものがある。塚崎遺跡から谷一つ隔てた吉原町の七ツ塚墳墓群はほぼ同時期に造られた墳墓群で、 9基の方形周溝墓、10数基の方形台状墓、土坑墓90基、そして、祭祀儀礼に使用されたと考えられる竪穴状遺構 1基が発見されている。古墳時代の成立を見る上で、大きな成果と言える。さらに、塚崎遺跡と七ツ塚墳墓群の間において谷水田の状況をつかむ試掘調査も実施され、土器の検出とともに花粉分析の資料も採集され一定の成果を上げている。水田址を把握するために計画的に調査した例はその後少く、土層断面においての水田面の把握にとどまっており今後の課題である。

金沢市においては、北陸自動車道の建設を契機として市街化が急速に進展して各地で弥生時代から古墳時代前期にかけての集落遺跡が数多く発掘調査が実施されている。その成果によって該期の土器編年は細分化精緻になっているといえる。北西部の南新保遺跡、畝田遺跡、南西部の高畠遺跡、押野西遺跡、野々市町の御経塚ツカダ遺跡など枚挙に暇がない状況である。今後、調査に当たっては地下水位が高い地区においては植物遺体や木製品について今以上に留意する必要があると言えよう。

古墳そのものの分布は、口能登地域や南加賀の江沼地域などと比較して極めて分布密度の稀薄な地域であるが、発掘が実施されているものについては、学史的に重要な位置を占めていると言える。前方後方墳の宇ノ気町塚越 1号墳、金沢市小坂 1号墳、前方後方墳を含む野々市町御経塚古墳群などが古くに位置付けられる。後期古墳では七ツ塚墳墓群の丘陵裾に立地する観音堂古墳群、塚崎遺跡の裾に構築されていた塚崎横穴群や墳丘を欠いていて周溝のみが遺存していた金沢市北塚古墳群などが上げられる。津幡町の古墳密度は薄く、能勢川流域の古墳群や各地に散在する横穴をあげるにとどまるが、本遺跡周辺を含む分布調査の不備を反省しなければならない。

3　平安時代以降

奈良・平安時代の遺跡については、ほとんど調査が行われていないために津幡町内での状況は不明と言わざるを得ない。そのなかで、平野部に位置する加茂廃寺址の研究が核になるものと想像される。

中世以降についても明確な形での遺跡の調査は行われてはおらず、やはり、今後の課題ではあるが、一向一揆に関連する鳥越弘願寺跡や源氏平氏の合戦場であった倶利伽羅峠周辺の山城・砦跡の踏査が石川考古学研究会の手によって実施されておりその成果に期待するものが大きい。

「加賀志徴」下には、刈安村・野々宮・御手洗池・経塚の項目がたてられていて興味深い。野々宮については、「刈安村の山手に在て、社地は山の麓也。社地廣し。邑傳に、野々宮は野蚊宮の誤にて、式の野蚊神社也。或は五社権現と稱す。竹橋・富田・刈安・岩崎・田屋・鳥越・越中坂・原・坂戸・上野・河内・九折・森・大窪・上藤又・中村・下藤又、以上十七ケ村の惣社と云。五社権現と稱するは、田屋・富田・原・坂戸の四ケ村の産土神を攝社とし、本社の野々宮を合し、五社権現と稱す。四ケ村の神は野々宮の神の随従神也と云傳へり。以下　略」そして、野々宮神社の社地にある御手洗池・経塚の由来が綴られている。

加越能三州山川旧蹟志　第二冊
加越能三州山川旧蹟志　第三巻

宝暦十四年
河北郡山川旧跡等書上申帳
河北郡

河北郡古跡

（略）

一　刈安村領之内ニ野々宮与申宮林御座候。昔堂数多社領茂御座候而久敷社之由申傳候得共、年数并縁起等承傳無座候。

（よ　み）

刈安村領の内に、野々宮と申す宮林御座候。昔、堂数多く社領も御座候て、久敷社の由申し傳え候得ども、年数ならびに縁起など、承け傳え御座なく候。

（以　下　略）

右河北郡山川旧跡書上申候以上
宝暦十四年三月

南森下村
大熊村伊兵衛組才許　金右衛門
野々市村　少左衛門
杉瀬村少七跡組才許共
潟端新村　弥左衛門
高松村　貞右衛門
御所村　長右衛門
白尾村　理兵衛

御改作奉所

宝暦14年（明和元年）は西暦1764年にあたるが、野々宮についての記述から堂などが数多く建てられていたとあり、本調査によって検出された掘立柱建物が一般の住居址とは考え難いことなどから、伝承が顕現される可能性は高いものと想像される。

文書の検索や読み下だし文の作成については、芝田　悟氏をとおして、金沢市立図書館の吉本澄与治氏のお世話になった。記して感謝の意を表しておきたい。

刈安という地名の由来は、染料に使用する刈安草が多く栽培されていたためと「加賀志徴」に記されている。「広辞苑」によれば（刈安）とは、イネ科の多年草で、高さ約１mほどのもので、茎・葉ともに線形をなし、秋には花穂をだす。ススキにやや似ている。茎・葉を干して黄色の染料とする。また、藍と併用して緑色染料の原料となる。緑色に染める時には、藍で青色にそめたあとに、黄蘗（キハダ）あるいは刈安などの黄色素をもつ染

料を用いて行うもので、「ふたがけ」という手法をとる。この手法で黄緑から深緑までの色が出せる。それは、天然染料一種類では、緑色を染め出すことは難しいと言うことを示しているが、1987年 4月22日の朝日新聞によれば、大阪芸術大学の学術調査隊（隊長・森　淳教授）の井関和代助教授が西アフリカのカメルーンの高原地帯でエメラルドグリーンに染め出す「ロシオ」という二種類の植物を発見したと報じている。葉をすりつぶし、糸とともに煮て、太陽で乾燥させて発色させる手法をとると紹介されている。

参 考 文 献

浅香年木・他編　1981　「石川県」『角川地名大辞典』　角川書店

小嶋芳孝　1973　「河北郡宇ノ気町塚越遺跡」　石川県教育委員会

平口哲夫・小嶋芳孝　他　1979　「上山田貝塚」　宇ノ気町教育委員会

吉岡康暢・小嶋芳孝・他　1976　「塚越遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告II』　石川県教育委員会

矢ケ崎孝雄・吉岡康暢　他　1974　「津幡町史」　津幡町役場

藤　則雄　1970　「自然の概観」『石川県宇ノ気町史』　宇ノ気町役場

高堀勝喜　1970　「原始より古代へ」『石川県宇ノ気町史』　宇ノ気町役場

竹本　勝・滋井　真・西野秀和　1980　「津幡町谷内石山遺跡」　津幡町教育委員会

竹田　学　1986　「猪塚」　津幡町教育委員会

竹田　学　1985　「竹橋油木谷遺跡」　津幡町教育委員会

米沢義光　1980　「宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター

米沢義光・他　1987　「宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡」　宇ノ気町教育委員会

新村　出編　「広辞苑」　岩波書店

森田平次　1936　「加賀志徴　上下」　石川県図書館協会

朝日新聞　1987・ 4・22　朝刊

芝田　悟・木越祐馨　1987　「鳥越弘願寺跡調査中間報告（北加賀地区城館跡調査）」『石川考古学研究会々誌第30号』　石川考古学研究会

小島良三郎・滋井　真　1984　「刈安野々宮遺跡（津幡町）出土の管玉」『石川考古』第 152号　石川考古学研究会

芝田　悟・宮本哲郎　1987　「北加賀地区城館跡調査　速報（ 4）」『石川考古』第 173号　石川考古学研究会

芝田　悟　1987　「北加賀地区城館跡調査　速報（ 5）」『石川考古』第 174号　石川考古学研究会

橋本澄夫　1981　「消えた前方後円墳」『金沢の埋蔵文化財』　金沢商工会議所会報

谷内尾晋司・他　　「加賀・能登両国の成立一古代」『石川県の歴史と風土』　創土社

第２章　　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

津幡町の遺跡の分布は既述したように、丘陵縁辺と丘陵内を流れる中小河川の河岸段丘上に立地するのが通例であるといえる。これは、開発事業が実施される場合には、必然的に遺跡の保護に重大な事態を引き起こすこととなる。昭和40年代後半から急激に進展した地域開発の波及やモータリゼイションの流れのなかで、津幡町においても市街地周辺の宅地開発という形で現れてきたと言える。また、農業基盤整備や農業機械の変化に伴う動きも大きな意味を持っていると考えられる。その典型的な事例として、育苗用土砂の土取場として壊滅ないしは破壊の危機に立つ谷内石山遺跡・谷内石山古墳群を上げることができる。谷内石山遺跡においては緊急調査が実施されてはいるものの、遺跡の保護が後手にまわっている点は否めない。

津幡町を縦断して走る国道 159号・ 8号線は北陸自動車道や能登海浜道の完成によって幹線道路としての交通量は減少したものの、地域内での重要性は自動車の多い社会として、さらに増しているとされている。

金沢バイパスの延長として、国道 159号の接続部分まで津幡バイパスが建設中であるが、これに接続する津幡北バイパスや現国道 8号とほぼ平行する倶利伽羅バイパスの建設が具体化していくのは、昭和50年代に入ってからである。

昭和56年 1月19日付で、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長から本センターあてに、倶利伽羅バイパス路線内にかかる埋蔵文化財についての照会文書が送付されてきた。また、同年 8月27日付で、津幡北バイパスにかかるものについても、同様の照会がなされている。当時は押水バイパスの竹生野遺跡や鹿島バイパスの徳前Ｃ遺跡、武部ショウブダ遺跡などの発掘調査に忙殺されている時期であり、路線内の踏査や試掘調査については、建設省金沢工事事務所と協議を継続していくこととした。

昭和57年12月15・16日に、刈安上野堂畑遺跡が遺跡地図に誤記されていた地点を含めて、路線延長約 1,000m の範囲について、本センター（田島明人・垣内光次郎）が試掘調査を実施した。
試掘調査の結果、笠間神社のある丘陵全域にわたって遺物あるいは遺物包含層が確認された。出土遺物は縄文時代および古墳時代の土器であり、該期の集落址が想定された。道路敷にかかる範囲は約 7,000㎡である。

昭和58年 2・ 3月には、本センター全体の年間計画のなかで協議を行い、昭和58年度の調査実施を決定した。同年 4月20日付で金沢工事事務所から調査依頼文書が、本センター経由石川県教育委員会教育長あてに提出された。これを受けて本センターは 5月に契約事務の協議を行い、現地の立ち木の処理などを相手方に依頼した。現地作業を開始したのは 6月 1日からである。現場の作業員については、津幡町教育委員会の協力を受けた。

調査途上の10月になってから、道路の設計が若干変更を余儀無くされたために、西区の南側約 1,200㎡が追加されたが、包含層が比較的薄いものと判断されたことから、引き続いて調査を実施した。調査面積は約 8,500㎡である。

第２節　現地調査と遺物整理の経過

調査日誌抄録

5月30・31日 6月 1日　重機を入れて調査区全体の表土をまくることとする。西区から開始する。

6月 2日　表土除去を継続する。発掘器材の搬入。発電機・ベルトコンベアの設置。プレハブ（３×５）の設置。

6月 3日　表土除去を継続する。プレハブ（２×３・３×４）２棟を設置。西区の端から発掘作業を開始する。

6月 4日　表土除去を継続する。西区の自然埋積谷の掘り下げ。

6月 6～11日　表土除去を継続する。西区の自然埋積谷の掘り下げ。中区で基準杭を設定してグリッドを組む。

6月14～16・18日　西区の自然埋積谷の土層断面図の作図。中区の南側から包含層を掘り下げていく。

6月20日　表土除去で集めた排土の搬出を終了する。

6月22～25日　中区南側の包含層の発掘。遺物出土状況の写真撮影を随時行う。

6月27日　図面および写真の整理。

6月28～30・ 7月 1～ 2・ 4日　中区南側の包含層の掘り下げ。

7月 5日　図面および写真の整理。

7月 6・ 7日　中区南側の包含層の掘り下げ。チェンソーによる抜根。

7月 9日　西区埋積谷包含層の掘り下げ。中区南側の包含層の掘り下げ。

7月11～14日　人員を5班にわけて、中区の遺構検出および西区埋積谷の掘り下げを進める。

7月15・16日　図面および遺物の整理。

7月18日　中区の遺構検出。

7月19・20日　図面および遺物の整理。

7月23日　中区の遺構検出。

7月25～27日　図面および遺物の整理。

7月28～30日　中区の遺構検出。1～3号住居址の発掘を始める。

8月 1日　遺物の整理。

8月 2～ 6日　1～3号住居址出土遺物を地点とレベルを記入して取り上げる。4～8号住居址の掘り下げおよび土層畦畔の実測と取り外し。西区埋積谷の掘り下げ。

8月 8日　遺物の整理。

8月 9～13日　1～3号住居址の精査。4～6号住居址の遺物の取り上げおよび床面の精査。土層断面図の作図。東区の遺構検出。

8月17～18日　遺物の整理。

8月19・20日　1～4・6号住居址の精査。

8月22～27日　4～5号住居址の精査。西区埋積谷の遺物を地点とレベルを記入して取り上げる。西区の平坦面の遺構検出とピットの掘り下げ。中世に下る大きなピットが目立つ。

8月29～31・ 9月 1～ 6日　7～14号住居址の発掘と土層断面図の作図。遺物の取り上げ。井戸の掘り下げ。西区埋積谷の遺物の取り上げを継続する。

9月 8～10日　15～17号住居址の発掘を始める。住居址の清掃および写真撮影。西区の地下式坑2基の掘り下げ。西区埋積谷の遺物の取り上げ。

9月12～14日　西区地下式坑の掘り下げ。中区西区の清掃。ヘリコプターによる写真測量を実施する。東区の表土除去を開始する。包含層の形成はごく一部に限られており順調に進展する。

9月16・17日　1・2号地下式坑の断面図の作図。7～9号住居址の断面図の作図。東区の表土除去を継続する。

9月19日　1～3号住居址の断面図の作図。2号地下式坑から馬の骨が出土する。近世に埋められたものと考えられる。東区の表土除去を進める。

9月20日　図面の整理。

9月21・22日　1・2号地下式坑の掘り下げ。14～16号住居址の断面図の作図。東区の表土除去。

9月24日　図面の整理。

9月26・27日　4・11～13号住居址の断面図の作図。1・2号地下式坑の掘り下げ。東区の表土除去。

9月28日　写真の整理。

9月29・30日　10月 1日　4号住居址と切り合う掘立柱建物を検出する。2号地下式坑の掘り下げと精査および

第3図　周辺の地形(1/5,000)昭和49年

写真撮影。東区の表土除去。

10月 3～ 8日　東区斜面の包含層の掘り下げおよび遺構検出作業。1・2号地下式坑の実測。

10月11～15日　19～24号住居址の発掘を始める。2号地下式坑の実測。

10月17～22日　19～24号住居址の土層断面図の作図と床面の精査。土層畦畔の取り外し。

10月24日　写真の整理。

10月25～29日　東区全体の再度の遺構検出。ピット、土坑の掘り上げ。東端の斜面下で28号住居址を検出。西区の南側で、追加された地区の表土除去を重機で始める。これで、調査実施面積は 8,500㎡を越える。

10月31日　28号住居址の掘り下げ。西拡張区の表土除去。

11月 1～ 5日　28号住居址の掘り下げおよび土層断面実測。西区拡張区の遺構検出。東区の清掃および第2回目の航空写真測量。

11月 7～11日　29～31号住居址の検出と掘り下げ。 3・ 4号地下式坑の検出と掘り下げ。 6号住居址南方の拡張

11月14～16日　29～31号住居址の土層断面図の作図と床面の精査。写真撮影。ピット、土坑の掘り上げ。ベルトコンベアの撤去。

11月17日　図面の整理。

11月21・22・24～26日　西区の清掃および第 3回目の航空写真測量。発掘器材の撤去。

（調査参加者名簿）順不同

水本俊三・江端寿子・西川初栄・向　静江・葉名貞女・高出鈴子・師々田ミノ・寺口すみ子・中田てつ・
前田　菊・西川敏子・多加タカ・小林嘉子・脇出笑子・山名きみ子・中本外雄・中本一枝・中西三太郎
山本行子・高本　実・上田良子・和田森さつ・高本百合子・杉森義夫・宮崎百合子・高崎夏子・西川洋子
高山くね・北矢作次郎・坂本竹治・高井秀子・大浦喜美子・高橋はつい・小林義雄・本井よし子・掃部高次
河内きみ・山名かおる。岩田ハツイ・福田シン・中島政治・辻森金作・小島良三郎・橋本小夜子・坂本義栄
坂本愛子・山本みよ・辻森君子・水本花子・安井登志男・松岡玉枝・岩田行子・岩本きよみ・持田幸子
長谷川かおる・山崎キクエ・長谷川ひで子・市川澄子・滝本君子・前田一子・
倉　直志・池田賢司

調査期間は 5月30日から11月26日までで、延 124日間におよぶ。調査員・調査補助員は延 369人、作業員は延 4317人である。

調査が終了した年度内に水洗作業を、石川県埋蔵文化財整理協会に委託実施した。その後、本センター内の整理計画に組み込んで、昭和61年度にパンケース 230ケースの選別・復元・実測を協会に委託した。復元・実測を行ったが、若干の取り残しが生じたので、昭和62年度に 200点の実測作業を協会に委託した。

縄文時代および古墳時代後期の遺物は本田秀生氏が、中世の遺物は岡本恭一氏が、実測・採拓を行った。遺構の製図・トレースは、山本泰幹氏・井上俊平氏の協力を受け西野がこれを行った。

第３章　　検出された遺構と遺物

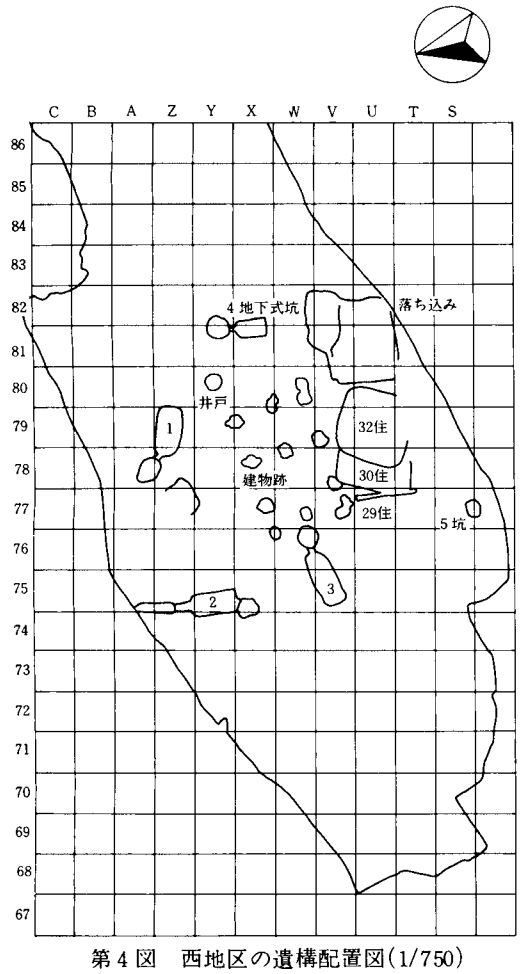
第１節　検出された遺構の配置と層序

遺跡の所在する丘陵は、石川県と富山県との県境をはしる礪波丘陵（倶利伽羅山地）から派生したもので、刈安川をはさんだ南側の丘陵が急峻であるのに比較して、傾斜が弱く尾根上が広く平坦になっているのが特徴的である。丘陵はやつでの葉のように大きく伸び拡がり、周囲に小さな谷をいりくませるが、谷幅は狭く谷水田を形成するのは極限られた地点である。丘陵の大部分を占める平坦地は、大きく見ると三段に分けて考えることができる。笠間川を望む西側は最も広い平坦地で、標高約36mを測る。二段目の平坦地には笠間神社が建てられているもので、一段目との比高は南側では約50cmであるが、北側へ移行するに従い比高差は大きくなり 100cmをこえて、三段目の平坦地・尾根筋に接続していく。三段目は平坦地と言うよりは平坦な尾根筋で、標高は45mを越え一段目とは10m以上の比高差を持つ。そして、神社の背後を回り込んで標高を下げ南側では二段目の平坦地と同じ高さとなる。三段目の尾根筋の背後の傾斜面は比較的ゆるやかで、集落内に含めて考えられる。つまり、本遺跡は、南北に並行して走る四面の平坦面から成っていると考えることができる。

本遺跡の範囲は、今後の綿密な分布調査を待たなければならないが、本次調査の結果と丘陵地形のあり方などからおおよそを推定することが可能と考えている。縄文時代では明確な遺構は検出できなかったが、中期中葉の刈安上野堂畑遺跡が小谷をはさんで東方に位置していることから、後期以降の時期と考えられる集落址が本丘陵内に所在する可能性はあると言える。古墳時代前期の集落址は本遺跡の盛期であり、その規模が最も広大になるのであるが、一・二・三・四段の平坦地全てが利用されている。四段の平坦地のなかでも、一・二段の平坦地が中心域として継続して集落が営われたものと考えることができる。南北方向で約 350m、東西方向で約 250mの範囲が想定され、その広がりは丘陵上の集落址としては県下においては屈指の規模を持つと言え、平野部の集落規模としても大集落址のうちに含める事ができよう。古墳時代後期においては遺構の検出こそなかったものの、該期の遺構が丘陵上に存在しているものとして考えることができよう。平安時代後期の遺構は掘立柱建物 1棟のみの検出であり、出土遺物も比較的少量に止どまるところから、該期の遺構の中心域は丘陵中央から南西側かと想定される。一・二段目の平坦面が利用されたのであろう。中世では掘立柱建物 1棟・井戸 1基・地下式坑 4基が発見されたが、一般集落址とは考え難い様相を示している。一段目の平坦面の北端に位置している事などから推定には困難が伴うものの、古文書に記述されていることなどを評価して、一・二段目の平坦地に展開しているものと考えておきたい。

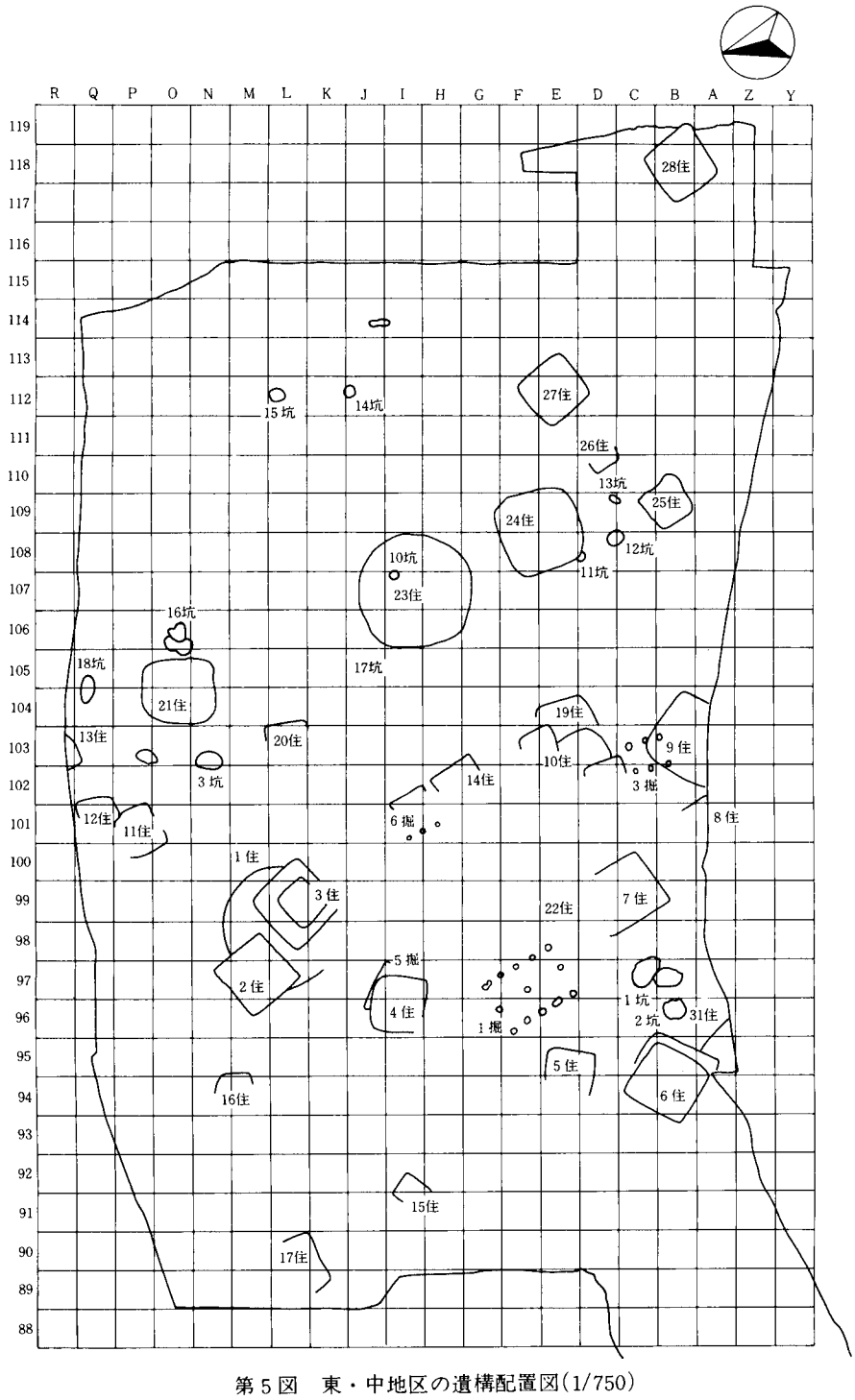
発掘区は試掘調査で得られた結果に基づき、路線内に含まれる部分を全面調査することとした。発掘区は遺跡のなかでは、北端を縦断する位置にあたることになり、四段の平坦面すべての状況が把握できる範囲であった。一段目の平坦地は発掘区の区画では西区にあたり、調査前の状況は畑地と山林であった。山林の部分も約10年以前はやはり畑地として耕作されていたと言うことであった。西端は瘤状に盛り上がり、遺構面から約 4mの比高差を持っている。頂上部では一定の平坦面を持つところから古墳ではないかとの疑いを持ったが、盛土、土坑、周溝などの遺構は確認できず自然の隆起と判断した。この隆起地形の西、北、南側は崖状に落ち込んでゆく。東側の台地に面するところでは、自然の谷が溝状に形成され南から回り込んで北東に深さを増してゆく。この溝状地形の肩部に縄文時代の土器が検出されていて、ある程度堆積が進んだ段階で縄文人が来たものと想定される。それ以降では出土遺物がなく、古墳時代集落址での限界かと想像できる。西区の北側は本丘陵内に入り込む谷に面していて急激に落ち込んでいる。この傾斜面は古墳時代29・30・32号住居の土器その他の廃棄場として機能したもので大量の土器片が発見された。西区の平坦面には古墳時代の住居 3棟が切り合う形で検出されたが、時期

的には１棟が立て替えられて３棟になったものと考えられる。その他には土坑１基が調査区の南西端で検出されている。土坑は第一平坦面に東西に入り込む小谷に面している。そして、調査を実施した西区は第一平坦面のなかで約１ｍほど高い標高となっている。西区平坦面の大部分を占めているのは、２×５間の掘立柱建物１棟とそれを取り巻くように４基の地下式坑と井戸１基である。そして、これらの構築物を作るに際して出る土を、古墳時代の土器廃棄場となっていた北の小谷をさらに埋めている状況が認められた。西区での東側はゆるやかに傾斜していて、黒色土が比較的厚く堆積しているものの古墳時代の土師器を少量検出したに止どまり、遺構は構築されなかったようだ。西区全体での層序は単純であり、また、薄層である。西端の自然隆起および平坦面では、耕作土でもあった表土層約15～20cmで地山の黄褐色粘質土にとどく。そして、東端部で若干黒褐色土がみられ遺物包含層を形成する。この包含層の下位には暗茶褐色粘質土、茶褐色粘質土が約10～30cmの厚さで堆積している。



第４図　西地区の遺構配置図(1/750)

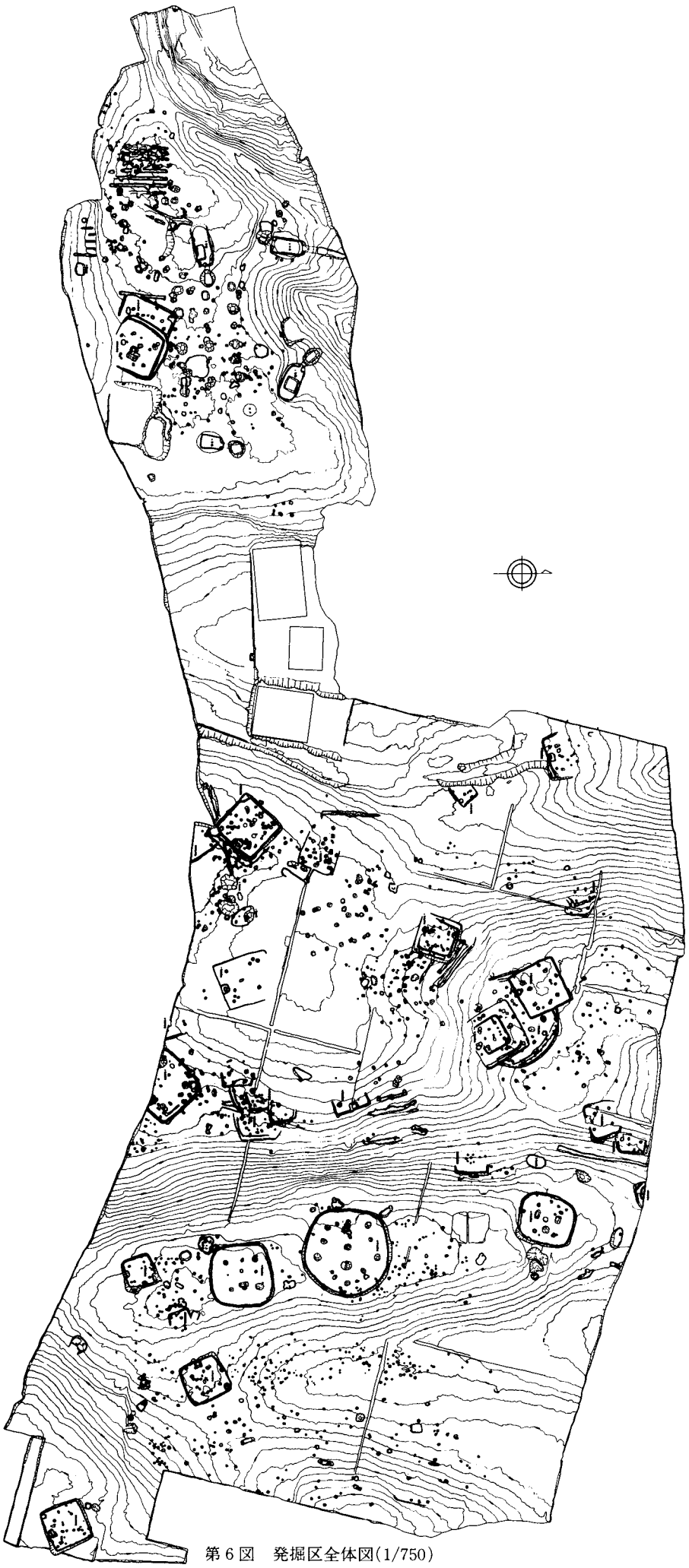
中区は本丘陵では第二平坦面にあたり、約100～150cmの比高差をもっているが地点によってさらに大きな差をもっている。それは、第三平坦面へつながる傾斜面も含み込んでいるからであるが、調査区自体が第二平坦面の北端に位置しているためで、高低差のある地形となっている。西区の北側に入り込んでいた谷頭に面した緩やかな傾斜面には第15・17号住居址が構築されているが、共に遺存状態は良好とは言えない。笠野神社の社殿の背後に位置している地区は、まさに第二平坦面の端部にあたり遺構密度があつい。古墳時代の第５～９・22・31号住居址や２基の土坑の他に平安時代の２×４間の掘立柱建物1棟が検出された。また、この地区は第三平坦面につながる傾斜面の下部にあたるところから流土の堆積があつく、また、傾斜面の下部に構築された竪穴式住居址から流れ込んだ遺物を包含する層があるばかりではなく、古墳時代以前に堆積した暗褐色土層を切り込んで古墳時代以降の竪穴式住居や溝、柱穴が構築されているために、一部層序が乱れている。そして、褐色土層に作られた竪穴式住居址を見落してしまった事をお詫びしておかねばならない。一般的な層序を記すと、サラサラとして、締まりのない暗褐色を呈した表土層が約10～20cmの厚さで全体を覆う。その下も暗褐色を呈した土が堆積しているが、上層よりは土が締まっていると言える。約20～40cmの厚さで堆積している。第３層は遺物を包含する黒褐色土で粘性が強くなっている。遺物には土師器だけではなく縄文時代の石器・土器も包含されていた。黒褐色土の厚さは約20～50cmを測る。この第３層は第２層の暗褐色土層との整合に乱れが認められ、古墳時代集落が廃棄されたあとの状況を示しているように思われる。第４層は地山漸移層の褐色粘質土層で約８～10cmの厚さで、比較的平均して地山を覆っている。この平坦面をＬ字状にまいて第三平坦面につながる傾斜面下部には、第10・19・14・４・15号住居址、２棟の掘立柱倉庫址が配置されている。これらの遺構は傾斜面上にあるところから標高の高い位置での遺構検出に止どまるものが多い。中区の北側は第二平坦面から約２ｍほど上った位置にあたり、第三平坦面に含めて考えていくべきかもしれない。第三平坦面から約２ｍばかりおりた位置にあたり、わずかに鞍部を置いている。平面形で見ると楕円形をなし径25×20mの独立した平坦部が、第二平坦面に飛び出す形となっていて、本遺跡の中で比較的大型に属する第１～３号住居址が平坦部の中心から外れて第二平坦面を望む位置に構築されている。３棟の住居址の中で最も古くに位置付けられる第１号住居址が、本遺跡で検出された32棟の住居址群のなかで、唯一の平面形



第５図　東・中地区の遺構配置図(1/750)

が円形プランを呈している事に留意が必要であると言える。3棟の住居址の背後の位置、つまり、第三平坦面の傾斜面上に比較的小型の住居址、11・12・20号住居址と3号土坑が配置されている。中区北側の層序は、第三平坦面との鞍部に遺物を包含しない黒褐色土が堆積している以外は、表土層約10～20cmの下位には、暗褐色土が５～15cmの厚さをもち地山面の凹凸に沿う形でおおっていた。遺物の出土は住居址内などの遺構からの検出が多く、遺構に近接する斜面上からも少量得られた。

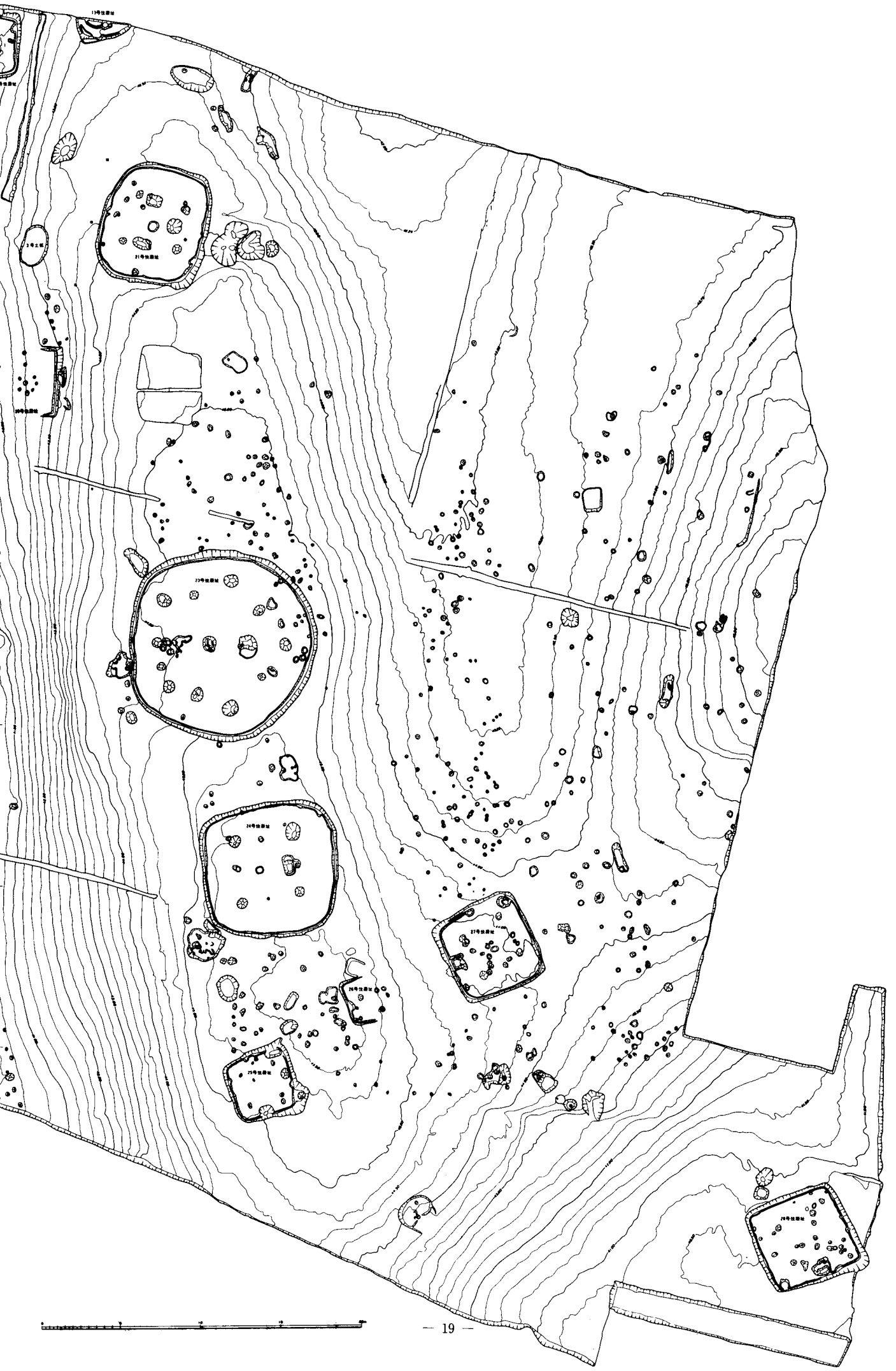
東区は本遺跡の中で最も標高の高い位置にある第三平坦面と、その背後の傾斜面および谷平野から最も離れた位置にある第四平坦面の北端部を含む地区である。第三平坦面は標高約45mを測る丘陵尾根筋にあたるもので、最大幅で約15m程度のものであり平坦面との呼称は当たらないかもしれないが、本丘陵の南端から笠野神社をま

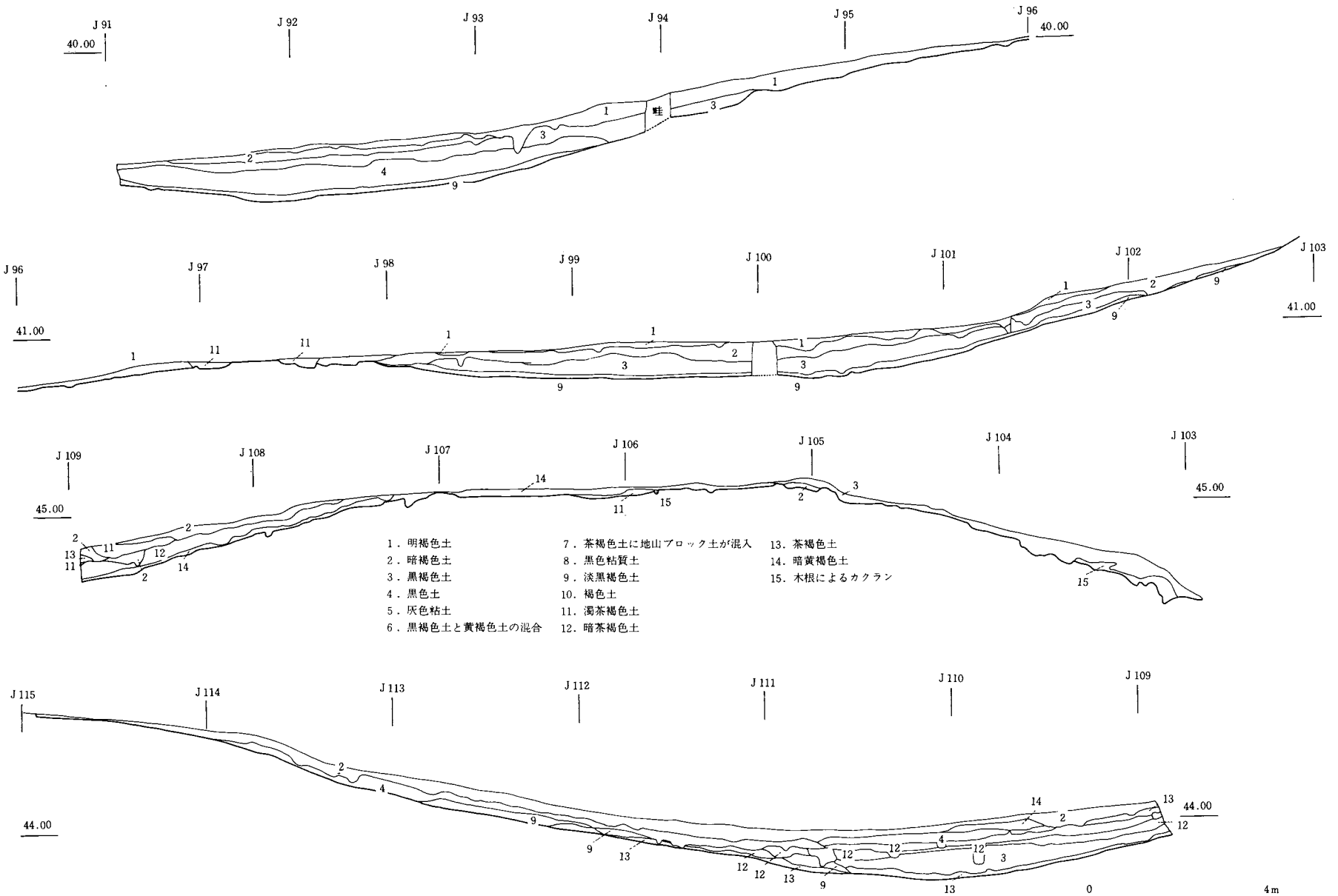


第６図　発掘区全体図(1/750)

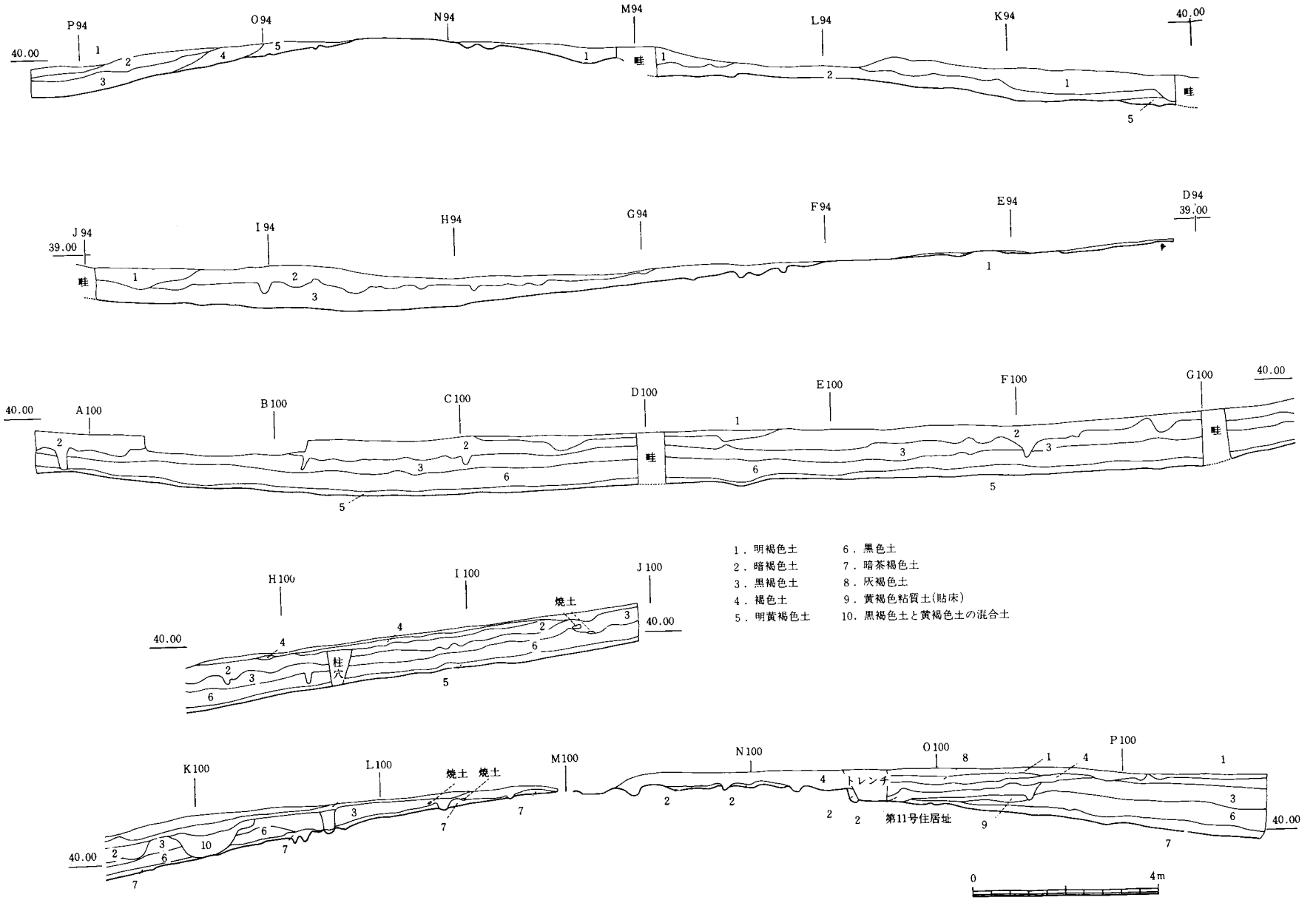
第7図　西地区全体図(1/300)

第８図　東・中地区全体図(1/300)

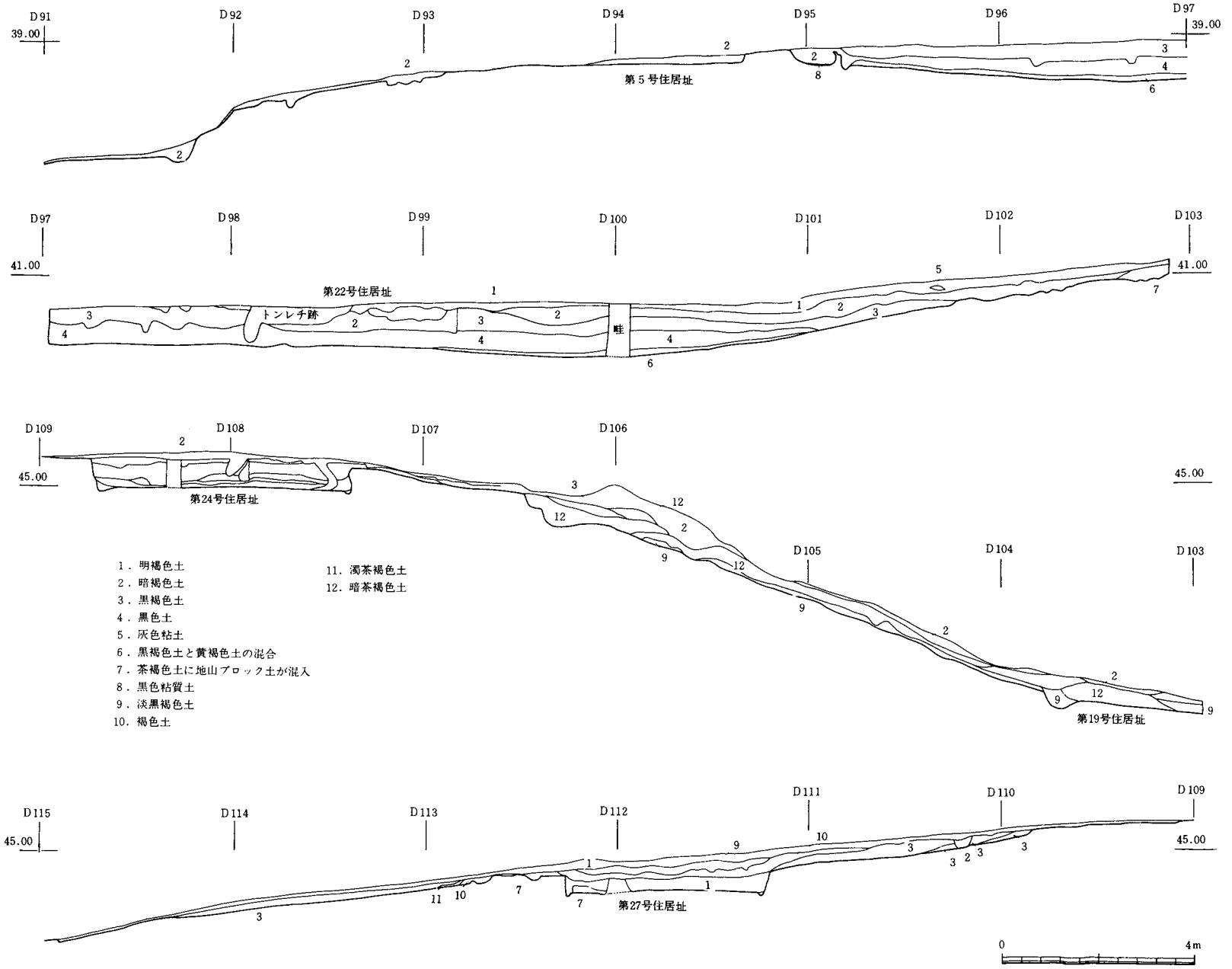




第９図　土層断面図(1/120)



第10図　土層断面図(1/120)



第11図　土層断面図(1/120)

くようにして高さを増してくるありかたであるところから平坦面とした。第二平坦面の最も低い位置にある第 7 号住居址からの比高差は約 7mを測る。遺構の配置は尾根筋という地形に制約されて、尾根状に一直線に住居址が展開するという形となっている。北側から第13・21・23～26号住居址が一定の距離を置き、それぞれが切り合うこともなく配置されている。また、各住居址に立て替えや拡張を示す所見は得られず、第21・24・25号住居址の床面には完形に近い土器が見られる事など西区・中区の住居址とは異なる在り方を示している点は、本集落の展開を見る上で重要な意味を持つものと理解される。尾根筋の層序は単純で15cm前後の表土層の下に暗褐色の地山漸移層が約10cm前後見られると言う状況である。尾根筋から約 1mほど降りたゆるい傾斜面に第27号住居址が作られている。この住居址の前面、つまり、尾根筋の住居址の背後は第二平坦面に落ち込むほどの急傾斜ではなく比較的緩やかに高度を下げる緩傾斜面で、各住居址から片付けられた遺物が包含されている。が、遺物の包含が濃密な地点は限られていて、第23・24号住居址からのものと想定される調査区に多かった。その他の地区では散発的かまったく出土しないかである。第三平坦面から約 2mばかり降りたところは、丘陵内の谷地形を成しているところではあるが、比較的幅が広く傾斜もゆるやかであり住居を構築するのに十分の地形であるが、所属時期が不明の焼けた小土坑 3基が散発的に配置されているだけであり、本集落址の東側の限界かと想定される。勿論北方に延びていく尾根筋にはさらに住居が展開するものと考えられるものの、数基の住居に止どまるものであろう。第三平坦面から約32mほど東は比高差が10mを越える崖地になっていて狭小な谷水田が入り込んでいる。この谷水田を挟んで東北方向に、縄文時代中期の刈安・上野堂畑遺跡が指呼の距離に望まれる。調査区の東南部は第三平坦面からの傾斜が強く住居址は展開しないものと考えていたが、東側の崖地にのぞんで畑地として耕作されていたと言う平坦地があるところから一部に試掘トレンチを入れて確認したところ、第28号住居址が発見された。第三平坦面からの比高差は約 5mを測り、第一・二平坦面の集落中心域からまったく隔絶した地点にあたり、その在り方には留意が必要である。この第28号住居址が位置する第四平坦面は、丘陵を画する谷地を望んでいる。谷地は笠野神社の前の御手洗池に連なるもので、位置は不明ながら一字一石経を納置した経塚が第四平坦面に位置していたものとして「加賀志徴」に記述されているが、現地における確認が必要である。第四平坦面は本丘陵の東側をとりまくもので、南端では第二・三平坦面とほぼ同じレベルとなる。第28号住居址周辺の層序は、斜面下位に位置しているところから黒褐色土の堆積が進んでいるばかりでなく、流土であり表土である暗褐色土がサラサラとして粘り気のない土が厚く堆積しているが、基本的には第二平坦面の層序に準ずるものであった。

各区の状況を分割して記述してきたが、各区の遺構をまとめると以下のようになる。

西地区　竪穴式住居址　3棟（29・30・32）　土坑　1基（ 5）　＜古墳時代＞
　　掘立柱建物　1棟（ 2）　地下式坑　4基（ 1～ 4）　井戸　1基　＜中世＞
中地区　竪穴式住居址　20棟（ 1～12・14～17・19・20・22・31）　掘立柱建物　3棟（ 3～ 5）　土坑　3基（ 1～ 3）　＜古墳時代＞
　　掘立柱建物　1棟（ 1）　＜平安時代＞
東地区　竪穴式住居址　8棟（13・21・23～28）　＜古墳時代＞
　　土坑　9基（10～18）　＜時期不明＞

調査グリッドの設定は、中地区の道路センターを求めて杭を打ち基準としたが、西地区で当初計画から大きく設計変更が成されたために若干線形が変わっているものの、中地区で求めた中心杭に移動はないものと理解している。センター杭をH 100とし、東西方向にアラビア数字、南北方向にアルファベットをとり、北東隅の杭でグリッド表示とした。メッシュの間隔は 4mとし、東西方向で52区画 208m、南北方向で最大19区画76mの範囲となる。遺物の取り上げは、 1～ 6号住居址覆土および西地区の谷覆土に包含されていた遺物については、地点とレベルを記入して取り上げたが、ほかの住居址については床面の遺物を除いて、遺構・グリッドごとに採集した。

第２節　西地区・古墳時代前期の遺構と遺物

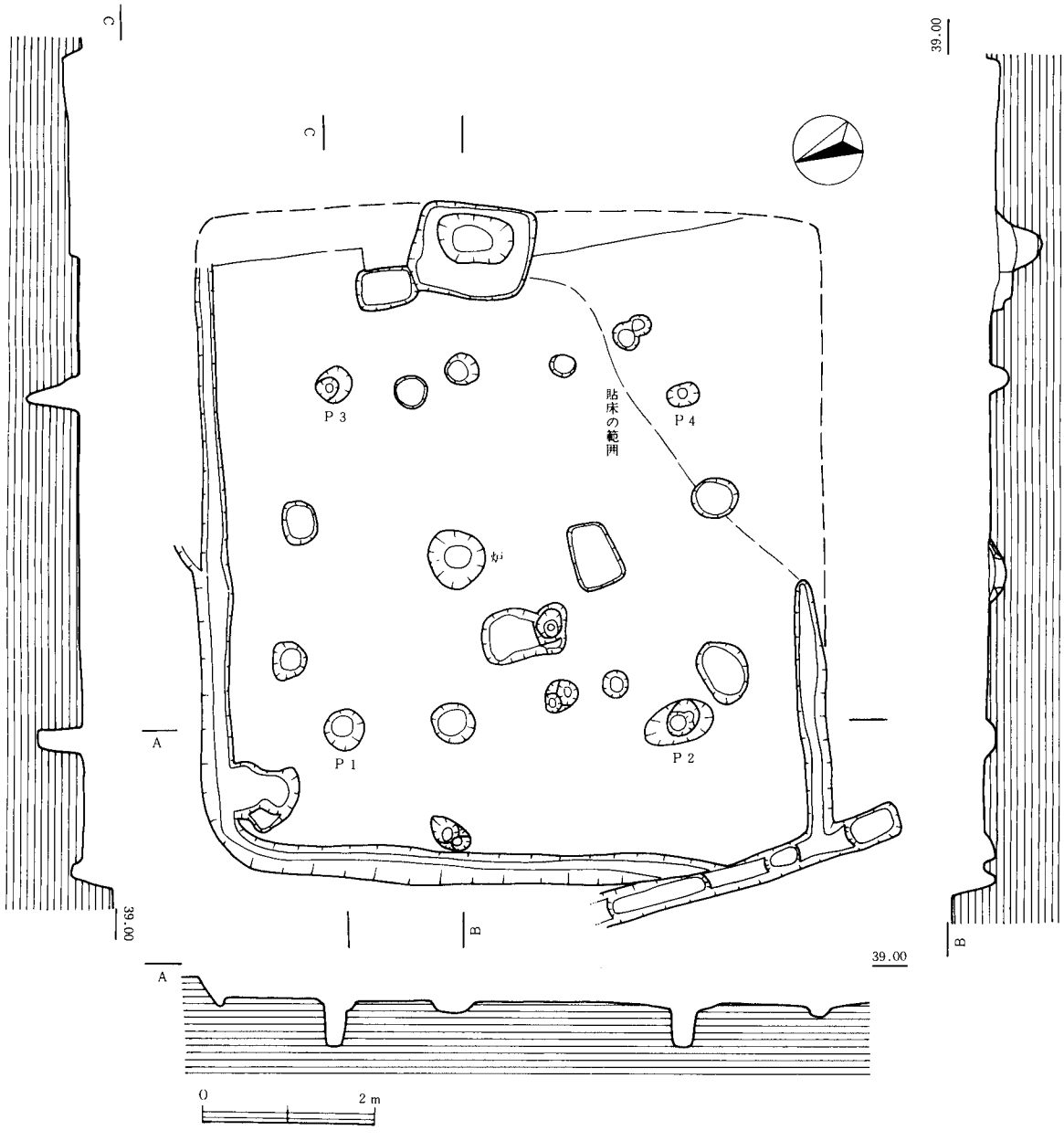
1　第29・30・32号住居址（第12～17図・図版　3）

遺構　遺跡の第一平坦面に属する北端部で検出された住居址群で、調査区においては最も西端に位置している。微地形的に見ると、発掘位置は第一平坦面のなかではわずかながら高まりを持っており、東西方向に尾根状の狭小な平坦面となるところであり、住居址群は第一平坦面の中心部に向いた緩傾斜面上に位置していて、南端の隅が流失している。検出グリッドは、V78～80・U77～80・T77～80の11グリッドにわたる。周辺には他の住居址は認められず、南側には大型壷を包含していた第 5号土坑、北側に中世の大型掘立柱建物址とそれに付属する地下式坑・井戸が配置されている。中世の遺構による住居址の損壊はごく一部にとどまっている。北側は谷地形に臨んで傾斜面となっていて古墳時代の土器が大量に廃棄されていた状況を検出している。

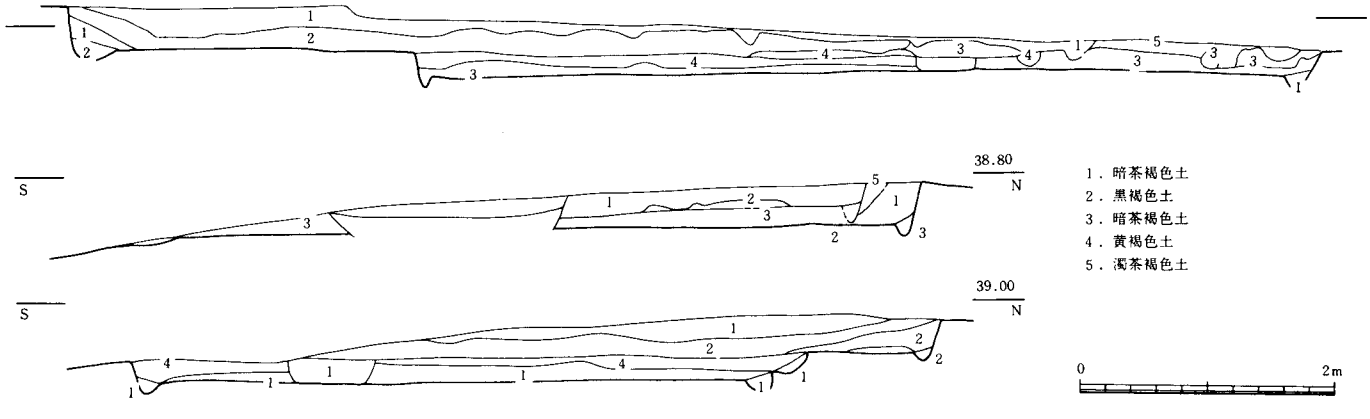
切り合った 3棟の住居址の構築の順序は、東側の第32号住居址が最も古く、順次西方に移動して第30号、第29号竪穴式住居がつくられたものと推定された。

第29号住居址は平面プラン隅円方形を呈するものと想定される。遺構検出面は黄褐色砂質ブロック層で、床面の西側も同じであった。竪穴式住居址の東辺及び南辺の一部は、斜面に位置することと前段階の竪穴式住居址を埋めて貼床を敷いているために判然とはつかみきれなかった。しかし、方形プランのいわゆる特殊ピットを東辺の中央で検出したことから、住居址の全体像を推定することができた。南北方向 723cm、東西方向約 780cmの規模を測り、主軸方位を北－70度－西においている。検出された竪穴の掘り込み角度は、遺存していた壁面のいずこでも急角度であった。壁溝は壁の検出ができなかった部分以外では発見され、全体にめぐらされていたものと推定され、幅約20～30cm、深さ約10cm前後と一定の規模で掘り込まれていた。なお、壁の高さは北西隅が最も高く35～40cmをはかる。床面は平坦にならされていて、第30・32号住居址を埋めた部分には貼床が施されている。住居址の中央から北によった位置に、平面不整円形を呈する径65cm、深さ20cmの焼土粒・炭化物を含むピットが検出された。主柱穴は 4個、Ｐ 1～Ｐ 4が想定される。径40～60cmで、深さ50～60cmを測る。Ｐ 1～Ｐ 2の心々間は 390cm、Ｐ 3～Ｐ 4は 410cm、Ｐ 1～Ｐ 3は 390cm、Ｐ 2～Ｐ 4は 380cmを測る。主柱穴から壁溝までの間隔はほぼ 100cmとそろえられているが、特殊ピットの置かれた東辺との間隔のみが 180～ 200cmと開いているのが注意を引き、第30号住居址につく可能性も考えられる。特殊ピットは平面プラン方形を呈し、長軸 130cm、短軸 110cmを測る。二段掘りとなっている内側には平面プラン楕円形のピットがうがたれている。平面90×60cm、深さ53cmを測り、段差は約20cmである。覆土には地山ブロックを含む暗茶褐色土が堆積し、地山ブロックの包含の多少によって分層される。楕円形プランのピット最下層には厚さ数cmの黒色土が見られ、炭化物を多量に含んでいた。遺物の出土は他の 2棟の住居址がほとんど含まないのに比較して多量であると言える。しかし、床面などでの一括性をとらえるまでには至らなかった。本住居址の南西のコーナーには、長さ 600cm、幅40cm、深さ40～60cmを測る溝が検出されている。壁は直に近く立ち上がり、床面には若干の凹凸が南側で認められるが、北側部分では平坦で深さをましてゆく。溝の覆土は暗黄褐色土の比較的しまった土が堆積していて、下層約20cmほどの厚さは地山ブロックをまじえた茶褐色土が堆積していた。第29号住居址との切り合い関係がよく似た土である所から判然とはせず、また、遺物の出土では土師器壷口縁部一片を上層から得た以外はなく、属する時期に不安をのこすものの第30・32号住居址に伴うものと考えておきたい。遺構の性格としては布掘の掘立柱建物が想定されるものの対となるべき遺構が発見されないことから、地形的に台地の西端に位置している在り方に留意する必要があろう。

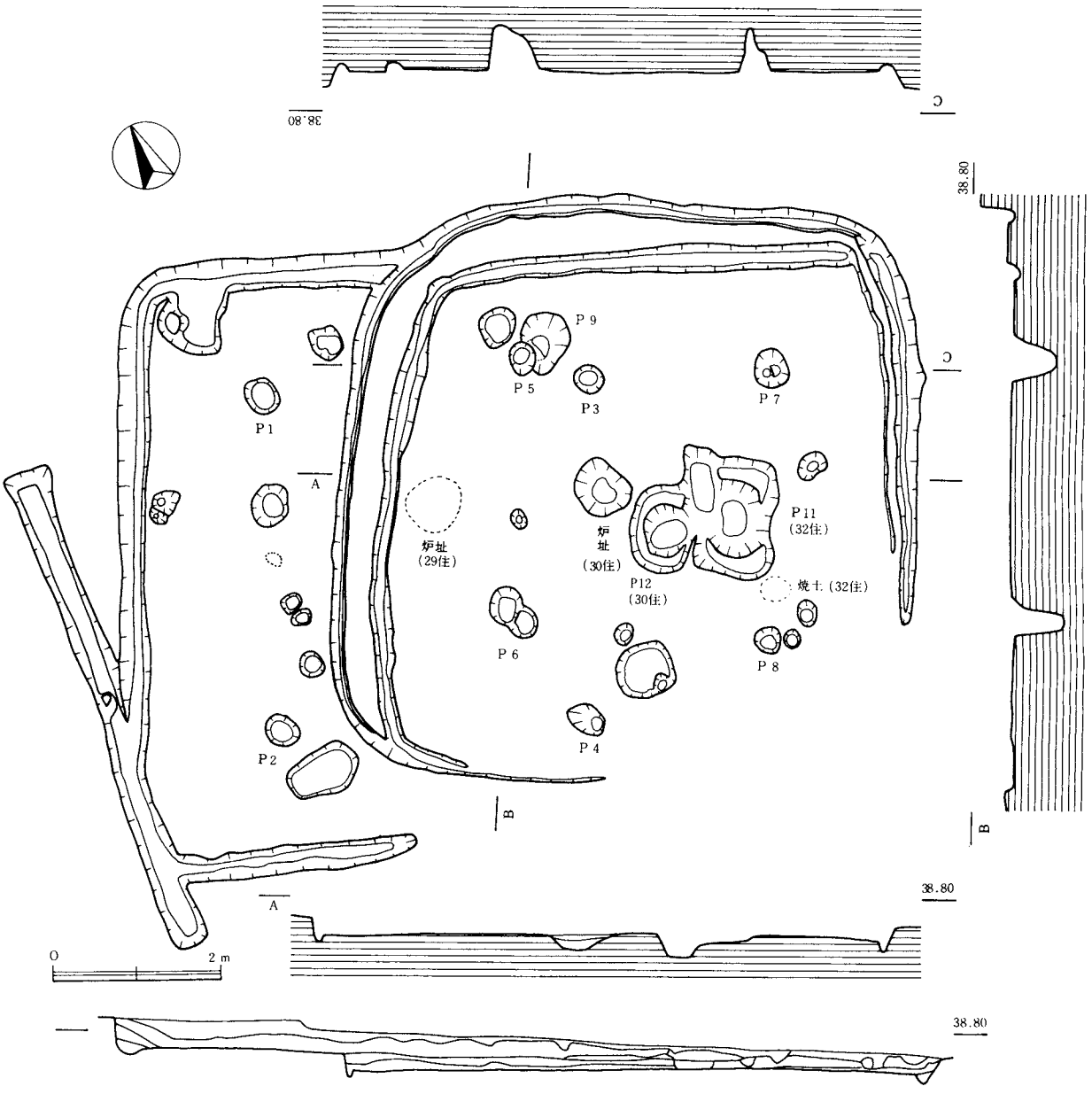
第30号住居址は第29号住居址に切り込まれた形で東側に立地している。平面プランは隅円方形を呈するのであるが、第29号住居址の直線的なプランとは大きく異なり、コーナーのまるみが際立っていることである。南東隅は住居址構築以前の黒褐色土が床面の下層に堆積していたために、掘り方、床面を押さえることができなかった。東西方向は 700cm、南北方向も 700cmの規模で、壁の高さは北東側が高く32cmであるが地山面の傾斜に伴って検出した壁の高さは減じてゆく。壁の掘り方は第29号住居址と同じ様に直に近い在り方を示している。壁溝は全周



第12図　第29号住居址(1/80)



第13図　第29号住居址土層断面図(1/60)



第14図　第29・30・32号住居址(1/80)

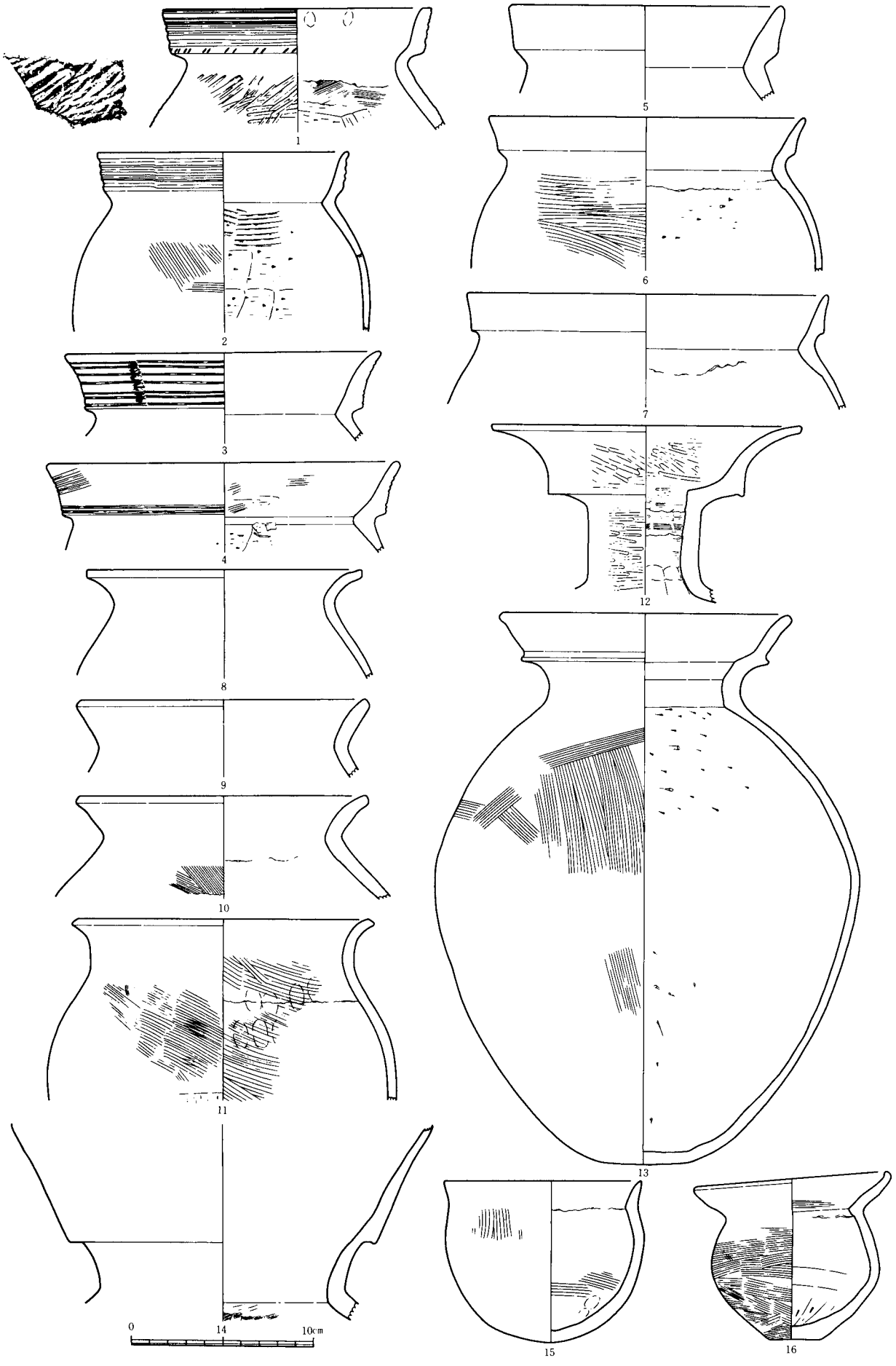
していたものと想定されるものの南隅では検出できなかった。西辺の壁溝は断面V字形に近く幅10cm、深さ12cmと狭いものであるが、北辺の壁溝は幅15～17cm、深さ12cmと断面U字形を呈するようになる。東辺の壁溝は前段階の第32号住居址のそれと重複する形となっている。床面は第29号住居址のそれから約25cmほど下がり、また、第32号住居址の床面からは約 2～ 4cmほど上位になり、床面は黄褐色砂質の地山ブロック土に黒色土をまじえたものがしかれていた。床面は南東方向にわずかながら傾斜するようになっている。炉址はほぼ中央に70×60cmの楕円形を呈し、深さ18cmのものが検出されたが、熱による変色はほとんど認められなかった。覆土は 2層に分かたれ、炭化物・地山ブロックを含む暗茶褐色土が上層に、焼土粒をわずかに混じえ、炭化物を多量に含む黒褐色土が下層に堆積していた。主柱穴は 4個が確認され、いずれのピットも第32号住居址のそれと重複ないしは接近して掘り込まれていた。P 5～P 8がそれで、径30～48cm、深さ50～60cmを測る。P 5～P 6・P 5～P 7との心々の間隔はともに 300cm、P 6～P 8・P 7～P 8の心々間はともに 320cmを測る。壁溝までの距離は北辺・西辺・南辺ではわずかに長く 150cmであるが、東辺では 130cmである。これらの事から、第32号住居の北・西方をわずかに拡張したことが想定できる。いわゆる特殊ピットは第29号住居址に含めて記述したものがあたる可能

第15図　第29・30・32号住居址遺物出土土器状況(1/120)

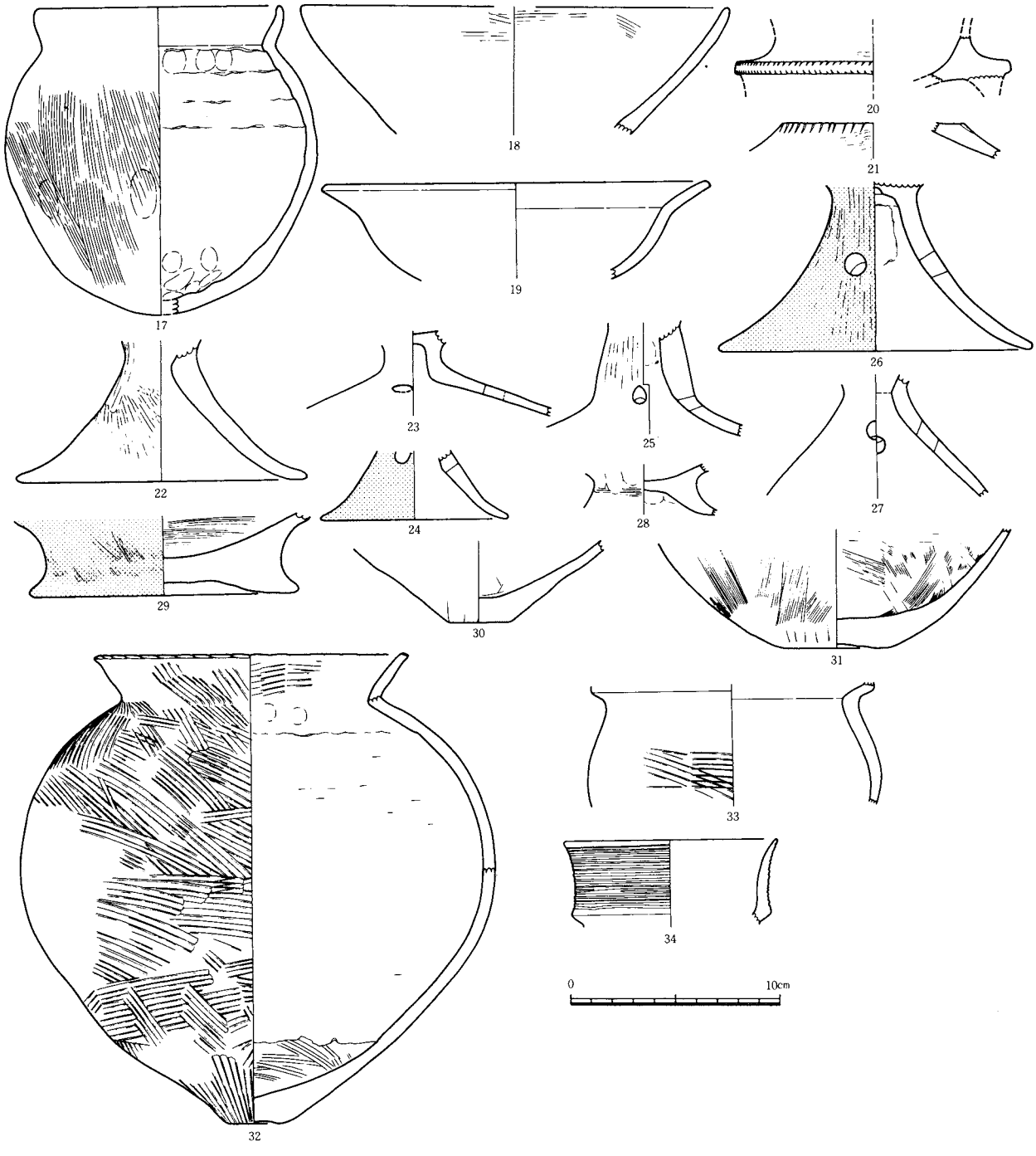
性がある。本住居址からの出土遺物は少量であった。

第32号住居址の平面形は若干歪になった隅円方形を呈している。南北方向 630cm、東西方向 650cmの規模を測り、長軸方位は第30号住居址と同じく北一57度一西に置いている。壁溝の東辺および南辺は第30号住居址のそれと重なる。壁溝の幅は第30号住居址に比較して幅広で、断面形がU字形をなしている。北辺では幅24cm、西辺では18～30cm、深さ12cmを測る。床面はフラットにととのえられ、第30号住居址の床面からは、北辺部分で12cm、東辺部分では 6cmであるが、南西隅の部分での比高差はほとんどみられなかった。主柱穴は 4本で第30号住居址のそれと重複していて、径30～55cm、深さ50～62cmの規模を測る。P 9～P 6の心々間は 310cm、P 9～P 7のそれは 290cmを測る。東辺の柱穴間の中央に、いわゆる特殊ピットが置かれていて、平面隅円方形プランを呈している。長軸 140cm、短軸90cmの規模で、深さ 5cm下がったところから、50×90cmの平面楕円形プランのピットが掘り込まれていて34cmの深さをもっている。覆土の状況は西側に隣接するピットとほぼ同じであった。遺物の出土は極めて少なく小片となるのが大部分で、図示し得たのは特殊ピットから出土した一点のみであった。

遺物　出土土器は地点ごとにレベルを記入してとりあげたものの、破片同士が接合した資料はごく限られている。出土範囲は西壁に沿う所と炉の近辺であった。 1は口唇部にナデが施され平滑にととのえられ、口縁部下端には斜行する列点がかすかに見られるが、胴部につけられた粗雑な叩き調整をつける際についたものとも考えられる。頸部のナデ調整は叩き調整の後に施されたものである。 2は口縁端部にむけて器壁が極端に薄く作られているもので、口唇の一部が外側へ飛び出るようになっている。口縁外側の段は角がなく丸みを帯びており、かろうじて有段口縁と判断できる程度となっている。また、口縁に巡らされる擬凹線も粗雑である。内面の頸部はくの字状にくびれ、胴部へのヘラケズリは入念に施され、器壁が他の甕と比較して薄くなっているのが特色である。



第16図　第29号住居址出土土器(1/3)



第17図　第29号住居址出土土器(1/3)

3は口唇部が外反するように調整されているが、一方、 4は丸味をもって作られ、ともに口縁の擬凹線はかすかにそれと判断できる程度のものである。 5～ 7は有段口縁素文の甕であるがいずれの土器も摩耗が進んでいるために口縁が素文であるかは判断に苦しむ。6の胴部は幅 1cmで歯が 6本の櫛歯状工具が使われているものである。横方向の調整である点が注意される。 8～11はくの字状口縁となる甕で、 9・10は同一個体の可能性がたかいもので、胴部に縦方向の目の細かい櫛ナデ調整が、同内面はケズリ調整の後にヘラナデが施されている。11の口縁部は湾曲して外反するタイプのもので、口唇端部に面取りが入れられている。口縁部は横ナデ調整、頸部以下は斜め方向の刷毛目調整が施されている。 8～11の胎土には比較的砂粒の混和は少なく、淡茶褐色を呈し、焼成の堅緻なものが目立つ。12～14は壷型土器で、13は復元完形と成った。12は円筒状の頸部が付くもので、外周には

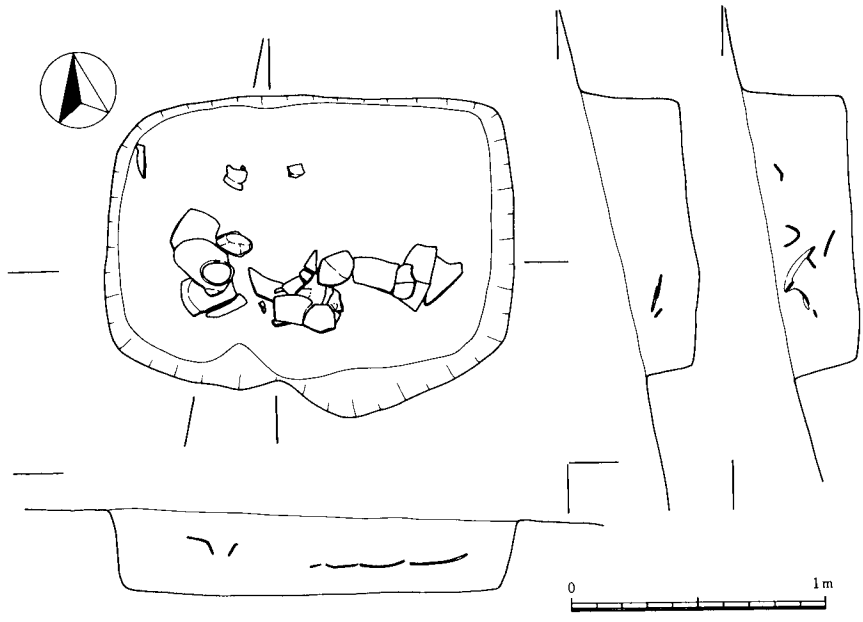
丁寧なヘラミガキがなされている。13は口径16cm、器高約30cm、胴部最大径23cmを測るもので、有段口縁の下端部が突帯のように尖るのが特色である。底部は判然とした平底ではなく、丸底風とみるべきであろうか。胴部への調整は縦位置の刷毛ナデであるが、刷毛目をほとんど消してしまうようなナデが入念に施されている。14は西辺の壁溝から出土したもので、内外面とも摩耗が著しく器面調整はつかめない。胎土への砂粒の混和は極めて少ないのが、本壷型土器の大きな特徴と考えられる。15～17は小型品で、15・16は復元する事ができた。15は口径11cm、器高 9cmを測る丸底になるもので、口縁内外面・胴部内面上半は横ナデ調整、胴部外周は縦位置の櫛目調整の後ナデを加えてほとんどを消している。16は口径11cm、器高 9cmを測り、大きく外反する口縁の端部がわずかに内屈して立ちあがらせるもので、体部に比較して口縁の大きさがやや目立つ。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が目立つ。17はやはり丸味をもって立ち上がる口縁の端部がわずかに直立するもので、口径12.8cm、器高14.6cmを測る。頸部の内面に押圧痕と口縁からはみでた粘土が覆い被さるところから、体部を成型した後に口縁部分をついでいることが窺がえる。体部の下半は器壁が厚くなり、凹凸が目立つ。18は高杯の口縁部片であるが小片であるために、その口径、傾きには不安がある。内面端部に櫛歯調整痕が残るものの、内外面共にヘラミガキが行われている。20・21は砂粒の少ない精選された胎土が使用されているもので20は装飾器台、21は内面が大きく剝落している高杯脚部かと想定される。22～27は高杯・器台の脚部である。23・25は脚柱がきわめて短く端部が大きく外に開く、小型の高杯である。24は脚部端が伸び拡がるタイプで、赤彩が施されている。22・27は器台が想定できる。29は底径13cmを測る大形壷型土器の底部で、胎土には砂粒が多量に含まれている。32～34は第30号住居址から出土した。32は図上で復元した「く」の字口縁を持つ甕で、口径15.2cm、器高22.4cm、胴部最大径23cmを測る。短い口縁部の端部に押圧が施されるもので、肩部には斜め方向、体部には横方向、底部には縦方向の調整が入れられ、内面には横ナデがなされている。底部と胴部の境界は、内面ではっきりと確認でき、別々に作られたことがわかる。33は口縁部分を欠損した有段口縁をつける小型の甕型土器である。34は口径10.4cmを測るもので、口縁端部にむけて器壁が薄く外反気味になる有段口縁壷と想定される。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。凹線はヘラ先で引かれたもので密に置かれている。

427は第32号住居址の特殊ピットから出土したもので、壷の口縁部かと推定される。外反ぎみに立つ口縁部には、歯の間隔の狭い櫛状工具で調整されている。色調は淡黄灰色を呈し、胎土は精選されている。

2　第 5号土坑（第18・19図・図版 3）

遺構　第29号住居址の南々西方向約 5m、S77・R77グリッドで検出したもので、第一平坦面に入り込む小谷に臨む傾斜変換線上に位置している。平面プランは隅円方形を呈し、長軸 163cm、短軸 113cm、深さ40cmを測り、長軸線をほぼ東西方向の北一76度一西に置いている。壁の立ち上がりは 4辺とも比較的急激で、床面は平坦にならされている。覆土は茶褐色土に炭化物と地山がブロック状に混入するもので、分層は困難であった。出土土器は長軸の南側に寄るようにして細長い範囲で検出された。床面から約10cmほど浮いた位置に並べたように置かれ、長軸西端に大形壷の口縁部分が逆位になって出土している。

遺物　35・37・38はいずれも口縁端部の器壁が薄くなる作りで、摩耗が進行していて細部の調整は良くつかめない小型の甕である。36は口唇部が平滑に調整されたもので、頸部の内面に粘土を張り付けた状況が良く観察できる。39・40は大形の壷であるが、39の胴部片は接合することができず、40の口縁部は出土しなかった。39の口径は25.4cm、頸部の径は14cm、口縁部の高さは15cmを測る。有段口縁となる端部へは粘土を張り付けて突出させたものと想像される。口縁と肩部の接合部分にも突帯が巡らされている。40は前者と同じ様に肩部の端に突帯をまわすもので、さらに刻みを施している。頸部の径は17cm、胴部最大径は41cm、現器高35cm、底部径 7.6cmを測る。胴部には斜め方向に力強く刷毛ナデ調整が施されているが、底部近くではナデ調整でとどめられている。前者の胎土には、砂粒の混和は少なく精選されているが、後者では砂粒の混入が目立つ。

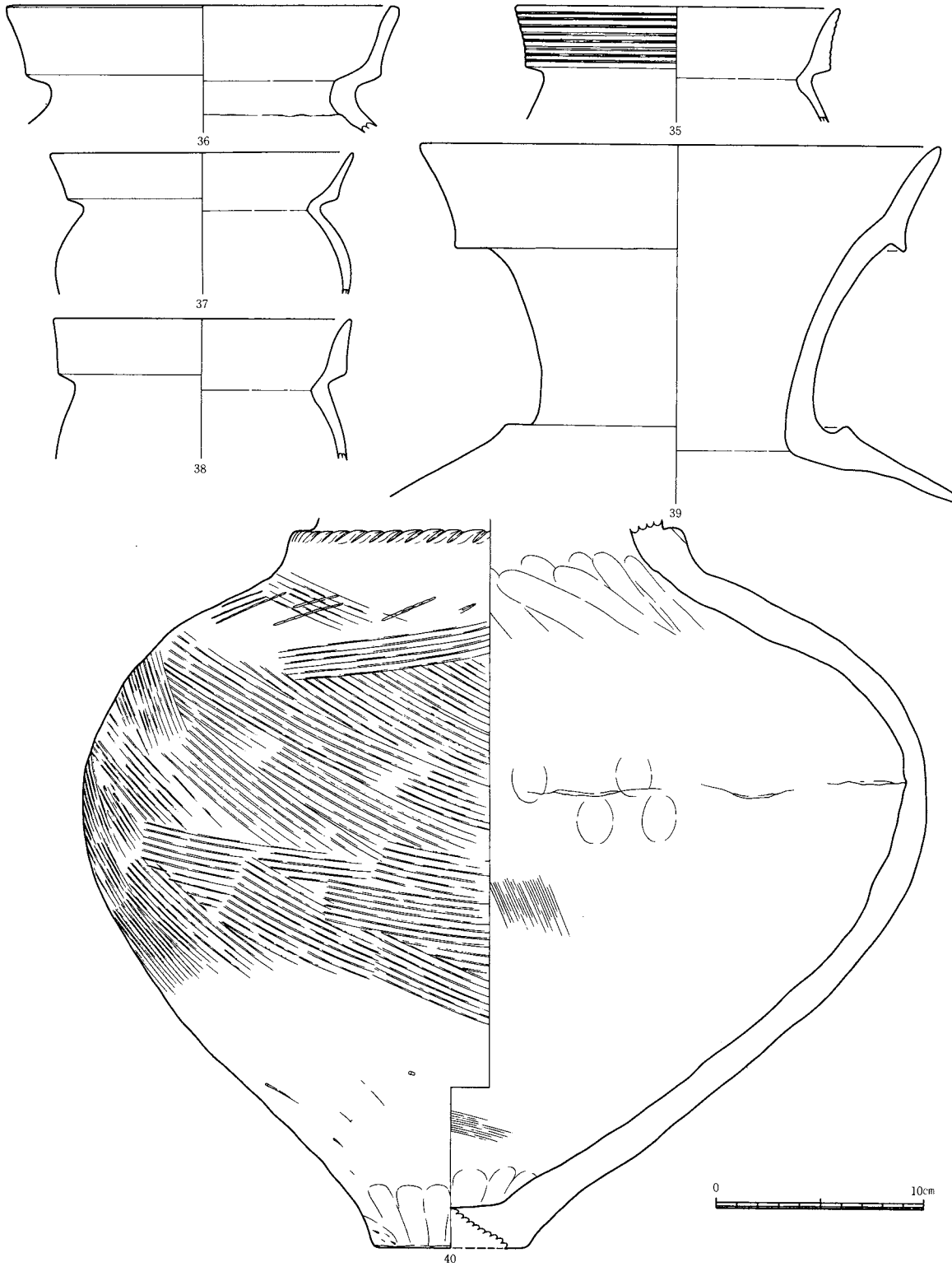


第18図　第５号土抗(1/30)

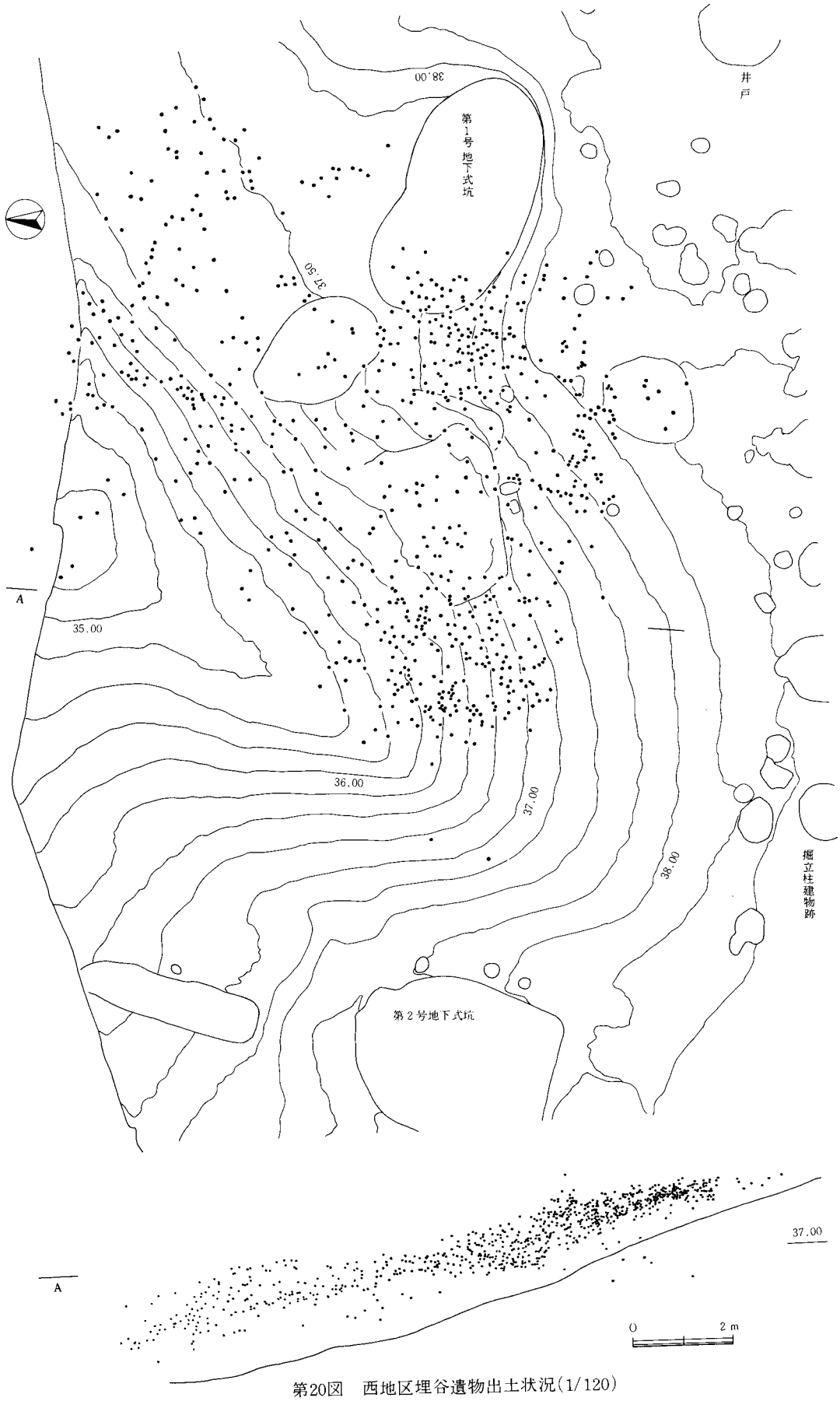
3　埋谷（第20～29図・図版 4・ 5）

遺構　第一平坦面の北端部に位置していて、遺構そのものとしてのとらえ方には不確定な要素を示しているものの大量の土器が出土しており、第29・30・32号住居址の土器廃棄場として位置づけられる事から遺構として記述していく。遺物が集中して出土したのは、中世の掘立柱建物、第 1・ 2号地下式坑に三方を囲まれた谷であり、中世段階での整地がなされていることは、堆積土の上層に珠洲焼を包含した地山土が見られるところから確実である。B75～78、A75～78、Z75～78、Y76・77グリッド、東西約17m、南北約15mの広い範囲に渡って、遺物の出土がみられた。土層観察の為に、谷に対して縦断する南北方向とそれに直行する横断の畦畔を残して掘り下げた。上層には黄褐色を呈する地山ブロック土を暗褐色土がすきまを埋める状態で検出された。その厚さは、地山ブロック土の粒子が細かくなる下層位のものを含めて40～60cmに達する。谷の南部は状況の把握に手間取ったところから上層の一部を削平してしまったところもあり、上層の厚さはさらに増すものと思われる。上層には珠洲焼の大甕が含まれており、掘立柱建物および地下式坑を構築する際に平坦地を拡張することと排土の処理場として利用されたものと思われる。これらの動かされた土の下には、淡黒褐色土・茶褐色土・淡茶褐色土に分層された土師器を含む土が20～40cmの厚さで堆積していた。これらの層は斜面に堆積したものであることから、谷頭では薄く谷底に向かうに従い炭化物・土器の出土量が増加していく。しかし、土器が一塊の細片となるものは、谷頭に近いところであり、土器を廃棄する際には遠くに投げ捨てたものとは思えないようだ。これらの包含層の下には暗褐色土・黒褐色土が50～ 110cmの厚さで堆積していて、土の粒子が下層にゆくに従い細かくなっていく。この層には遺物の出土は見られず、この谷の西方に瘤状地形の裾に形成されたやや浅めの谷の肩部に縄文時代晩期の深鉢が暗褐色土の上層位で検出されていたことから、縄文時代以前の腐蝕土層と想定できる。そして、この下には茶褐色・褐色を呈する地山漸移層が 5～30cmの厚さで堆積していた。谷の東側には、方形プランの落ち込みが検出されている。東西方向の長さは 340cm、南北方向の長さは現況で 250cm、深さは地山面でのとらえ方では約50cmを測り、壁面にやや急角度に立ち上がる部分が認められる。床面は比較的平坦に成形されているが、壁溝や柱穴は認められず立地状況を含めて住居址としては考え難い点があるものの、土層の堆積に不自然な面を指摘することができ、古墳時代段階での意図をもった掘り込みとしてとらえることは可能ではある。また、これとは別に上層位置においてはピットの断面が露呈しており、整地された平坦面に見落としてしまった掘立柱建物が存在する可能性も考えることができる。

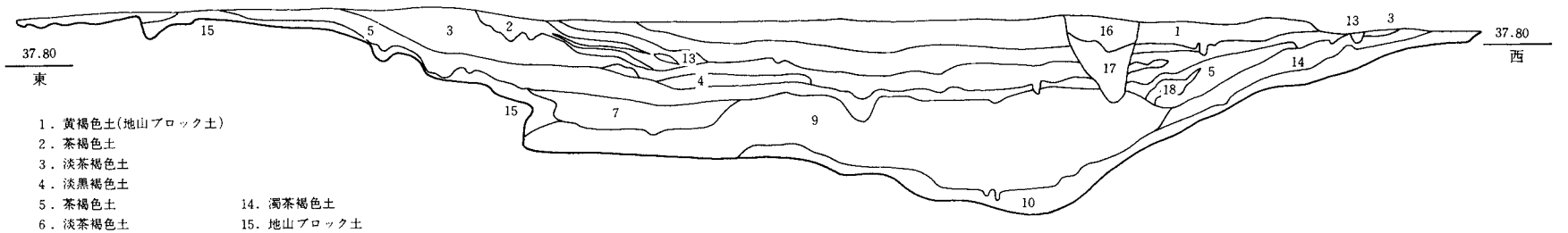
遺物　土器の出土は莫大な量に上り、出土地点を押さえたものとしては総数 800点以上を数えるものの、全体



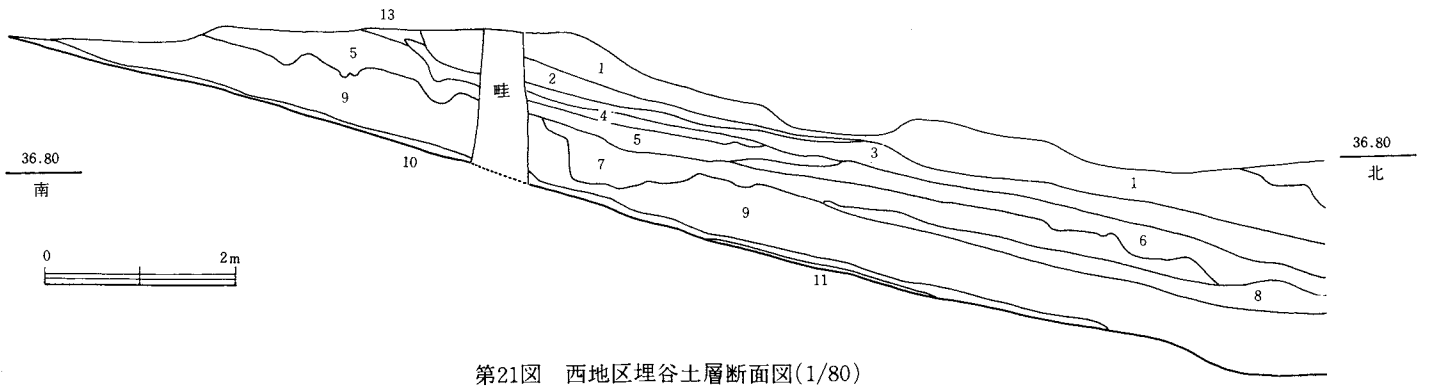
第19図　第５号土坑出土土器(1/3)



第20図　西地区埋谷遺物出土状況(1/120)

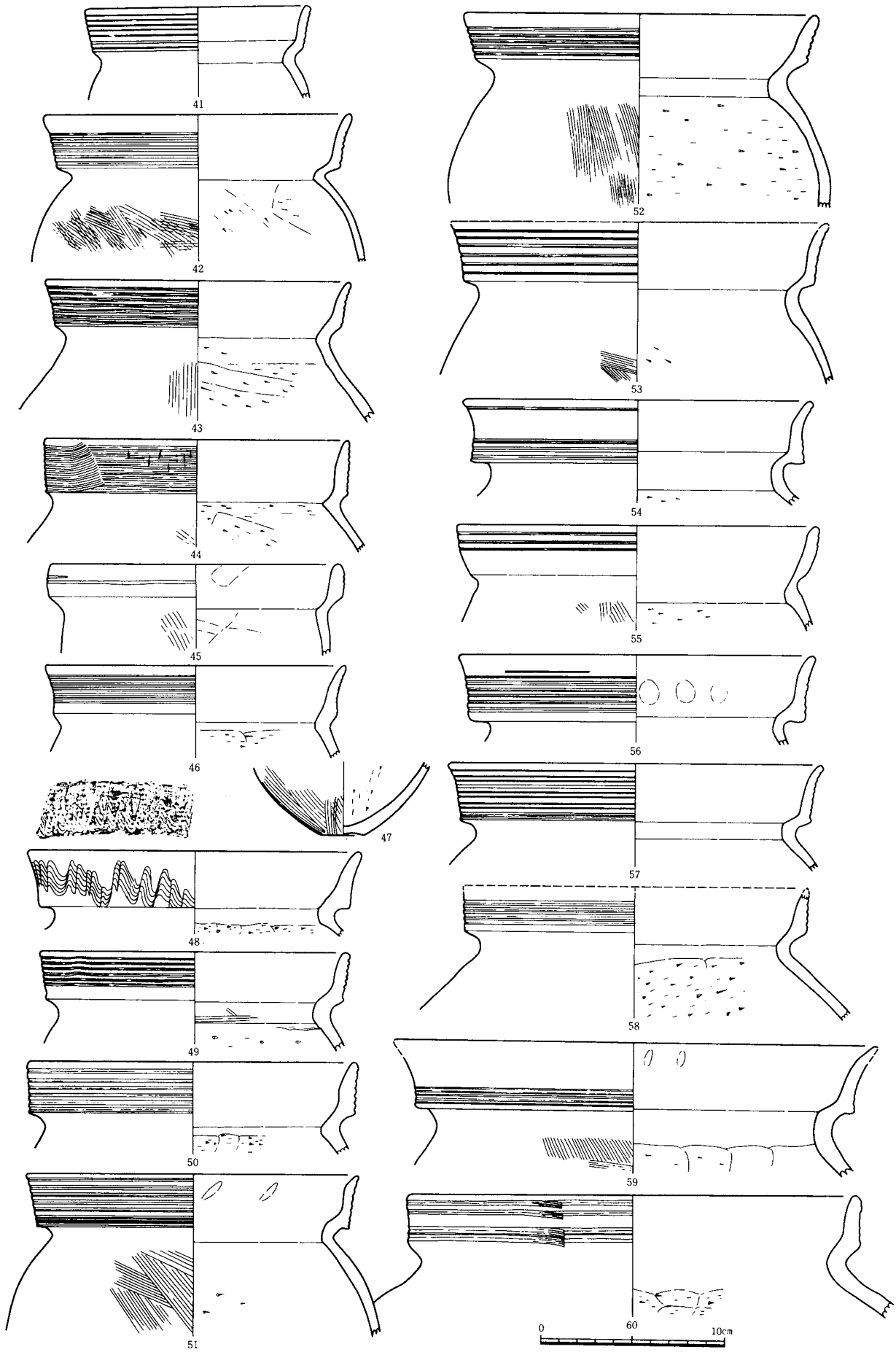


1．黄褐色土(地山ブロック土)
2．茶褐色土
3．淡茶褐色土
4．淡黒褐色土
5．茶褐色土
6．淡茶褐色土
7．茶褐色土
8．暗褐色土
9．黒褐色土
10．褐色土
11．濁茶褐色土
12．淡褐色土
13．黒褐色土
14．濁茶褐色土
15．地山ブロック土
16．淡褐色土
17．淡茶褐色土と黄褐色土の混合
18．茶褐色土と黄褐色土の混合

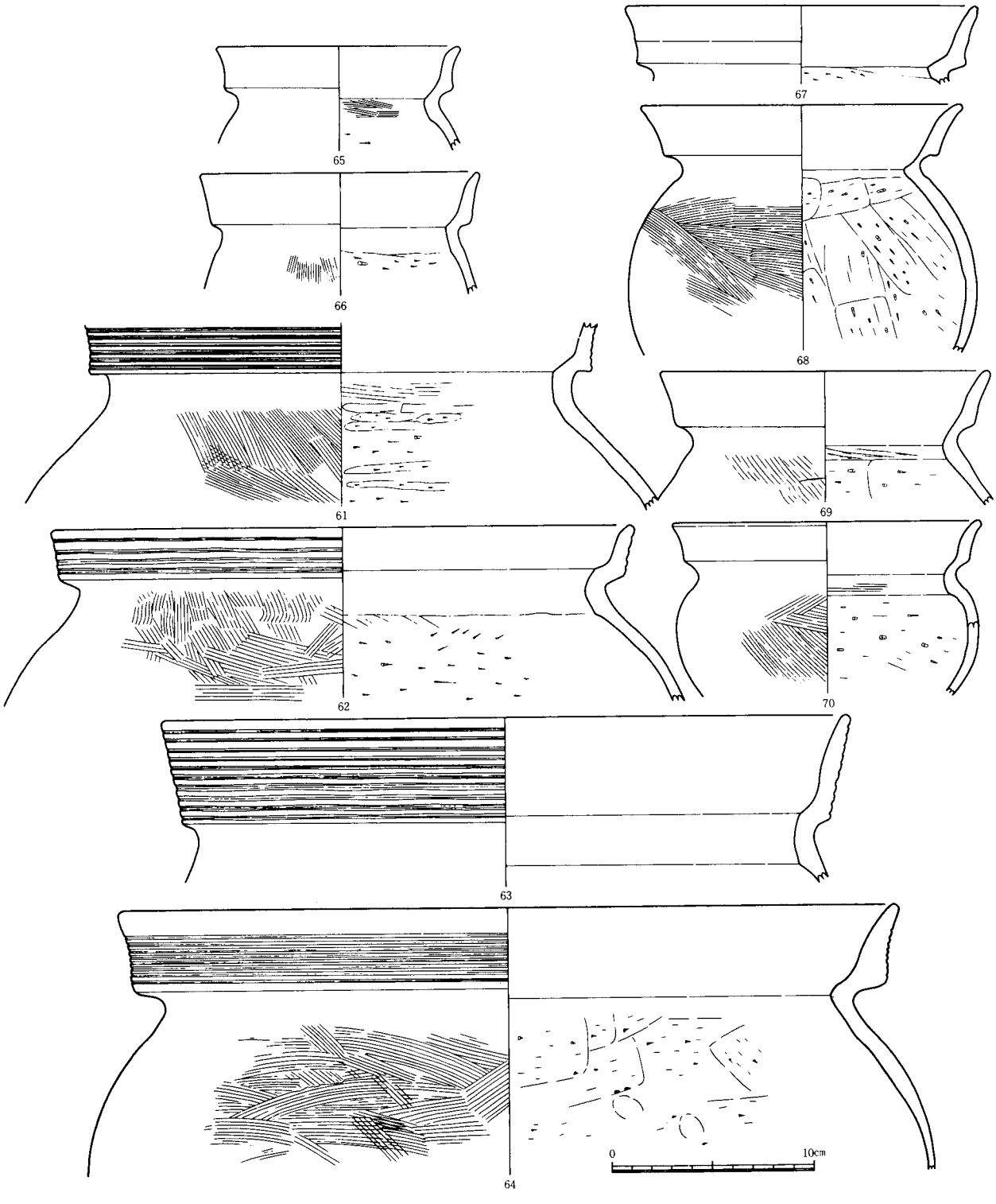


第21図　西地区埋谷土層断面図(1/80)

形をとらえることができたのは小数例に限られる。41～64は擬凹線をつける有段口縁の甕型土器である。41は口径12.6cmを測るもので擬凹線はそれとようやく判別できる程度の弱いものである。42・43の擬凹線は口縁を上下に調子の異なる形となっていて、下の擬凹線が比較的明瞭に見て取れる。43では胴部の刷毛調整が縦位置となっているが、胴部全体は摩耗が進行していて一部で遺存しているのが見て取れる程度であり全面になされているかどうかは不明である。44の頸部の内面は「く」の字状に折れ、頸部そのものが消滅するような強いヘラケズリが施されている。さらに口縁の特色を見ると、中位付近から口唇部にかけて器壁が薄くなり、段が付くような状態となっている。45は幅の狭い口縁帯に 1～ 3条の擬凹線が見えるもので、擬凹線をいれたあとにナデ調整が施されたために消失したものと想定される。胴部の器形はさほど肩部が張らないものと想像され、縦位置のナデ調整の入れ方と共に留意される。48は口径18.4cmを測るもので、口縁部には弱い擬凹線を入れたあとに、粗雑な調子で波状紋が施されているもので、本遺跡では唯一のものである。口縁内面の調整は、有段部の屈曲部にナデが施される程度で止どめられている。色調は灰褐色を呈し、胎土には石英砂粒の混入が目立つ。51の口縁部内面には斜め位置の指頭圧痕が認められ、口縁端部が尖るような形で成形されているのが注意される。52は口径19.4cmを測る中型の甕で、口縁部内面にはほとんど段がなくなるようになっている。胴部への調整は縦位置である。53の口縁部には幅 2cmに 5本の擬凹線が等間隔に引かれている。54はシャープな作りとなっているもので、口縁端部が強く外反し、口縁部下端が鋭角的な角度で頸部につながる。擬凹線は屈曲の強くなる部分では空白となっている。胎土には砂粒は少なく、横ナデ調整も入念になされている。55の口縁部は下端の屈曲が弱く、頸部との段はゆるやかに立ち上がっている。口縁上半に 3本の凹線が引かれていて、沈線と呼べるほどに細いものである。56・57はほぼ同巧のもので、口縁端部でやや外反する傾向を示し粗雑な擬凹線が引かれている。60は口縁部・体部ともに厚ぼったく作られたもので、口縁部には擬凹線とするよりも刷毛状工具によるところのナデが施されていると見られる。その工具の幅は 1.5cmを測る。61～64は口径約26～39cmまでを測る大型の甕で、口縁部分の形態が少しずつ異なっている。口縁部の短い62、逆に長くなっている63、それらの中間である61・64というふうに器形の形状を含めて分類することができる。61・62は色調灰褐色をなし、胎土に砂粒を多く含むが、焼成は堅緻である。63の擬凹線は丁寧に施されているもので、色調・胎土はともに64と同じ状態を示している。淡茶褐色をていし、胎土には砂粒が多く、焼成は軟調で摩耗が進行している。65から 111の土器は有段口縁で素文のものであるが、擬凹線を持つものに比較して量的に多く、極端な大型品はないものの、やはり、大・中・小型品があるようだ。65は口径 12.4 cmを測るもので、口縁端部がわずかに外反傾向を示している。66は素直に立ち上がる口縁を持つもので、口縁の内外面および胴部の外周はナデ調整でととのえられている。68は口径16cm、現器高11.2cmを測るもので、素文となる口縁部は刷毛状工具によって横ナデがなされているようだ。体部の刷毛ナデ調整は頸部からやや間隔をおいて横および斜め方向になされてはいるものの胴部下半へは届いてはいないのが見て取れる。内面へはヘラケズリがなされていて、頸部近くは横方向、体部は縦方向に行われている。器表面では砂粒は目立たないが、ヘラケズリのある内面では砂粒の移動が目につく。焼成は良く、遺存状態は良いほうである。70は口径15.4cmを測る小型品である。茶褐色を呈し、胎土に微砂粒を僅かに混和しているもので、焼成は良好である。72は口径16.4cmを測るもので、口縁部は弯曲するように端部が外反し、口縁部下端が丸くなっているのが特徴である。体部の刷毛ナデ調整は小刻みな調子で行われている。胎土の砂粒は器表面ではさほど目立たないが、横ナデ調整の口縁部を含めて器表面に多数現れている。82は口縁端部が大きく外展しているもので、口縁部下端の稜線を中心にして炭化物の付着が目立つ。74は口縁端部の内面に指頭圧痕を残しているもので、横ナデが最後に行われている。78は口径23cmを測るもので、口縁端部が尖り気味におさめられ同じ下端は側面を押さえることによって突出する形状を示していて、有段口縁素文の甕から分離すべき要素を持つものと考えられる。80は口頸部には指頭幅の押さえがめぐらされている。81は口径16.2cm、現器高10.2cmを測るもので、器表面はヘラミガキが、体部内面はケズリの後磨き調整が施され、器表面は平滑になっている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選されて砂粒を全く含んではいない。胎土、調整の在り方から甕ではなく鉢型土器と思われる。82は口縁部の幅が狭くなるもので、内面では段はなく「く」の字状に折れる形状をなしている。84は薄手に仕上げられた焼成堅緻な甕



第22図　西地区埋谷出土土器(1)(1/3)



第23図　西地区埋谷出土土器(2)(1/3)

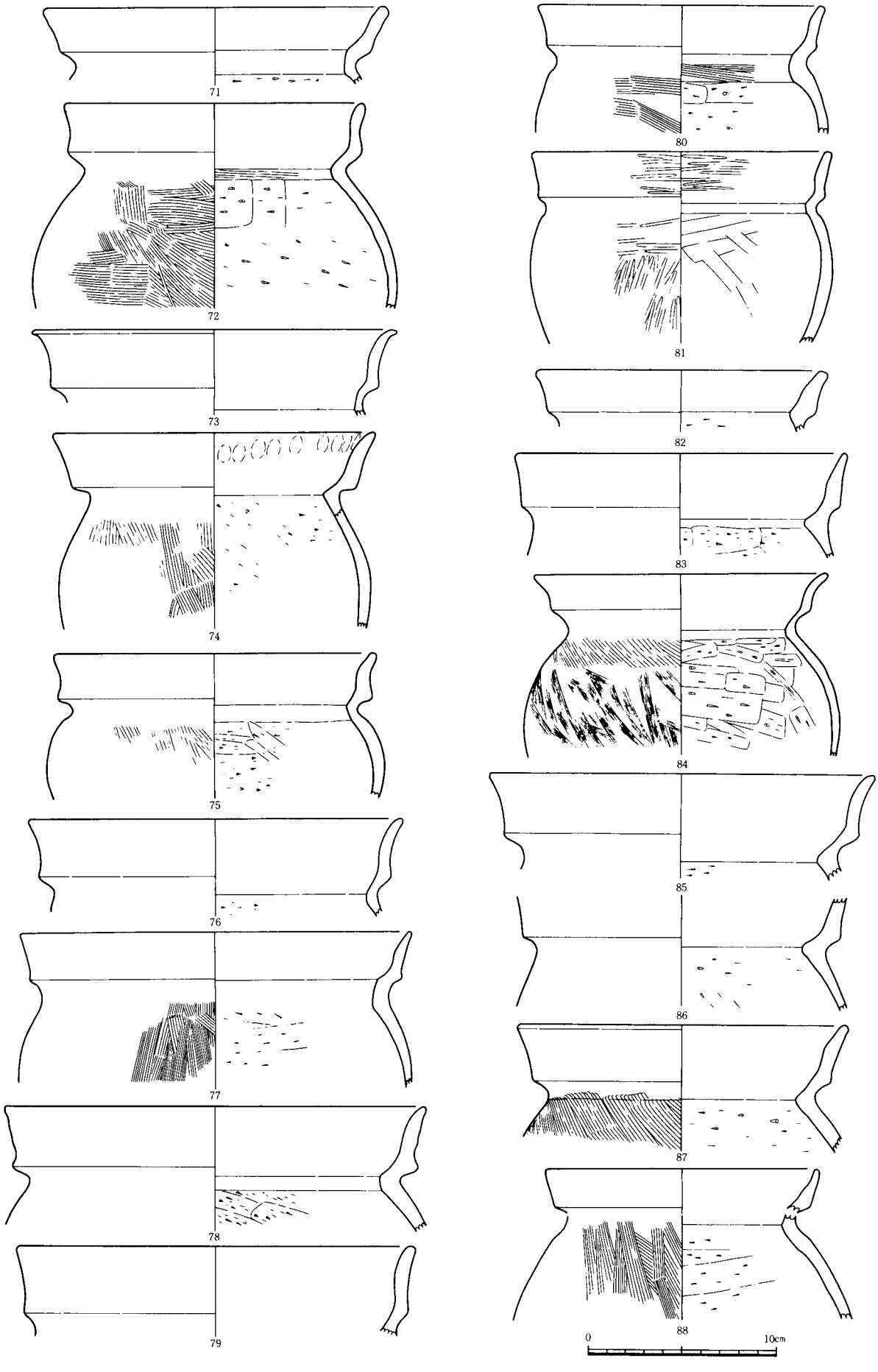
で、器表面は粗い刷毛調整の後ナデが加えられていて、肩部上端部では横方向にナデが行われている。87は幅の広い工具で力強くナデが施されているが、88は粗雑な調子で弱くなされ、体部内面のヘラケズリもなおざりで器面には凹凸が目立つ。89～91は胎土に砂粒が多く混和されているもので、遺存状態は良くない。93の口縁は外傾度が強く、内面の段はかろうじてとらえられる程度で「く」の字状に折れている。外周がナデでとどめられているのに、内面には刷毛目調整痕を見ることができ、有段口縁素文の甕では小数例に属するものである。「く」の字状口縁の甕には通有に施されているものであり注意しておきたい。94は口縁端部内面に指頭圧痕を残すもので、

後で横ナデ調整が施されている。指頭圧痕を見る甕の例は、本遺跡においては小数例に属するのであるが、それらの中で口縁部の中央付近に在るものと口縁端部近くにあるものとの二様が認められるようであり、指頭圧痕の手抜きの方向性を考える上で留意すべき点かと思われる。95の口縁は二段にわたって押さえて調整されている為に、口縁部の中央に稜を認めるほどになっている。96は摩耗が進行していて調整はつかめず砂粒が目立つ。

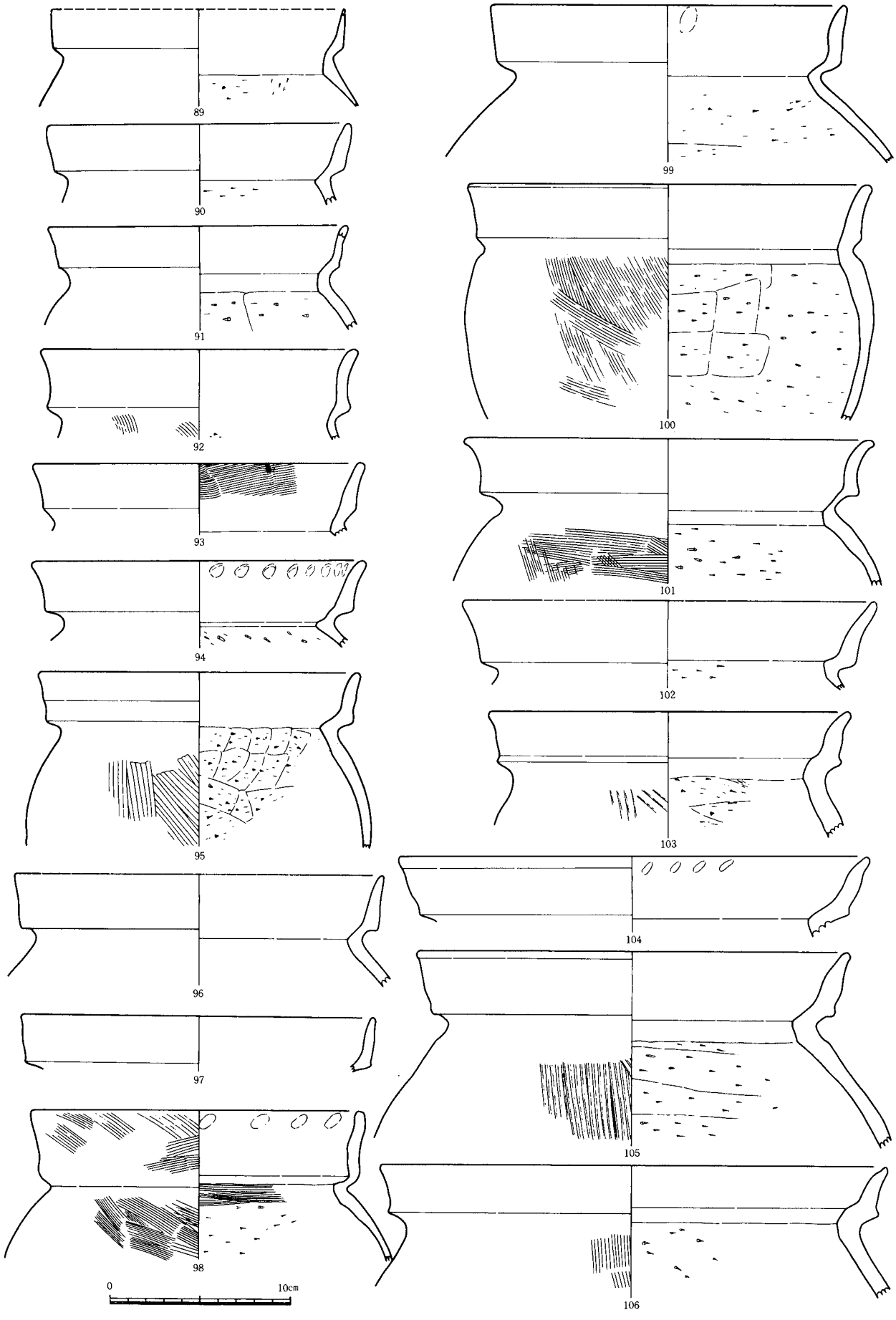
98は口径18.8cmを測るもので、長い口縁部を付けている。口縁内面端部には指頭圧痕がつけられ、器面に凹凸が在る。口唇部にはナデが加えられている。この土器の一番の特色は、口縁内面の段の部分が狭く際立っていることである。その為に長い口縁部の中央が大きく湾曲している。本遺跡出土品の中でも、特異な器形を持つものと言える。口縁外周は斜め方向の刷毛目調整のあと横ナデが加えられている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に通常の砂粒が混和されていて、焼成は良好である。99は摩耗が進んでいて器表面の調整は不明である。 100は口径22.6cmを測るもので、口縁外周は幅の広い工具で横ナデが施されていて、端部がその工具から外れているために突出するような形となっている。体部の最大径は口縁径をさほど越えないもので、頸部での屈曲も弱く器形的に他の甕と若干異なるようである。101 は口縁部の外展が一層強くなっているもので、口径23cmを測る。体部での調整が横方向である点に注意しておきたい。橙味褐色を呈し、胎土に砂粒が多く混和されている。焼成は良い。103は口縁端部と下端が突出するようになるもので、口唇部に向けて急激に器壁が減じている。なお、器壁の厚さが他の甕に比べて厚手である点に留意しておきたい。胎土に混和される砂粒の比率は、やや少ないように見える。 104～ 106の口縁部の調整は 103のものと同じ調子でなされている。色調・胎土・焼成もほぼ同じ様に見え、厚手であるところからか、器壁の中は暗褐色を呈していて、サンドイッチ状をなしている。また、胴部への調整がいずれの場合も縦方向である事に注意しておきたい。

107～ 111は口径22.6～24.4cmを測る大型の甕で、 109の肩部が大きく張る以外は口縁径をさほど越えないものとなっている。口縁部を素文におさめる手法についても変化は少ないと言える。 111の指頭圧痕もさほど目立つものとは言えない。器表面には 111を除いて縦位置の刷毛目調整が入れられているのも共通項のひとつとして考えられるようだ。 112～ 116は「く」の字状口縁をもつ甕型土器の中型品であり、口縁部の調整がそれぞれに微妙に違っているようだ。 112はの口径は18.8cmを測る。口唇部はナデが加えられ、口縁外周は粗雑なナデがいれられていて凹凸がめだち、内面は刷毛目調整がそのまま遺存している。体部にはヘラケズリが施されているかどうかは不明である。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。 113は口縁端部の内面に約 1cm幅のナデが加えられて口唇部分が外展気味になるもので、体部内面にはヘラケズリは施されないようだ。胎土に含まれる砂粒の量は少ないようだ。 114・ 116は口唇部に向けて器壁が減じていくタイプで、内外周とも横ナデ調整が施されているようだ。 115は器壁が比較的薄く調整されているもので、胎土に含まれる砂粒はさほど目立たない。体部内面には横ナデ調整痕が残る。 118は 113よりさらに口縁端部を押しているもので、口縁は湾曲して立ち上がっている。口縁端部を中心にして炭化物が付着している。 117は口径14cmを測るもので、口唇部へは外側からナデが加えられている。体部および口縁部の一部に二次的加熱による淡赤褐色を呈しているところが認められる。 119は口径14cmを測るもので、口縁端部外側に幅の狭い口縁帯が刷毛ナデ調整によって作られている。体部内面は一部刷毛目を残すところもあるが、平滑に磨きが施されている。色調は淡赤褐色を呈し、二次的加熱による赤変と見られる。胎土には微砂粒が見えるものの、大きな砂粒は含んではいない。 120は「く」の字状口縁の甕で口縁端部の内面が肥厚するタイプである。体部は球形をなすものと想定され、全形をうかがえる資料の出土はなく埋谷出土の土器の中では小数例にとどまり、口縁部片 3片の検出にすぎない。口径16.6cmを測り、淡黄褐色をなし、胎土に含まれる微砂粒は均一にととのえられている。調整は横ナデがなされ、器壁は薄く、器表面はととのえられている。 121は口径約13cmを測る有段口縁をもつ壷かと思われる。口縁部の幅は狭く、内面に明瞭な段が形成される。頸部はゆるやかに屈曲して、体部につながる。摩耗が進行しているために、微妙な調整の具合は掴めないものの全体がナデ調整でととのえられているようだ。濁黄褐色をなし、胎土に微砂粒は含むものの大きな砂粒は認められない。

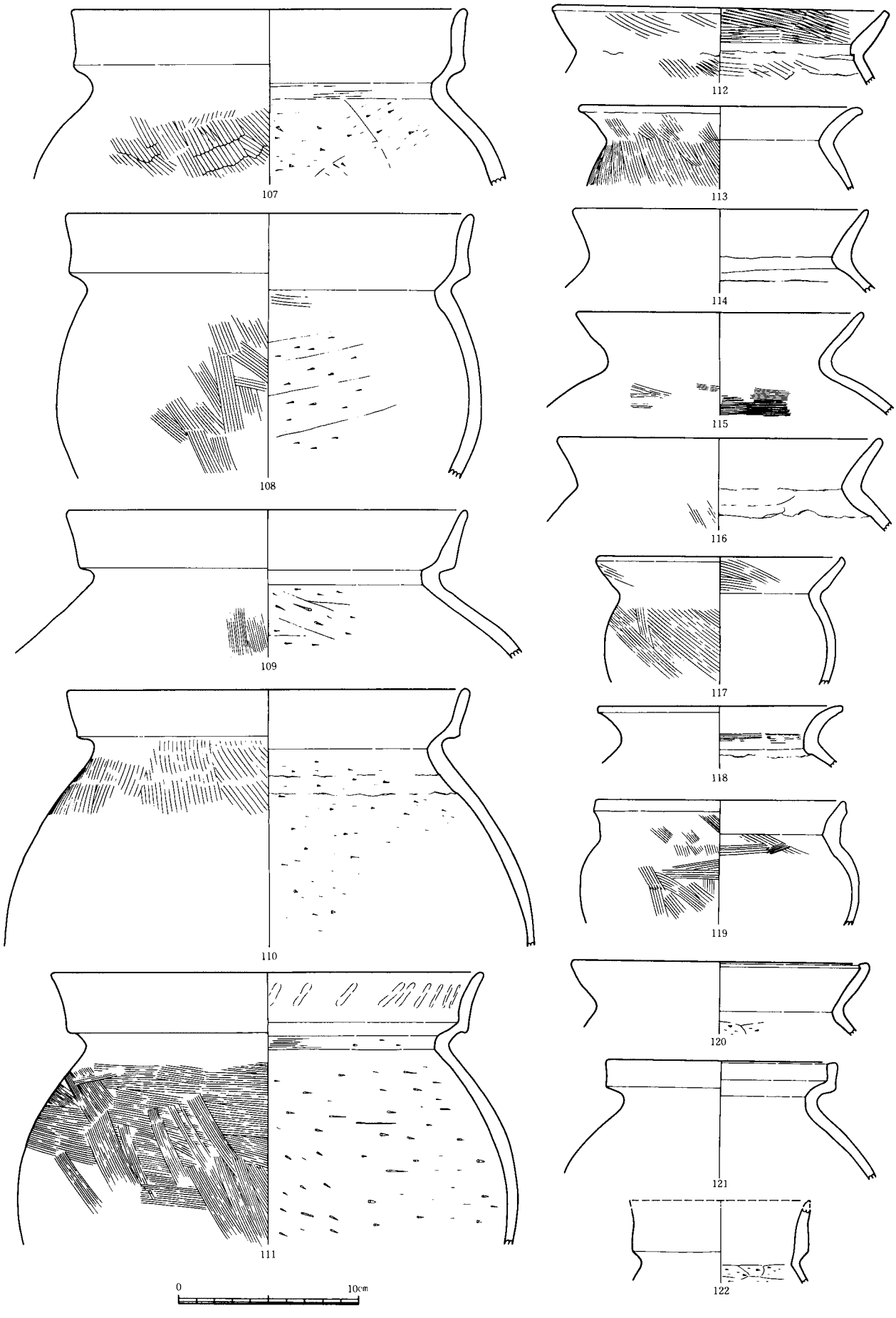
123～ 136は壷器形をとるものであるが、大小や有段口縁の形状によって分類することができる。 123は谷地



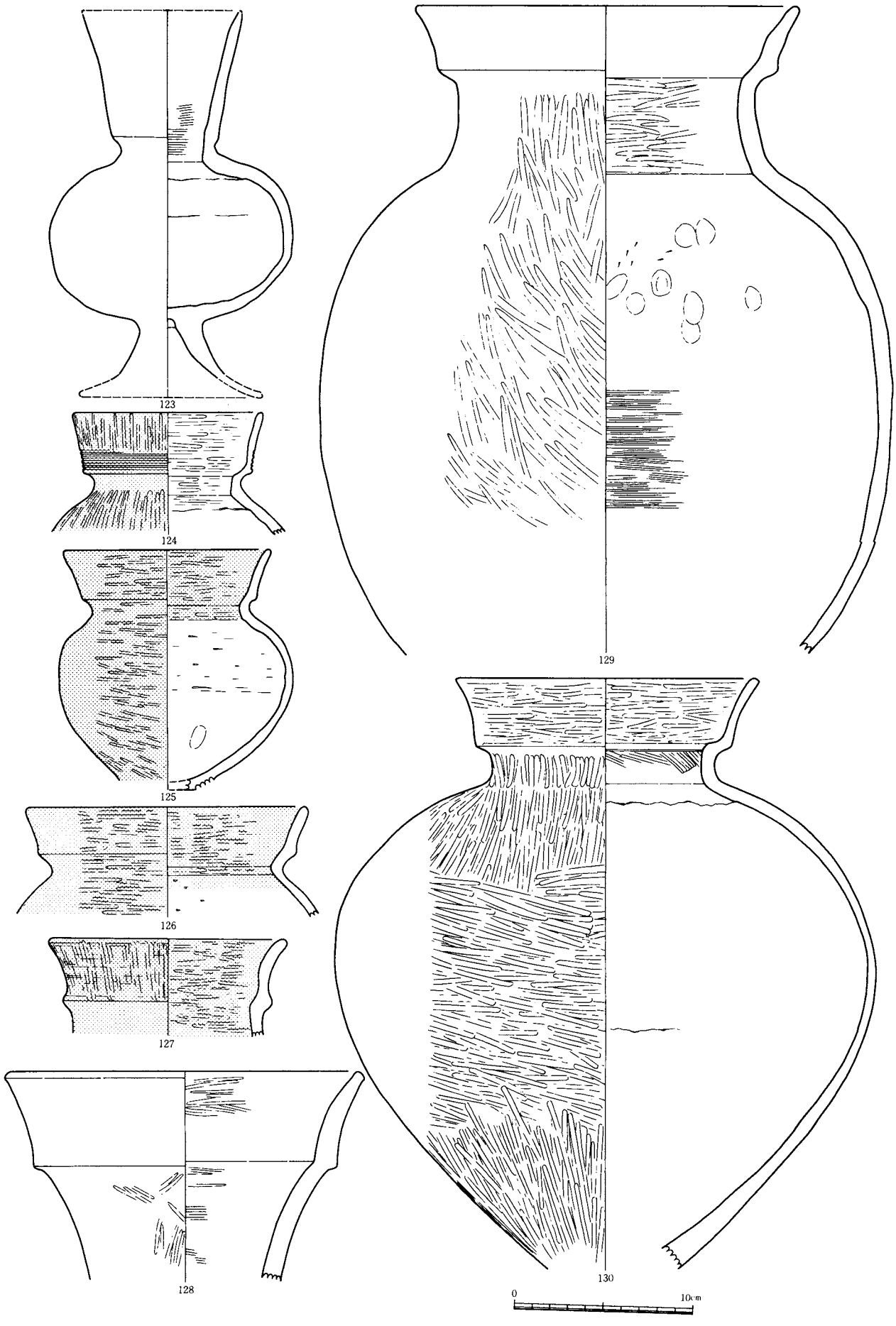
第24図　西地区埋谷出土土器(3)(1/3)



第25図　西地区埋谷出土土器(4)(1/3)



第26図　西地区埋谷出土土器(5)(1/3)

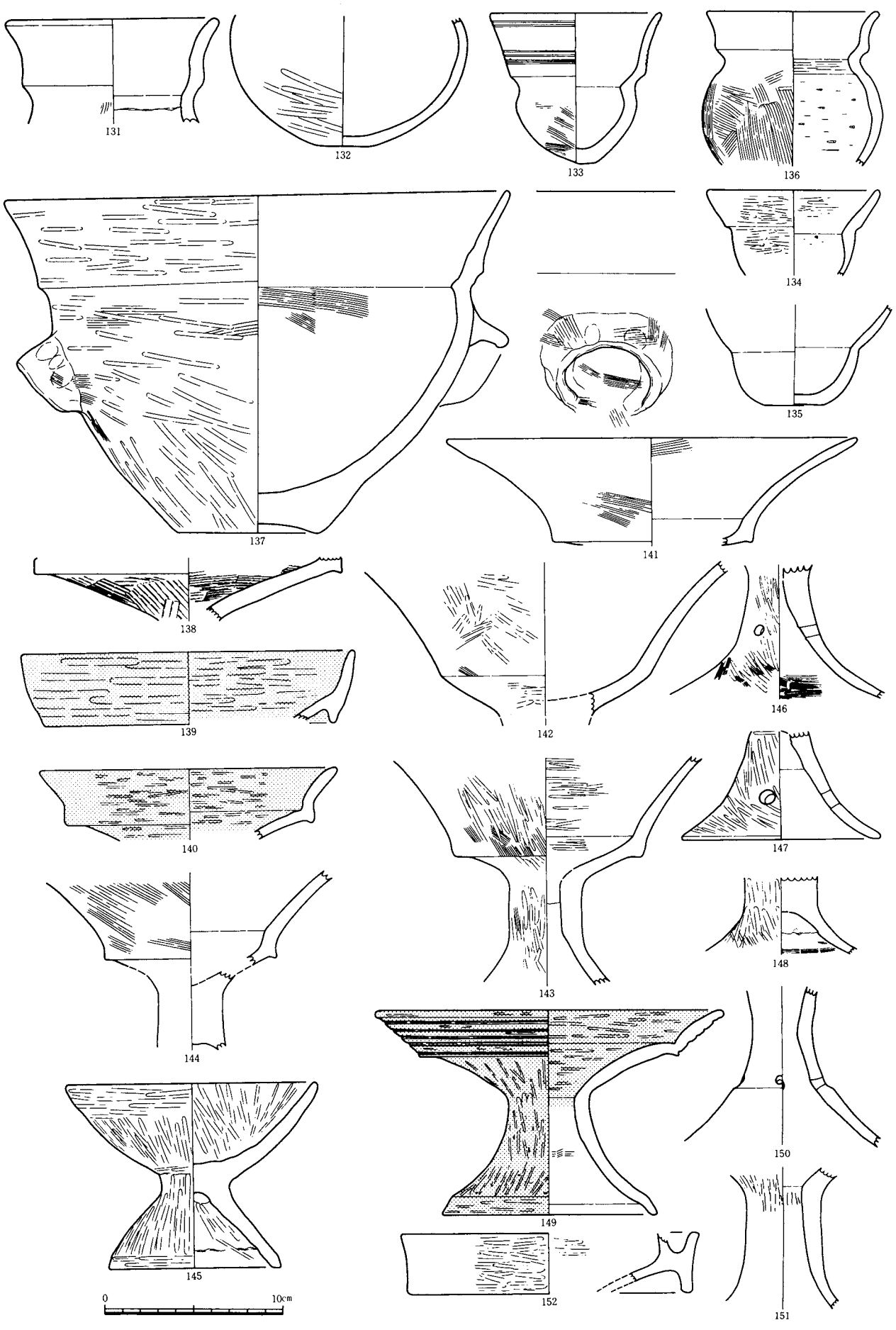


第27図　西地区埋谷出土土器(6)(1/3)

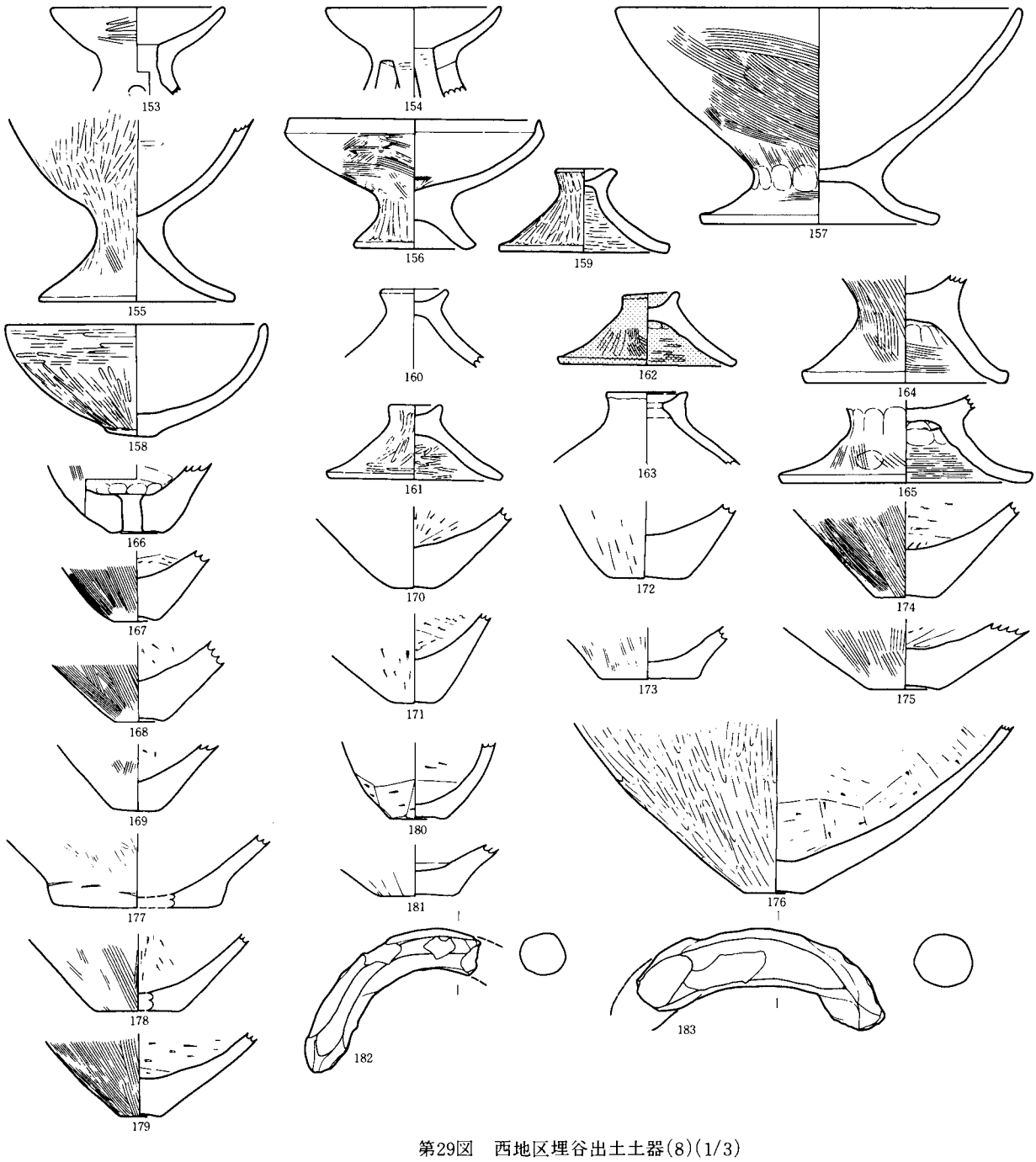
の最下層からほぼ原型を保ったままで出土した台付長頸壷（装飾壷）であるが、摩耗が全体に著しく進行していて調整痕は判別しがたい。口径 9cm、口縁部の高さ 8cm、体部の最大径13.8cm、推定の器高21.5cmを測る。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は精選されている。 124は赤彩が施されていたと想定されるもので、 123と異なり全体にシャープな作りとなっていると言える。長めの口縁部の下端に擬凹線が巡らされている以外は、ヘラミガキが入念に入れられている。 125は口径11.8cm、現器高13.3cmを測るもので、欠損している台部を除いて復元することができた。口縁部内面を含めて赤彩が施されているものと想定したが胴部下半には赤彩痕が薄く行われなかった可能性も考えられる。 126は口径15.8cmを測り、 125と同じ台付になるものと推定できるものである。赤彩は底部近くの断片にも見られ、全体に施されていたことは確実である。前者には胎土に微砂粒もなく精選されていたが、後者には微砂粒が混和されているものの、甕器形に通有に含まれている量ほど多くはない。両者ともに色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。 127・ 131は同じ器形を持つ壷の口縁部で、口径12・13.4cmを測る。127の内面は横方向のヘラミガキ、外周は丁寧な刷毛ナデ調整のあとに、やや間隔をおいて縦方向のヘラミガキを行っている。 131の場合は内外面ともに刷毛ナデ調整でとめられている。 128は口径20.4cm、現器高約12cmを測る大型壷の口縁部片である。外周はヘラの方向もつかめないほど平滑に磨かれ、一方の内面は刷毛ナデが入念に施されている。 129は口径21.6cm、胴部最大径32.4cm、現器高35.8cmを測る大型品である。口縁部は横の刷毛ナデ調整で一部に赤彩の痕跡を認めることができる。頸部以下は縦方向のヘラミガキがなされていて、比較的平滑に仕上げられている。体部は全体に刷毛目調整が行われたものと想像される。底部近くは縦方向、胴部中央は横方向での痕跡を見ることができるものの、頸部から上はナデ調整によって消されている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土への砂粒の混入は比較的少ないようだ。焼成は良好と見られ、遺存状態は良いほうである。 139は口径17.2cm、胴部最大径30.6cm、現器高33cmを測る。口縁部の一部に赤彩痕を見ることができる。外周は全面的にヘラミガキが施され平滑な調子に仕上げられていて、有段口縁部もシャープに調整されている。しかし、口縁内面の調整は幾分粗雑な印象を受ける。胴部内面は全面ナデ調整がなされていて、比較的平滑におさめられている。胎土は精選されていて、砂粒をほとんど認めることができない。

132は底径 3cm、胴部最大径13.5cmを測る小型の壷かと想定されるものである。一部に赤彩の痕跡を見ることができる。 133は口径 9.6cm、器高 8.4cmを測るもので、ほぼ復元することができたものの、風化が著しく進行しているために、調整はほとんど不明である。長い口縁部に擬凹線を図示したが、横ナデの痕跡と見ることも可能である。胎土には微砂粒が多く混和されている。 134は口径 9.8cmを測り、 135と共に小型の鉢と考えられるもので、胎土は精選され焼成も良好である。 135は風化が進行していて器表面は全て剥落している。胎土には微砂粒が混和されている。 136は口縁が外展して伸びる小型の甕に想定される。 137は大型の鉢器形の土器で、体部中央に一対の把手が付けられているもので、本遺跡では小数例の器形である。口径28.6cm、器高18.8cm、底径8cmを測る。有段口縁はほとんど形骸化していて、頸部をわずかに括れさせる程度で口縁部下端に若干の粘土を足しているばかりである。器表面全体を刷毛で調整し、ヘラで磨き上げていく。半円形の把手は上端で径 5cm、下場 7.4cm、高さ 2.7cmを測る。把手がどの段階で付けられたか判然とはとらえがたいが、ヘラ調整が行われる前かと想定される。内面は摩耗が進行しているために、その調整はとらえ難い。底部は刷毛で調整された凹み底になっているもので、本遺跡ではきわめて小数である。胎土に砂粒が多く含まれているものの器表面ではほとんど目立たない。色調は全体的に淡黄褐色をなし、二次的加熱による変色は認めがたい。

141～157 は高坏、装飾器台、器台であるが、全形を窺える資料は小数にとどまる。 138は口縁部分を接合したところで欠損しているもので、内面は磨きが入れられているが、外周は粗い刷毛調整で終えている。 139は口径19cmをはかるもので、内外面ともに赤彩が施されている。器台になるのであろうか。 140も全体に赤彩がなされているもので、口縁部下端を強く押さえて突出するようにしている。ともに、胎土には砂粒は少なく、精選されている。 141・ 142は高杯かと推定できるもので、短い体部と長く伸びる口縁部の境界が大きく異なっているのが特徴的である。 142ではわずかに稜線がとらえられる程度となっている。胎土の具合も違っていて、前者は精選されていて微砂粒も認め難いものの、後者には精選されているものの多くの微砂粒が混和している。器壁の



第28図　西地区埋谷出土土器(7)(1/3)



第29図　西地区埋谷出土土器(8)(1/3)

厚みも違うようだ。 143・ 144はいずれも受部と脚柱部の接合が適わなかったもので、図上で復元した。外周の調整は刷毛ナデというよりは目の細かい櫛によるものと見られ、その後に磨きが施されている。内面は入念な磨きがなされている。 144は刷毛調整である。色調はともに暗黄褐色を呈し胎土は精選されている。 145は口径14.6cm、脚部径 9.7cm、器高10.2cmを測るもので、完形に復元することができた。受部は屈曲のない皿状をなし内面は入念に磨きが施されている。受部外周および脚部はやや粗いヘラミガキがなされているが、それぞれの在り方が違っているところから、別々に作られたものと想像できる。脚部の接地面には平坦な面取りが行われている。器壁は全体に厚手の作りで、器表面には全く砂粒を見ることは出来ない。 146～ 148は高杯の脚部片に推定したもので、前二者には三孔の穿孔がなされている。 149は口径20cm、脚部径12cm、器高11.4cmを測る、復元することの出来た有段口縁と有段の脚部をつける器台である。受部内面および外周全体に赤彩が施されている。口縁に巡らされている擬凹線はほとんど消失しかかっているものである。 150・ 151は器台型土器の脚部に想定し

たものであるが、前者は高杯の可能性がある。摩耗が著しく有段になる部分についてはさらに高まりをつけるものかと推定できる。なお、脚部の穿孔は四個である。

153・154は小型器台の口縁部片である。153の口径は 8.4cmを測り、受部は丁寧に磨きがかけられている。胎土は精選され砂粒は極めて少ない。154は口径 8.4cmを測り、前者に比較して受部に深みのあるタイプである。脚部への穿孔はやや不安があるものの、方形の窓と推定した。荒れているが、器表面は丁寧に磨かれていたようだ。155～157は高杯器形には含めがたい特異な器形を示している。155は体部の内外面ともに磨きがかけられている。脚部の径は 9.4cmを測る。156は復元することが出来たもので、口径12cm、器高 6.2cmを測る。口縁端部が尖り気味に立ち上がるのが特色である。内外面ともに刷毛ナデ調整でとどめられていて、磨きはなされてはいないように思われる。淡褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混じる。157はボール状になる鉢器形に台が付いたもので、復元することができた。口縁径19.2cm、台部径11cm、器高10.2cmを測る。外周は目の細かい刷毛調整で整えられ、台部は横ナデがなされている。内面は荒れているために調整は不明である。胎土には砂粒が多く含まれ、甕型土器の胎土に近いといえる。色調で見ると、体部は暗褐色から淡黒褐色を呈し、台部は高杯、壷器形と同じ淡黄褐色をなしている。158は椀型土器で、復元完形となった。口径12.4cm、器高 5.7cmを測る。底部は平坦ではなく瘤状に作り出されていて径 2.3cmを測る。外周は縦方向の刷毛調整で瘤状底部に集まるようになっている。内面は荒れていて調整は不明である。胎土には微砂粒が多く含まれている。

159～163は蓋型土器で、小型のものが多い。159は径 8.2cm、器高 4cmを測る。器表はつまみ部に向けてヘラミガキが施されている。内面は横方向のヘラが使われている。162は全体に赤彩が施されている。163はつまみ部に径 1.6cmの穿孔がなされている。いずれの蓋型土器も胎土は比較的精選されていて、焼成も良好である。167～181は様々なタイプの底部片である。安定した平底をなすものは少なく、比較的尖り底に近い形状を示していると考えることができる。

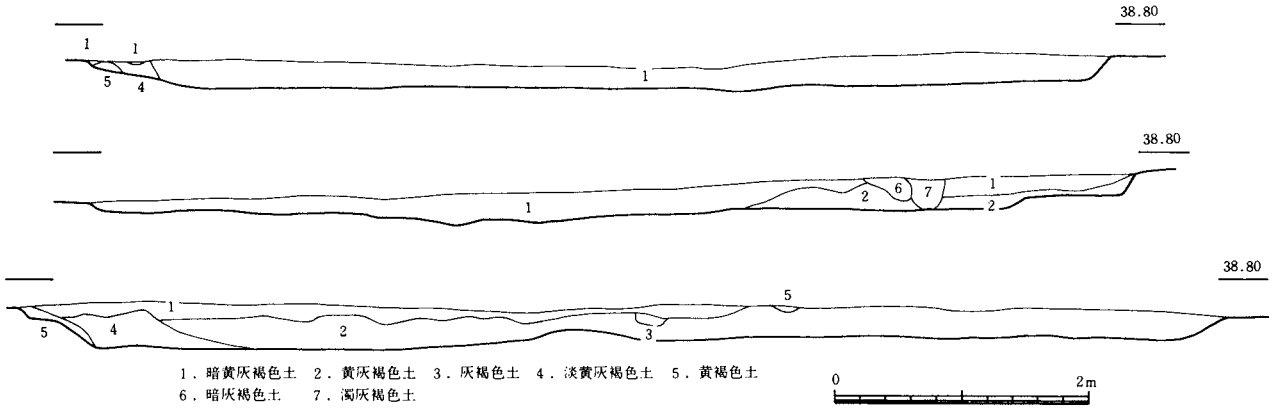
182・183は把手の断片で、付けられていた土器を特定することは出来なかった。

4 不明落ち込みおよび谷地（第30・31図）

遺構 第30号住居址の東隣70cmの距離をおいて、ほぼ住居址の平面プランと規模をもつ落ち込みが検出された。主要部分は南北方向 700cm、東西方向 810cmを測り、北東隅に長楕円形プランの落ち込みが切り込んでいる。主軸をほぼ東西方向に置き、長軸約 620cm、短軸約 360cmを測る。いずれの落ち込みも、住居址の覆土とは異なり新鮮な印象を受けるものであった。大部分の覆土は細かくなった地山ブロックを含む暗黄灰褐色土であった。落ち込みの立ち上がり部分では、細かく分層できる灰褐色土、黄褐色土、暗黄褐色土が堆積している。覆土には遺物や炭化物の出土はなく、また、床面は平坦ではなく踏み締めたような地点もピットも観察できなかった。長楕円形プランの落ち込みにおいても、ほぼ同じような状況を示しており、いずれも古墳時代、中世の遺構とは考え難いものと思われる。畑の耕作に伴うものであろう。

第一平坦面と第二平坦面との境界は比高差約 3mにもなる谷がはいりこんでいて、地境ともなる小道が等高線に沿うような形で南北方向に伸びている。この谷地形には縄文時代以前の黒色土が厚く堆積している。この黒色土の上層にあたる暗褐色を呈する粘性が比較的弱い土のなかから、古墳時代の遺物が出土しているので、この項でまとめておきたい。遺物の出土は第一平坦面の傾斜がゆるくなる地点および谷地形が最も深くなる地点に、散発的な状態で出土したもので、明確な遺構をつかむことは出来なかった。

遺物 185は口径22.6cmを測る大形の甕である。口縁部の擬凹線は刷毛ナデ調整に近く、凹線のくぼみはほとんど消失したような状態となっている。口縁内面の段の部分は、指で押さえたような調整が施され口縁内面中央部に稜線が形成されている。口縁内面の上端には、細長い指頭圧痕が見られるものの圧痕の調子は弱いものである。色調は茶褐色を呈し、体部下半に炭化物が付着している。187は口径20cmを測るもので、口縁部は弯曲していて、内面の下半には刷毛ナデが入れられているもので、口縁内面の調整を二段にする数少ない例と言える。胎土には砂粒の混和がほとんど認められない。189は口径18.2cmを測るもので、口縁部の内外面ともに櫛状工具に



第30図　方形落ち込み土層断面図(1/60)

184
186
187
188
189
190
185
191
192
193
194
195
196
197
0
10cm

第31図　西地区谷地出土土器(1/3)

よる調整がなされた後横ナデが加えられている。肩部の内面の調整はヘラケズリではなく、横ナデに近い状態で調整されていて、胎土に含まれている砂粒の移動は認められない。 190は口唇部分がつまみあげたような形で尖るもので、本遺跡では比較的類例の少ない器形である。 191～ 194は高杯でそれぞれ異なる器形をとるようだ。191は口径23cmを測り、鉢状の体部に外反して長く伸び拡がる口縁部が付くもので、内外面とも丁寧に磨きが施されている。 193は胎土に砂粒をほとんど含まないもので、色調は明るい茶褐色を呈している。脚部には三孔が開けられていたものと推定できる。脚部の内面は目の細かい工具で縦方向にナデが入れられ、外周はヘラミガキが施されている。 194の脚部の穿孔は 4個と見なされる。 195は表面に赤彩がなされているもので、脚部になる可能性もあるが、蓋型土器であろう。口径12cmを測る。 196は尖底土器で、やや粗雑ながらヘラミガキがなされていて、甕型土器の底部ではなく小型の角型土器の可能性が高い。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。 197は器表に赤彩が施されている小型器台で、受部の穿孔は脚部の穿孔とほぼ同じ大きさでなされている点に注意しておきたい。胎土は精選されている。

第3節　中地区・古墳時代前期の遺構と遺物

1　第 1～ 3号住居址（第32～40図・図版11・15～19）

遺構　中地区調査区の東北部、第二平坦面から抜き出て、それを見下ろすような瘤状地形の端部に立地している。大きくは 3棟の住居址が最も古い住居址を切り込むようになるもので、その検出グリッドはN97～99・M96～ 100・L96～ 100・K96～ 100グリッドの広い範囲に渡っている。周辺は調査区域外になる北方を除いて傾斜面になるのであるが多数の住居址が取り巻いている。西北西方向では第16号住居址が約 6mの距離に、南西方向では約 5mの距離で第 4号住居址が、南方向約11mの距離で第 6号掘立柱建物が、北東約 8mの距離で第11号住居址が位置していて、通常の住居址が約 7mの方形プランとして考えた場合、隣接して構築する以外には空地が残されていないことを示していると言える。本住居址群で使用されたものと考えられる土器のまとまりは、傾斜面を含めて明確にはとらえられなかったものの、各住居址からは大量の遺物が出土している。

本群の住居址の構築順序は、それぞれに切られている第 1号住居址が最も古くに位置付けられる以外は、切り合う関係を持っていないので、住居址覆土の在り方から想定した。つまり、第 1号から第 3号、そして、第 2号へ移ったものと理解される。その中で、第 1号住居址で 2回の増築があり、第 3号住居址でも 2回の拡張が認められるが、第 2号住居址では改築の状況はとらえられない。これらの流れのなかで、第 2号住居址と第 3号住居址が並行して存在したのか、前後の関係があるのかどうかが大きな問題点となる。

遺物の出土状態を見ると、傾斜面上に位置している事から覆土、包含層の層厚の差を反映した形となっている。覆土が最も厚くなる第 1号住居址の北側壁に面している地点での出土が目立ち、第 3号住居址の覆土がそれに次ぐ。第 2号住居址ではやはり北側の地点での出土が若干目立つ程度で、南側の比較的覆土の厚い地点においてもほとんど包含していなかった。

第 1号住居址は平面円形プランを呈するもので、北側の壁と南側の周溝の一部が確認された。推定径約1250cmを測り、本遺跡のなかでは東地区で検出した第23号住居址に並ぶ規模を持っている。壁近くの覆土は暗茶褐色土でなり、壁に近い程炭化物の量が多くなる地点と地山ブロックの粒子が増大する地点とが認められた。壁溝の覆土は淡黒褐色土である。壁の立ち上がりは急激で、北東部分で70cm、第 2号住居址が切り込んでいる北西部分では50cmを測る。壁溝は全周していたものと推定され、若干の間隔をおいて 3条が掘り込まれている。壁際の壁溝が最も遺存状態が良く、溝幅15～17cm、深さ10cmを測る。内側の溝は幅44～70cm、深さ 6～12cmを測り、やや不規則な形で径15～30cm、深さ10cm前後のピットが掘り込まれている。この壁溝は 2条分が一つになったもので、東隅の一部でそれがとらえられた。床面が良好に遺存していたのは、第 2・ 3号住居址に挟まれた細長い部分である。固く踏み締められていて、移植ゴテではほとんど刃が立たないようになるところがみられたが、壁溝近くの周辺部は比較的軟質であった。床面には点々と加熱によって赤変した所が見られた。主柱穴は各住居址が錯綜している為に、十分にとらえることが出来なかった。P 1は平面楕円形を呈し径70×90cm、深さ70cm（標高 40.14m）を測る二段掘りである。P2 とP3 は立て替えに伴って移動した柱穴と推定したもので、標高40.2m、40.17mを測る。P1 とP3 の心々間の距離は 550cm、P 3とP 4の距離は 530cm、P 4とP 5の距離は 500cmを測る。P 5は径約70cm、深さ68・78cm（標高 39.41m）を測るものであるが、壁に極めて接近しているところから、第 3号住居址に伴う可能性が強いようだ。複合している可能性を考えてP 5を生かしていく。P 5とP 6の間隔は 350cm、P 6とP 7の間隔は 370cm、P 7とP 1の間隔は 330cmをそれぞれ測るが、P1 ～P2 ・P3 ～P4 ・P4 ～P5 の間は中間の柱穴が必要と考えられ、P 3・ 4の間のピットを生かすべきかもしれない。いずれにしても、北東部分での柱穴がとらえきれていない点が反省される。

第 2号住居址は平面プラン方形を呈するもので、隅の角度が他の住居址と比較して強くなっている点が注意される。規模は南北方向で 620cm、東西方向で 642cmを測り、長軸方位を北64度東に置く。第 3号住居址までの距離は 140cmを測るにとどまり、主軸方位においても平行しているところから、両者が一定程度並存していた可能性も考えることができる。壁は直に近く掘り込まれていて、北隅の壁が最も高く62cm、西隅で30cm、第 1号住居

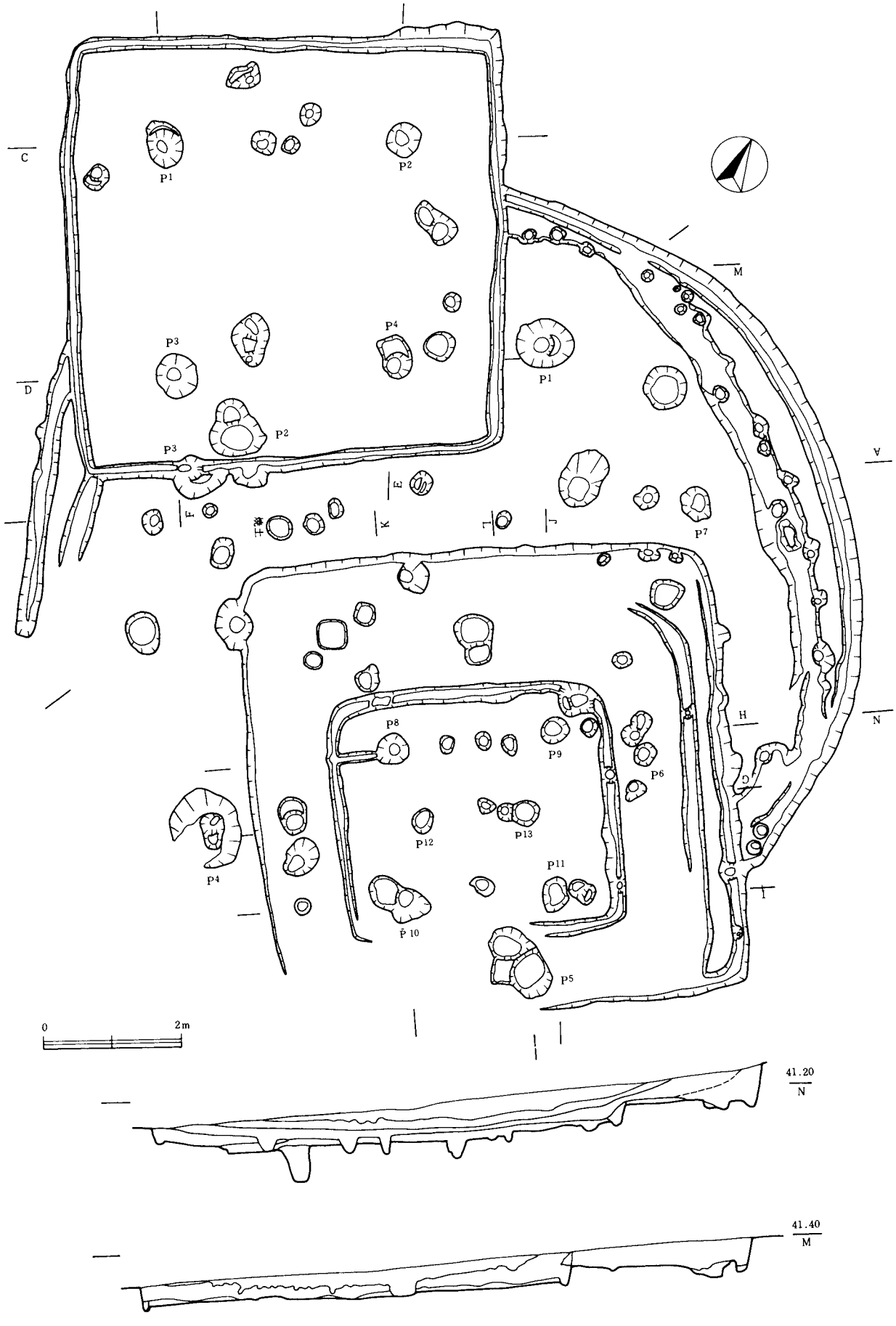
址の床面を切り込む南側では25cmを測る。覆土はおおまかに 3層に分層され、上層の黒褐色土は遺物を全く含まないもので住居址の中央部分にレンズ状に沈み込んでいる。放置された後、長い時間を経て堆積したものなのであろう。覆土の過半は茶褐色土で、遺物を含んでいる層である。床面近くには軟質の黄褐色土が薄く堆積している。床面は平坦ではなく凹凸がみられ、南半では低くなっているもので、床面そのものも比較的固められていないもので、中央部分が窪むような状態となっていて北隅との差は18cmにも及ぶ。床面では焼土をとらえることが出来なかった。壁溝は一定の幅を保ち全周しているもので、その幅は12～13cm、深さ 8～10cmを測る。断面は底が尖り気味のUの字状をなし、地点によってはV字状となるところも見られた。柱穴は 4個が認められた。平面形は円形を呈するものが多い。P 1～ 4の径と深さは62×50cm・50cm、48×48cm・63cm、63×58cm・40cm、40×40cm・47cmを測り、P 1～P 2の心々間は 350cm、P 3～P 4の距離は 320cm、P 1～P 3の距離は 335cm、P 2～P 4のそれは 330cmを測る。柱穴と壁溝の間隔は、その立ち上がり地点で約 100cmに揃えられている。

第 3号住居址は外側の広くなっている所で 1回の改築が見られ、内側に小型の住居址が主軸を平行させた形で遺存していたもので、内側の住居址を第 3－B号住居址として区別していきたい。

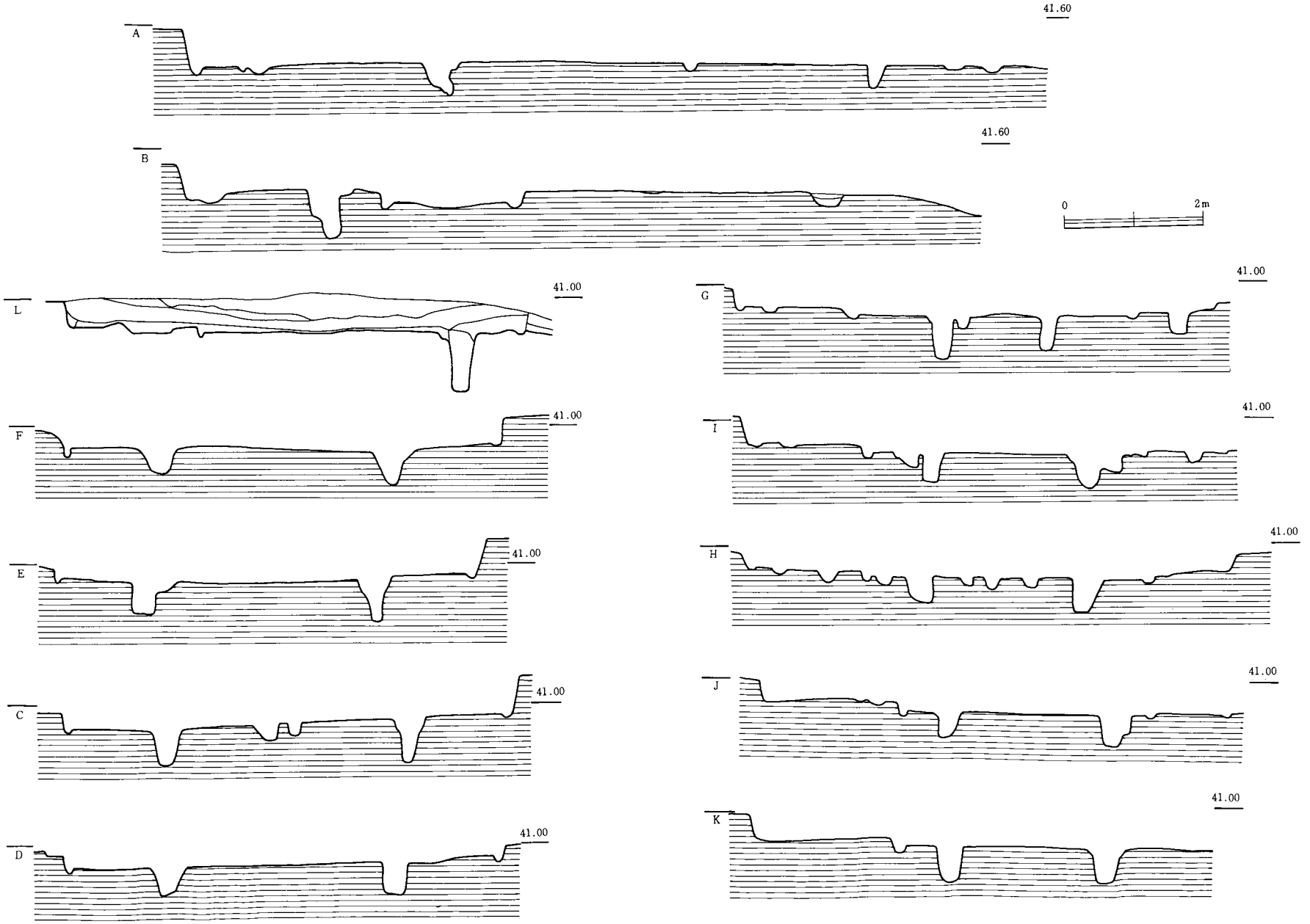
第 3号住居址は平面プラン隅円方形を呈しているが、第 2号住居址と同じように比較的コーナーの立ったものである。東西方向で 700cm、南北方向で 680cmの規模を測り、長軸方位は第 2号住居址と同じで、北64度東に置いている。覆土の状況で見ると、上層には遺物を含んでいない黒褐色土が中央部分で35cmの厚さでレンズ状に堆積している。これは、第 2号住居址の状況と相似している。 2・ 3層目は10～25cmの厚さをもって、茶褐色土、炭化物を含んだ暗茶褐色土が堆積していて、共に遺物を包含していた。 3層目には木根によるところの攪乱が多く認められた。床面を形成しているのは、第 3－B号住居址を埋めている黄褐色土で、炭化物・地山ブロックを多く含むもので硬質であった。このために第 3－B号住居址からの出土遺物はごく限られ、細片になっている。北側の立ち上がりは第 1号住居址の床面で30～36cmの落差をもっているが、南隅の地区は傾斜面に当るところから確定することができなかった。壁溝は東側の辺に沿う位置でのみ確認された。幅10～14cm、深さ 5～ 7cmの断面U字形をなし、20～30cmの間隔を置いて 2条目がある。壁溝の間隔は北西部分が狭く、南東に行くに従い広くなり、前段階の住居址が若干方向が異なっていたものと推定される。内側の壁溝は幅が広く平坦で、20～24cm、深さ 8cmを測る。床面は平坦ではなく、北隅が高く中央付近から傾斜を強めていく。南辺の中央付近に 2個の大型ピットが接するようにして掘り込まれている。外側と内側の壁溝に対応しているようだ。外側のピットは径60×60cmの円形を呈し、壁は内側を抉り込むようにして掘り込まれ、底面は平坦である。深さ70cm、底面は55×50cmの平面形方形を呈する。覆土は暗黄褐色をなし、炭化物・地山ブロック土を多く含んでいる。内側のピットは平面隅円長方形プランをなし、底面もそれに対応している。43×56cm、深さ77cmを測り、壁は直に近い状態で掘り込まれていて、底面は42×30cmの規模で平坦である。主柱穴は 4本と想定されるものの、壁の立ち上がりまでの距離が約 250cmであり、他の住居址に比較して広いところから、やや不安が残る。P 8（41×41cm・深さ51cm）、P 9（33×40cm・深さ41cm）、P10（37×45cm・深さ49cm）、P11（47×35cm・深さ44cm）を測るが、深さは第 3－B号住居址の床面からの値である。P 9～P10の距離は 195cm、心々間は 230cm、P10～P11の距離は 190cm、心々間は 225cm、P 8～P10の距離は 182cm、心々間は 220cm、P 9～P11の距離は 195cm、心々間は 230cmを測る。

第 3－B号住居址は隅円方形プランを呈し、東西方向の長軸は 418cm、南北方向の短軸は 372cmを測り、主軸方位は第 2・ 3号住居址のそれとほぼ同じである。壁溝は南コーナー付近で欠している以外は検出することができた。断面形は底面が平坦になったU字状を呈し、幅10～16cm、深さ 0～ 8cmを測る。床面は第 3号住居址のそれから10～15cmの深さのところにあり、平坦ではなく凹凸が認められる。主柱穴は 2個と推定され、P12（33×30cm、深さ54cm）とP13（35×40cm、深さ68cm）がそれで、その距離は 120cm、心々間は 150cmを測る。P 8に切り込まれている長さ50cmの溝が掘られていて、壁溝に接続している。間仕切りなどの機能を持つものであろうか。

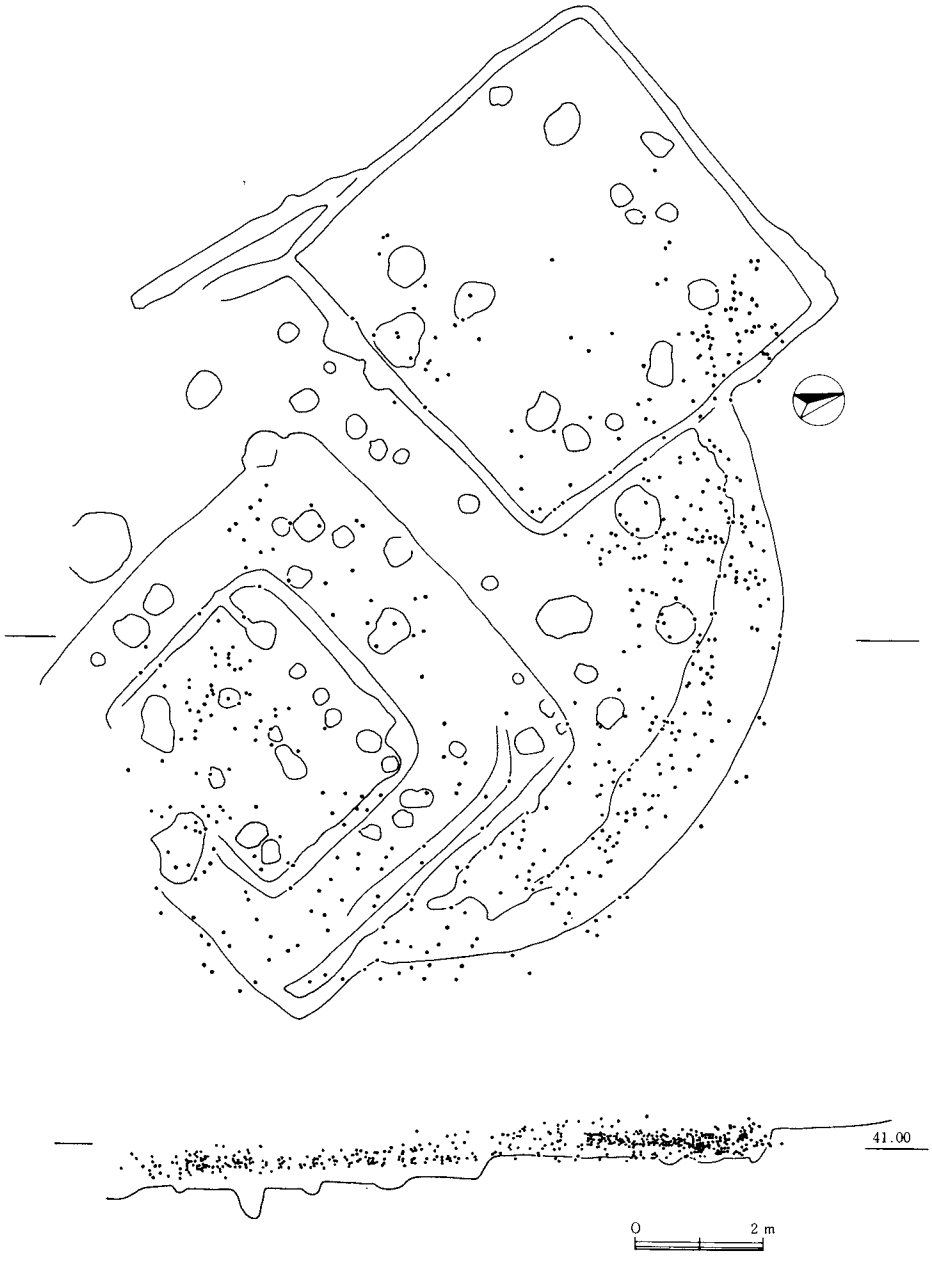
遺物 220～ 261は第 1号住居址から出土したもので、 231・ 242は壁溝内覆土から検出したものである。



第32図　第１～３号住居址(1/80)

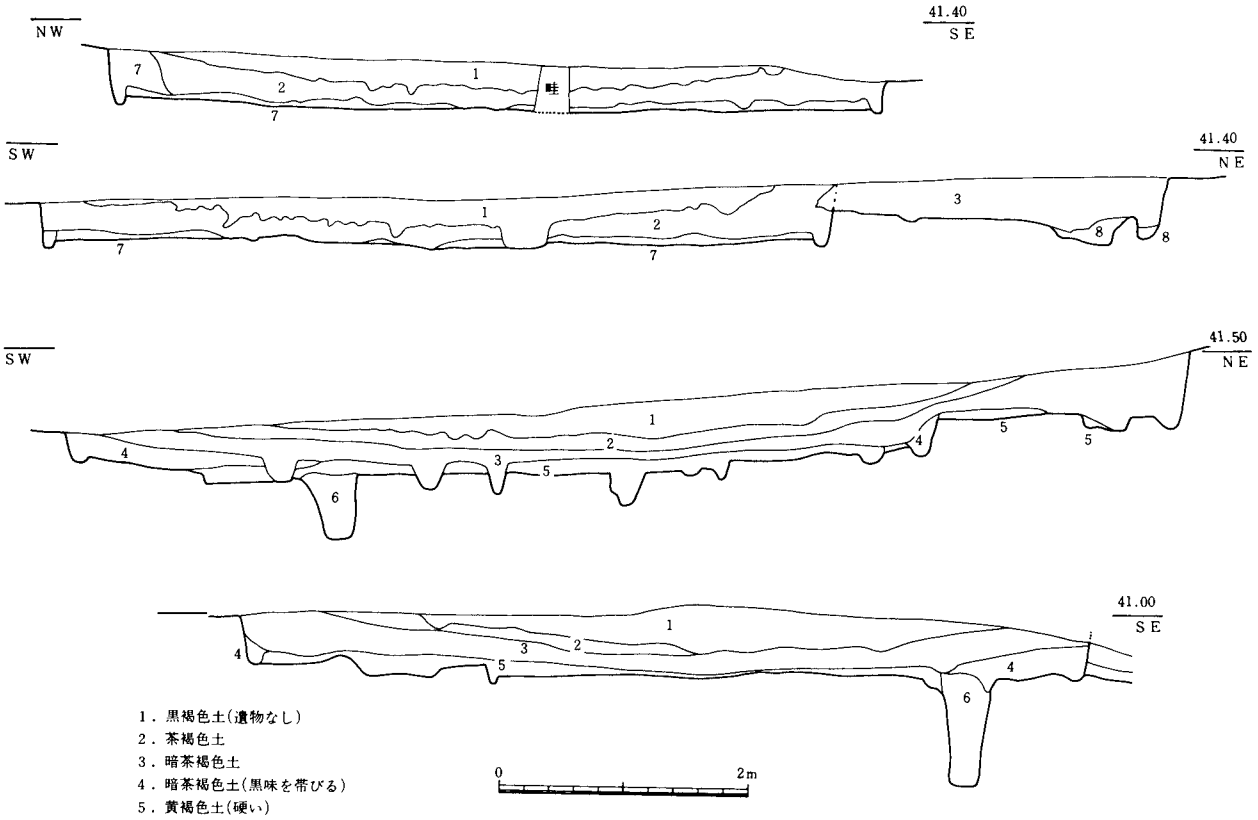


第33図　第１～３号住居址断面図(1/80)



第34図　第１～３号住居址遺物出土状況(1/120)

198は口径18cmを測り、凹線文は比較的深く入れられていたものであるが、摩耗のために細部はつかみきれない。口唇部が肥厚気味になるもので、本遺跡では類例の少ないタイプである。 202は口縁端部が外展するもので、擬凹線は刷毛ナデを強くした程度のものである。ヘラケズリがはいる位置は、頸部の屈折したところからやや下の所から始めているのが注意される。口縁下端の所に炭化物の付着が顕著である。 203の凹線は擬凹線の残りではなく、口縁下端を際立たせるための沈線が両脇に引かれているもので、タイプとしては例の少ないものである。口縁端部は尖り気味に調整されている。 204は台付の壷で、口径16.4cm、器高24.3cm、胴部最大径27.2cm、台部径約12cmを測る。擬凹線は丁寧に巡らされ、体部へは刷毛調整の後ヘラによる磨きがなされていて、器表面は平滑になっている。内面の削りも入念になされている。 205は口径26.8cmを測る大型甕で、11条の擬凹線がはっきりと引かれている。その後に口唇部を外側に出すような調整がなされたもので一番上の凹線が潰れたような形状となっている。 206は内外面ともに摩耗が進行していて調整はほとんどつかめず、擬凹線のない素文の甕になる可能性もある。 207は擬凹線が薄く残っているもので、口縁下端に突帯が巡らされている。突帯の幅は1.2cmを測り、器表面から約 0.5cm程立ち上がっている。外周には炭化物が付着している。 209は口径18.6cmを

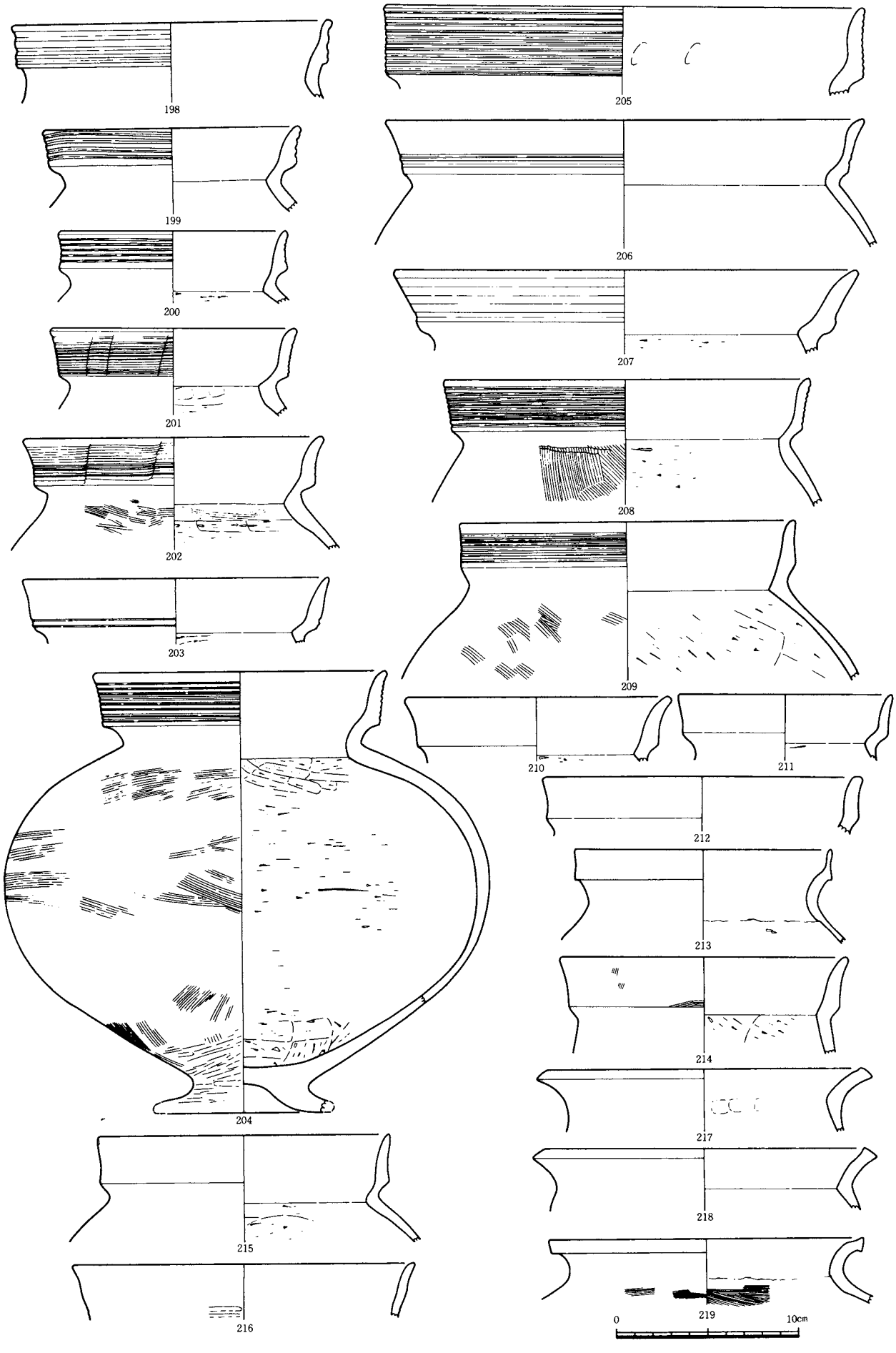


第35図　第１～３号住居址土層断面図(1/60)

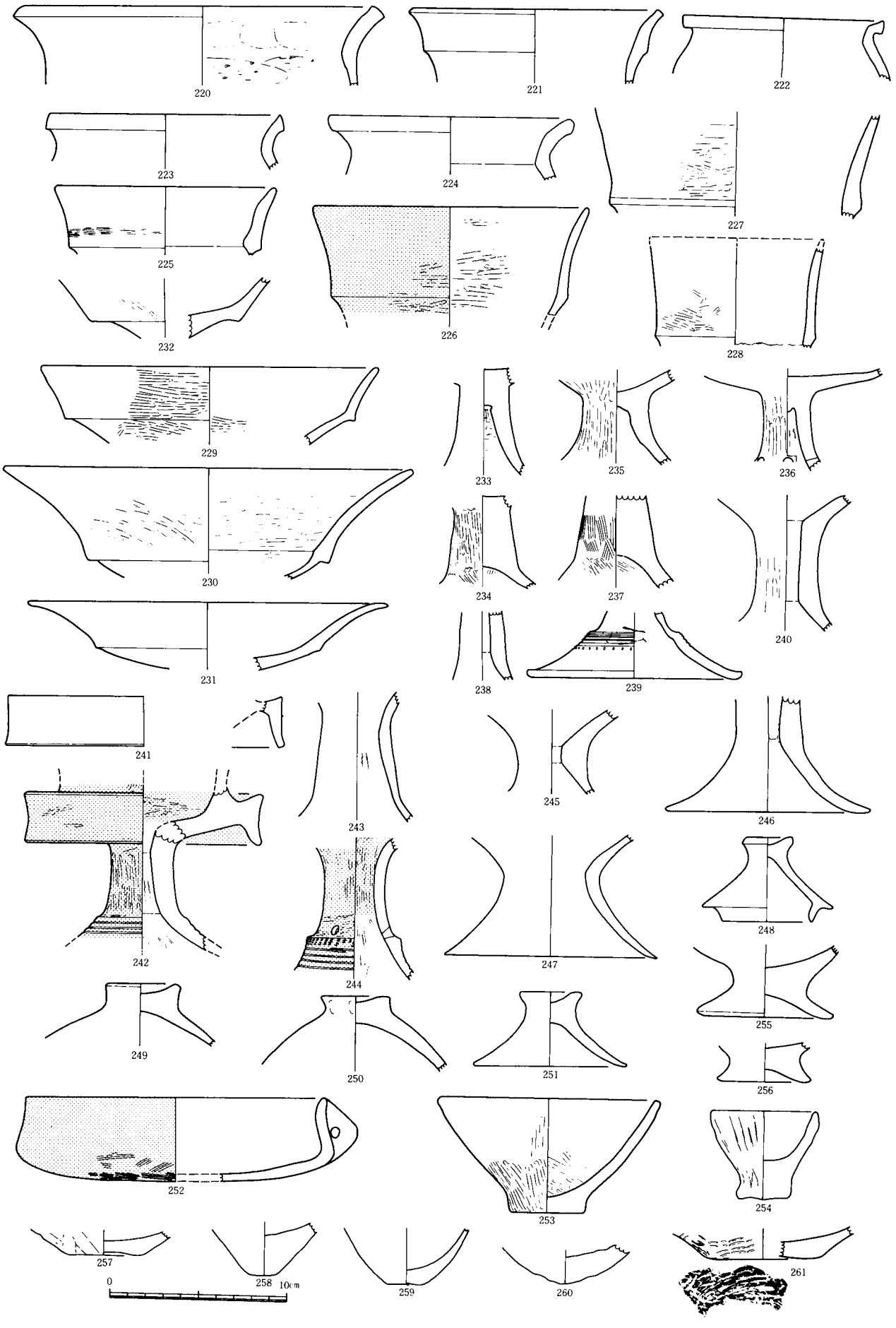
測り、口縁部に擬凹線と断定できないかたちで、刷毛調整痕が見えるものである。口縁の内面には段はなく、「く」の字状となり、内面の立ち上がりが内湾しているようになっている。体部を含めて全体に炭化物が付着している。 210～ 215は有段口縁の素文のものである。 213は口径15.2cmを測るもので、口縁下端が引き出されて突出している。　部はゆるく湾曲して厚みを増している。器壁が薄くなっているのは 215を含めて、摩耗によって器表面が大きく剥落しているためである。 216は口縁下端に擬凹線が引かれているものである。 217・ 218・ 220口唇部に幅広く面取りを施しなおかつ若干肥厚気味におさめているもので、胎土、焼成、調整とも有段口縁の甕と差異は見られない。 219は弯曲して立つ口縁の端部を肥厚させ面取りを施すもので、内外面ともに丁寧に横ナデが行われていて、体部内外面ともに目の細かい工具で横方向の調整がなされている。胎土は微砂粒の混入は少なく精選されているようだ。壷器形をとるのであろう。

222は口径11.2cmの小型のもので、 219を小さくしたような屈曲する口縁を付けている。 221・ 225～ 228は壷器形の口縁部片である。 221は外反する有段口縁をつけるもので、段の部分がわずかに突出する程度である。器表面は剥落していて調整はつかめない。胎土には多量の砂粒を含んでいる。 225は口径12.4cmを測るもので、比較的遺存状態は良好であり、口縁外周を目の細かい工具によって横方向に調整した後に縦方向のナデが施され、さらに横ナデがいれられているようだ。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を混和するが器表面では目立たない。 226は赤彩痕の遺存しているもので、段の稜線は鋭角的に磨き上げられている。内外面ともに平滑にヘラミガキがなされている。胎土は精選されていて、砂粒をほとんど含まない。 228は小型の壷で口径約10cm弱を測る。口縁下端の稜線は 226と同じ様に鋭角的に磨き上げられている。

229～ 247は器台、高杯、装飾器台の断片で、いずれの器形も完形品は得られなかった。 229は口径19.2cmをはかり、体部が外反傾向に持ち上がるところから、器台形土器と想定される。横方向の磨きが顕著である。胎土には微砂粒を多く含んでいる。 230は口縁が大きく伸びて外反するもので、口径23.2cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。壁溝内から出土している 231の体部は平坦に近く、外反する口縁



第36図　第１号住居址出土土器（１）（1/3）



第37図　第１号住居址出土土器（２）（1/3）

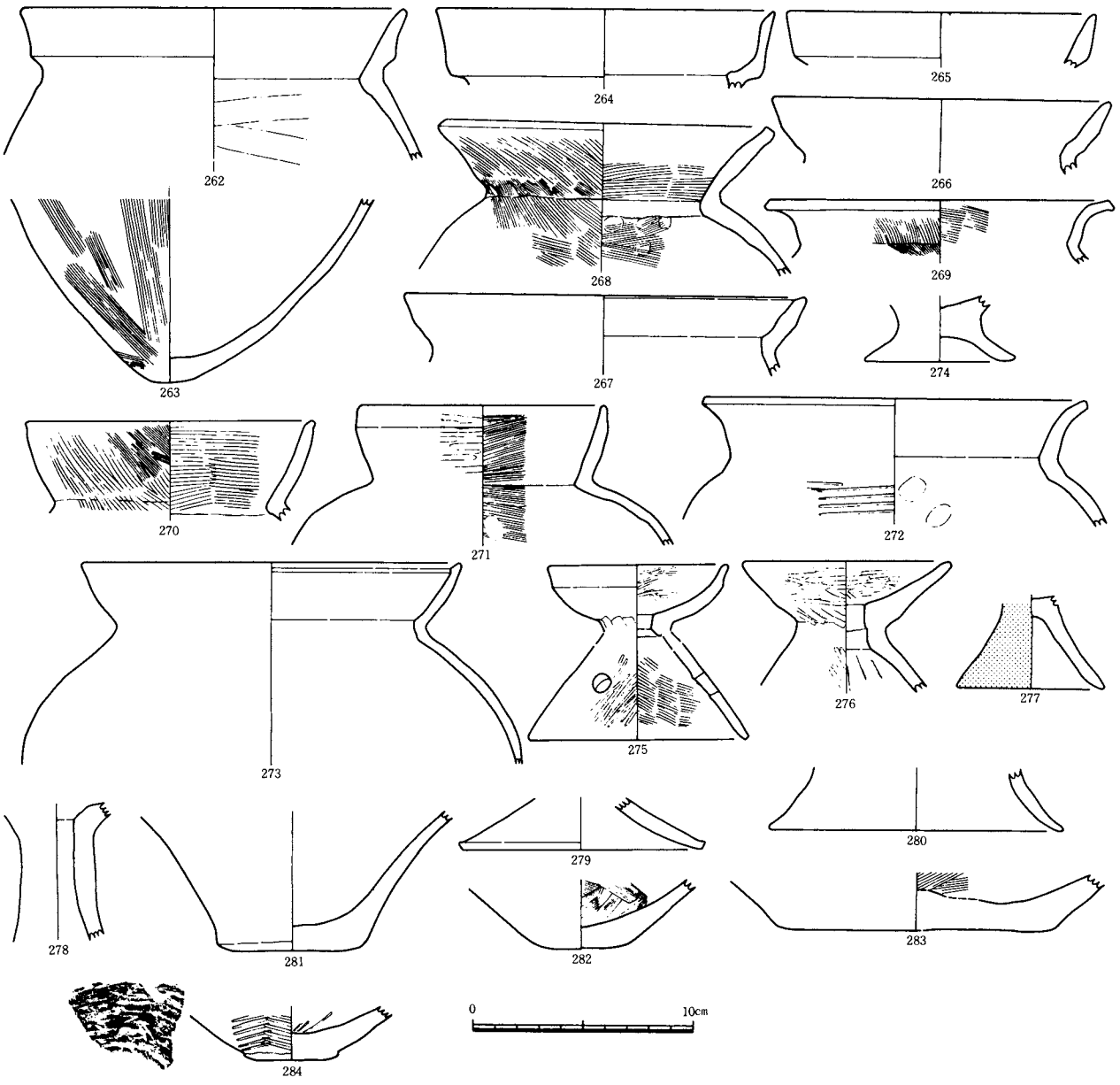
の端部は器壁が薄く調整されていて口唇部が尖り気味となっている。 230に比較して全体に平面的になっていると言える。 235は赤彩が施されていたようだ。 236は小型の高杯で、細い脚部に平盤な受部が付けられている。脚部には図上で 4孔となっているが 3孔となるようである。受部表面は平滑に磨き上げられている。胎土には微砂粒が混和している。 239は脚径12cmを測るもので、擬凹線と刺突列点文が巡るようだが、摩耗の為に子細はつかめない。脚部の端が反り加減になっている点に留意しておきたい。 240は上下が逆になる可能性がある。 242は第 2号住居址の南側に伸びていた周溝から出土した装飾器台である。受部と脚柱部は接合出来なかったのであるが図上で復元した。受部の台の径は13.4cm、脚柱の径は 3.6cmを測る。脚部は有段で擬凹線が 3条引かれている。表面は丁寧にヘラミガキが施されていて平滑になっているものの、脚部の内面の調整は粗雑である。器壁は全体に厚手のつくりとなっている。胎土は極めて良好で微砂粒もほとんど含んでいない。 244は脚柱の内面にも赤彩が施されているところから器台形土器と推定できるものである。全体的にシャープな作りで、器壁の厚さも薄手と言える。有段の脚部には櫛状工具による浅い刺突文とヘラ先による凹線が 4条分見ることができる。ヘラミガキは器表面ばかりではなく、脚柱の内面にまで施されている。脚柱の下端には 3孔が穿たれているが、それぞれの孔の径およびあけ方が少しづつ異なっている。胎土は精選され、焼成は堅緻である。 247は脚径12.2cmを測る薄手に作られた器台である。表面は摩耗が進んでいて調整は不明である。胎土には微砂粒を混和している。

248～ 251は蓋形土器で 3タイプが認められる。 248は返しを付けたもので、最大径 7.4cm、器高 4.7cmを測る。器表面は剝落が進行している。 249・ 250は径 4cm前後のつまみ部をつけているもので、体部は内弯気味に立ち上がっていくことが注意され、比較的大きくなるもののようだ。 251は器高 4.2cm、口径 8.8cmを測る。胎土で見ると、 248・ 251が精選されていると言えるが、他の 2点は砂粒が多量に包含されている。

252は口径17cm、器高 4.8cmの把手を付けた鉢形土器である。底面の一部に赤彩の痕跡が見られる以外は、風化の為に調整はつかめない。小片の為に把手の数についても確定はできない。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を混和している。 253は口径13cm、底径 4.2cm、器高 6.4cmを測るもので、底部はケズリを入れて平坦にしている。器表の底部近くと内面の底面には粗雑な状況のヘラミガキがなされていて、それより上は横ナデがさらに加えられている。内面は比較的平滑と言える。

261は粗雑な叩き調整を施したものと見られる底部片で、底面は角の強くない平底である。

262～284は第2号住居址から出土した土器で、262は住居址の南東ピットの側の床面で検出した一括土器で、264は南壁に複合するＰ3、つまり、第1号住居址の柱穴から得られているものである。268は南東の柱穴Ｐ4の覆土から出土している。他の土器は住居址覆土からの検出である。262・263は同一個体の甕であるが、接合復元することはできなかったもので、口径17.4cmを測り底部は尖底に近い。有段口縁の素文のタイプであるが、段の形成はやや粗雑であり、内面の段は全く消失している。内面の調整は頸部近くでは刷毛ナデが行われている程度に簡略化していて、体部内面のほとんどはナデ調整でとどめられている。体部の器表には厚く炭化物が付着している。色調は濁黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混和している。264・265は小片の為に調整は判然とはしない。266・267は「く」の字状に外傾する口縁部であるが、内外面ともにわずかに段が形成されており、有段口縁甕の形骸化した状態を示しているものとして留意しておきたい。268は口径15.4cmを測るもので、口縁部と体部の接合の具合がはっきりととらえることができるものである。口縁外周の櫛状工具による調整は、体部と接合した後に行われているもので、さらに粗いナデが加えられている。体部内面の調整も同じ順序でなされていて、器面に凹凸が目立つ。淡黄褐色を呈し、胎土・焼成は普通である。269は小片であり、口径の復元にはやや難がある。器壁が比較的薄いことなどから小型土器の可能性がある。270・271は壷型土器に想定できるもので、いずれの口縁部も内側にわずかに内弯気味に立ち上がっていく点が注目される。273の口唇内面肥厚の甕型土器の成型に引き摺られているものと理解できよう。271は口径11.4cmを測るもので、口縁端部で器壁が薄くなり尖り気味に成型されている。器表面は磨きがかけられ平滑になっている。内面は口縁を含めて目の細かい工具でナデが入れられている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土は良好、焼成は堅緻である。272は口縁端部を外展させておさめるもので、口径17.2cmを測る。体部には叩き調整が施され、内面にもそれに見合うような圧痕を認めるものの、小片

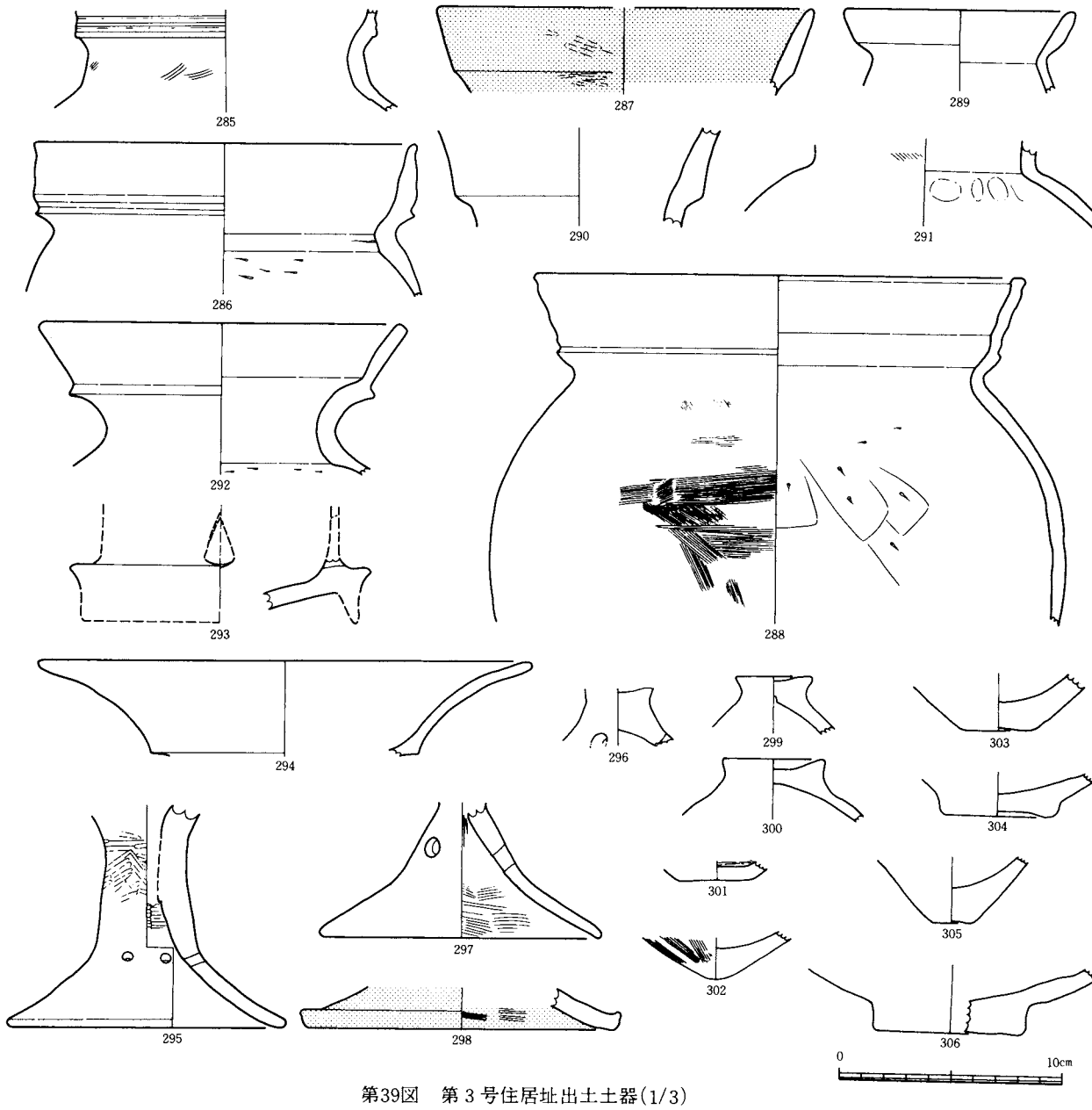


第38図　第２号住居址出土土器(1/3)

である為に確実とは言えない。273は口径17.2cm、胴部最大径22.6cmを測る口縁内面肥厚の甕である。本遺跡においては、小数例の器形に属するものである。内外面ともに器表の剝落が著しく、調整などは全くとらえられない。275・276は小型器台で、前者の口径は8.2cm、脚部径10cm、器高の推定値は7.8cm、後者の口径は9.4cmを測る。前者は図上で復元したもので、口縁端部が内湾気味につまみ上げられて器壁が薄くなり、外周に稜線が現れている。受部内面、口縁の端部および脚部の外周は平滑に磨かれている。後者は厚手の作りで受部内面を除いて調整は粗い。受部の穿孔はともに脚部と接合した後に行われている事が、脚部の内面に粘土がはみでていることから想定できる。胎土で見ると、前者は良好であるものの、後者は砂粒の粒が大きくまた多いと言える。前者の焼成は堅緻である。277は器表に赤彩が施されているもので、蓋型土器のように見えるが受部が剝落した高杯が考えられる。

281は底径8cmの特異な器形を示すもので、底面外周に面取りが施されている。器表は荒れていて調整は不明である。胎土には比較的大粒の砂粒が混和されている。284は叩き調整痕を残している。

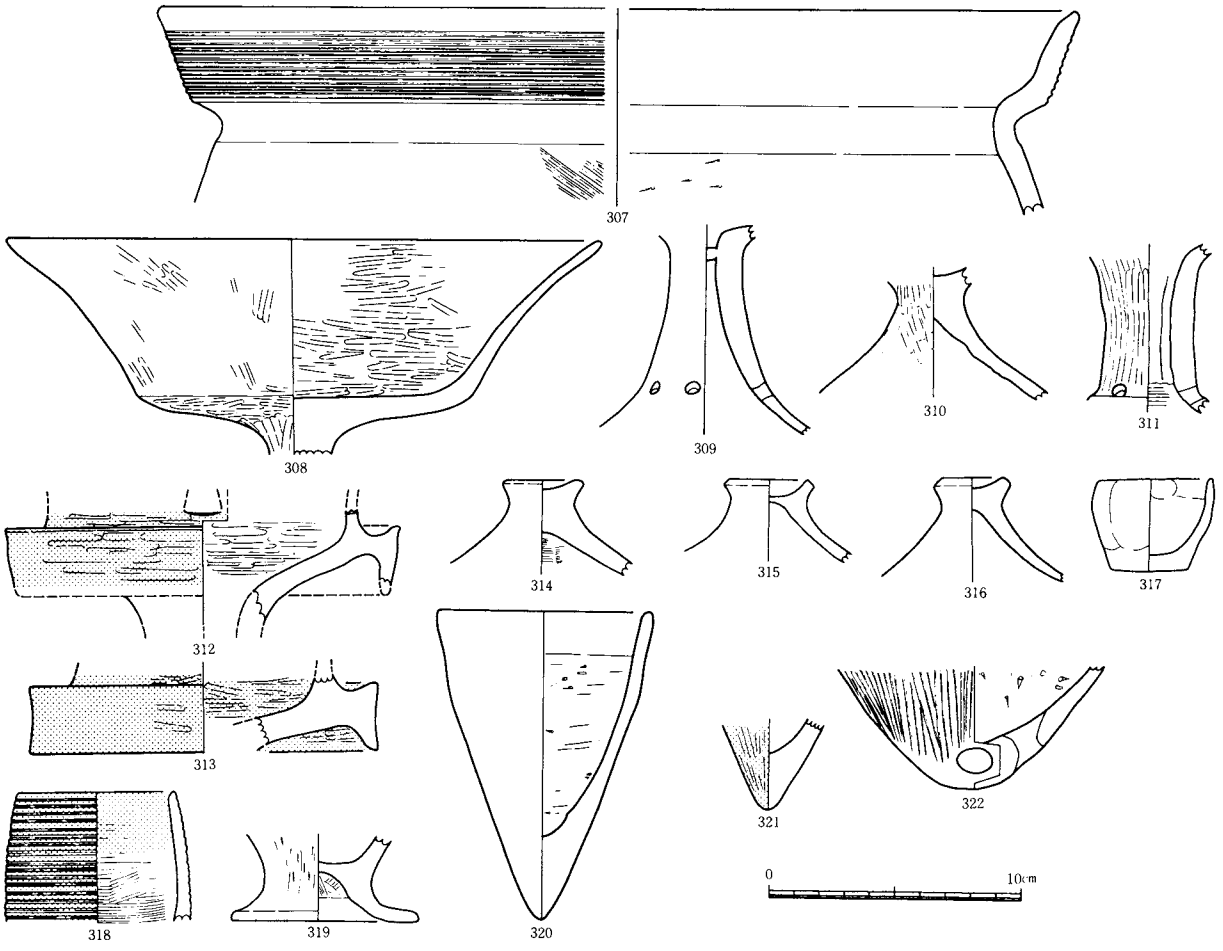
第39図は第3号住居址からの出土土器である。285は頸部がやや間延びした形をしたもので、口縁の上半を欠いている。286は口径17.2cmを測る。口唇部分をはずした形で横方向の刷毛ナデがなされている為に、端部が外側



第39図　第３号住居址出土土器(1/3)

に突出したような状況を示している。また、口縁の下端には1条の凹線が引かれているために鋭角的に突出した稜線が出来ている。口縁部、体部共に横ナデがなされている。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混ぜられている。287は内外面ともに赤彩が施されているが、小片の為口径や器形に不安があるものである。胎土は精良で、焼成は普通である。288は口径22cm、胴部最大径25.6cmを測るもので、口縁部分に炭化物が付着している。口唇部に面取りがなされ端部が内側に肥厚し、口縁下端にも面取りがなされ突帯風に稜がつく。内面の段の部分には指頭によるとみられる押さえが引き巡らされている。器表は比較的平滑にナデられていて、さほど工具痕は目立たない。淡黄褐色を呈し、胎土は普通である。295は器台の脚柱部片で、脚部に2個1対の穿孔が見えるが全体では何対になるかはつかめない。全体に厚手に作られ、胎土は精選されている。297は小型器台の脚部に想定できるもので、外周は磨き内面は刷毛調整である。298は内外面ともに磨きの後赤彩が施されているものであり、脚部ではない可能性が考えられるものである。299・300は風化の進んだ蓋型土器である。

307～322は第1～3号住居址の周辺の包含層から出土したものをまとめたものである。307は小片のため口径の復元に不安の残るものであるが、大形の甕であるとするには大過ないであろう。擬凹線は明確に深く巡らされている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は良好で砂粒は少ないと言える。口縁の内面は横ナデが丁寧になされてい



第40図　第１～３号住居址周辺出土土器(1/3)

る。308は口径23.6cmを測るもので、受部部分を復元することができた。受部の底面は平坦で外展気味にのびる口縁部は段をつけることなく収められている。内外面ともにヘラミガキがなされているものの器面は平滑ではなく凹凸が顕著に認められる。脚部の径は2.4cmと比較的に細いものである点が注目できる。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成は良好である。309は2個1対の穿孔が3対置かれているものと想像される高杯の脚柱部である。311は器台型土器の脚柱部分で脚部に段がつけられるもので、脚柱下端に3個の穿孔がある。脚柱のヘラミガキ調整はやや粗い。312・313は装飾器台の受部の部分であるが、全体形はつかめなかった。312の鍔の径は15.6cm、313のそれは8.8cmを測る。312の鍔は内側に向いて下ろされていて、その器表にのみ赤彩が施されている。色調は灰褐色を呈し、胎土には若干の微砂粒が混和されている。313は器壁が厚く作られ、鍔もやや外側に向くようにして下ろされていて、器表面全面に赤彩が施されている。赤彩の色は、312のものに比較してやや明るいように見受けられる。胎土は精選されていて、まったく微砂粒を含んでいない。318は口径6.4cmを測るもので、内径気味に立ち上がる口縁をつける小型の壷型土器に想定される。口縁は頸部との間に段をつけるものと想定できる。赤彩された口縁部には、ヘラ先によると見られる擬凹線が丁寧に巡らされている。内面の上半はナデが施されているが、下半は刷毛調整痕がそのままに残っている。320は類例の少ない尖底となる角型土器で、復元完形品となった。口径8.6cm、器高12.2cmを測る。器表面は凹凸のあるナデ調整が施されていて、平滑とは言い切れないもののととのっている。内面も尖底となるのであるが、全体に砂粒が移動する程度の強いナデが行われている。器表に砂粒は目立たないが内面では多量の砂粒が認められ、胎土には多く混和されているものである。外周の色調は暗褐色を呈し、内面は濁黄褐色を呈している。焼成は普通である。321も同様の器形を呈するものであろう。共に、第3号住居址の南東方向のK100・101グリッドからの出土品である。

2　第４号住居址・第５号掘立柱建物（第41～45図・図版11・12・15・20）

遺構　遺跡の第二平坦面の北端部で検出した住居址群で、瘤状に突出する第1～3号住居址の載る丘陵の裾に位置していることになり、緩傾斜面の変換点に立地しているものである。周囲には住居址が集中していて、北東方向約370cmで第1号住居址が、南方向約7mで第5号住居址が、西方向約15mで第16号住居址が、東方向約10mで第6号掘立柱建物が配置されている。Ｊ96・97、Ｉ96・97グリッドに渡り、中地区のほぼ中央に位置している。

第4号住居址の平面プランは隅円方形を呈し、少なくとも2回の構築が推定できる。しかし、壁溝近くに置かれた特殊ピットの数が3個であることから3回の構築と考えることも可能視される。ここでは、掘り込みおよび壁溝が確認できた住居址について記述していく。外側の住居址を第4号とし、内側の住居址を第4－Ｂ号とする。第4号住居址は東西方向、南北方向共に約560cmの正方形で、床面で計測しても508cmの正方形である。北・東部の検出面は黄褐色砂質ブロック土層でとらえられたが、南西部は縄文時代以前の堆積土である黒色腐蝕土層であった為に、壁の立ち上がりを十分にとらえる事ができなかった。

覆土は遺物を包含する茶褐色土が卓越して堆積し、床面近くに濁茶褐色土が見える。遺物の出土は傾斜の強い北側で多く見受けられ、南側では少なくなる傾向が認められた。

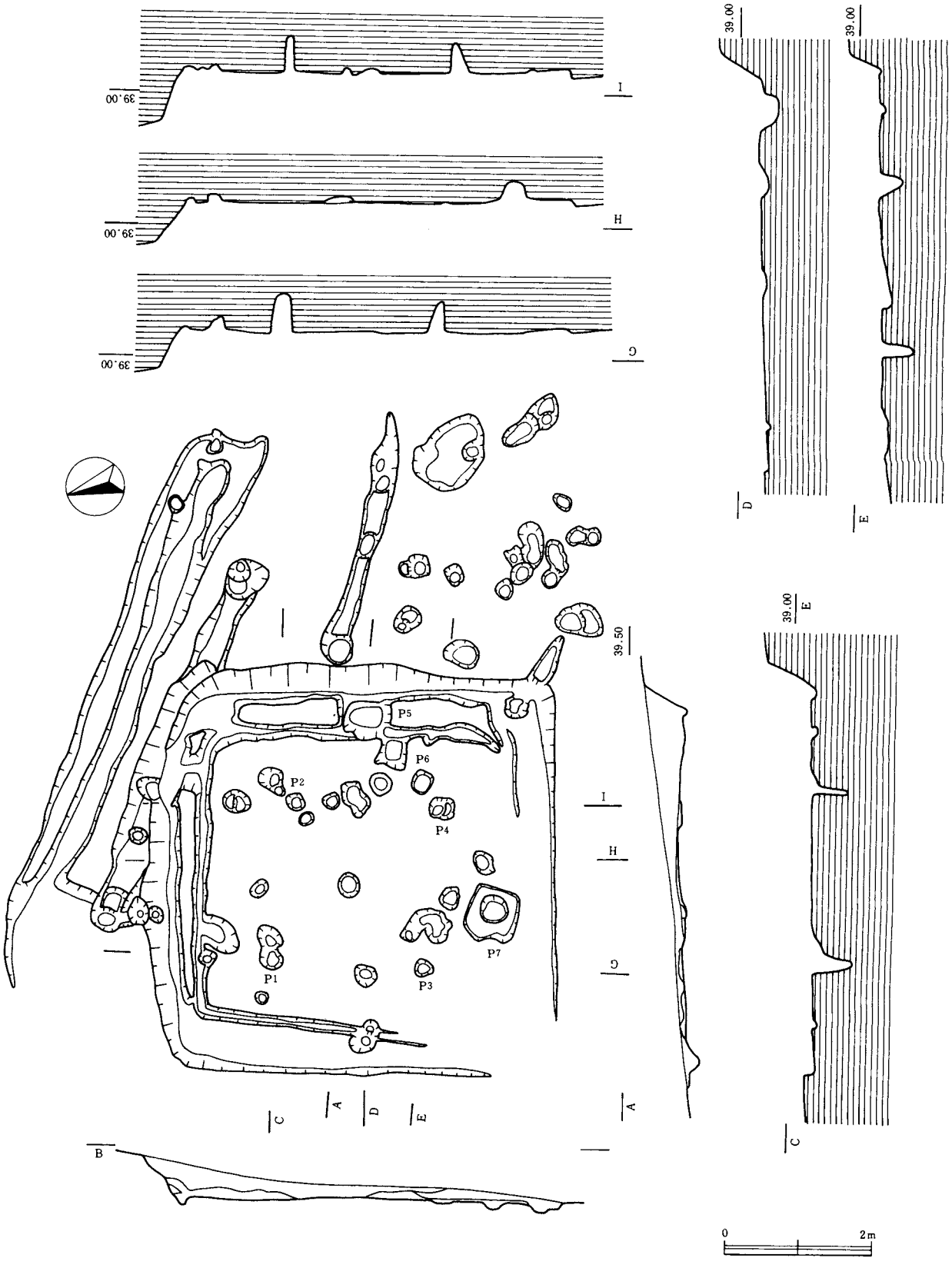
北東部の壁が最も高く80cmを越えているが、順次壁の高さは減じていく。北西隅では48cm、南東隅で38cmを測る。壁溝の幅は北東隅を中心にして最も幅が広く20cm前後、深さ4～7cmを計るが、南方向・西方向へと幅を狭めていて10～16cmとなっている。

東辺の中央に位置して、いわゆる特殊ピットが発見された。平面隅円方形を呈し壁溝の内側の肩が無くなっている。ピットの北東隅に傾斜面に沿う形で土器が出土している。ピットの長軸は68cm、短軸55cm、深さ25cmを計測した。床面は内側の住居址と同じ面でしかとらえきれなかった。柱穴の検出も4本にとどまることなどから、同じ床面、柱穴を使っていたものと考えておきたい。床面の中央部に平面楕円形を呈する炉址がある。35×30cm、深さ4cmを測る。覆土は暗茶褐色土で炭化物、焼土ブロックを含んでいる。柱穴は4個で、Ｐ1（26×30cm、深さ40cm）、Ｐ2（19×18cm、深さ41cm）、Ｐ3（25×25cm、深さ41cm）、Ｐ4（35×30cm、深さ41cm）を測る。各柱穴の心々間は以下の通りである。Ｐ1～Ｐ2（230cm）・Ｐ2～Ｐ4（220cm）・Ｐ1～Ｐ3（210cm）・Ｐ３～Ｐ４（220cm）。

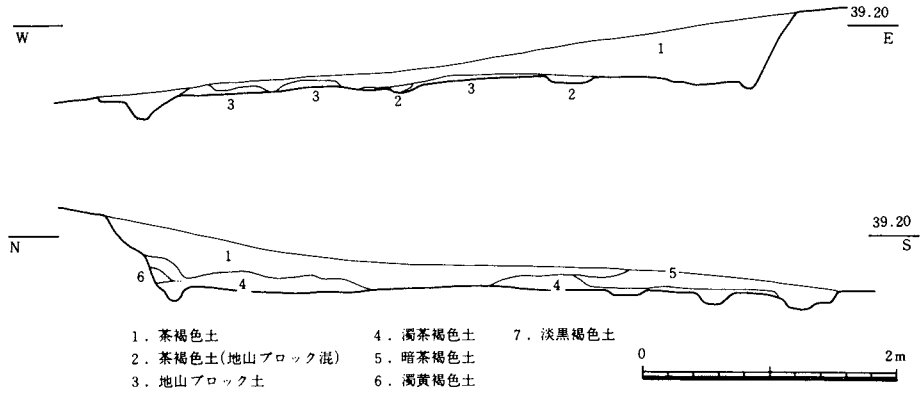
第4－Ｂ号住居址は外側の住居址の主軸方向と若干のずれをもって構築されている。平面プランは隅円方形を呈し、やはり、正方形に近く南北・東西方向ともに430cmを計測する。壁溝は外側の住居址のものと類似していて、遺存状態は良好であり南辺を除いて明確にとらえることができた。北・東辺は幅が広く13～18cm、深さ8～12cmを測り、断面形はＵ字状を呈する。西辺では11cmと幅が狭くなり、深さ9cmを測り、断面Ｖ字状をていする。南辺のほぼ中央で検出したＰ7が、いわゆる特殊ピットである。平面隅円方形プランを呈し、二段掘りのものである。68×72cmの規模で、7cm下がったレベルで径38cm、深さ26cmのピットが掘り込まれている。東辺にも壁溝に接する形で平面形が方形を呈するＰ6が検出された。検出しえなかった前段階の住居址の特殊ピットと推定するにはやや弱いように考えられるが、可能性として考えておきたい。

第5号掘立柱建物は第4号住居址の北東隅にかろうじて遺存していたもので、大部分は住居址によって削平を受けて消失していた。布掘の形態を持つもので、長さ550cm、幅36cm、深さ27cmを測り、断面形はＵ字状をなしている。東端と西端部分が比較的残りがよく、東端のピットは径約55cm、深さは溝の掘り込み面から74cmを測る。西端のピットは溝に平行させて長軸を置く平面方形プランのもので70×44cm、深さ70cmを計測した。このピットの覆土から擬凹線を持つ有段口縁甕の口縁部を検出している。住居址の掘り込み面にかかっている柱穴を生かして考えれば、心々間の距離は西側から190cm・180cm・165cmの３間の建物が想定できる。

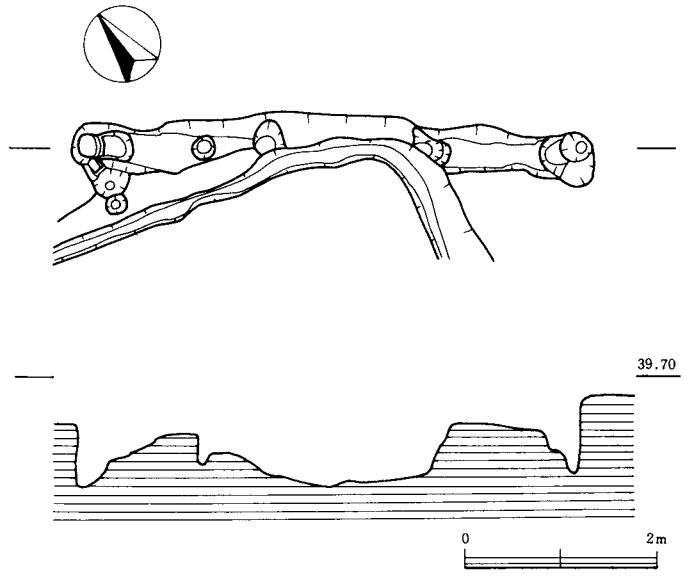
この掘立柱建物の北側約25cmの間隔をおいて、長さ810cm、幅70～98cm、深さ40～60cmの溝が検出された。溝は北側に段をつけた二段掘りとなっているが、溝そのものが新旧の関係にあることが土層断面によって確認できた。深くなっている南側のものが古く、約10cmの層厚を測る地山ブロックを主体とする黄褐色土、炭化物・地山ブロックを含む暗茶褐色土・濁茶褐色土が堆積していた。断面形状ではＶ字状を呈し、南側の壁の角度が急にな



第41図　第４号住居址(1/80)



第42図　第４号住居址土層断面図(1/60)



第43図　第５号掘立柱建物(1/80)

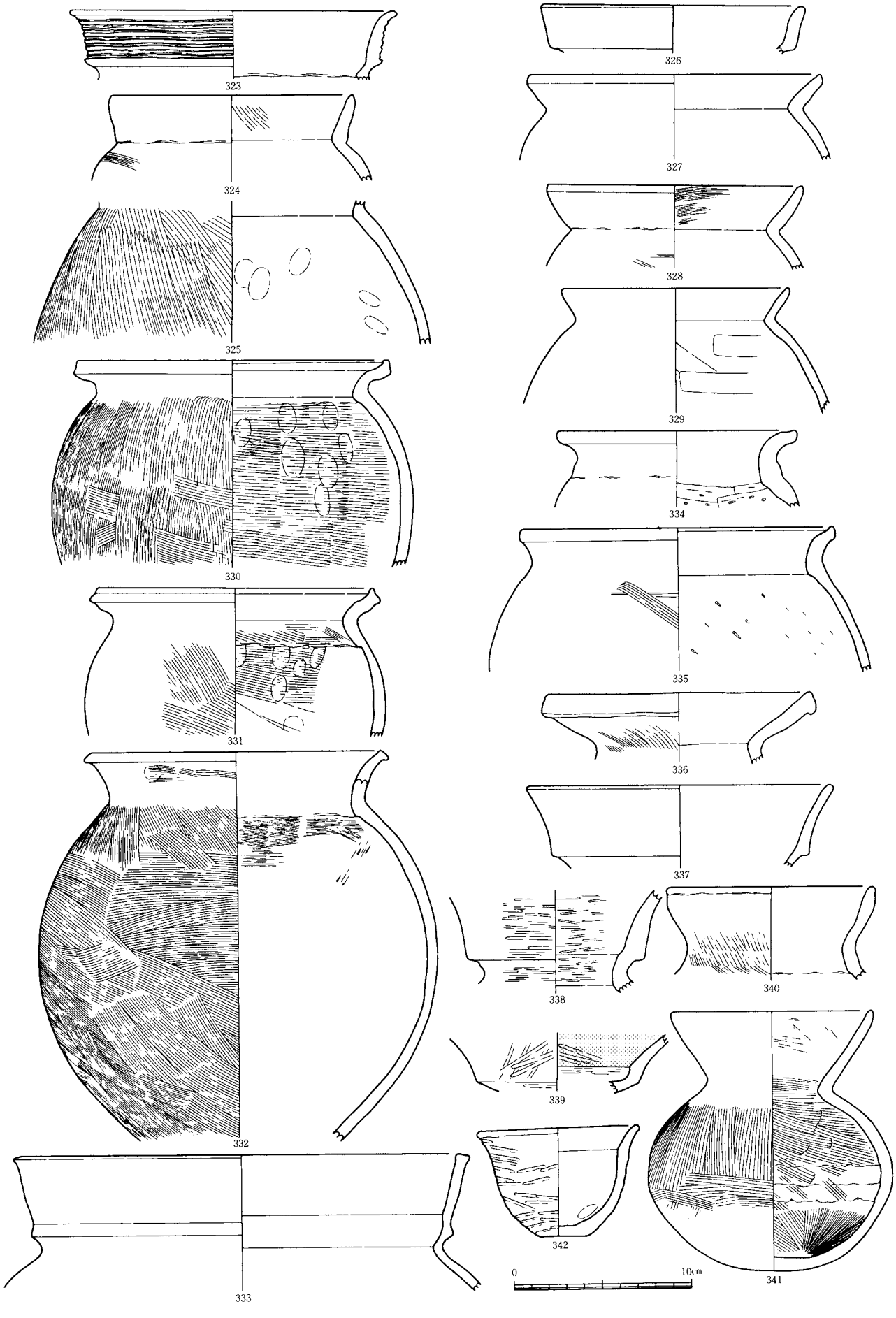
っている。新しい溝は2層に分けられ、20cmづつの層厚を持つ暗茶褐色土が堆積していた。上層のものは土器・炭化物・地山ブロックを含んだ軟質でしまりのない土で、下層は土器を含まず、よくしまった土が堆積していた。断面の形状で見るとU字状を呈し、北側部分の壁の立ち上がりが急であり、古いものと全く対照的な在り方をもっていると言える。この溝の性格は、第4号住居址の傾斜面上に位置していることや2回の掘削が住居址の在り方に共通している点から、住居に斜面上の雨水が流れ込まないための施設と考えられる。

遺物　323～352・370は住居址からの出土品で、その中で、333・341・348は床面からのもので、352が特殊ピットP5から得られたものである。323は口縁端部が大きく外反するもので、擬凹線は比較的目立つ形で粗く引かれている。明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成は堅緻である。324は口径18.6cmを測る小型の甕で、口唇部が尖り気味に成型されている。口縁、体部とも粗雑なナデ調整で、内面にはヘラケズリは行われてはいない。胎土には微砂粒が多く混和されている。325は口縁部を欠いている甕で、器表には斜め方向の刷毛調整がなされ、内面に指頭圧痕が不規則な形で散在している。ナデ調整で止どめられていて、器面に凹凸が目立つ。326は有段口縁甕の素文のタイプである。327～329は「く」の字状の甕で口径19.2～22.4cmを測る。いずれの口唇部も尖り気味に成型されているもので、器面の調整は極めて粗雑であり、内面の調整もナデのみに止どまっている。器壁は比較的薄手と言える。器表面は凹凸が目立つ。胎土には砂粒が多く混和されている。330・331は口径

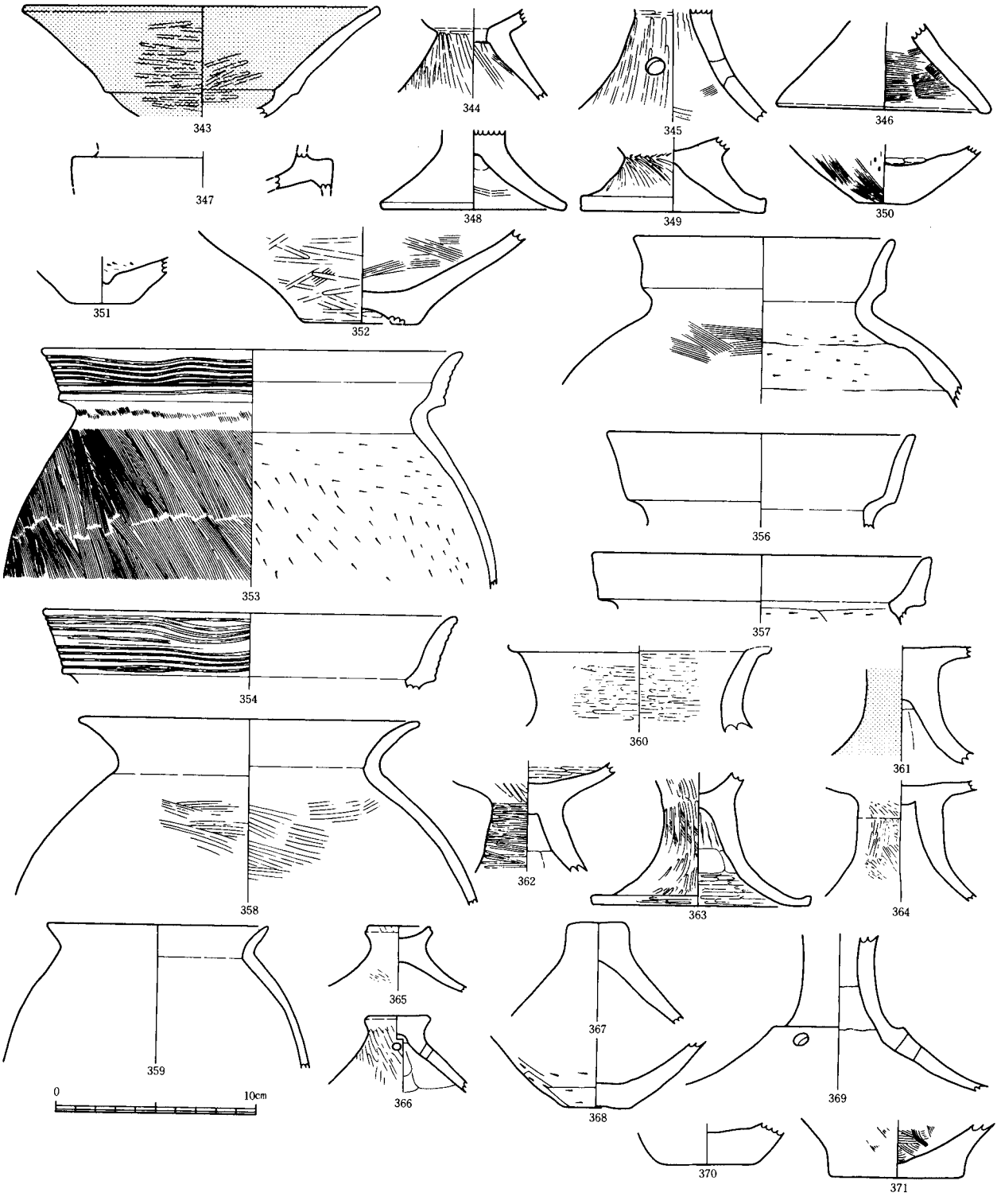
21・24cmを測る口縁が大きく外反して外周に面とりを施して口唇部を僅かに直立させる複雑な成型を施すもので、330は外周縦方向、内面横方向の刷毛調整が丁寧に施されている。331もほぼ同じ調整であるが、器表にはさらに横ナデが行われていて比較的平滑と成っている。331の頸部内面には粘土が張り付けられている状況がよく観察できる。色調は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を混和させるものの、器表にはほとんど目立たない。焼成は良好である。332は口径22cm、器高現存値で29cm、胴部最大径30.3cmを測るもので、口唇部に面取りを行って小さく外展させている。体部と口縁は別々に成型されたもので頸部の位置で内側から口縁部を張り付けている。その為に張り付けた位置で剝落が進行しているのが顕著に認められる。内面はナデ調整が施されている。口縁部は横ナデがなされている。333は口径35cmを測る大型のもので、口唇部分に面がとられわずかに肥厚している。また、口縁下端には稜のある突帯が置かれている。内外面とも風化が進行しているために調整はつかめない。色調は明るい黄褐色を呈し、胎土は良好でほとんど微砂粒を含んではいない。334は口径18.2cmを測るもので、口縁部を大きく外展させている。口縁内面端部に押さえるようにした刷毛調整痕を見る。内面のケズリはやや粗雑である。外周はナデ調整が入れられている。口縁の端部のみに炭化物が付着している。335は口径23.8cmを測る甕であるが、摩耗が甚だしく口縁端部の成型や調整についてはつかみきれない。茶褐色を呈し、胎土には多量の砂粒が含まれている。336は口縁の外傾度の強い壷型土器に想定したものであるが、粗雑な調整でとどめられている。端部には粘土が足されて段がつけられているものの粗雑であり、また器表面のナデも粗い。337は小片であり、口径にやや不安がある。比較的薄手の作りで調整は丁寧、胎土は精良である。338は器壁の厚いつくりの壷型土器の口縁部である。内外面ともヘラミガキがなされている。339は小型高杯の体部片で、平坦に近い底面に段をもって口縁部が外に開いていく。口縁部の内面のみに赤彩痕が遺存している。胎土に砂粒・微砂粒をわずかにまじえている。340は口縁端部でわずかに直立させて面を作り、口頸部は湾曲して肩部につながっていく。341は住居址の西部で出土した小型の壷で、口縁端部の一部を欠損しているだけの完好品で体部はまったく無傷である。口径15.4cm、頸部径9.5cm、胴部最大径18.4cm、器高19.6cmを計測する。器表全体を櫛歯状工具によって調整し、口縁内外面、頸部、底部周辺にナデが加えられているものである。口縁と体部の中央部分に炭化物が付着し、二次的加熱を受けて赤変している部分が見られる。胎土には大粒の砂粒をまじえているが器表面ではほとんど目立たない。342も一部を除いて復元することができたもので、口径9cm、器高6cmを測る。体部は粗い叩き調整が入れられている。

343は口径24cmの高杯型土器で、内外面ともに丁寧な磨き調整がなされ、赤彩が施されている。体部と口縁の境界には小さな段および突帯に近い段が設けられている。胎土、焼成とも良好である。347は摩耗の進行した装飾器台であるが、器表の一部にかろうじて赤彩が施された痕跡が認められる。349は壷型土器の台部に想定できるもので、脚部の底面に段が付けられている。器表面はヘラミガキ調整がなされ、内面の調整もやや丁寧と言える。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。352は窪み底となる壷型土器の底部片である。底部の縁が剝落したような状況を示しているところから、脚部が付けられていた可能性が考えられるもので、器表は横方向のヘラミガキがなされ、内面は櫛状工具による調整の後にナデがなされている。

353～371は第4号住居址の周辺グリッドから出土したものを集めたものであり、確実に第4号住居址に伴うものとは言い切れない点をあらかじめ記述しておきたい。G97・H94・95・97・I94～96・J93・95・97・K93グリッドからの出土品である。353は口径21.2cmを測るもので、口縁下端に細目の粘土紐がつけ足された後に、擬凹線が引かれていくもので突帯状の形状を示している。体部は図示したように調整が目立つものではなく、細かい間隔を持つもので調整が加えられている。色調は淡茶褐色をていし、胎土には均一になった微砂粒が多く混入している。焼成は良好である。355は壷型土器で口径13cmを測る。口縁の下端の部分では稜が明確ではなく丸味を帯びている。器表の調整は横ナデが入念に行われていて、比較的平滑になっていると言える。体部の内面は粗雑なヘラケズリが入れられ器面には凹凸があり、粘土紐の境目がはっきりと見ることができる。356の内外面の調整は横ナデがいれられていて甕か壷か迷うものであるが、頸部の立ち上がり具合や胎土に砂粒の混和が少なく精良であることから、壷型土器の口縁と推定した。明るい黄褐色を呈している。357は口縁部が短く、段の位置で

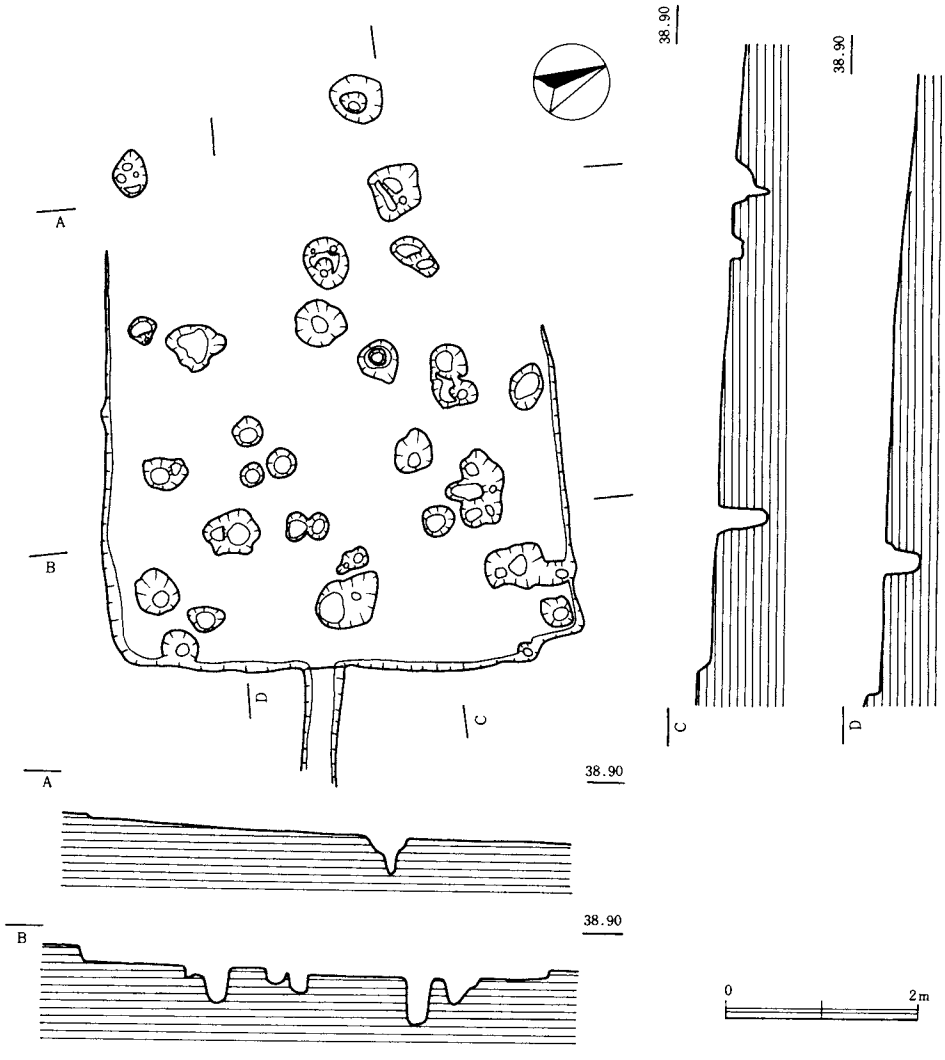


第44図　第４号住居址出土土器(1/3)



第45図　第４号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

器壁が極端に厚くなるもので、本遺跡においても類例が小数の器形である。内面は頸部以下に削りがなされている。358は口縁が外展してのびるもので、端部でさらに外反する。口径は17.2cmを測る。体部の内外面は横方向の刷毛目調整がなされ、口縁部分はナデによって平滑である。色調は明るい茶褐色を呈している。肩部と口縁の接合部分がはっきりと見ることができる。359は前者の小型品で、口径11cmを測る。内外面はナデによって調整されている。器壁は薄く成型され、胎土への砂粒の混和は少量にとどまっている。360は壷型土器の頸部片である。有段口縁になるものと推定でき、端部に剥落した痕跡を見る。361・362・364は脚部の短い高杯で、受部の底面がやや平坦になる小型品に想定されるものである。脚部に穿孔は見られなかった。363の脚部の径は10.8cmを



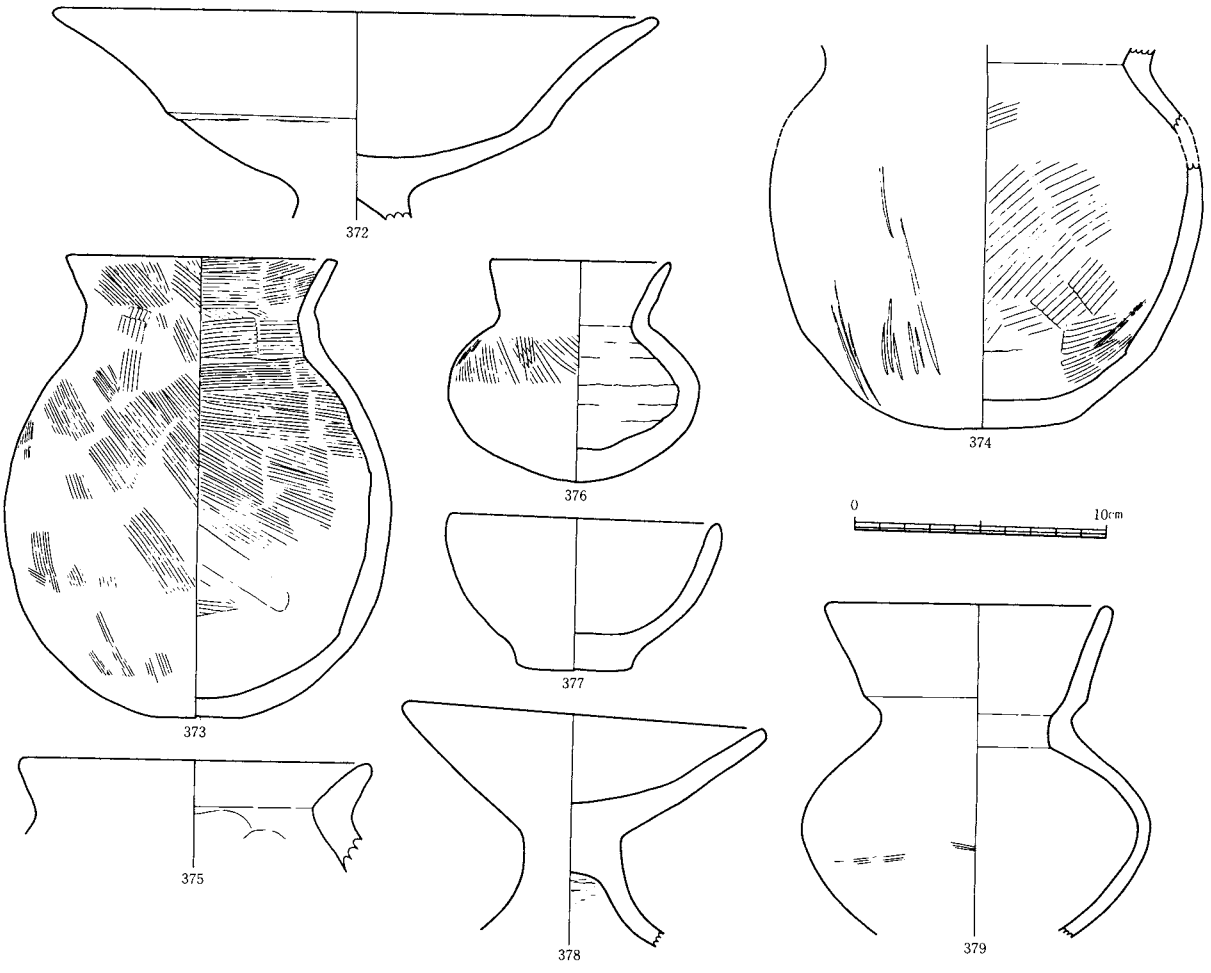
第46図　第５号住居址(1/80)

測る。脚の端部は折り返されて面がつくもので、内外面に磨きが行われているが、受部のつく脚部の端は丸く成型されていて他の高杯のものと大きく異なっていて、受部の形態の想像が困難である。底面は軽く磨きが施されていて暗褐色を呈しているが、脚部の器表は淡黄褐色をなしていて、色調の差の原因にもいささか疑問がもたれる。胎土は良好で焼成は堅緻である。

3　第５号住居址（第46・47図、図版22）

遺構　本住居址は第二平坦面の北西部に位置しているもので、西側へ傾斜を強めていく変換線上の平坦面側を占地していると言える。検出した地点はE94・95・D94・95の4個のグリッドである。調査前の状況では、第三平坦面からの斜面が一旦平坦になる地点であり、表土を取り除くと地山面が浅いレベルで現れたところである。南方向約350cmで第6号住居址が、東方向約12mで第7号住居址が、時期的には差が大きいが北東方向約350cmで平安時代の掘立柱建物が、さらに、北東方向約13mで第4号住居址が位置している。

平面プランは隅円方形で、南北方向490cm、東西方向現存値440cmを測るが、西側が斜面に掛かっているために検出規模が小さくなっており、5m程度の正方形プランとなるものと想定される。壁溝はまったく検出されなかった。東側に伸びていく溝は、試掘トレンチおよび風倒木痕が複合した形になっているものである。壁の高さは5～15cmほどのもので、床面は西側に向けてゆるやかに傾斜していて焼土等は確認できず、床面上で検出した多数のピットは木の根によるところの攪乱が推定できる。柱穴は東辺の2個が想定されるにとどまる。P1は60×45



第47図　第５号住居址出土土器(1/3)

cm・深さ34cm、Ｐ2は36×30cm・50cmを測る。これらの心々間は210cmである。

遺物　住居址の覆土から出土したのは373・374・376・377と小数に限られ、他は周辺から得られたものである。372は口径24.4cmを測るもので、形だけをととのえた粗雑な作りの高杯の受部である。体部と口縁部の接合面がはっきりととらえられ、内面は横ナデ調整が、外周は口縁の上半にナデが加えられている程度で、以下は乱暴にナデつけられているという印象である。淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。373は口径10.6cm、体部径15.4cm、器高18.2cmを測るもので、底部は明瞭ではないが一定の平底を付けている。底部周辺を除いて、全体的に幅1.5cmの櫛状工具によって掻きならされている。底部とその周辺は粗いナデでとめられている。胎土に砂粒は少なく良好である。374は頸部周辺を含めて図上で復元したもので、体部径17cm、底部径4.5×6cmを測る。器表はナデ調整、内面は粗い調子の刷毛が使われている。底部の成型は刷毛によってかきとったようになり、平底風の丸底とも言える。濁黄褐色を呈し、胎土に微砂粒は少ない。375は器形のとらえ方に問題を残すもので、逆位置になる可能性も考えられる。厚手の作りで、全体に粗いナデ調整が加えられている。376の口径は7.5cm、体部の径10.2cm、器高8.8cmを測るもので、過半近くが遺存しており復元完形となった。底部は丸底で粗いナデが、肩部は刷毛調整、口縁の内外面は横ナデが行われている。濁黄褐色をなし、胎土に砂粒は見られない。377の椀型土器の口径は11.2cm、器高6cmを測るもので、平底の底部が明瞭である。復元完形となった。比較的厚手の作りで、内面は丁寧に横ナデが施されていて、器表面は口縁部分を除いてナデでとめられているが、平滑に近いと言える。378は受部の径は15cmを測るもので、受部の調整は良好であるものの、脚部のそれはやや粗雑である。胎土は良好である。379は小型の壷で、口径11.4cm、現器高13cmを測る。明るい茶褐色を呈し、胎土に砂粒をまったく含まず精選されている。器表面は風化によって剝落が進行していて口縁部分と底部近くでの調整が判断でき

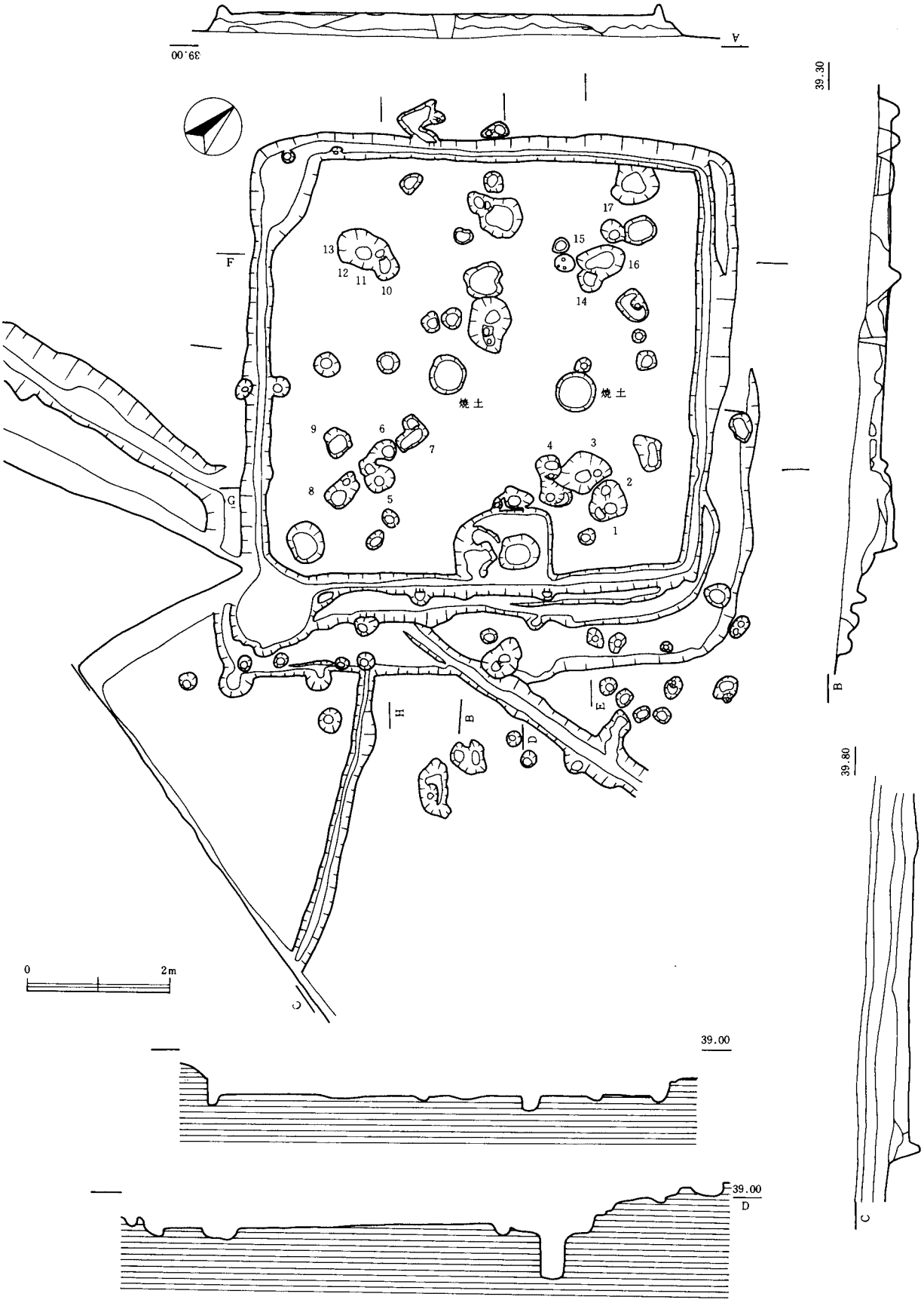
る程度であるが、横ナデが丁寧にいれられていたようだ。

4　第6・31号住居址（第48～52図、図版21）

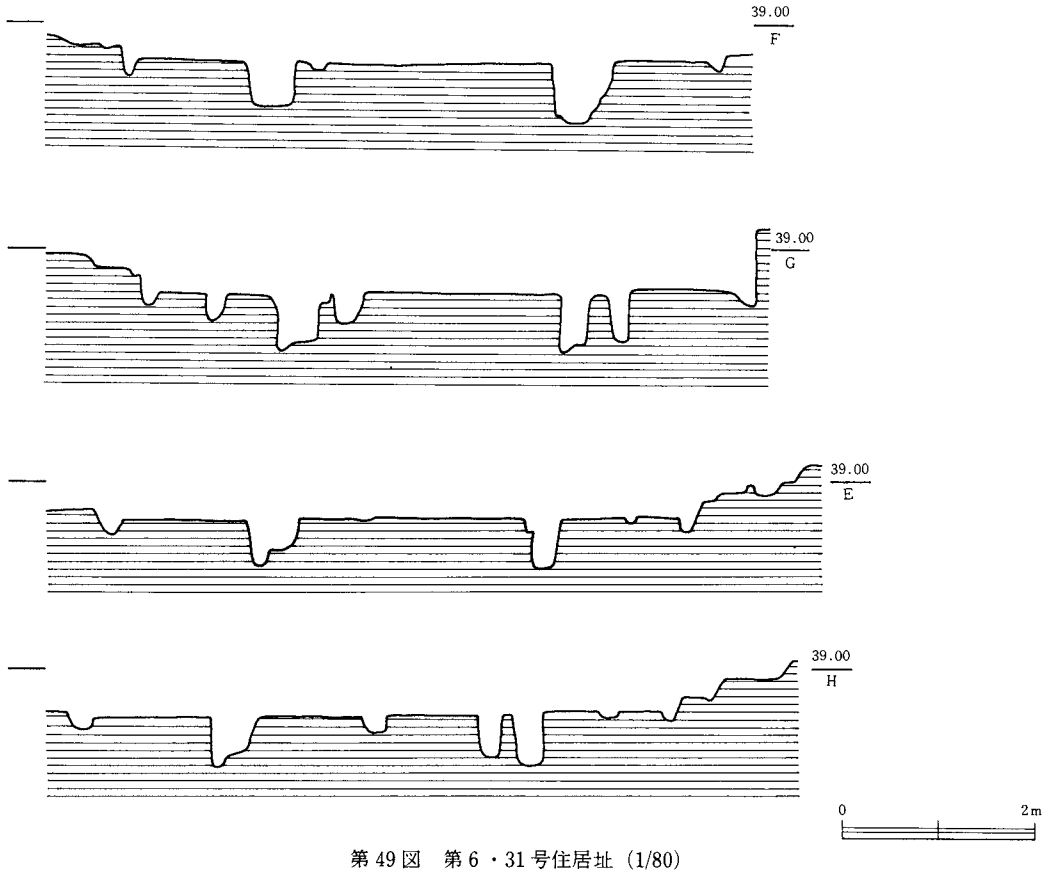
遺構　第5号住居址と同じ様に、第二平坦面の傾斜変換線上に立地しているものであるが、わずかながら等高線の向きが広がっているところから落ち込み全体をとらえることができた。しかし、建て替えによるところの壁面の移動は一部での検出にとどまっている。検出したグリッドはA94～96・B93～96・C94～96で、10個のグリッドにわたっている。北方向約350cmで第5号住居址が、東方向約11mで第7号住居址が第1・2号土坑を挟んで位置している。西方向は谷地形をおいて約55mの距離をもって第29号住居址などが位置している。第6号住居址は4回の構築がほぼ同じ位置でなされているもので、最後の住居の範囲がどこにあるのかは判断に苦しむ。最も良好な形で遺存していた西端の住居址の規模で見ると、南北方向680cm、東西方向640cmを測り、順次東側に行くに従い南北方向の距離が広がっていくもので、最大になった位置で760cmを測る。主軸は北42度西に置いている。覆土の堆積で見ると、南北方向のものは比較的単純な形である。暗褐色土、淡黒褐色土が住居址の中央部分に10～30cmの厚さで堆積し、壁に近い所で地山ブロック土をまじえた濁黄褐色土が床面まで覆っている。床面には焼土、黒色土をまじえた茶褐色土がわずかに認められる程度で、レンズ状堆積の在り方を示しているが、改築した住居址の壁面がとらえられる東西方向の土層断面は後世に掘り込まれたピットや木の根によるところの攪乱などをまじえて複雑な様相を示している。また、床面そのものが西側にむけて傾斜していて、その差は10cmを測る。東側の特殊ピットに近い位置で下の床面から10cm浮いた高さに10cmの層厚をもつ地山を固めた貼床状のものがブロック状に遺存しているものがあり、住居址構築の順序の判断を難しくしている。第31号住居址を検出した南隅で見ると、第31号住居址の床面から20cm下がった所が、東端部の住居址壁溝の底面である（第6－D号）。壁溝は一部分で検出したにとどまる。壁溝の断面はV字状に近く幅12cm、深さ3～4cmを測る。この壁溝から66cmの幅で床面が遺存しているだけで、下段の住居址（第6－C号）が構築されている。壁溝は長さにして1mが遺存しているのみで、断面U字形をなし幅8～10cm、深さ2～3cmを測る。この壁溝から13cmの距離で第6号住居址の掘り込みである。つまり、南コーナーでは都合3回の構築が確認できることになる。北東隅では4面の床面が確認される。第6－D号の壁の高さは18cmで、45cmの床面をおいて壁の高さ13cmをもつ第6－C号があり、25cmの床面をおいて7cm下がったところが第6－B号の床面である。さらに16cmの床面をおいて32cm下がったところが第6号住居址の床面ということになる。北の辺では3棟分、北隅では2棟分、西隅では1棟分という検出状況を示していた。

第6号住居址の床面は平坦で比較的硬く締まっている。焼土痕は2個所が見られ、ともに皿状を呈したもので北側のものが径55×50cm・深さ4cm、南側のものが径40cmの円形で深さ3cmを計測した。壁溝は全周した形で遺存していて、幅20cm、深さ15cmを測る断面形がU字形をなしている。いわゆる特殊ピットは東辺の中央に作られ、平面長方形をなしている。長軸137cm、短軸108cmの規模で、11cm掘り込んだ高さに北側に寄った位置で楕円形をなすピットが見られた。55×48cm、深さ64cmを測る。覆土は住居址のものと変化はなく茶褐色土が堆積していた。柱穴は極めて接近した形で掘り込まれていた。南東のもので5個が見られるものの、他のものは4個づつである。柱穴の平面形は円形ないしは楕円形をなし40～50cm程度のもので、P4－6－10－14（心々間230～290cm）、P1－8－13－17（心々間350・390cm）、P2－9－12－16（心々間350cm）、P3－6－11－15（心々間280～300cm）の組み合わせで考えることができる。南東隅の土坑は径130cmの円形のもので深さ43cmを測り、床面に若干の凹凸が見られる。第6－D号ないしは第6－C号住居址のものと考えている。

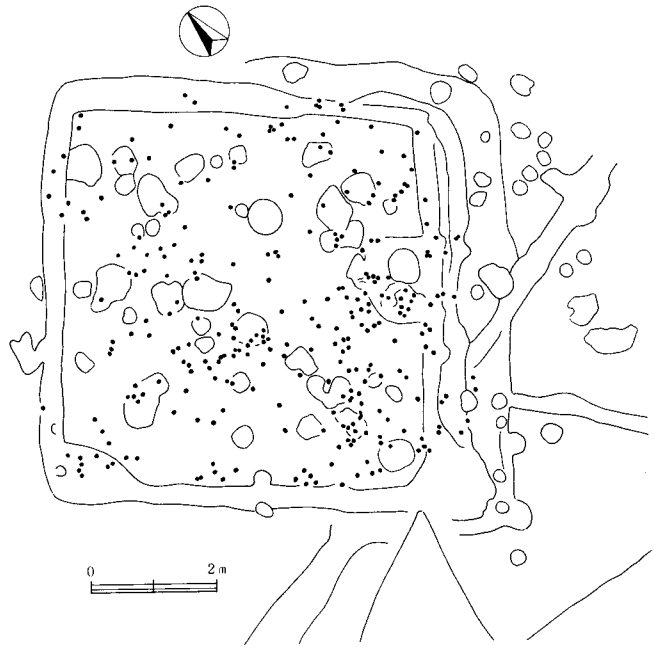
遺物　380～404・407・411・412が覆土から出土したもので、他は周辺グリッドから得られたものである。380～382はいずれも小片のもので、口縁端部を外展させておさめる。381には圧痕が残されている。383は口径17.4cmをはかるもので、器表面は粗雑なナデでとどめられていて、胎土に含まれている砂粒が飛び出るような形となっている。内面の調整も粗く、粘土紐の接合の具合がわかるような状態となっている。384は口径16cmを測るもので、口縁部が端部まで素直な形で伸びていくものである。全体は粗雑なナデでとめられているが、一部横方向の刷毛目が認められる。胴部片には粘土紐の接合を確実にするために器壁に直行するような形で刻み目が入



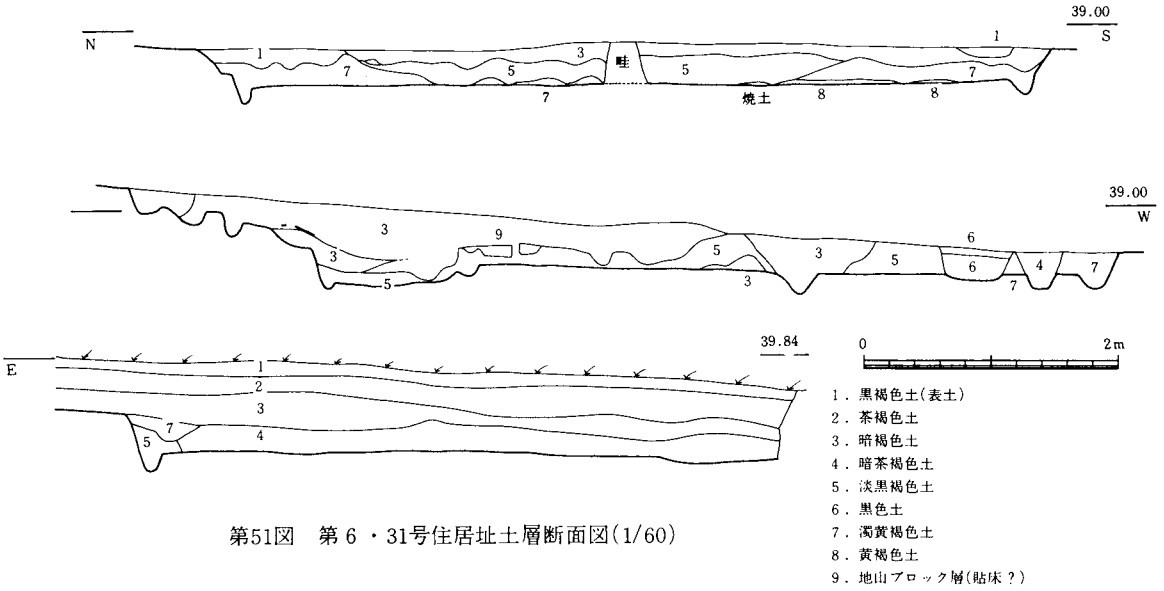
第48図　第6・31号住居址（1/80）



第 49 図　第 6 ・31 号住居址（1/80）



第50図　第 6 号住居址遺物出土状況(1/120)

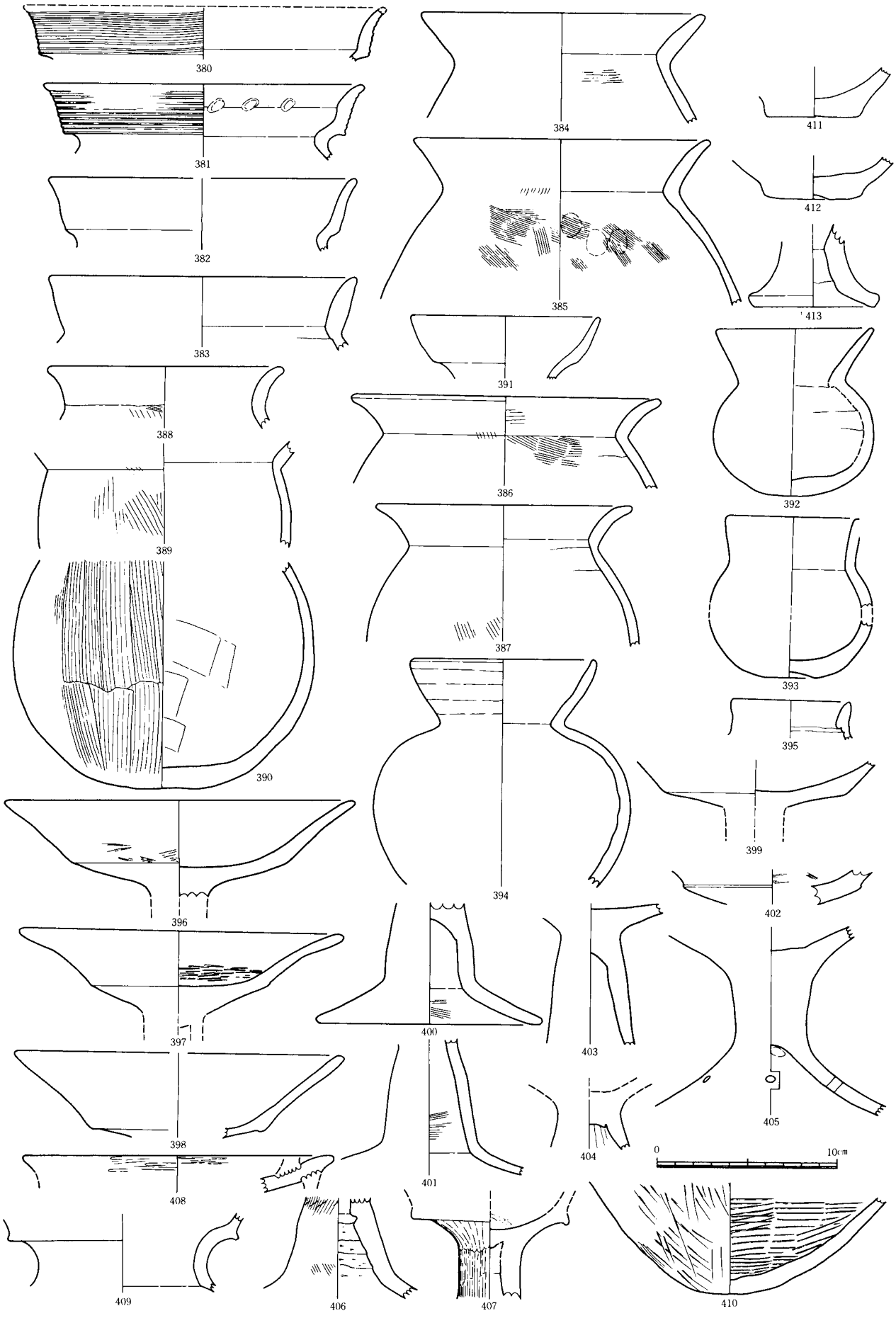


第51図　第6・31号住居址土層断面図(1/60)

れられているのが見られる。また、内面の一部が剝落するような状況を示しているのが見られ、接合の際に粘土が足されているものと考えられる。385口径16.6cmをはかるもので、口縁部がゆるやかに外展していく。口縁は横ナデが施され、体部は短い単位の刷毛目調整が内外面ともにいれられている。胎土には砂粒の混和が多い。386。387は口径17.4cm・14.4cmを測る。口縁部が大きく外展するのが特色で、ともに風化が進行しているために調整の観察は確実ではないが口縁部を含めて全体に櫛状工具によるところのナデが施されているもののようである。胎土に砂粒の混和は少なく、淡黄褐色を呈している。388・389は同一個体の可能性を残すもので、胎土に砂粒の混入は極めて少ないが摩耗が進行している。口縁部は横ナデが施され、頸部以下には縦方向の刷毛目が見られ、頸部には引き始めの段階の段が形成されている。390は平底風の丸底で、粗雑なナデが入れられている程度である。内面の調整は幅1.2cmの工具でナデが施されている。器壁は比較的厚手に作られている。391は口径10.4cmを測る小型壷の口縁部である。内面は平滑にナデられていて、胎土は精選されている。392は口径8.8cm、器高9.3cmを測るもので、口縁端部の一部を欠いているだけの完形品である。底部は丸底につくられていて、口縁部は横ナデが、体部はナデが施されているが、平滑とは言えない。胎土は精良である。393は図上で復元したもので、底部が窪み底となっているのが特色である。胎土には微砂粒が多い。394は口径10.6cm、体部最大径14.4cm、現器高12.8cmを測る。口縁の端部外周をナデて口唇部が尖り気味に調整されているために、口縁そのものがわずかに内屈しているような状態となっているのが大きな特色と言える。幅1cmの工具で調整されていて、口縁部は横方向、体部内面は斜め方向に施されている。胎土には砂粒が少量混和され、焼成は堅緻である。底部は丸底が想定される。396・397は口径20cm・18.5cmを測るもので、平坦になる体部に外傾する口縁部が付く。外周には体部と口縁部との境界に段がわずかに形成されているものの、内部では皿状を呈している。内面および口縁部は横ナデが施されているが、体部の器表はナデられている程度である。淡黄褐色を呈し、胎土は精選されている。399は内面が皿状をなす体部をもつもので、口縁部との接合部分では粘土が継ぎ足されている状況が見られる。400～402の脚部片は396などの皿状ないしは内面が平坦になる体部をもつ高杯の脚部と推定できるものである。いずれの資料も摩耗が進行していて、調整は不明である。405は脚部の全体に粘土が充塡してあるもので、類例の少ないものである。穿孔は径の小さい4個が施されている。表面の調整は不明である。407は小型の高杯で、口縁部分を剝落、欠損している。内面は皿状をなし、平滑に磨かれている。器表はやや粗いヘラミガキが施されている。410は粗い単位をもつもので、全体を調整している丸底の土器である。

5　第7・31号住居址（第53～55図・図版22・27）

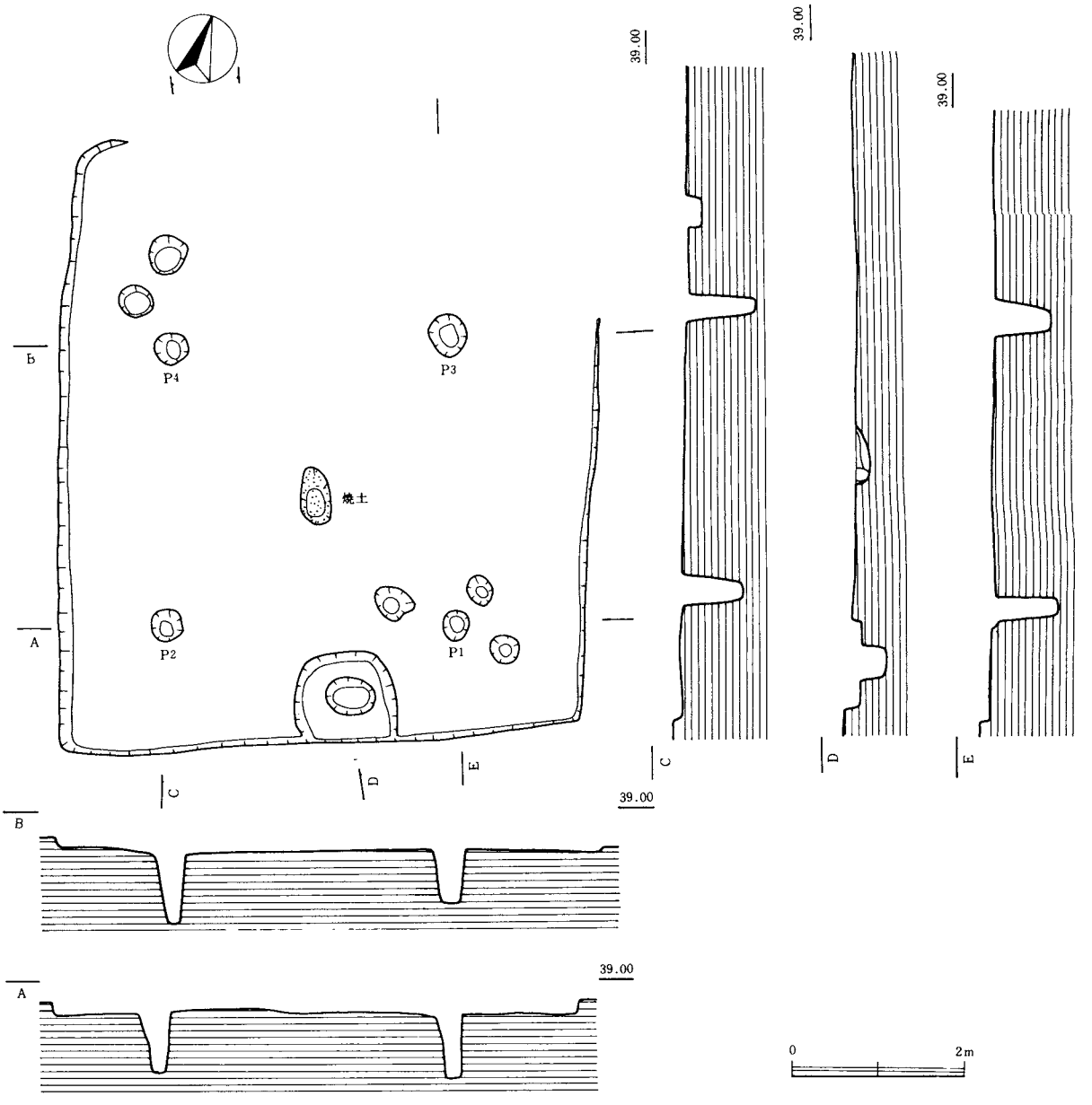
遺構　第31号住居址は第6号住居址によって切られているもので、平面方形プランをなすものと見られ、北東



第52図　第６号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

部辺を検出したにとどまる。検出面から床面までの深さは約27cmで、覆土は黄褐色土が混入した暗茶褐色土がほぼ全体をおおっている。覆土の上層は20～30cmの層厚を測る暗褐色土が遺物包含層としてのっている。壁溝の幅は15cm、深さ13cmを測る。壁溝の立ち上がりは急角度で、断面U字状を呈する。床面は凹凸が目立ち、炉址はつかめなかった。柱穴は1個が確認されたにとどまる。楕円形プランを呈し、48×40cm、深さ40cmを測る。

第7号住居址は第二平坦面の中央部分、調査区の南側に位置している。平坦面の中でも最も低い地点にあたるために、表土、流土、包含層が分厚く堆積し、遺跡形成以前の黒色腐蝕土の堆積も厚いものであった。検出したグリッドはD98～100・B98～100・A99の7個のグリッドに渡っていて、周辺には多数の住居址が配置されている。正確な位置をつかめなかった第22号住居址が北隣に切り合うような形で立地している。南東約6mのところには平面プランの辺を揃えるような状況で位置している。また、東方向約8mの所には第10・19号住居址が位置している。本住居址の検出面は黒色腐蝕土で、炭化物を含んだ茶褐色土が覆土として把握できたものであるが、色調の違いが微妙であることから壁の高さは、住居址の輪郭をようやくとらえるにとどまる。D100グリッドでの



第53図　第7号住居址(1/80)

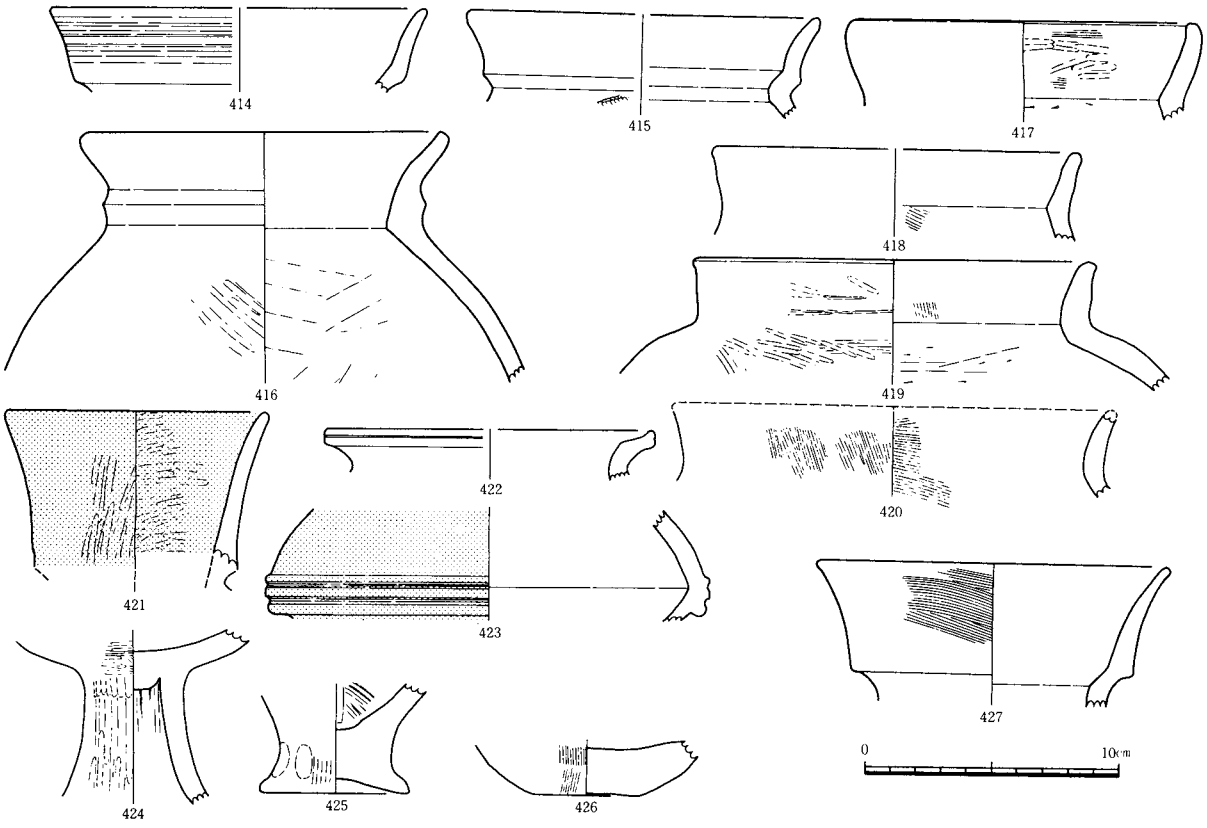
土層堆積を見ると、表土層約10～30cmを取り除いた後10～20cmの厚さを持つ明るい褐色土が堆積していて、その下には20～40cmの暗褐色土がある。そして、20～50cmの厚さで黒褐色土、40cm前後の厚さで黒色土が堆積している。第22号住居址等は黒褐色土を掘り下げて構築しているのが確認され、暗褐色土が遺物の出土が多い点を含めて当時の生活面として考えることができるようである。しかし、黒褐色土に遺物がまったく包含されていないと言うことではなく、幾分かの考慮は必要である。

平面プランは長方形を呈し、南北方向の長軸は720cm、東西方向の単軸は625cm、壁の高さは5～18cmを測る。平坦面とは言え、傾斜変換線のある北側に向かってゆるやかに傾斜しているために、北側の落ち込みラインをとらえるまでには至らなかった。壁溝は色調が微妙であるところから、確定するまでは届かなかったものの、特殊ピットの西側で長さ144cmの範囲で幅12cm、深さ8cmのものが検出できた。床面は黒色土がベースであり、貼床などの特別の土は認められなかった。南辺の短軸の中央には壁に沿う形で、いわゆる特殊ピットが検出できた。隅円方形プランを呈し、115×95cmの大きさで、床面から9cm下に段が設けられていて58×41cm、深さ32cmの楕円形を呈するピットが掘り込まれていた。特殊ピットの覆土は住居址のものと変化は見られなかった。炉址は住居址の中央部に平面長楕円形を呈する形で検出された。73×40cm、深さ13cmを測り、黒色土が火熱を受けて厚く赤変していた。柱穴は4個が確認できた。P3を除いて遺物を包含していた。P1（32cm円形、深さ76cm）・P2（38×34cm、深さ74cm）・P3（43×40cm、深さ62cm）・P4（34×40cm、深さ82cm）を測る。それぞれの柱穴の心々間は次の値を得ている。P1～P2（345cm）、P3～P4（325cm）、P2～P4（330cm）、P1～P3（335cm）。柱穴と壁との間隔で見ると、北辺との距離に再考が必要とも思われる。

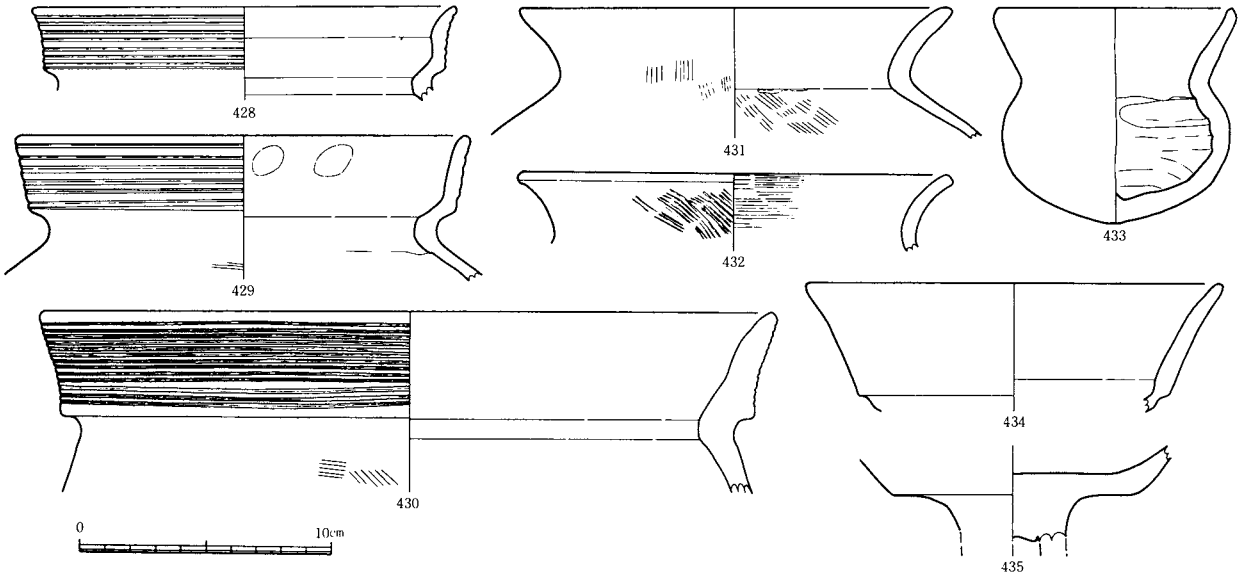
遺物　416・419・421・423・426の資料は床面から出土しているものである。414は擬凹線の窪みがほとんど消失しかかっているもので、刷毛状工具によるものかと想像される。摩耗の進んだ小片である。415も小片で外反する口縁部の下端が突帯状にとびだす形となっている。416は壷型土器に推定されるもので、口径14.8cmを測る。外反気味に立ち上がる口縁をつけ、頸部の位置に突帯を形成させる特異な器形を示す。口縁は横ナデ調整が入れられ平滑であるが、器表面は粗い刷毛調整であり凹凸が目立つ。内面は幅1.3cmの板状工具によるナデが施されている。淡褐色を呈し、胎土は普通である。417は比較的厚手に成型されたもので、内弯気味に立ち上がるのが特徴的で、口唇部は丸くおさめられている。口縁の内面は磨き調整が施されている。418もやや内弯して立ち上がるようだ。419は口径16cmを測るもので、直立気味に立つ口縁部の端部が、若干外に開くようにして調整されている。口縁の内外面は横ナデが入れられ、器表には粗い間隔の刷毛調整が成されている。胎土は良好で微砂粒の混和は少ないと言える。421は口径10.4cmを測る赤彩が内外面ともに施されている装飾壷の口縁部である。胎土は精選されていて、焼成も良好である。423は装飾壷の体部片で、風化が著しく進行しているが赤彩の痕跡をかろうじて窺うことができる。幅1.7cmの突帯部に2条の沈線が施されている。微砂粒の混和は少なく、胎土は極めて精良である。色調は明るい茶褐色を呈したものである。424は高坏脚部片で、脚径が4cmを測り比較的太めといえる。

427は西地区の第32号住居址の中央部の特殊ピットから出土した壷型土器の口縁部である。

428～435は第31号住居址の覆土から出土したものである。428は口径16.8cmを測るもので、口縁の端部が尖り気味に成型され、小さく外展している。429は口径18cmを測るもので、やや外へ開きながら直立して立つ口縁である。口縁の内面には指頭圧痕が口縁部の上の方に残っている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒が混和されている。摩耗が進行しているが口縁の上に煤の付着が見られる。430は口径29.2cmを測る大型の甕で、口縁の上の方に細かな単位の擬凹線が巡らされている。有段部分は突出するような形で成型され、頸部には横ナデが丁寧に入れられている。頸部以下の調整は横方向の刷毛調整である。胎土に含まれる砂粒の量は比較的少ないように感じられる。431・432はゆるく外反する口縁を持つものであるが、口縁端部の納め方や調整がわずかに異なる。431は口径17.1cmをはかるもので、縦方向の刷毛目調整を施した後、口縁部に横ナデが加えられているものである。胎土には微砂粒が多く混和されている。一方の432は口唇部を丸くおさめ、横ナデ調整を行った後に斜め方向の刷毛目調整が入れられている。433は口径9.6cm、器高8.5cmを測る丸底の底部をもった小型壷であ



第54図　第７・32号住居址出土土器(1/3)



第55図　第31号住居地址土土器(1/3)

る。成型の丁寧なのは口縁部のみで、体部の内面は粗く指による成型が成されているだけである。胎土は精選されている。

6　第８号住居址（第56～58図・図版24）

遺構　中地区の第一平坦面の南端で検出した住居址である。第7号住居址の検出面と同じように黒色土層に床面の大部分が含まれていた。しかし、発掘位置は平坦面から東側の第三平坦面への傾斜面の端にあたり、少しづつ地山の面が高くなる所である。その為に、住居址の平面形は一部をとらえるにとどまっている。検出グリッドはA101・102・B101の３グリッドにわたるが、住居址の大部分は未掘の地区に遺存している。周辺には遺構が密集していて、東側にはあるいは切り合い関係を持つような形で接近している第９号住居址があり、北東方向約５mには１間×２間の第３号掘立柱建物や複雑な重複関係にある第10・19号住居址がある。北西方向約５mには第７号住居址が立地している。

平面形は隅円方形プランを呈するものと想定されるものの、東辺の一部270cmを検出したにとどまる。辺の方位は北15度西に置いている。南側の土層断面で観察すると、表土層・流土層が黒褐色土、暗褐色土として50～60cmの厚さで堆積していて、遺物を包含している黒褐色土が20～30cmの厚さで遺構面を覆っているのが判る。

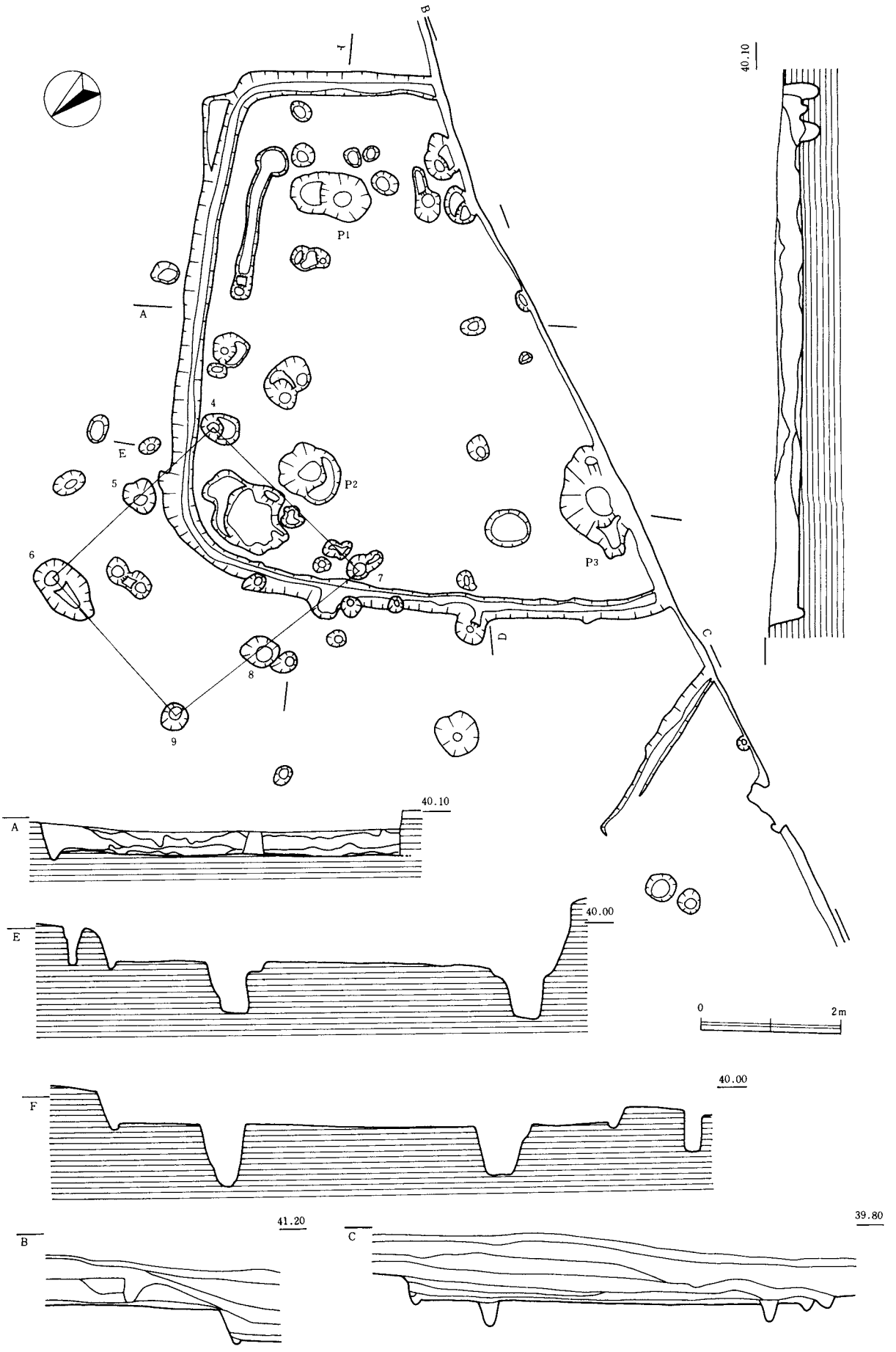
住居址内の覆土は、黄褐色土の粒子をまじえて固く締まっている黒褐色土が遺物を包含して堆積している。壁の高さは最も高い南東の地点で45cmを測る。壁溝の幅は16cm、深さ８cmである。平面分布では南東地点の一部でしかとらえられなかったが、断面では住居址全体に厚さ約７cmの貼床が敷き詰められている。貼床の土は地山すなわち黄褐色粘質土に厚さ約１～３cmの黒褐色土をサンドイッチ状に挟み込んで形成されていた。本遺跡で検出した住居址の中で顕著に貼床を作るのは、西地区の第29号住居址や中地区の第11号住居址などと限られているものである。つまり、同じ地点で住居を構築するときには、前段階の住居址よりより深く掘り込んでいるからと想像される。第８号住居址の貼床の下にピットや壁溝が見られるところから、ほぼ同じ地点での重複が確認できる。東辺と土層断面の状況を組み合わせると、下位置にある住居址は一辺が約500cmの規模になり、新段階のそれは540cmの方形プランが想定される。床面に当る部分では樹齢100年を越えるような杉の大木があったために、根の攪乱を受け十分な調査ができず、柱穴や炉址の状況をとらえられなかった。

ピットは３個が検出され、Ｐ３が前段階の住居址につくものである。Ｐ１は40×40cm、深さ48cm、Ｐ２は32×32cm、深さ32cm、Ｐ３は30×20？cm、深さ47cmを測る。

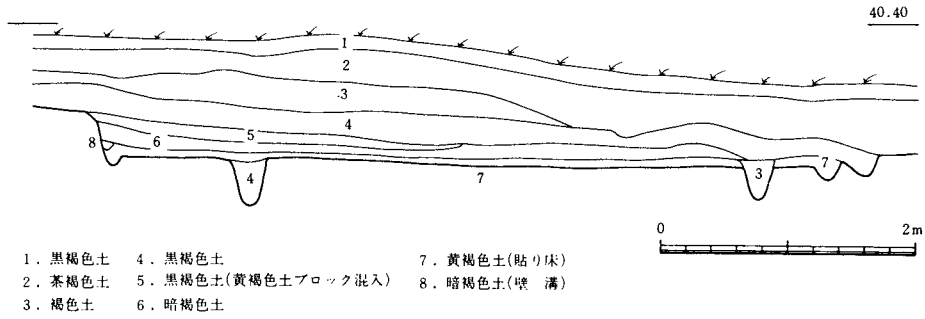
甕の一括土器は口縁部を上にして壁溝にかかるような位置で検出した。底部の位置は貼床の上位置にあたっていた。

遺物　436～447は住居址としてとらえられた以降に出土したもので、448～456はそれ以前に出土したものでグリッド名で取り上げたものである。436は口径18.6cmを測るもので、擬凹線は粗く引かれ口縁下端の稜は鈍くなっている。437は口径に不安のある小片で、比較的明瞭な形で擬凹線が６条巡らされている。439は大形の有段口縁の甕で口縁の下端に粘土を張り付けて突帯状に成型している。擬凹線の入れ方は粗雑である。440・441は外反気味に立ち上がる口縁をもつもので、いずれも小片である。440の口縁部の内面は刷毛調整の後に横ナデが施され、頸部以下は削りが入れられている。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多く、器壁は薄手に作られている。442はやはり薄手につくられたもので、口径17.8cmを測る。外反する口縁の端部が小さく内傾させて立ちあがらせる。体部は細かい目の刷毛状工具で調整されている。443は壁溝の位置で検出した一括の甕で復元完形となった。口径17.2cm、胴部最大径20.6cm、器高20.6cmを測る。外折する口縁の端部が内側を向くようにして立ちあがらせるもので、外周では丸味を帯びた形として成型されている。器表面は幅1.2cmの工具で、肩部周辺は横方向に、体部の下半は斜め方向にナデ調整が入れられ、内面は頸部を除いて全体にケズリが施されている。底部は窪み底となっているが、体部の調整によってあまった粘土を底部の縁に盛り上げたものと推定できるようだ。底部の周辺は火熱を受けて赤変している。色調は濁茶褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が多く、焼成は普通である。444は丸底となる小形の甕の底部と推定される。底面は比較的平坦な部分が多い。445は摩耗が著しく進行しているもので小型壷器形の他に蓋形土器が想定できるものである。446・447はいずれも小片で、風化が進んでいる

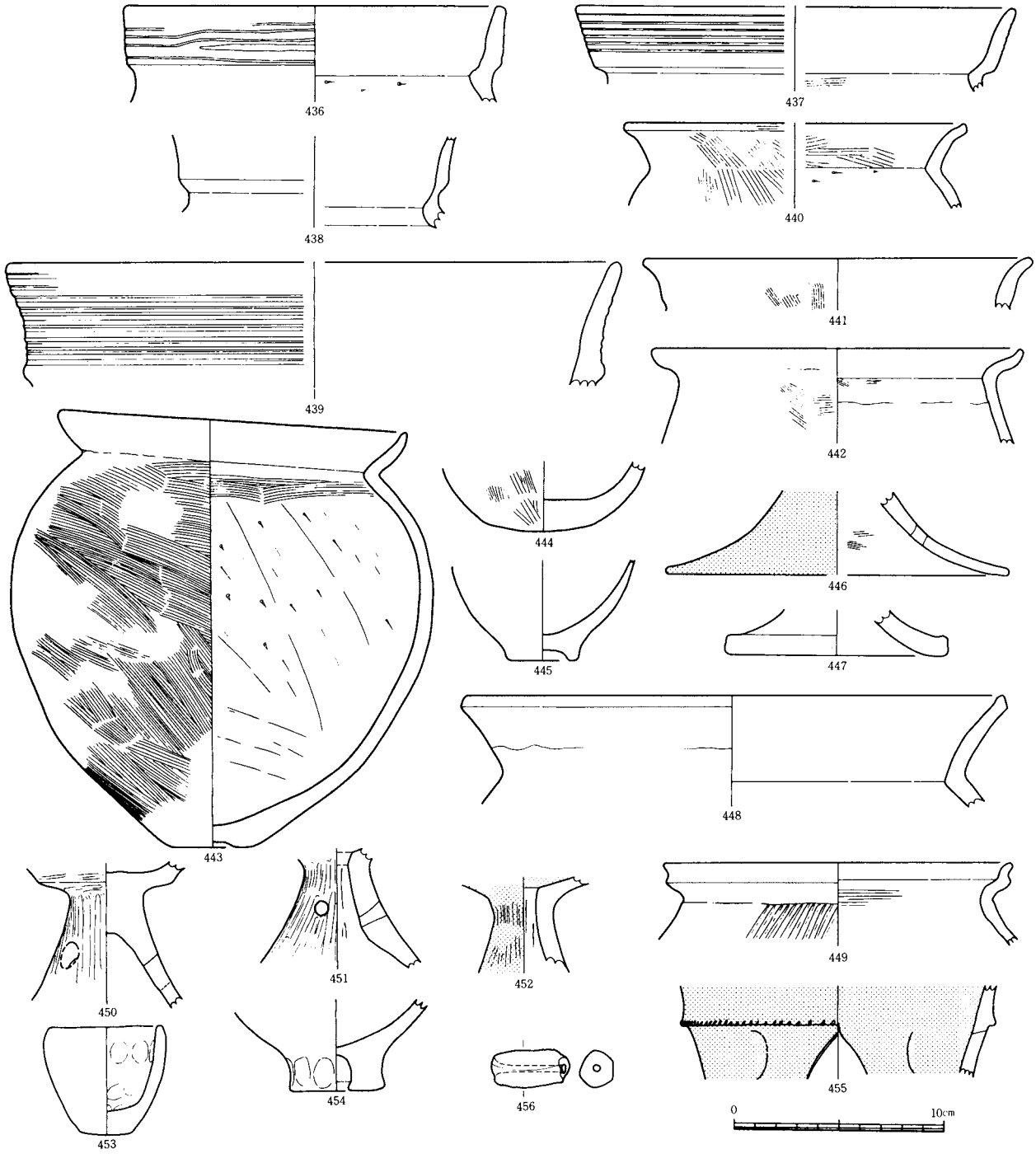
448は口径26cmを測るもので、色調灰色をなすもので摩滅が進んでいる。449は口径16.8cmを測るもので、受口



第56図　第８・９号住居址、第３号掘立柱建物跡(1/80)



第57図　第８号住居址土層断面図(1/60)



第58図　第８号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

状の二重口縁甕である。外折して立ち上がる口縁の上半が小さく内屈し、さらに端部を外側に向けて立たせるものである。口縁の内面に一段の段が形成されている。口縁と肩部との境界には一条の沈線が、体部の粗い刷毛目調整（叩き調整？）のなされた後に引かれている。濁褐色を呈し、胎土の砂粒は少ない。451は器台形土器で、脚部の内面に稜ができるような形で成型されている。452は皿状を呈する受部を付ける器台で丁寧に磨かれていたようだ。453は暗褐色を呈し、胎土に多くの微砂粒をまじえたもので、器表面は荒れている。口径5.8cm、器高5.1cmを測る完形土器である。454は器表の内外面共に平滑にナデ調整が入れられているもので、底部が円形の窪みを残したままに底部の縁を盛り上げたものである。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。455は装飾器台の受部の部分である。小片であり径の復元には不安が残る。稜線の部分にはヘラ先によるところのキザミが施され、内外面共に赤彩が施されている。胎土には微砂粒もみられず精選されている。456は粗雑な作りの土錘で、端部の一部を欠損している。長さ4cm、径1.6cmを測る。

7　第9号住居址・第3号掘立柱建物（第56・59～62図・図版23）

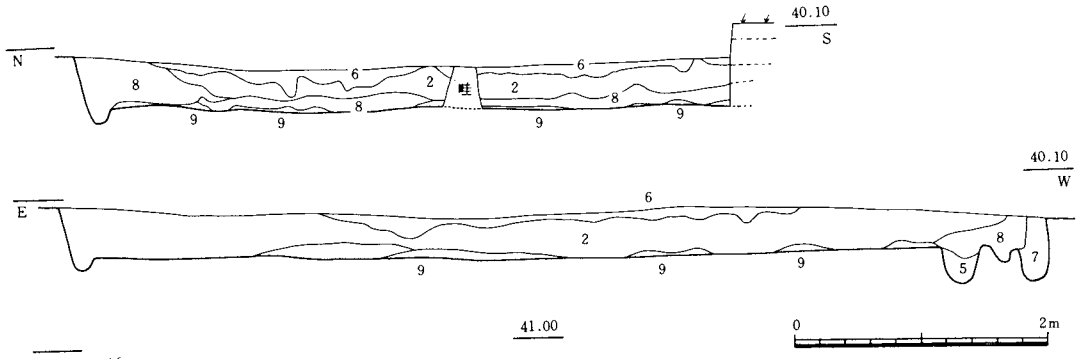
遺構　第二平坦面の東辺、第三平坦面からの斜面裾に立地しているもので、同じような状況のなかに第10号住居址や第14号住居址が配置されている。中地区の南東隅にあたり、検出グリッドはA102～104・B102～104・C103の7個のグリッドに渡るものの、住居址の南のコーナーは工事予定区域外の地区に伸びていく。周辺には西方向に第8号住居址が、北方向には第10・19号住居址が軒を接するような形で配置されており第三平坦面の斜面を挟んで東方向約17mに第25号住居址が置かれている。本住居址の東側斜面ではほとんど遺物の包含は見られず、第三平坦面から廃棄した遺物はこの斜面には投棄されなかったものとしてとらえることができる。

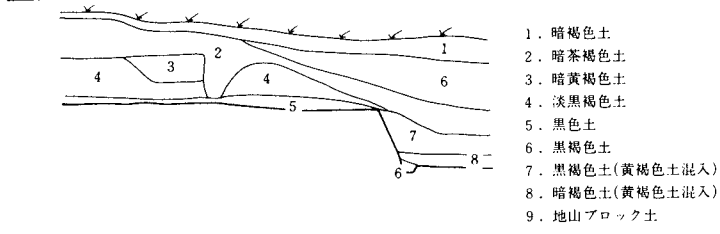
平面プランは隅円方形を呈し、東西方向でのみ範囲を確定することができ770cmを計測する。南北方向は検出した3個の主柱穴の在り方から800～820cmの規模が推定できる。長軸の方位は北43度東に置いている。覆土の上層では住居址の中央部分に表土層の下層である黒色土が、円形に近い形で遺存していた。その下には遺物を包含している茶褐色土が20～50cmの層厚をもって床面近くまで覆っている。床面の所々では地山ブロックをまじえた暗褐色土が見られる程度の比較的単純な状態であった。床面は現表土から東端で106cm、西端で88cmを測り、住居址の落ち込み検出面は東端で黒色土、西半部分では茶褐色粘質土の地山面である。

東端の土層断面で見ると、住居址の落ち込みから90cmの距離を置いて幅40cm、深さ35cmの溝と、それに切り込まれた形となっている幅約70cm、深さ25cmの断面形が箱状をていするものが検出されている。斜面の下に位置していることから、流水を避けるための溝かと想像される。壁の高さは溝底から計測して、東辺で55～60cm、北辺で55cm、西辺で30cmであった。壁溝は全体に巡らされているものと想像され、断面形状U字状を呈し、幅14～20cm、深さ14cmを測る。深さは東辺、北辺で11cmが平均値で、最も深い所で14cmを測る。西辺では床面が傾斜していることから幾分浅くなって7cmである。床面は東から西にかけてゆるく傾斜した形となっていて、その差は10cmである。貼床等の施設は特になされてはいないようだ。床面は東端では暗茶褐色粘質土が、西半部では黄褐色を呈する砂岩質ブロック層が地山として見られた。

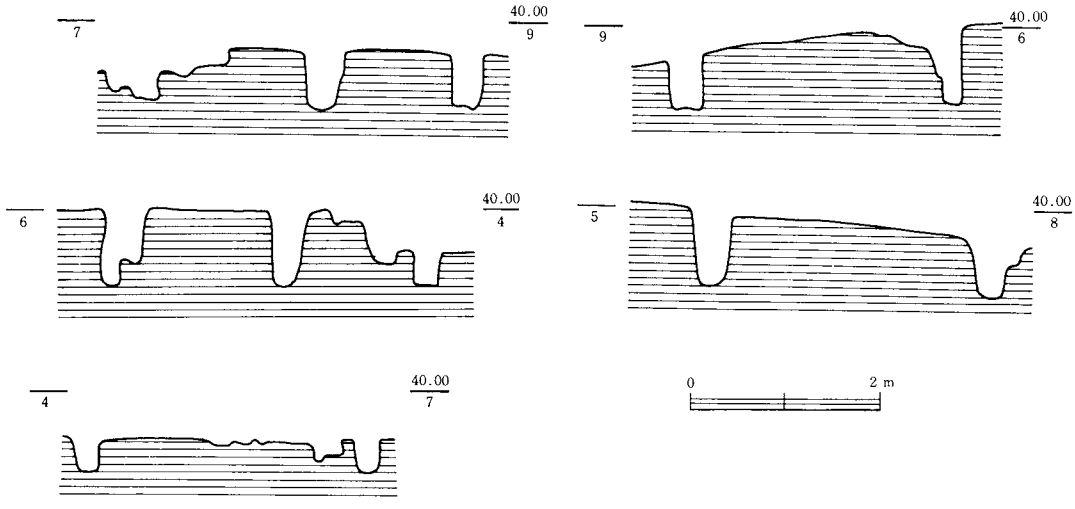
顕著な焼土を持つ炉址は検出できなかったが、床面の所々には炭化物を多く含む汚れが見られた。床面での遺物の検出はなく、覆土に破片が散在した状況で含まれ東端部分である程度のまとまりをもつものの、全形をうかがえる一括の資料は得られなかった。

主柱穴は4本と推定され、3個を検出した。東の柱穴は北側に段をつける掘り方で、平面形は長楕円形をていし、長軸116cm、短軸65cm、深さ98cmを測る。床面から段の深さは20cmで、柱穴部分は径65cmの円形をなす。北西の柱穴は平面形略方形を呈し、南側に段をつける。長辺90cm、短辺68cm、深さ78cmを測り、段の深さは床面から21cmである。柱穴のプランは楕円形を呈し、60×70cmを計測する。柱穴の立ち上がりは北側に傾斜をつけ、南側は内側を抉るような形に掘り込まれているのは、主柱を立てる際に住居の外側に柱を置いていたことが想像される。P1とP2の心々間の距離は390cmである。南西のP3は平面略楕円形を呈し、南側は調査区域外となっている。東側に段をつける二段掘りのもので、長軸143cm、短軸現況で84cm、深さ73cmを測る。床面から段まで





第59図　第９号住居址土層断面図(1/60)

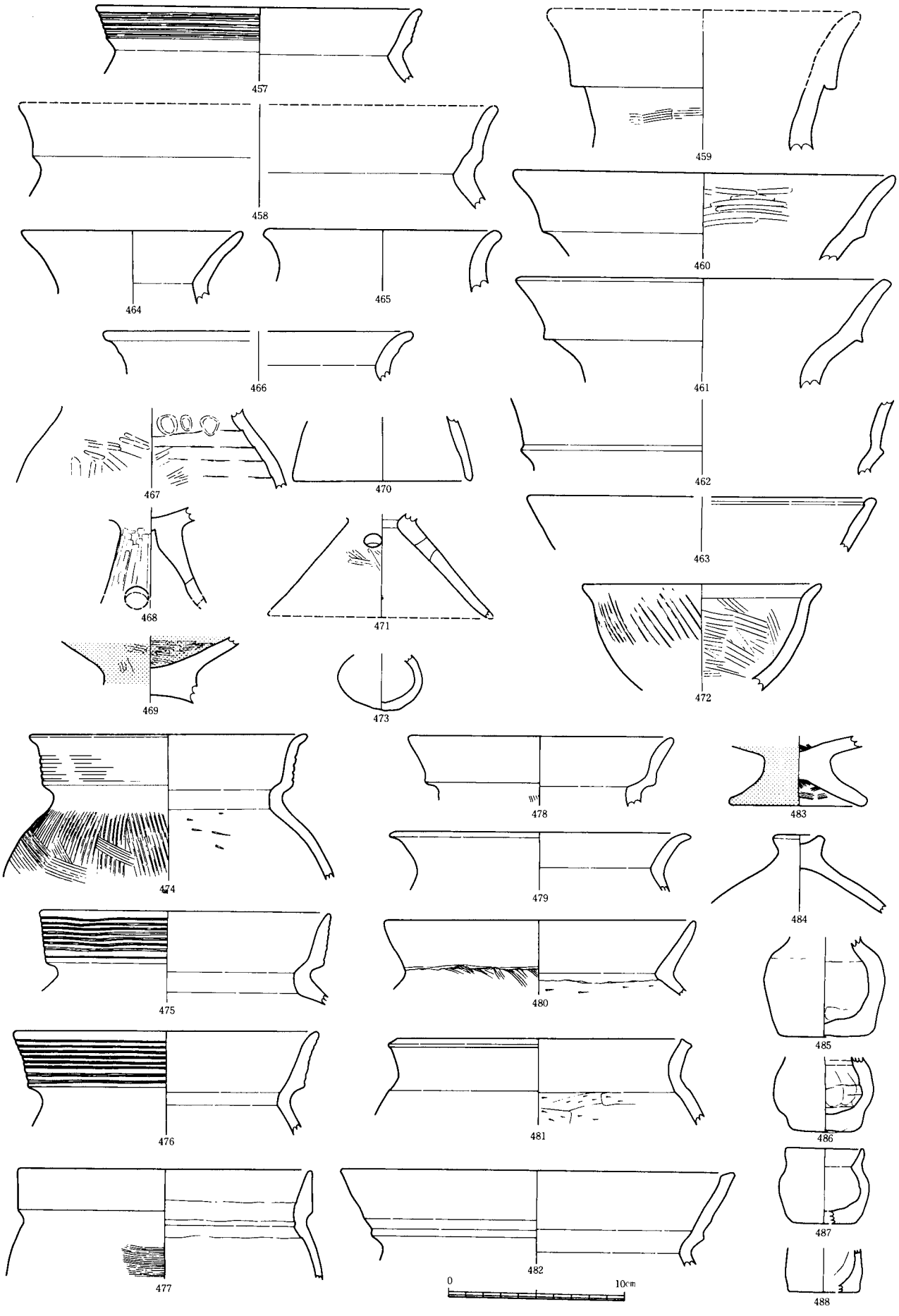


第60図　第３号掘立柱建物断面図(1/80)

は24cmである。柱穴の底面は略長方形を呈し44×34cmのもので、平坦に近くととのえられていた。柱穴の掘り方は東側は傾斜をつけ、西側は壁が抉られるような形状を示していた。Ｐ３とＰ２との心々間の距離は430cmを測る。各柱穴の心々から壁溝の立ち上がり部分までの距離はととのえられていて、東辺・西辺は150cmであるが、北辺は160cmを測りわずかながら広くなっている。

第３号掘立柱建物は住居址の北西隅に重複する形で検出したが、前後の関係はつかめなかった。緩傾斜面上に立地しているために、柱穴の検出面はわずながら異なるが底面のレベルは揃っていると言える。長軸の方位は北２度西に置いている。Ｐ４は平面楕円径を呈し、径57×34cm、深さ35cm（住居址の床面から）、Ｐ５は方形プランで48×44cm、深さ82cm、Ｐ６は方形プランの3段掘りで70×48cm、深さ82cm、Ｐ７は楕円形プランで34×37cm、深さ32cm（住居址の床面から）、Ｐ８は平面方形を呈し、44×43cm、深さ63cm、Ｐ９は方形プランを呈し、38×34cm、深さ60cmを測る。Ｐ４～Ｐ６の心々間の距離は330cm（150cm、180cm）、Ｐ７～Ｐ９のそれは340cm（180cm、160cm）を測り、Ｐ４とＰ７の心々間は290cm、Ｐ６とＰ９のそれは270cmを測る。

遺物　457～473は住居址覆土から出土したもので、474～503は周辺のグリッドから出土したものである。457は有段および擬凹線のつくりが、ともに粗雑になるもので内面の成型も「く」の字状をなしている。458は風化が著しく進行しているもので、調整はまったくつかめない。459は精選された胎土を用いているもので、壷型土

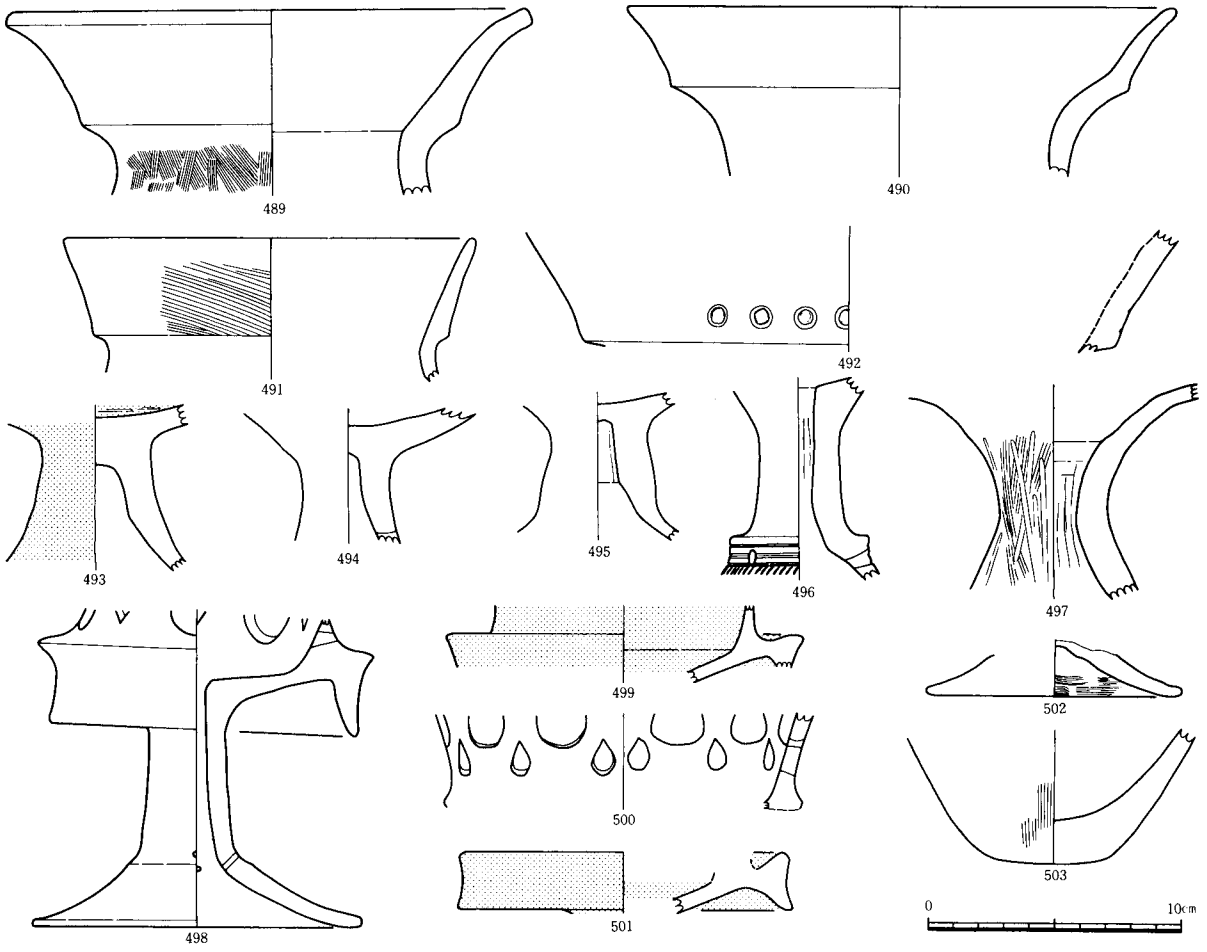


第61図　第９号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

器の口頸部片である。破片の断面で見ると、段を形成したところから胎土の色調が大きく変化していることから、接合の状況が明瞭に見て取れる。器表面は丁寧な横ナデ調整が施されている。460は器台形土器の口縁部かと推定されるが、小片の為に判然とはしない。外周の段の部分はシャープさに欠けているが、内外面はヘラミガキが施されている。胎土は精良である。461は口径21cmを測る壷形土器の口縁かと推定できるもので、口縁下端の段は鋭く尖っている。内外面横ナデ調整でととのえられている。色調は濁黄褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が多い。462は小片のために口径に不安をのこすものであるが、口縁下端が突出する甕形土器と推定される。口縁の端部は面とりが施され肥厚する事が想定できよう。内面の段のつく位置に指頭によるところの押圧がなされている。胎土には微砂粒が多い。453は口縁端部内面が肥厚する甕形土器のもので、薄手につくられているのが特徴的である。胎土に混和されている微砂粒の粒も比較的細かい。464は口径12.4cmを測る壷の口縁で、内外面とも粗雑な調整である。465・466は口縁端部が大きく外反する甕形土器かと推定されるものである。467は内面に粘土紐の輪積み痕跡が明瞭に残されているもので、器表の調整も凹凸のある粗雑なナデである。明るい茶褐色を呈し、胎土の微砂粒は比較的少ない。焼成は良好である。469は台のつく器形であるが、全体の器形は想定しがたい。体部の内外面ともに丁寧な磨きが施され、赤彩がなされている。胎土に砂粒を含むが、精選されていると言える。470は摩耗が進んでいるもので、調整が不明であるばかりではなく器形の在り方そのものが十分につかめないもので、壷形土器の口縁部になる可能性も考えられるものである。472は口径13.6cm、現器高6cmを測るもので、口縁の端部が小さく外展する。内外面ともに目の粗い刷毛状工具でナデられたあとに、横ナデ調整が施されている。淡灰褐色を呈し、胎土には微砂粒も含んではいないが、小型壷や高杯、器台などの精良な胎土とは粒子そのものが異なっているように感じられる。474は口縁の端部が外折するようになるもので、口径15.8cmを測る。口縁に見える擬凹線は刷毛調整痕と見た方が良いようだ。体部の刷毛調整はさほど目立つものではなく浅い痕跡となっているものである。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を少量まじえていて、焼成は良好である。475は図示した中軸線の位置を間違えているものである。訂正しておきたい。口径18.4cmを測る。477は口径16.6cmを測るもので、口縁下端の器壁が極端に厚く成型されているものの、頸部の括れは弱いものである。478は口径15.2cmをはかるもので、口縁の下端が突出するように成型されている。体部への刷毛調整は縦方向と見られる。480は口径17.8cmを測るもので、外折する口縁の内面が幾分内弯気味に成型されているのが特色である。口縁部分は丁寧な横ナデ調整が施され、焼成は堅緻である。481の口径は17.2cmを測る。口唇部に面とりを施して平坦にさせるもので、わずかに肥厚気味となっている。体部の内面はヘラケズリがなされている。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。482は外折する口縁をもつもので、口唇部に面取りが、口縁の下端には突出する形に成型するものであるが、図示したものは若干外折の傾きが強いようである。胎土には微砂粒が多く混和されている。483は壷器形となるものの底部に推定できるもので、器表全体に赤彩が施されている。485～488はミニチュアの土器で、いずれも底部は平底となっている。胎土は微砂粒の混和の少ないもので、内面には指頭によるところの痕跡が明確に残っている。器表面の調整は粗雑である。487は口径4.4cm、器高4.2cmを測る。

489は口径21cmを測る大型の壷の口縁部である。口縁の端部が小さく外傾しているのが特徴的である。頸部に目の細かい刷毛状工具による調整痕が見えているが、口縁部分も同じ工具によって調整されたものと想像される。その後に入念に横ナデ調整が施されたものである。淡灰褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。491は口径16.4cmを測るもので、斜め方向の刷毛調整痕がかすかに残っているものである。黄褐色を呈し、胎土は良好である。492は大型壷の口縁と推定されるが確定は出来ないもので、口縁の下端に径1cmの円形の刺突が0.6cmの間隔で行われている。器表は風化が進行している。496は器台形土器に推定できるもので、脚部の下部に粘土を貼付して段を作り出している。突帯部に擬凹線をいれ、その下にはヘラ先によるところの刻みが施されている。穿孔は2個だけのようだ。498は現器高12.6cmを測るものであるが、全体的に器表が剝落していて調整はまったくつかめない。500は装飾器台の受部の部分で水滴形の穿孔が比較的良好にとらえることができるものである。下端は粘土紐を合わせてあるだけであり、簡単に剝落したものと想像される。胎土は精選されたものが使用されている。501は径13.4cmを測るもので、各部は剝落して欠損している状況がうかがえる。器表面が遺存しているとこ

ろでは、赤彩の痕跡がみられる。淡茶褐色を呈し、胎土は良好である。



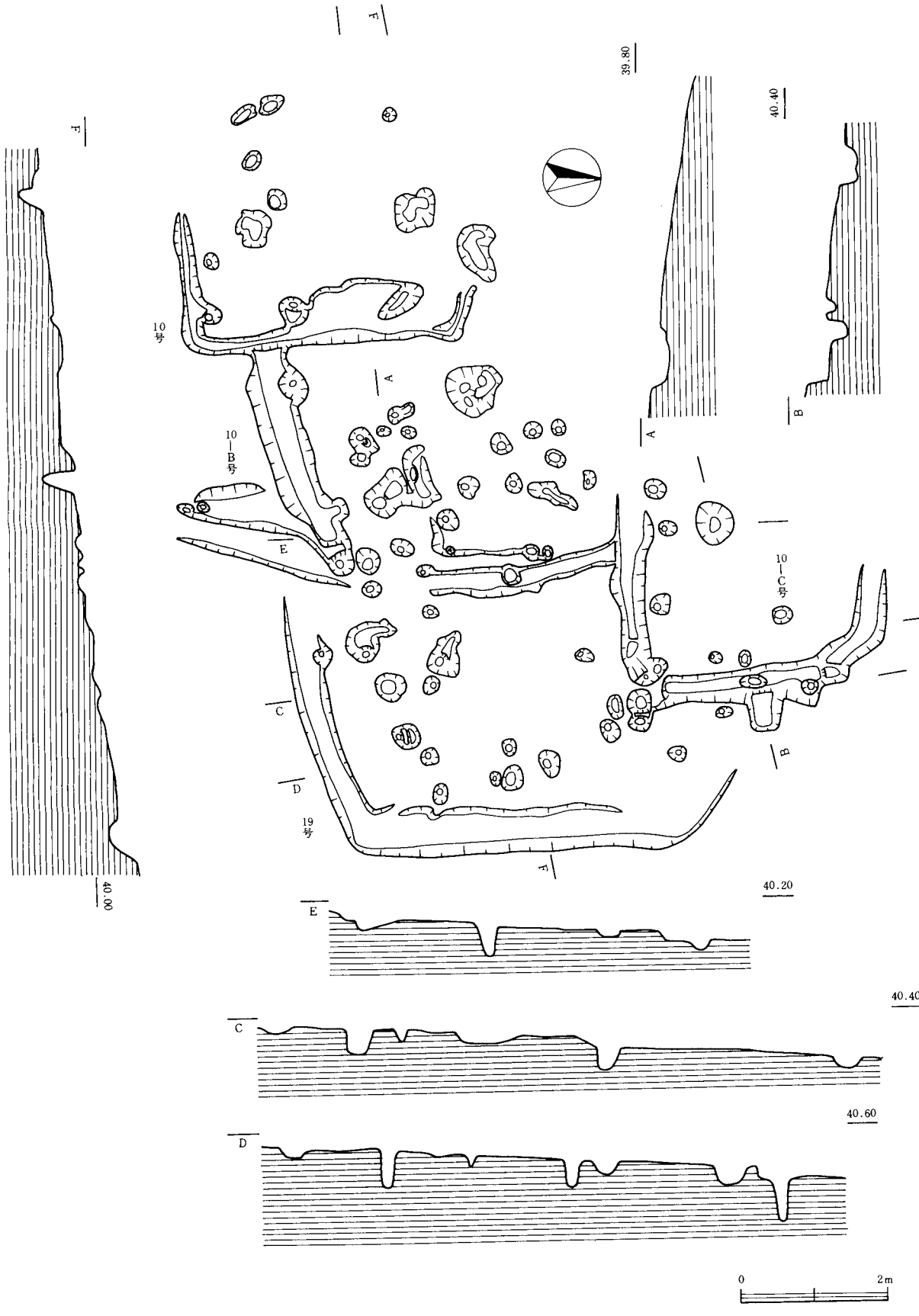
第62図　第９号住居址周辺出土土器(1/3)

8　第10・19号住居址（第63～66図・図版26・27）

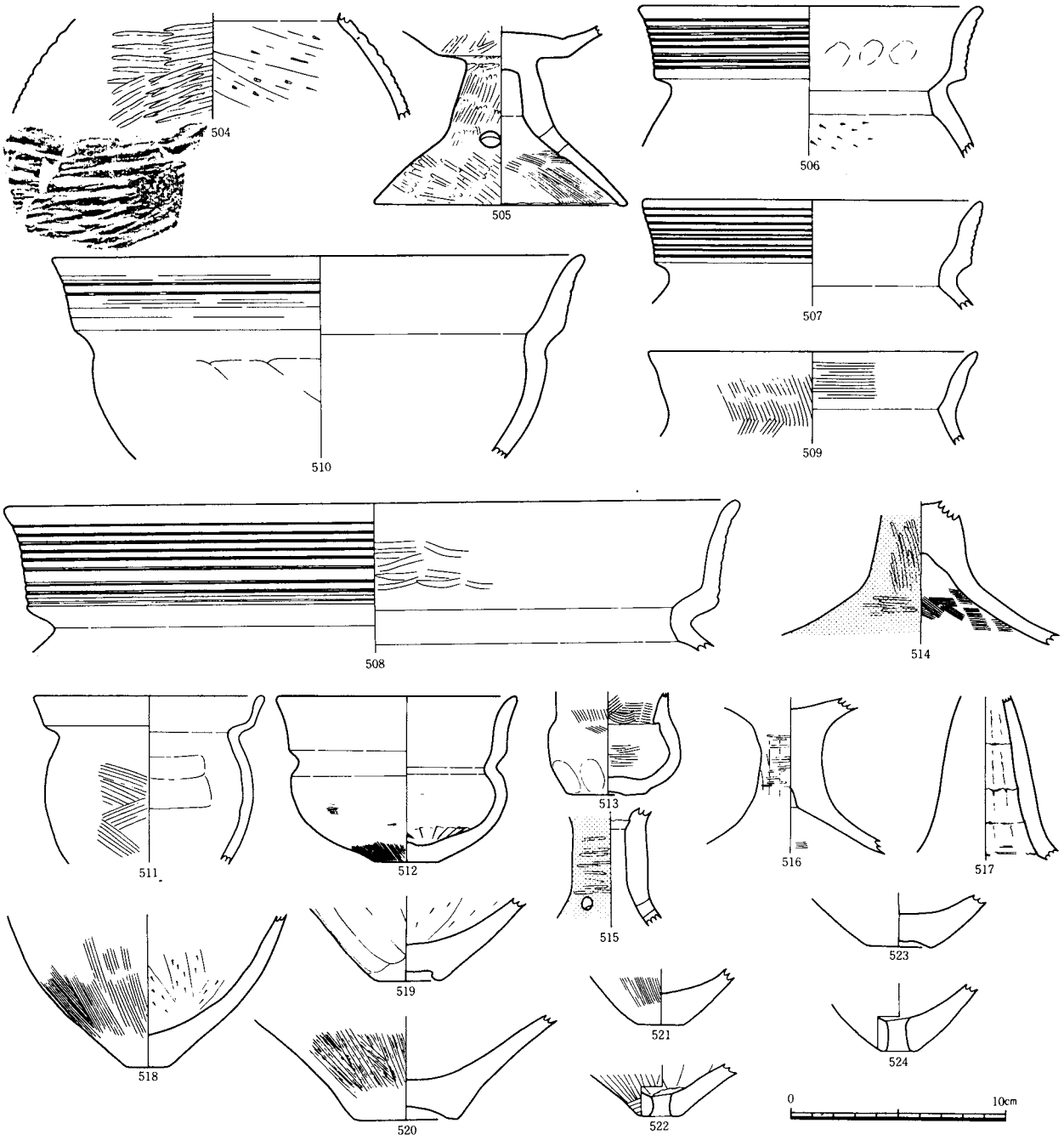
遺構　中地区の南東部分で検出した住居址群で、第三平坦面のある尾根状丘陵の西裾部の緩傾斜面上に立地している。そのために住居址の西側部分の立ち上がりは十分にとらえることができなかった。検出グリッドはC102・103、D102～104、E102～104、F103・104の10個のグリッドにまたがっていた。切り合った4棟の住居址の構築の順序は土層が黒色土や暗褐色土であったところから十分にはとらえることは出来なかった。地山面まで掘り下げた段階でやや不揃いの壁溝と推定できるものを検出して住居址と認識したものであり、出土遺物の帰属も住居址として取り上げたものはごく限られた状況となっている。その中で、最も高い位置で検出した第19号住居址の壁溝の覆土に包含されていたものが、本住居址群の中での時期的な指標を示すものとして考えていくことができるものである。

4棟の住居址はほぼ確実であるが、住居址群の中央に１条の溝が加わっていることから、住居址の数がさらに増える可能性も考えられる。西端の住居址が第10号住居址で、中ほどの南側の住居址が第10－B号住居址とし、その北側に接しているのが第10－C号住居址で、最も斜面の奥に位置しているのが、第19号住居址である。それぞれの住居址の床面は十分に把握することが出来なかったもので、主柱穴についても判然とはとらえられなかった。

第10号住居址の平面プランは隅円方形を呈するものと推定され、南北方向の距離は380cmを測る。壁溝の底面から高さは南端で32cm、北端で13cmである。壁溝の幅は12～16cm、深さ６～８cmである。床面は黄褐色砂岩質ブロック土層である。



第63図　第10・19号住居址(1/80)



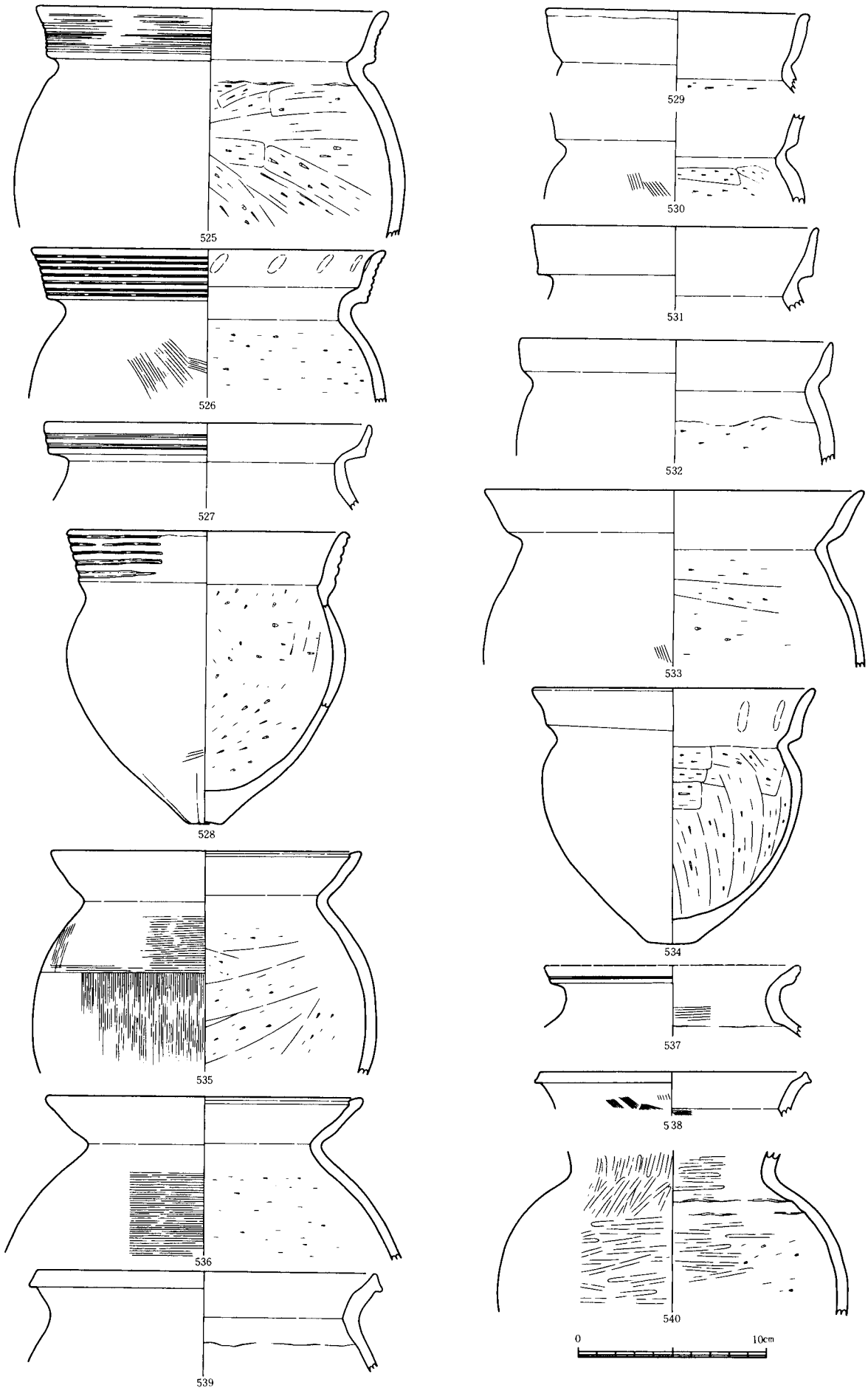
第64図　第10号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

第10－B号住居址は南北方向で約420cm程度のものと推定される。

第10－C号住居址は最も小さいもので、南北方向約360cmを測る。壁溝が南のコーナーで一旦とぎれるようになっている。

第19号住居址は壁高の幅が最も広く作られているものである。南北方向の規模は570cmを越えるものが想定される。壁溝の幅は40～60cmを測り、断面U字状をなし、底面は比較的平坦である。壁溝のコーナー部分に、散発的な形ではあるが本住居址群にあってはまとまりを持つ遺物の出土がみられた。

遺物　504を除いて、周辺グリッドから出土したものである。504は器表面に叩き調整痕を残しているもので、本遺跡においては比較的叩きの状況がはっきりとしている破片である。内面はケズリがなされている。色調は淡褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和されている。505は脚端の径が15cmを測るもので、短い脚柱から外折してのびる脚が付く。脚部の端には平坦な面とりがなされている。受部の平坦部はごく限られた範囲にとどまっていて

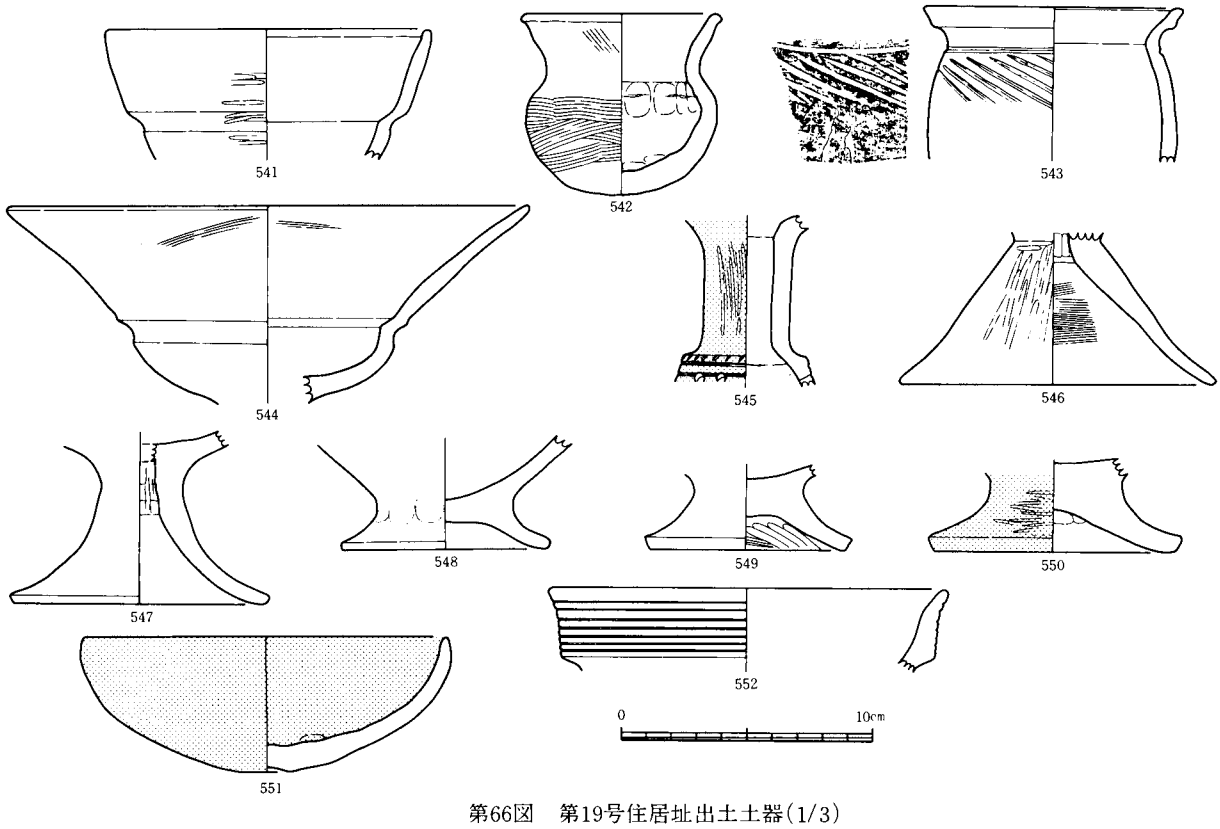


第65図　第19号住居址出土土器(1/3)

外傾して立ち上がる口縁部の段は辛うじて付けられていると言える。色調は淡黄褐色を呈している。506～508は擬凹線を持つ甕の口縁部で、510は鉢形土器が想定される。506は口径16cmを測るもので、外反気味の口縁部の中ほどに指頭圧痕が浅く遺存している。比較的厚手に作られていて、口縁部に煤の付着が見られる。胎土には微砂粒が多い。508の口径は34.8cmを測る大型の甕で、口縁の端部が僅かに開くものである。擬凹線はやや浅い状況で引かれている。口縁の内面では段の部分に接合した際の圧痕がのこり、ヘラミガキ調整がなされているのが観察できる。甕の調整で磨きが施されているのは稀有の事例と言える。淡褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く含まれているが良好と言え、焼成も良い。510は口径25.2cmを測るもので、鉢器形として図示したが小片であり不安がある。風化が進んでいるために、器面の調整は不明である。茶褐色をなし胎土は精選されている。511は口径10.6cm、現器高7.6cmを測るもので、口縁端部がわずかに肥厚気味に成型されている。内外面ともに横ナデ調整がなされている。512は口径11.2cm、器高7.7cmをはかるもので、復元完形品となった。底部は縦方向に調整された後に、削りとるような形で平底風に調整したものである。体部の中央から上の部分は横ナデが施されている。513はミニチュア土器で、口縁の部分のみに刷毛調整が荒っぽくなされていて、体部は指でなされているために歪な器形となっている。底部は中央が窪む明確な平底である。

525～551は第19号住居址から出土した土器で、552のみが周辺のグリッドつまり、E105グリッドから出土している。526・527・530・532～534・539・540・544の資料が壁溝から出土したものである。525は口径19.2cmを測るもので、擬凹線は刷毛調整によるものと推定されるものであり浅い。体部は刷毛調整の後でナデが施されているものと推定したが、刷毛調整がなされなかった可能性も考えられるものであった。色調は茶褐色を呈し、胎土は微砂粒が混和されている。526は口径19.2cmを測るもので、口縁の端部が尖り気味に外に開いていくもので端部に近い位置に指頭圧痕が認められる。擬凹線は彫りの深い細い工具で巡らされている。527は口縁部の短いもので、本遺跡では類例の少ない器形とすることができる。全体に摩耗が進行している。528は図上で復元した資料で、口径15.4cm、復元器高15.6cmを測る。口縁下端の段はほとんど形骸化して丸味が強く、また、擬凹線の引き方も粗雑なものがあり、擬凹線の上からさらに横ナデ調整が加えられて、擬凹線が潰されている状態となっている。底部は尖り気味の形ばかりの平底となっている。胎土には砂粒の混和が多いものの、器表面では平滑で目立たない。底部の周囲は火熱を受けて赤変している。531口径15.2cmを測るもので、口縁部は板状工具によって面がとられたような成型となっている。口縁の内面は内側に弯曲するような成型となっている点が注意される。532は尖り気味の口唇部となるもので、段の形勢は甘く、また、頸部の括れも弱いものである。内面の削りの調整は粗雑なものがある。淡茶褐色を呈し、胎土は普通である。533は煤が不着している器表の一部を除いて、著しく摩耗が進んでいる。534は体部の一部を欠いているだけで、復元完形品となった。口径15cm、胴部最大径13.8cm、底部径2.5cm、器高13.7cmを測る。口縁の外周は刷毛による横ナデが入り、体部は縦方向のナデ調整が施され、その痕跡はほとんどとらえる事ができない。内部のヘラケズリは肩部は横方向、底面は斜め方向に行われている。色調は淡褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が多い。焼成は堅緻である。535はいわゆる内面肥厚の口縁をもつ甕で、口径17.4cmを測る。535の胴部最大径は18.8cmを測り、口唇部は面取りを施したもので内面にわずかに段が形成される。体部は全体に縦方向の刷毛調整を行った後、肩部から上に横方向の調整を加えている。内面は全体に削り調整であり、器壁は薄手に成型されている。色調は濁褐色を呈し、胎土に微砂粒の混和が多い。536の口唇部も面取りを施しているもので、尖り気味の成形となっている。胎土、焼成の具合は535のものと同じである。537は図上では口唇部が肥厚する形で表したが、有段口縁に成る可能性が推定できるものである。頸部は大きく弯曲した形となるもので、器表面は風化が進んでいる。538・539は口唇部が外側に向いて肥厚して段を形成するものである。口径14.2cm・18.5cmを測るもので、口縁部は横ナデ調整が成されている。胎土は普通である。540は口縁部を欠いている壷型土器で胴部最大径18.8cmを測る。内外面とも磨き調整がなされていて、平滑に仕上がっている。淡茶褐色を呈し、胎土は精選されていて微砂粒もほとんど包含していない。焼成も良好である。

541は口径13cmを測るもので、内外面ともに入念に磨き調整がなされている。口縁の下端、体部の境や内面の



第66図　第19号住居址出土土器(1/3)

段の稜線は丸味を帯びていると言える。胎土は良好で、焼成は堅緻である。542は口縁の一部を欠いているだけの完形品である。口径8.2cm、器高7.2cmを測る。底部は丸底で、口縁部の内外面、体部は横ナデ調整がなされ胴部の最大径になるあたりで刷毛調整が施されている。体部の内面は指頭によるナデが入れられ、比較的平滑な仕上がりとなっている。胎土、焼成とも良好である。543は口縁が小さな有段を持つもので、肩部以下に斜め方向のヘラ先による沈線が、ほぼ等間隔に引かれている。内面の調整はナデで、平滑に仕上がっている。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。544は口径20.8cmを測るもので、内外面ともに摩耗が進み器表面は全て剝落してしまっている。体部は丸味を以て成形され、口縁部との境である括れの部分は弱く段の形成もかろうじて遺存していると言う感じである。淡黄褐色を呈し、胎土は精選されている。545は器台形土器の脚柱部で、全体に赤彩が施されている。円柱状の下端には段が設けられ、刻みと列点が加飾され、さらに2個1対の穿孔が3カ所になされている。547はラッパ状に開く脚部で、高杯が想定できる。脚径で10cmを測る。淡赤色を呈し、胎土は良好、調整は風化で把握できない。548は甕形土器につく脚台でおおむね指頭による調整でとどめられている。淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。549・550はやはり脚台であるが、549の底面にはヘラミガキがなされ、550では器表面に丁寧なナデ調整と赤彩が施されている。後者は微砂粒の少ない精選された胎土である事などから壷形土器に付くものであろう。551は口径14.6cm、器高5.3cmを測る椀形土器で、本遺跡においては希な器種である。内湾気味に立つ口縁の口唇部は尖り気味に成型され、体部は基本的には丸底であるが、窪ませた形の小さな底部が作られている。内外周ともナデ調整がなされ、全面に赤彩が施されている。色調は灰褐色を呈し、胎土は精選されている。

9　第22号住居址（第11・67～70図）

遺構　本住居址は中地区の南側のほぼ中央に位置していたものである。平坦面が最も安定した地点で、黒色土が床面以下に厚く堆積している。周囲は第7号住居址が南側に接するような形で立地し、第2号掘立柱建物が北西に位置している。東方向約13mには第10号住居址があり、北東方向約10mには第14号住居址が位置している。

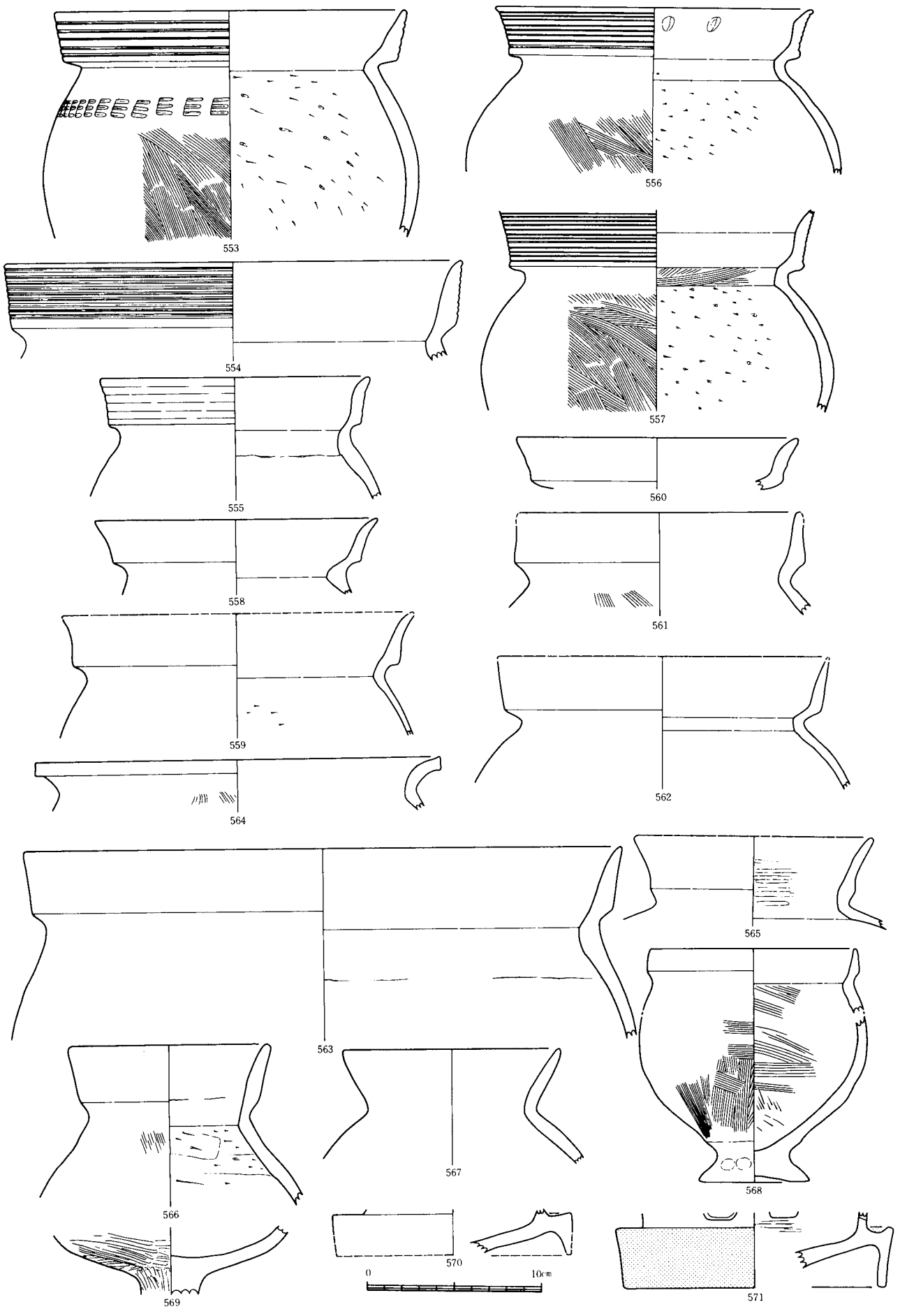
調査区画のDラインの土層断面で確認するにとどまったもので、その位置や方向、規模については全く把握することができなかった。ここにお詫びしておきたい。D98～100にかけての土層断面に黒褐色土を切り込んだ形の暗褐色土が堆積している。長さにして東西方向で約400cmで、壁の高さは50cmを測る。西端の落ち込みは、試掘調査の際のトレンチにかかっているために不明である。壁溝および貼床等の施設は確認できなかった。遺物の出土は比較的多くE99グリッドを中心にして検出されている。

遺物　住居址の範囲が確定していないが、土器の出土が多く見られたE99グリッドを中心にして図示している。また、その周辺のグリッドから得られたものをも含めている。553～583はE99・100グリッドから出土したもので、ほぼ、住居址内からのものと考えている。

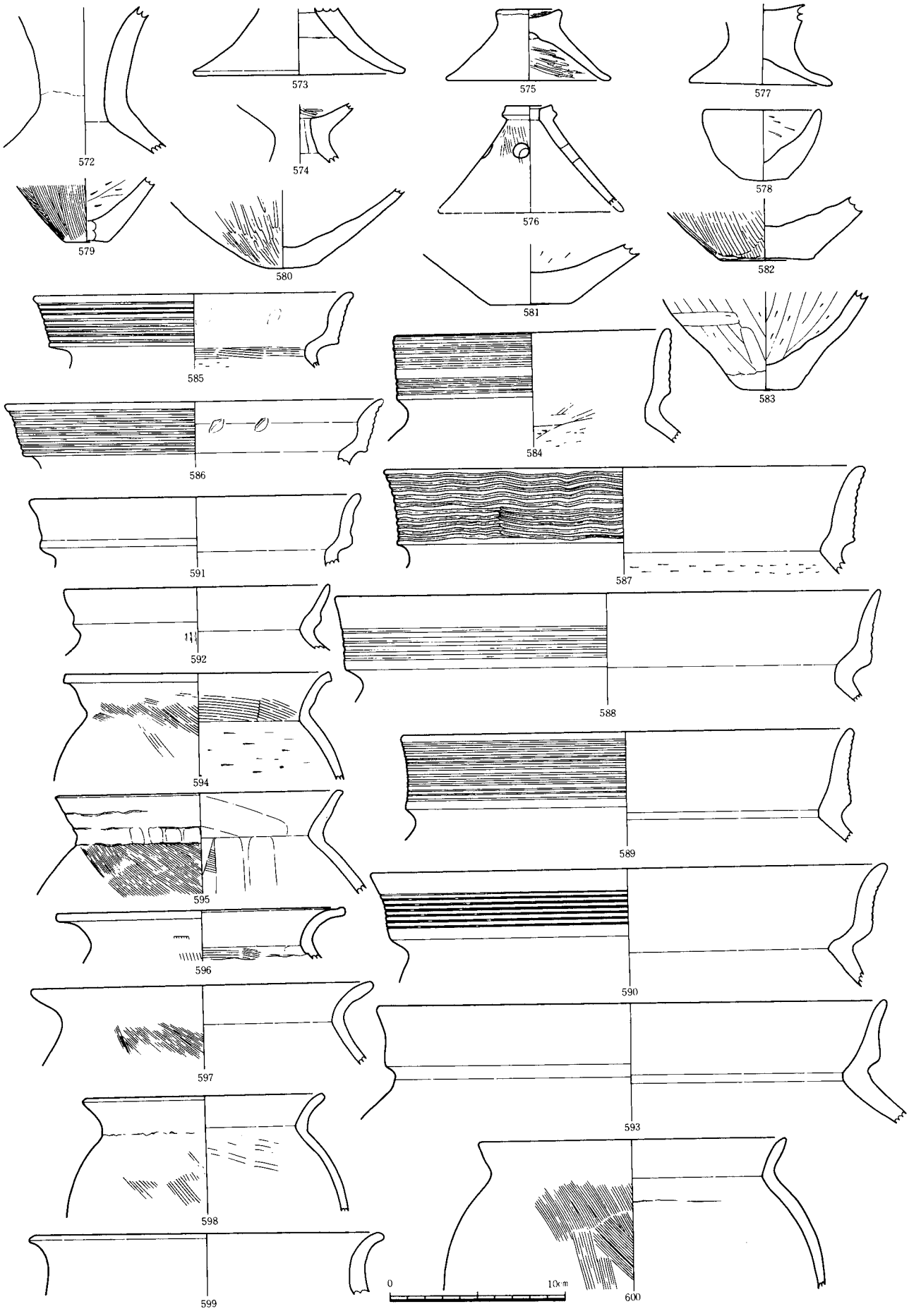
553は口径20.2cm、現器高13cmを測るもので、口縁内面の段が消失し内傾気味の成型となっていて、口縁の断面が三角形になるような形になっている。口縁の擬凹線および肩部の押し引きは浅く粗雑なものである。灰黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。554・555は風化が進行しているもので、胎土、焼成とも良くない。556は口径18cmを測るもので、口縁端部を押して外傾させている。口縁の内面には指頭圧痕が器壁の厚さが変わる位置に見られる。口縁の擬凹線は強く明確に引かれているために、口縁下端が突出するような形となっている。全体的に成型はシャープなつくりになっていると言える。肩部は刷毛調整の後横ナデが加えられている。黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。557は口縁端部器壁が556と同じ様に薄く成型されているもので、口唇部分を欠いている。口縁の内面は指頭によると考えられる押圧で調整されている。口縁の下端部は細い粘土紐を貼付して、段を際立たせているのが観察できる。胴部は斜め方向の刷毛調整が施されている。頸部近くは横ナデ調整がなされ刷毛調整痕の一部を消している。色調は茶褐色を呈し、胎土に均一な砂粒が混和されている。558・559・561・562・563は、いずれも風化のため器肌面が荒れていて調整はつかめない。565は口径13.6cmが想定されるもので、口頸部は丁寧な横ナデ調整が施されていて、器壁は薄く作られている。566は口径11.8cmを測るもので、有段の部分が丸味をもっている。口縁部は横ナデが行われている。体部は縦方向の調整のようだが器肌面が荒れているために判然とはとらえられない。内面のヘラケズリは、ナデ調整の側面も見られ中途半端である。淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒の量が多い。565の成型、胎土に際立った違いを見ることができる。568は口径12cm、復元器高13.2cmを測るもので、二次的火熱を受けて底部、口縁部は淡赤紫色をなしている。口縁部分は横ナデ調整がなされ、体部は縦方向の刷毛目が見られる。内部の底面近くはナデが施されているようだが、器肌面に凹凸が目立つ。569は高杯の体部片で、全体的に皿状をなすもののようだ。底面に粗い磨き調整が入れられている。570は鍔の口径は13.6cmを測り、器肌面は著しく荒れている。571の鍔の径は15cmを測る。鍔の器表面だけに赤彩の痕跡が見られる。器表全体に丁寧な磨き調整が施されている。胎土は精選されている。

572・573はともに器肌面の風化が著しく、調整は不明である。575はつまみ部の径は3×3.5cm、口径9.2cm、器高4cmを測る。器表面は全体に磨き調整がなされていて、胎土に含んでいる砂粒の量は少ない。576は小型器台の脚部であるが、受部の接合部分が器肌と同じ色調に焼成されているために、蓋器形の可能性も考えたものである。受部の接合部分を除いて入念な磨きが施されていて、平滑に仕上がっている。穿孔は4個であるが、その間隔はやや不揃いである。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも極めて良好である。578はミニチュア土器として図示しているが、器肌面が著しく荒れているために確定は出来ない。あるいは、甕型土器の底部になる可能性の方が高いと言えそうである。

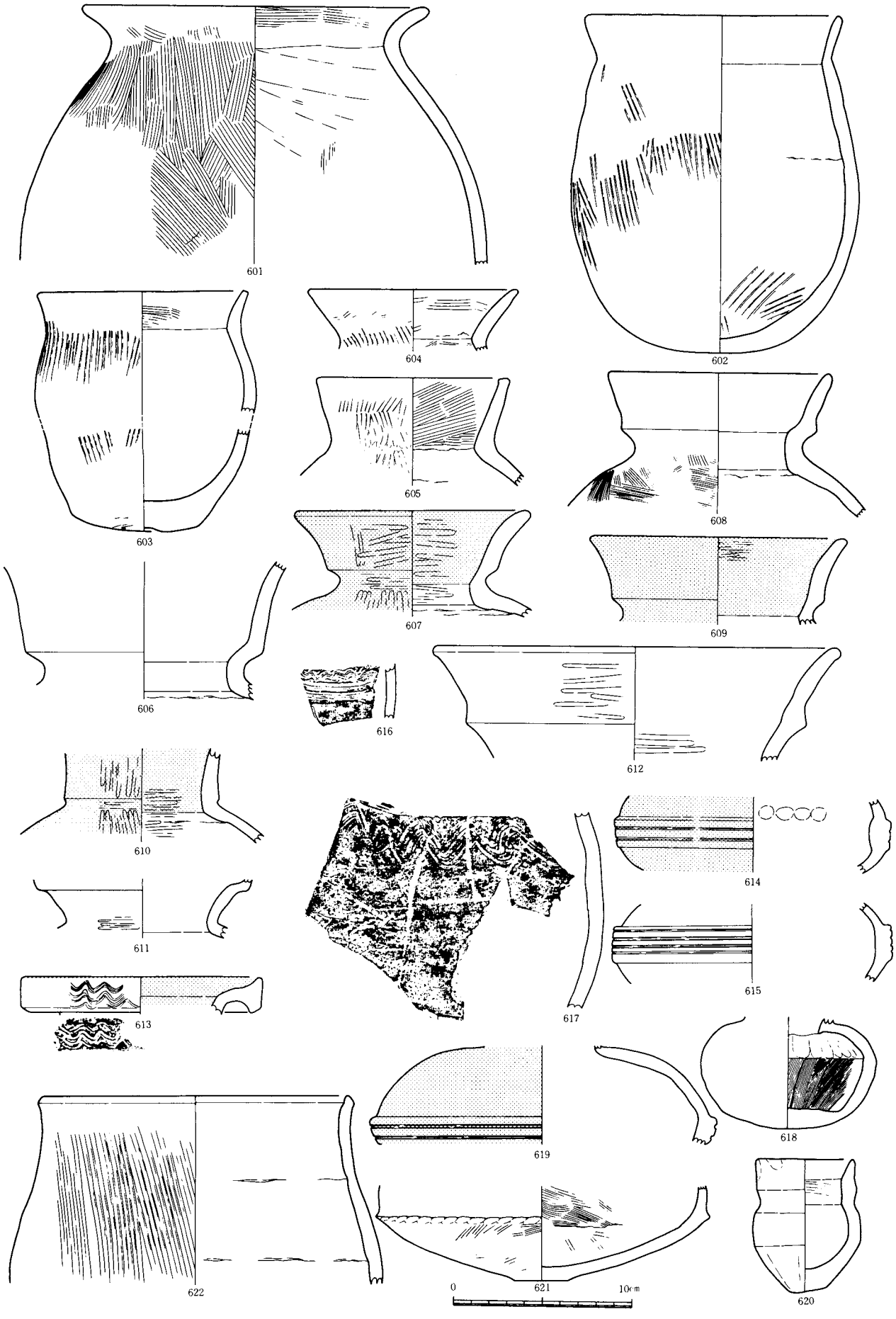
585から以下のものは周辺から出土したものである。585は口径18.2cmを測るもので、口縁端部を外傾させて口唇部が尖り気味になる。器壁の厚さが変わる位置には、指頭圧痕が浅い形で遺存している。擬凹線は比較的はっきり巡らされている。淡黄褐色を呈し、胎土に微砂粒の混和が多い。焼成は堅緻である。587は口径27cmを測る大型の甕である。擬凹線の引き方はやや粗雑である。588は口径30.8cmに復元できたが、小片であり、やや不安がある。器表面は風化して荒れているが、口縁の内面に指頭圧痕が認められる。589の口径は25.4cm、590の口径は29cmに復元できた。いずれも、器肌面は荒れていて、胎土の砂粒の量も多い。591・592は口縁の下端が突帯状に突出するような形で成型されている。594は口径15.2cmを測るもので、「く」の字状口縁の端部に面取りを施



第67図　第22号住居址出土土器(1/3)



第68図　第22号住居址及びその周辺出土土器(1/3)



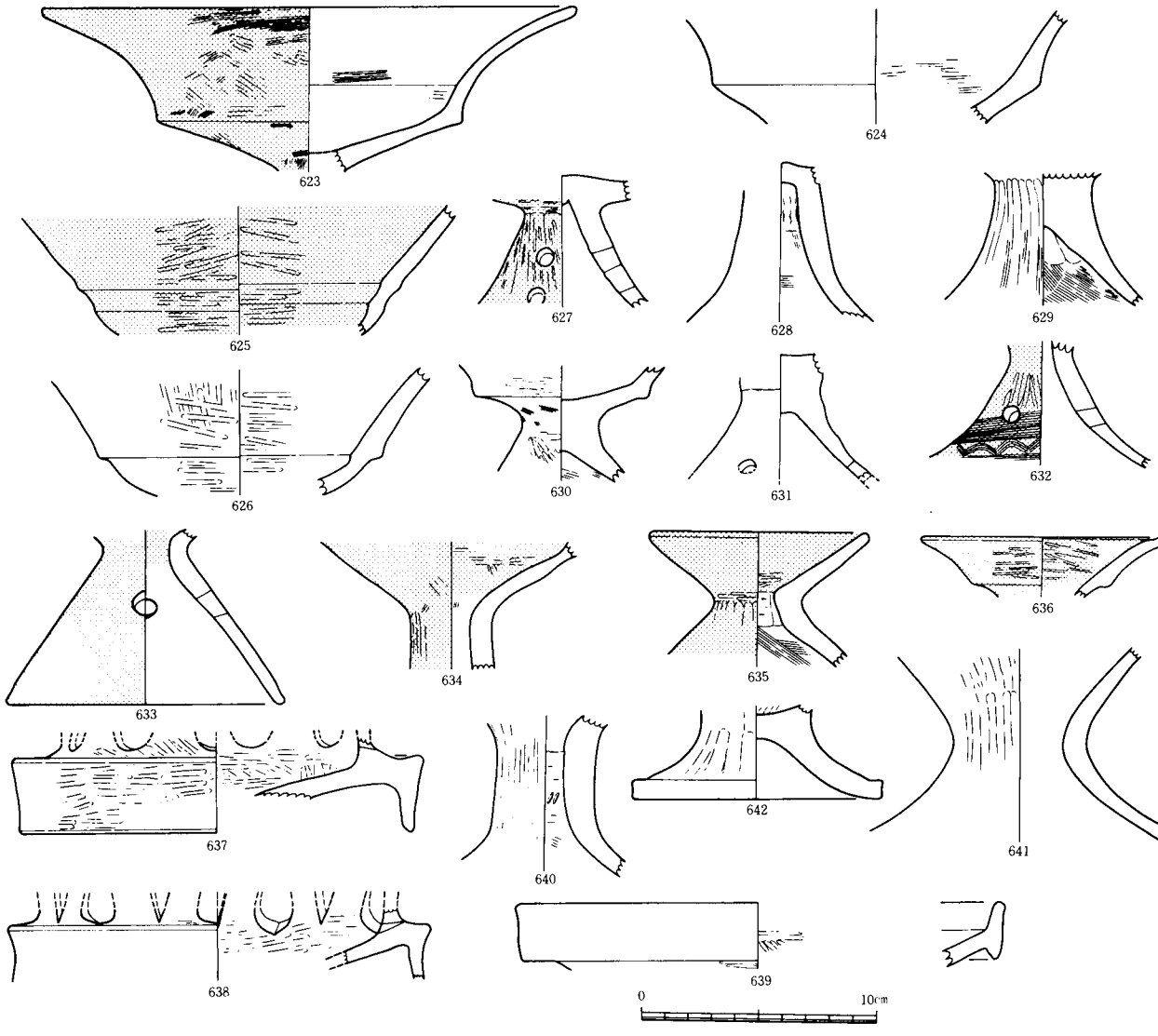
第69図　第22号住居址周辺出土土器(1/3)

してさらに外展させる。器表面全体に刷毛調整が縦方向になされていて、内面はナデが施されている。口縁部の上半だけに横ナデ調整がなされている。596・597は外展してのびる口縁をつけるもので、前者の口唇部は丸く整えられ、横ナデ調整が丁寧に入れられている。597は口径19.6cmを測るもので、体部は目の細かい工具で斜め方向にナデられている。前者は胎土、焼成とも良好であるが、後者は摩耗が著しく、胎土には砂粒が多い。598は口径13.8cmを測るもので、器壁が比較的薄手に作られているのが特色としてとらえられる。口縁は横ナデ、体部の内面は刷毛状工具で平滑に整えられている。胎土には微砂粒の含有が多く、焼成は堅緻である。600は口径17.2cmを測るもので、「く」の字状に折れる口縁がやや丈の短いものである。口縁の内外面は横ナデ調整が施され、器表面は刷毛調整が、体部の内面はナデによって平坦に整えられている。淡褐色を呈し、胎土に砂粒の包含は少ない。

601は口径19.6cm、胴部の最大径26.4cmを測る外展する口縁をもつ甕形土器である。口縁の内外面は横ナデ調整が簡略になされ、胴部はやや不規則な形で刷毛が入れられている。内面の調整は板状工具によるものと推定されるものでナデられている。濁黄褐色を呈し、胎土は甕形土器に通有のものであり、微砂粒の混和が多い。602の口径は14.4cm、器高19cmを測るもので、復元完形品となった。全体に摩耗が進んでいて十分に調整をつかめないが、胴部は縦方向の刷毛調整が、胴部の内面は刷毛の後にナデが加えられているようだが、器壁に凹凸が目立つ。底部は径の大きい丸底となっている。色調は黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が若干混和されている。603は口径12cm、復元器高約13cmを測るもので、底部はヘラケズリによって粗雑に作り出されていて、平坦な面をもっていない。わずかに外傾する口縁部分は横ナデがおこなわれ、体部の内面は調整痕を残さないようなナデがなされている。底部の周辺は602を含めて、二次的火熱によるところの赤変が認められる。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。604は口径12cmを測るもので、頸部の位置で体部を剝落している。内面は横方向、外周は縦方向の刷毛が入れられた後、横ナデ調整が加えられている。605は口径11cmの壷形土器の口縁部で、口唇部に平坦面をつくるようなナデが入れられている。外周は刷毛の後ナデが施されるが、内面は刷毛調整痕がそのまま残っている。606～612は有段口縁をもつ壷形土器の口縁である。607は口径13.4cmを測るもので、内外面ともに丁寧に磨きがなされ、赤彩が施される。口縁の中程と内面の頸部近くに炭化物の付着が観察できる。胎土は精良である。608は口径12.4cmを測るもので、口縁は横ナデ、体部は刷毛調整が粗雑な形で行われている。体部の内面は荒れているのであるが、はじめから凹凸の多いものだったと推定される。色調は黄褐色を呈し、胎土は良好である。611は外反してのびる口縁の端部が屈曲して立ち上がるものと推定されるもので、口唇部を欠いている。612は口径22.8cmを測る。613は口径13.6cmを測るもので、頸部から大きく外展して口縁帯が形成されるものである。幅の狭い口縁帯に粗い波状文が加飾されていて、上を向く器面に赤彩が施されている。胎土は甕形土器に使用されているものと同じようなもので、砂粒の混和が目立つ。614・615は装飾壷の体部片である。ともに、帯状の狭い突帯に沈線が入れられているのであるが、器表面が荒れていて、調整はつかめない。616・617は波状文が入れられているもので、前者はその他に平行線文が加わる。前者の器形は小型の壷器形と推定され、後者は内面の刷毛目や器表の粗いナデから、大形のやはり壷器形が想像される。

618はミニチュアの壷器形のもので、体部はほんんど完形で出土している。胴部の最大径の位置で上下が接合されたものである。体部は凹凸が若干あるもののナデ調整が丁寧になされている。色調は淡褐色を呈し、胎土は良好である。619は軟質な焼成のために器表面はまったく荒れていて、かろうじて赤彩の痕跡を認めるのみである。620は口径5.2cm・器高7.5cmを測る完形のミニチュア土器で、全体に簡略なナデがなされている。褐色を呈し、胎土に微砂粒が多い。621は十分に接合できず図上で復元したが、器形は壷形土器が推定されるもののやや不明確である。形ばかりの底部が作られ、体部の中央に粘土紐を貼付して突帯を作り出す。その突帯を指で押圧した痕跡が図示したものである。622は縦方向の刷毛調整が見られるものであるが、口縁部分および内面の調整も摩耗のために判然とはせず器形的にも大きな問題点を持っているものである。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土にわずかに砂粒を含んでいるものの良好で、焼成は軟質である。

623～631は高杯形土器に想定できるもので、623の口径は23.2cmを測るものである。器壁は比較的薄手に作ら

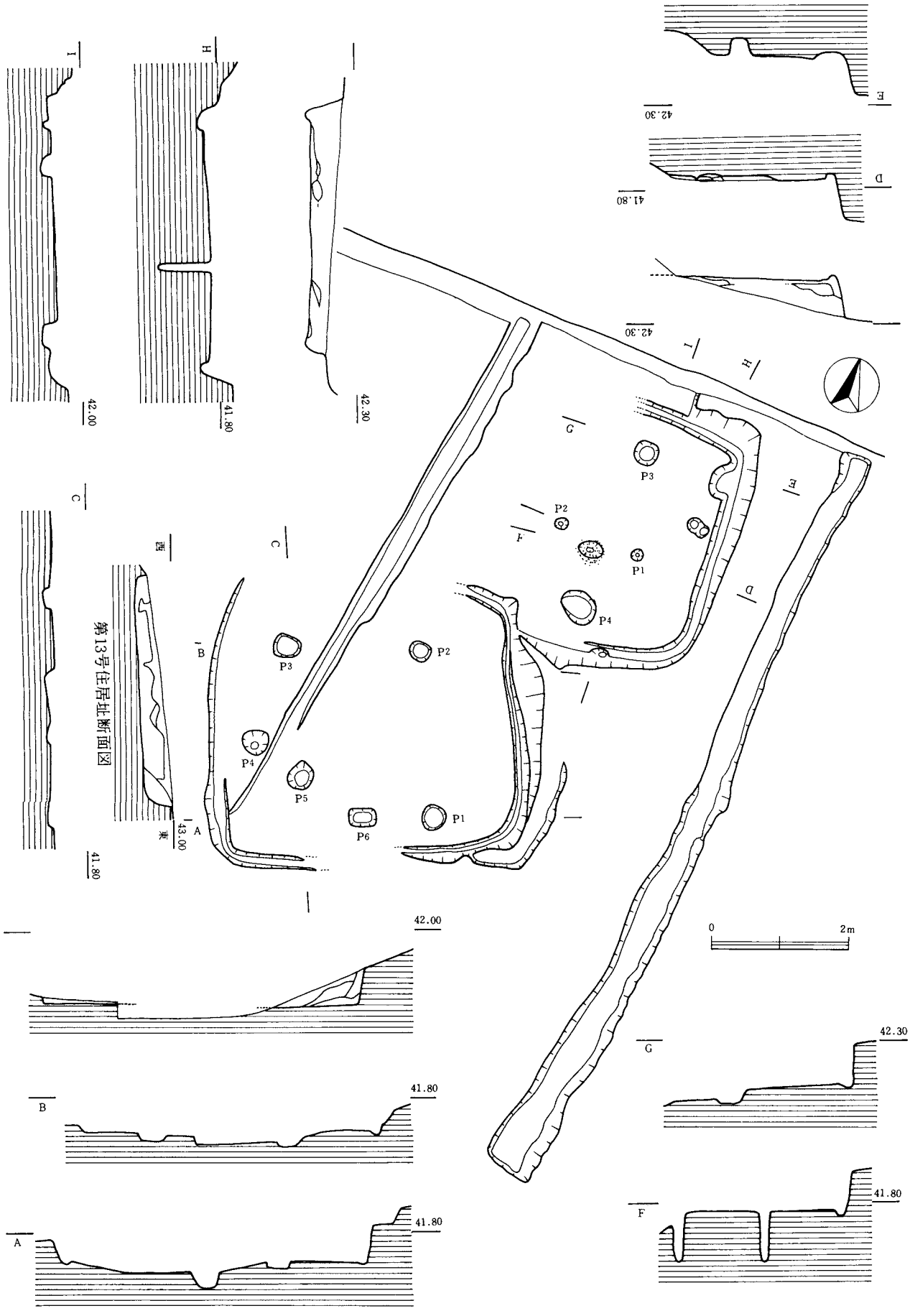


第70図　第22号住居址周辺出土土器(1/3)

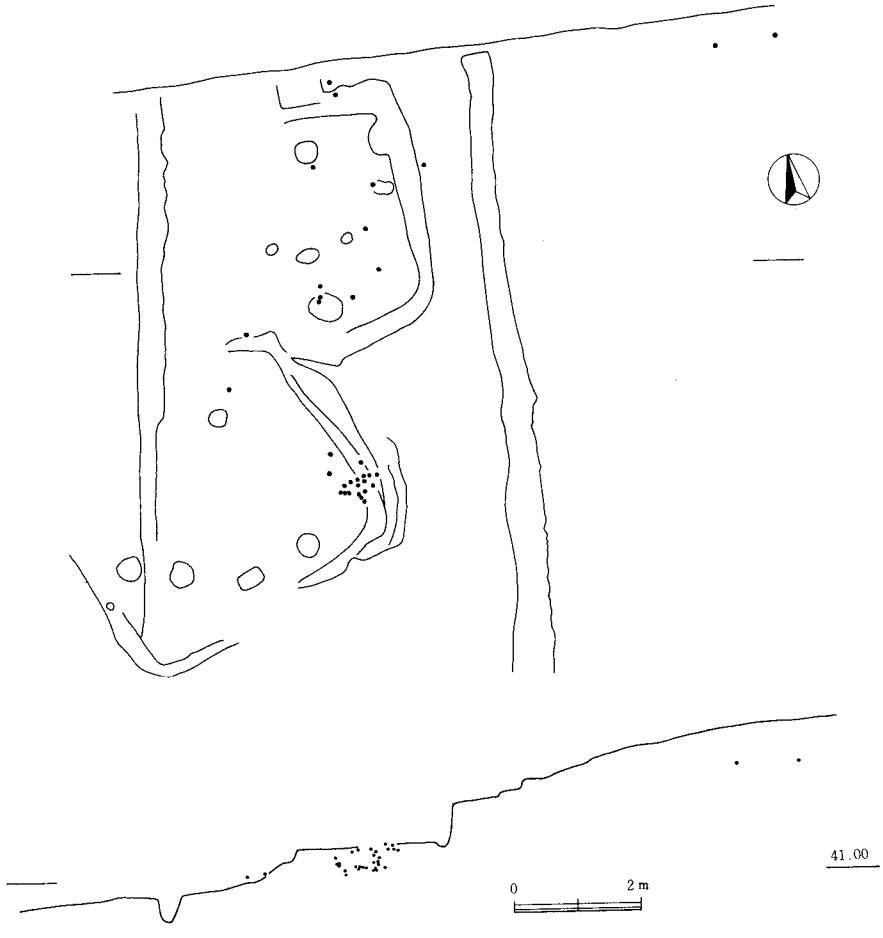
れ、器表の段は粘土紐を貼付して稜を鋭くしているのが見られる。底面は皿状の器形をもつものの、口縁部との境界は段がやや不明瞭となっている。表面は刷毛調整を施した後に、磨きが行われていて、一部の器表にその痕跡が残っている。624～626は小片での復元であり若干器形的に不安が残るものである。ともに精選された胎土が使われ、焼成も良好である。627の脚部は縦位置に2個1対の穿孔が施されているもので、本遺跡では例の少ないものである。632の脚部の下半には櫛状工具によって波状文や平行線文が施文されているものである。器表は磨きがなされた後、赤彩も施されている。淡褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。634は内外とも赤彩がなされているが、段のつく所で剝落しているものである。脚柱の径は3.5cmを測る。636は口縁の大きく開く小型の壷器形を取るものと想像される。内面は平滑に磨かれている。639は内外面ともやや粗雑な磨きがなされているもので、高杯形土器になる可能性を考えたが、装飾器台の鍔になることもあるといえ、器形的に問題が多い。淡黄褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和されている。

10　第11・12号住居址（第71～76図・図版25）

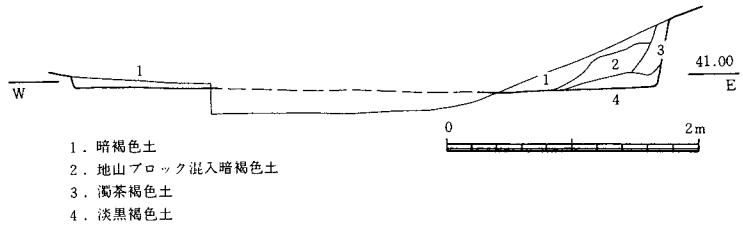
遺構　本住居址群は中地区の北東端部、第二平坦面に突出する瘤状の平坦地と尾根状平坦面である第三平坦面との境界に位置して検出された住居址群である。さらに微地形的に見ると、瘤状平坦地にのる第1～3号住居址の背後に当たるのであるが、第三平坦地の傾斜面に住居址の掘り込みがあるところから、距離的な状況とも考え



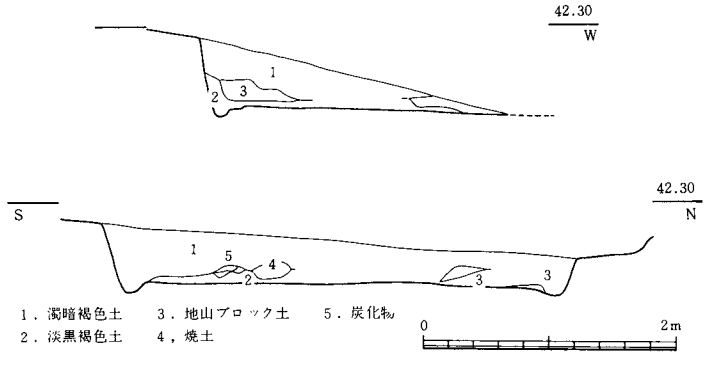
第71図　第11・12号住居址(1/80)



第72図　第11・12号住居址遺物出土状況(1/120)



第73図　第12号住居址土層断面図(1/60)



第74図　第11号住居址土層断面図(1/60)

て第三平坦面の第21号住居址を核とするグループに包括されるものと理解できる。検出グリッドはO101・102、P100・101、Q101・102の6個のグリッドにわたる。周辺で検出した住居址は、調査区の北端にあたるところからそれほど多くはないが、東方向約4mには第13号住居址が、南東方向約8mには2基の土坑を挟んで第21号住居址が、南西方向約9mには第1号住居址が配置されている。斜面上に位置していた事から、斜面の裾の部分はとらえられなかった。

第11号住居址は平面プラン隅円方形を呈するもので、隅のカーブは他の住居址には見られない程の丸味をもっていると言える。長軸を東西方向に置き490cm、南北方向の短軸は約420cmを計測する。長軸の方位は北62度東に置いている。東半部分での壁の高さは南東隅が最も高く約70cmで、北西部分では28cmであった。西半部分の壁の高さは南隅が最も高いレベルで検出されたが、地山自体が北にむけて傾斜を強めていくことから北西部分は十分にはつかめなかった。なお、東辺の北隅で第12号住居址と切り合う関係を有するのであるが、検出面が異なり、また、床面の段差が大きいために判然とはとらえきれなかった

壁溝は東半部分では断面U字状を呈し幅7～10cm、深さ3～5cmのものが検出できたが、西半部分ではさほど明確にはとらえられなかった。南西の隅で検出したものは、幅が広くなり16～20cm、深さ2～4cmを測るものであった。壁は直に近く掘り込まれていて、壁際には淡黒褐色土、濁茶褐色土、地山ブロック土をまじえた暗褐色土が堆積し、住居址の中央部分は暗褐色土が厚く堆積していたものと考えられる。遺物の包含は壁際の位置に、床面から遊離した形で出土している。

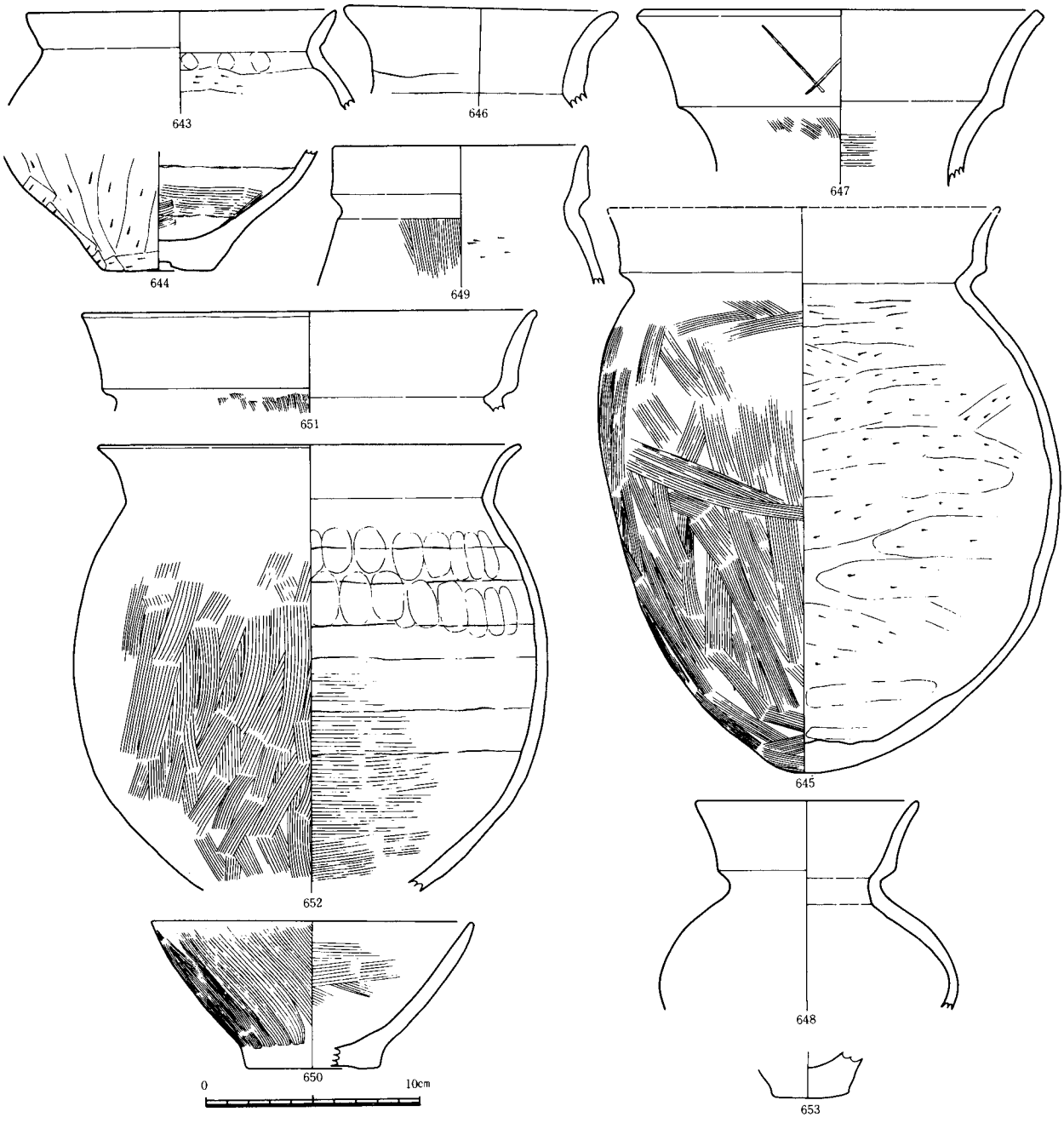
柱穴はやや不揃いの位置であるが4本を検出した。P1（径35×34cm、深さ12cm）、P2（径28×29cm、深さ10cm）、P3（径34×38cm、深さ10cm）、P4（径36×37cm、深さ22cm）、P5（径37cm、深さ8cm）、P6（径44×50cm、深さ20cm）の規模をそれぞれ測る。P6は長軸を東西においた方形プランをなし、壁近くにあるところから特殊ピットの可能性が考えられる。

第12号住居址は丘陵地形が西側に大きく傾斜していることから、西側部分は流失した部分が大きいものと判断できる。平面プランは第11号住居址と同じような丸味の強くなった隅円方形と推定される。西側を欠いているために、全体の規模はつかめない。南北方向の規模は400cmを測り、主軸方位はほぼ東西と考えられる。

東半の壁の高さは64cmで、西に行くに従い高さを減じていく。覆土の大部分は濁暗褐色土で、壁の近くに地山ブロック土が介在し、床面近くで淡黒褐色土や焼土、炭化物をまじえた層が薄く堆積している。床面での貼床は東辺から約130cmの距離を置いたところから西側に置かれていて、暗黄褐色を呈する地山土が約5cmの厚さで敷かれていた。壁溝は丁寧に掘り込まれていて、断面は幅広のU字形をなし、幅20cm、深さ9cmを測る。

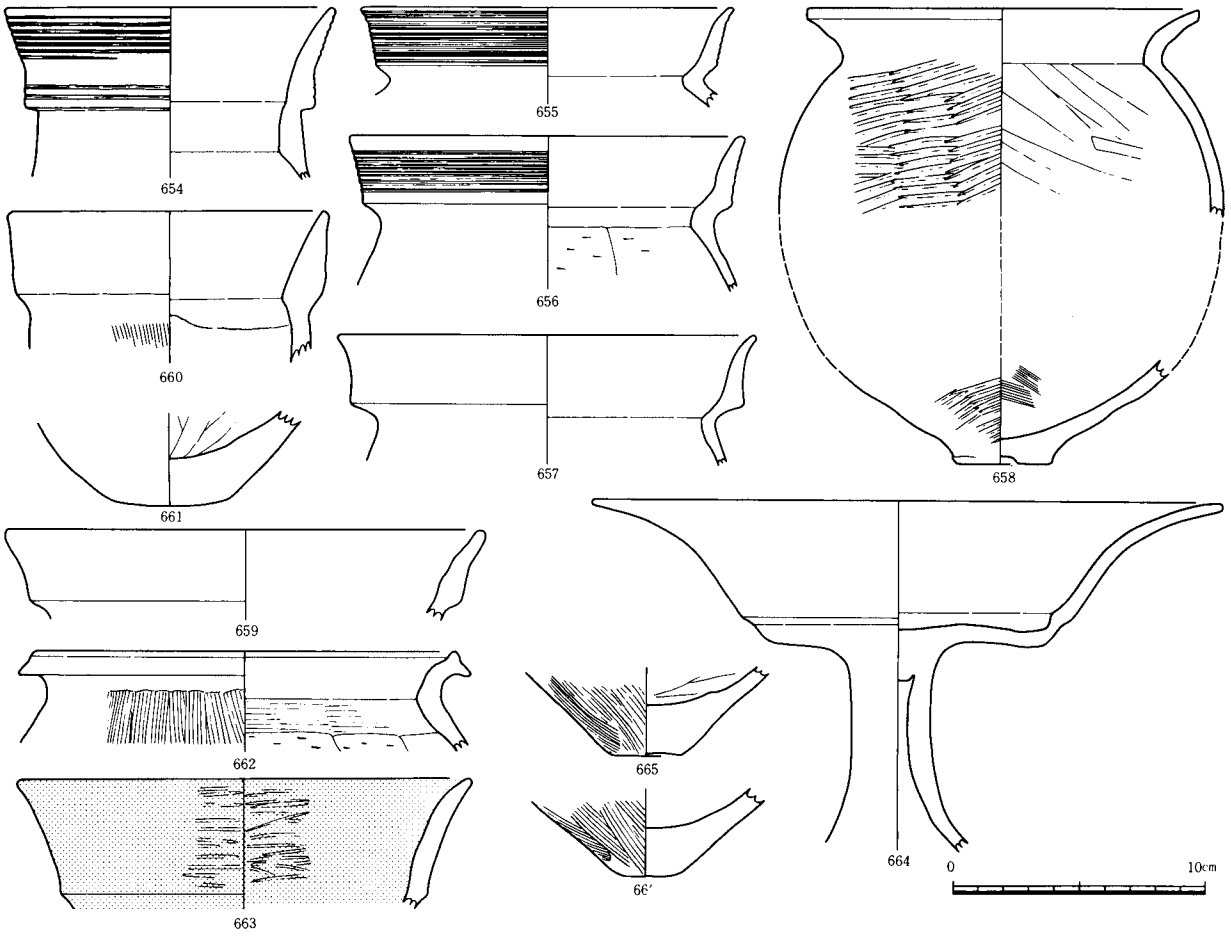
主柱穴と考えられるものは、ほぼ東西方向に並んでいる径の小さなP1とP2がある。P1（径20cm、深さ71cm）、P2（径21cm、深さ68cm）の規模を測り、心々間の距離は120cmである。その外に2個のピットが見られ、P3は径35cm、深さ27cm、P4は径44×47cm、深さ20cmを測った。P1とP2の中間に楕円形をなすピットが検出された。径44×36cm、深さ12cmの規模で、焼土、炭化物を含んだ暗褐色土が見られ炉址に推定できる。

遺物　643～647の土器は第11号住居址の覆土から、649～653はP100・O100グリッドから、648は第12号住居址からの出土である。643は口径14.6cmを測るもので、頸部の内面に指頭圧痕が見られる。器表面は横ナデ調整でととのえられ、淡褐色を呈し、焼成は堅緻である。644は底径4.5×5cmで、体部との接合部分で剝落しているものである。器表面は削り調整、内面は刷毛ナデ調整痕が見られる。濁黄褐色を呈し、胎土に砂粒は少なく、焼成は堅緻である。645は口径約18cm、器高約26cmを推定したもので、図上で復元した。体部は縦方向の刷毛調整が、内面は全体に横方向の削りがケズリの間に稜を作り出すように強い調子で施されている。器壁は比較的薄手に成型され、焼成は堅緻である。体部の中央部分では煤の付着が顕著である。646は口径13cmの壷形土器の口縁部に推定したもので、短い頸部に外反する口縁がつく。体部との接合部分で剝落しているものである。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選されているが焼成はやや甘い。647は壷型土器の口縁部で口径18.4cmを測る。頸部に刷毛調整痕が残っている以外は横ナデ調整で整えられていて、口縁部にヘラ先によるところの沈線がV字状に付けられているが小片であることから全体の構成は不明である。明るい茶褐色をなし、胎土は良好である。648は



第75図　第11号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

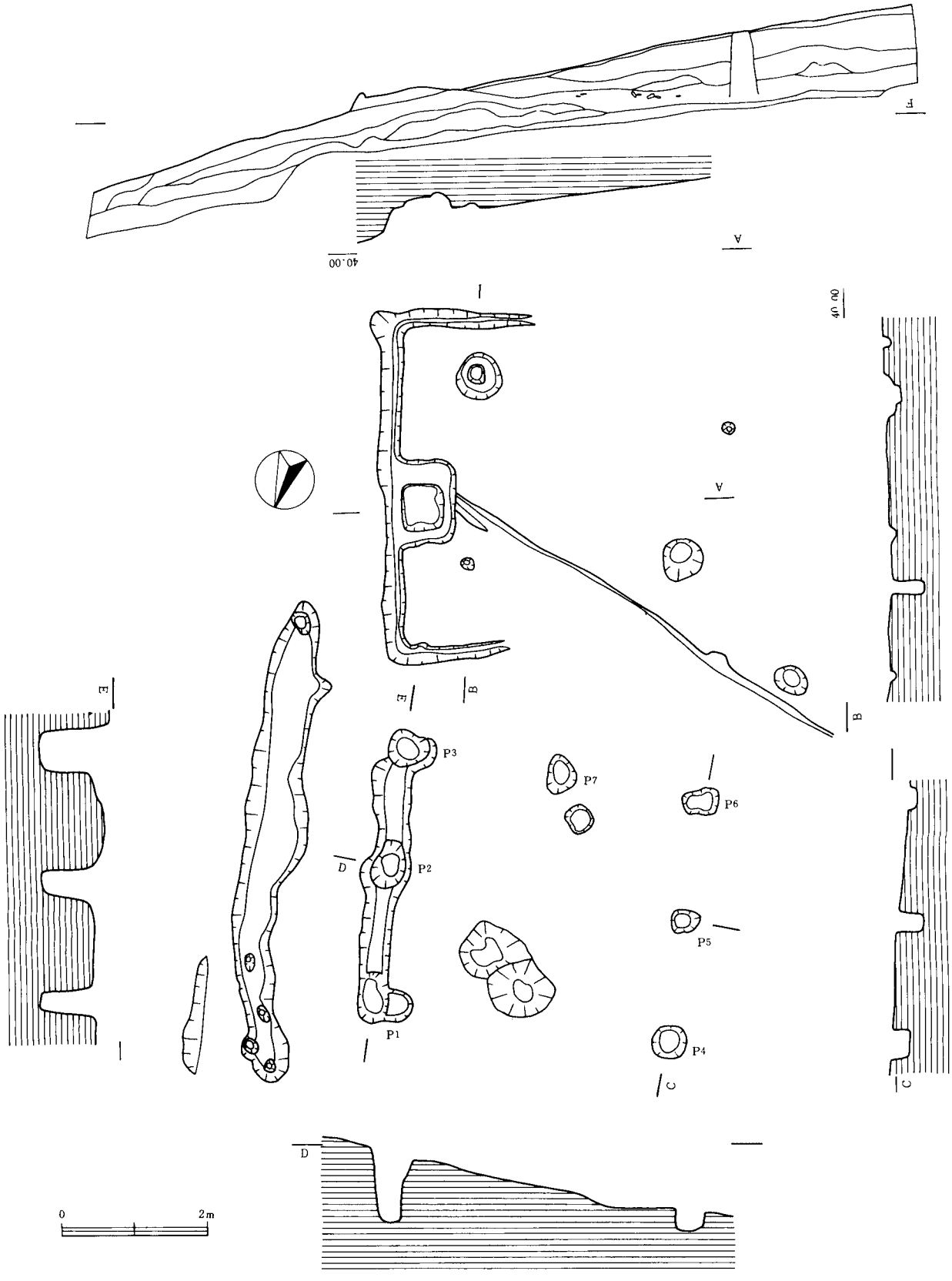
第12号住居址からの出土品であるが、不注意から本図にはりこんでしまったもので、訂正しお詫びしておきたい。口径10.3cm、体部の最大径13.7cmの壷である。器表面の全体が風化の為に剥離していて、調整はつかめない。色調は器壁の中だけが遺存しているものであり、淡黒褐色を呈していて、胎土には微砂粒の混和は少ないものの帯状をなした形で砂粒がまとまっているのが観察できる。粘土紐を積み上げていく際の境界付近に当たるのではないかと想像される。649は口径12cmを測るもので、頸部は指頭によって括れをようやく作り出しているものと見られる。体部は縦方向の刷毛が、内面は粗雑な削りが成されている。灰褐色を呈し、胎土、焼成ともあまり良くない。650は口径14.6cm、器高6.6cmを測る椀形土器である。底径6cmの明確な平底で、器表は縦方向の、内面は横方向の刷毛調整が施されている。胎土には多量の砂粒が混和されているために、器表面では砂粒の突出および剥落が多く見られる。651は651は口径21.5cmを測るもので、内外面とも丁寧な横ナデがなされていて、胎土含まれている砂粒の量は少なく、焼成は良好である。652は口径20cm、胴部の最大径22cm、現器高21cmを測る



第76図　第12号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

ものである。口縁の端部が強く外反し丸味を持たせて収めるもので、内外および肩部には丁寧にナデ調整で平滑にととのえられている。胴部の中央から上には、粘土紐の輪積みの痕跡が明確にとらえられ1.8～2.2cmの幅でその境が見られる。肩部周辺の内部には指頭圧痕とも拳の圧痕とも考えられる押圧が認められる。底部の内面は刷毛によって平滑に整えられている事から、底部を作成した後に胴部を積み上げていったことが想定できる。

627・638・639・648が第12号住居址から出土したもので、他のものはQ100グリッドから得られたものである。654は口径13.2cmを測る有段口縁の壷形土器に想定できるものである。長い口縁部の中央で立ち上がりの角度が変わるもので、中ほどで窪むような形状となり、擬凹線が上下に分かたれている。長い頸部の内面では大きく屈折して外に開いていく。内外周のナデ調整は粗雑で、色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多い。655は外傾角度の大きい口縁を付けるもので、口径15.2cmを測る。胎土に微砂粒が多く　肌面は荒れている。656は口径16cmを測るもので、ナデおよびケズリ調整は丁寧に施されている。口縁には煤の付着が顕著である。淡褐色をなし、胎土の砂粒の混和は少量に止どめられていて良好で、焼成は堅緻である。658は口径15.5cm、底径3.8cm、推定器高18cmの叩き調整を施した甕形土器である。660・661は極めて厚手の甕で、平底の底部は火熱を受けて赤変している。器表は粗いナデ、底部の内面も粗い調整のみで、凹凸が目立つものである。色調は暗褐色を呈し、胎土はやや良好である。662は外展する口縁の端部を肥厚させて凹線を入れているもので、口径17cmを測る。頚部以下には縦方向の調整が、内面には横方向の削りが施されている。淡茶褐色を呈し、胎土は比較的砂粒が少ない。727は内外面ともに丁寧なミガキの後に赤彩が行われている壷形土器の口縁で、径18.4cmを測る大型品である。胎土、焼成とも良好である。664は受部の径25cmを測るもので、体部の中央が盛り上がるような器形となっているのは、成型の段階のものと考えられる。器表面はまったく剝離していて調整はつかめない。淡黒褐色を呈し、胎土は良好である。



第77図　第14号住居址・第６号掘立柱建物址(1/80)

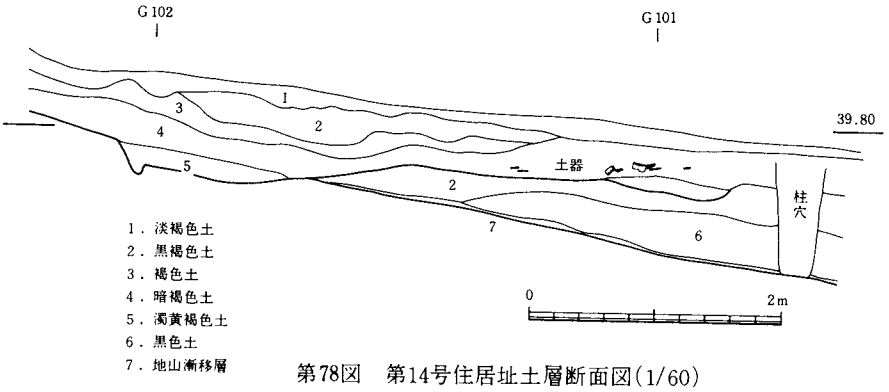
11　第14号住居址・第６号掘立柱建物（第77～81図・図版24）

遺構　第二平坦面が傾斜を変換して第三平坦面にかかる傾斜面の裾に立地しているのが、本住居址と本掘立柱建物である。傾斜面の等高線にほぼ平行するような形で構築されていて、なおかつ各遺構が東辺を揃えて平行していることから、同時期に所産した可能性についてはさらに検討する必要がある。東方向には約５ｍの比高差をもつ傾斜面を挟んで第23号住居址が、南方向約４ｍで第10－Ｃ号住居址が、北西方向約10ｍの位置に第３号住居址が、西方向約12ｍの位置に第5号掘立柱建物が配置されている。

第14号住居址は平面プラン隅円方形を呈したもので、地山面の高い東辺のみを確認したにとどまる。南北方向の規模は480cmを測り、主軸方位は北18度西に置いている。覆土を見ると、包含層である暗褐色土が地山に沿う形で堆積しているのが把握できる。この下には黒褐色土、黒色土が厚く堆積している。住居址の床面には凹凸が見られ、中央部分が盛り上がっていて壁近くの窪みには暗褐色土に黄褐色土が多量に混入した土が見られ、貼床などのものかと推定される。

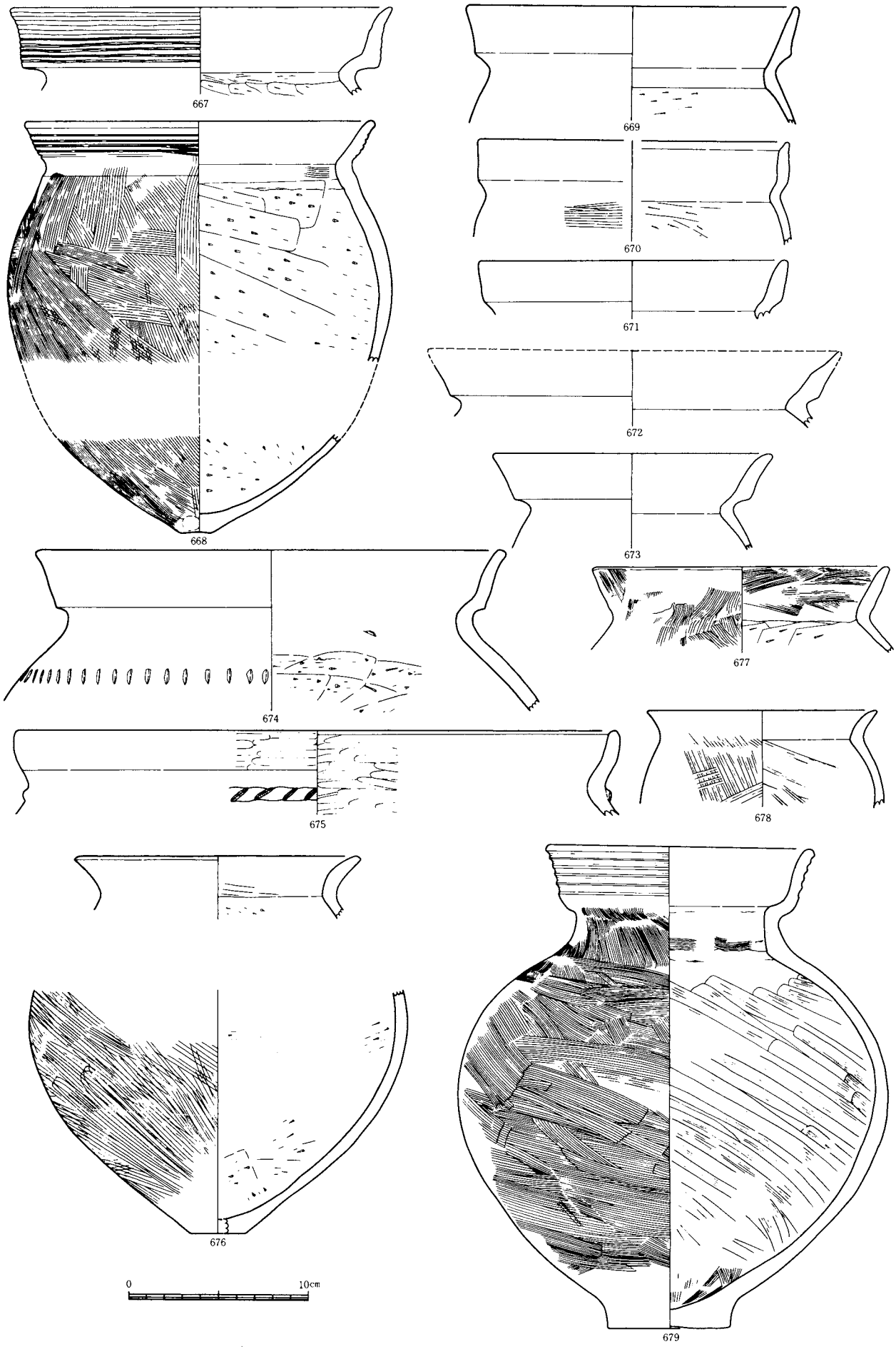
壁溝は幅10～20cm、深さ９cmを測り、断面形状Ｕ字状を呈している。東辺の中央部分に特殊ピットが検出された。平面長方形プランをなし、長軸118cm、短軸80cmの規模を測り、９cm下がった位置で段が設けられ、やはり方形プランをなすピットが掘り込まれている。64×58cm、深さ13cmを計測する。柱穴は南東で１個を検出したに止どまる。

第６号掘立柱建物は住居址の北端から90cmの距離に位置しているもので、東辺の方位は北10度西に置いている。東の柱穴列の東方100～120cmの距離を置いて、幅50～80cm、深さ10～20cmの溝が、長さ660cmにわたって掘られていて、掘立柱建物に平行していると言える。Ｐ１とＰ２の心々間の距離は180cm、Ｐ２とＰ３のそれは170cm、Ｐ４とＰ５・Ｐ５とＰ６のそれは170cm、Ｐ１とＰ４・Ｐ３とＰ６は410cmを計測し、ほぼ方形に近い在り方を示していると言える。

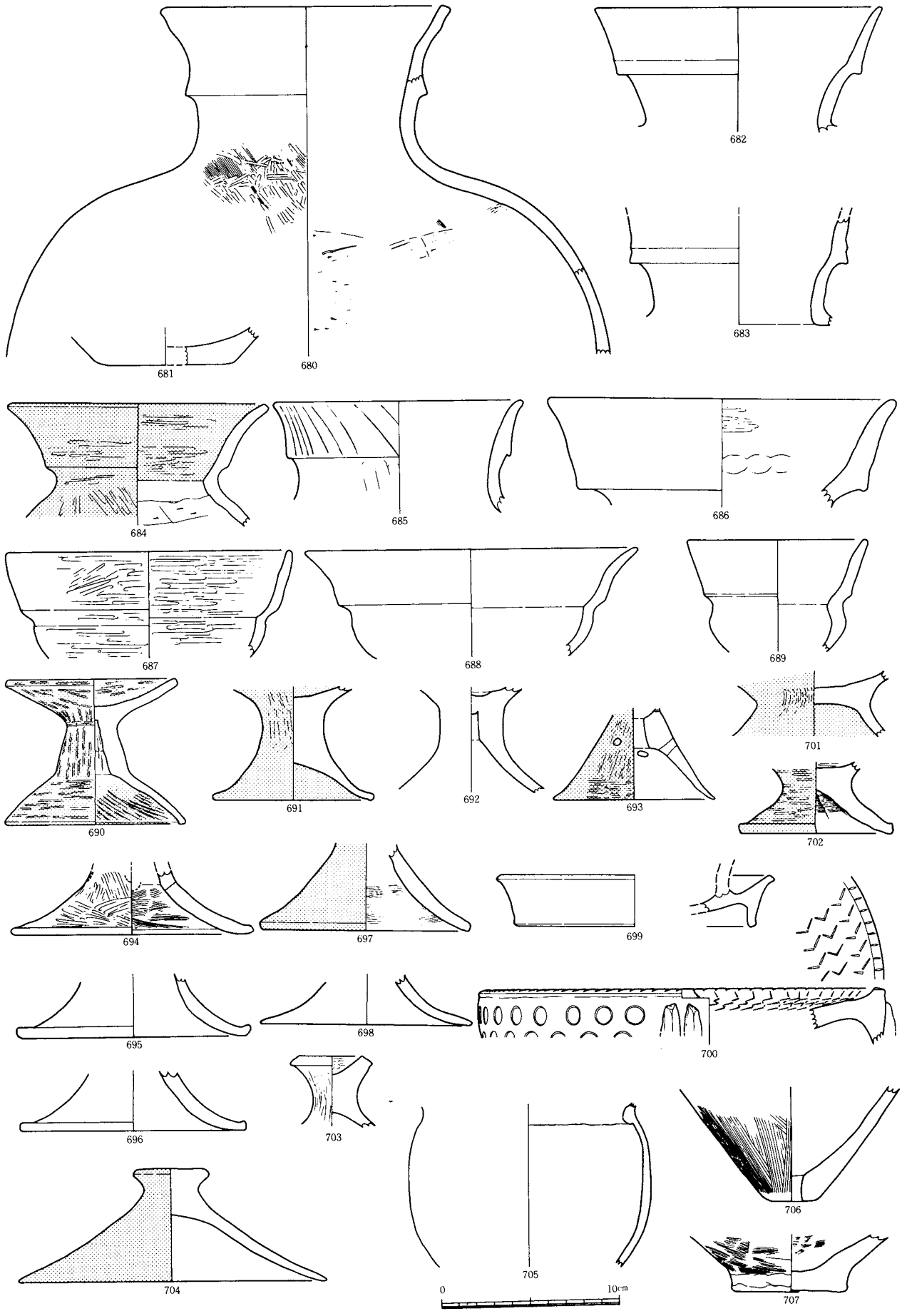


第78図　第14号住居址土層断面図(1/60)

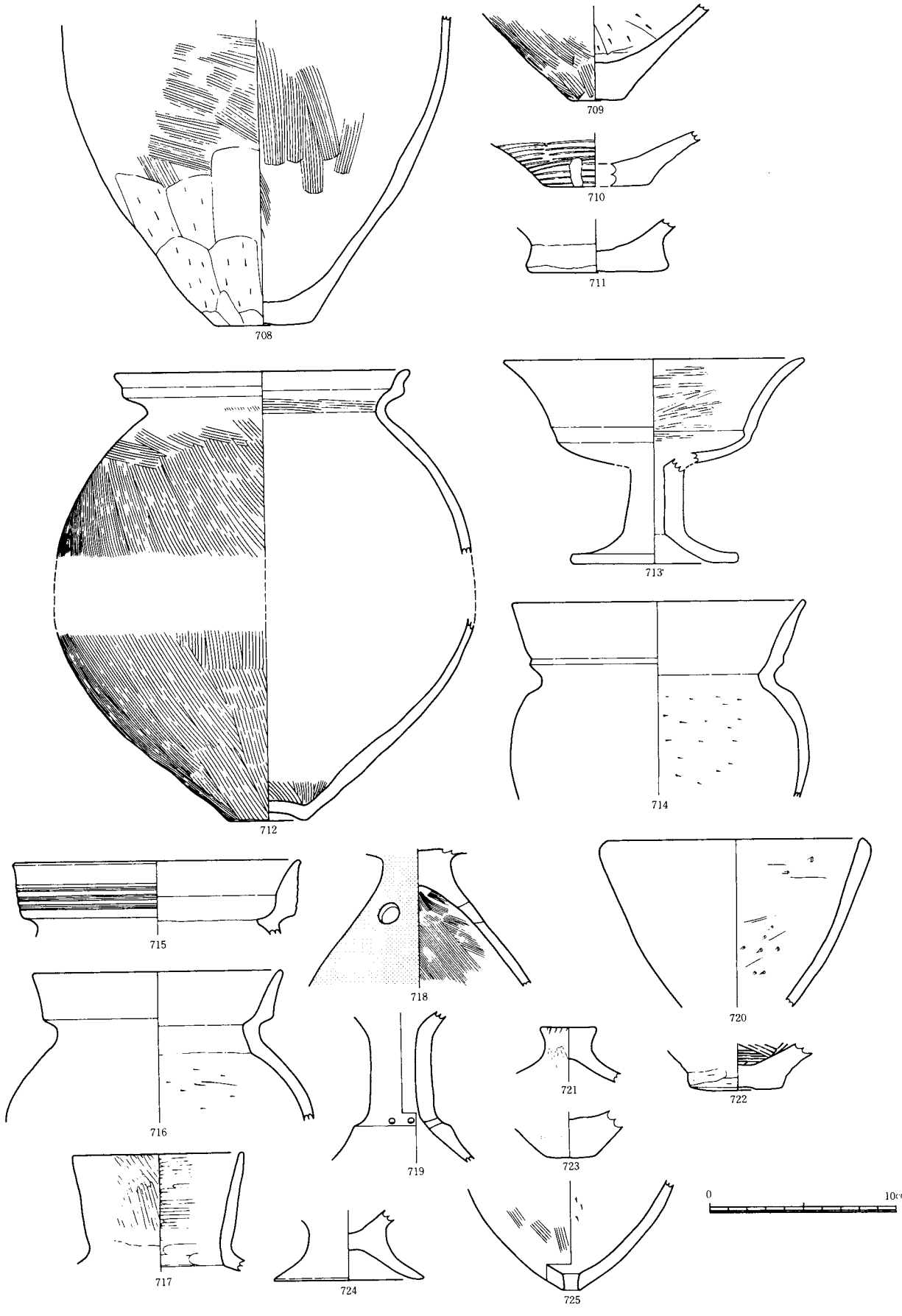
遺物　668は口径20cm、推定器高22cmを測るもので、有段口縁の段が消失しかかっているものである。擬凹線も粗雑に引かれ、全体的に「く」の字状口縁の甕にちかずいているものと言える。肩部の位置ではやや間隔をおいて縦方向の刷毛が、胴部の中央では横方向のものが、底部周辺ではまた縦方向の調整と変化していく。底部は粘土塊というような形をなさない形状の尖り底である。体部の中央には煤が付着している。淡黄褐色を呈し、胎土に微砂粒が若干交えているが、器表面では目立たない。669は口径18.4cmを測るもので、器表面は横ナデ調整でととのえられている。色調は明るい淡黄褐色を呈し、胎土の砂粒はさほど目立たないのは、色調の加減があるのかもしれない。673は口径15.4cmを測るもので、外周は丁寧な横ナデがなされていて平滑になっているが、内面は摩耗が進んでいるがヘラケズリ調整が認められる。茶褐色を呈し、口縁に煤が付着している。674は口径26.4cmに復元できるもので、肩部に列点文が刺突されている。列点の工具は板状か棒状工具によるものと推定できる。濁黄褐色を呈し、胎土は普通で、焼成はやや甘い。675は小片のため口径に不安のあるもので、頸部に粘土紐を貼付し刻みをつけている。676は口径16cmを測るものであるが、体部と接合復元をはかることができなかった。口縁部は粗雑な横ナデが、器表は縦方向の刷毛調整が、内面は砂粒の移動がほとんど見られないことから、



第79図　第14号住居址出土土器(1/3)



第80図　第14号住居址周辺出土土器(1/3)



第81図　第14号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

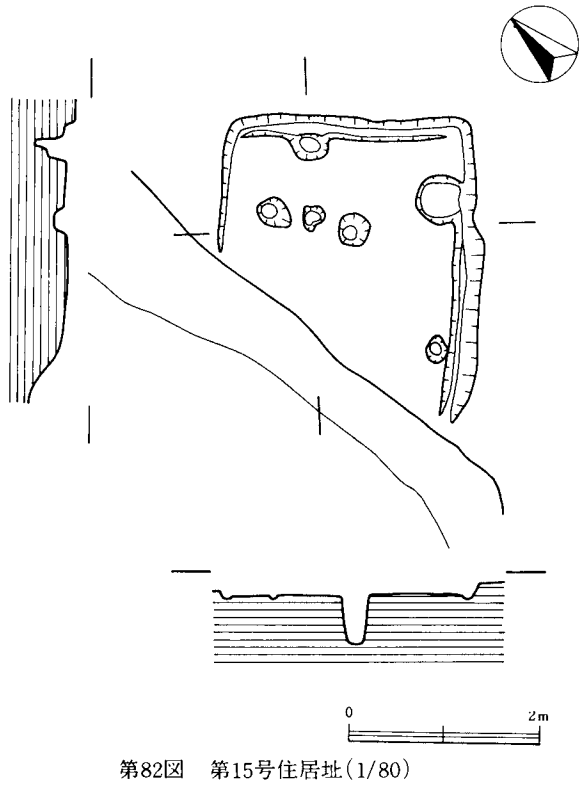
板状工具によるところのナデと考えられるものが施されている。底部は明確に平底が作り出されていて、底径3cmを計測する。色調は淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は通有のものである。677は口径16.4cmを測るもので、口縁部分の成型は粗雑で歪みが生じている。横ナデ調整の後に、刷毛状工具による撫で調整が施されている。内面はヘラケズリの後に撫でが加えられたようで、幾分平滑にしようとしたものである。649の内面の在り方に近いものがある。678は口唇部部分が尖り気味に成型されたもので、小型の甕である。口径12.8cmを測り、内外面とも丁寧な調整が行われている。679は有段口縁をつけた壷形土器で、復元完形品となった。口径15cm、頸部径11.2cm、胴部最大径23.8cm、底部径6.8cm、器高27cmをそれぞれ計測する。口縁の擬凹線はやや幅が広く深く巡らされていて、口縁の下端は丸味をもって成型されている。器表面は頸部を除いて横方向の刷毛調整が全体に施されているが、図示したように目立つようなものではない。内面には全面にナデ？がなされ平滑にしようとしている。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。

680は大型の壷形土器であるが、破片を接合できず図上で復元したものである。口径16.5cm、頸部の径12.2cm、胴部最大径34cmを計測する。段のつく口縁部は途中で傾きを変え、小さく外折して口唇部に面をとって薄手に成型するもので、横ナデ調整によって器面を整える。胴部の内外面はケズリ、ナデ調整の後に、平滑にする整形が施されている。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。681は680の壷の底部に推定できるもので、底径7cmの平底である。682は口径15.8cmを測るもので、内外面とも摩耗が進行しているがかすかに赤彩の痕跡が認められる。683の口縁の段の位置には凹線状になる成型が施されていて、段の稜を際立たせているようだ。685は口径14.2cmを測るもので、内面の風化が進んでいる。口縁部には横ナデ調整の後に、ヘラ先によると見られるもので斜め方向に軽く沈線が施されている。しかし、沈線はあまり目立つものではなく、注意ぶかく観察しないと判断出来ない程のものである。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土、焼成とも普通である。687は鉢形土器に推定されるもので、口径16cmを測り薄手に成型されている。段の部分は丸味をもっていてシャープさには欠けるが、内外面とも平滑に仕上げられている。胎土は精選され、焼成も良好である。688は口縁の端部が外反して口唇部を尖り気味にするもので、内外面とも丁寧に磨かれている。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。689は口径10cmを測る小型の鉢で、内外面とも粗雑ではあるが比較的平滑に調整されている。口縁下端の段は若干突出気味に成型され、煤が付着している。690は復元完形になったもので、受部径9.6cm、脚部径9.7cm、器高8cmを計測する。器表面全体は磨きが施されているが、受部の内面は特に平滑に磨かれている。脚部の立ち上がり部分には、面が取られている。図上では全体に赤彩がなされた形であるが、脚部の内面には施されてはいないようである。胎土には若干の微砂粒が混和され、焼成は堅緻である。694～698は外傾度の強い脚部片で、高杯・器台のいずれのものか判断に苦しむものである。700は口径22.6cmに復元できる大形装飾壷の口縁部片に推定されるものである。外に開いた口縁帯には径1cmの円形刺突文が上下二段に渡って施文され、全体での数は不明であるが縦位置の粘土紐の隆帯が2条貼付されている。口縁の上を向く平坦面には、ヘラ先によってジグザグ状の沈線が入れられ、端部の口唇部の沈線と対応しているようだ。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が少ない。焼成はやや軟質である。701は壷器形の台部に推定したが、若干の不安がある。赤彩の痕跡が明瞭に遺存しているのは、下にして図示した部分でそれも全面ではなくやや下位の部分である。また、刷毛ナデ調整も比較的丁寧に施されていて、底部内面と大きく異なっていて逆位置に想定することも可能視される。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。702は脚部径8.6cmを測るもので、端部に面取りが施され、器表は磨きが、底面は同心円状の刷毛目調整が丁寧に行われているものであるが、器形的には確定し得ない。胎土は精選され、焼成は堅緻である。703はつまみの径4.8cmを測るもので、器表面は平滑に磨かれている。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。704はつまみの径4.2cm、口縁部径17cm、器高6.3cmをはかる比較的おおぶりの蓋である。器表面は平滑に磨かれ、全体に赤彩が施されている。胎土に若干の砂粒が混じり、焼成はやや甘い。705は頸部内面に肥厚した部分が遺存しているもので、器表は全面に風化が進んでいて荒れている。706は有孔鉢の底部片である。底面は丸味をもった形に成型され、径1.2cmの穿孔が真直ぐになされている。器表面は刷毛調整が、内面はナデ調整が行われている。明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多い。焼成は堅緻である。

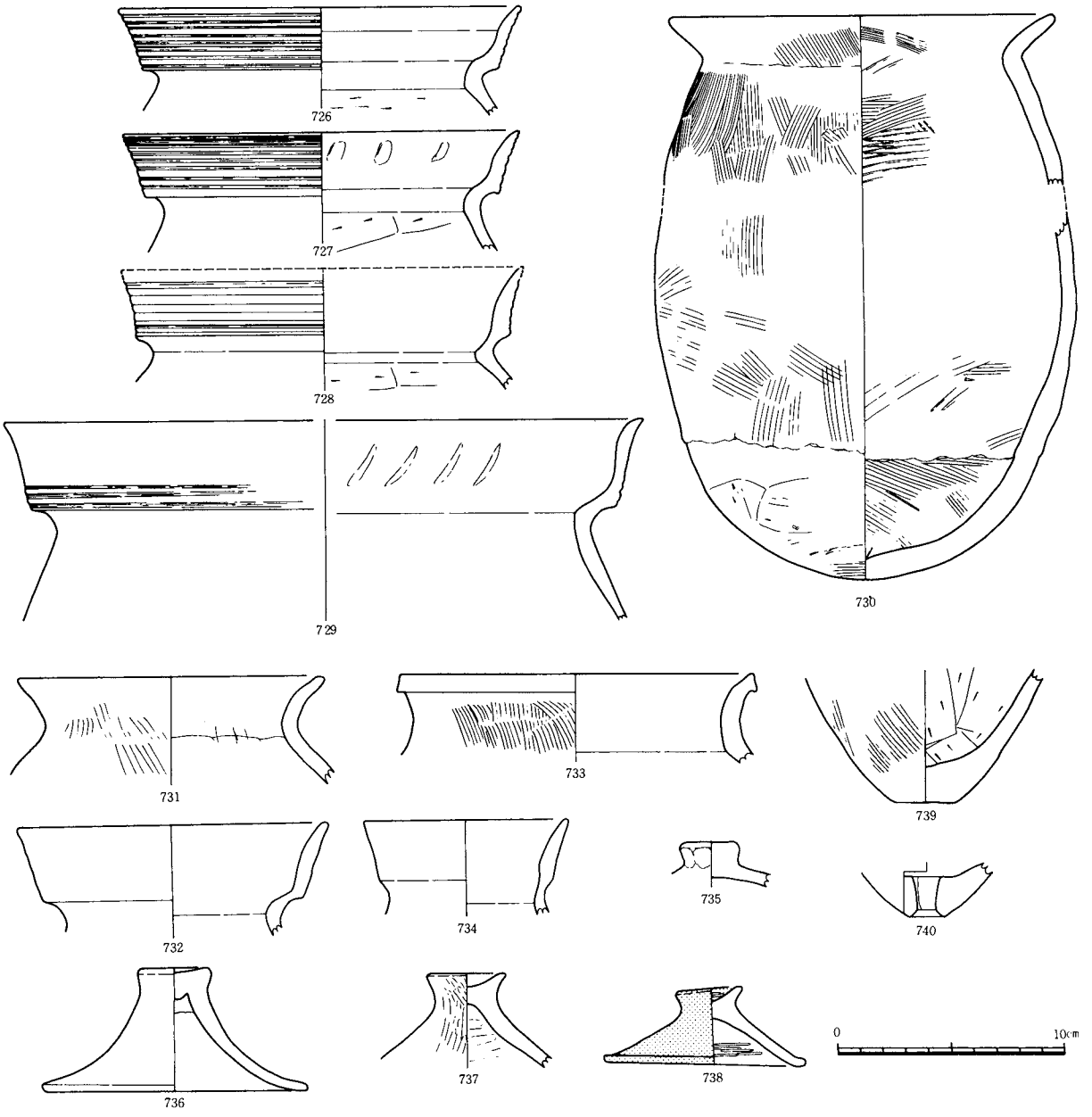
708は底径5.2cmを測る甕の胴部片である。体部の中央部分は横方向の刷毛調整が、底部近くでは縦位置の削りが行われている。内面の調整も上下によって異なり、上は刷毛、下はナデがなされていて、内部で若干器壁の変化も認められるところから底部を作ってから体部を立ち上がらせたものと想像できる。底面の成型はやや粗雑である。器表面の色調は黒褐色を呈しているが、内面は濁黄褐色をなしていて大きく異なっている。なお、器表面には厚く煤が付着している。胎土には微砂粒が多く混和されている。710は器表面に叩き調整痕を遺存しているもので、砂粒が多く混和されている。内部の調整はやや粗雑である。712は口径16cm、胴部径約23cm、底径4.4cm、推定器高23cmを測るものである。全体に風化が進行していて、器表面は大きく荒れている。頸部の内面に刷毛調整痕が残り、器表面は縦、斜め方向の刷毛調整が、内面はナデがなされている。底部は明確に凹み底を作り出している。色調は濁黄褐色を呈し、胎土は微砂粒が大量に混和されている。焼成はやや甘い。713は口径16cm、脚柱径3cm、脚部径9cm、推定器高11cmを測るものである。口縁部の段は風化のせいもあるが形骸化していて、括れの部分もほとんど目立たない。内面には僅かに段が形成されている。脚柱の真ん中は空洞であるが、器台形土器のものとするには不安が残る。茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。焼成はやや甘い。714は口径15.6cmを測るもので、口縁下端の段は突帯状に成型されているものである。器表面は荒れていて、胎土の砂粒が浮き立つような状況を示している。色調は淡褐色を呈し、焼成はやや良くない。715は口径15.8cmを測るもので、内面の段は指頭によって強く押さえつけられている。器表には煤が厚く付着している。717は口径9.4cmを測る壷型土器の口縁部片で、内外面とも平滑に磨き調整がなされている。胎土は精良で焼成は堅緻である。口縁の上半には煤が付着している。719は2個1対の穿孔が3組施されている器台形土器の脚柱部である。器肌は大きく荒れている。720は口径13.6cmを測る有孔鉢の口縁部と想定したが、端部を含めて器表面が荒れているためにやや不安がある。色調は淡赤褐色を呈し、砂粒の多い胎土である。721は蓋形土器のつまみで、端部に刻みの痕跡をかろうじて窺うことができる程度で明確にはできない。725の有孔鉢は淡黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

12　第15号住居址（第82・83図・図版27）

遺構　本住居址は中地区調査区の西端に位置している。第二平坦面が傾斜を変えて西方と北方に標高を下げて



第82図　第15号住居址（1/80）



第83図　第15号住居周辺出土土器(1/3)

行く変換線上にあたり、西側に大きく食い込んでいる谷地形を臨むような地点でもある。近世においては南北に走行する等高線に沿う形で地境および道がついたものと思われ、木材の搬出などによって地山面が大きく抉られたような状況を示してもいた。そのために住居址の過半は欠損している。検出したグリッドはⅠ91・92・H92グリッドである。周辺の住居址はきわめて少なく、北方向約8mにある第17号住居址が最も接近した住居址である。東方向約14mの距離には第4号住居址が、南東方向約16mには第6号住居址が配置されている。この一定の空間をおいて立地していることに、本遺跡における集落構成を考える上で重要な手掛かりになるものと推定できる。

平面形は隅円長方形を呈し、ほぼ東西方向の長軸は検出した所で320cm、ほぼ南北方向の短軸は270cmを計測する。主軸の方位は北32度東に置いている。壁の高さは6～12cmで、暗茶褐色土が堆積していた。壁溝は全周していたものと推定され、幅9～14cm、深さ4～9cmを測る。東辺によった位置で、径30×33cm、深さ51cmの柱穴を1個検出した。ピットは南辺まで110cm、東辺まで95cm、北辺まで120cmを計測し、柱は2本主柱が推定される。床面は黄褐色砂岩ブロック土で、平坦にならされていた。焼土は検出できなかった。住居址からの出土遺物はほ

とんど無く、検出面の覆土から鉄器片を得ている程度で、遺物は周辺グリッドからの出土品である。

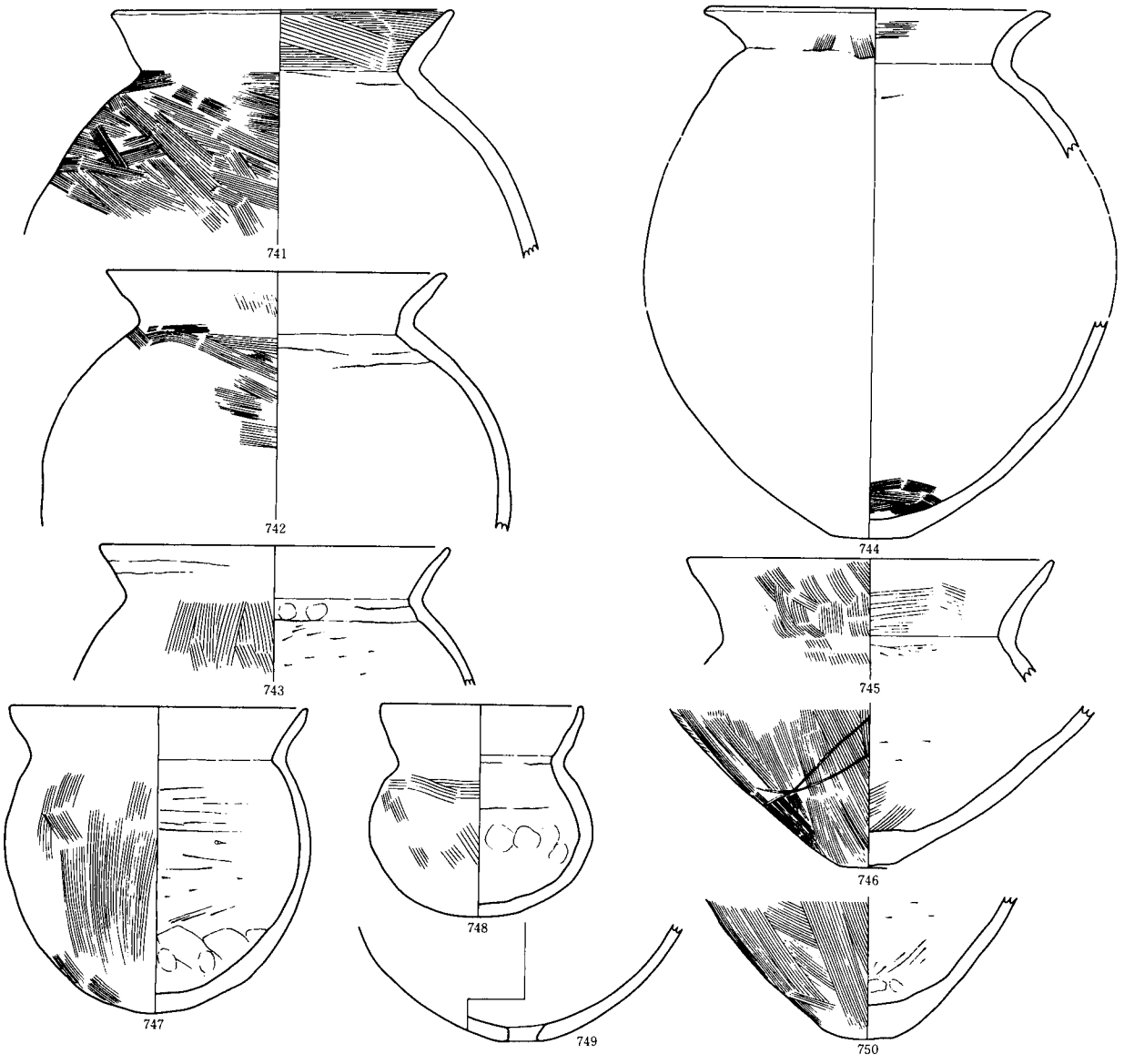
遺物　G～L92・93グリッドからの出土で、量的には多くはない。726～728は口径18cm前後を測るもので、口縁端部が尖り気味に外反するものである。いずれの擬凹線も簡略に巡らされている。727では指頭圧痕が遺存している。728の内面はナデ調整によって平滑にされていて、色調茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が交ぜられている。729は口径29cmに復元できる大型の甕であるが、摩滅が進んでいて調整は判然とはしない。色調は暗茶褐色を呈し、微砂粒の混和が多い。内面には指頭圧痕が口縁の段の近く、つまり、位置的に下位にある事に留意しておきたい。730の口径は16cmを測るもので、口縁部と体部は接合ができなかったものであるが、推定復元をおこなった。推定器高25cmを計測する。「く」の字状口縁は横方向の刷毛の後に横ナデが施され、肩部は縦位置の調整がなされている。体部の下半および底部は調整痕が判然とはしないものの、底部と胴部が別々に製作された事がはっきりと遺存している。胴部の中央部分には煤の付着が顕著であり、丸底となる底部は火熱のために変色している。器表面は平滑ではなく、粗い肌面となっている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には若干の砂粒が混じっている。731は口径13.6cmを測るもので、刷毛ナデの後に若干の粘土を足して横ナデを行っていて比較的平滑に仕上がっている。肩部内面の調整はナデが施されている。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。732は口径14cmを測るもので、口縁の素文の部分は板状工具によってなされたもののようで、口唇部に近い所でわずかに段が形成されている。灰黄褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。733は口径16.2cmを測るもので、口縁端部を肥厚させ面とりをなして段を形成させる。肌面は荒れている。735～738は蓋形土器で、736の口径は12cm、器高5.4cmを測る。淡茶褐色を呈し、器表面は荒れている。738は口径９cm、器高3.4cm、つまみ部径3cmを測るもので、器表は磨き、赤彩が施されている。淡黄褐色を呈し、胎土は精選されている。

13　第16号住居址（第84・85図・図版28）

遺構　中地区調査区の北端で検出した住居址である。第三平坦面から舌状に張り出した第１～３号住居址が立地している丘陵の西側斜面に立地している。斜面上にあるために周辺に住居址の配置は比較的少ない。東方向約７mに第２号住居址が、南東方向約13mには第４号住居址が、西方向約12mには第17号住居址が、南西方向には第16号住居址が配置されている。検出グリッドはM94・95、N94・95である。

第16号住居址は平面形は斜面にかかっていたことから、判然とはとらえられなかった。地山は黄褐色の砂層で、住居址のコーナーと考えたところでは地山がブロック状にまじりこんだ淡茶褐色砂層が堆積していた。東側の壁は高さ66cmを測り、ややなだらかに傾斜していて壁溝は掘り込まれてはいなかった。壁の下場から134cmの距離の位置にグリッドの区画に平行した形で、壁溝と推定できるものがコーナーを作って検出できた。壁溝は断面U字状をなし、幅25～35cm、深さ12cmを測った。壁溝の南側および北側は後世の溝が掘り込まれている。溝の周辺には径20～30cm、深さ10～30cmを計測するピットが4個発見された。東端のピットには土師器が包含されていた。壁溝の覆土およびその周辺から遺物が出土している。床面、焼土、主柱穴は確定できなかった。

遺物　741～750は住居址からの出土品で、744・747・748は壁溝からのものである。751～776はＪ～N92～94のグリッドからのもので、第15号住居址周辺のものと重複しているので合わせて検討しなければならない。741～745は「く」の字状口縁の甕形土器で、口縁端部が尖り気味に成型されているのが特色であるが、口唇部の成型で若干の違いを指摘することができる。741は口径15.2cmを測るもので、口縁内面に刷毛調整痕が残っている。体部の内面はナデによって比較的平滑に調整されている。器表面は横方向の刷毛ナデが施されている。底部は図示できなかったが丸底をなしていて、口縁部、体部、底部というふうに分割して成型されている事が明瞭に見てとることができる。色調は淡褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。742は口径15cm、体部最大径20.6cmを計測する。743は口径15.4cmのもので、口縁の外周に縦方向の刷毛が入れられたあとに、横ナデ調整によって消されている。内面の整形はやや粗雑で、頚部周辺は粘土の継ぎ目が残っている。焼成は極めて堅緻である。外周の色調は淡褐色を呈し、内面のそれは淡黒褐色である。744は口径15cm、推定器高22cmを計測するものである。復元するに足る破片を得ているのであるが、口縁と底部を接合することができなかった。底部は平底状をなして

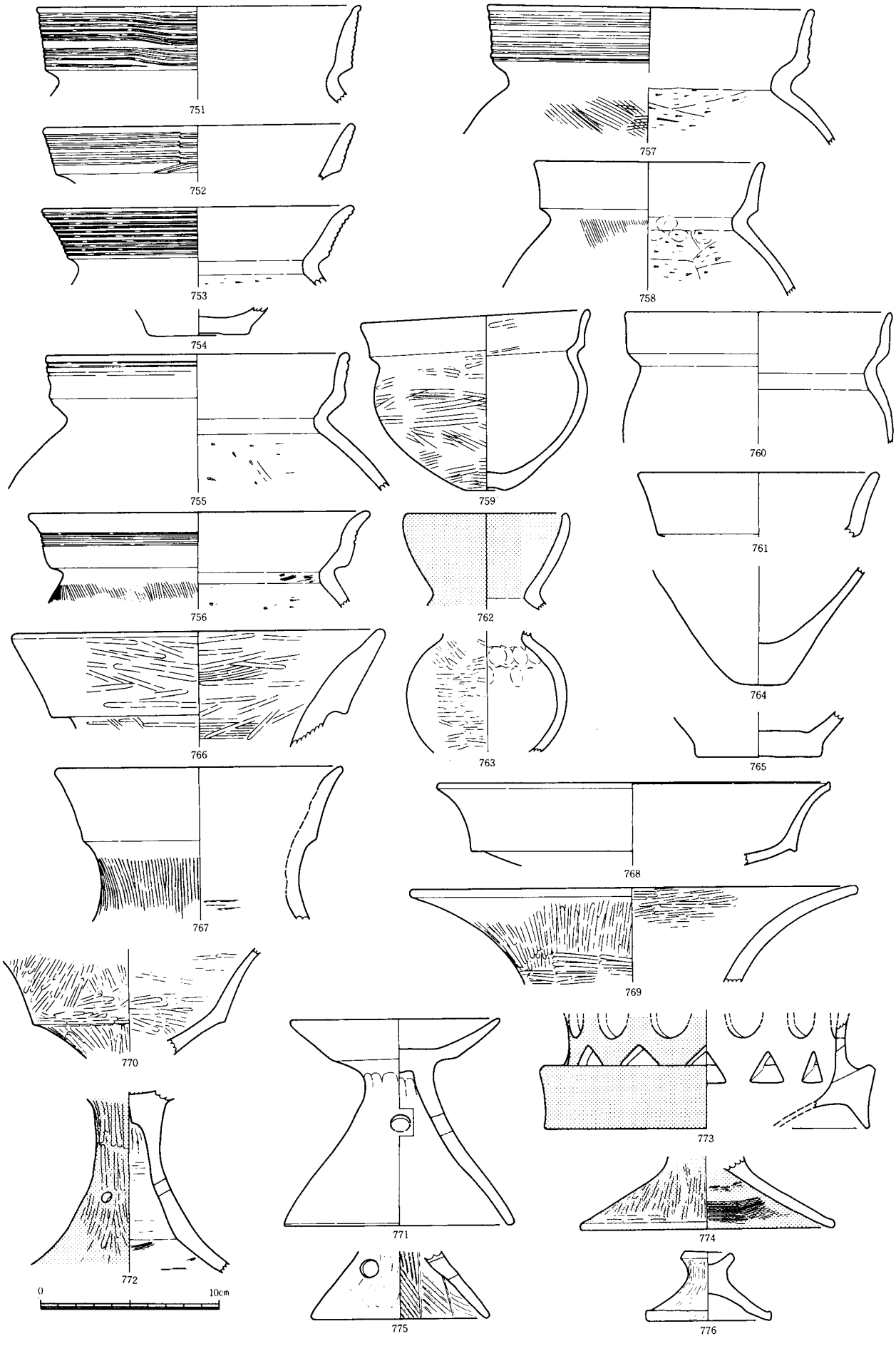


第84図　第16号住居址出土土器(1/3)

0　10cm

いるものの、平坦面を形成するまでには至らない。成型はやはり口縁、体部、底部という形で分割されて作られている。745・756同一個体であるが接合復元ができなかったもので、口径16cmを測る。口縁部外周の刷毛は横ナデ調整がなされた後に施されている。体部の内面はヘラケズリがなされているが、底部は粗雑なナデで止どめられていて、薄く炭化物が付着している。底部は尖り気味の丸底で、わずかに平坦面がつくられようとしている。淡褐色を呈し、胎土は砂粒をまじえた通有の状態で、焼成は堅緻である。747は復元完形となったもので、口径13cm、器高13.2cmを計測する。口縁および肩部までは丁寧に横ナデが入れられているが、内面では軽くヘラケズリが体部の中央までなされている。とくに底面では粗雑な調整で器面に凹凸が目立つ。胎土、焼成は普通である。748は復元完形となった小型のもので口径・器高とも9cmを測る。肩部から上半は丁寧に横ナデがなされて平滑に仕上がっている。体部の内面の整形もやや丁寧に行われている。茶褐色を呈し、胎土は精選され焼成は堅緻である。749は有孔の底部で、内外面とも入念なナデによって平滑になっている。茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

751～757は有段口縁で擬凹線をつけているものであるが、口縁端部の傾きの具合が若干ながら異なっている。751は口径18.4cmを測るもので、擬凹線は上下に分けて施文されていて、口縁下端は若干ながら粘土が継ぎ足されているようだ。752の内面には段は形成されずに頸部につながつていく。753・754は胎土に砂粒を大量に含んで



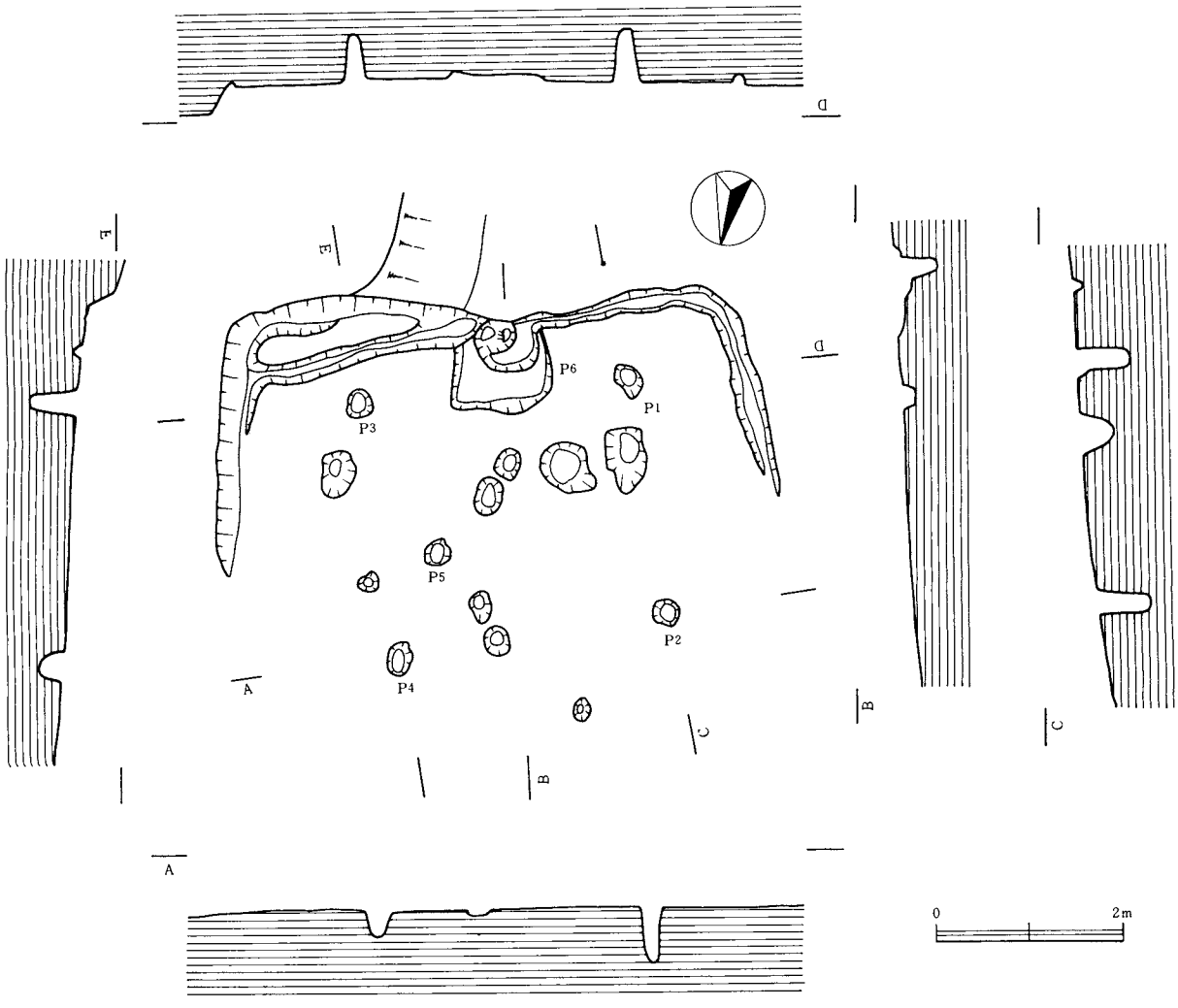
第85図　第16号住居址周辺出土土器(1/3)

いるもので、同一個体と考えられるものである。擬凹線の施文は粗く、口縁下端の稜は消失しかかっている。755は口径17.3cmを測るもので、口縁の端部に一条の凹線が見えるが全体に巡っているかは不明である。器表面は肩部まで横ナデがなされているが体部は横方向の刷毛調整のようである。暗茶褐色を呈し、胎土・焼成は普通である。756は口径19.4cmを測るもので、口縁の端部が大きく外展しているが指によってつまみだしたような痕跡が認められる。擬凹線は口縁の半ばから上に薄く残っているが、口縁の端部を外展させる前に施文されたもののようである。肩部から下は縦方向の刷毛が施されている。757は明確に擬凹線が5条引かれているもので、口径18cmに復元できた。全体に調整は粗雑である。灰黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混和されている。焼成は良くない。759は口径13cm、器高9.8cmを計測する復元完形品である。肩部から上は磨きがなされ平滑になっていて、体部の過半は刷毛調整のあと若干磨かれているようだ。底部は形ばかりの平底が押圧して作り出されている。淡褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良い。762は赤彩の施された小型の壷器形で、口縁が内弯気味に立ち上がって行くのが特色である。器表面は著しく荒れている。763は小型の壷で、器壁がかなり薄く成型されている。766は口径21.2cmをはかる大形の壷の口縁部で、外周は極めて丁寧に磨きがなされて平滑になり、内面は粗い刷毛調整痕を残してはいるものの、やはり平滑になっている。灰黄褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成もよい。767は口径16.2cmを測るもので、頸部に揃えた形で刷毛が入れられ、文様として引いているものと考えられる。内面は剝落しているが、内外周ともに横ナデ調整で平滑に仕上げられている。褐色を呈し、胎土に砂粒をまじえてはいるが器表面ではまったく目立たない。768は口唇部に面取りが施されているものであるが、器台形土器、高杯形土器になるのかの判断は出来ないものである。口縁部の下端は突帯状に成型されている。内外面ともに横ナデが丁寧に施されているものである。口径22cmに復元できる。769は口径25cmになるもので、内外周ともに丁寧なヘラミガキが施されているもので、平滑に仕上がっている。体部との接合部分で剝落している。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。770は高杯形土器の体部片で内外面ともに平滑に磨かれている、内面は段は無く皿状を呈し、外面の段は粗く成型されているといえる。淡褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。771は受部の径12cm、器高11.4cm、脚部径13cmを計測するもので、復元完形となった。全体に摩滅していて、調整の具合はつかめない。773の鍔の径は18cmを計測するもので、内外面とも摩耗が進んでいて器肌を遺存しているのは極僅かである。774は内外周とも磨きと赤彩が施されているものであり、脚部として図示したが器台形土器の受部となる可能性も考えられるものである。淡褐色を呈し、胎土はまったく砂粒を含まないほどに精選されている。776は全く欠損したところのない形で出土したもので、口径6.7cm、つまみ径3.1cm、器高3.7cmを計測する。つまみ部の端部と口縁の端部に面取りがなされている。内外面ともに磨きが施されている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。

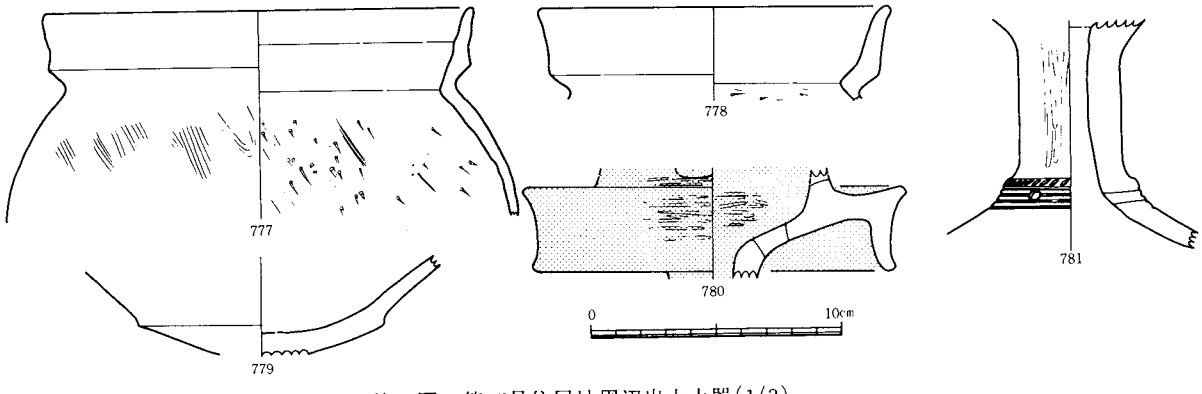
14　第17号住居址（第86・87図・図版29）

遺構　第二平坦面の北西隅部で検出した住居址で、北側の丘陵との中間地点の傾斜の変わる地点に位置していると言える。調査を進めていく段階では、明確な形では住居址と認識できなかったものである。住居址の北側は黒褐色土や暗褐色土の流土が厚く堆積していたが、住居址周辺は比較的表土層や暗褐色土の堆積は少なく地山面が浅い位置で現れていた。後世の道が走っている所でもあり、十分に把握するまでには至らなかった。検出グリッドはK89・90、L89・90の範囲におさまる。周辺の住居址は発掘区の北西隅であるところから、南東方向の第15号住居址と、東方向約12mの第16号住居址の2棟だけである。西側方向は若干の平坦面をおいて、丘陵に入り込んでいる谷に落ち込んでいく。

平面プランは隅円方形を呈するもので、東西方向の南辺を明確にしたに止どまる。新旧の住居址が複合している可能性が考えられる。東西方向の規模は600cmであるが、南北方向の規模は判然とはしない。西辺の方位は北3度西に置いている。南東部分で壁の部分がL字形に切り込んでいるのがみられ、土器片若干が出土している。覆土は暗茶褐色土が堆積しているもので、畑の耕作土のような粘性の弱いものである。南東部分では壁溝が二重に巡っているのが見られるが、西側部分では山道と重複しているために検出できなかった。外側での壁の高さは



第86図　第17号住居址(1/80)



第87図　第17号住居址周辺出土土器(1/3)

38cmを測る。壁溝の幅は10～15cm、深さは3～4cmを計測した。内側の壁溝は約40cmの間隔を置いてコの字状に検出されたが、北半部は検出できなかった。壁溝は直線的ではなく若干の歪みを生じて蛇行している。外側の壁溝と重複しているためかもしれない。壁溝の幅は14～18cm、深さ6～8cmを計測する。壁溝に重複する形で特殊ピットが検出された。隅円方形プランを呈し、100×85cmの規模を測り、一段落ちた位置で壁に近ずいて径28×30cm、深さ33cmのピットが掘り込まれている。ピットは二段落ちとなっているもので、新旧の関係でとらえることが可能視される。外側のピットの径は46×40cm、深さ9cmを計測した。

床面では焼土などの痕跡をとらえることが出来なかった。

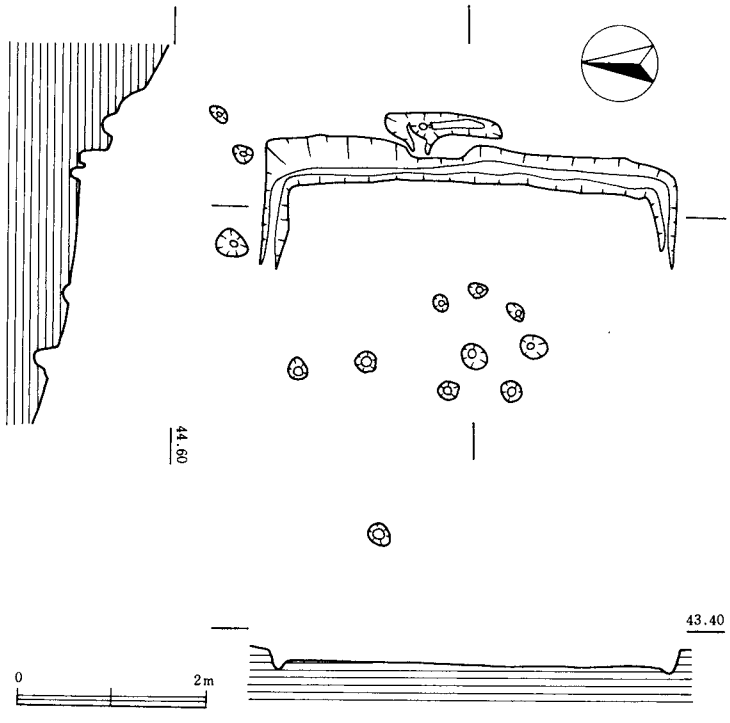
主柱穴は４個を検出しているが、住居址の外形規模とやや異なるような位置にあたり、重複をさらに考慮する必要が考えられる。Ｐ１（径30×23cm、深さ54cm）、Ｐ２（径27×27cm、深さ60cm）、Ｐ３（径36×26cm）、Ｐ４（径27×34cm、深さ26cm）、Ｐ５（径23×26cm、深さ50cm）の規模を計測する。各柱穴の心々間の距離は、Ｐ３～Ｐ４は280cm、Ｐ１～Ｐ２は270cm、Ｐ１～Ｐ３は290cm、Ｐ２～Ｐ４は295cmであり、正方形に近いと言える。

遺物　遺物の出土は極めて少なく、特殊ピットから出土した779の高杯形土器を上げるに止どまる。図示したものは周辺グリッドからのものである。777は口径17cmを測るもので、口縁下端を隆起させるような形で成型している。口縁内面の段は消失している。内面の削りは斜め方向に引き上げる形でなされている。淡黄褐色を呈し、器表面では砂粒は目立たない。焼成は良好である。779は高杯の受部で内面は皿状をていし、外周は底面の方が突出するような段を形成している。濁黄褐色を呈し、器表面は著しく荒れている。780は鍔の径が14.8cmを測るもので、全面に赤彩が施されている。受部の脚柱近くに径1.5cmの穿孔が施されている。胎土は精選され、焼成はやや甘い。781は器台型土器の脚部片に想定できるもので、脚部に段が形成されていて刻み、沈線、穿孔が施されているものである。

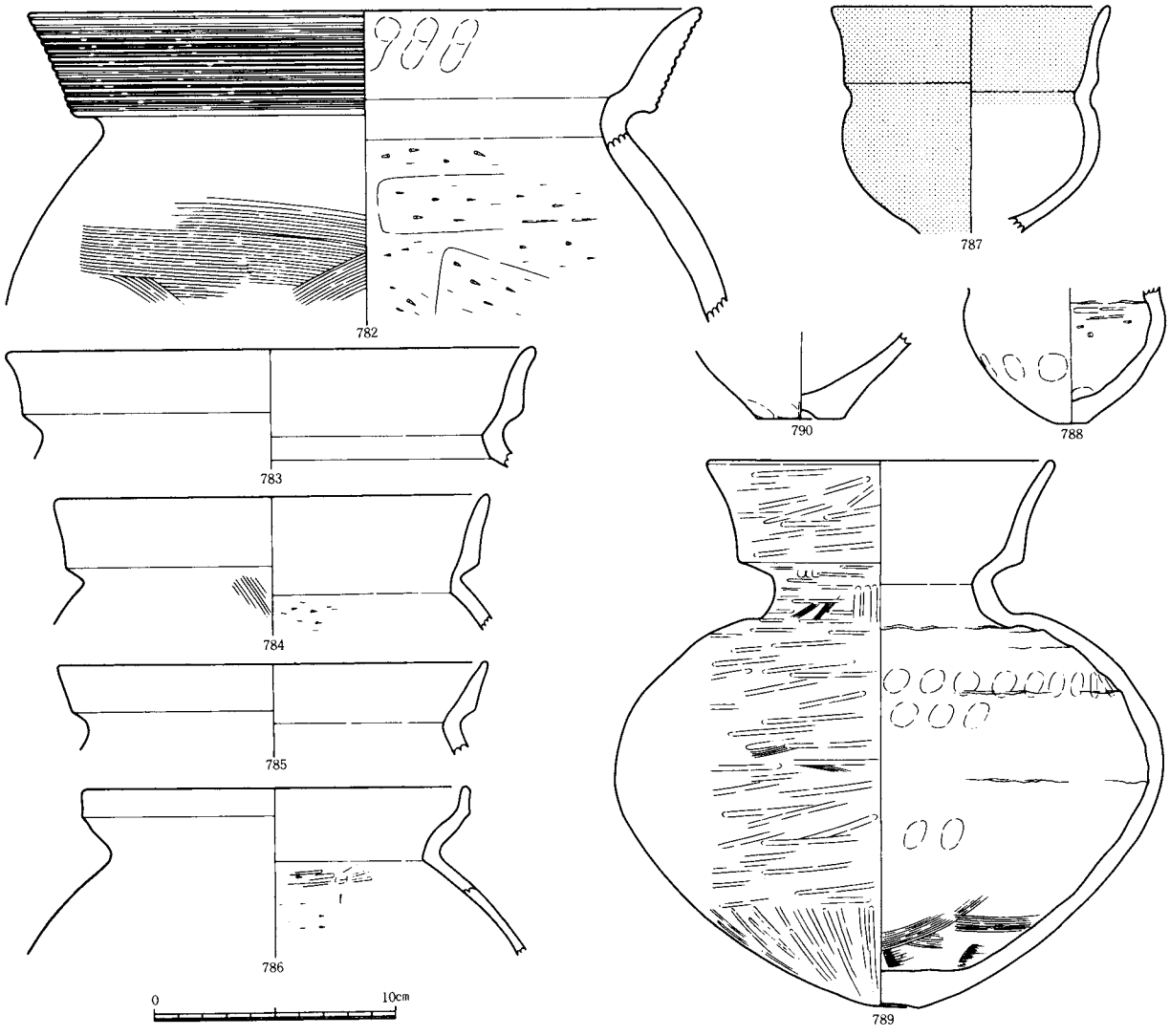
15　第20号住居址（第88・89図・図版28）

遺構　中地区の調査の最終段階で検出した住居址で、第二平坦面に所属すると言うよりは尾根の斜面でも上位にあり、第三平坦面のグループに属するものと考えられる。尾根の等高線に沿う形で、住居址の掘り込みが確認されたものの大部分は流失したものと考えられる。検出グリッドはＬ103・104、M103・104の範囲に限られる。周辺の住居址は第三平坦面に位置しているもので北東方向約5.5m、比高差約１mで第21号住居址が、南東方向約11m、比高差約２mで第23号住居址が立地している。西方向では約12mの距離で、比高差約２mの位置に第１号住居址が、南西方向の第二平坦面に属している第14号住居址までは約15m、比高差約3.5mを測る。

平面プランは方形を呈するものと推定されるが、検出したのは等高線に沿うところの東辺の１辺だけである。東辺の方位はほぼ磁針の方向と一致している。東側の掘り込み面で440cmを計測した。壁の高さは約30cmで、検出した壁溝は幅20～25cm、深さ10cmを測る。床面の検出は極わずかに限られ、床面の状況や主柱穴についてはまったく不明である。図示した平面図の小ピットは、木の根の攪乱によるものであろう。



第88図　第20号住居址(1/80)



第89図　第20号住居址周辺出土土器(1/3)

遺物　図示した資料は周辺グリッドから出土したもので、本住居址出土の資料は皆無である。出土したグリッドはＪ102・103、Ｌ101～103、M102・103である。782は口径28.4cmに復元される大型の甕で、頸部までは横ナデがいれられていて肩部以下に遺存している横方向の刷毛調整痕を消しているようだ。内面はヘラケズリがなされていて砂粒が露出しているものの比較的平滑となっている。口縁部内面の指頭圧痕はほとんど目立たないものである。色調は明るい茶褐色を呈し、焼成は良好である。783は口径22.2cmを測るもので、口縁部分が一定の厚みをもってのび、口唇部を丸くおさめている。内外周刷毛調整が丁寧に施されている。淡茶褐色を呈し、胎土の微砂粒は比較的少ない。784は内面の段が消失し、口縁下端に稜線が明確になるものである。胎土に砂粒の混和が多く、茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。口縁器表には煤が付着している。785は口唇部が尖り気味に成型されているもので、内面の断面は「く」の字状をなしている。やはり口縁部には煤が付着している。786は口径16.4cmを測るもので類例の少ない器形を呈している。外反して立つ口縁の端部が直立して短く立ち上がる。体部は横ナデが平滑に近いかたちでなされ、内面は丁寧なヘラケズリが施され、器壁はごく薄くに成型されている。体部および口縁には煤が付着している。色調は淡茶褐色をなし、胎土は微砂粒が若干混和され、焼成は堅緻に仕上がっている。787は口径11.6cmを測る台付の鉢である。摩滅が進んでいるのであるが、器表および内面の調整はややシャープさに欠けていて稜の部分が丸くなっている。淡黄褐色を呈し、胎土は精選されている。788はミニチュアの壷で口縁部分を欠損している。底部は指で押さえたような圧痕が見られる。789は復元完形となったもので、口径14.4cm、頸部径９cm、体部最大径23cm、器高22.6cmを計測する。肩部と頸部の継ぎ目がやや体部にめり

込むようになっているのが特色としてあげられる。器表面は全体に磨き調整で平滑にととのえられている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

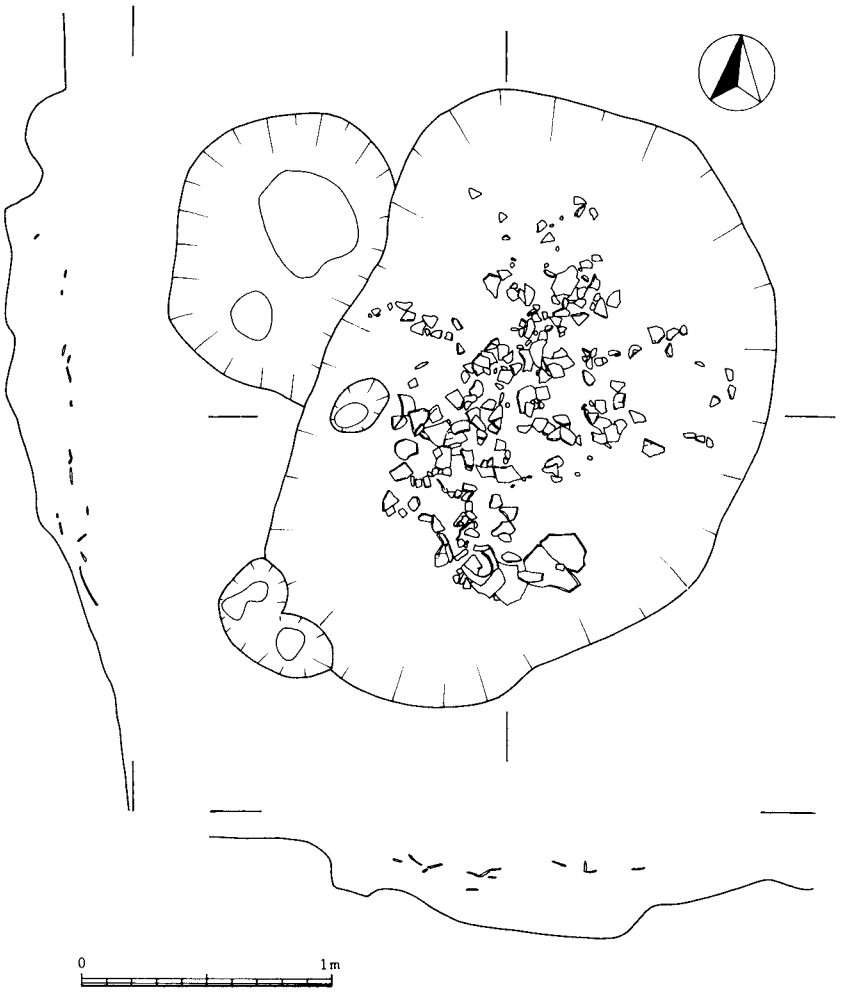
16　第１～３号土坑（第90～93図・図版29）

遺構　第１・２号土坑は中地区の南端、第６号住居址と第７号住居址の中間で検出したもので、断面形が皿状を呈した落ち込み３基が接するような状態でならんでいる。B96・97、C97グリッドの狭い範囲である。３基ならんでいる土坑の西端が第２号土坑で、中間に位置しているのが第１号土坑である。北東の土坑は遺物をまったく含んでいなかったもので木の根の攪乱である可能性が高い。

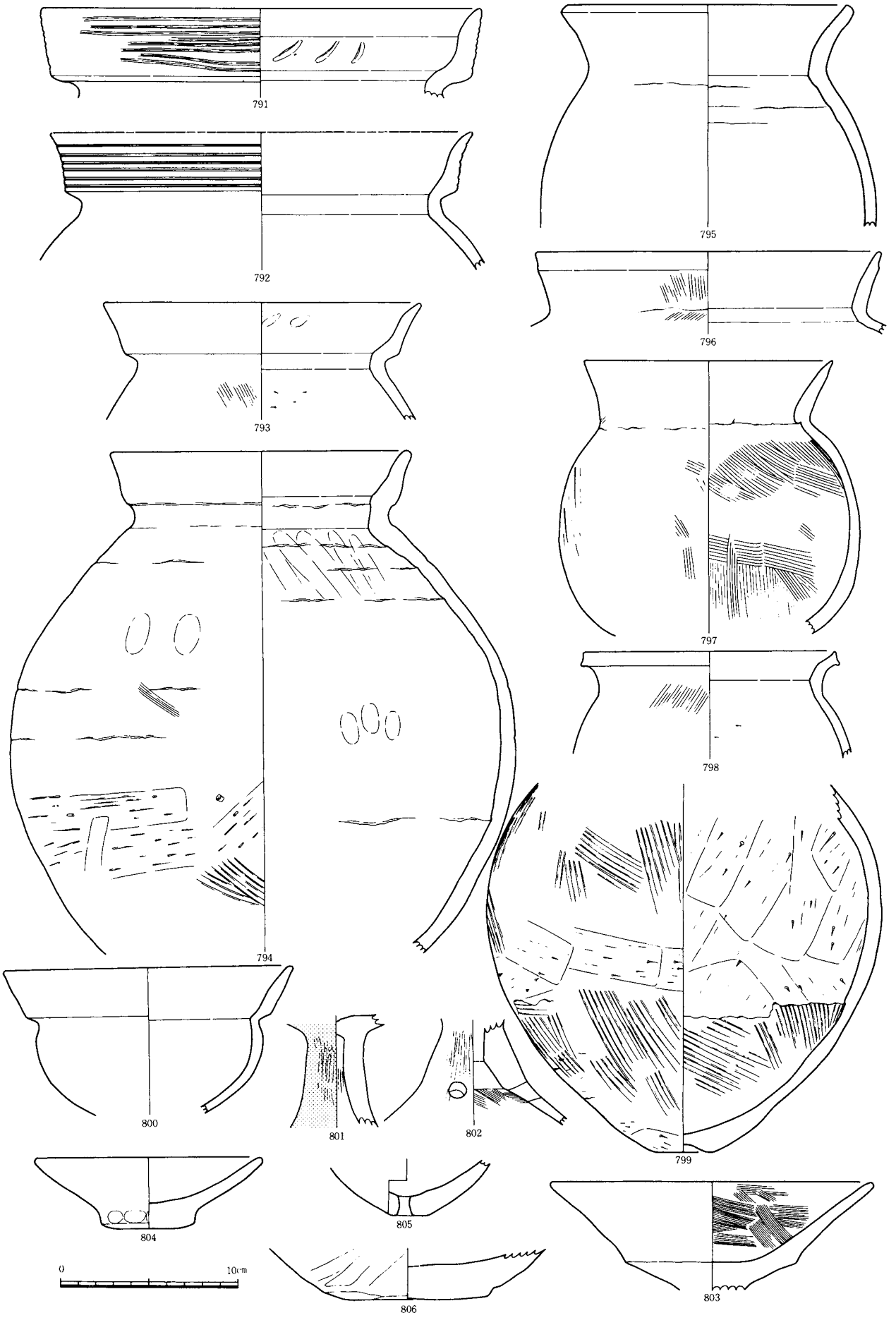
第１号土坑は平面プラン楕円形を呈し、南北方向の長径は250cm、東西方向の短径170cm、深さ37cmを測る。長軸の方位は北26度東に置いている。西側の周辺には攪乱穴が不規則な形状で入り込んでいる。土坑の中には床面から15～25cmほど浮いたレベルで土師器片が多数出土した。床面は平坦ではなく、凹凸がめだつている。覆土は暗茶褐色土で、分層は困難であった。

第２号土坑は第１号土坑の南方向約2mに位置しているもので、平面形は楕円形をなしている。南北方向の長軸は225cm、短軸約180cm、深さ50cmを計測した。長軸の方位は北19度東に置いている。覆土は暗茶褐色土が堆積し、床面は中央部分が不規則な形で深くなる形状を示していた。遺物は最も深くなる地点で床面の傾斜に沿う形で検出された。床面からは約10～20cm程浮いた位置に当る。量的には多くはない。

第３号土坑は第三平坦面の西側傾斜面に位置している物で、第21号、第20号、第11号住居址に囲まれた中間にあたる。検出グリッドはN102・103である。平面形は楕円形を呈し、長軸の南北方向は260cm、短軸の東西方向は



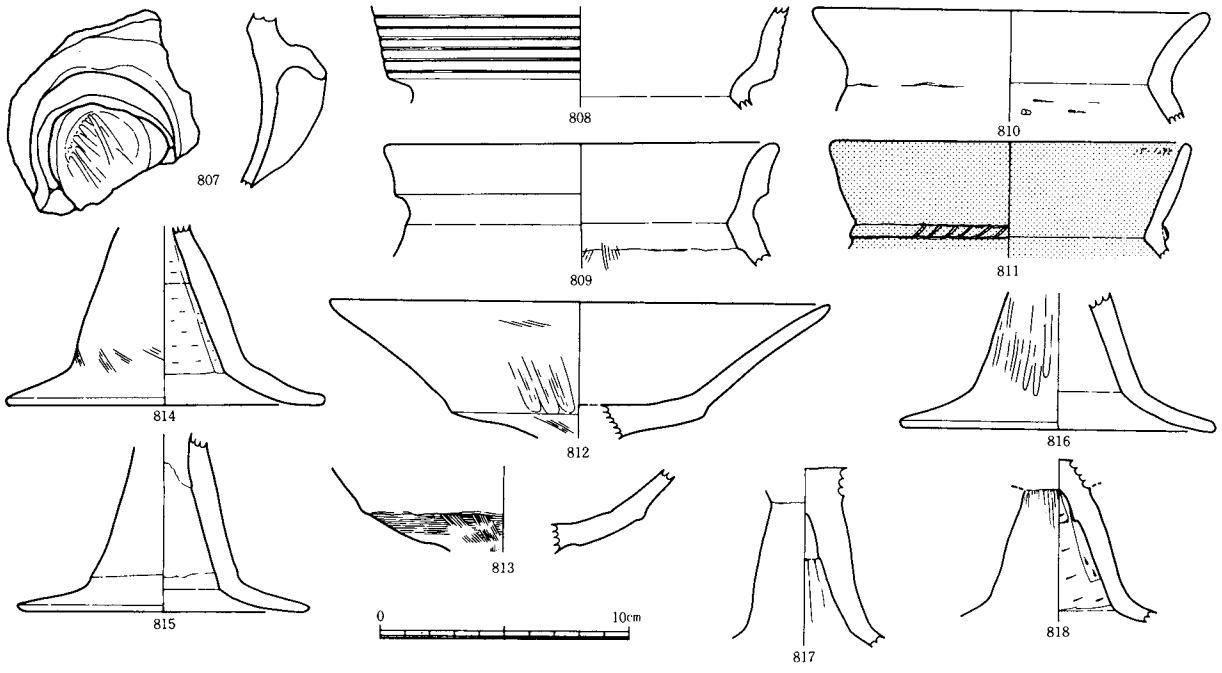
第90図　第１号土坑(1/30)



第91図　第１・２号土坑出土土器(1/3)

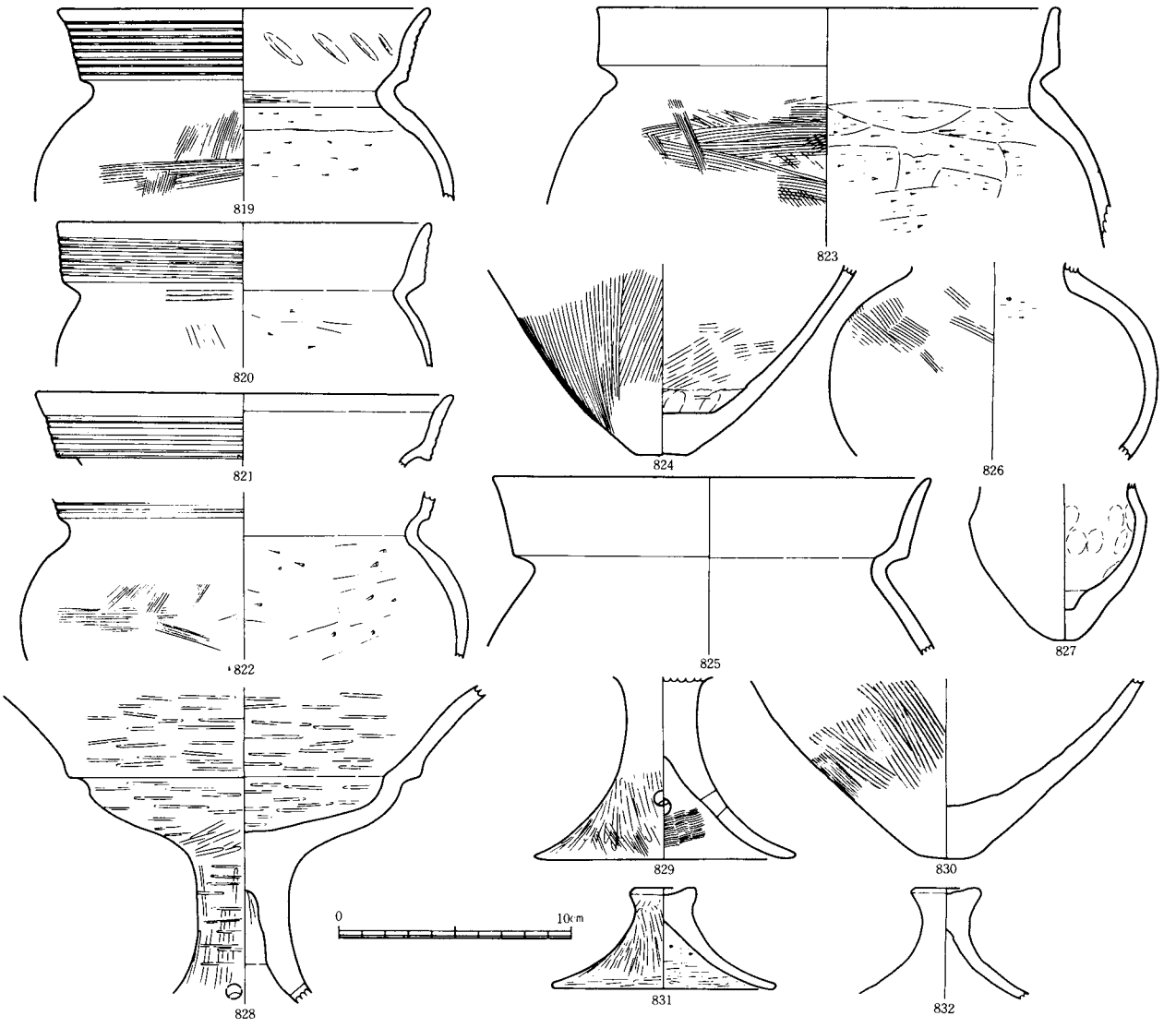
155cm、深さは20cmを測り、主軸方位は北11度東に置いている。床面は比較的平坦にならされ、遺物は床面近くでの出土が目立つ。

遺物　794～797・799・804・806は第1号土坑から出土したもので、803は第2号土坑からのものである。792・793・800・801は第2号土坑から南西方向に伸びた行く溝から出土したものである。その他の遺物は第1号土坑周辺グリッドからのものである。791は口径25.2cmを測るもので、色調茶褐色を呈し、胎土は微砂粒が多く含まれている。口縁下端の段に残る指頭圧痕はほとんど目立たないものである。792は口径24.2cmを測るもので、内外面と



第92図　第1・2号土坑周辺出土土器(1/3)

も風化が著しく進行しているもので色調濁黄褐色を呈し、胎土に微砂粒の混和が多く、焼成は良くない。793は口径18.2cmを測る素文のもので、内外周ナデ調整が施されている。胎土、焼成は普通である。794は口径17cm、体部最大径23.8cm、現器高28cmを計測する。口縁の有段部は粘土を貼付して成型したものである。頸部は短いもので、内面の成型に対応している。体部はナデ調整でととのえられ、体部の下半部は粗いケズリが施されている。淡茶褐色を呈し、胎土の砂粒は比較的少なくなっている。焼成は普通である。795は口径16cmに復元できるもので、やや厚手に作られている。内外面の調整は粗雑なもので、内面では粘土紐の輪積み痕が残っている。胎土、焼成はやや良くない。796は口径19.2cmを測るもので、口縁端部をつまみあげるようにして尖り気味に成型している。体部の上半部と体部の内面は刷毛調整がなされ、体部の下半部は縦方向の粗い削りが施されている。濁褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多い。797は口径13.6cm、現器高15cmを計測する。口縁部の内面は頸部の位置から粘土が足されて成型されているのが見られ、口縁全体をおおっているもののようだ。内面は刷毛ナデのあとにナデ調整がなされている。口縁部は尖り気味に成型され、肩部周辺まで横ナデが、体部は縦方向の削りが一部に施されている。濁褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。798は口縁の端部を肥厚させて面を形成させるもので、胎土には多量の砂粒が混和されている。799は胴部最大径22cm、現器高20cmを測る甕形土器の胴部である。底部は窪み底として成型され、火熱による赤変が認められ、体部には煤が厚く付着している。底部と胴部はつなぎあわされたもので、接合部分での調整が明確に変化している。胎土には比較的大粒の砂粒が目立っている。800は口径16.4cmを測るもので、内外周丁寧なナデによって調整されている。胎土は精良である。801は赤彩のなされた高杯で、受部の中央が窪んでいるのは、焼成後に穿孔しようとしたものである。胎土には若干の砂粒が混和されているが、器表面は丁寧に磨かれているために目立つものではない。802は器台形土器の脚部であ



第93図　第３号土坑出土土器(1/3)

る。脚柱の内面も平滑に近い形で調整されている。胎土は精選されている。804は口径13cm、器高4cmを計測するもので、全形が復元できたものである。底部は平底で体部との境界には指頭圧痕が見られる。体部の内外面はナデ調整がなされているが、底部の調整ほど平滑ではない。淡茶褐色を呈し、胎土に僅かに微砂粒を混和している。焼成は普通である。803は口径18cmを測る高杯の受部で、内面は皿状を呈していて、外周の段は形骸化したものとなっている。受部の内面は刷毛調整の痕跡が明瞭に残っている。明るい茶褐色を呈し、胎土は良好である。806は底径8.5cmを測るもので大型の壷器形に付くものであろう。底部は粘土塊を足したもので、ヘラによって削り落として成型しているものである。

807は大型の鉢器形に付く把手で、頸部の屈曲の位置が認められる。把手は歪な形で取り付けられ、径6.5cm、高さ２cmを計測する。内面は丁寧な削りがなされた後、磨きが施されている。809は口径16cmを測るもので厚手の成型となっている。811は口径14.2cmに復元できる壷形土器で、内外面に赤彩が施されている。頸部に隆帯が置かれヘラ先による刻みが加えられている。器表は摩耗が進んでいて、調整は判断できない。胎土には微砂粒が混和されている。812は口径20cmを測る高杯の受部で、精選された胎土が使われている。底面は若干の平面が作られているものの、風化のために調整はつかめない。器表面は縦方向の磨きがなされている。淡黄褐色をなし、焼成はやや良い。813は皿状をなす底面をもつもので、器表の底面は刷毛調整痕を遺存している。器表面の段は粗雑な成型で、横ナデ調整は段のある位置までである。茶褐色を呈し、胎土は良好である。814は脚部径12cmを

はかり、朝顔状に開く独特の脚柱をつけ、大きく外展する脚部をもつ。全体を刷毛で調整したあとに内外面とも横ナデが施されている。色調は茶褐色を呈し、胎土は精良である。815は脚部の径が11.8cmを測るもので、脚柱部に平面に近い脚部が付いていて接合部分で内面に接合痕が、器表面には僅かに段がついている。胎土には微砂粒が若干混和されている。

819～832は第3号土坑からの出土品である。819は口径16.2cmを測るもので、口縁の内面に明瞭な指頭圧痕が見られる。肩部は縦方向の刷毛の後に横ナデが、体部は横方向の刷毛が入れられている。821は口縁端部の内面で面が取られて器壁が薄く成型されて外傾気味になり、口縁の下端は鋭く稜線がついている。822は体部の最大径の位置から、横方向の刷毛調整がなされていて819に類似する在り方を示していて、器表面の色調は大きく異なっているものの、同一個体の可能性が考えられる。これらの擬凹線をもつ甕形土器の成型が、シャープな調子であがっている点が注目できる。823・824は同一個体の甕であるが、復元完形にするまでにはとどかなかった。口径20cmを計測し、口頸部は横ナデによって調整され、肩部以下は横方向の、底部周辺は縦方向の刷毛調整が施されている。底面の調整は粗雑なもので押圧をなした後がそのままに遺存している。また、底部の器表面は剝落があばた状に遺存しており、火熱によるものかと想像される。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含むものの器表面では目立たず、また、内面のヘラケズリの後にも砂粒の移動はほとんど見られない。825は口径19cmに復元されたもので、シャープな成型となっている。器表面は著しく剝落が進行している。827はミニチュアの甕形土器で、風化が進んでいる。底面には指頭にかかるものと推定される窪みが認められる。829は脚部の径が11.2cmを計測するもので、脚柱部分は横方向のナデが、脚部は斜め方向の刷毛が入れられた後に、磨き調整で平滑になされている。穿孔は4個である。淡黄褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和され、焼成は良好である。831・832は蓋形土器で、831は口径9.6cm、器高4.2cmを測る。内外周ともヘラ跡がはっきりと判る磨きがなされている。

第４節　東地区・古墳時代前期の遺構と遺物

１　第13・21号住居址（第94～98図・図版36）

遺構　東地区の第三平坦面は尾根状地形を呈しているもので、南北方向での長さは約90m、東西方向の幅は約15mを測る。標高は45.3mを測り、第二平坦面の第７号住居址の38.5mとの比高差は約７mに近い。この尾根状平坦面の部分はほとんど全掘に近い形で調査を実施していて、北端部の長さにして約30mの範囲が未掘区として残されただけである。この尾根筋は北端および南端は急激な角度で落ち込んでいき、南側は第二平坦面に続いていく。西側はやはり急激な角度で落ち込んでいき、東側はゆるやかな傾斜で落ちわずかな鞍部をおいて本丘陵の端部に至る。第三平坦面の尾根中軸線から約40m東で深い谷地形となっている。谷を挟んだ対岸の丘陵はやはり高低差のある平坦面が認められるが、縄文時代の刈安・上野堂畑遺跡が北側に立地しているだけで、古墳時代の遺跡は展開してはいなかった。

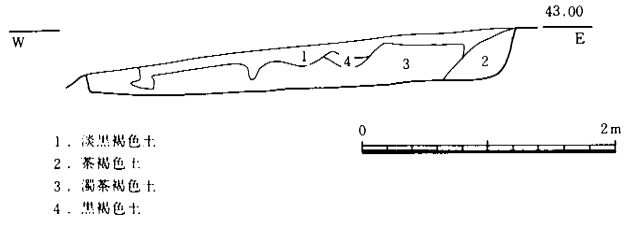
第13号住居址は北東部の隅で検出したもので、掘り方の一部を発見したにとどまり大部分は未掘区の方に展開しているものと推定される。検出グリッドはQ102・103、R102・103にわたるが、極限られた範囲である。平面形は隅円方形を呈するものと推定できるものの、規模はまったく不明である。検出したのは南東のコーナー部分で、170cm×350cmである。南側の辺は北70度東に置いている。覆土は淡黒褐色をなす表土層の他に濁茶褐色土が約20～40cmの厚さで堆積し、直立気味に立つ壁の周囲に茶褐色土が認められた。床面は壁の周辺を除いて平坦であった。壁溝は遺存していない所もあってやや不規則な形で巡っている。幅15cm、深さ４cm程度のものである。出土遺物は皆無である。

第21号住居址は第13号住居址の南東方向約7.5mに位置し、南東16mには第23号住居址が立地している。尾根筋の傾斜がわずかに変換する地点にあたり、第23号住居址の遺構検出面とは段差が生じている。検出グリッドはN104・105、O104・105、P104・105の広い範囲に渡っている。

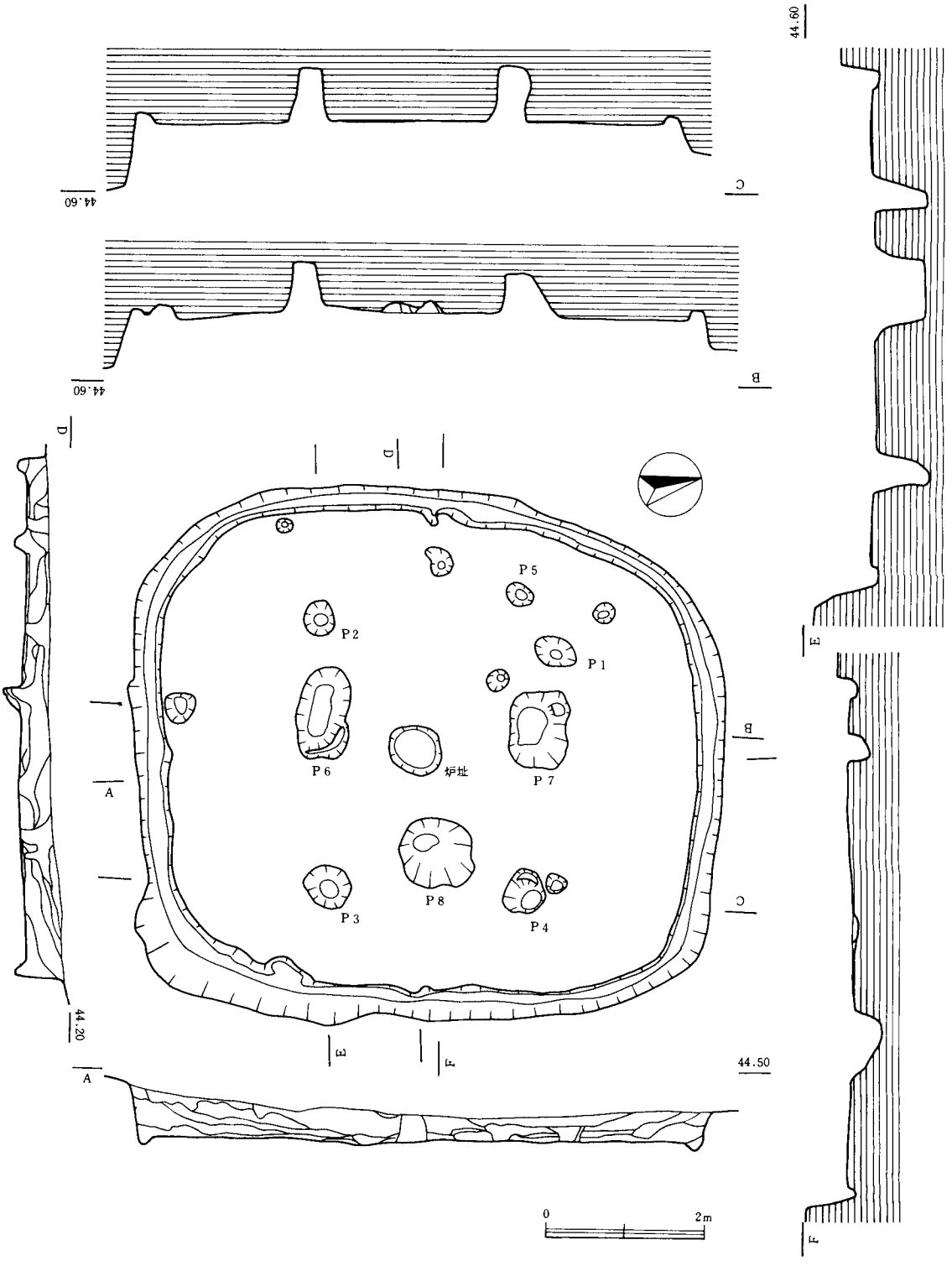
平面プランは隅円長方形を基本的には持つのであるが、長辺の一部が膨らむような形となっていて、丸味の強い独特の平面形を呈している。本遺跡の中でも特異と言える。南北方向の長軸は740cm、東西方向の単軸は660cmを計測し、長軸の方位は北12度西に置いている。傾斜の変換線上にあることから、地山での遺構検出面から床面までの深さには北と南では大きな差がある。北側では浅く約26cmであるが、南側は68cmにまでおよぶ。覆土が東西方向で複雑な状況を示しているのは、木の根によるところの攪乱が原因と推定され、南北方向での状態が素直な形での堆積と考えられる。つまり、壁の近くでは斜め方向での地山の色彩に類似する暗褐色土、黄褐色土、暗黄褐色土が遺物を包含して細かく堆積し、住居址の中央部分では窪地となった位置に長い期間をかけて黒色腐蝕土が堆積したことがうかがえる。当然の事ながら黒色腐蝕土層に含まれる遺物は小片となったもので占められる。

壁溝は全体に巡らされていて、断面形状は底面の広いU字形をなし幅15cm、深さ10～15cmを計測する。覆土には若干の遺物を包含していた。

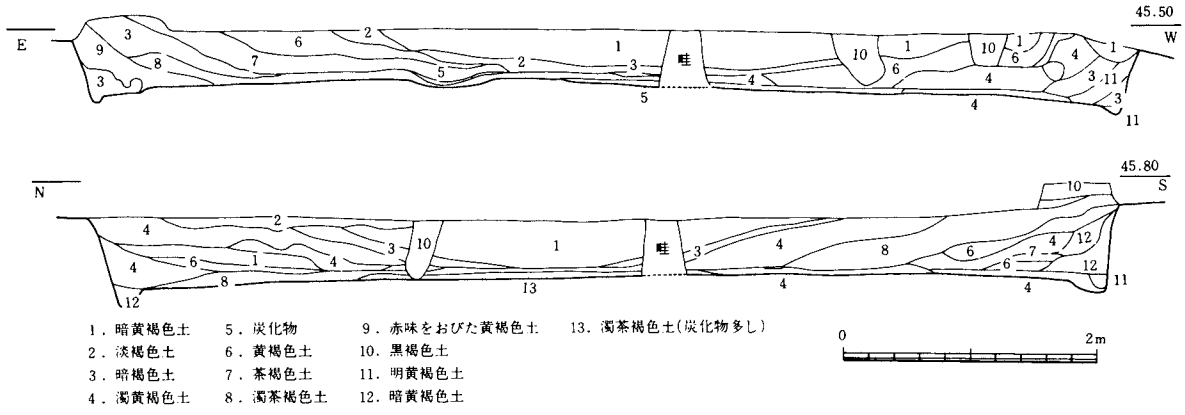
床面は平坦にととのえられ、炉址のある中央部分に向けて楕円形をなしてわずかに傾斜している。炉址は平面形が楕円形状を呈していて、径60×70cm、深さ15cmを計測する。覆土は暗褐色土で、焼土や炭化物の含まれ具合によって分層することができる。



第94図　第13号住居址土層断面図(1/60)



第95図　第21号住居址(1/80)

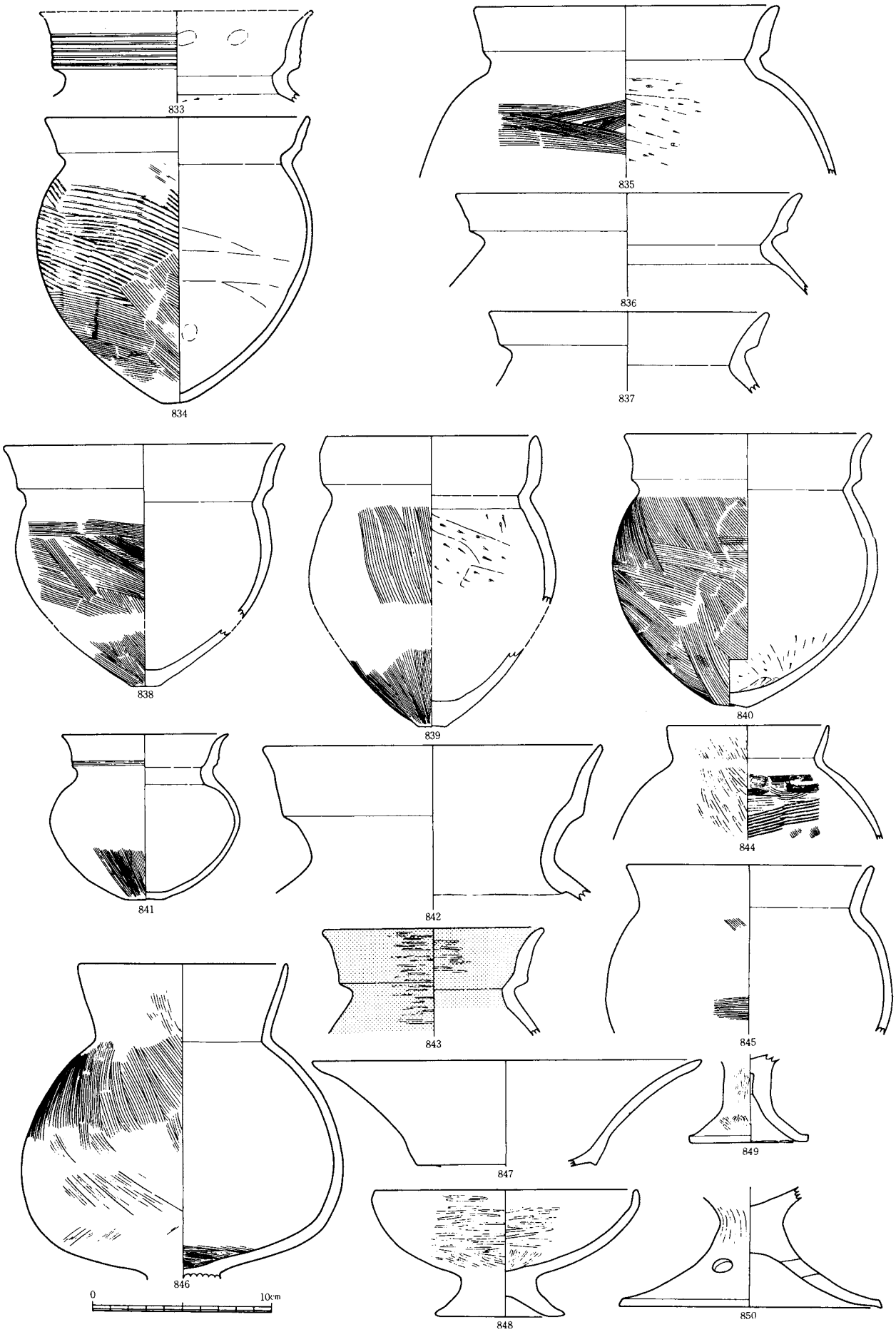


第96図　第24号住居址土層断面図(1/60)

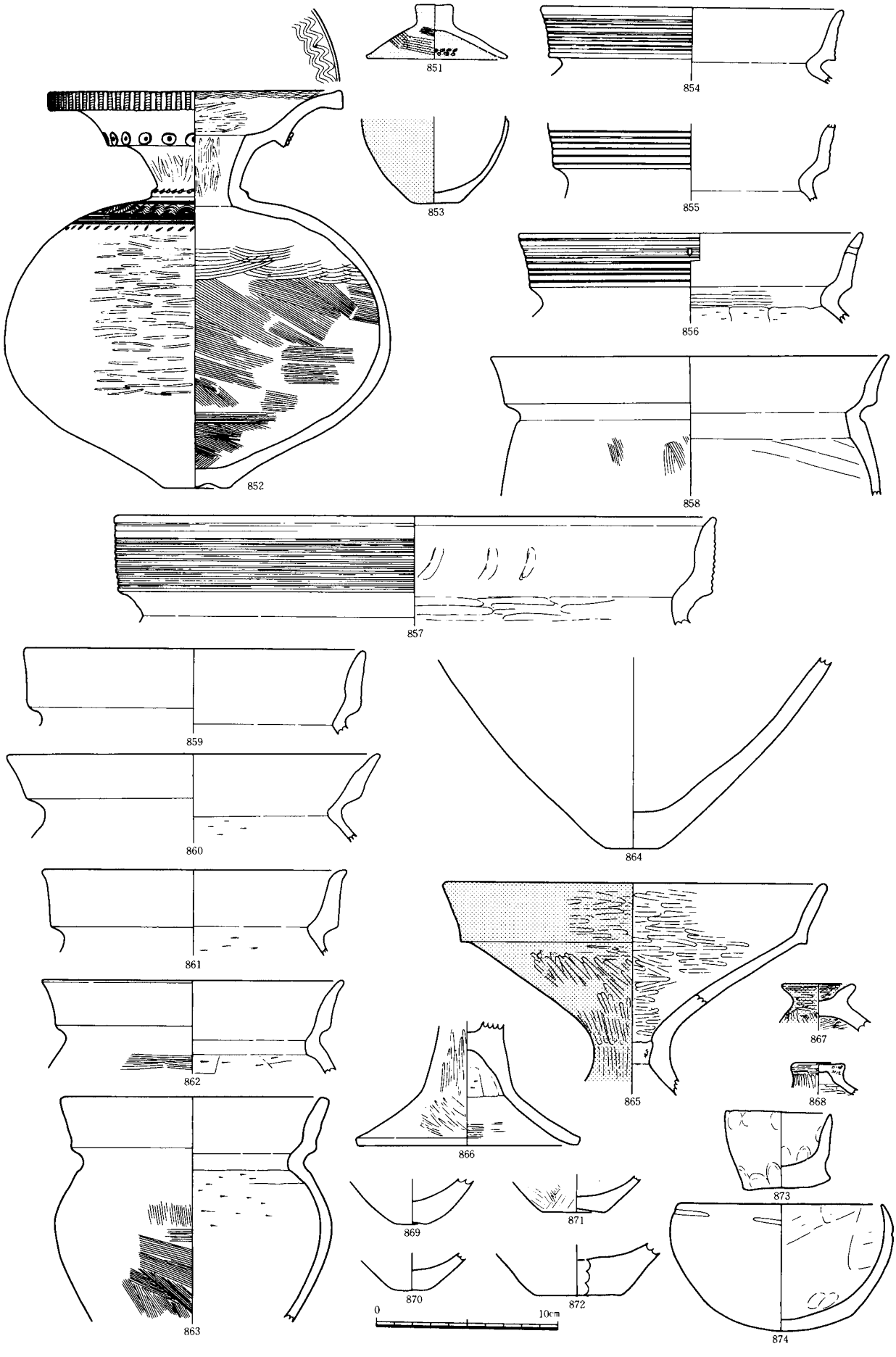
主柱穴は4本と推定できるが、北西隅の柱穴がやや位置的に歪んだ点が指摘される。柱穴の掘り方は平面楕円形をなし、二段掘りとなるものも見られた。径40～60cmのもので、Ｐ１～Ｐ４のそれぞれの深さは47cm、64cm、67cm、69cmを測り、Ｐ１とＰ２の心々間は300cmで、Ｐ２とＰ３は340cm、Ｐ３とＰ４のそれは260cm、Ｐ４とＰ１のそれは300cmを計測する。主柱穴の中間には平面形が方形ないしは楕円形をなす土坑が掘り込まれている。南辺のＰ６は径120×63cm、深さ64cm、北辺のＰ７は径92×70cm、深さ73cm、東辺のＰ8は径100×80cm、深さ30cmを計測する。これらの土坑は前後の関係を持つものであるのかの確認はできず、覆土も同じような色調である暗褐色土である。これらの土坑が前後の関係を有するものとしたならば、Ｐ５が主柱穴の一つとして考えることが可能であろう。すなわち、Ｐ４～５の心々間が380cmとなり、Ｐ７がその中間に位置することとなる。いずれにしても、本住居址は３回の改築を想定することが可能とも考えられる。

遺物　834・840・851・853は壁溝ないしは壁溝の肩部から、839・847はＰ８の覆土から、836・838・848・850は床面から出土したもので、他のものは覆土特に南肩からのものである。854～874の資料は住居址周辺部特に東側のグリッドから得られたものである。

834は口径15cm、器高15.8cmを測る復元完形品である。口縁の下端はわずかに突出するような形で両脇から押さえて成型している。頸部までは横ナデ調整がなされ、体部は斜め方向の刷毛が、そして、尖り気味の底部の近くではやや目の細かい刷毛が施されている。体部と底部で工具を変えているものと見られる。底部周辺は火熱による赤変が見られ、体部には煤が付着している。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒が混和されている。835は頸部を除いて煤が厚く付着している甕で、口径17cmに復元できる。頸部までは目の粗い横ナデ調整がなされ、体部は横方向の刷毛調整である。胎土には粗い砂粒が混じているが、器表面では目立たない。836は口縁部に煤が付着しているものであるが、風化が著しく進んでいるものである。茶褐色を呈し、胎土には粗砂粒が多く含まれている。837は口径15.6cmを測るもので、口唇部が尖り気味にして大きく外反する口縁を付けている。体部は横方向の刷毛調整がなされている。濁黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒の混和が多い。838は尖り底の底部と体部の接合が出来なかったもので、口径15.8cm、復元器高13.5cmを計測する。内面での成型を見ると、口縁部と体部との屈曲の度合いが比較的弱くなっていると言える。器表面は頸部の屈曲するところまで横ナデが、体部は横方向ないしは斜め方向の刷毛が、底部は縦方向の刷毛が施されている。内面の調整は摩滅のために判然とはとらえがたい。器表面全体に煤の付着がみられ、口縁の内面にも炭化物が付着している。839はやはり図上で復元したもので、口径12cm、復元器高16cmを計測する。口縁部がわずかに内湾傾向で立ち上がり、口縁下端の段も丸味を帯びている。口縁は横ナデが、体部は目の粗い縦方向の刷毛が、体部の内面は斜めないしは縦方向の削りが施されている。底部は径1.5cmの小さな平底がつけられ、底面の調整はナデによってやや平滑にととのえられている。焼成は堅緻である。840は口径14cm、器高15cmを測るもので全体が復元できた。端部で外反する口縁の内面の段は極めて小さくつけられていて、体部との屈曲も弱くなっている。器表面の調整は頸部が斜め、胴部の最大径の部分



第97図　第21号住居址出土土器(1/3)



第98図　第21号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

では横方向、底部では縦方向と工具の向きを変えている。内面の調整は底面は削り痕をそのままに残しているが、胴部はナデによって平滑に整えている。底部は小さな窪みが付いている。器表面全体に煤が付着し、底部周辺は火熱によるところの赤変が認められる。淡褐色を呈し、胎土には多量の砂粒が混和されている。焼成は良好である。841は完形に復元できたもので、口径9.4cm、器高9cmを計測する。体部に煤の付着があるが、全体に摩滅が進んでいるものである。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。842は口径18.2cmを測る大型の壷であるが、内外面とも風化が進んでいる。844は口径9cmを測るもので、極めて薄手に成型されている。体部の内面は刷毛工具を変えて調整を施していて、頸部には指頭圧痕が認められる。器表面は縦方向の磨きによって平滑にされている。底面は頸部に見える目の細かい工具によって調整されている。底部は確実とは断定できないものの、盛り上がっているところから脚部台が付く可能性が考えられる。色調は暗褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も堅緻である。846は844と同じ器形をなすものと推定されるもので、脚台を除いて復元することができた。口径11.8cm、胴部の最大径は18cm、現器高17.4cmを計測する。口縁と肩部は縦方向の刷毛調整がなされているが、底面を含めて整形された後になされているものである。底面は平坦に近い形に成型されていて、刷毛調整が施されている。脚台の径は3.5cmを測る。色調は褐色ないしは暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。焼成は堅緻に仕上がっている。845は「く」の字状口縁の甕で、口径13.8cmを測る。内面を含めて粗雑なナデによって調整されている。体部には煤が付着している。847は器表面がほとんど摩滅してしまっているもので、口径22cmを測る。848は脚台の一部を欠損しているだけのもので復元完形となった。口径15cm、器高7.1cmを計測する。椀状を呈する体部にやや内屈気味の口縁が付くもので、内外面とも平滑に磨きが施されている。口縁の一部に内外周ともに炭化物の付着しているのが認められ、灯心油痕ではないかと推定される。色調は淡橙色を呈し、胎土、焼成とも良好である。849は小型の脚台部であるが、高杯のものとは断言できない。器表面は磨き調整がなされている。850は脚台部の径が15cmを測るもので、器表面は摩滅して荒れている。胎土には微砂粒が多く混和されている。

851は器表面に刷毛の痕跡を遺存して赤彩が施されているもので、口縁の端部は若干ながら欠損している。内面には細い棒状具による刺突が列点状に加えられているのが円形に遺存しており、丁度列点状の所で剝落している状態と想定できる。つまり、内面には返しのようなものがつけられていた可能性が高いと考えられる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選されたものが使われている。852は住居址の南側の覆土から出土したもので、復元完形品となった。口径16.2cm、頸部の径4.8cm、胴部最大径21.4cm、底径3.8cm、器高21.6cmを計測する。口縁端部の内面には4本単位の波状紋が、外に向いた口唇部には縦方向の沈線が櫛歯の条を明確に残して巡らされ、口縁部の下端部には径0.9cmのボタン状のものが貼付され中心に円筒状の工具で刺突が加えられている。頸部は小さな段が作られ刻みが施文されている。肩部には平行線文、波状文、刻目文が比較的浅めの沈線となって加飾されている。底部は窪み底であるが、中心が盛り上がる形で成型されている。口縁の外周は横ナデ調整が、口縁の内面、頸部、体部は入念なヘラミガキが施されている。口縁の外周の片側に煤の付着が観察できる。色調は褐色を呈し、胎土は微砂粒を混和したもので、焼成は堅緻である。

856は煤が厚く付着している甕で、口径18.6cmを測る。口唇部の近くに小さな穿孔がなされている。判然とはしないが、焼成前に開けられたものと思われる。857は口径33cmに復元できるもので、擬凹線は深くに引かれている。内面には指頭圧痕が器壁の厚みの変わるところに残されていて、頸部を含めて横ナデ調整がなされている。頸部の内面はヘラミガキがなされているのが見られるが、体部の調整は不明である。淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒の含有も少なく良好である。859は口径19cmを測るもので、内面の横ナデが一部で斜め方向になされているのが観察できる。864は口径15cm、現器高12.6cmを測る。864は径3cmの平底を持つもので、器表はナデによって比較的良好に仕上がっている。器表面は淡黄褐色を、内面は暗褐色を呈している。胎土には砂粒を多く含んでいるものの、器表面ではほとんど目立たない。865は口径21cm、現器高11.4cmを測る器台形土器であるが、脚台部と受部は接合できず図上で復元した。受部の段は稜線が立つようにシャープに成型されている。内外周ともに丁寧なヘラミガキが施され平滑、堅緻に仕上がっている。胎土、焼成とも良好である。867・868は蓋形土器のつ

まみの部分で、ともに良好な胎土、焼成を示している。873は径6cm、器高4cmを測る手づくねの土器である。874は口径11.2cm、器高7cmを測るもので、復元完形品である。底面は丸底で、内傾する尖り気味の口縁部に1条の沈線がとぎれがちに巡っている。器表面は粗雑なナデ、内面は砂粒が移動するような削りに近い調整がなされている。色調、胎土、焼成は873と同じもので、暗灰褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。

2　第23号住居址（第99～106図・図版37）

遺構　第三平坦面の中央部に尾根幅を一杯に占地して位置しているもので、第1号住居址と規模の優劣を争うほどの大型の住居址である。第21号住居址の南方向約16mにあたり、南方約4mには第24号住居址が立地している。西側は急傾斜面で第二平坦面の第14号住居址が距離にして12m、比高差5.5mのところに位置している。東側は緩傾斜面となっていて遺物を数多く包含していた。住居址の検出は表土を除去した段階で輪郭がほぼ現れた。つまり、地山のレベルが高い位置にあつたことを示している。第21号住居址の間には住居址が1基存在する可能性を推定したものの、大木の切り株が多数位置していたために土の色調の判断が困難であった。その後に一定の範囲で掘り下げてみたものの、地山の変化はとらえられなかった。

本住居址の平面形は、発掘調査の過程では大規模であることもあって円形プランの形態を想定したが、床面の主柱穴が5本であるところから五角形の住居址とようやく認識し得た。一辺が約7～8mの隅円五角形の平面形を持つもので、南北方向11.8m、東西方向11.6mの規模を計測する。主軸をどのように考えるか迷う所ではあるが尾根筋の在り方から南北方向とすると、北1度東に置くものとすることができる。

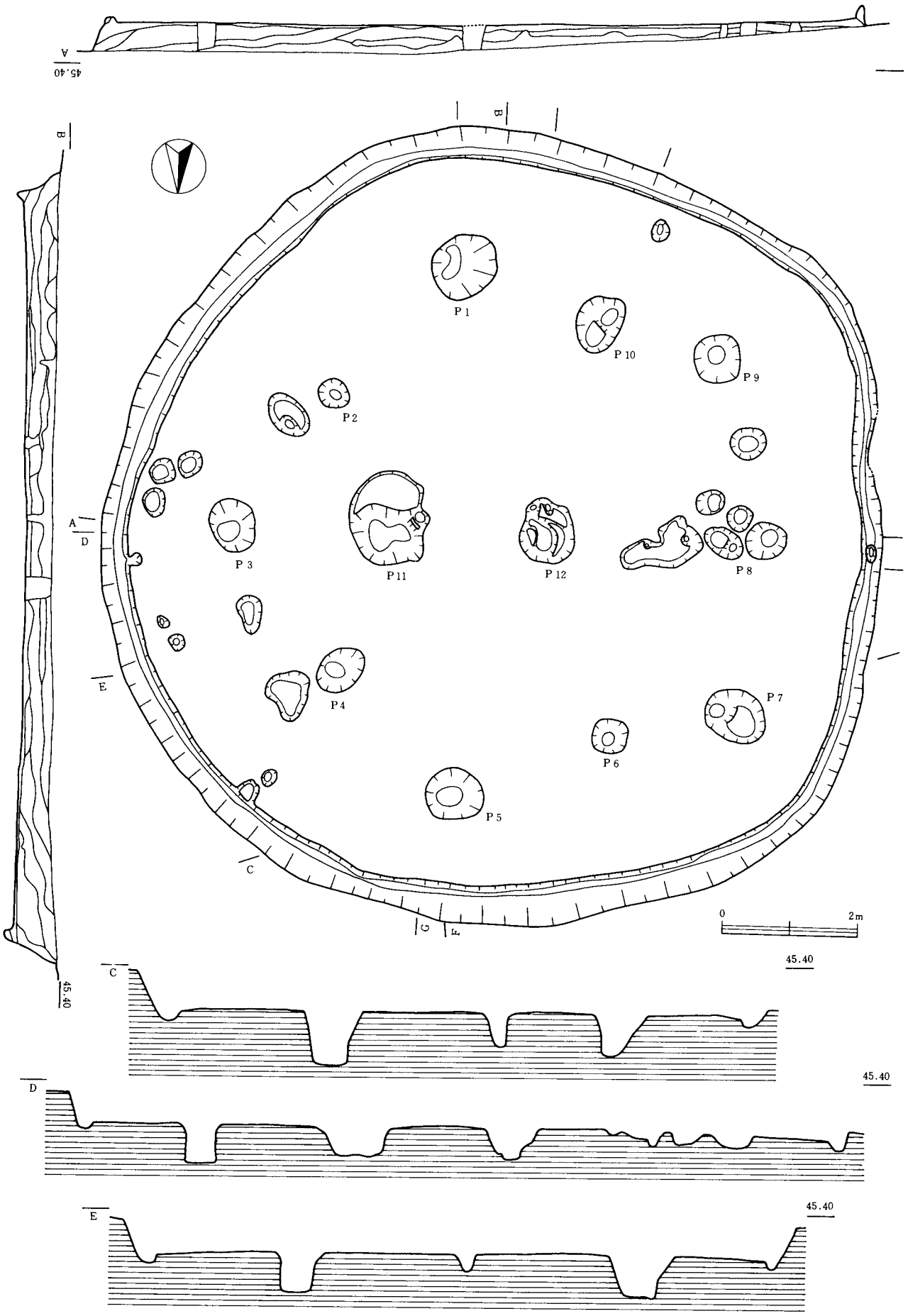
壁の高さは西側方向に向けて地山が傾斜していることもあって、西側が低く他の地点は高くなっている。北側は最も高く66cm、南側が58cm、東側が42cm、西側は13cmを、それぞれ計測した。覆土は自然の堆積を示しているものと考えられ、第21号住居址と相似した在り方を示していると言える。床面の上位には暗黄褐色土が薄く堆積し、その上に暗褐色土、明黄褐色土が見られる。壁際の部分では遺物や炭化物を含んだ褐色土が斜め方向に層を形成し、住居址の中央部分では暗褐色土が堆積している。上層の覆土にはほとんど遺物は包含されていない。この上層の暗褐色土を切り込んで焼土粒を含んだ土坑が発見されている。第10号土坑である。

遺物　床面は比較的平坦ではあるが、わずかながら西地点で傾斜が強くなり東側との比高差は約20cmを測る。壁溝は全周していて、断面U字状をなす。幅15～30cm、深さ10～15cmを測り、暗黄褐色土が堆積していた。覆土には若干の遺物が包含されていた。床面では焼土粒等は検出できず炉址は発見できなかった。北方向の壁面近くで若干の焼土粒を検出したところがあるが、住居址の覆土内であり不要の物を焼却した際のものと推定した。

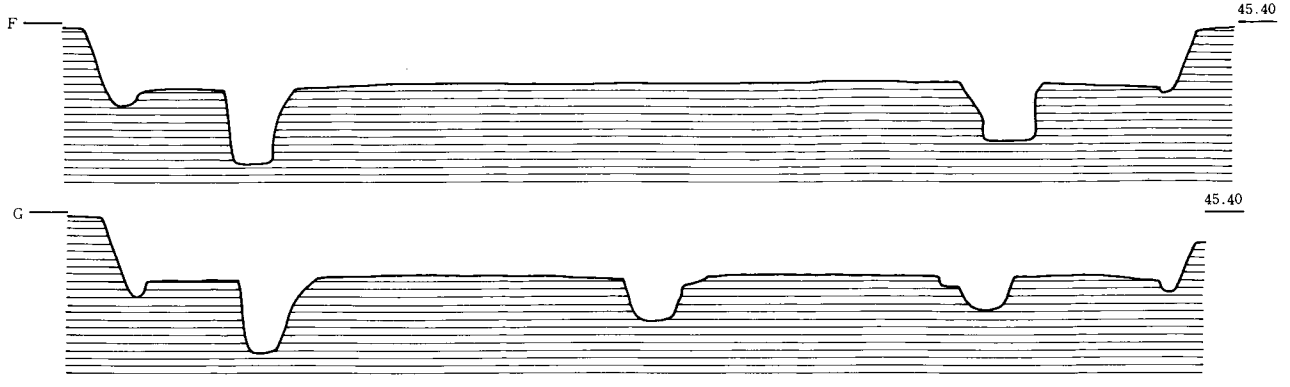
主要な柱穴は5本であるが、その間をつなぐようにやはり5本の小柱穴があり、住居址の中央部分に2基の小土坑が発見された。P1は径100×90cm・深さ60cm、P3は径82×66cm・深さ58cm、P5は径88×78cm・深さ79cm、P7は径95×75cm・深さ62cm、P9は径70×64cm・深さ75cmをそれぞれ計測する。これらの主要な柱穴の間にあるピットは、径がひとまわり小さく深さもやや浅めの掘り方となっていて、24～50cmの深さに止どまっている。心々間の距離を計測すると、相対する南北の辺の一辺が同一で、他の三辺が揃っている。つまり、P1～P9、P5～P7の心々間が420cmで、残りの三辺が520cmとなっている。そして、間隔の短い主柱穴の中間にあるものは等分されているのではなく、P9～P10、P6～P7の心々間は170cmとなっている。他の柱間は250～260cmを計測する。

遺物　床面から出土したものは、875・881・883・887・892・893である。壁溝から出土したものは、876・879・891で、ピットから出土したものは、882・884・885・896・897・901が上げられる。905～973の遺物は本住居址の東側のグリッドから得られたものである。H109～111、J109・110、K109・110、M108・109の各グリッドからのものである。西方向の斜面での遺物は皆無である。

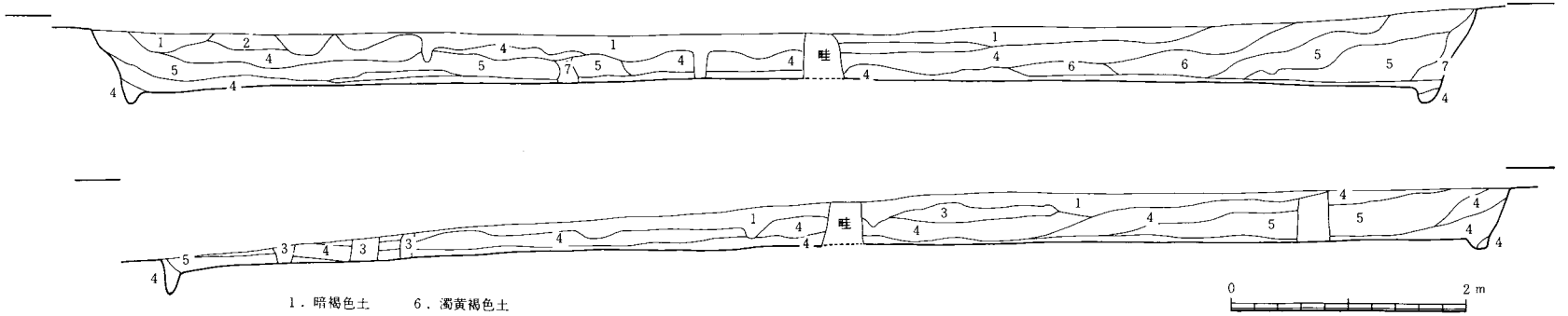
875は口径18.4cmに復元できるもので、器表面に煤が付着している。口唇部は尖り気味に成型され、内面にわずかに段が作られている。淡褐色を呈し、胎土に砂粒が若干混和されている。遺存状態は堅緻である。876は大きく外傾する口縁にわりあいはっきりとした擬凹線が巡らされているものであるが、風化が著しく進行してい

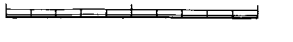


第99図　第23号住居址(1/80)



第100図　第23号住居址断面図(1/80)

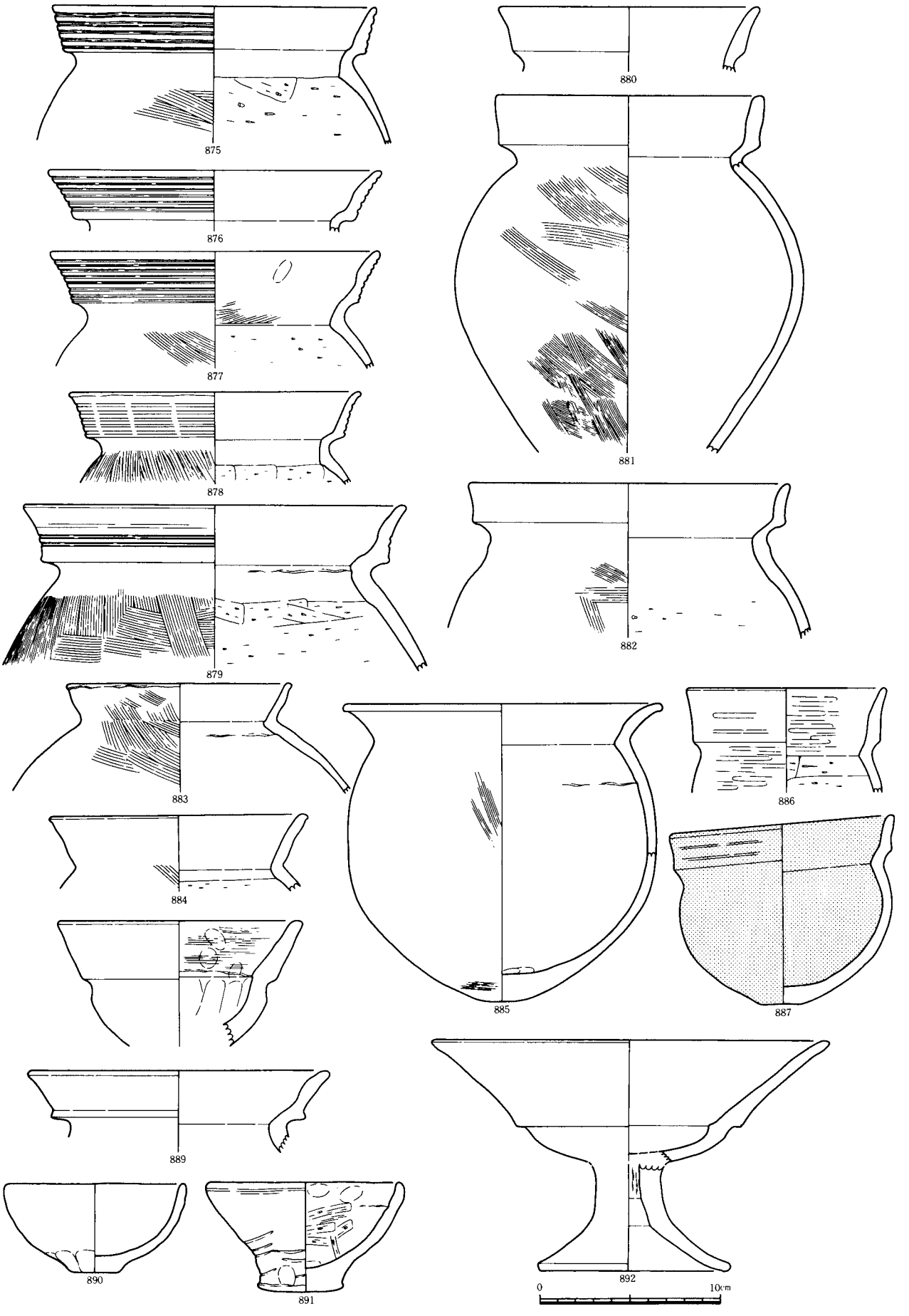




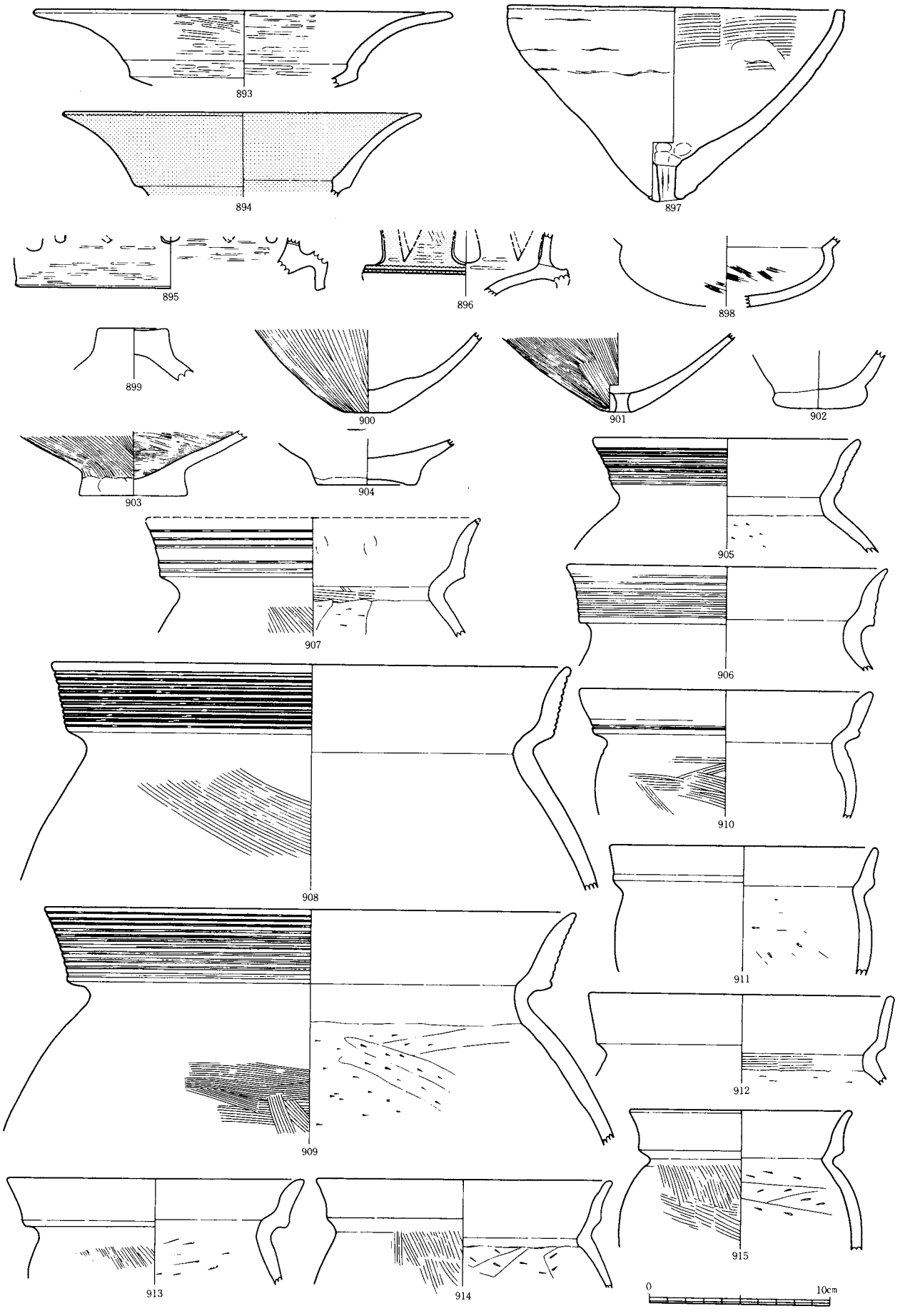
1．暗褐色土
2．暗茶褐色土
3．黒褐色土
4．暗黄褐色土
5．明黄褐色土
6．濁黄褐色土
7．黄褐色土

第101図　第23号住居址土層断面図(1/60)

る。877は口径18.6cmを測るもので、表面には煤が厚く付着している。口縁下端の稜線は明確に成型されていて、擬凹線も明瞭である。内面に指頭圧痕が薄く残り、形成される段はゆるいものである。胎土に微砂粒が多く混和されているが、器表面では目立たない。878は口縁の端部が突出するようになっているのは、擬凹線を引いた際の工具痕と考えられる。器壁は比較的に薄手に成型されていて。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。879は口径21.6cmを測るもので、遺存状態は良好である。擬凹線は薄く見られるもので、横ナデ調整によってほとんど消えかかっていると言える。頸部まで横ナデが施されているもので、肩部は縦方向、体部は横方向の調整かと推定される。胎土に含まれているのは微砂粒で、甕器形の中では良好である。焼成は堅緻である。881は接合できなかったもので図上で復元したもので、口径19.2cm、推定現器高20cmを計測する。体部の上半から煤が付着している。体部の内面はナデによって平坦になっている。器表面の調整は肩部が斜め方向、体部が横方向、体部近くが工具を変えた形での縦位置の刷毛がなされている。茶褐色を呈し、遺存状態はあまり良くない。882は口径17.8cmを測るもので、口縁下端の稜線が明瞭に成型されている。黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和され、焼成は良くない。883は胎土に砂粒を多量に含んだ「く」の字状口縁の薄手に作られた甕で、口径12.8cmを計測する。口唇部は面取りをなした形となっていて、余った粘土が外側にはみでている。器表面は粗い調子の刷毛が、内面は粗略なナデによってととのえられている。体部およびその内面に炭化物の付着が見られる。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒の混入が多い。884は口径14.4cmを測る「く」の字状口縁の甕器形であるが、前者の883に比較して胎土、焼成、調整のいずれを取っても良好なもので、丁寧につくられている。遺存状態も良好である。886は図上で復元したもので、口径17.6cm、推定器高16.4cm、体部の最大径17cmを計測する。内面の調整はナデによって平坦に整えられ、器表面は目の細かい刷毛によって調整されている。底部は丸底で、その部分の器壁が極端に厚く成型されている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土は微砂粒を混和している。886は擬凹線がかすかに認められるもので、口径11.2cmを測る。口縁の内面では磨きの様子が観察できるものの、器表面ではやや判然とはしない。胎土、焼成は良好である。887は摩滅が進んでいるもので、調整の細部は判別できない。口径12.8cm、器高10cmを計測する復元完形品である。底部は座ることができない粗略な平底となっている。全体に赤彩が施されている。淡黄褐色を呈し、胎土は微砂粒を混和しているものの良好と考えられる。888は厚手、粗略に成型された口径14cmの小型の鉢器形である。内外周とも粗雑なナデによって止どめられている。胎土には砂粒が多い。889は口径17cmに復元できるもので、表面に煤が厚く付着しているものの、内面は風化が進んでいて調整は不明である。口縁下端の段は粘土紐を貼付して成型したもので、稜線がシャープに出ている。890は口径10.4cm、器高5cmを測るもので、薄手に成型された椀形土器である。底部は明確な平底となっている。器肌面は荒れている。891は完形で出土したもので、器高6.2cmを計測する。器形は楕円形をなしていて10.8×9.7cmを計測する。調整も粗略なもので、刷毛、ナデ、叩きが加えられている。色調は灰褐色、黒褐色を呈し、胎土に砂粒が多い。遺存状態は良好である。892は脚部と受部の接合が適わなかったものであるが、推定で復元した。口径22cm、脚部径10.4cm、推定器高14cmを計測するものである。受部の底面は皿状を呈したもので、外形からうける印象より小振りとなっているもので、低い段が形成されている。器表面は全体に摩滅が進んでいるもので、調整の具合は判別できないが磨き調整で整えられたのであろう。脚部の内面と口縁器表の一部に赤彩の痕跡が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。893は口径23.6cmを測るもので、口縁端部が大きく外展して伸び拡がる器形をとっている。外周の段は指によって押し付けられたものに推定される。内面は大きく外弯する口縁と体部の段はやや丸味を帯びている。内外面とも磨き調整で整えられている。胎土、焼成とも良好である。895・896は装飾器台の一部であるが、器壁が他のものに比較して薄手に整形されていることに注意される。鍔の口径は17.4cmと推定12cmを測る。器表面はともに平滑に磨きがかけられている。胎土、焼成は良好である。898は高杯形土器の体部に推定できるものである。897は復元完形にできた有孔鉢で、口径18.6cm、器高10.6cmを計測する。口唇部は簡略にナデが施され、口縁の内面は刷毛ナデをなすが、その他は簡略な撫でによって整形されている。その為に器表面は凹凸が多く認められる。淡茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。同じ有孔鉢である901は、器表面は縦方向の刷毛が、内面は平坦になるようにナデがなされ、



第102図　第23号住居址出土土器(1/3)



第103図　第23号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

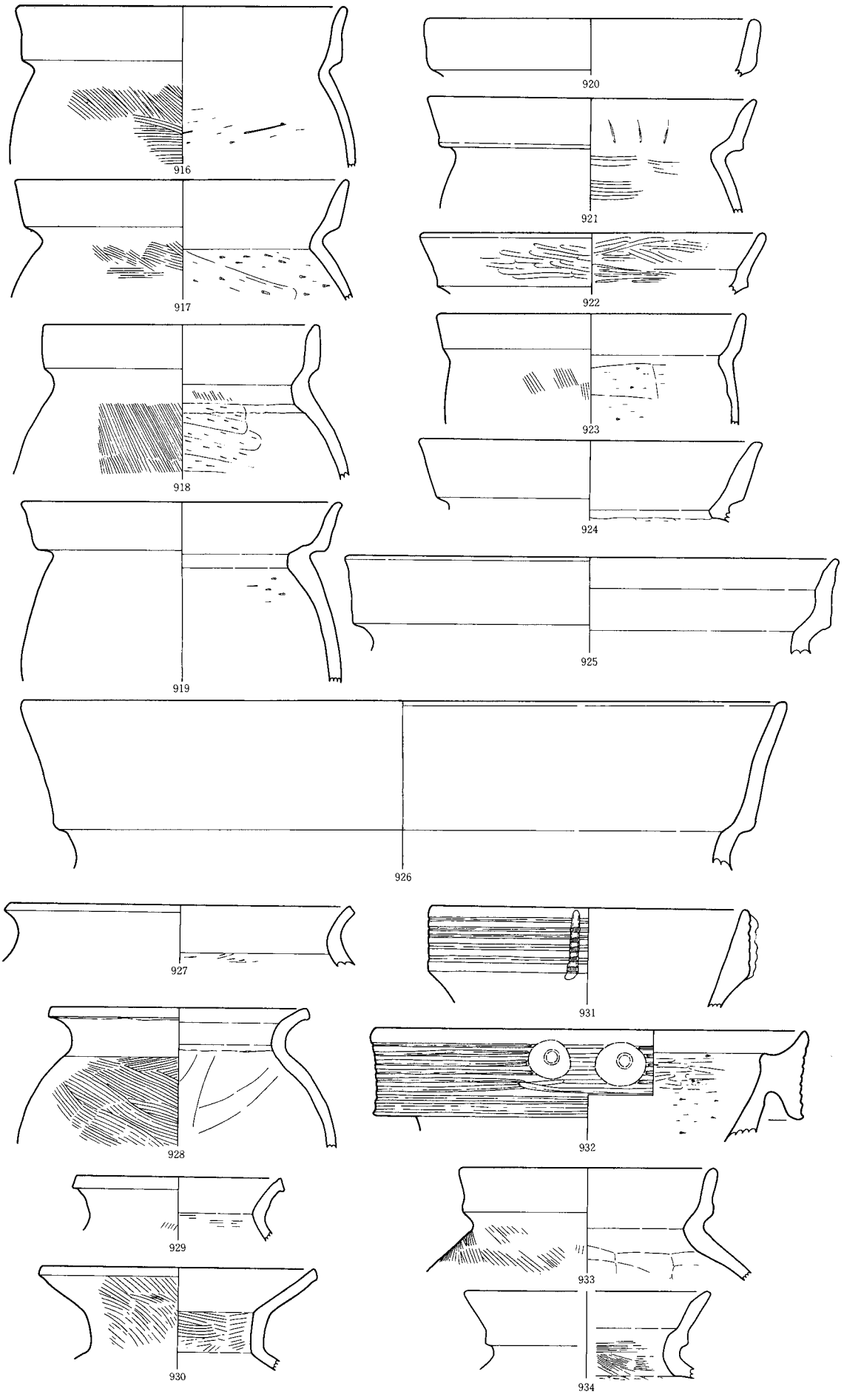
器壁も薄く焼成堅緻に仕上がっている。903は壷形土器の底部に推定されるもので、底径6.2cmを計測する。内外面とも目の細かい刷毛で調整されているもので、底面にまで刷毛が入っている。淡褐色を呈し、焼成は堅緻である。

905は表面に煤が付着しているもので、口径14.8cmを測る。段の高さが低く、巡らされている擬凹線も粗略である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に微砂粒を多く含んでいる。906は口径17.6cmを測るもので、口唇部が尖り気味に成型している。908は口径29.2cmに復元できるもので、摩滅が著しく進行している。擬凹線は明確に巡らされていて、体部は斜め方向の刷毛調整が施されている。体部に煤の付着が見られる。濁黄褐色を呈し、胎土は多量の砂粒を混和している。909は口径30.2cmを測る大型の甕で、擬凹線や段はシャープな形で仕上がっている。頸部までは横ナデが、頸部から下は横方向の刷毛調整が施されている。淡赤褐色をなし、胎土、焼成は普通。

911から926は有段口縁の素文のものである。912は薄手に成型されたもので、口径16.8cmを計測する。横ナデ調整によって器面が整えられ、口縁の下端部を外した形でなされている。そのために若干ながら突出したような形状となっている。濁黄褐色をなし、胎土には微砂粒の混入が多い。913は口縁下端部が取り残された形で横ナデ調整がなされているために、突帯に近い形になっている。色調は黒褐色を呈し、砂粒の混和が多い。914は口径17cmを測るもので、口縁の段は丸くなり調整は粗略なものである。内面の削りもナデに近いものが見て取れる。淡茶褐色をなし、胎土、焼成は普通である。

916は口径18.2cmを測るもので、口頸部は粗い横ナデによって調整されている。肩部は斜め方向の、体部は横方向の刷毛がなされている。内面の削りも粗略で、頸部から若干下がった位置から開始している。917は口縁に煤が付着しているもので、口径18.2cmに復元される。肩部近くまで横ナデがなされているが、刷毛調整の痕跡が僅かに遺存している。淡茶褐色をなし、胎土に砂粒を多く含むが器肌面はきめが細かい。918は内傾気味にたつ口縁を付けるもので、口径15cmを計測する。肩部の刷毛は斜め方向で、底部では縦方向に刷毛調整が施されている。919は口径17.6cmを測るもので、器表面は風化の為に荒れている。明るい茶褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和されている。

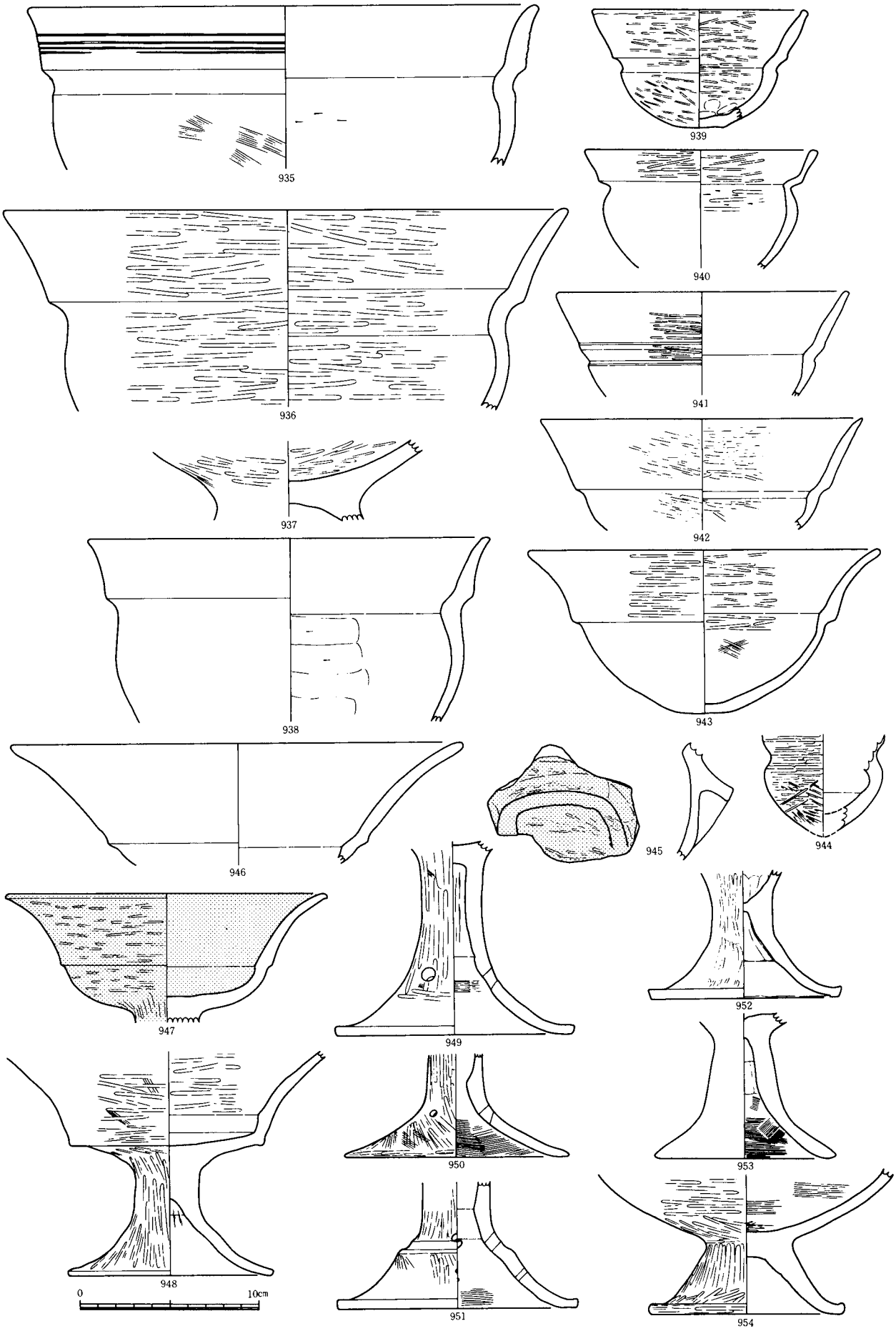
922は口径18.4cmを測るもので、壷器形ないしは高杯・器台形土器の口縁に想定される。内外面平滑に磨かれている。923は口縁、体部に煤が付着しているもので、口縁下端の段はほとんど稜を付けないような状況となっている。淡褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。925は口径26.6cmを測るもので、内面に指頭圧痕がかすかに遺存し、口縁の下端が横ナデ調整のさいに取り残されて突帯状に近くなっている。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。926は口径41.4cmを測る大型のものであるが、小片であり復元径に若干不安がある。口唇部は丸味をもって成型され、内外周刷毛によって調整されている。色調は淡褐色をなし、胎土は砂粒を若干含んではいるものの器表面では目立たない。胎土のきめは細かく高杯、器台形土器のものに相似している。927は口径19cmを測るもので、弯曲した口縁の端部に面がとられて外へ向く。横ナデは丁寧に施されている。色調は淡褐色を呈し、胎土に含まれている砂粒は少ない。928は口径14.2cmを測るもので、927と同じような口縁、口唇部となるもので、体部の内面はナデで平坦になっている。929は口径11.4cmを測るもので、口唇部が肥厚して面が形成される。淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が多量に混和され、胎土のきめは粗い。930は短い頸部のつく壷形土器の口縁部で、口径15cmを測る。外傾してのびる口縁の端部で面がとられ、内面は横ナデが施される。器表の調整は粗く刷毛がなされる程度で凹凸がある。濁褐色を呈し、胎土に微砂粒が多く含まれている。931は口縁に粘土紐を縦位置に貼付しているもので、刷毛状工具で刺突を施している。風化の著しい小片で、細部の成型は不明である。932は口径23.6cmを測るもので、厚手の成型となっている壷形土器の口縁部に推定される。口縁帯には凹線が巡らされ、径2.5cmの円形の粘土が貼付され、径0.8cmの刺突がその中心になされる。貼付されたものは剝落して残っていない。器表面はナデによって平滑に調整されている。淡褐色を呈し、胎土は良好である。933は口径14cmを測るもので、口縁下端が粘土の貼付で突帯状に隆起している。頸部の内面に押圧がなされ、やや間隔をおいてヘラケズリが施されている。淡黄褐色を呈し、胎土はやや良好である。934の口縁下端はやはり隆帯状に成型されているもので、内面に小さな段がつけられている。風化が進行していて、器表面は荒れている。



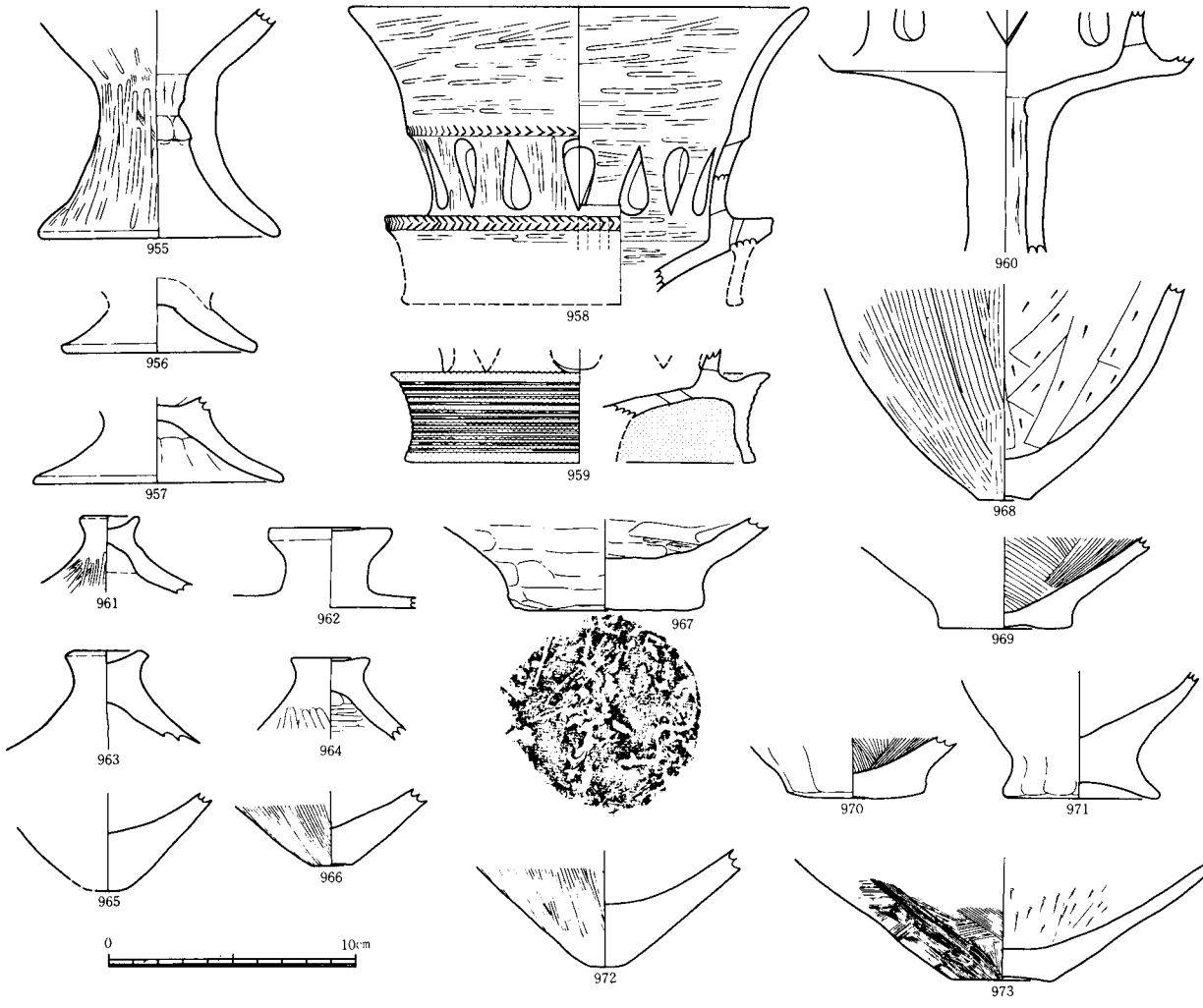
第104図　第23号住居址周辺出土土器(1/3)

935は口径28.8cmに復元できるもので、口縁の擬凹線は刷毛ナデの痕跡に近いものであり、頸部の括れの位置にも同様の条線が入っている。体部には軽く刷毛調整が、内面には弱いヘラケズリが施されている。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。936・937は同一個体で、脚台付きの鉢器形を呈するもので、口径32cmを計測する。胎土には微砂粒が多く混和されていて、摩滅した器表面に現れている。全体にヘラミガキがなされているもので、口縁の内面から底面まで光沢をもった黒色の顔料が塗り込められている。おそらく炭素と推定されるものの確証はできない。938は口径22.8cmを測るもので、外周の調整はつかめない。体部の内面は横方向の刷毛の後に、軽い形でヘラミガキがなされている。胎土は微砂粒をほとんど含まない状態で、焼成も良好である。939は口径12cm、推定器高6.4cmを復元するもので、不整形な平底が付けられている。内外面とも細かいタッチのヘラミガキが施され、胎土には砂粒が若干混和されている。940は口径13.8cmを測る小型の鉢器形で、口縁端部の器壁が肥厚気味に成型されている。器表面に刷毛の痕跡がわずかに遺存しているものの、磨きが全体に施されている。内面も削りの後に、磨きがなされ平滑に仕上がっている。淡黄褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が含まれている。941は口縁の下端に丸味をもった隆帯が付けられているもので、隆帯の上及び頸部の括れの部分に一条の沈線が巡らされている。成型の段階でのものであるが、モデルとなるものを十分に把握していない事が推察される。内外周とも細かいヘラミガキ調整が施され平滑になっている。暗褐色から黒褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。943は口径19.6cm、器高9cmを測るもので、復元完形品となった。内外面とも摩耗が進んでいるが、体部の内面の一部に赤彩の痕跡が遺存しているところから、全体に赤彩が施されていたものと推定できる。淡茶褐色を呈し、胎土は精良である。945は鉢器形の把手の部分で、器表は赤彩が施されている。把手は横幅7.2cm、高さ1.7cmを測り、端部は角張った形で成型されている。胎土、焼成は良好である。

946は胎土に微砂粒を多量に混和させているもので、口径25.6cmを復元する。体部と口縁の境界は一条の隆帯によってわかたれている程度で、内面は稜線のはっきりとしない形で成型されている。茶褐色を呈し、焼成はやや良くない。947は口径18.2cmを測るもので、平坦な体部を付けている。体部と口縁との境は内面では稜線で、外面では低い段で成型されている。内外面とも丁寧な磨きが施されているようだ。胎土には若干の微砂粒が混和されている。焼成はやや甘い。948は口縁の端部が判然とはしないものであるが、端部に近いものと推定され約17.7cmに復元できる。推定器高13.2cm、脚部の径11.6cmを測る。受部の底面は平坦で、口縁部との接合部分がはっきりと遺存している。口縁は直立気味に立ち上がり、やや粗いナデによって調整されている。外周は細い突帯によって、口縁部と体部が分けられている。脚部は脚柱を除いて平滑に磨かれているもので、脚柱は粗い成型段階のままで止どめられている。色調は淡灰褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。949は脚部の径が13.4cm、脚柱の径が3.4cm、現器高10.6cmを測るもので、全体に摩滅が進行している。灰黄褐色を呈し、胎土は精選されている。950は脚部径13cmを測るもので、刷毛調整の後にヘラミガキが入念に施され平滑に仕上がっている。底面は同心円状の刷毛が施されている。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。951は段の成型がシャープさを欠くもので、段を挟んで大きさの異なる穿孔が上下に施されている。952は高杯の脚部で、脚端部は粘土が加えられて面が形成されている。脚柱の内面が窪んでいるのは、受部の底面の突起に対応するものかと推定される。器表は縦方向のヘラミガキが施され、赤彩の痕跡が脚端部で認められる。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。954は胎土、焼成とも良好なもので、やや特異な器形を示していることから鉢、壷器形をなす可能性が高いと言える。脚部の径は10.8cmを測り、内外面とも丁寧な刷毛ナデ調整がなされ、器表面はさらにヘラミガキが加えられている。体部の内面には刷毛の痕跡が見られるものの、やはり平滑にナデが行われている。955は器台形の脚部片で厚手に成型されている。茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和されている。脚部の調整は刷毛の後にナデが簡略になされている程度であるが、受部はヘラミガキが入れられている。958は接合することが出来なかったものであるが、図上で復元した。口径18.6cm、鍔の径15cm、鍔からの高さは8.5cmを測る。鍔の端部及び口縁下端の段の位置に、極めて細い刻みが横V字形に入れられている。刻みは金属器によるような細いものである。鍔の台部には2個1対の穿孔が施され、器表面全体が平滑に磨かれている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。959は大きく湾曲した鍔に擬凹線が巡らされているもので、図示した部分の全部



第105図　第23号住居址周辺出土土器(1/3)



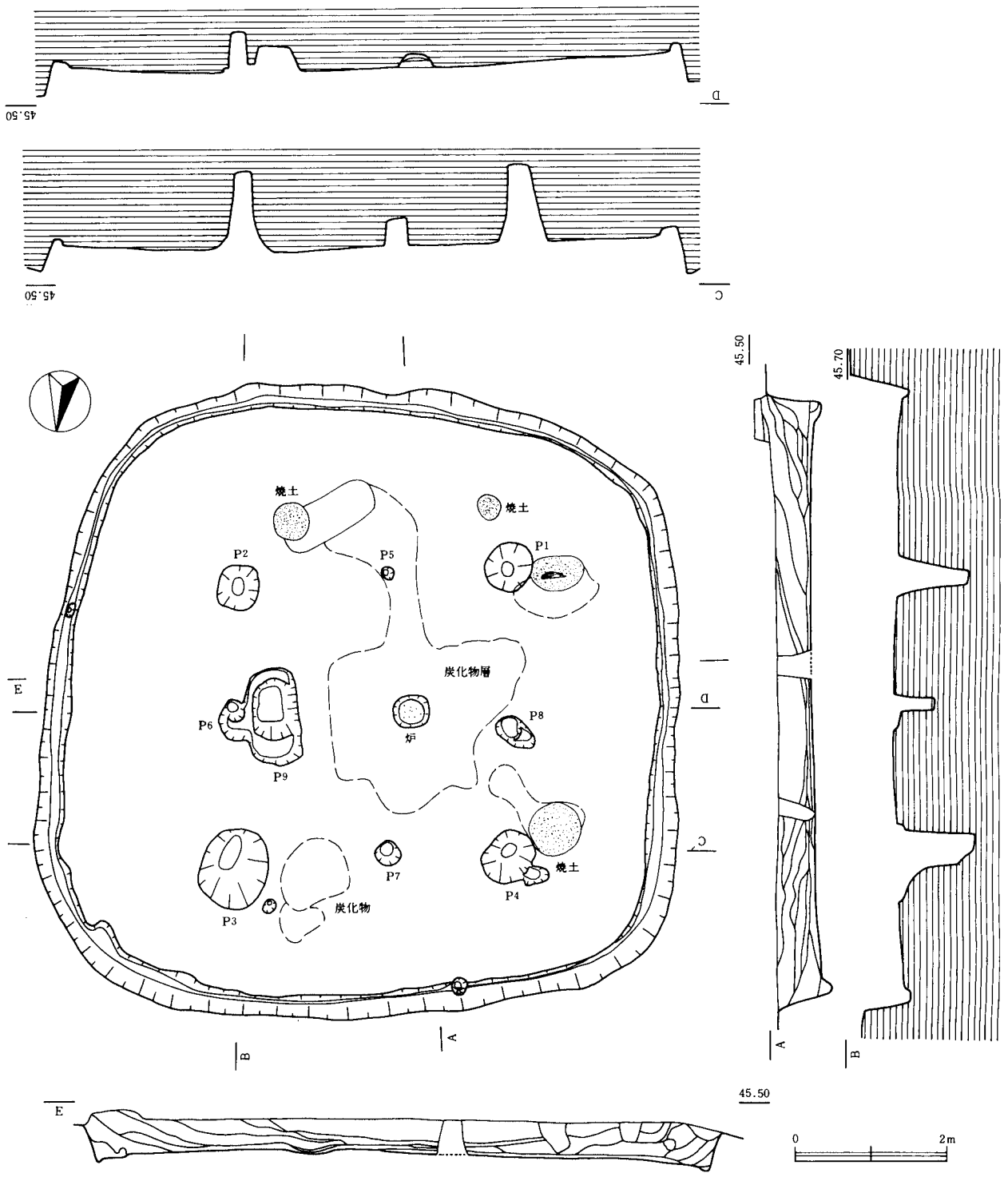
第106図　第23号住居址周辺出土土器(1/3)

が遺存している。鍔の径は14.4cmを測る。鍔外周の赤彩は顕著に見られるが、内面のそれはやや不鮮明であり赤彩されなかった可能性も考えられる。受部の底面には径1cmの穿孔が4個なされている。胎土には微砂粒が混和され、焼成はやや良い。960は器表面全体が剥落しているもので、胎土には多量の微砂粒が混和されている。961～964は蓋形土器の頭部片で、961は径2.5cm、962は径5cmを計測する。963を除いて肌面は荒れていて調整はつかめない。963は丁寧な磨きが施されている。968は径2cmの小さな平底を作る甕器形のもので、外周は刷毛によって平滑に近く調整されているが、内面は粗雑なナデにとどめられている。底部は火熱による赤変が、体部は煤の付着が見られる。967は壷器形となるものの底部で平底を作り出している。その底面に籾圧痕が6粒見ることができるものであるが、図上では判然とはしない。

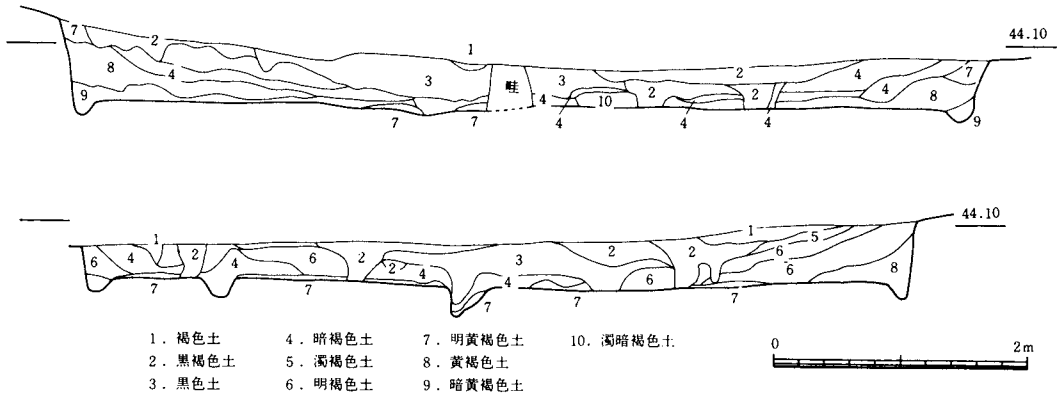
3　第24号住居址（第107～110図・図版38・39）

遺構　第三平坦面の標高の最も高い位置に立地している住居址で、東地区調査区の南側に含まれる。検出グリッドはD108・109、E107～110、F107～110、G108・109の広い範囲に渡る。周辺には住居址が取り囲み、第三平坦面のなかで最も密集した形で配置されている。北方約4mで第23号住居址が、南方向約6mで第25号住居址が、南東方向約4mで第26号住居址が同一レベルの尾根上に位置し、約1m標高を下げた東方向約6mの距離に第27号住居址が立地している。本住居址の東西斜面には若干の遺物包含層が形成されているものの、出土量は第23号住居址の東側斜面に及ぶべくもない。

平面プランは基本的に隅円方形をとるのであるが、コーナーの部分の丸味が強くでていて辺の直線も外側に膨



第107図　第24号住居址(1/80)



第108図　第21号住居址土層断面図(1/60)

らむような形を呈していて、同じ第三平坦面の第21号住居址に類似した独特の平面形をもっている。東西方向のやや膨らむ北側での規模は850cmで、東西方向の中央及び南北方向は840cmを計測する。柱穴の軸線で見ると、ほぼ南北方向に置かれているものである。遺構検出面から床面までの深さは約50～55cmであるが、表土からでは80cmを越える。覆土は第21・23号住居址のそれと同じ状況を示し、壁際から細かく堆積し中央部分が凹地となるような形となって堆積している。壁際は暗褐色土、茶褐色土が互層をなすような状況で炭化物を若干交えて堆積し、中央部分は暗黄褐色土で埋まっている。床面近くでは水平堆積をなし、暗黄褐色土及び炭化物層が5cm前後の厚さで床面を覆っているのであるが、炭化物層が一段と顕著に認められたのは平面図に図示したように中央炉址を真ん中にした範囲である。そして、主柱穴に近い位置に炭化物層及び焼土が見られることから、焼失した際に主柱を中心にしているものと見られ、本住居は西方向に倒れ込んで焼失したものと理解される。

床面は東側の特殊ピットを中にする状態でわずかに緩傾斜し、東側と西端とで約12cmの落差が生じている。床面出土の土器は、東側の壁に寄るような形で検出された。炉址は中央に位置し、平面楕円形をなし径48×44cm、深さ17cmを測った。覆土は暗褐色土に焼土、炭化物が濃淡をもって水平に堆積していた。上層は炭化物の多い層である。

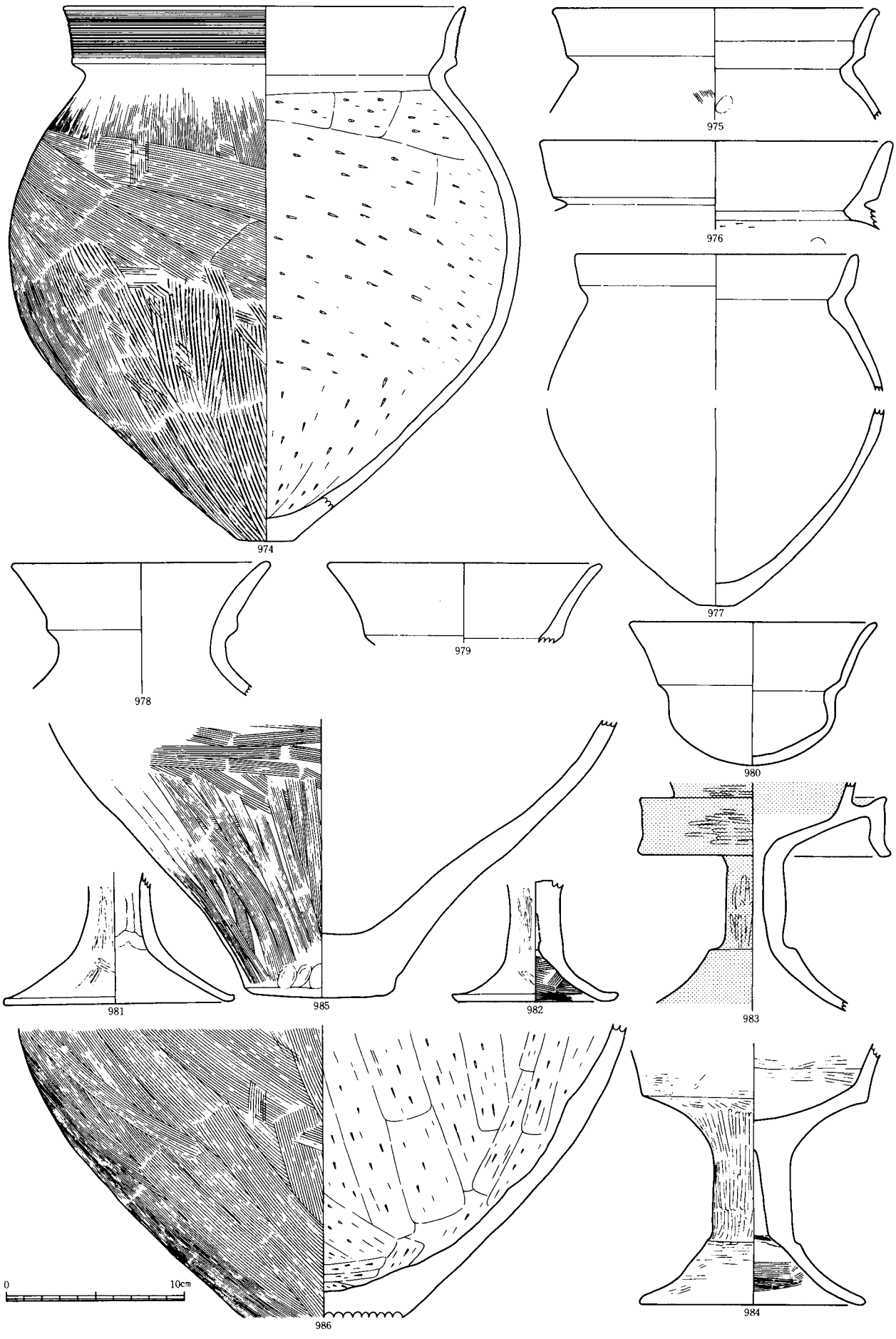
壁溝は全体に巡らされていて、幅12～24cm、深さ8～16cmを測り、壁に続く面の方が掘り込み角度が強いようだ。

主柱穴は4本と見られるものであるが、それぞれに中柱と推定できるものがあり、第23号住居址の在り方と類似していると言える。柱穴の掘り方は平面方形ないし楕円形をなしていて、P1は径65×60cm、深さ99cm、P2は径53×60cm、深さ96cm、P3は径87×108cm、深さ94cm、P4は径72×60cm、深さ105cmを計測した。そして、中柱の径及び深さは数段小振りのもので、径15～30cm、深さ29～55cmであった。主柱穴の心々間の距離は360cmに揃えられていて、さらに主柱穴と中柱との間隔は200cmと160cmという形で揃えられている。東側の柱穴に沿う形で長方形プランの特殊ピットが掘り込まれている。長軸130cm、短軸70cmの規模を測り、8cm掘り込んだ所で段が設けられ、さらに17cm掘り下げられている。

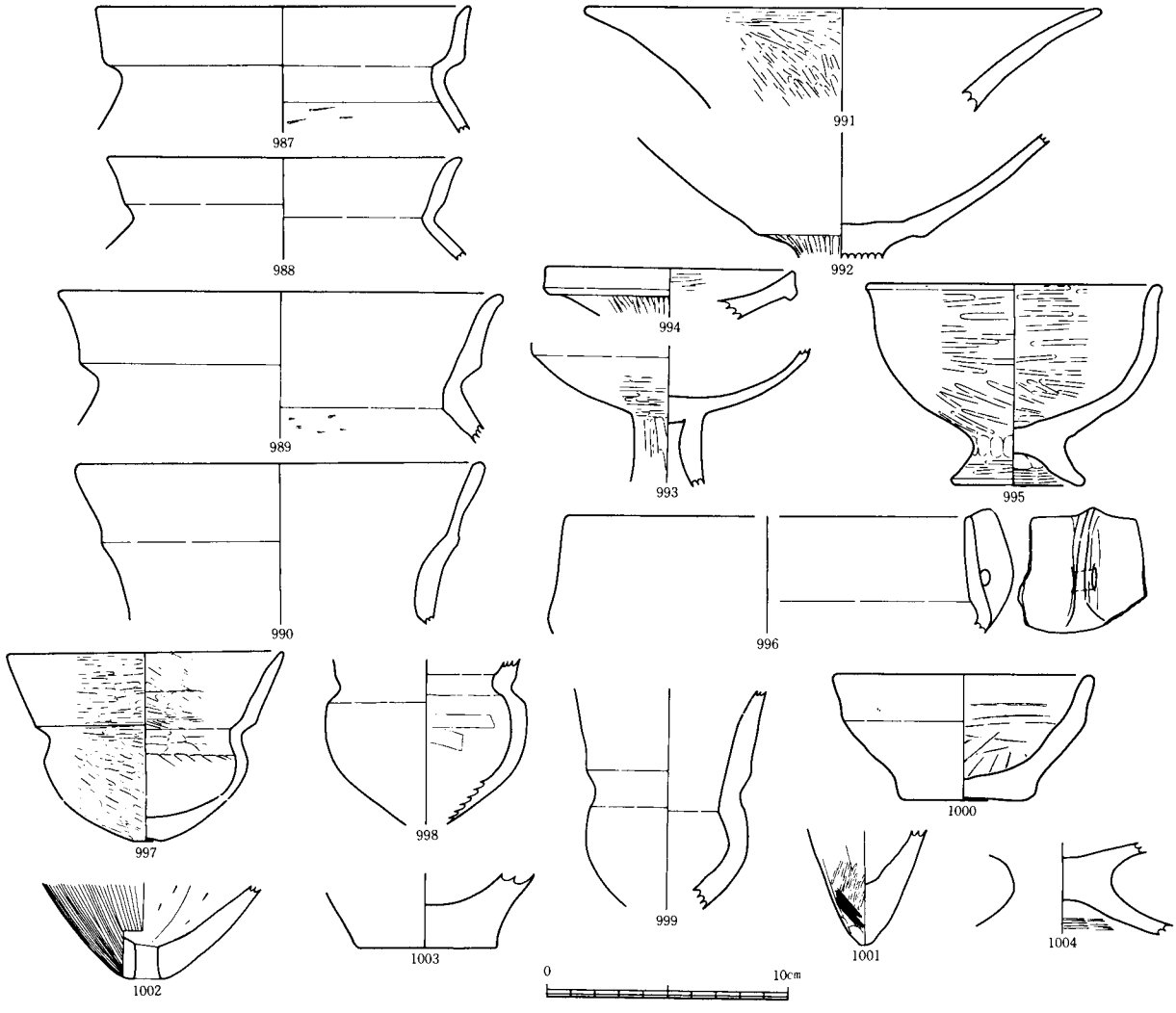
本住居址では改築を示す所見は得られなかった。

遺物　壁溝内からの出土品は995・1004で、床面からのものは974・977・980・981・983～986・991・993であり、989・992・994・998～1002は本住居址周辺から出土したものである。他の資料は覆土内出土品である。

974は過半以上を欠損していたが、底部を除いて接合復元ができ完形品となったもので、口径22.6cm、胴部最大径28.8cm、器高29.7cmを計測する。口縁部の擬凹線は刷毛状工具で引き巡らした粗雑なもので、口縁の下端はやや突出したような形で成型されている。肩部までは横ナデ調整がなされ、胴部上半は斜め方向の刷毛が、胴部下半部は工具を変えて縦方向の整形が施されている。濁黄褐色から淡茶褐色を呈し、丸味をもった平底は火熱によって赤変し、胴部最大径の位置には煤が付着している。胎土は甕器形のものに通底するもので、焼成は良好であった。975は口径18cmを測るもので、器表面に煤が厚く付着している。口縁の内面は弯曲して立ち上がり、下



第109図　第24号住居址出土土器(1/3)



第110図　第24号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

端に押圧した形で段が形成され急激に屈曲して肩部につながっていく。肩部には軽い指頭圧痕が不規則な形で残されている。肩部の内面はナデによって整えられているようだ。胎土、焼成は普通である。976は口径19.6cmに復元できるもので、肩部が強く張り出しているために頸部の幅が極めて狭くなっているのが特色である。灰褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。977は器表面がまったく摩滅していたもので、接合復元ができなかった。底部は小さな平底が付いているもののようだ。濁褐色をなし、胎土には砂粒の混和が多い。978は壷器形の口縁部で、口径14.4cmを測る。口縁と頸部を分けるのは、貼付されている丸味をもった突帯であるが、その他の調整は不明である。胎土はやや良好である。979は有段口縁をもつ口径15.6cmを測るものであるが、壷、器台、高杯器形のいずれに相当するのかの判断は困難である。内外面とも肌面は荒れていて、調整は不明である。淡茶褐色を呈し、胎土は精良である。980は丸底をもった小型の鉢で、復元完形品である。口径13.7cm、器高7.9cmを測るもので、内外面の段及び括れ部の成型にシャープさを欠いていると言える。肌面は荒れていて調整は十分につかめないが、磨きが施されているようだ。胎土は良好である。981は器台形土器、982は高杯形土器の脚柱部で、色調はともに淡黄褐色を呈し、胎土も微砂粒が同じような割合で混和されている。また、脚柱の部分で肌面に砂粒が露出しているものの、脚部は平滑に調整されているのも共通している。983は鍔の口径が14cmを測るもので、器表面の全体に赤彩が施されている。受部の底面の肌面が他の部分に比較して荒れているのが注意される。胎土は精選された土が使われ、調整は全面にヘラミガキが施されているものであるが、仕上がりはやや鈍重である。984は口縁の端部を欠いている以外は復元完形品となったもので、脚部の径12.6cm、現器高14.6

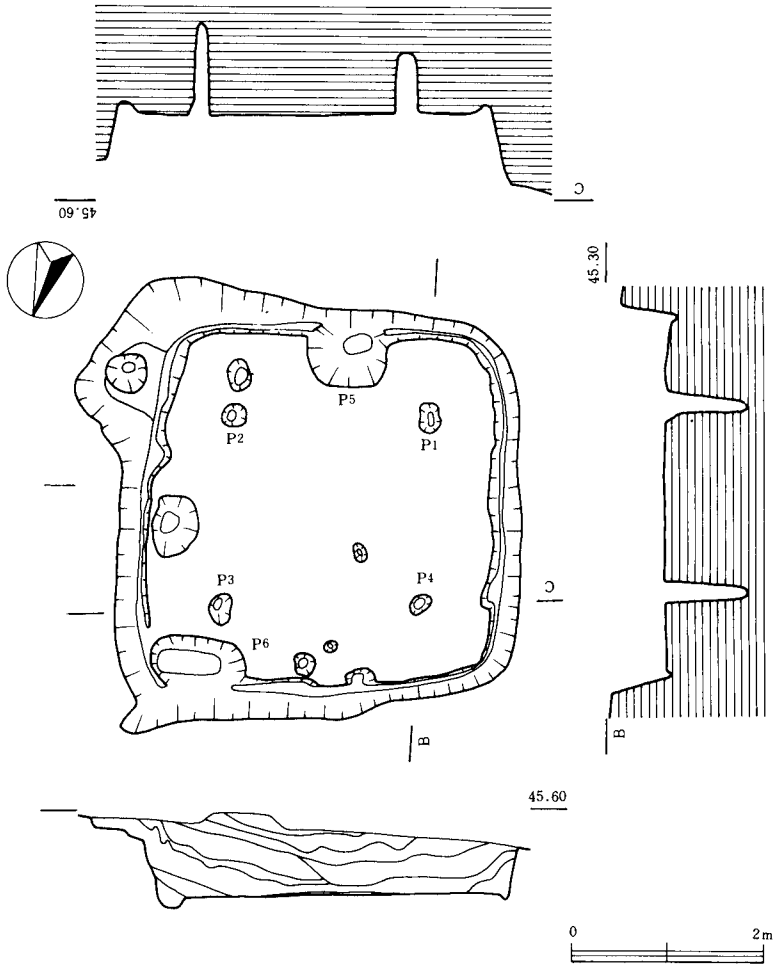
cmを計測するものである。受部の底面が荒れている以外は遺存状態は良好で、器表面は全体にヘラミガキが施されている。985は底径8.5cmを測る大型の壷器形の底部と推定されるもので、内面は風化によって剝落が進んでいるが、器表面は刷毛調整痕をはっきりと遺存している。濁黄褐色を呈し、胎土に若干の微砂粒を混和している。986は平底の底部分を欠損しているもので、大型の甕器形が想定される。内面は稜線が浮き出るような状況でヘラケズリが粗雑に施されている。

987は口径15.6cmを測るもので、口縁の下端が丸味をもって成型されている。胎土には砂粒が多く含まれていて、器表面に露出している。988は内外周とも丁寧に横ナデ調整がなされているもので、表面にまったく砂粒は現れていない。口径14.8cmを測り、口縁下端の段は消失しかかっている。焼成は良好で、煤が付着している。991は口径21.2cmに復元できるもので、内外周とも丁寧な磨きが施され平滑に仕上がっている。淡茶褐色を停止、胎土、焼成は良好である。992は皿状をなす受部を付けるもので、外周に形骸化した段がついている。内面は粗雑なヘラミガキがなされ、器表は粗いナデが施されている程度にとどまっている。淡褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。993は胎土の精選された小型の高杯であるが、摩滅が進んでいる。受部の段がつく位置には突帯が貼付されていた可能性が高い。994は口径10.4cmを測る小型の高杯が推定されるもので、端部が肥厚して面が形成されているものの、平坦ではなく段差が付いている。内外とも磨きが施され、平滑に仕上がっている。995は復元完形品となったもので、口径12.2cm、器高8.2cm、脚部径5.4cmを計測する。内部の底面以外はヘラミガキによって調整されていて、胎土は精選され、焼成は良好である。996は鉢器形の把手部分の小片と推定されるもので、内傾して立つ口縁を想定したが判然とはしない。内面に小さく屈曲して稜線が形成されている。縦位置に付けられた把手は若干捩じれたような形で取り付けられている。器表面は粗いナデによって調整されている。色調は濁黄褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。997は口径11.4cmを測るもので、底部は押圧したような小さな凹底がついている。内部の底面を除いてヘラミガキが全体に施されている。1000は口径10.6cm、器高5.2cmを測るもので、精選された胎土が使われている。刷毛で成型された後に、ナデによって調整が加えられている。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。1002は有孔鉢の底部片、1001は角杯形土器の底部片である。後者の器種は本遺跡では4例の出土があり、うち1例には赤彩の痕跡が認められている。1004は底面にヘラミガキが施されていることから、鉢器形、壷器形の台部に推定できるもので、淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。

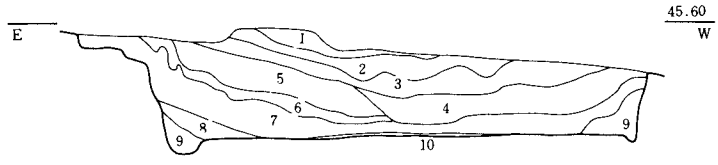
4　第25号住居址（第111～117図・図版40・41）

遺構　東調査区の南西部で検出した住居址で、丘陵全体の土層畦畔にかかったことによって確定したものである。本遺跡検出住居址の中でも最も深くに掘り込まれている住居址である。第三平坦面とした尾根状地形が、本住居址の南方向約20～30mで急激に落ち込んでいき、笠間神社の方に傾斜面を広げていく。これらの地形的な条件から第三平坦面に限定して、本住居址の南側には1～3軒程度の住居址が展開するに止どまるものと推定できる。検出グリッドはB109・110、C109・110の4個のグリッドの範囲である。調査区の南端になるところから南側には住居址はなく、北方向約6mに第24号住居址が、北東方向約4mで第26号住居址が、東方向約28m、比高差約5mの位置に第28号住居址が、西方向約17m、比高差約6mの位置に第9号住居址がそれぞれ立地している。住居址の周辺での出土遺物はごく少量に止どまる。

平面プランは隅円方形を呈しているもので、南東隅が段を作り出していることから突出し、北東隅は地山が高い位置にある事から平面形が歪になっているが、東西、南北方向ともにその規模は420cmの正方形をなす住居址である。南北方向での軸は、北18度西に置いている。壁の高さは南側の辺が地山が傾斜していることからやや低いものの、55～65cmまでの高さでそろえられている。覆土は検出面でわずかの汚れをとらえられるのみで幾分かの不安をもって掘り進んでいったもので、通常の住居址覆土の状況と異なっていると推定された。壁際での斜め方向の細かい堆積はなく、やや不規則な状態で黄褐色土、茶褐色土が厚く堆積していた。これらの中で黄褐色土は地山が炭化物を含んでブロック状になっているものであり、人為的に埋め戻されたものと想定する事ができ



第111図　第25号住居址(1/80)



1．黒褐色土
2．茶褐色土と暗褐色土との混合層
3．茶褐色土に暗褐色土が混入
4．茶褐色土に大粒の地山がブロック状に混入
5．茶褐色土
6．黄褐色土に暗褐色土が混入
7．黄褐色土
8．赤みをおびた黄褐色土
9．黄褐色土に茶褐色土が混入
10．黒褐色土に黄褐色土が混入

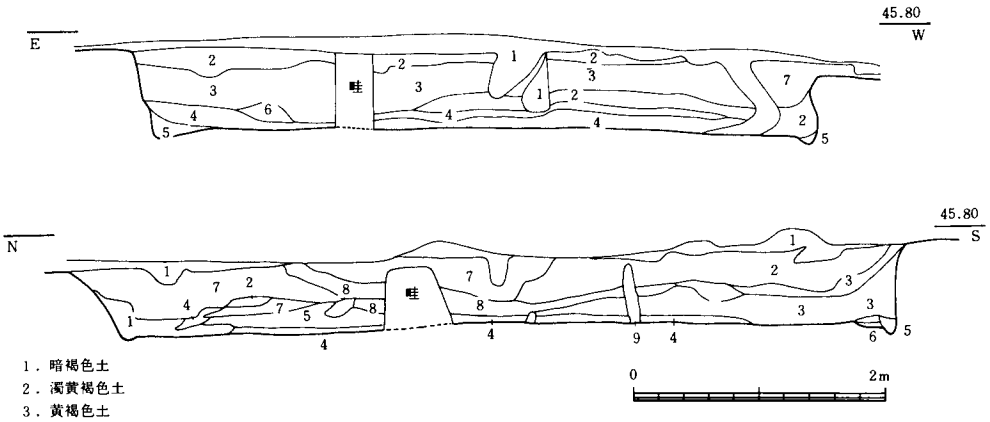
第112図　第25号住居址土層断面図(1/60)

る。床面上には暗黄褐色土が広く覆うような形で薄く堆積している。また、住居址の中央付近では黒褐色土に黄褐色土が混入したような状態を示す所が見られたのは、埋没以前の生活面での堆積かと推定される。

壁溝は北東隅の土坑が作られている部分を除いて全周していて、幅8～20cm、深さ6～12cmを測るもので、東側の辺を除いて幅、深さとも小さく、断面形状はV字状を呈している。床面は比較的平坦に整えられ、中央部分が若干低くなるような状態であった。なお、床面では顕著な焼土痕を検出することはできなかった。

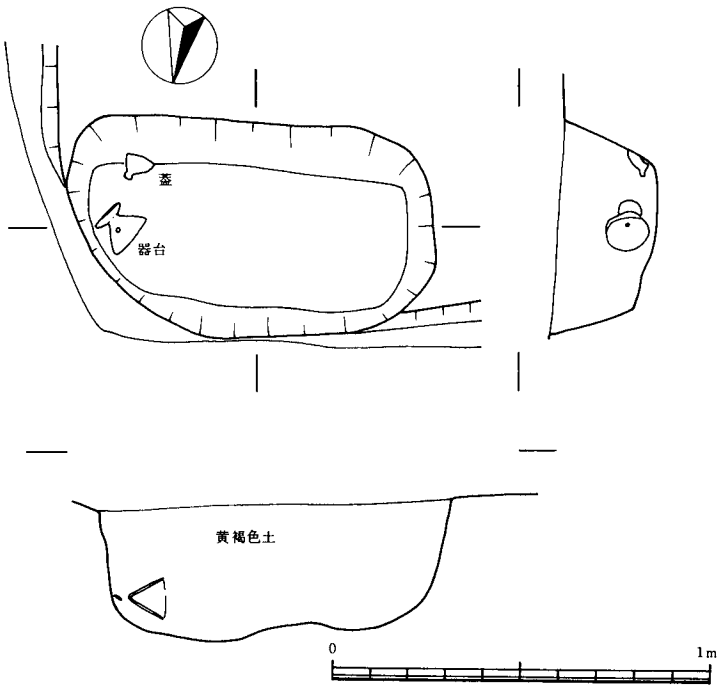
主柱穴は4本が検出されていて、いずれも径が小さく深く掘り込まれているものであった。径18～32cm、深さ66～79cmを測り、東西方向のP1～P2、P4～P3の心々間の距離は210cm、南北方向のP2～P3、P1～P4のそれは200cmで東西方向がわずかに長くなっている。柱の径は柱穴の在り方から15cm前後のものが推定される。

住居址の南壁に沿って、方形プランの特殊ピットが設けられていた。平面形は隅円方形を呈し、東西方向の長辺は80cm、南北方向の短辺は70cmを計測し、7cmと10cm下がった位置に段が設けられ、西側に寄り込んで径45cm



1．暗褐色土
2．濁黄褐色土
3．黄褐色土
4．暗黄褐色土
5．赤みをおびた黄褐色土
6．黄褐色土(炭化物混)
7．茶褐色土
8．濁茶褐色土
9．黒褐色土

第113図　第25号住居址土層断面図(1/60)

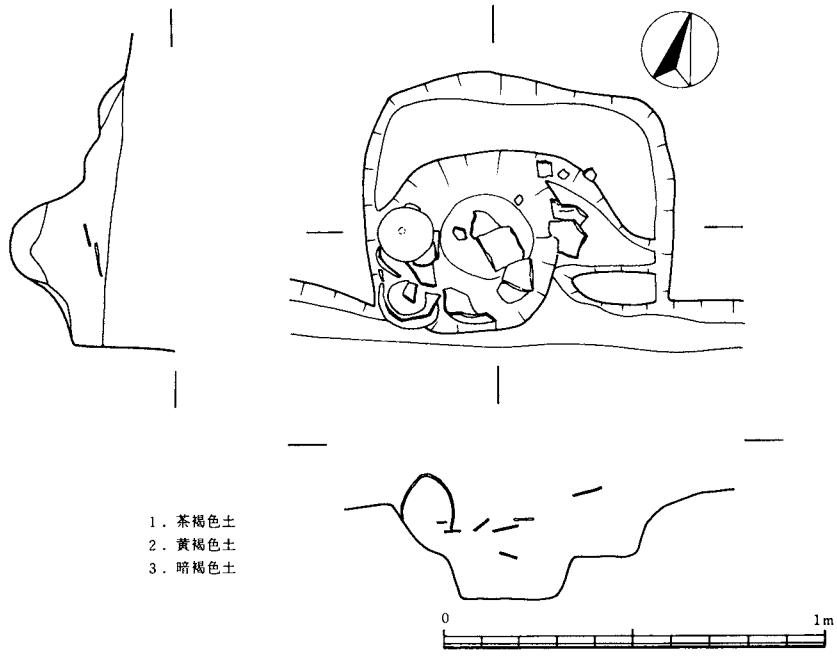


第114図　第25号住居址土坑(1/20)

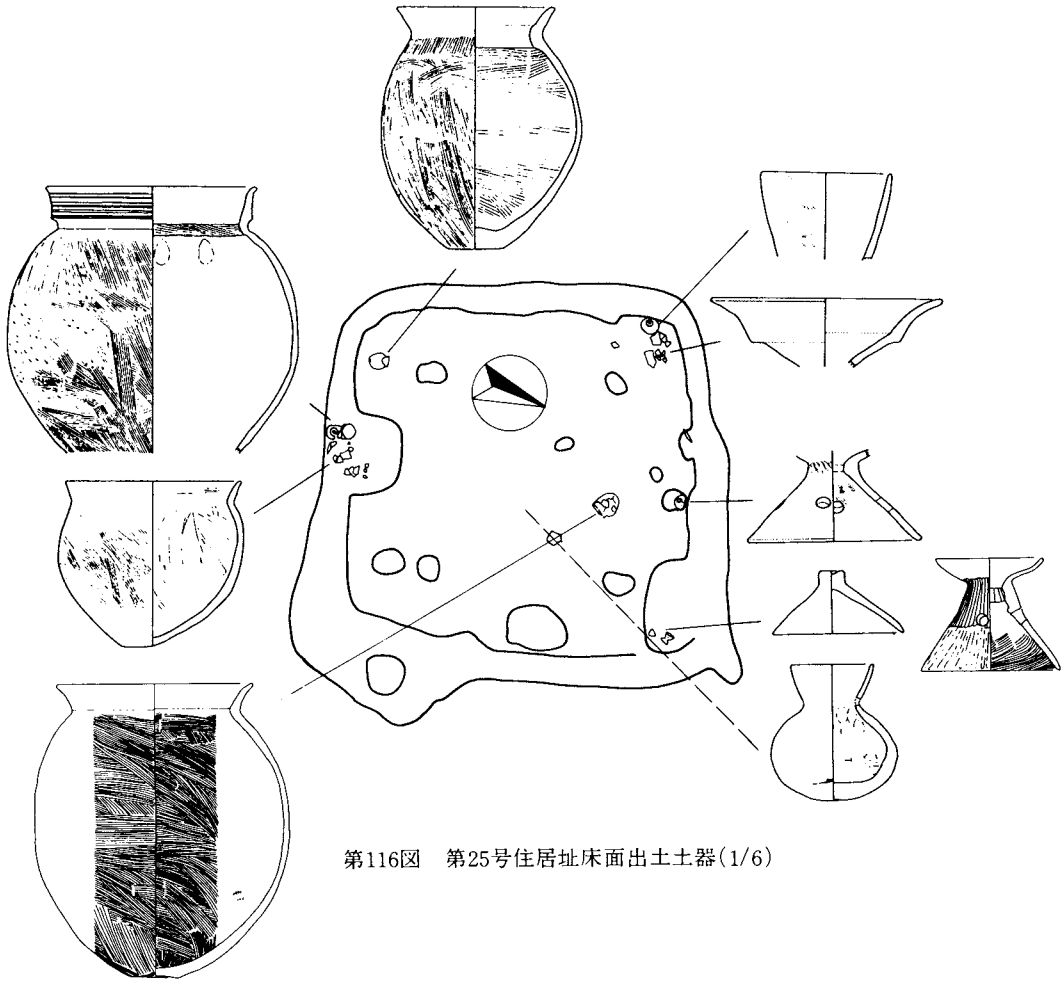
の円形のピットが掘り込まれている。段からの深さは20cmで、下層に暗褐色の砂質土が認められた。方形プランの部分を含んで上層は茶褐色の砂質土であり、開孔した状態で覆土が堆積したものと推定される。円形ピットの上で一括状態で出土した甕器形の土器は、一定の水平レベルを保っているものと想定できるものであった。甕器形の2点が口縁部を下にして併置していたことは、埋没当時に片付け置かれたものとしてとらえることができるようだ。つまり、円形のピットの上に板状のものが置かれていて、その上に甕が並べられていたのであろう。

北東隅の土坑は、壁に沿う形で長辺が置かれる平面楕円形とも長方形とも言えるもので、長軸97cm、短軸56cm、深さ35cmを計測した。床面は平坦ではなく若干の凹凸が見られ、東の小口に寄って床面から3～5cm遊離した位置に、小型器台と蓋形土器が完形で出土した。覆土は地山土の黄褐色土が小粒のブロック状となるもの一層のみで、すぐに埋め戻されたものと推定される。

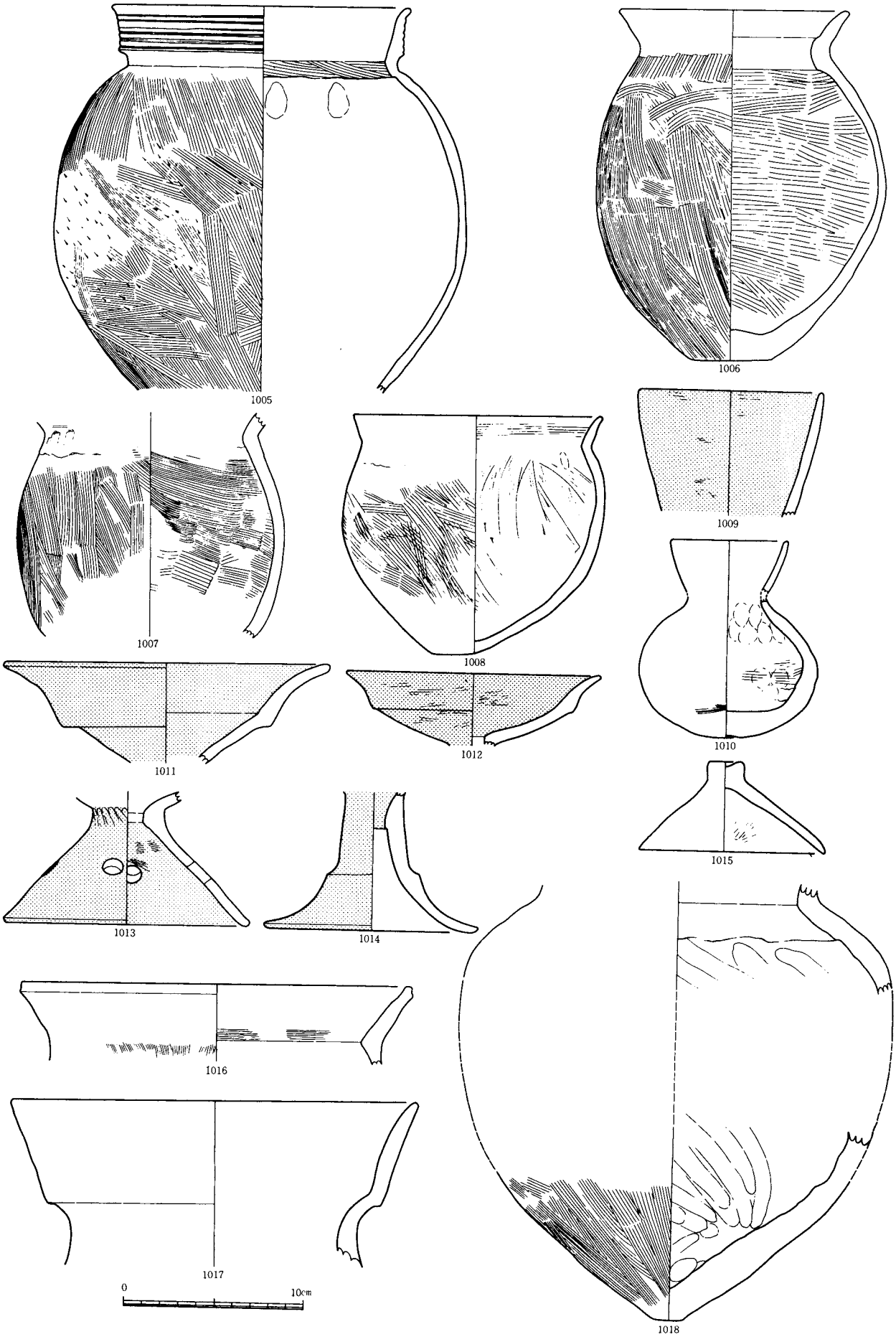
住居址の覆土からの遺物は少ないものの、床面上には特殊ピット上での一括遺物の他に、北辺に沿った位置で器台、甕、高杯が、また、南西隅では甕が出土している。主柱穴で結んだ線より外側に多い事が注意される。床



第115図　第25号住居址特殊ピット(1/20)



第116図　第25号住居址床面出土土器(1/6)



第117図　第25号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

面の一括遺物の多かった第24号住居址や第28号住居址においても同様の傾向を指摘することができる。

遺物　床面から出土したものは、1005・1006・1008～1011・1013・1014で、1015は土坑から出土したものである。完形土器2点は第127図で掲載している。1016～1018は周辺のグリッドから得られたものである。

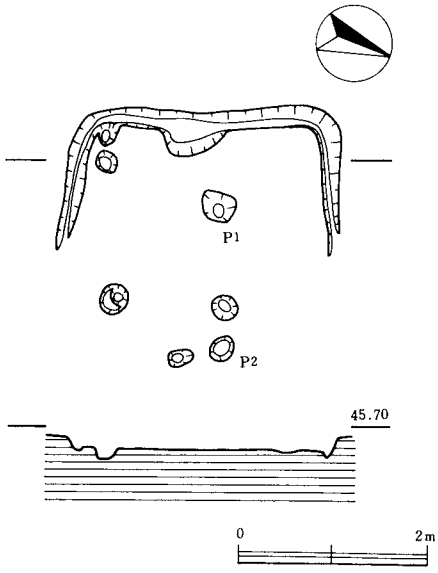
1005は底部を除いて復元できたもので口径16.5cm、胴部最大径23cm、現器高21cmを測るもので、口縁に粗い擬凹線が口縁の下端を突出させた形で巡らされている。口頸部は横ナデ調整が、肩部以下には刷毛調整が施されている。体部の内面はナデによって平滑に整えられている。口頸部内面の刷毛は、口縁と体部の接合部分に貼付されたものを押さえるためになされたものである。体部と口縁の一部に煤が付着し、内底面では炭化物が認められる。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。1006も復元完形となったもので、口径12.5cm、胴部の最大径15.8cm、器高19.2cmを計測する。内外面ともに刷毛によって調整されているもので、いたるところに凹凸が見られるように、成型は粗雑である。内底面は底部を接合した時の指頭圧痕が見られ、肩部の接合はやや歪になっている。底部はやはり刷毛によって調整されている。体部の下半は煤の付着が見られ、色調淡茶褐色を呈し、胎土に微砂粒が多く混和されている。焼成は普通である。1007は内外周とも目の細かい刷毛状工具を使用して調整を施すもので、茶褐色を呈し、胎土に微砂粒を多く含んでいる。1008はごく一部を除いて欠損したところのない資料で、完形土器となった。口径14.2cm、器高12.1cmを測る。器表の肌面は荒れているものの、内面の縦方向の削り調整ははっきりと遺存している。口縁は横ナデが施されている。底部は面を付けない丸底で、それもやや歪な形で付いていると言える。茶褐色から黒褐色までの色調を示し、胎土には砂粒、微砂粒が混和されている。1009は口径10.2cm、現器高6.6cmを測る壷形土器の口縁部で、内外面ともに赤彩が施されている。胎土に微砂粒が混和されているが、丁寧に磨かれた器表面ではまったく目立たない。口唇部は尖り気味になっているが、幅狭く面が取られている。1010は口縁と体部の接合ができなかったもので、図上で復元した、口径6.4cm、推定器高11cmを測るもので、底部、体部、口縁部と接合しながら製作しているために、それぞれの器壁の厚さが大きく異なった形となっている。遺存状態はあまり良くない。1011は口径18.2cmを測るもので、1014と同一個体と推定できる。ともに器表面は剝落が進んでいて、辛うじて赤彩の痕跡がとらえられる程度の遺存状態である。淡茶褐色を呈し、受部と脚部には精選された胎土が使われているが、脚柱部は砂粒の混和が目立ち、製作の段階で胎土を変えていることが知られる。1012は口径14.4cmを測るもので、外周に低い段が形成されている。内外周ともに磨きが施されている。胎土、焼成は良好である。1015は口径10.2cm、器高5cmを測る完形の蓋である。茶褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。

1016は口径21.3cmを測るものであるが小片であり、やや不安が残る。口縁の端部で外に向いた形で面がとられ、頸部は緩く弯曲して作られているのは他の甕器形では見られないものであり、肩部の縦方向の刷毛目とともにさらに検討が必要と考えられる。濁茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。1017は口径22.8cmを測る大型の壷の口縁部である。全体に風化が進行している。1018は尖り底をつける厚手の壷器形と推定したもので、内面は指頭のよってめり込むような状態で調整が施されている。肩部においても同様の状況を見ることができる。底部周辺は揃えた形で刷毛が走っている。器表は淡茶褐色、内面は黒褐色を呈している。

5　第26号住居址（第118・121図・図版39）

遺構　第三平坦面の南端部で検出した住居址で、幅約12mの尾根筋の東側傾斜面に立地している。ほぼ同一地点にある第25号住居址は西側を向いた斜面に位置し、尾根筋の平坦地をはさんだかたちで相対している住居址とも考えることができる。検出グリッドはD110・111の2個のグリッドの狭い範囲である。南方向を除いて住居址が配置されているところで、北方向約3.5mで第24号住居址が、東方向約4mで第27号住居址が、西方向約4.5mで第25号住居址が立地している。本住居址の周辺では遺物の出土は少なく、また、本住居址そのものも覆土をほとんど堆積していなかったところから、遺物は数片を得たに止どまる。

平面形は西側の辺を検出したのにとどまるものの、隅円方形を呈するものと理解される。南北方向での距離は300cmで、流失してしまっている東辺を推定するとやや長くなって350cm程度と考えられる。それは、検出した2



第118図　第26号住居址(1/80)

個の柱穴P1、P2の心々間の距離が150cmであり、西側の辺との間隔が100cmであることからの類推である。P1は径36×30cm、深さ5cm、P2は径30×24cm、深さ14cmを測る。長辺の軸は北65度東に置いていることになる。壁溝は全周していたものと推定され、現在での幅は15cm、深さ5cmを測る。

以上の状態から現在の床面は、約半分が遺存しているものと見られるものの、焼土や貼床等の施設は発見できなかった。

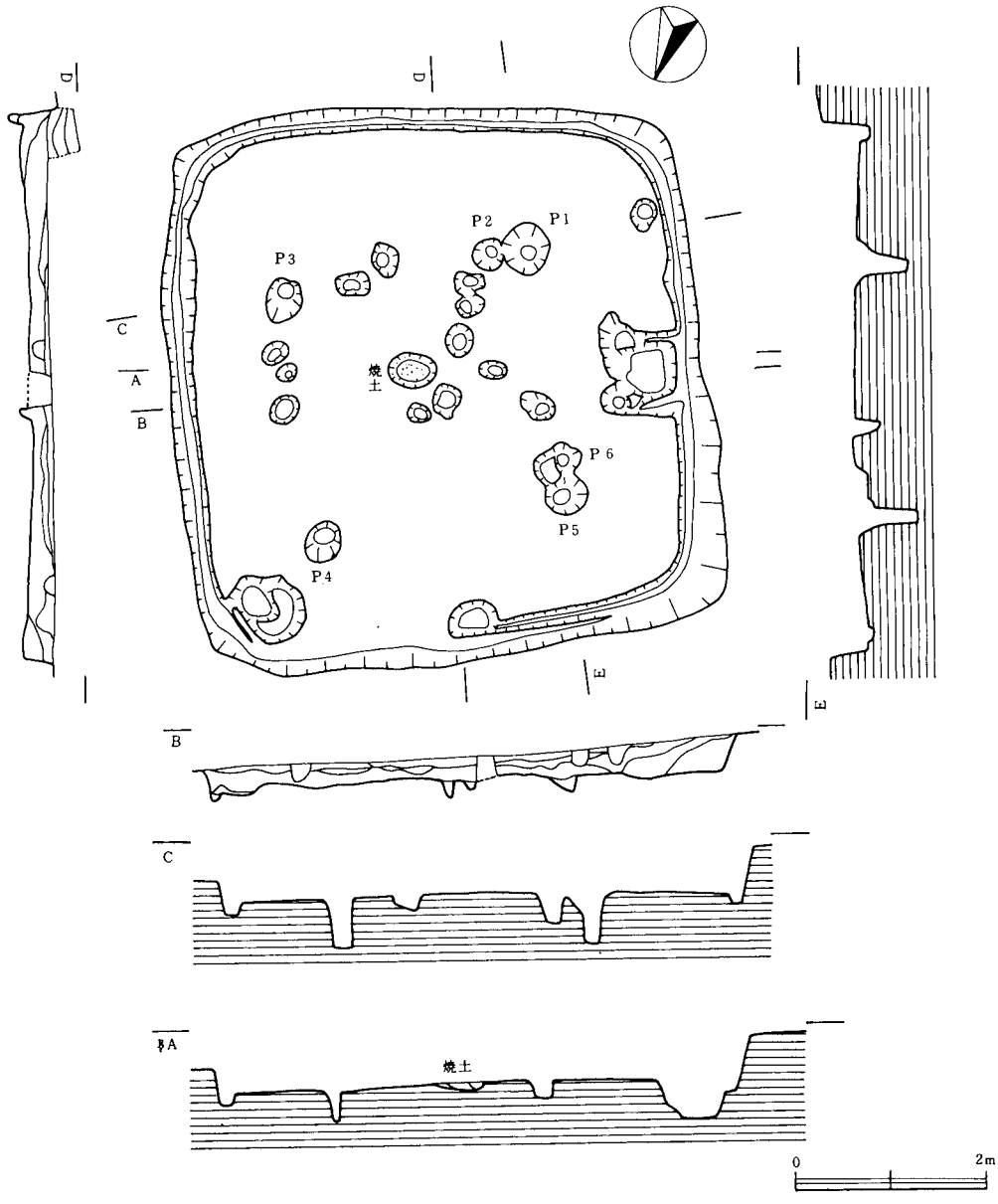
遺物　図示できた遺物は1点のみで、第121図1028の「く」の字状口縁の甕型土器だけである。口径14.7cmを測るもので、口唇部に面取りがなされている。胴部の内外面は刷毛調整でととのえられている。

6　第27号住居址（第119～121図・図版42）

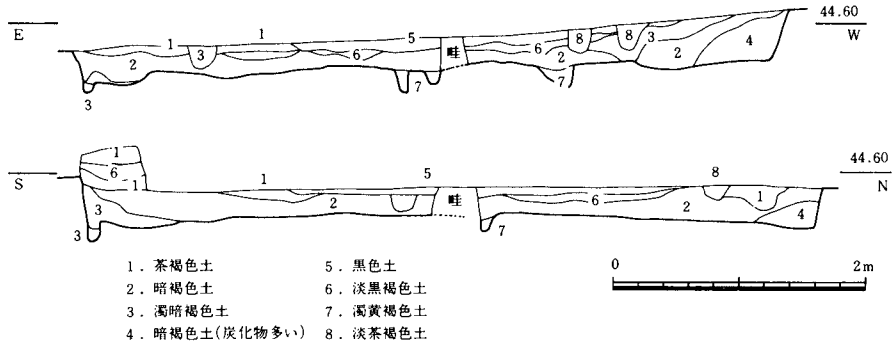
遺構　尾根筋の第三平坦面からやや東方向に離れた位置で検出したのが本住居址である。尾根筋に一直線に構築されている第13・21～26号住居址が、本遺跡全体を視野におさめる位置にあり、また、求心的な集落構造のなかに取り込まれているとすることができるのであるが、本住居址と次節で記述する第28号住居址は地形的に死角の位置にあり、集落の外縁部を構成するものとしてとらえられる。東地区の南側中央に立地し、検出グリッドはD112・E111～113・F112・113である。周辺には住居址は少なく、北方向及び南方向は浅い谷地形をなして標高を下げていく形となっていて、東方向は若干の高まりをもった後崖地形となっており、鞍部を占地しているものととらえることができる。西方向約6mの距離で第24号住居址が、南東方向約19mの距離、比高差約3.5mのところに第28号住居址が立地している。周辺のグリッドから出土したものは極めて少量であった。

平面プランは隅円方形を呈するもので、全体を発掘し得た。南北方向の規模は585cm、東西方向は564cmを測り、長軸の方位は北27度西に置いている。覆土は上層に黒色土が見られ、暗褐色土が厚く堆積していることなどから、自然状態で埋没したものとして考えることができる。地山面の傾斜の状況もあって、検出した壁の高さは北と東側が低く約20～30cmで、南と西側は30～40cmを計測した。床面に食い込んでいる不定形の穴は、濁黄褐色を覆土としてもっていることから木の根の攪乱と推定される。

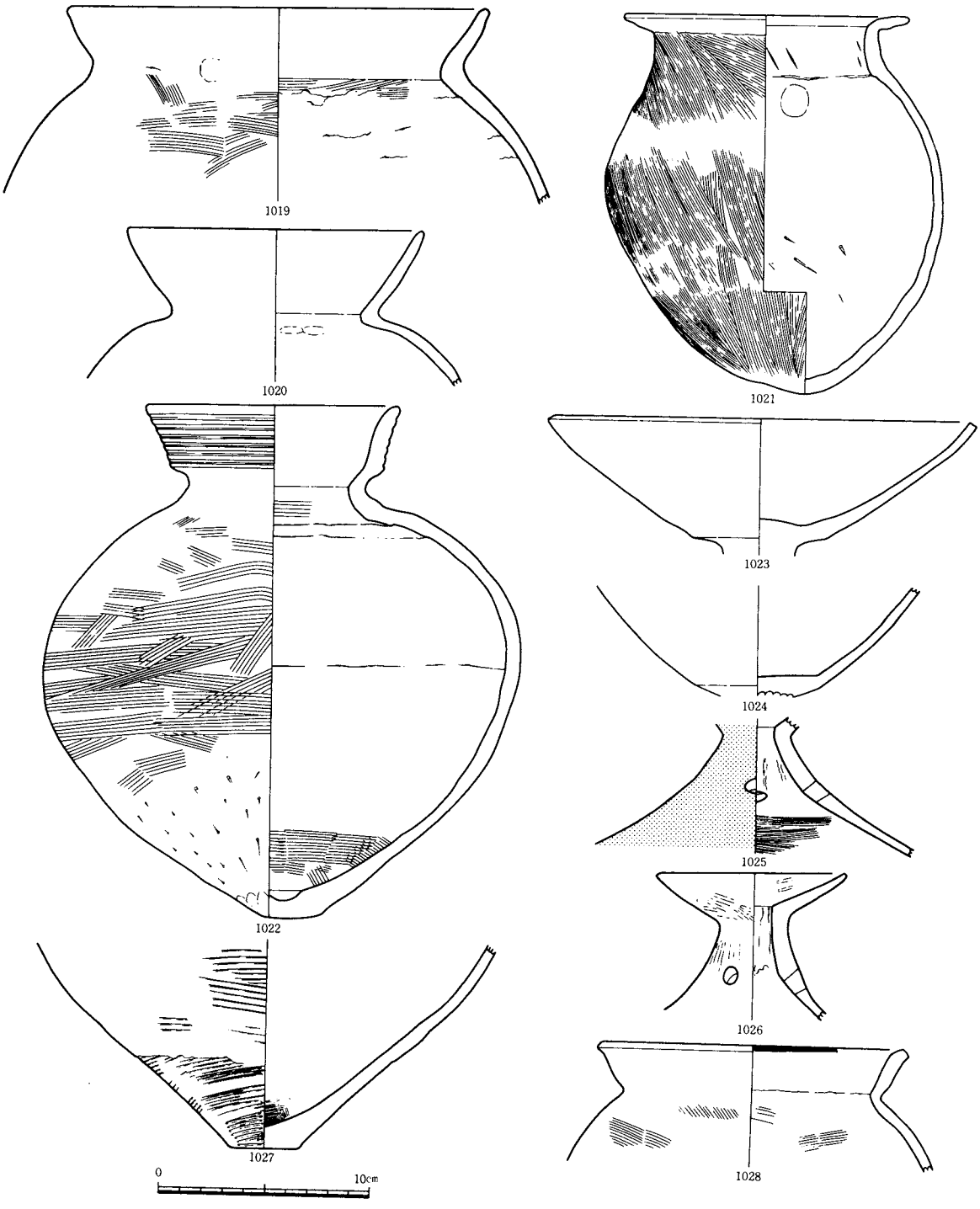
壁溝は北隅の部分を除いて全体に巡らされていて、断面形状箱型を呈するもので幅15cm、深さ12cmを測った。炉址は住居址の中央部分に焼土粒を覆土にもっているピットが検出された。平面楕円形を呈し、径25×18cm、深さ10cmを測る。床面は北隅部分が落ち込んでいる以外炉址に向かってゆるく傾斜する状況を示している。なお、北隅部分は谷地形に堆積する黒褐色腐蝕土が現れている所であり、検出そのものが困難であったことが指摘できる。西辺の壁及び壁溝に平行した形で、方形プランを呈する特殊ピットが検出された。通例のごとく二段掘りの



第119図　第27号住居址(1/80)



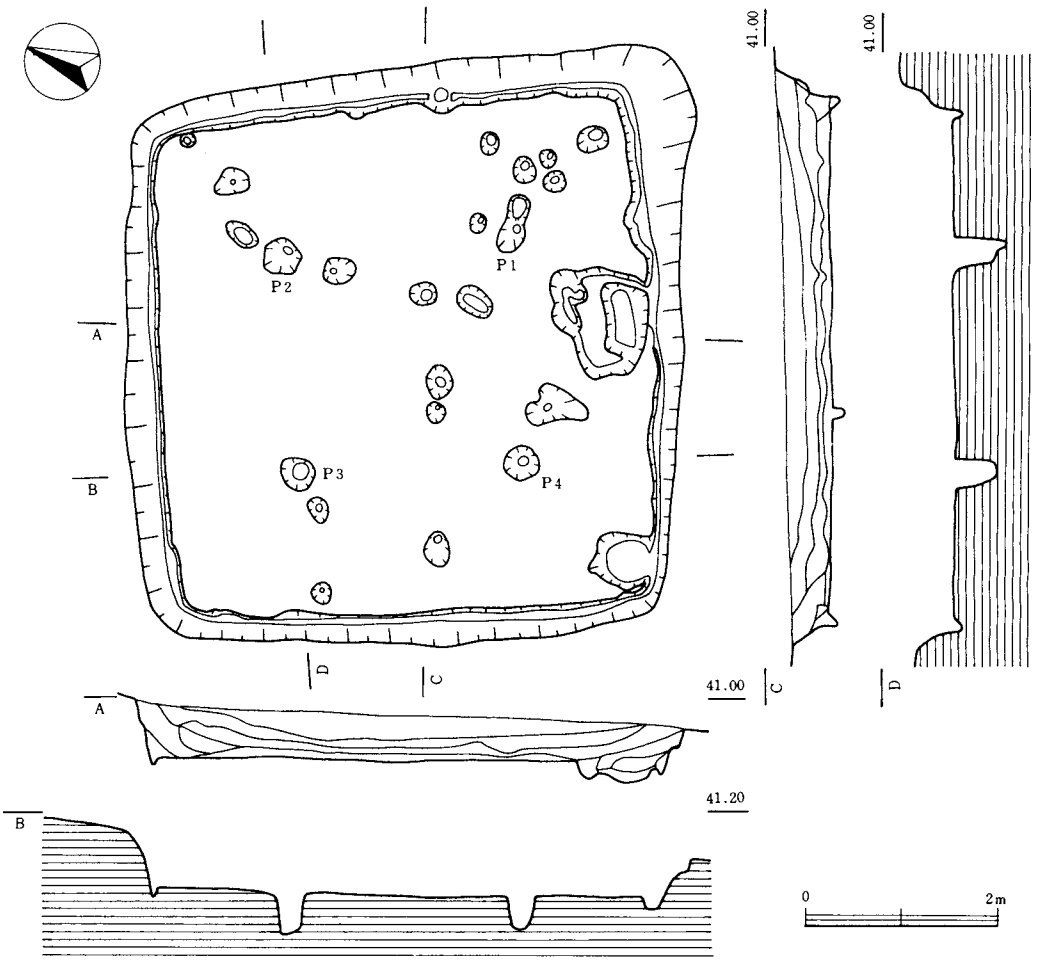
第120図　第27号住居址土層断面図(1/60)



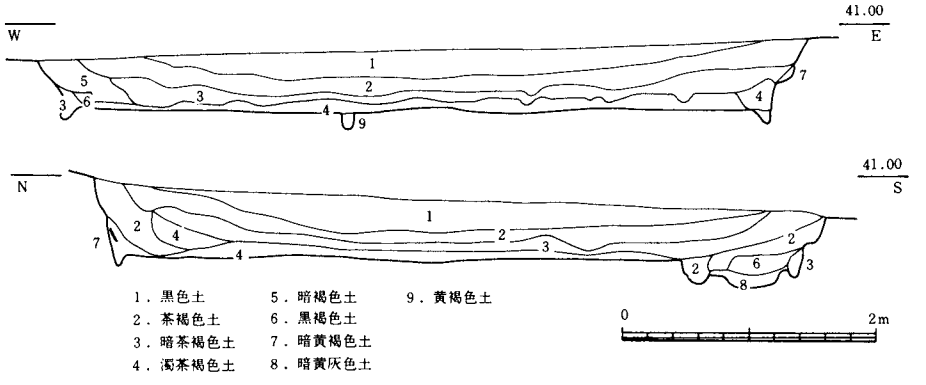
第121図　第26・27号住居址出土土器(1/3)

ものであるが、中のピットも平面方形を呈しているのは第24・28号住居址などごく小数例である。壁溝の位置でのとらえ方にやや難があるが、90×90cmの規模を測り、さらに60×70cmのものが掘り下げられている。深さは47cmを測る。この特殊ピットの周辺に遺存状態は不良ではあったが、一括土器が検出されている。覆土は住居址のものと変化は少なくピットの下層位で黒褐色土の色調が濃くなる程度であった。

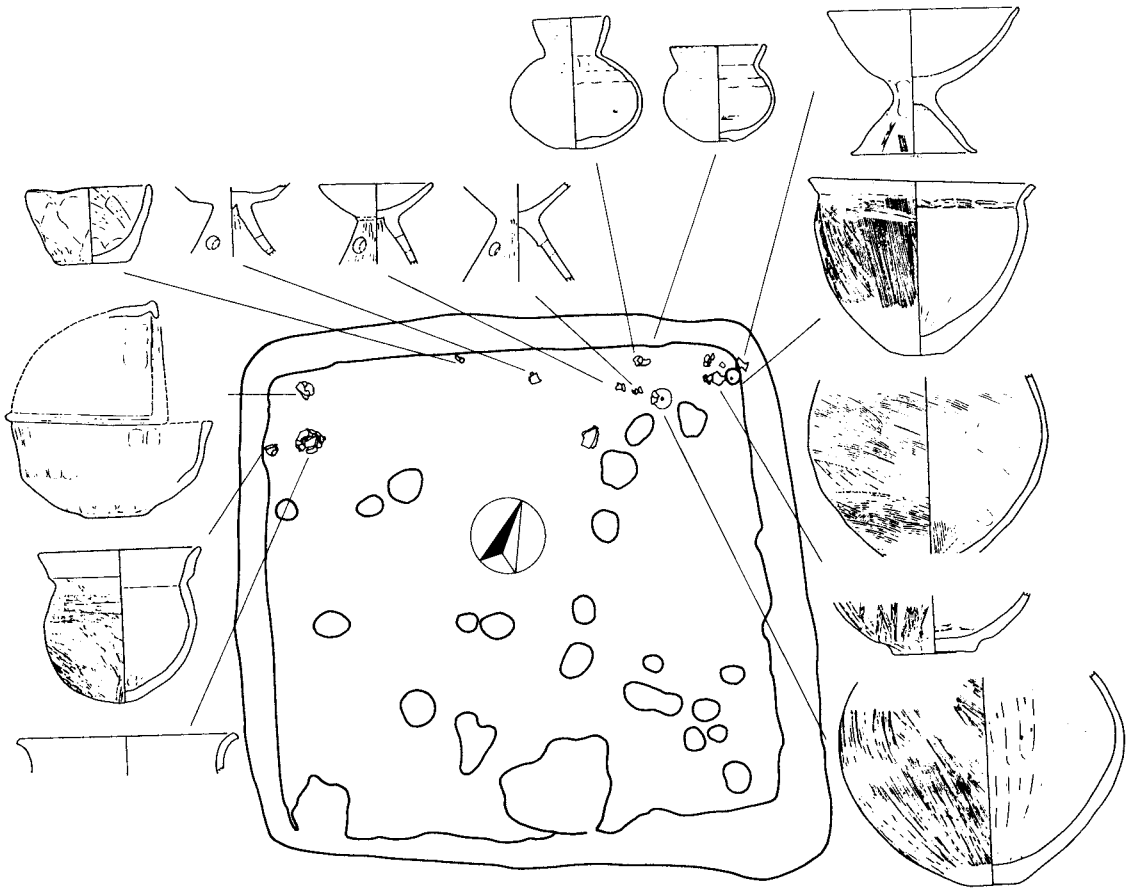
主柱穴は4本と推定され、平面の掘り方は楕円形ないしは円形を呈するものである。P1は径50cm、深さ44cm、P3は径38×48cm、深さ52cm、P4は径40×38cm、深さ46cm、P5は径40×38cm、深さ61cmを測り、それぞれの心々間の距離は260cmの正方形であった。



第122図　第28号住居址(1/80)



第123図　第28号住居址土層断面図(1/60)



第124図　第28号住居址床面出土土器(1/6)

遺物　覆土の上層から鉄器の刀子が1点出土している。第121図の1019～1023までは床面から出土したもので、1024～1027は住居址覆土で検出した。1028は第26号住居址からの出土品である。

1019は口径20.2cmを測るもので、頸部の外側に粘土が継ぎ足されているのが観察できる。口頸部は横ナデが、器表面は横方向の刷毛が、内面はナデによってととのえる程度である。胎土には微砂粒が多く混和されていて、器表面に露出している。濁黄褐色を呈し、焼成はややあまい。1020は口径14.4cmを測る壷形土器の口縁部片で、内外面とも風化が進行していて調整の判断はむずかしい。肩部に刷毛の痕跡が認められ、ナデないしは磨きによって調整されるようだ。1021は口径13.4cm、胴部の最大径16cm、器高17.7cmを測る特異な器形をなす復元完形品である。短い頸部に水平にのびる口縁がつくもので、底部は尖り底風になっていて壷とも甕器形とも言えそうである。器表は目の細かな刷毛によって調整されているものの、器表面に凹凸が目立って多い。内面は簡略なナデによってととのえられ、底面は軽く削りが入っているようだ。淡褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混和されている。1022は口径12.2cm、体部最大径22.8cm、器高24cmを測るもので、復元完形品となった。擬凹線は粗雑に巡らされているもので6条分が確認でき、口縁下の肩部に向いた位置にも同じ工具によるところの擬凹線が見られる。このような調整は本例のみである。胴部の中央部分は横方向の刷毛がいれられ。底部近くは縦方向の削り調整のあとにナデによって平滑にととのえられ、肩部はナデのみのようである。底部は平底の小さなものが付けられている。内面は底面が刷毛調整で、胴部はナデのようである。茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混和されている。焼成は良好である。1023は口径20.2cmを測る高杯形土器の受部で、反り加減の小さな底面に皿状の長い口縁がつけられ、口唇部で面取りが施されている。判然とはしないものの内面は磨きによって平滑に整えられている。濁黄褐色から黒褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く含まれている。1024もほぼ似た器形を示す高杯で、淡黄褐色を呈し、胎土はやや良好である。1025は摩滅が著しく進行している小型の器台である。茶褐色を呈し、胎土は精良である。1026は受部の径が9cmに復元できるもので、口唇部に面取りが施されている。受部の内外面は細かくヘラミガキがなされて平滑にととのえられている。胎土は良好である。1027は底径3.3cmの平底の底部を付

けるもので、底部と胴部を別々に製作して接合している。底部の部分は叩き調整によって成型しているもので、体部は粗い刷毛ナデにょって成型されている。内面はナデに寄ってととのえられるもので、表面に砂粒が露出している。濁黄褐色をなし、焼成はややあまい。図示しなかったが、赤彩が施された高杯の脚部が1点出土している。脚柱から直角に近い形で脚部を開くタイプで、口唇部に面取りがなされている。

7　第28号住居址（第122～126図・図版43・44）

遺構　東調査区の最も南東端で検出した住居址で、第三平坦面の背後に位置している第四平坦面の北端に当るものと想定される。東地区の調査は北東隅が崖線の上場であり、それを延長した形で東側の区画をグリッドの116ラインに設定したのである。第27号住居址を検出した以外は小ピットや性格のつかめない焼土坑数基が散発的に発見される程度であり集落の限界かと考えられたのであるが、尾根筋から約６ｍほど標高を下げた南東隅が若干の平坦面をもっていたことから、トレンチ調査を行ったところ住居址の落ち込みを発見し検出したのが本住居址である。そして、周辺部分を拡張して他の住居址が立地していないかと確認調査を行ったが、北側部分では発見できなかったことから、工事区域外の南側のグループに属する住居址として把握できるものと考えられる。住居址の東のコーナーはほとんど崖線に乗っているものである。

平面形は隅円正方形を呈し、南北、東西方向の規模は住居址の掘り込み線で600cmを測る。南北方向での軸線は、北26度西に置いている。地山が南東方向に傾斜していることから、検出した壁の高さは北と西辺が55cmと高くなっていて、南方と東方は40cmに止どまっている。覆土は壁際が細かく堆積し、中央部分で黒色土、茶褐色土が厚く堆積するという単純な層序を示している。立地的に傾斜面の裾部に当たっていることから、北・東方向からの流土がたまったものとしてとらえられる。壁溝は全体に巡らされていて、断面形状Ｖ字形を呈していて、幅10～15cm、深さ８～12cmを測る。南辺の壁に沿う形で、平面方形プランをなす二段掘りの特殊ピットが検出された。木の根の攪乱によって一部分掘り方が乱れているもので、長径120cm、短径80cmを測る。床面から約10cmさがった所で段が設けられ、黒褐色土が堆積した長方形のピットが掘り込まれている。二段掘りの場合は通常中央部にピットが置かれるのであるが、本住居址のは壁際に寄った位置に掘り込まれているのが特徴としてとらえられる。床面は中央部分が若干傾斜している程度で、ほぼ平坦に整えられている。また、床面は東側部分が踏み固められて、堅く締まっている。なお、炉址、焼土等は検出出来なかった。

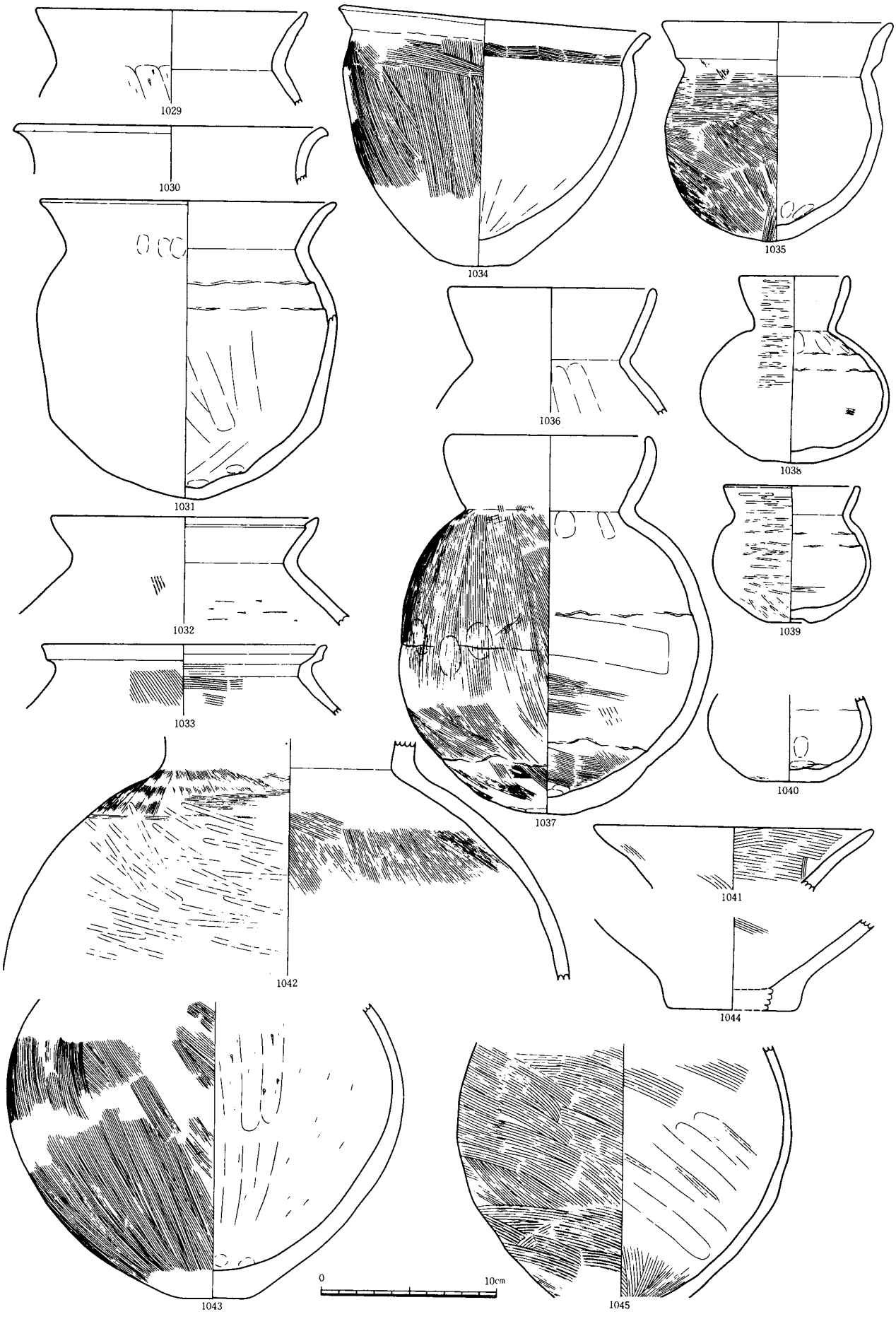
遺物の出土は、覆土のものを含めて北側部分から多数出土していて、床面上の復元した多数の資料とともに、本遺跡における画期を示していると言える。

主柱穴は４個が検出された。平面形は楕円形を呈していて、Ｐ１は径64×28cm、深さ34cm、Ｐ２は40×36cm、深さ41cm、Ｐ３は径38×34cm、深さ33cm、Ｐ４は径36cm、深さ39cmをそれぞれ測る。心々間の距離はいずれも240cmで、正方形を呈している。

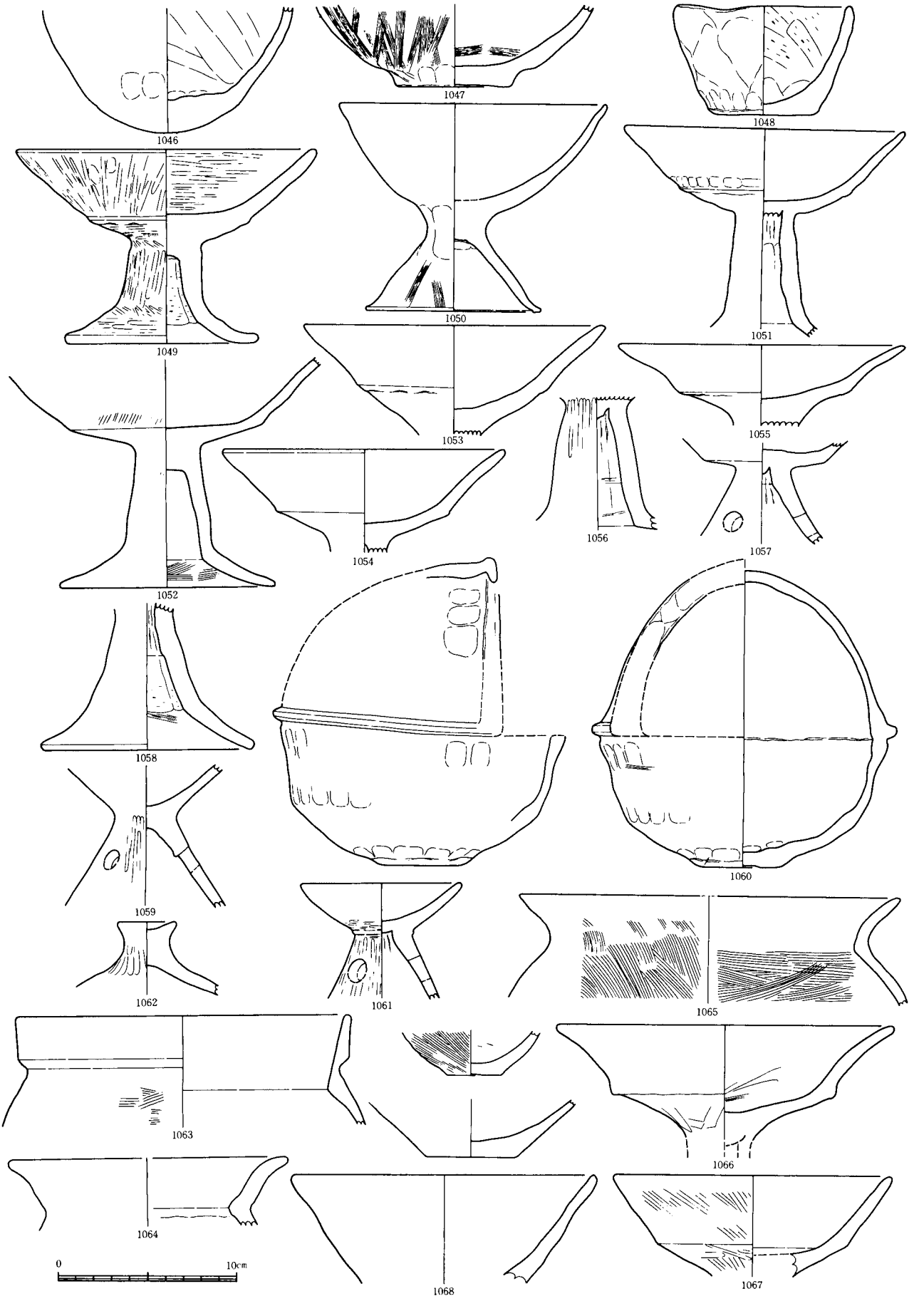
床面上の遺物は第124図で出土位置を示したが、北辺近くで小型器台の３点が見られ、北東隅では置かれたような状態のまま甕器形が検出された。また、北西隅では手炙り型土器や甕型土器２点が出土しており、北側部分にかたよる出土傾向を示していた。

遺物　1030・1034・1035・1038・1039・1042～1045・1047・1048・1050・1057・1059～1061の資料が、床面から出土したもので、他は住居址覆土から得られたものである。1063～1068は本住居址からやや離れた位置のＡ115グリッドから出土しているものである。

1029は口径15.2cmを測るもので、口頸部は粘土を継ぎ足して成型している様子がうかがえる。内外面ともに粗いナデによって調整されていて、砂粒の移動が認められる。濁茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が目立ち、焼成はややあまい。1030は口径17cmを測るもので、口唇部に面がとられ若干肥厚気味に成型され、内外周ともに丁寧な横ナデが施されている。淡黄褐色を呈し胎土に砂粒が混和されている。1031は口径16.6cmを測るもので、体部と底部の接合ができなかったので図上で復元した。器表面に稜線がつくような形で体部と底部が接合されていて、混ぜられている砂粒の量がまったく異なっているのがよく観察できる。口頸部の圧痕は全体に巡っているよう



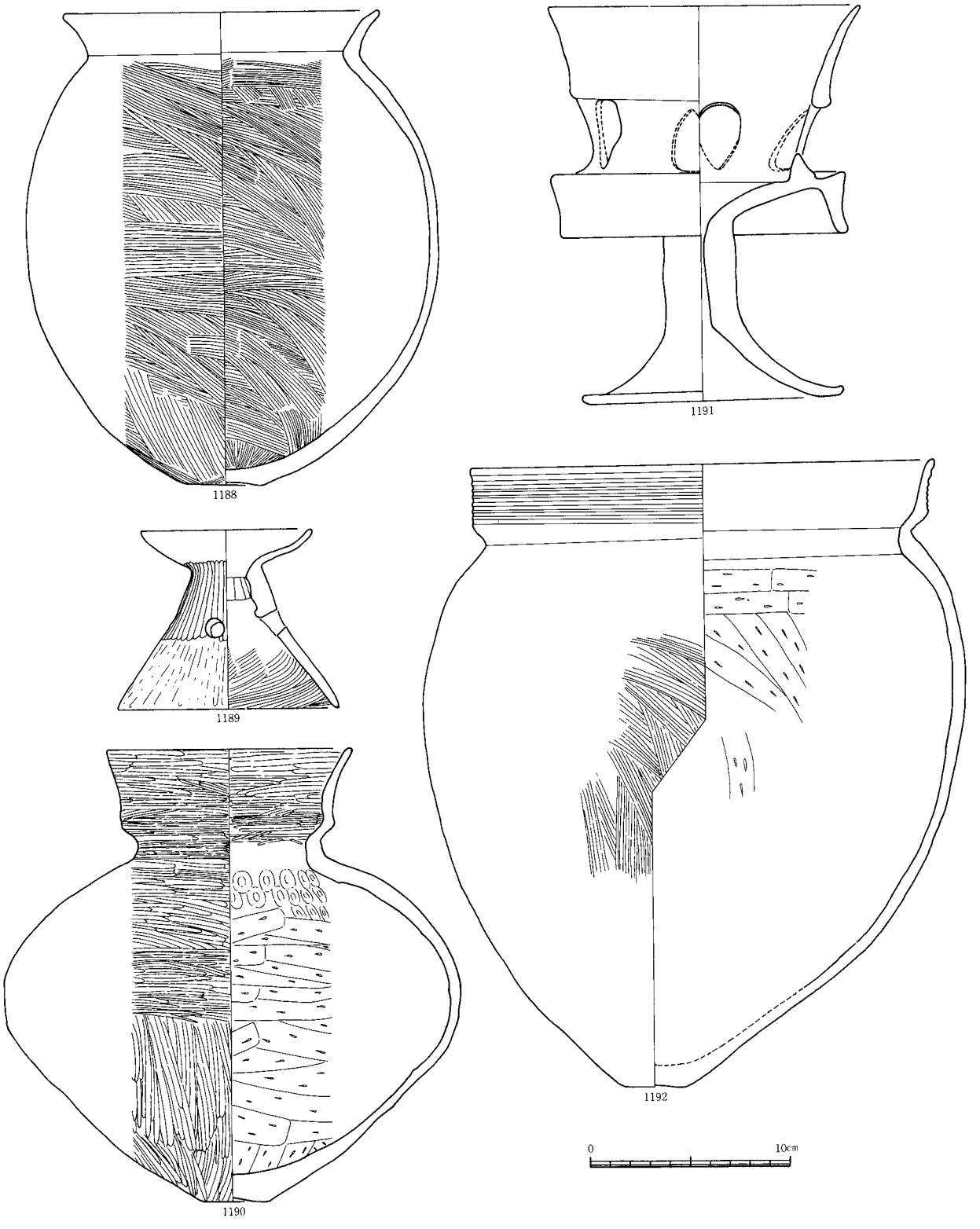
第125図　第28号住居址出土土器(1/3)



第126図　第28号住居址及びその周辺出土土器(1/3)

だ。胴部の内面は簡略な刷毛調整で、器表は縦方向のナデが粗雑になされている。底部は丸底のようだ。暗褐色を呈し、胎土、焼成は良くない。1032は口径15cmをはかる口唇部内面肥厚の甕型土器で、口唇部が尖り気味に成型されているのが特徴的である。内外面ともに丁寧な横ナデ調整が施されている。肩部に刷毛調整痕があるようだが、方向は判然とはしない。胎土には微砂粒が若干混和されている程度で良好である。1033は口径16cmを測るもので、本遺跡では類例の少ない受け口状口縁となっている。肩部には斜め方向の刷毛調整が、内面では一部に横方向の刷毛が入れられている。濁黄褐色を呈し、胎土は良好である。1034は口縁部分が取り上げの際に破損した程度で、完形で遺存していたものである。口径18cm、器高13.8cmを測る。口唇部には面がとられ、口縁は横方向、体部は縦方向の目の細かい刷毛によって調整され、内面は平滑になるようなナデが施されている。底部は明確ではないが面のある平底に成型されている。色調は茶褐色を呈し、胎土、焼成は比較的良好と言える。1035は口径12.8cm、器高12cmに復元できたものである。底部は平底か丸底か判然とせず、頸部内面の稜線が1034とは対照的にはっきりとはしない成型となっている。口縁の内外面は横ナデが、頸部は横方向、体部は斜め方向の刷毛が施されている。内面は粗いナデである。1036は口縁の内側が僅かに内弯して立ち上がるもので、口径12cmをはかる。遺存状態が悪く調整はつかめない。1037はやはり口縁が内屈気味に立ち上がるもので、口縁部の過半を欠いているのみで体部は完形で出土している。口径11.6cm、胴部の最大径17.8cm、器高21cmを計測した。底部と胴部は別々に製作された後に接合したもので、器表面の調整が刷毛調整とナデ調整というふうに大きく異なっている。内面は刷毛の後に幅の広い工具でナデが施されている。淡茶褐色を呈し、程度、焼成は普通である。1038は口径6.2cm、胴部最大径10.5cm、器高10.4cmを測る復元完形となった小型の壷である。底部は平底風に成型されている。肌面は荒れていて調整は十分にはつかめないが、赤彩が施されているようだ、暗褐色から淡茶褐色を呈し、胎土は良好であるが、底部周辺は砂粒の混和が多く認められる。焼成はややあまい。1039は図上復元したもので口径7.7cm、器高7.6cmを測る小型の壷である。底部は凹底に成型されていて、内外面ともにナデによって粗く調整されている。淡黄褐色を呈し、胎土、焼成は普通である。1040は1038と類似した小型の壷形土器の底部片に想定されるものである。淡黄褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和されている。1041は「く」の字状口縁の甕で、口径15.6cmを測るものである。大きく外傾した口縁の内面は刷毛で成型したあとに横ナデが施されているが、器表面は粗いナデによるのみで凹凸が目立つ。淡茶褐色を呈し、胎土は比較的良好である。1042は頸部の径が14cm、胴部の径32cmを測る大型の壷形土器である。内外面とも刷毛調整で成型され、器表面はさらにヘラで磨きがなされている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。1044は底径7.2cmを測るもので、1042の大型壷の底部かと推定される。1043は肩部から上の部分をまったく欠いているが、以下の部分は完形土器で、煮炊きには十分に対応出来たものと推定できる。胴部の最大径は22.3cm、現器高16.6cmを計測する。胴部には煤が厚く付着している。内外面の調整及び胎土、焼成は1034の完形の甕にまったく類似していると言える。1045は胴部の最大径が19cmを測るもので、底部と胴部が別々に作られているもので、その境界に段が付いている。底部は平底で中央がやや窪むような形となっている。体部には煤が、内底面には炭化物が付着し、底部は二次的火熱による赤変が認められる。濁褐色を呈し、胎土ににには砂粒が多く混和されている。

1046は甕形土器の底部片で丸底に成型されている。底部の厚い部分が接合した位置で剥離が入っている。1047は底径6.6cmを測る壷形土器の底部片である。胎土、色調、調整は1034・1043の資料に類似したものが認められる。1048は口径10cm、器高6cmを測るもので、約半分を欠損している。成型したあとにわずかに削りがなされる程度で、内外面ともに器表面は凹凸が見られる。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成はやや良い。1049はほぼ全体が遺存していたもので、復元完形になった。受部の径17cm、器高10.8cm、脚部径11cmを計測する。受部の内面は磨きで平滑に整えられるものの、器表面は横ナデであり、底面、脚柱は簡略なヘラナデによる調整である。淡褐色を呈し、胎土は精選されていて、焼成も良好である。1050は口径15cm、脚部径10cm、器高11.4cmを計測する高杯で、口縁部の端部を欠いているだけで復元完形になった。口縁部、脚部の端部は尖り気味に成型され、器表面はナデによって比較的平滑に調整されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒を若干まじえている。胎土及び焼成の具合は、先に記述した1034・1043・1047のものに類似したものが感じられる。1051・1053～1055は口径15.



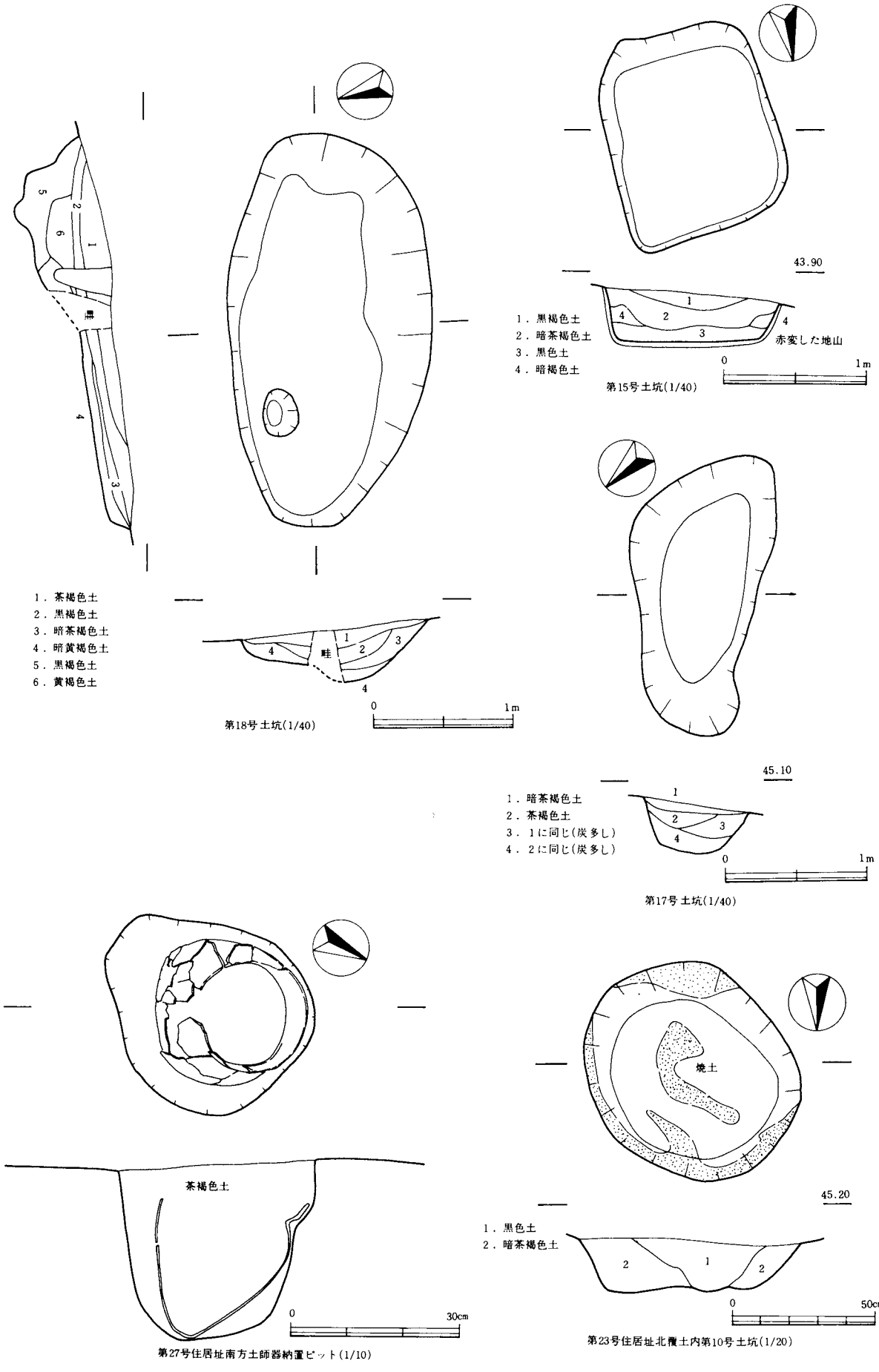
第127図　第25号住居址他出土土器

6～16.8cmを計測するもので、風化が著しく進行していて調整がまったくつかめなくなっている。しかし、受部の中で欠損している部分は極わずかと言える。胎土には砂粒、微砂粒が多く混和されていて、焼成もあまり良くない。1052は現器高12.7cm、脚部径12.2cmを測るもので、剝落のために口縁端部を確定することが出来なかったものの現況に近いものと考えられる。内面は皿状を呈し、外周の段は極弱く形骸化した状態となっている。赤彩されていた可能性がある。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選されている。1057は小型器台であるが、器表面はまったく剝落していて調整は不明である。1059は口縁の端部を欠いているもので、内外周ともに磨きが施されているようだ。淡茶褐色を呈し、胎土は良好である。1061は受部の径9cmを測るもので、丁寧なヘラミガキがなされているようだ。1057・1059・1061はいずれも図示した部分は全体が遺存しているもので、端部周辺が欠損しているだけと言える。1060は手炙り型土器で、本遺跡では唯一の出土である。推定器高17cm、胴部の最大径は16～16.6cm、底径4.8cm、体部の高さは7.2cmに復元できる。体部は段の付くような形で成型され、底部は突出するような平底となっている。上半分とははっきりと分割されるような形で成型されていて、接合部分は肥厚気味に整えられ、窓の縁も粘土が足されて肥厚気味になっている。風化が進んでいるために、器表面の調整はまったくつかめない。茶褐色を呈し、胎土には砂粒が混和されている。

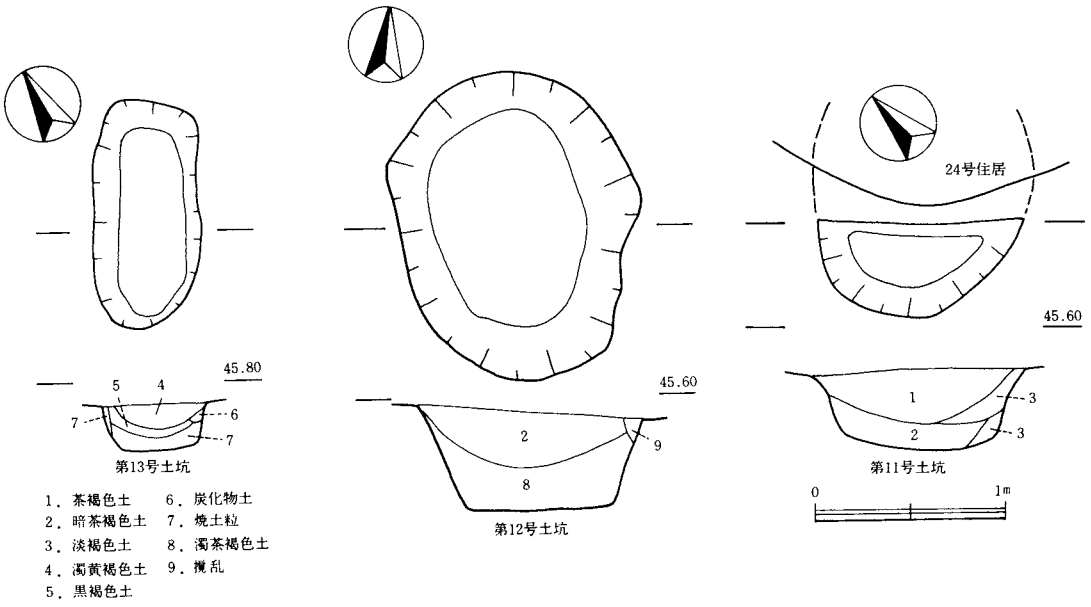
1062～1069の資料はA115グリッドから出土したものである。1063は口径19cmを測る有段口縁甕であるが、内面には段はなく「く」の字状に折れている。内外周は横ナデによって丁寧に調整されている。灰褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和されているが良い方に含めて考えられる。1064は口縁の端部で大きく外展するもので、淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。1065は外弯して立ち上がる口縁に内外面ともに刷毛調整でととのえる胴部がつくもので、底部は図示しなかったが小さな平底がつくようだ。淡褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。1066は口径18.8cmを測るもので、底面と口縁部の接合の部分が外周の段になっている様子がはっきりと見ることができる。内外面ともに粗雑なナデによって整形されている。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多い。1067・1068は口径15.6cm、17cmを測るもので、内面は平滑に磨かれているものの外周は刷毛調整の後に横ナデが加えられている。色調は茶褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

第127図は本文を記述していく段階で遺漏に気ずいたものである。いずれも完形、復元完形品であり、また、住居址床面出土のものであるところから急遽補追したものである。

1188・1189は第25号住居址の床面から出土したもので、前者の口径は16cm、胴部の最大径は20.6cm、器高23.6cmを計測する。底部は凹底風の平底で、頸部は斜め方向、体部は横方向、底部周辺は縦方向の刷毛が施されている。内面も同じ工具による調整が全体になされている。体部の中央から下には煤が付着している。淡茶褐色を呈し、胎土に多くの砂粒が混入している。焼成は良好である。1189は住居址内の土坑から完形で出土したもので、受部の径8.4cm、脚部の径11.2cm、器高9cmを測る。器表面は丁寧な磨きが施されて平滑にととのえられ、脚部の端部はわずかに面が取られている。内面は刷毛目がはっきりと遺存している。茶褐色を呈し、胎土、焼成はともに良好である。1190は第二平坦面のK100グリッドから出土しているもので、第3号住居址と第4号掘立柱建物との中間に位置していることになる。欠損しているところの少ない復元品で、口径11.8cm、器高22.8cm、胴部の最大径23cmを計測する。口縁の内外面及び胴部の全体に丁寧なヘラミガキが施され平滑に整えられている。底部はやや手を抜いた形での平底となっている。色調は淡褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。1191は西地区の埋谷から出土したもので、受部の一部を欠いているだけで復元完形となった。本遺跡では装飾器台で全形がうかがえる数少ない資料である。受部の口径15.6cm、鍔の径14.4cm、脚部の径13cm、器高19.8cmを計測する。受部の涙滴状の透かしは欠損しているところであり、全体での数は推定できない。器表面は全体に渡って剝落が進んでいて、調整の具合は不明である。茶褐色を呈し、胎土は精選されている。1192は東地区の第三平坦面の東斜面に位置している第27号住居址の南方向のピットから一括で出土したもので、第128図で出土状況を図示しているものである。平面楕円形を呈し、径33×38cm、深さ31cmを計測するものであった。覆土は茶褐色土一層からなっている。住居址に関係するものと推定され、納置して埋め戻されたものと考えられる。口径23.2cm、器高31.2cmを計測するもので口縁の一部を欠損しているだけの大型の甕である。全体に摩滅が進行している。擬凹線は粗雑



第128図　土坑・ピット実測図



第129図　土坑実測図(1/40)

に巡らされ、体部の刷毛調整は目の細かいものが使用されている。体部には煤が付着している。色調は濁茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多量に混和されている。

8　第10～18号土坑（第128・129図・図版45）

第10号土坑　東地区の中央部、第23号住居址の覆土内で検出したもので、住居址がまったく埋まってしまった段階での構築が想定される。検出グリッドはＩ107である。平面プランは楕円形をなし、径80×70cm、深さ20cmを測る。床面及び壁の一部は火熱によって地山が変色していた。覆土は炭化物の含有量によって分層されたもので、長時間火を燃やす作業が行われたものと推定される。良く似た状況を示す第15号土坑との関連が考えられる。

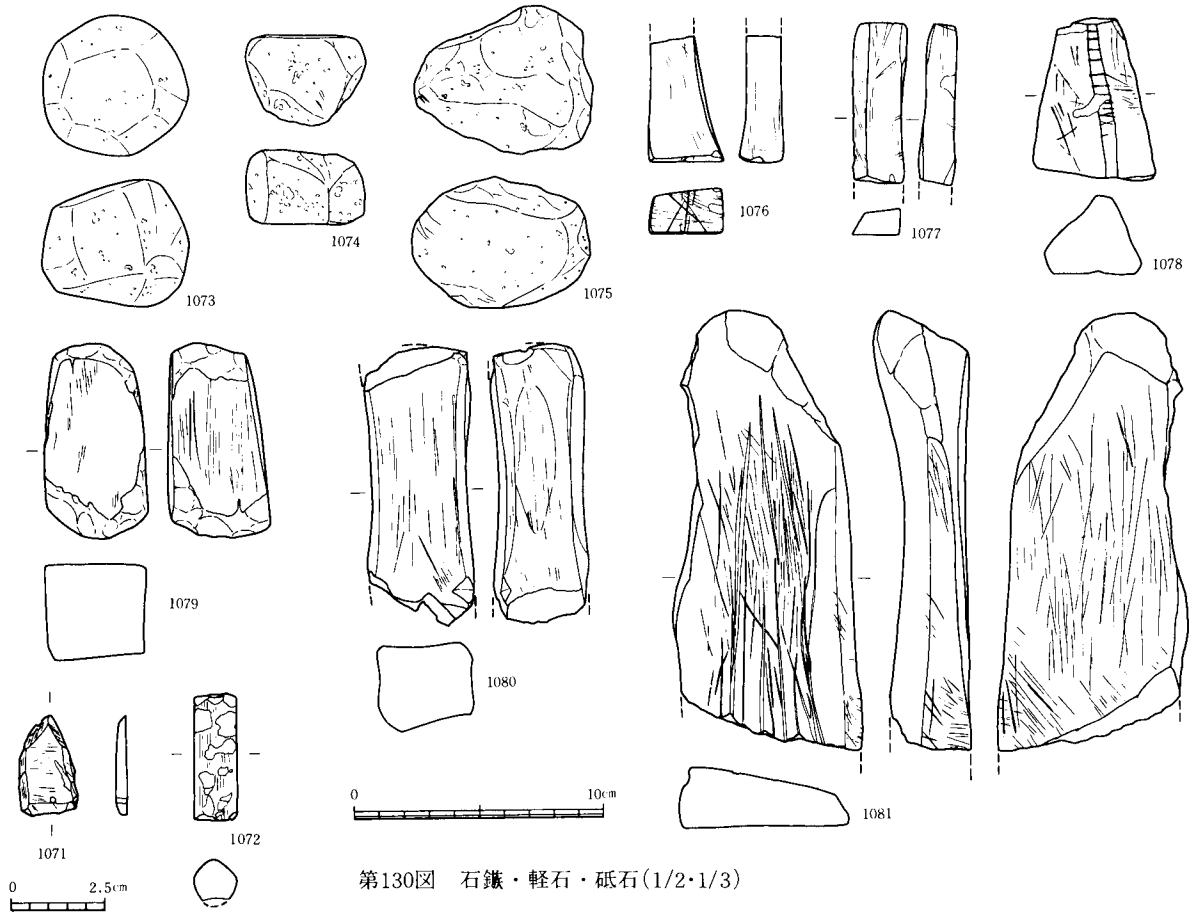
第11号土坑　東地区の南側で検出した土坑で、第24号住居址の南西隅にかかっていた。検出したのはＤ108グリッドである。平面楕円形プランを呈しているもので、短径は110cm、深さ43cmを計測する。長軸の長さは推定できない。住居址との切り合い関係は判然とはとらえられなかったものの、後出するものと推定している。覆土は茶褐色土、暗茶褐色土が堆積していて、遺物の出土は皆無であった。

第12号土坑　東地区の南側、第24号住居址と第25号住居址の間で検出した土坑で、Ｂ108・Ｃ108グリッドに含まれている。平面プランは楕円形を呈し、長軸160cm、短軸120cm、深さ52cmを測る。床面は比較的平坦にととのえられ、壁の立ち上がりはやや角度が強い。覆土は暗茶褐色土、濁茶褐色土が堆積しているが、出土遺物はやはり皆無である。

第13号土坑　第12号土坑に隣接した位置で検出した土坑で、平面プラン楕円形を呈したものである。検出グリッドはＣ109・Ｂ109である。長径120cm、短径60cm、深さ23cmを計測した。床面は平坦にととのえられていて壁の立ち上がりの角度も強い。最下層は焼土粒を多量に含んだもので、その上に黒褐色土が炭化物を含んで堆積している。上層の土は濁黄褐色土であり、埋め戻された可能性も考えられる。やはり、出土遺物は皆無である。

第15号土坑　東地区の北東部で検出したもので、Ｌ112グリッドに位置している。平面プランは長方形を呈し、長軸144cm、短軸120cm、深さ36cmを計測する。床面は平坦にととのえられ、厚さ約5cmほどが火熱によって堅く焼土化していて、土坑全体に渡っている。最下層には炭化物を多く含んだ黒色土が堆積し、上層には黒褐色土がレンズ状に堆積していることから、土坑が窪んでいたか、開口していた可能性が考えられる。出土遺物は皆無である。

第17号土坑　東地区の西側斜面に臨んでいる第23号住居址の北西方向で検出した土坑で、Ｊ105グリッドに位



第130図　石鏃・軽石・砥石(1/2・1/3)

置している。平面プランは不整楕円形を呈するもので、長径200cm、短径100cm、深さ40cmを計測する。茶褐色土系の土が炭化物を交えて堆積しているもので、やはり、出土遺物は皆無であった。

第18号土坑　東地区の北西端部の第21号住居址の北側で発見したもので、Q104・105グリッドに位置している。長径276cm、短径146cm、深さ25～62cmを測り、地山の黄褐色土を介在させて黒色土が最下層に堆積している。平面形は楕円形を呈しているもので、片側が深く、一方が浅くなっていて、小ピットが凹凸の多い床面に見られることなどから、木の根の攪乱である可能性が高い。第21号住居址の東方向で検出した第16号土坑も同様の在り方を示しており、やはり、攪乱である可能性が考えられる。

9　出土石器（第130図）

鉄器の出土は、第15・27号住居址などから得られているものの小片であり図示しなかった。石器はやはり小数例ではあるが、管玉、磨製石鏃、砥石、軽石質石製品等が出土している。個別に概略を記述していく。

1071は磨製石鏃で中地区の南側、第７号住居址の近くB100グリッドの上層部で出土したものである。長さ2.56cm、幅1.54cm、厚さ0.3cm、重さ２ｇを測る。全体に粗雑な磨きで、擦痕がはっきりと残っている。片面だけに刃の部分を作り出しているもので、基部の位置でもそぎ落しが行われている。基部の中央部分に径0.11cmの穿孔が施されている。

1073～1075は軽石で、使用によって面が形成されているものである。図示した３点の他に９点の出土がある。西地区では第29号住居址と埋谷から１点と２点が、中地区では第31号住居址、B104、D100、D101、G93グリッドから、東地区では第28号住居址からと１点づつが出土している。1073は中地区の西側K93グリッドから出土したもので、最も使い込まれている。全体に不定形な面がとられて丸味を帯びている。径6.03×5.90cm、高さ5.14cmを測る。1074は中地区のH100グリッドから出土したもので、下半分を欠損しているようだ。三角柱状を呈していて、平面的に利用されたのであろう。1075は中地区のE98グリッドから出土したもので、不定形の形状を

とっている。径6.87×5.74cm、高さ5.15cmを計測する。

1076～1081は砥石に推定されるもので、図示した他に西地区のY87グリッドから出土した１点がある。第31号住居址から得られた1078を除いて、包含層の上層から出土しているものであり所属時期は古墳時代とは断定できない。いずれも粒子の細かい砂岩質の石材が利用されているようだ。1076は方柱状をなしているもので、中央部分で折損したものと見られる。H100グリッドから出土している。各面とも平滑になっていて、小口部分は沈線が不規則な形で入っている。長さ4.96cm、幅1.82～2.89cm、厚さ1.33～1.78cmを測る。1077は各面が捩じれた形で面を持つもので、G97グリッドから出土している。長さ６cm、幅2.03cm、厚さ1.19cmを測る。1078は第31号住居址から得られたもので、三角柱状を呈している。それぞれの角に狭い面が取られ、そのうちの２面に沈線が見られる。狭い面の部分以外は形をととのえた段階のままとなっている。長さ6.5cm、幅4.71×4.02cmを測る。1079はＩ100グリッドから出土したもので、方柱状をなし小口部分は打痕が入っている。面は平滑で角が立ったようになっているが、一面は縦方向の条線が認められる。長さ7.58cm、幅3.7×3.93cmを測る。1080は表採されたもので、真ん中がくぼんだ方柱状を呈している。各面の角は狭い面をもっていて丸味を持った形となっている。小口の一面には欠落した後に沈線が入っている。石質はきめの細かいもので、仕上げ砥石のように思われる。長さ10.96cm、幅3.79×3.41cmを測る。1081は西地区の中世期の井戸の内部から出土したもので、平面形が不定形板状を呈しているものの、欠損したものではないようだ。両面とも平滑になっていて、一面は中央部分がくぼむような状態となり、長軸方向に沈線が入れられている。長さ17.8cm、幅7.26cm、厚さ2.27cmを計測する。

土製品は図示出来なかったが、円盤状を呈するものが1点出土している。径6.2cm、厚さ1.6cmを測るもので、両面とも平滑に磨かれていて、縁の部分は丸味を持った形で面が取られている。

第５節　縄文時代の遺物（第131図～第133図）

１　土器（第131図）

本調査で出土した縄文土器は少なく、文様などのわかる23個体を図示した。Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ群の５群に分類した。土器個々の仔細は観察表として後述し、ここでは、出土状態や時期などについて述べる。

Ａ群（第131図1082～1085）　Ａ群は、中期中葉上山田式と考えられるものである。西区のみから出土している。西谷部からのものと、北斜面部からのものがあるが、いずれも、後世（縄文時代以降）に、二次堆積したものと思われる。出土土器は、上山田式でも最も古いグループに属すると考えられる。

Ｂ群（第131図1085）　Ｂ群は、後期前葉の気屋式と考えられるものである。１点のみで、出土地点は不明である。

Ｃ群（第131図1088～1091、1101、1102）　Ｃ群は、後期後葉八日市新保式と考えられるものである。西区東側谷部からまとまりをもって出土している。出土土器は、八日市新保式の内でも最も古手のものと考えられる。1101、1102は同一個体であるが、他に類例を捜し得ず、三角形の刺突を持つことから、この群に含めておく。

Ｄ群（第131図1092～1100、1103、1104）　Ｄ群は、晩期終末の下野式と考えられるものである。西区北斜面部、西区東側谷部、Ｊ・Ｋ-91・92グリッド付近で出土している。他群に比べ数量的に多い。1099は、他に類例がなく、内面に条痕調整を施すことから、一応この群としておくが、胎土など異なる点が多い。1094についても同様で、横位の沈線を切る縦位の短沈線が、貝殻の刺突とも見えることによる。これも他と胎土が異なる。

Ｅ群（第131図1105～1108）　底部、脚部などを一括した。1107は、1085と同一個体と考えられ、1106も、形態的に見てＡ群と属するものと考えられる。1105は、縦位の縄文が施される点から、Ｂ群に属する可能性が高い。1108は、中期中葉～後葉の台付鉢の底部と考えられる。

２　石器（第132図、第133図）

石器は、30点を図示した。すべてが縄文時代に属するものではなく、旧石器時代の物や、古墳時代の物を含む。

打製石斧（第132図1134～1140）　打製石斧は７点出土している。西区の井戸から出土した1137を除いて、すべて欠損品である。分布にはまとまりがなく、また、縄文土器の分布と重なるものはない。1137、1135がやや近い所から出土している程度である。1140は８号住から出土している。小松市高堂遺跡（戸澗1981）などの例から、すべてが縄文時代に属するとは考えにくい。形態的には、欠損品が多いため不明な点が多いが、すべて撥形と思われる。

磨製石斧（第132図1141～1144、1153）　磨製石斧は５点出土している。分布は２点が縄文土器の分布がはずれるものの、形態からすべて縄文時代のものと考えられる。大小２形態あり、大形品は刃部破片３点、刃部欠損１点と、この石器の使用法を反映しているものと考えられる。大小とも両側縁の平行する定角形である。

礫器（第132図1145）　礫器は１点のみ出土されている。やや偏平な礫を素材とし、２回の打撃で片刃の刃部を作出している。出土位置は、西区東側谷部で縄文土器の分布と重なる。

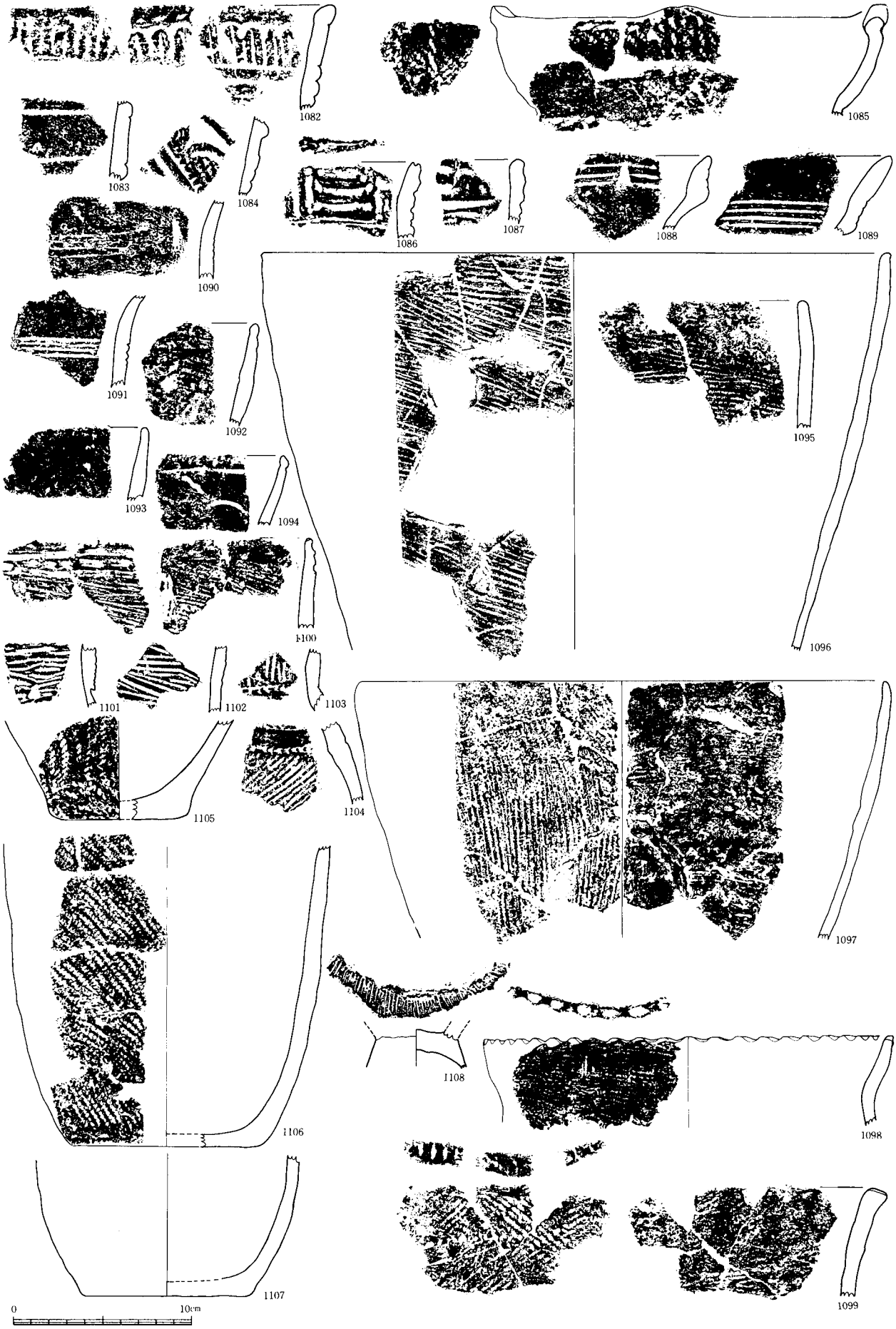
砥石（第132図1146）　３号住から出土しており、古墳時代の物と考えられる。砥面は４面ある。石質は、やや粒子の粗い砂岩で、荒砥的な物と考えられる。

削器（第132図1147、1148）　削器は２点出土している。いずれもやや横長の剥片を素材とし、剥片の先端部に、主に腹面から調整剥離を施し刃部を作り出している。1148は、縄文土器の分布と重なる位置から出土している。

石鏃（第132図1152）　28号住から出土している。形態は、所謂飛行機鏃と称されるものであり、縄文時代のものと考えられる。加工は、一部整った部分が見られるものの全体としては粗い。

玉末製品（第132図1151）　Ｆ-106グリッドから出土している。端部を斜めに欠損している。表面には縦位の線状痕が見られよく研磨されている。

剥片、石核（第132図1151、1149）　剥片は、先端部から約½を欠損している。打面は調整打面で、背面に残る

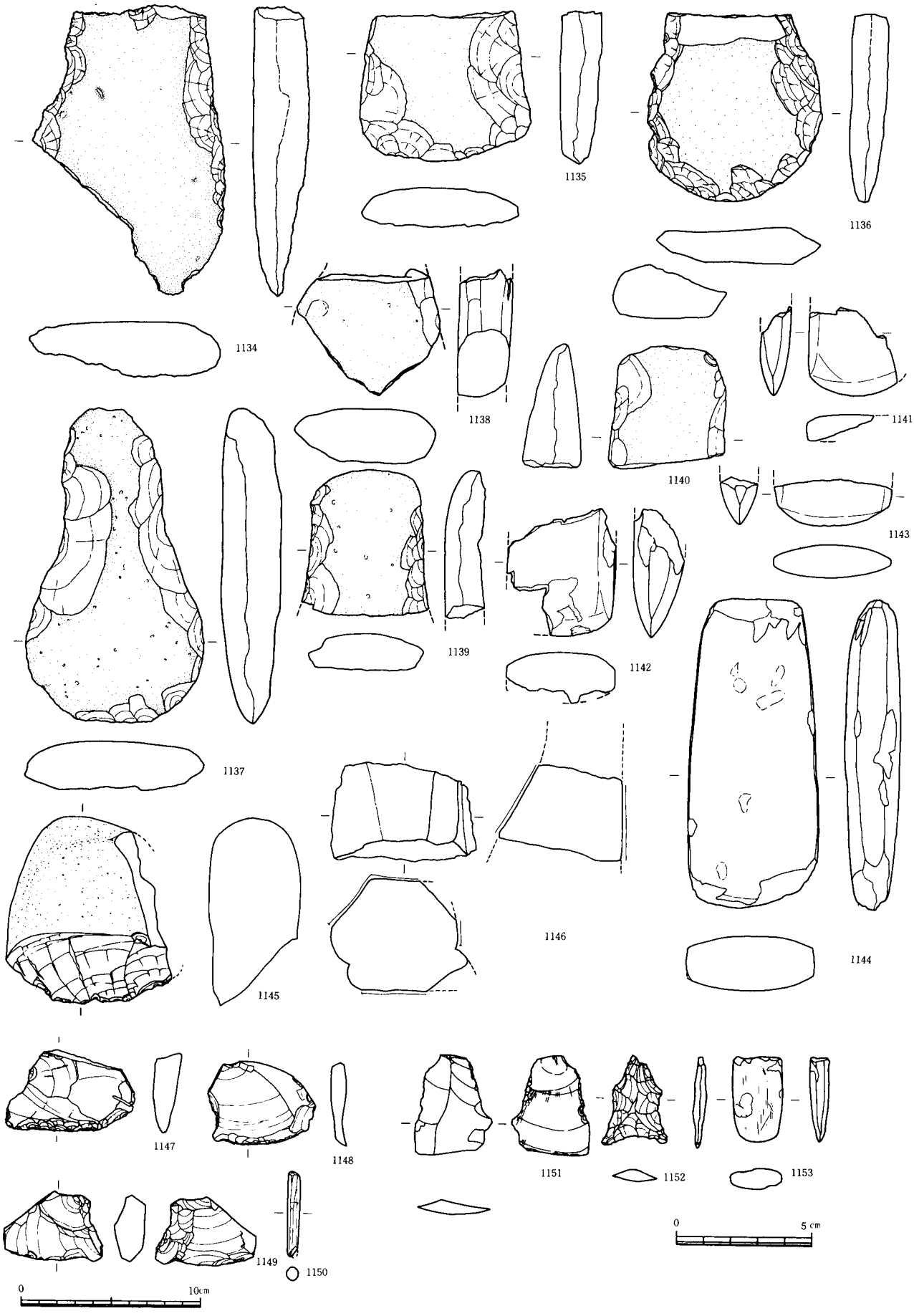


第131図　縄文土器(1/3)

第２表　縄文土器観察表

No.	出土地点	分類	法量(cm)	胎土 砂粒	胎土 赤色粒	胎土 その他	色調他	形態	文様、調整など
1082 1083	西区	A	―――	L3 M3 S3	L1 M1	雲母 炭化物	赤褐色 二次焼	口縁がやや外反する深鉢。口縁端部はくの字に外反。	口縁端部は隆線で竹管内面による調整。蓮花文は刻印蓮花文。横位半隆起線文。内面は横位ナデ。
1084	西区 表採	A	―――	M1 S3	M1	雲母	淡灰色	円筒形の胴？	縄文地文、Ｂ字状の半隆起線文＋三角形彫去文。截断竹管によるキザミ。内面は横位ナデ。
1085	西区	A	口径21.6 頸部径16.8	M1 S1		ひびわれ	褐色 二次焼	キャリパー状口縁の深鉢。口縁端部は内面に突出しくの字に外反。	頂部が２山になる山形突起。口縁端部は外反屈曲部に縄文原体(RL)押圧。以下2.5cm幅で回転施文。山形突起から縦位に２条縄文原体押圧。頸部にも縄文原体押圧。内面は横位ナデ。
1086	不明	B		L2 M2			淡灰色 二次焼	口縁がくの字に外反する深鉢。	径４㎜程度の中空棒状具(a)とそれを裁断したもの(b)を施文具として用いる。口唇部に沈線＋ａによる刺突。頸部にはｂの内側を用いた沈線。内面は横方向のナデ。
1087	西区	D		L1 M2			淡黄色	口縁の直立する深鉢。	４条の横位沈線。上から２条目に刺突。
1088	Ｚ88	C		M3	S1	炭化物	淡灰色	頸部が外反し、口縁部がくの字に立ち上がる深鉢。	口縁部に３条の横位平行沈線とそれを切る三角形の彫去。内面は横位のナデ。
1089	Ｚ88	C		M3 S1	M1		〃	〃	口縁部は上位に無文部を持ち、下位に４条の横位平行沈線を引く。内面はナデ。
1090	不明	C		M3 S1	M1		〃	頸部が外反する深鉢。	４条の横位平行沈線とそれを切る縦位短沈線。他の部分は無文。内面はナデ。
1091	Ｚ89	C		M3 S1			〃	〃	４条の横平行沈線。他の部分は無文。内面はナデ。
1092	不明	D？		M2			橙色	口縁部が内湾ぎみに立ち上がる深鉢。	外面は横位の条痕。内面はナデ。
1093	西区	D		M2			黄灰色	〃	外面は斜位の条痕。内面は強いナデ。土師器？
1094	Ｊ92	D		L1 M3 S3		海綿骨針	淡灰色	〃	口縁端部に横位の１条の沈線とこれを切る縦位短沈線を１cm間隔で引く。
1095	西区	D		M3 S3	M1		〃	〃	外面は横位の条痕。内面はナデ。
1096	西区 溝	D	口径35.0	L1 M3 S3	M1		淡黄色	〃	〃
1097	西区	D	口径29.5	L2 M1	M1		黄色	〃	口縁端部ナデ。外面は縦位の条痕。内部は横位の条痕。
1098	L-91	D	口径22.5	L1 M2			褐色	頸部でゆるく外反し、内湾ぎみに立ち上がる深鉢。	小波状口縁。外面は横方向の条痕。内面はミガキ。
1099	西区 溝	D		L1		雲母	淡灰色	口縁部が外反する深鉢。	口唇部貝殻刺突。外面は羽状縄文。内面は横位の条痕。
1100	西区	D		L1 M2	M1		橙色	口縁部がやや外反する深鉢。	小波状口縁。口縁端部に断面四角形で底面に筋の残る横位沈線２条とその間に押し引き風の刺突。以下横位の条痕。内面は横位の条痕。
1101 1102	Ｊ92	C		M1 S2		海綿骨針	橙色	深鉢	横方向の条痕（あるいは沈線）と三角形の刺突。内面はナデ。
1103 1104	Ｙ88	D		L1 M2			褐色	胴部が張り、口縁部が直立ぎみの鉢。	頸部に無文帯と両側にＣ字状の連続刺突。口縁部は縦位、胴部は斜位の条痕。内面はナデ。
1105	Ｊ93	E	底径7.8	L2 M2			橙灰色	底部からラッパ状に開く深鉢。	縦位の縄文(RL)。内面はナデ。
1106	西区	E	底部10.5	L2 M1			橙色	円筒形胴部の深鉢。	斜位の縄文(RL)。内面はナデ。
1107	西区 溝	A	底部9.5	M1 S1			褐色 二次	〃	無文。1085と同一個体。内面はナデ。
1108	不明		底径4.5	L2 M1			褐色	台付鉢？	脚部は縦位の平行沈線。内面はナデ。

※土器の胎土は北野（1987）の分類に準ずる。



第132図　石器(1)(1/3・1/2)

第133図　石器(2)(1/3)

第3表　石器計測表

No.	出土地点	品種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	備考
1134	H102	打製石斧	(16.0)	(10.7)	3.0	(552)	火山礫凝灰岩	
1135	O-90	〃	(8.5)	(9.7)	2.2	(230)	〃	
1136	E-98	〃	(10.4)	(9.6)	2.5	(280)	不明	
1137	西区井戸	〃	17.4	9.8	2.7	614	火山礫凝灰岩	
1138	J101	〃	(8.1)	(6.8)	3.0	(208)	〃	
1139	C-97	〃	(9.0)	(7.1)	2.1	(178)	〃？	
1140	8住	〃	(6.8)	(6.5)	3.1	(170)	安山岩	
1141	G100	磨製石斧	(5.0)	(5.0)	1.5	(44)	片麻岩？	
1142	X87	〃	(7.2)	6.0	2.8	(114)	〃	
1143	J93	〃	(2.6)	6.5	1.9	(38)	砂岩	
1144	F102	〃	12.8	7.1	3.0	682	片麻岩？	
1145	Z87	礫器	10.4	(9.2)	5.1	(608)	不明	
1146	3住	砥石	(5.3)	(8.2)	6.0	(344)	砂岩	
1147	不明	削器	4.5	7.1	1.4	48.5	輝石安山岩	
1148	J92	〃	4.6	6.0	0.8	21.6	流紋岩	
1149	Y87	石核？	3.8	5.5	1.7	31.	凝灰岩	旧石器か？
1150	F106	玉未整品	(4.8)	0.7	0.8	3.6	不明	
1151	不明	剥片	(3.7)	2.9	0.5	(5.2)	凝灰岩	旧石器
1152	28住	石鏃	3.3	2.5	0.5	2.5	輝石安山岩	
1153	不明	小形磨製石斧	(3.1)	1.9	0.8	7.1	凝灰岩	
1154	6住	敲石類	9.8	9.0	5.1	660	花崗岩	凹み＋敲打痕
1155	28住	〃	8.0	8.0	5.5	406	〃	〃
1156	C-98	〃	9.8	6.7	4.3	440	砂岩	磨痕
1157	5住	〃	11.1	9.0	6.4	954	花崗岩	磨痕＋敲打痕
1158	Z87	〃	12.1	7.8	5.2	644	〃	〃
1159	E102	〃	10.6	8.2	4.8	694	〃	〃
1160	西区井戸	〃	10.5	8.1	6.2	760	〃	〃
1161	西区	〃	11.7	7.0	3.7	460	砂岩	〃
1162	9住	〃	9.1	9.2	5.1	530	泥岩？	割れ面エッジに細かな剥離痕が連続する。
1163	2住	〃	12.1	4.8	3.5	288	緑色凝灰岩	棒状石の先端部に磨面を持つ。磨面には赤色顔料が付着。乳棒の様な使用が考えられる。

剥離痕より、縦長剥片が連続して剥離されていることを伺い得る。腹面右側縁には細い剥離痕が見られる。出土地点は不明であるが、旧石器時代の物と考えられる。石核は、やや厚みのある剥片を素材としている。剥片の背面（図左）に残された剥離面を、調整打面と見るか、作業面と見るかによって、剥片剥離技術は異なるが、いずれにせよ剥がされた剥片は、小形の横長基調のものと考えられる。素材となった剥片は、打面転位を繰り返し行う石核から剥離されたものと考えられる。出土位置は、縄文土器の分布と重なるものの、この石核から剥がされた剥片を素材とした石器はなく、旧石器時代のものか、縄文時代のものか判断出来ない。

敲石類（第133図）　磨痕、敲打痕、凹みを持つものを一括して敲石類とした。1154、1155は凹みを持つものである。1154は表面に1個、裏面に2個の凹みを持つもので、側縁部には敲打痕を全周させている。1155は、断面が三角形を呈する礫の底面部分に浅い凹みを持つものである。いずれの凹みも敲打により形成されたものと考えられる。

1156は、礫の分割面に磨面を持つものである。磨面は、剥離面の凸凹がとれ滑らかになっている。

1157～1161は、磨痕、敲打痕を共に持つものである。砂岩と花崗岩が用いられている。磨痕、敲打痕は、面を持って形成されており、敲打面が磨面に変化していったものと考えられる。

1162は、分割された礫のエッジに細かな剥離面が連続するもので、この剥離面が敲打によって形成されたものと考え、敲石類に含めたが、類例を捜し得ず、良くわからない。

1163は、棒状礫の先端部に磨面を持つもので、磨面には、赤色顔料と思われるものが付着している。顔料を磨り潰す、乳棒状の使用が想定出来る。

敲石類は、多くが古墳時代の住居址から出土しており、栃木県花の木町遺跡（後藤他1983）例などから、ほとんどがこの時期のものと思われる。

参 考 文 献

北野博司他　1987　『宿東山遺跡　一般国道159号押水バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県埋蔵文化財センター

後藤信祐　1983　「石器について」『花の木町遺跡栃木県子ども総合化学館（仮称）建設に伴う発掘調査報告』　栃木県教育委員会㈶栃木県文化振興事業団

高堀勝喜編　1983　『野々市町御経塚遺跡』　野々市町教育委員会

田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店

戸澗幹夫　1981　『高堂遺跡―第１次・第２次発掘調査概要―』　石川県立埋蔵文化財センター

中村　浩　1981　『和泉陶邑窯の研究』　柏書店

西井龍儀　1972　「先土器時代」『富山県史考古編』　富山県

花塚信雄　1984　「須恵器について」『金沢市畝田・寺中遺跡』　金沢市教育委員会　金沢市埋蔵文化財調査委員会　名鉄北陸開発㈱

久田正弘　1986　「第20群土器　八日市新保式期」「第23群土器　下野式期」『石川県能都町真脇遺跡』　能都町教育委員会　真脇遺跡発掘調査団

南　久和　1976　「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『石川考古学研究会々誌』第19号　石川考古学研究会

山本直人　1986　「石器」『近岡遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

吉岡康暢　1983　「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会　石川考古学研究会

第６節　古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構と遺物

１　中地区の掘立柱建物（第134図・図版29）

中地区の中央部分、第二平坦面の北部にあたる所で検出したものである。地山の傾斜がほとんど見られない位置で、全調査区の中でも最も安定した立地条件を選んでいると言える。検出グリッドはＥ96～98、Ｆ96～98、Ｇ96・97で比較的広い範囲に渡っているが、古墳時代住居址との重複は確認は出来なかった。南東方向には第22号住居址が接していて、約５ｍの位置には第７号住居址が、西方向約３ｍには第５号住居址が、南西方向には約９ｍの距離をおいて第６号住居址がそれぞれ立地している。

桁行方向を南北に置いたもので、13個の柱穴が確認され全掘したものと考えている。桁行方向は現磁北から西側に17度振れている。南側の空地には黒色土を下にした茶褐色の地山土が盛り上がったような状況で検出されているが、柱穴を掘り下げた際の残土を置いたものと推定される。南東側に位置する5個の柱穴は、黒色腐蝕土の堆積している地区で検出したものである。桁行４間、梁行２間の建物で、中央に梁行柱１本が付加されている。桁行は東辺で見ると、北側からの柱間で200cm、180cm、180cm、200cm（合計760cm）の距離を測るが、西側では180cm、180cm、180cm、200cm（合計740cm）と短くなっている。梁行は北側では270cmの等間隔であるが、南側では300cm、240cmを測りやや異なっている。中央の梁行は270cmの等間隔である。柱穴の掘り方は平面方形プランを呈するものが多く、径50～60cm、深さ20～60cmを測った。柱穴の覆土からの遺物は少ないものの、古墳時代の土器の他に内面黒色土器が出土していて、掘立柱建物の所属時期が推定された。

中地区では第１号掘立柱建物の他に、所属時期がはっきりしないものが第６号掘立柱建物の西側で発見されているが、不注意から全形はとらえられなかった。Ｈ100グリッドに位置しているもので、第10図の断面図に現れている。表土層近くから約１ｍ近くにまで掘り込まれているもので、近世に所産する可能性も考えられる。

２　古墳時代後期、奈良・平安時代の遺物（第135図～第137図）

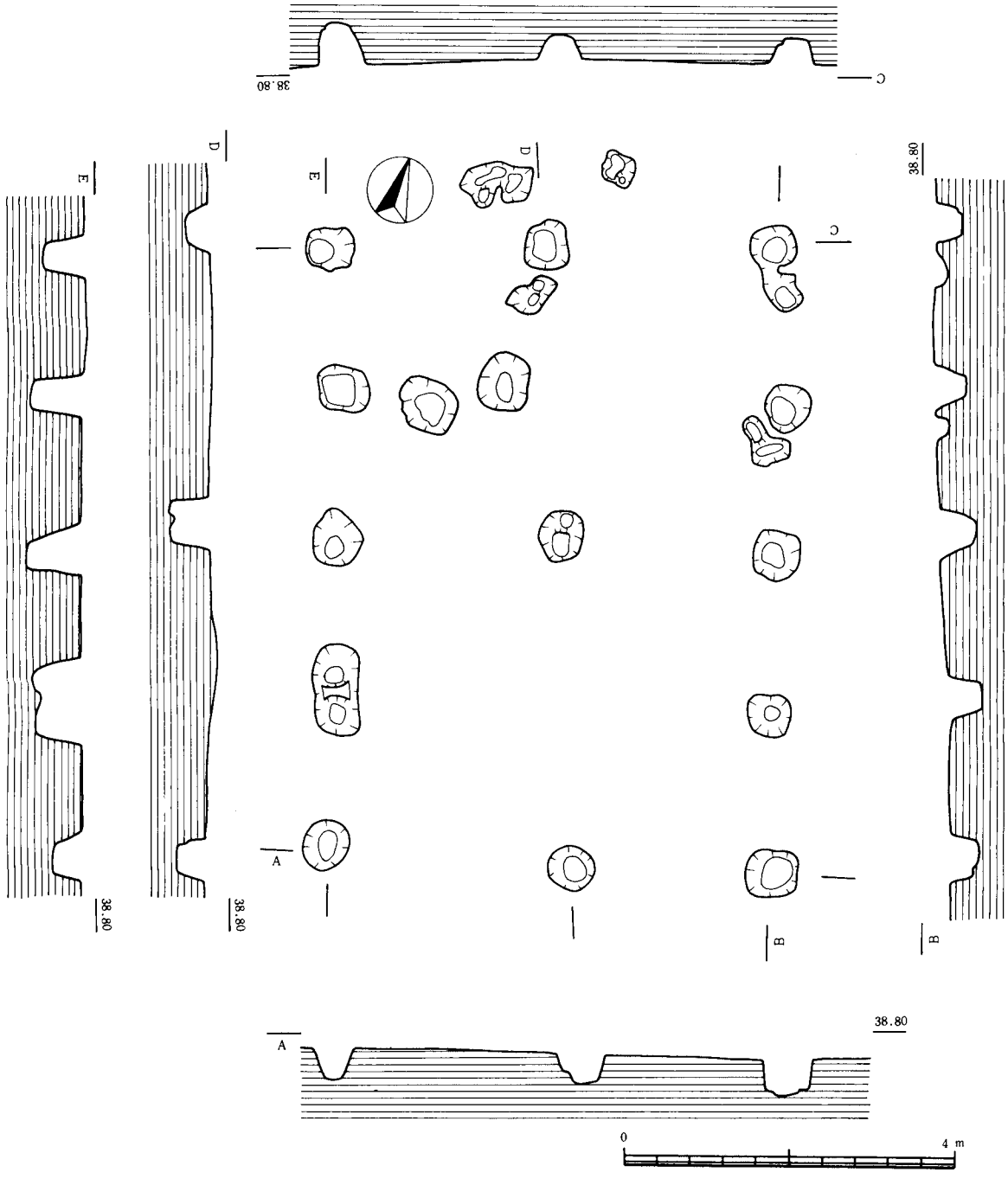
古墳時代後期、奈良・平安時代の遺物は少なく、また、小破片の物が殆どで、完形品は皆無である。時期別にＡ～Ｄ群に分類した。

Ａ群（第135図1109、第137図1125）　Ａ群は２個体のみ出土している。いずれも７号住の周辺から出土している。1109の坏蓋は個体の約⅓を欠損している。天井部のヘラ削り範囲もせまく、稜も短いことから、田辺編年のＴＫ47型式、あるいはＭＴ15型式にあてはまるものと考えられる。1125の甕は、数十点の破片から図上復元したものである。1109と同期のものと思われる。

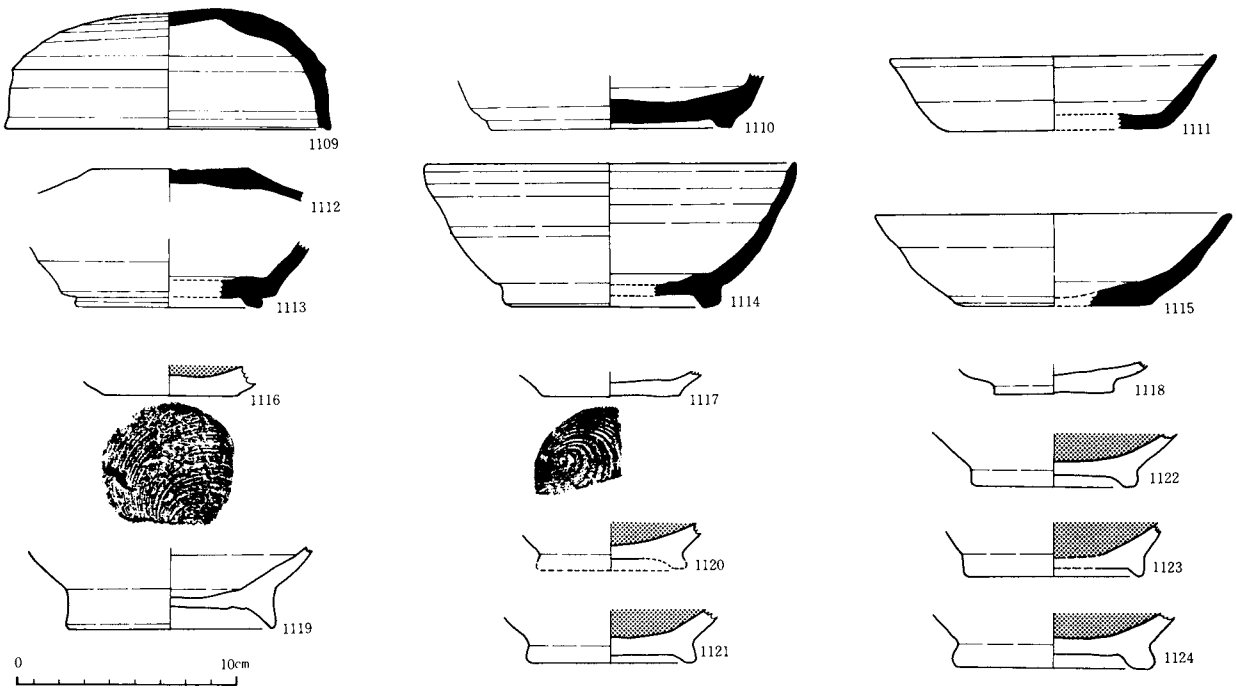
Ｂ群（第135図1110、第137図1127）　Ｂ群は２個体を図示し得た。出土地点はＧ～Ｊ-98～100グリッドにまとまる。1110は底部のみ、1127は個体の上位約½が遺存している。1127の甕は、外面は花塚分類（花塚1984）の平行糸文ａ類の叩き目が、内面は同心円文ｂ類の叩き目が見られる。内面はわずかに磨り消されていると思われる。Ｂ群は８世紀の前半ぐらいに位置づけられるものと考えられる。

Ｃ群（第135図1111、第136図1126）　Ｃ群も２個体を図示した。分布はまとまりがなく、Ｋ-98グリッドと、Ｄ・Ｅ-98グリッドから出土している。1126の甕は、外面が花塚分類の平行線文ｅ類、内面は同心円文ｃ類が見られる。Ｃ群に含めたが、口縁部を欠くため良くわかならい。1111の無台坏は約⅙の遺存である。Ｃ群は奈良時代末～平安時代初頭ぐらいに位置づけられるものと思われる。なお、図示しなかったが同群に含められる土師器甕の破片がＦ-99グリッドから出土している。

Ｄ群（第135図1112～1124、第137図1128～1133）　Ｄ群は19個体を図示した。他群に比べ出土量は多いものの、やはり小破片である。分布は、ＳＢ１周辺と、西区東側谷部分にまとまっており、1124の土師器椀は、ＳＢ１のＰ-11から出土している。1118は底部に粘土板を貼りつけた柱状の高台を作り出しており、耳皿の可能性が高い。図示し得たものは土師器、須恵器とも供膳形態の物がほとんどであるが、他に土師器甕の破片が数点出土している。Ｄ群は10世紀後半ぐらいに位置づけられるものと考える。



第134図　第１号掘立柱建物址(1/80)

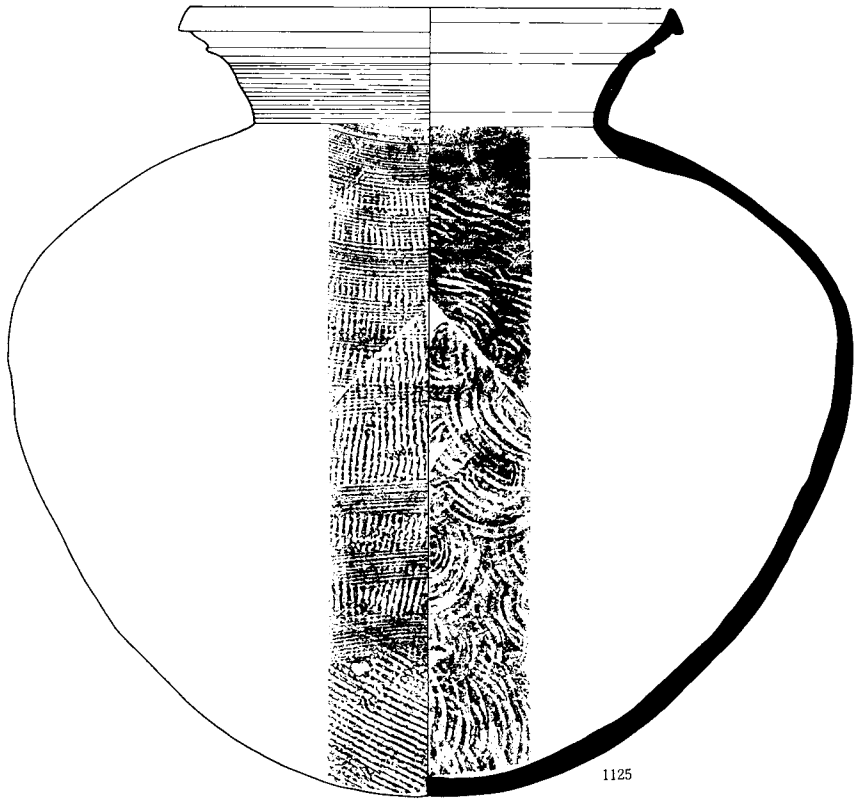


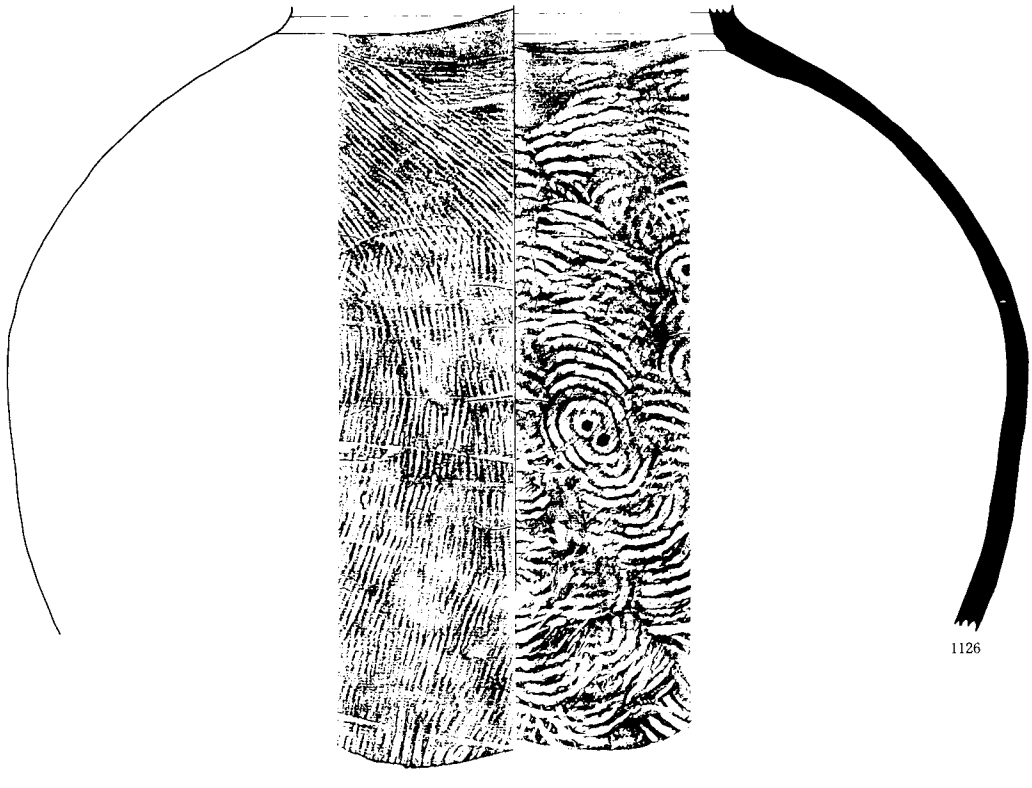
第135図　須恵器(1)(1/3)

第4表　須恵器・土師器観察表

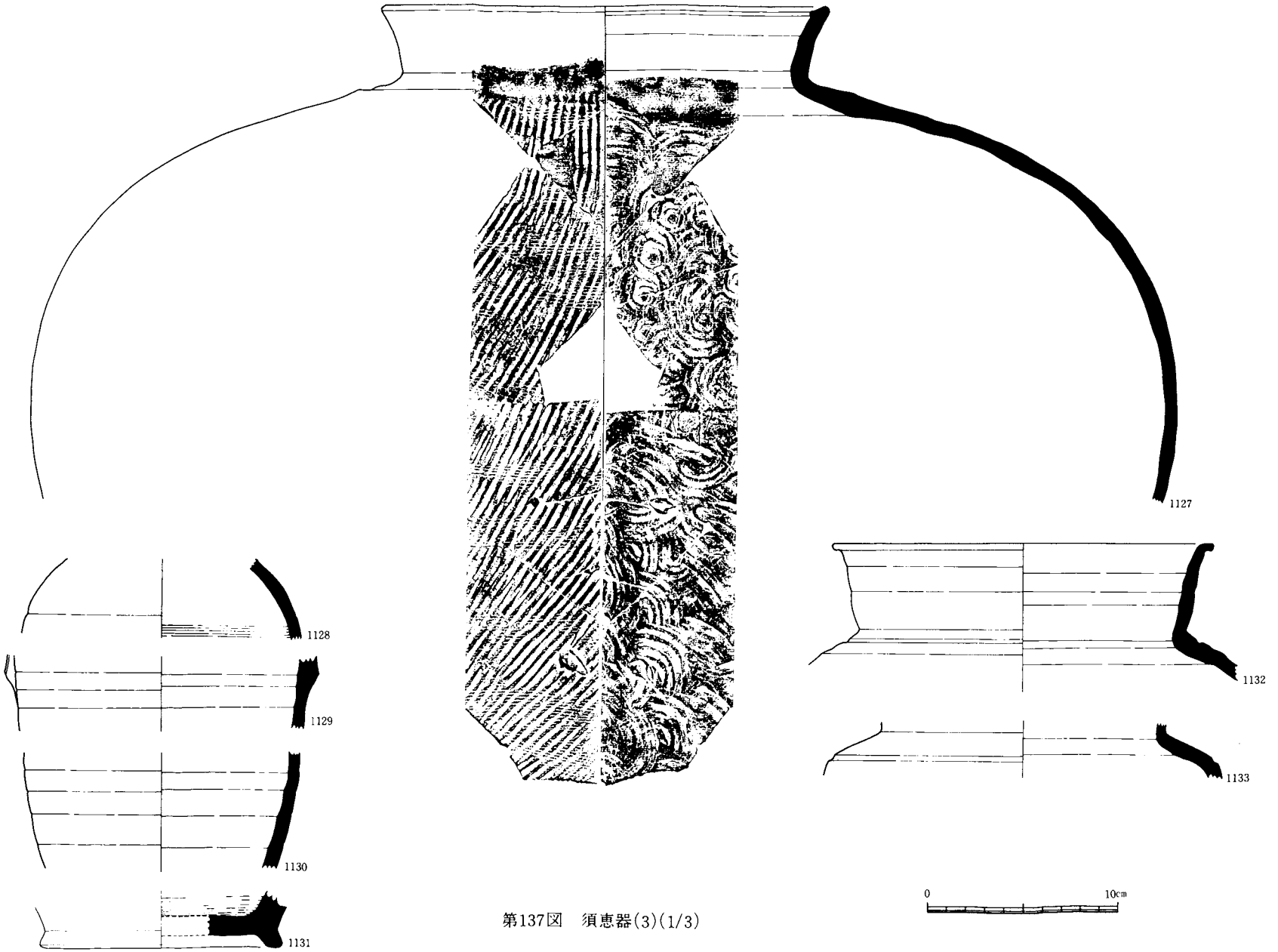
須恵器

No.	出土地点	分類	法量(cm)	胎土 砂粒	胎土 赤色粒	胎土 その他	色調	構成	器種	調整など
1109	C98 D98	A	口径12.7 器高 4.7	L1			暗青灰色	良	坏蓋	天井部外面はヘラケズリ（反時計回り）。他は回転ナデ。
1110	G98	B	高台径 9.8	L2 M2			暗灰色	〃	有台坏	外底面はヘラ切り、ナデ消し。内底面は不定方向のナデ。他は回転ナデ。
1111	K98	C	口径12.8 底径 8.8 器高 2.9	M1			灰白色	不良	無台杯	底底面はヘラ切り未調整。他は回転ナデ。
1112	Z89	D	天井部径 6.0	M1			灰色	良	坏蓋？	天井部外面はヘラ切り未調整。他は回転ナデ。
1113	I 100	〃	高台径 7.2	M1			暗灰色	〃	有台坏	内外面とも回転ナデ。
114	B98	〃	口径 14.6 高台径 8.8 器高 5.7	L1			〃	並	有台椀	〃
1115	E99	〃	口径13.8 底径 7.8 器高 3.6	L1			黄白色	不良	無台坏	〃
1125	C98 B 100	A	口径 19.0 頸部径14.0 胴部径33.4 器高 31.0	L1 M2 S2			灰色	並	甕	外面胴部上位は、縦位の平行線文叩き（a類）、後カキ目、胴部下位は斜位の平行線文叩きを2度叩きし格子状に。底部にはすれ痕あり。内面は、同心円文叩き（a類）
1126	D98 E98	C？	頸部径17.4 胴部径40.0	M2			暗赤色	良	〃	外面胴部上位は斜位の平行線文叩き（e類）。胴部中下位は縦位の平行線文叩き（e類）。内面は同心円文叩き（c類）
1127	J 100	B	口径 23.0 頸部径21.2 胴部径60.8	M1			灰色	〃	〃	外面胴部は、縦位から斜位の平行線文叩き（a類）後カキ目。内面は同心円文叩き（B類）、後わずかに磨り消し。
1128	不明	D		M1			〃	〃	双耳瓶	外面は回転ナデ、内面はカキ目。
1129	Y87	〃		M1			灰褐色	〃	〃	内外面とも回転ナデ。
1130	Y88	〃		M1			〃	〃	〃	〃
1131	Z89	〃	高台径12.7	M1			灰色	不良	〃？	外面は回転ナデ、内面はカキ目。
1132	X87	〃	口径 19.8 頸部径17.0	M1			〃	良	直口壺？	内外面とも回転ナデ、頸部直下に沈線
1133	B98	〃		M3			灰褐色	〃	有衝壺	内外面とも回転ナデ、肩部に沈線。

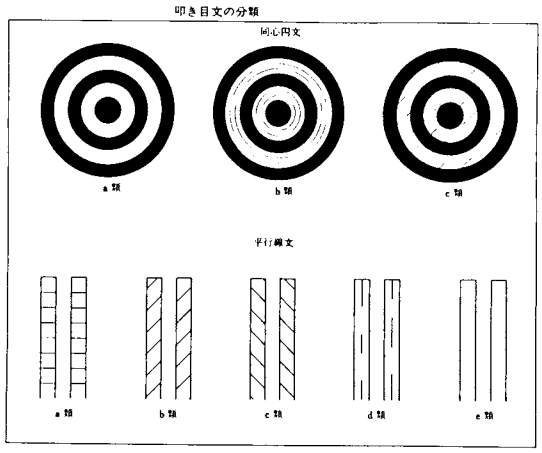




第136図　須恵器(2)(1/3)



第137図　須恵器(3)(1/3)



同心円文a類……「木目」のみられないもの
同心円文b類……年輪状の「木目」のみられるもの
同心円文c類……柾目状の「木目」のみられるもの
平行線文a類……「木目」が彫り込みに対し直交するもの
平行線文b類……「木目」が右上がりに斜交するもの
平行線文c類……「木目」が左上がりに斜交するもの

第138図　叩き目文の分類(花塚1984を転載、一部改変)

土師器

1116	F98	D	底径 5.2	M1	M1		橙 褐 色	良	椀　?	内面はミガキ。黒色処理。外底面糸切り。
1117	Z88	〃	底径 5.5	M1			灰 褐 色	〃	〃　?	内面はナデ。外底面糸切り。
1118	G98	〃	底径 4.7 (長径)	M1			橙 褐 色	〃	耳 皿 ?	内面はナデ。外底面もナデ。底部は楕円形。底面は糸切りなし。
1119	X88	〃	高台径 8.0	L1 M1			橙 灰 色	〃	有 台 椀	底面糸切り
1120	F98	〃		L1			黄 灰 色	〃	〃	内面黒色処理。
1121	〃	〃	高台径 6.8			海綿 骨針	黄 褐 色	〃	〃	〃
1122	G98	〃	高台径 6.5	M1	M1		橙 褐 色	〃	〃	〃
1123	F98	〃	高台径 7.2	M1			橙　色	〃	〃	〃
1123	SB1 P11	〃	高台径 8.0	M1	M2		橙 灰 色	〃	〃	〃

※土器の胎土は北野（1987）に準ずる。

第７節　中世の遺構と遺物

１　西地区の掘立柱建物（第139・140図・図版２・６）

西地区の平坦面の中央部分を占有して構築されていたものである。東西方向の尾根状の平坦面に桁行を置くもので、北側の谷地形に整地残土を盛っているのが古墳時代の遺物を覆うような地山土の在り方から確認されている。本遺跡の調査は西地区から開始しているもので、春の開始当時では調査区は南北方向の幅が約15m程度であった。その調査幅のなかで、２基の地下式坑と井戸、埋谷の大量の古墳時代の土器および大型の柱穴が１列発見されていて、古墳時代の住居址と中世の掘立柱建物が南側に存在しているものと推定していた。夏以降に道路の線形が変更されて、南側部分を拡張して削平することとなったために、本次調査の最終段階で南北方向約20mの幅で、調査区を拡張して検出作業を行った。調査にかかる前の状態は畑地あるいは山林となっていたもので、表土層は約10～20cm程度の浅いもので、それが地山面を覆っている程度で遺物包含層等は顕著な形では形成されてはいなかった。

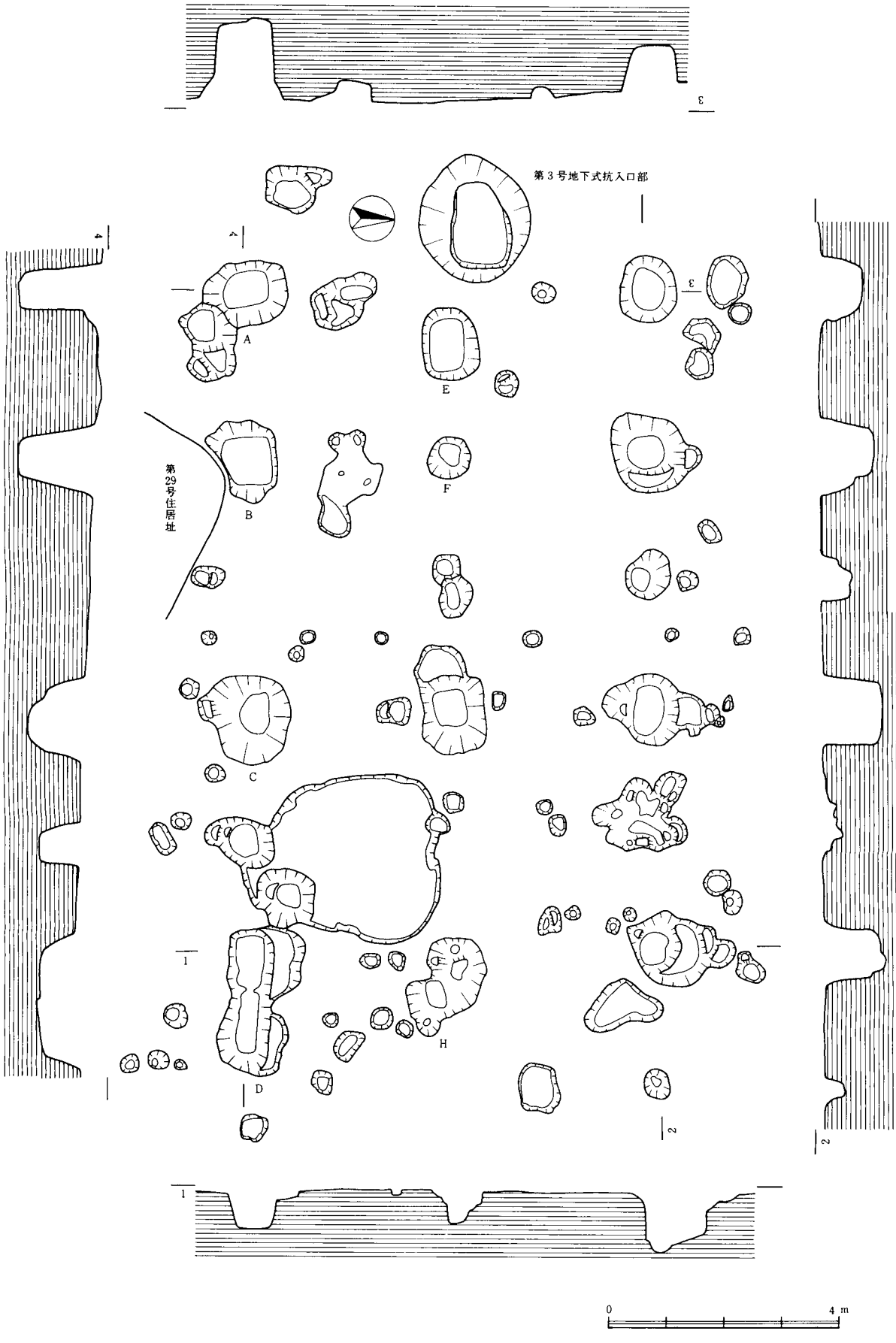
建物の性格を反映した形で梁行、桁行が設計されるものであるが、本掘立柱建物の場合それが幾分か複雑な状況を示していると指摘することができ、また、立て替えについても考慮する必要がありそうだ。単純に全体を見ると桁行５間（11.50m）、梁行２間（7.20m）のものである。この建物を最も特徴づけているのは、西側に立地している第３号地下式坑の縦穴部である。掘り方はほとんど建物の敷地に食い込んだ形となっていて、梁行の中柱が通常の位置から約１m以上も建物の内側に移動した形となっている。そして、桁行の心々間の距離が西側から290cm、200cm、250cm、200cm、210cmというふうにまったく不揃いになっている点が注意される。なお、梁行の心々間の距離は360cmと揃えられている。また、大型の深い柱穴とやや小降りの浅いものが混在しているのを分離して考えると、２間×３間の建物としてとらえられ、小ピットは板張りの床を支えるものとして見ることができる。柱穴の覆土は黒褐色土が少なく長く開口していたものではないことが推定できるものの、柱の痕跡を断面に明らかに示すものはなく、柱穴Ｄ、Ｃなどで辛うじて推定させるものがあるに止どまる。覆土内からは加賀古陶や土師質土器の断片が少量得られた他用途不明の石製品１点が出土している。

柱穴の掘り方は方形ないしは楕円形を呈するもので、段をつけているものは限られている。東桁行の柱穴Ｂは第29号住居址を切り込んで掘られているもので、住居址の部分を残して掘り下げた。同じ桁行の東端の柱穴Ｄは方形プランのもの２個が切り合うもので、対応する柱穴を特定出来なかったことから、掘立柱建物の改築を想定させるものの、他の柱穴では明確に把握はされていない。大きい柱穴は径が100～150cm、深さ70～140cmを測る。小ピットは東側での検出例が不整形な在り方を示し、比較的浅い事が注意される。

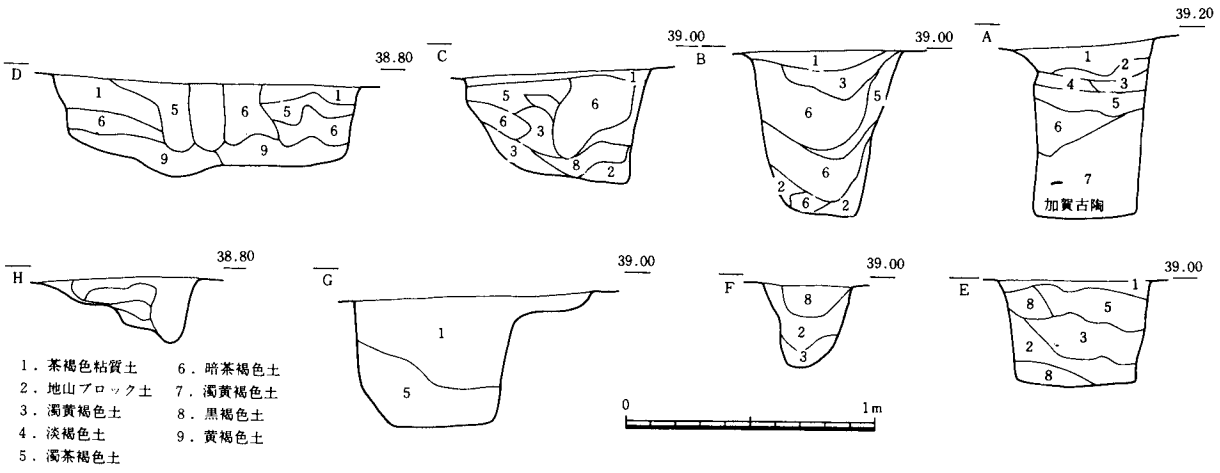
西地区の平坦面の掘立柱建物は、４基の地下式坑と井戸をもって一定程度の完結を見るものと考えられる。地下式坑の性格が現在的に把握しきれていないことが、遺構群の位置づけを阻んでいるものであるが、周辺部での遺物の在り方を考慮すれば。日常生活に直接係わる建物ではないと想定して大過ないものと思う。

２　第１号地下式坑（第141図・図版７）

西地区の中央部分、埋谷に臨んで立地しているもので、検出グリッドはＡ78・Ｚ78～79である。掘立柱建物からは450cm、井戸からは約300cm、第4号地下式坑からは約800cm、埋谷を挟んだ西側約12mの位置には第２号地下式坑が立地している。入口部は北の谷側においていて、平面プラン楕円形を呈している。長径280cm、短径190cm、深さは検出面からで220cmを計測する。覆土の状況は地山ブロック土がいずれの土層にも混入していて、その混入の多少によって分層される。茶褐色土、暗褐色土、黒褐色土、淡茶褐色土の色調で分けられ、玄室に向いた壁際では地山ブロック土層が壁に沿って縦位置に近い状況で検出されている。覆土の状態は開口していて自然に堆積したものとは考え難いものがあると言える。ちなみに、崩落土で埋まっていた玄室の上層部分は層が入り組んだ状態となっていて自然堆積ではないと考えた方が素直といえ、玄室全体を埋め尽くす土量は玄室の上に塚としてあつたものと想定される。縦穴の床面は平坦にととのえられ、幅70cmの長方形を呈して、玄室に24度の角



第139図　中世掘立柱建物跡(1/100)



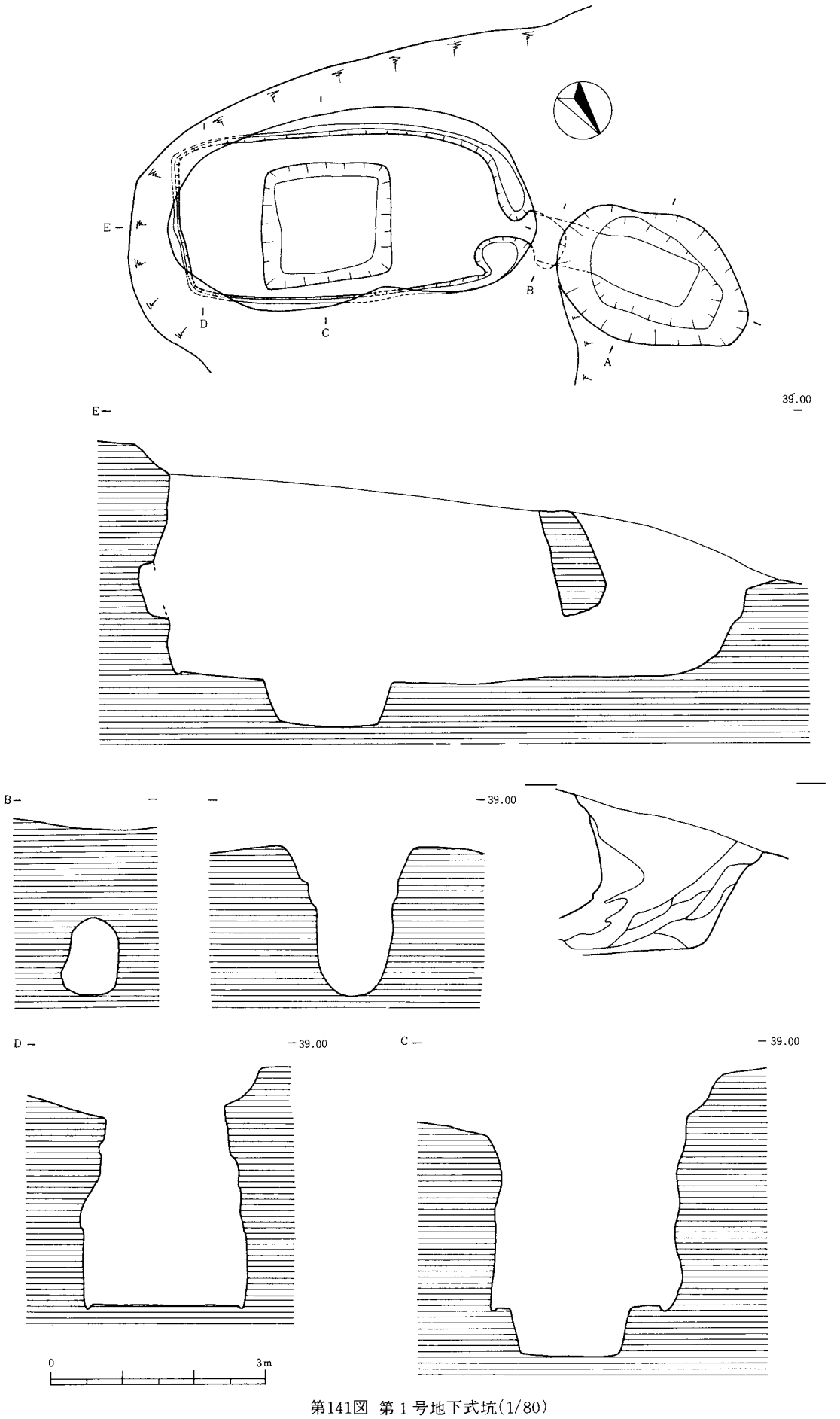
第140図　中世掘立柱柱穴断面図(1/30)

度を付けて接続する。玄室の主軸は北55度西に置くもので、平面プラン隅円長方形を呈している。長さ500cm、幅250cmを測り、壁の直下に溝が巡らされていて、幅10～20cm、深さ８cmを測り、玄門部分はピット状に掘り込まれている。ピットの径は80cm、深さ15cmを測り、玄門を中にして向き合っている。玄室の高さは遺存している部分から、約250cm程度と推定される。玄室の中央に方形プランの土坑が掘り込まれている。180×170cm、深さ60cmの規模を測るもので、玄室の主軸と同じ方位を持っている。土坑の覆土は崩落した黄褐色の地山土の大きなブロック状をなしたもので物で埋め尽くされていて、開口していた可能性が高いと判断された。玄門部分は長さ110cm、幅80cm、高さ105cmのアーチ状をなしている。本地下式坑からの出土遺物は皆無である。

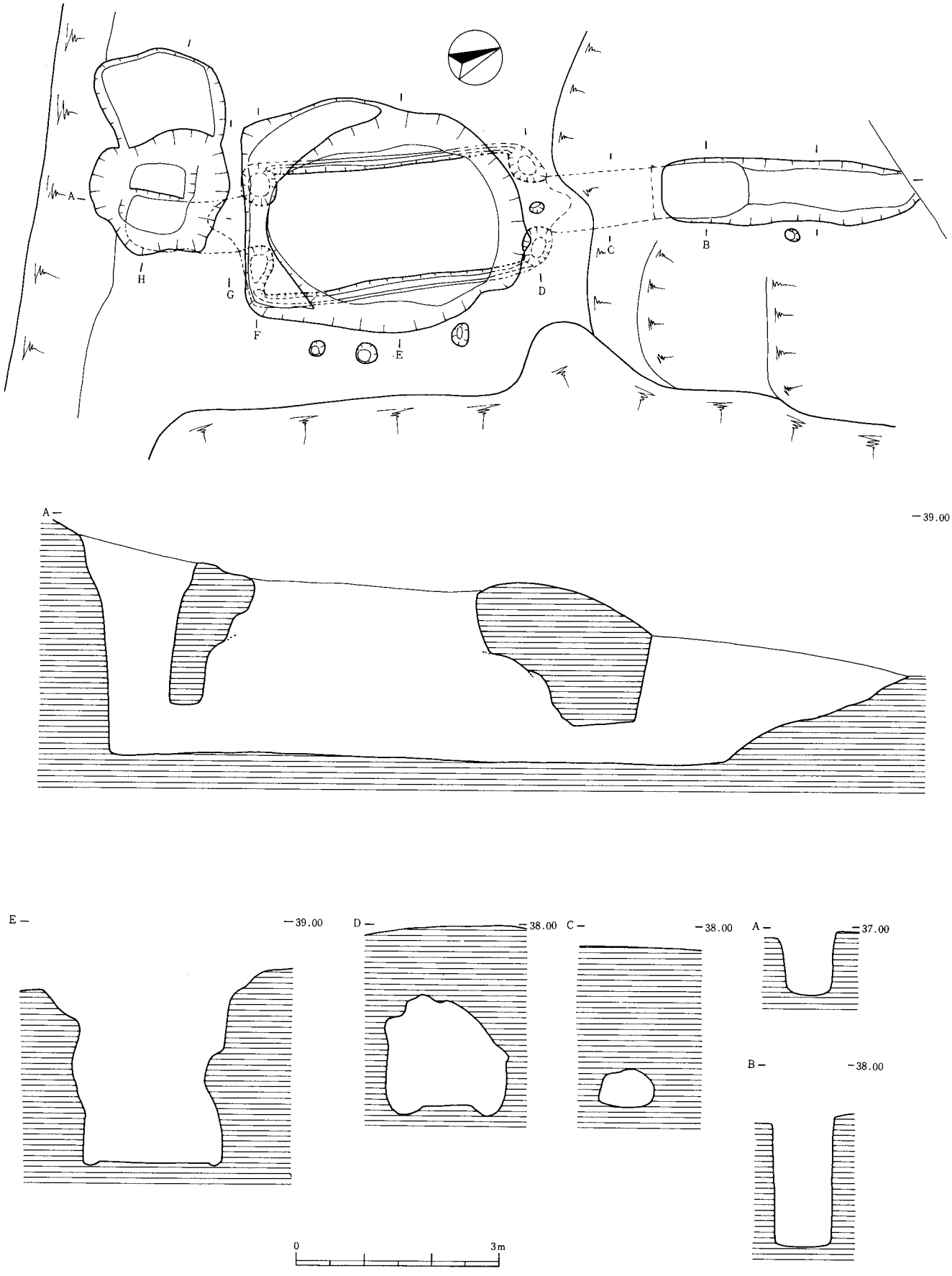
3　第２号地下式坑（第142・143図・図版８～10）

埋谷を囲む小尾根に立地している地下式坑で、掘立柱建物ののる平坦面から約50cm程度の落差をもった位置に縦穴が掘り込まれている。検出グリッドはX74・75、Y74・75、Z74・75・A75で、掘立柱建物から６m、第３号地下式坑から約７mの距離をもって北方向に位置している。玄室１室に２個の縦穴部をつける特異な形態をもっている。縦穴は平面楕円形を呈し、径200×180cm、深さ300cmを測る。掘り方の西側に平面プラン方形の段がついている。径180×150cm、深さ10cmを測る。縦穴は195cm下がったところで段が設けられ、中心軸を東方向にずらしてさらに掘り込まれている。玄室への羨道は縦穴の底面から計測して長さ170cm、幅85cmを測り、トンネル部分は幅78cm、高さ70cmを測る立面形がアーチ形を呈している。玄室の平面形は隅円長方形をなしていて、長さは450cm、中央部分の幅は200cm、奥壁部分の幅は180cm、玄門部分で210cmを測る。長軸の方位は北18度東に置いている。床面は平坦にととのえられていて、北方向に向けて若干傾斜している。壁溝は両サイドの玄門部を除いて巡らされていて、幅20cm、深さ８cmを測る。玄室の高さは遺存していた部分から推定して、180cm程度と見られる。検出面から床面間での高さは275cmを測る。壁溝に接続して玄門の前に作られるピットは径50～60cm、深さ10～15cmを計測した。なお、玄室の南側で計測すると、幅210cm、高さ160cmで、北側では幅180cm、高さ150cmである。北側の羨道部は幅80cm、高さ50cmの立面形が楕円形を呈しているもので、地下の部分の長さは140cmを測る。羨道を抜けた部分は幅80cmで、北に向けて徐々高さを増していく。

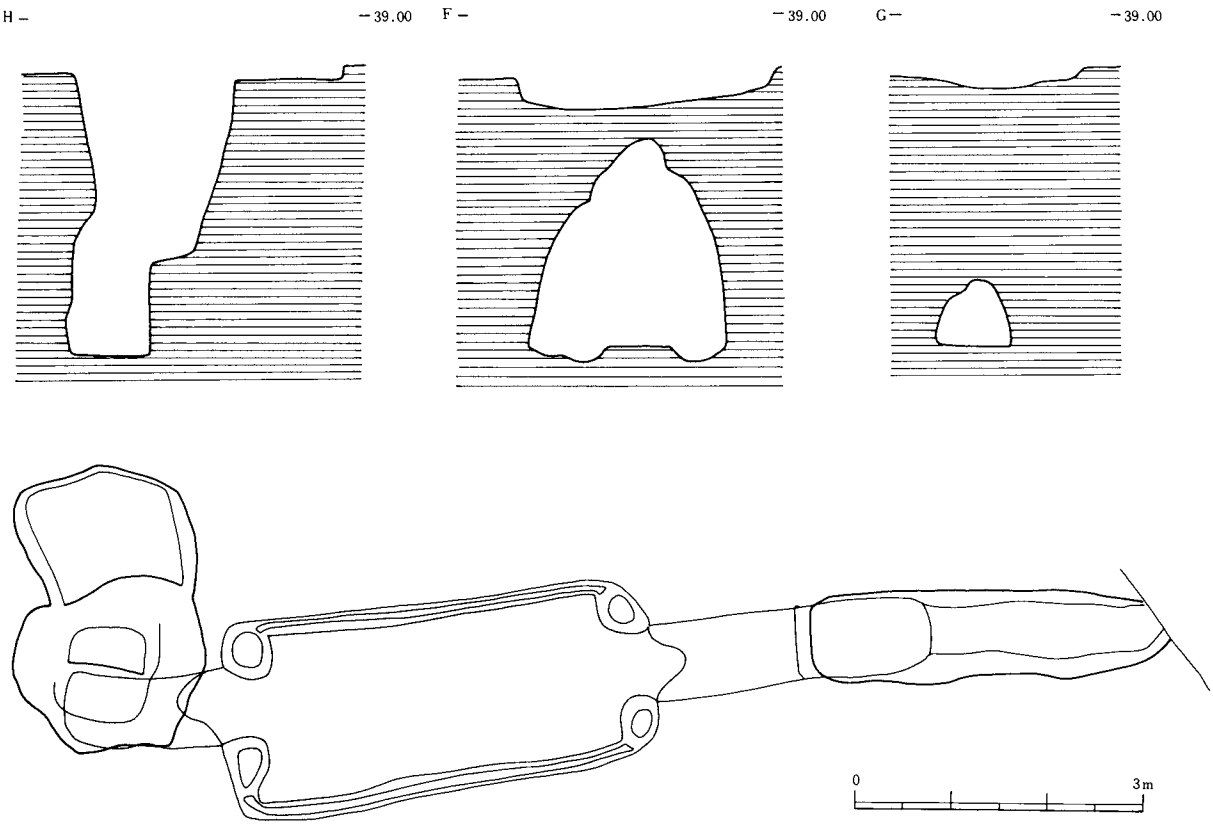
南側の縦穴部の覆土は自然堆積ではなく、暗褐色土に地山である黄褐色土が混入した形の土層が下位では斜め方向、中位では横方向、上層では縦方向という形で堆積していた。玄室部分の上層では暗褐色土や黒褐色土、茶褐色土に黄褐色土が混入した複雑な堆積を示していて、検出面から約１m下がった位置で馬の骨格が横位置になって出土した。伴出遺物は得られなかった（図版８参照）。馬の下層は地山ブロック土が若干の隙間をもって床面まで堆積していた。北側の羨道部は地山のブロックが積み重ねた状態で検出され、閉塞したものとして把握された。さらに開口部分は暗褐色土が腐蝕したような状態であったことから、自然の堆積と考えられた。地上部分では径25～35cmのピットが、玄室の周りで検出され、確定はできないものの簡単な上屋があった可能性が考えら



第141図 第1号地下式坑(1/80)



第142図 第２号地下式坑(1)(1/80)



第143図　第２号地下式坑(2)(1/80)

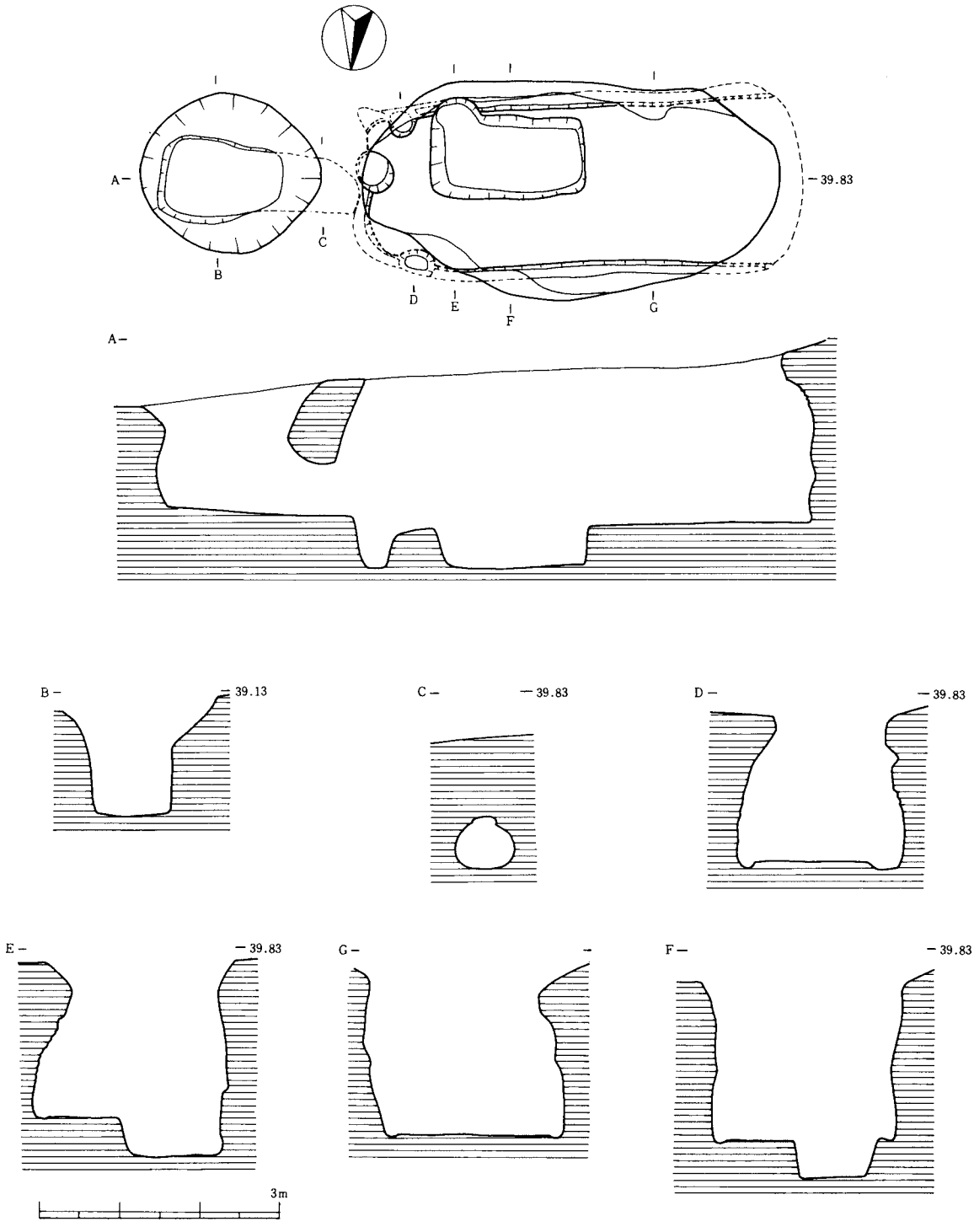
れる。

覆土からは珠洲焼の大甕の胴部片が得られた。また、縦穴部と羨道部との境界で、床面に底面を上に向けた漆塗りの椀が胎部を消失した状況で出土している。径８cmの小型のもので、黒漆の薄い膜に赤漆が混じるような状況を示している。

4　第３号地下式坑（第144図・図版10）

本地下式坑は平坦面の中央に位置しているもので、既述したごとく掘立柱建物と密接な関係をもつものである。検出グリッドはV75・76、W75・76で、西方向では畑の溝と推定されるもの以外検出した遺構はなく、南西側に狭小な谷が入り込んでくることから、完結した地形をなしていると考えて大過ないものと思う。

入り口の縦穴は平面楕円形を呈し、長軸225cm、短軸200cm、深さ150cmを測る。縦穴は途中から方形プランとなっていて、幅105cm、長さ150cmで内側を抉り込むようにして掘り下げられていく。羨道部分は幅65cm、高さ65cm、長さ約60cmの規模を測って玄室に入る。玄室は平面プラン隅円長方形を呈し、長さ550cm、幅は玄門近くで200cm、中央部分で230cm、奥壁部分で240cmを計測し、奥壁に向いて少し幅を広げていく形となっている。玄室の主軸はほぼ東西方向に近いもので北85度東に置き、奥壁は西方向に位置していることになる。壁溝は奥壁部分ではとらえられず、側壁、玄門部分で遺存していた。幅18cm、深さ８cm程のもので、断面形はU字状を呈している。玄門の中央部には径45×50cm、深さ45cmの比較的大きなピットが掘り込まれている。また、第１・２号地下式坑の玄門の位置で壁溝にかかるピットが、やや玄門から離れたところで掘り込まれている。ピットの径は30～30cm、深さ８cmを測る。これらの施設は、玄室を閉鎖する際に使われたものと推定される。縦穴と玄室の床面は段差があり、玄室側が約10cm程度低くなっている。玄室の高さは奥壁に遺存していた天井部から推定して、約180cm程度であろう。玄室の入り口に近い位置で、中軸線から南によって土坑が掘り込まれている。平面プラ

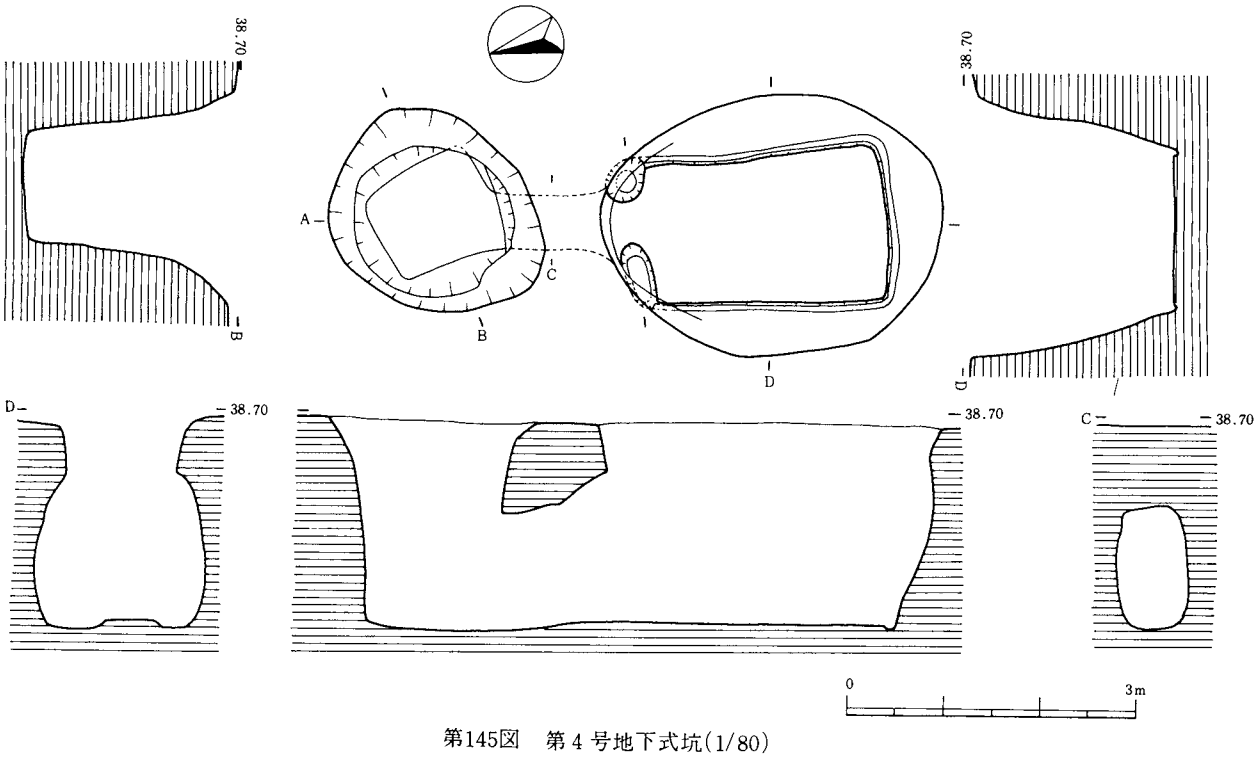


第144図　第３号地下式坑(1/80)

ンは長方形を呈するもので、東南の隅が飛び出したようになっているのは、剝落したものである。長軸195cm、短軸105cm、深さ50cmの規模を測る。覆土は地山のブロック土である。

5　第４号地下式坑（第145図・図版10）

西地区の東側の平坦面に南北方向に占地しているもので、この東側には中世の遺構は配置されてはいない。検出グリッドはX81・82、Y81・82である。掘立柱建物からは約６mの距離を置いていて、井戸からは約3.5m離れている。入り口の縦穴は平面楕円形を呈し、長径240cm、短径195cm、深さ220cmを測る。上場の掘り方は楕円形であるものの、底面は方形プランを呈するもので、長軸125cm、短軸107cmを計測する。底面の南隅から羨道がの



第145図　第４号地下式坑(1/80)

びていき、長さ約1mで玄室とつながる。羨道部は立面形が長方形を呈し、幅70cm、高さ130cmを測る。玄室は隅円長方形を呈し、長さ300cm、幅175cmで、主軸の方位は北13度西に置いている。壁溝は玄門部分を除いて巡らされていて、幅７～10cm、深さ4～6cmである。玄門部分のピットの径は左右対称ではなく、片側が長楕円形を呈しているのがさきに見た地下式坑と異なる点である。東のピットは径40×50cm、西のピットは径30×70cmで、深さはともに床面から8cmである。玄室の高さは遺存状態の良い玄門部分で、170～180cmが推定される。床面は平坦に縦穴部と玄室部はつながっていると言える。縦穴部の覆土から青磁の小片が得られている。

6　井戸

西地区の東側で検出したもので、掘立柱建物と第１・３号地下式坑の丁度中間に位置している。それぞれの遺構の落ち込み面までの距離は約３mを計測する。検出グリッドはY80である。

平面形は円形に近く、検出面では径155×175cmを測り、実際の井戸の径は120cmで、深さは８mを越えているようだ。と言うのは、地盤は安定しているもののあまりにも深いために途中で人手による発掘を中止したためである。井戸を除いた他の遺構の発掘が終了して引き上げた後に、削平工事が始まった段階で井戸の部分を重機によって一定程度掘り下げて、遺物のとり上げを行った。検出面から約70cmまでは、茶褐色土に地山ブロックの粒子が混入した状態で堆積していて、これ以下は暗褐色土で埋まっていた。５m以下の深さでは暗褐色土粘質の土に変わり、約７m以下では黒褐色粘質土が木製品を含んで堆積していた。５m以下では水分を多く含んだ土である。

遺物は検出面から150cmのところで珠洲焼片が、500cmから700cmまでの間に、磨製石斧、打製石斧、砥石、珠洲焼、加賀古陶、石鉢等が丸太を介在させて出土し、最下層から木製品が得られており、中世期の遺物の大半が井戸から出土したことになる。

7　遺物（第146～148図）

1164は口径48cmに復元できる甕で、第２・３号地下式坑の覆土、埋谷の上層部分、井戸の深さ690cmの位置、掘立柱建物柱穴から破片として出土している。最も多数の破片が得られたのは、埋谷の地区である。口縁部は横方

向に引き伸ばされているもので、上面および端面は平滑にととのえられ、頸部は深く切れ込んでいて、肩部とは段差が生じている。体部は3㎝当たり13条の叩き目が認められる細密なもので、底面近くまで横方向に丁寧に施されていて、内面は径4㎝前後の当て具の痕跡が凹凸を強くもっているのが見られる。色調は淡青灰色を呈し、胎土は微砂粒でなるような均一なもので精選されている。焼成も良好である。珠洲焼の第III期（馬緤窯期）にあたるものと推定される。1165は口径34㎝を測るもので、埋谷から出土している。口縁部が大きく肥厚するもので、接合した痕跡が頸部の外周に見られる。口唇部は外に向いて丸味をつけるように、ナデが施されている。叩き具は間隔のあいたものが使われていて、内面は当て具の痕跡が全く消去されるほどにナデ調整が行われている。色調は暗灰褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混じっている。前者の甕より下る時期で15世紀後半代が考えられる。　1166は加賀古陶の壷で、図上で復元したものである。掘立柱建物の柱穴、第1・2号地下式坑、井戸、埋谷という形で各所から出土している。口径15.2㎝、肩部の径31.4㎝、底部径11㎝、器高36㎝に復元される。短い口縁の端部が丸く折り返されて垂れ下がる形となっている。肩部は強く張り出すもので、菊花紋を太めの沈線が囲む押印が施されている。肩部の破片が少ないために、全体で幾つ押印されているかは不明である。肩部は横ナデで、胴部以下は縦方向の強いナデが入れられていて、内面は指頭圧痕が強く残る形でととのえられている。体部の内面はナデによって比較的平滑になっていて、体部、胴部と接合して成型した様子がうかがえる。肩部には自然釉が厚く掛かっていて、内面にも飛沫が掛かっている。時期的には押印の状況から、13世紀の後半以降に比定される。

珠洲焼の鉢は3個体分が、掘立柱建物の柱穴、井戸、第2号地下式坑から出土している。1167は口径32㎝を測るもので、面をもって尖り気味に成型された口縁をもつ。段となる口縁とおろし目の引き始めの部分との間は、そいだような形で成型されている。粗い櫛歯状工具6～7本で密に引き下ろされている。口縁の部分は縦方向に使用によって摩滅しているが、櫛歯による波状紋が巡らされていたようだ。口縁部が擦り減っているのに比較して、おろし目はほとんど擦り減ってはいないことから特殊な使われ方が想定出来る。淡青灰色を呈し、胎土に若干の砂粒を混和していて、焼成は普通である。1168は埋谷から出土しているもので、小片の為に口径を復元できなかった。内面の色調は暗褐色を呈しているが、胎土は灰黄褐色を呈している。口縁の内面は段がついた形で凹線状になっていて、やや間隔をあけた形でおろし目が現況で8条までの櫛歯で引かれている。図示した2例の鉢はともに15世紀の後半代の所産時期に比定される。

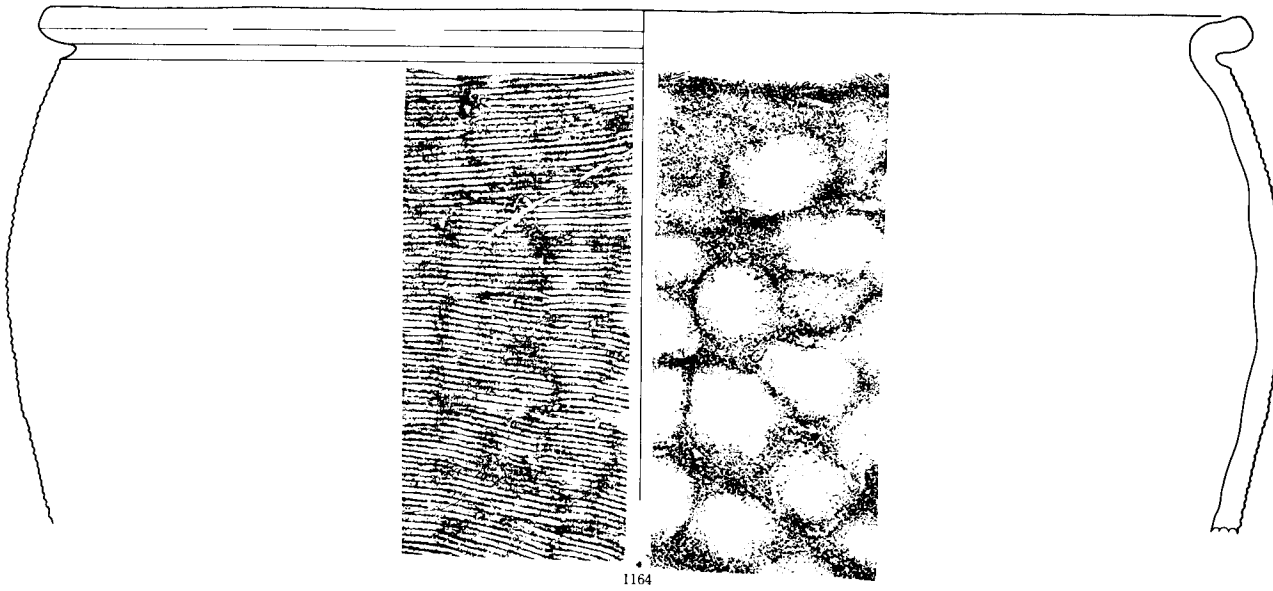
1169～1173は土師質土器で、本遺跡での出土は少なく5例を数えるに過ぎない。掘立柱建物の柱穴から3点、埋谷から2点を得ている。口径は6.8㎝、7.3㎝、9㎝をそれぞれ計測するもので、淡茶褐色から赤褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。1169は底面が平坦にととのえられているもので、やや古手に位置づけられ、1170・1171は若干厚手で底面が丸味を持っていることから15世紀の後半代に考えられる。灯心油痕等の痕跡はいずれにも認められない。1173は東地区のJ111グリッドから出土したもので、底径11㎝を測る素焼きの製品である。全体にナデによって調整されているもので、淡黄褐色を呈し、胎土は精選されている。1172は器表面が褐釉で、内面が淡青色のものがかかっているもので、口径10.6㎝、器高6.1㎝に復元される。近世以降の時期が推定される。

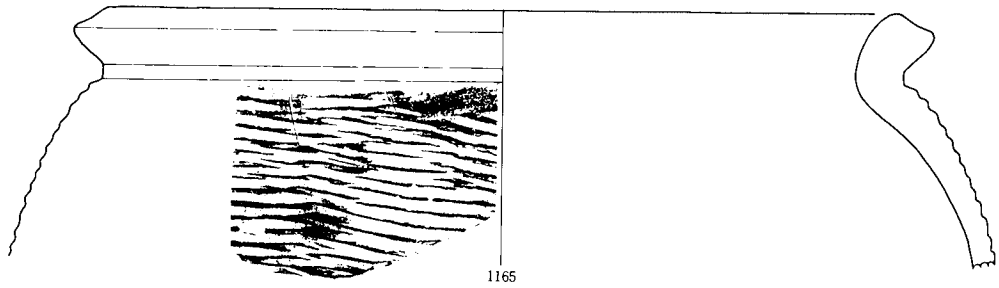
図示した以外に青磁の壷の口縁部1点、中国製の天目1点、15世紀後半に位置づけられる瀬戸・美濃の鉄化粧の天目が2点西地区を中心にして出土している。

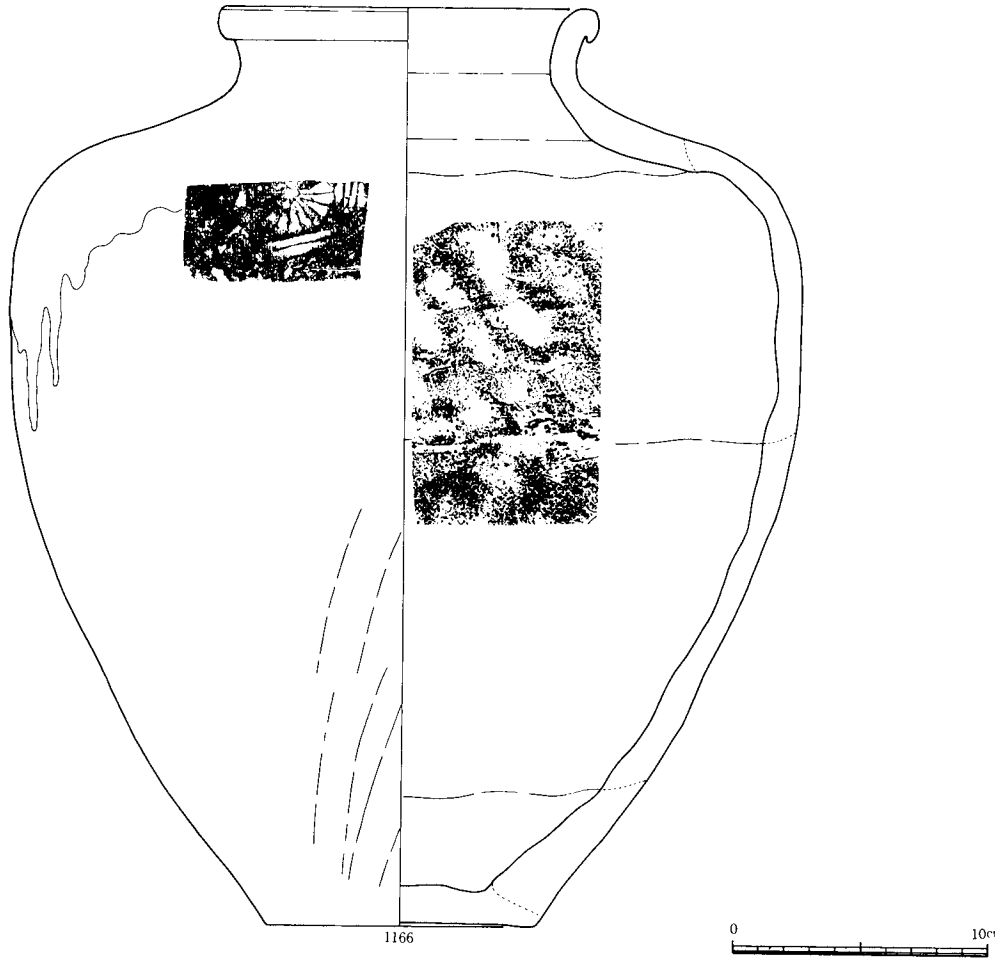
精練関係の遺物として、埋谷から鉱滓1点とふいごの羽口片が得られた他、第2号地下式坑の縦穴部からも鉱滓1点が得られている。

1174は掘立柱建物の柱穴から出土したもので、径4.7×4.1㎝、高さ4.2㎝を測る完形品である。上部に径0.6㎝、深さ1.2㎝の穴が掘り込まれている。全体は敲打によって成形されているもので、凹凸が若干痕跡として残っている。用途は不明である。

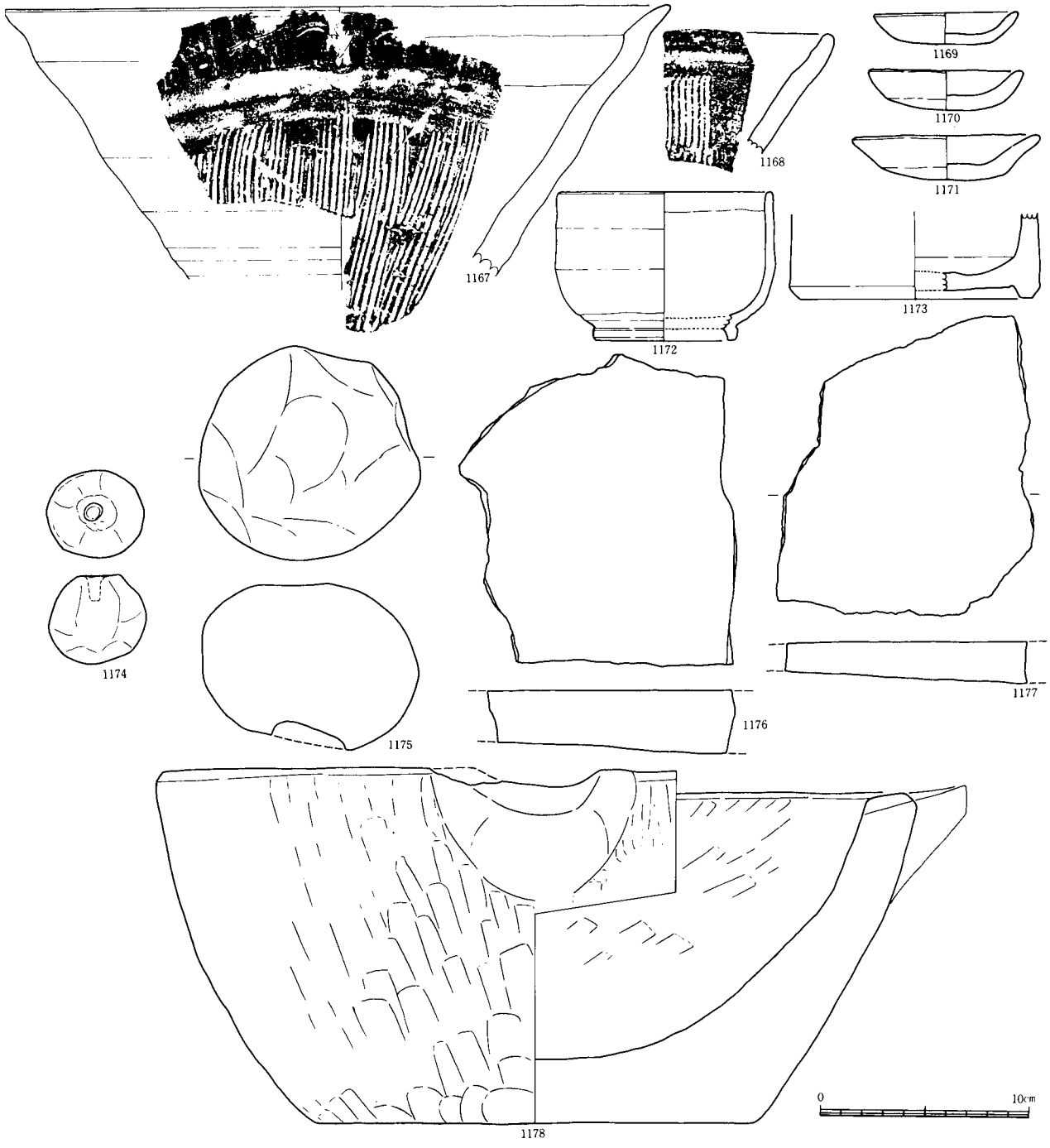
1175は井戸から出土した磨石で、全体に不整形な擦り面をもち、側面部に幅2.3㎝の凹線がはいっていて、縄等で括っていたのではないかと推定される。用途は不明。1176・1177は井戸と埋谷から出土したもので、磨面を







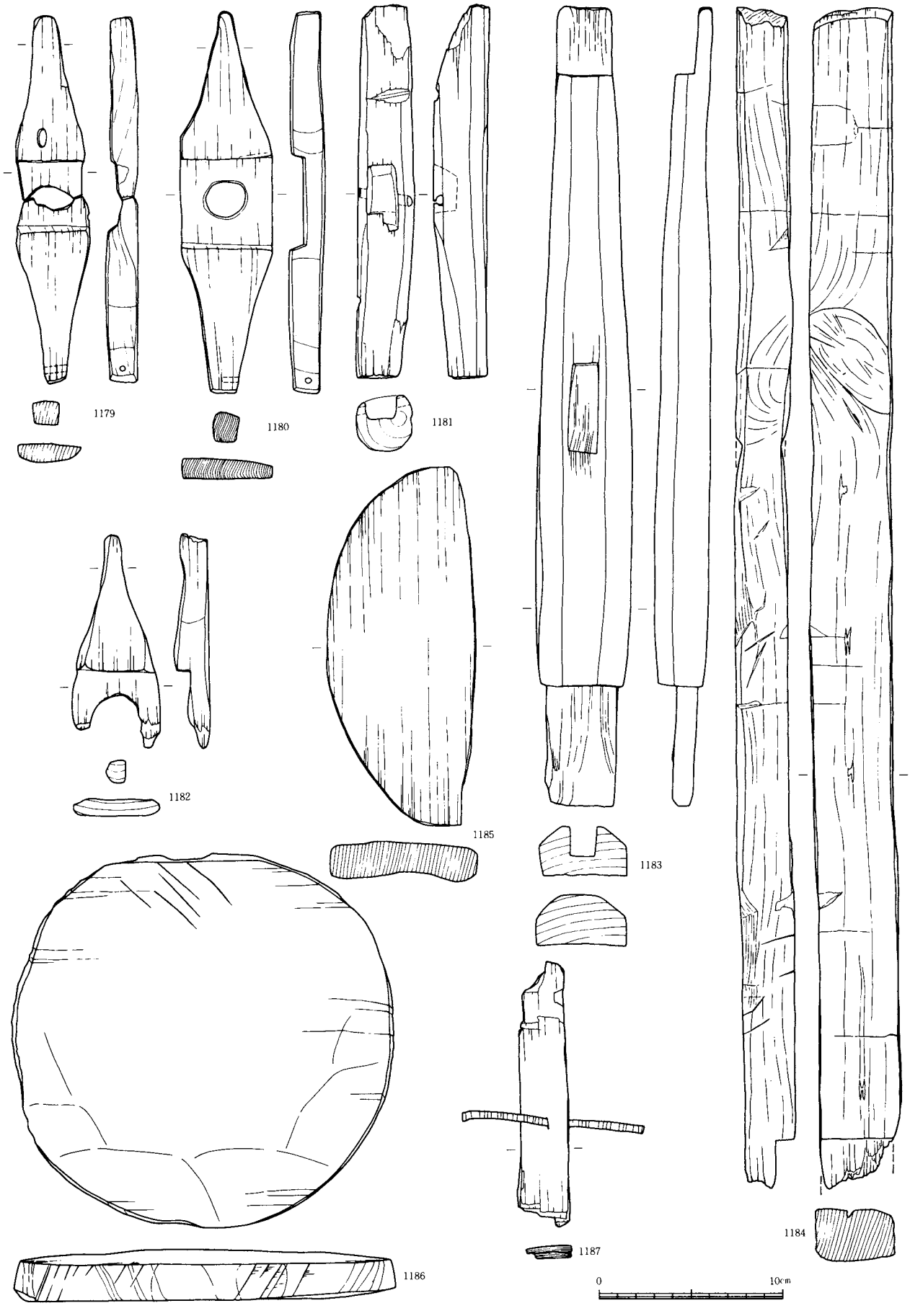
第146図　珠洲焼・加賀古陶(1/3)



第147図　珠洲焼・土師質土器・石製品(1/3)

付けているものである。1178は凝灰岩質の石材を敲打によって整形している片口を持った鉢で、井戸から出土している。口径36.6cm、底径21.4cm、器高17cmを測る。全体に敲打痕をそのままに遺存している。

第148図に掲げたものは、井戸の底面近くから出土したものである。1179・1180・1182は糸巻の横木で1180は完形のものである。長さ21cm、厚さ1.1cm、軸孔部分での幅は5cm、端部での厚さは1.6cm、軸孔の内径は1.8×2cmを計測する。組み込みのある部分の整形はやや粗雑で、表側は比較的整っている。他の2点は風化で判然とはしない。1181は片端を欠損しているもので、径3cm程度の枝を利用したものである。ほぞあなは長軸2.5cm、短軸1.5cmを計測し、その中央部分で折れようとしているが、使用によるものかの判断は困難である。1183は完形の部材で、長さ44cm、幅2.9cm・5.2cm・3.8cm、厚さ2.8cmを計測する。断面は六面と成るもので、各面は丁寧に整形されている。ほぞあなは図示した上の部分が深くなっていて、下側に傾斜を付けてあがってくるものである。



第148図　木製品(1/3)

1184は両端ともに欠損しているもので、長さ65cm、幅4.4cm、厚さ2.7cmを計測する。中軸線には7～8cmの間隔で釘の痕跡が見られる。図示した下の端部には切り込みが入っている。1186は底板に推定される完形品で、径21cm、厚さ2.1cmを計測する。側面は丁寧に整形されていて、図示した状態ではやや傾斜を付けているのが見られる。1187は曲物に推定されるもので、厚さ0.3cmの薄板を幅0.4cmの植物質の皮紐で結合しているものである。

第4章　考　　察

第1節　出土土器の分類と編年

刈安野々宮遺跡の発掘調査は、8,500㎡を越える広大な区域に及ぶものとなり、検出した遺構の数、遺物量は膨大なものがあった。遺構は古墳時代の竪穴式住居址が拡張を考慮するならば40棟を越え、同時期の掘立柱建物は3棟、土坑5基をかぞえ、時代的に間隔をおいて、平安時代の掘立柱建物が1棟、中世の掘立柱建物1棟、地下式坑4基、井戸1基が検出された複合遺跡であった。出土した遺物の量は膨大なもので、縄文時代中期から晩期にかけての土器と石器を初めとして、中・近世にまでの種々の遺物が得られていて、遺物整理箱（60×38×14cm）に収納して230ケースの多数を数える。その中で40棟を越える竪穴式住居址にともなう古墳時代前期の土師器の量が群を抜いていて、復元完形品となった資料も多数にのぼっている。竪穴式住居址の個々によって出土量、出土状況が異なり、住居址の配置に一定の規則性を認めうるものの拡張、重複に対応する形での時間差を、住居址出土の土器に求めうるには、型式学的な操作が一定程度必要と認められる。ここでは、各器種の分類を試みて、遺構内出土の資料を検討していきたい。出土資料は住居址内出土のものを重点的に抜き出し実測しているが、包含層からの資料は有段口縁の甕器形で若干割愛したものがあり、また、底部片については住居址、包含層ともに割愛したものが多いものの、図示した土器は1,100点を越えており遺跡の概要を知るうえでは決して資料不足とは言えないと考えている。個々の資料についてはその属性を十分には把握しているとは言えず、特に近年注意が払われている胎土の中の鉱物種、岩石種、海綿の骨片、シャモットなどの観察は実施出来なかったことが反省される。

甕形土器

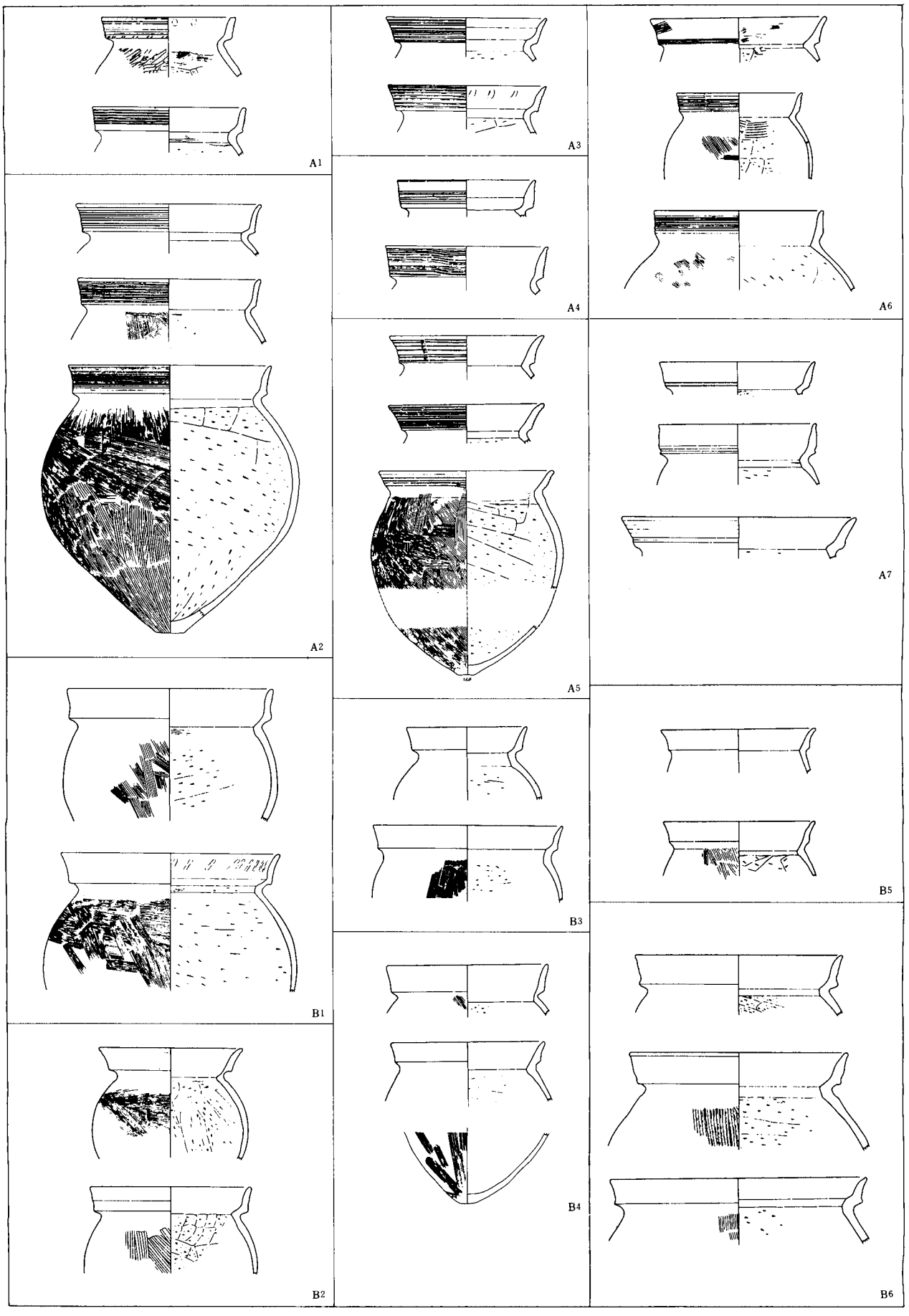
A1類　有段口縁をもち擬凹線を巡らす在地甕で、口縁部の形状によって細分される。口径が30cmを越える大型品、20cm前後の中型品、15cm前後の小型品が見られ、さらに、口径10cm以下の極小型品が知られる。擬凹線を施さない他の甕形土器においても、ほぼ同じような傾向を示している。A1類土器は、口縁内面に明瞭な段をつけ、頸部の内面に狭いものの面をもっている。口縁は直立ないしはわずかに外傾するもので、器壁の厚みの変化が少なく、口唇部は丸味をもっておさめるタイプである。出土量としてはごく限定された在り方を示していて、第29・31号住居址や西地区の埋谷などでの出土である。（遺物番号　1・41・49・53・63・584他）

A2類　有段口縁をもち擬凹線を施すもので、内面に明瞭な段をつけ、直立ないしは外傾して立ち上がるもので、口縁端部で小さく外展傾向を示す。頸部の内面では面を保持している。第21・23号住居址、西地区埋谷等での出土がある。（遺物番号　51・57・508・526他）

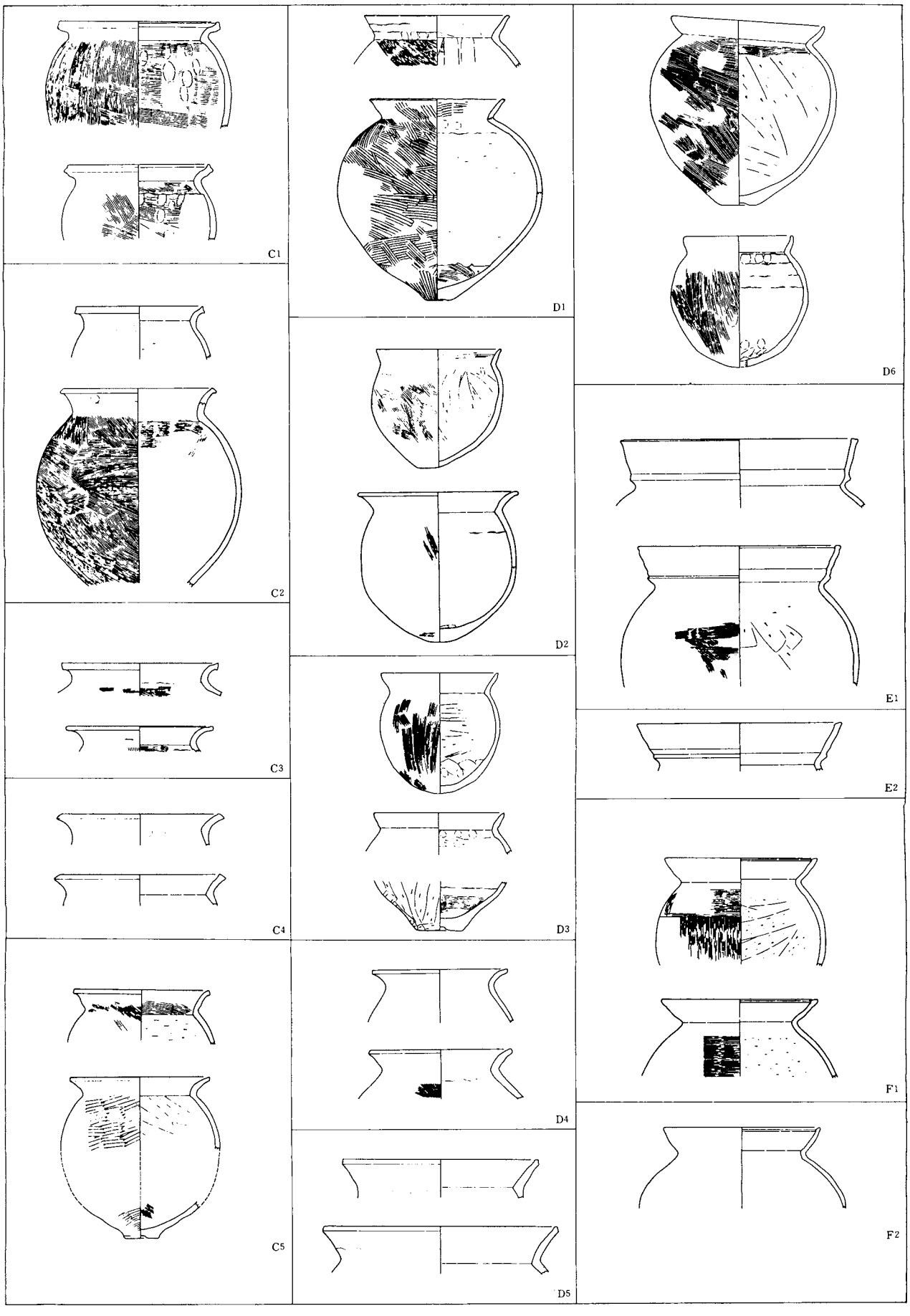
A3類　有段口縁をもち擬凹線を巡らすもので、口縁端部が尖り気味に成型されて、外傾の傾向が一段と増している。口縁下端の段は強く打ち出されていて直に近い在り方を示し、頸部の内面には面が取られている。前二者に比較して出土量は多く、小型品での在り方が多いと言える。なお、口縁内面での指頭圧痕が認められる資料は本遺跡では小数例に止どまっているのであるが、口縁の端部になされているものが目立ち手抜きの方向性を示しているように思われる。第23・14・15号住居址での出土がある。（遺物番号　762～764・792他）

A4類　有段口縁で擬凹線をつけているもので、内面の段の形成が弱くなり、頸部の内面の面はさほど目立つものではなく「く」の字状を呈している甕形土器である。口縁の断面形状が三角形をなしているものが多い。A3類がさらに形骸化したものとして考えられる。第1・21号住居址、西地区の埋谷などでの出土が見られる。（遺物番号　50・58・587・908他）

A5類　有段口縁で擬凹線をつけているもので、口縁下端部の段がほとんど目立たない程になっているもので、内面の段もまったくつけないか弱い段がかろうじて見られるもの。第19・23・29号住居址等で出土している



第149図　甕形土器の分類(Ⅰ)



第150図　甕形土器の分類(II)

ものであるが、量的には小数例である。（遺物番号　3・457・528・668他）

A6類　有段口縁の擬凹線をつけているもので、内外面の段の形成がやや形骸化の度が進んでいる。頸部の内面は「く」の字状を呈していて、内弯傾向になって立ち上がる口縁をつけている。壷形土器の中にも同じような成型を施しているものが見られ、外来系の土器にひきずられているものとして考えることができるようだ。A5類と同じ様に出土量は少ない。西地区の埋谷、第29号住居址からの出土がある。（遺物番号　2・55・209他）

A7類　有段口縁で擬凹線を巡らすもので、口縁の下端が突帯状に成型されているのが大きな特色である。巡らされている擬凹線はやや粗雑であるか、口縁の下半にかろうじて認められる程度のものである。A6類と同じ様に、外来系の甕形土器の成型に影響を受けたものとして考える事ができるようだ。出土量は極めて少ない。（遺物番号　203・207・286他）

B1類　有段口縁に擬凹線をつけないで素文にとどめているもので、本遺跡ではA類甕を若干凌駕しているものとして考えることができる。A類器形に比較してやや小振のもので、口径が30cmを越えるような大形品は限られていると言える。細分はA類器形に準じた形で考えた。内外面ともに明確な段を持つもので、口縁は直立ないしは外傾気味に立ち上がり、端部は丸味を持った成型でおさめている。西地区の埋谷、第4・14号住居址、第5号土坑からの出土がある。（遺物番号　36・72・733・783他）

B2類　有段口縁で素文のもので、頸部の内面が「く」の字状に折れている成型を持つ。内外面の段は1類の成型と同じものとしてとらえることができる。体部の最大径が肩部にあるものと体部の中央部分に位置しているものとに分離して考えることもできるのであるが、口縁部分での把握に止どまるものが多い事から細分は行わなかった。口径が15cm前後の小型土器としての出土が多い。埋谷、第19・21号住居址から出土している。（遺物番号　99・110・534・810他）

B3類　有段口縁の素文のもので、口唇部に向けて器壁が薄く成型されていて尖り気味になっているもの。頸部内面の面の成型での分離は行わなかった。第3・5号土坑、埋谷、第21号住居址からの出土が見られる。（遺物番号　97・77・532・858他）

B4類　有段口縁の素文のもので、内面の段が消失しているかほとんど成型されていないものをまとめた。頸部の内面は「く」の字状に折れている。東地区の第21・23・29号住居址からの出土が目立っている。（遺物番号　262・777・1063他）

B5類　有段口縁の素文のもので、口縁下端の段の成型がなおざりになっているものをまとめて5類とした。4類との差異はやや微妙なところがある。出土した数は少ない。（遺物番号　186・914・988他）

B6類　有段口縁で素文のもので、口縁帯の幅が比較的狭くなっていて口縁の下端が突出しているのが特色としてとらえることができる。やはり、外来系の甕形土器に影響を受けているものとしてとらえることができるようだ。埋谷での出土が目立っている。（遺物番号　78・105・106・933他）

C1類　外弯して立つ口縁を持つ甕形土器で、抓み上げるようにして小さな口唇部をつけている。口唇部近くの内面に狭い面が形成させているもので、完形品での出土は得られなかった。体部の内外面ともに刷毛による工具で調整されている。第4号住居址からのものが見られる程度で出土例は限られている。（遺物番号　330・331他）

C2類　外湾して立つ口縁の端部で面取りが施されて、口唇部が下にわずかに広げられているもので、C1類と逆転した口唇部の状況を呈している。やはり、完形品での出土は得られなかった。体部は刷毛調整で整えられるもので、球形の体部を持っているようだ。第4・15・19号住居址での出土例が見られる程度で、量的には少ない。（遺物番号　322・539他）

C3類　外弯して立つ口縁をつけて、口唇部にナデによる面取りがなされているもので、断面形は屈曲の強いU字形を呈しているのが特徴である。完形品での出土はなく、中・小形土器での在り方が目立つ。（遺物番号　219・564他）

C4類　外傾して立ち上がる口縁をつけているもので、口唇部分が面取りによって角張った状態になり、体部

の器壁に比較して厚手に成型される。全形をうかがえる資料の検出はなく、また、出土例は小数である。（遺物番号　217・220他）

C5類　外傾して立つ口縁の端部でさらに屈曲させる口唇部をつけるもので、面取りが施されている。全形の知れる資料の出土はなく口縁部片に限られている。出土量は小数である。第2･9･22号住居址からのものがある。（遺物番号　269・479・594他）

D1類　本類は「く」の字状口縁の甕形土器でまとめたもので、口縁端部の形状によって細分を行った。大形の例はなく、中・小形のもので占められている。頸部の位置で鋭く屈曲して、短い口縁部を外傾させるもので口唇部に面取りを施している。口縁部を含めて刷毛による調整が施されているもので、体部の内面は原則的に簡略なナデによる調整が施される。全形をとらえられる資料として第29号住居址出土のものがある。体部の中位に最大径がくるような球形を呈しているのが知られる。第22・23号住居址からの出土例がある。（遺物番号　32・595・883他）

D2類　「く」の字状に屈曲する短い口縁を持つもので、1類に比較して外反する角度が強くなっているものである。口唇部は丸味を持って成型されているのが特色である。口縁部分を含めて全体が刷毛で調整されるもので、口縁部はさらに横ナデによってととのえられる。第25号住居址出土の完形土器が見られるが、胴部の形状は長胴形をなすもののようだ。調査区の各地点から出土していて、第14・28号住居址などと例が多い。（遺物番号　115・845・386他）

D3類　「く」の字状に屈曲する短い口縁部を持つもので、口唇部に向けて器壁が薄く成型されて尖り気味になっているもの。小形土器での例が多く、肩部がさほど張らずに体部につながっていくもので、胴部の最大径は中位に置かれる長胴形を呈するもののようだ。第4・14号住居址からの出土例がある。（遺物番号　329・359・643・1006他）

D4類　「く」の字状に屈曲するのであるが、頸部の内外面ともにゆるいカーブを描いて体部に接続していくものである。口唇部は丸味を持って成型されている。胴部は球状を呈するものと長胴形をなすものとが見られ、底部が平底、丸底と在り、さらに細分すべきものと推定されるものの、口縁部分での分類であり今後の問題点である。第14・15号住居址からの出土である。（遺物番号　676・766他）

D5類　「く」の字状に折れる口縁が比較的長く伸びていくもので、口唇部が内外両面から面取りを施している。出土例は限られていて、第8・25号住居址からのものがある。（遺物番号　448・1016）

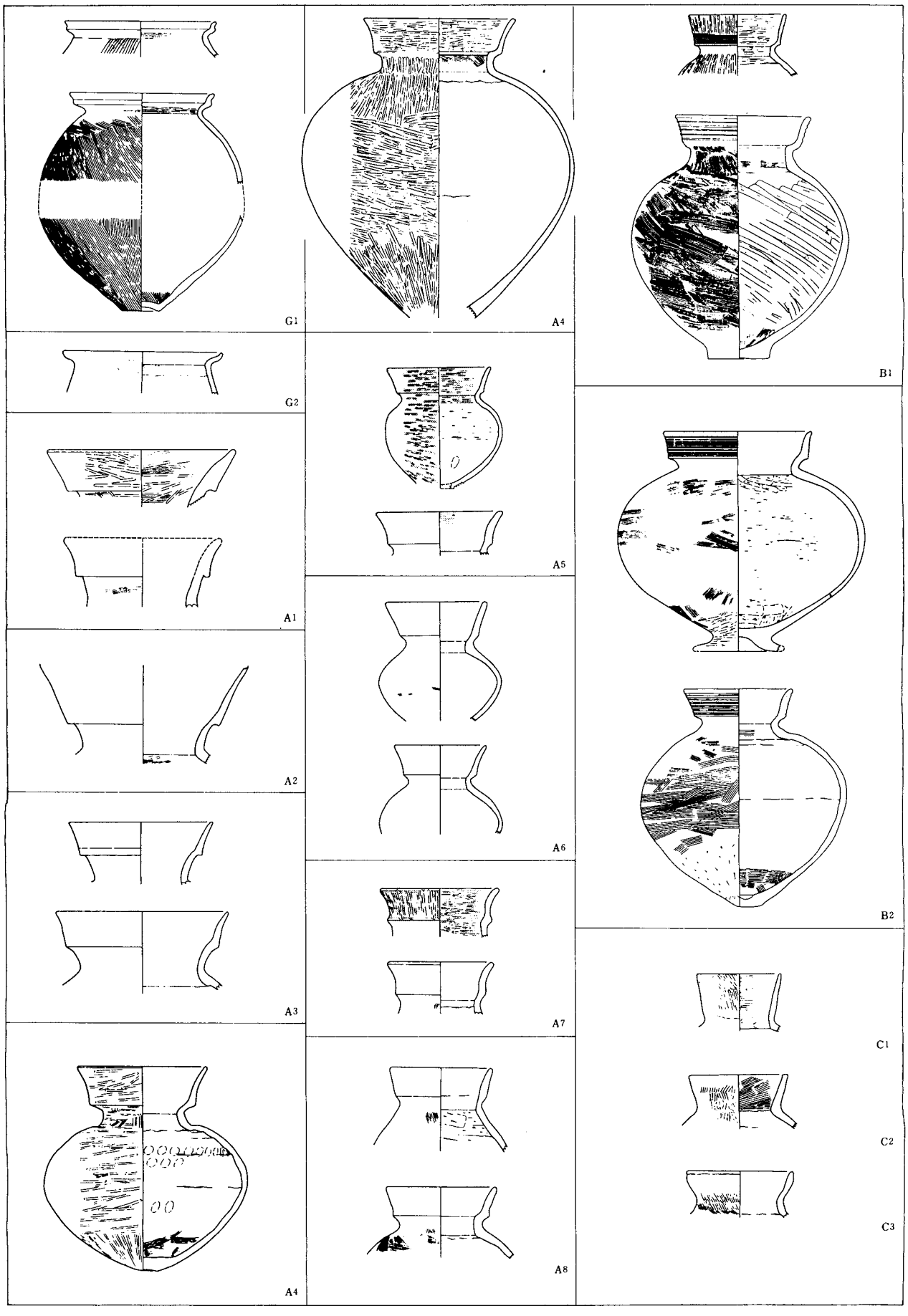
D6類　「く」の字状に折れる短い口縁をつけているのであるが。内弯傾向に立ち上がっていくもので、口縁の端部では丸味を持って内傾する。中・小形品の甕として分類したが、壷器形としてとらえて良いものも含んでいる。（遺物番号　17・443）

E1類　有段口縁の山陰系甕形土器に想定できるもので、出土例は極限られている。口唇部がわずかに肥厚するタイプで、口縁下端が突帯状になっている。口径が20cmを越える大形のものである。全形をうかがえる資料の出土は得られなかった。客体的な甕として位置付けられる。第3・4号住居址からの出土である。（遺物番号　288・333）

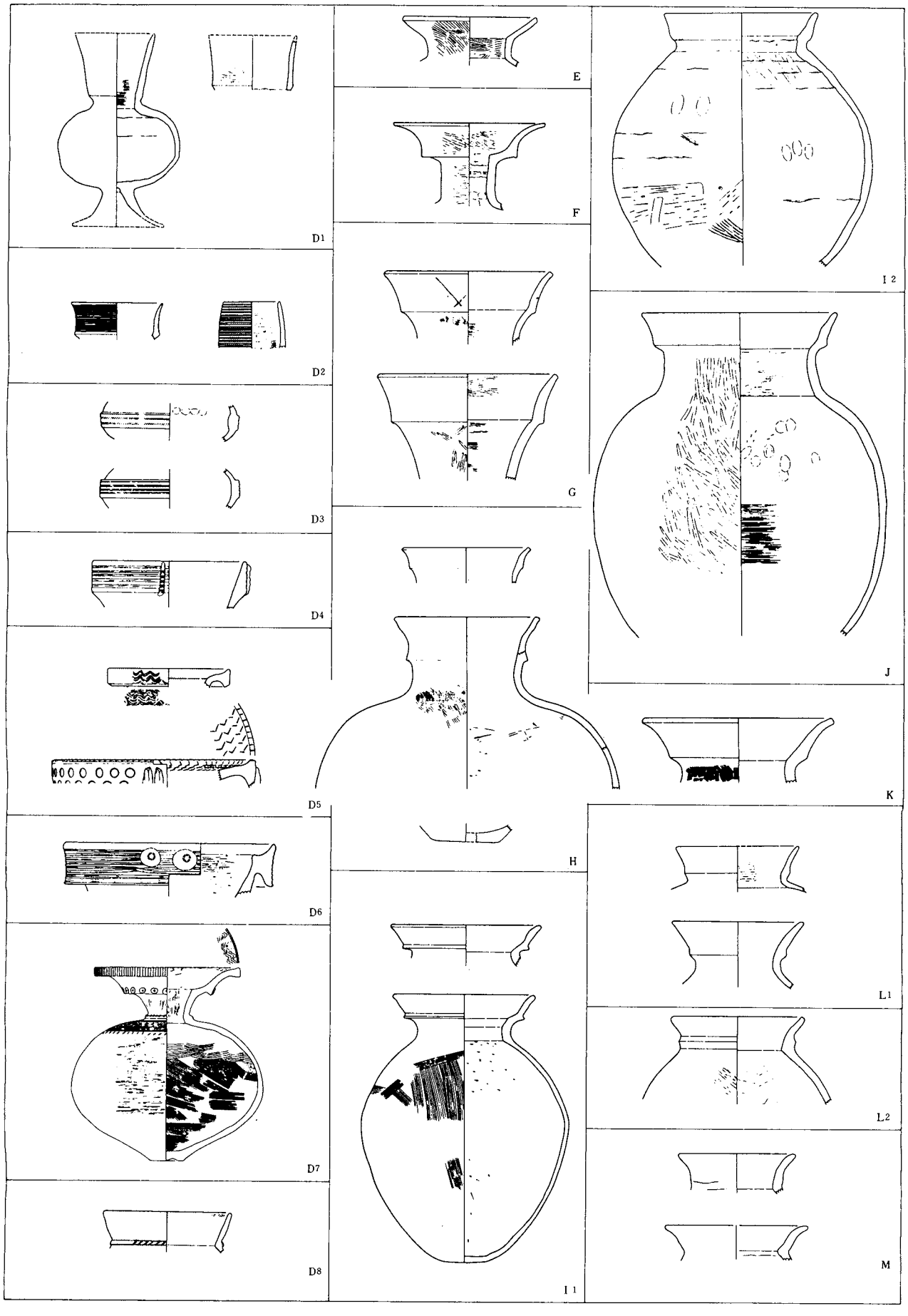
E2類　有段口縁の山陰系甕形土器で、内面の段がほとんど消失しかかっていて、「く」の字状に立ち上がる形状となっている。口唇部は内側に肥厚しているもので、口縁下端と頸部との段は小さくなっている。出土例は1例を上げ得るのみで、その詳細は不明である。第9号住居址からの出土である。（遺物番号　482）

F1類　「く」の字状口縁に、口唇部を肥厚させた布留系の甕形土器で、口径20cm前後の中形品で占められている。球形の胴部を持つものと推定できるが全形をとらえられる資料の出土はなかった。体部の調整が判る資料は2例のみで、肩部までが横方向の刷毛で体部の下半は縦方向のものが施されていて、内面はヘラケズリが行われている。1類は口唇部の肥厚が口縁に対して横方向に伸びているものである。第9・19号住居址からの出土である。（遺物番号　120・535他）

F2類　口唇部を肥厚させた布留系甕形土器で、1類と同じ様に口径20cm前後の中形品での出土に限られる。口



第151図　甕形・壺形土器の分類



第152図　壺形土器の分類

唇部の肥厚が口縁に対して下方向に向かってなされているもので、尖り気味の成型となっているものである。出土例は少なく、第2・28号住居址からのものである。（遺物番号　273・1032）

G1類　東海・近江系の影響を受けているとされる短い口縁部を屈曲させている、いわゆるS字状口縁をもつ甕形土器である。全形をうかがえる資料の出土は第14号住居址の1例のみであった。胴部の最大径を中位置に置くもので、底部は窪み底となっているものである。口径15cm前後の中形品のみの出土である。（遺物番号　449・1033）

G2類　いわゆるS字状口縁の甕形土器であるが、幾分かは形骸化した形状を示しているものである。第8号住居址の442の1例のみである。なお、本類に通常伴うものとされる脚台の検出は、明らかにすることができなかった。高杯、器台形土器の脚部として上げているものに含まれている可能性がある。

壺形土器

A1類　口径が20cm前後のもので、外傾気味に立ち上がる口縁帯を肥厚させて段を形成するもの。他の壺形土器の器壁に比較して厚手に成型されていることから大形品のものと推定される。第9・14号住居址からの出土がある。（遺物番号　459・741他）

A2類　有段口縁の壺形土器で、口縁部が素文でありやや長めのものをまとめた。口縁の内外面に段を形成するもので、口唇部が尖り気味になっている。出土した例は少ない。第29号住居址からのものである。（遺物番号　14）

A3類　有段口縁の素文のもので、頸部がやや長めになっている。口縁部の内外面は段を形成するもので、口唇部に向かって器壁が薄くなり尖り気味になっているのが特色である。口径25cmの大形品が1例ある他は、口径20cm以下の中・小型品が多く出土している。全形をうかがえる資料の検出は無いものの、胎土は精選されているものが目立ち、また、調整はおおむね丁寧に施されているのが通例である。第14・21号住居址、第5号土坑からの出土がある。（遺物番号　39・682・842他）

A4類　有段口縁の素文のもので、頸部が短く内外面に明瞭な段を形成して、口縁が外弯して立ち上がり端部が丸く納められているものである。埋谷、第20号住居址から完形品として出土している。器表面は丁寧にヘラミガキが施されていて、小数例ながら赤彩の施されているものもある。（遺物番号　130・789・1190）

A5類　有段口縁の素文のもので、内外面の段が丸味をもって成型されている。胎土、調整は良好な形のもので、赤彩が施されている。完形品として脚台の付く埋谷出土の例がある。次に分類したものとは肩部の張りが異なるものである。（遺物番号　125・126・609）

A6類　有段口縁の素文のもので、5類に準じた口縁の形状を示しているもので、胴部の最大径が中央に置かれているものである。（遺物番号　379・648）

A7類　有段口縁の素文のもので、内外面の段は明確さを欠き、頸部から弯曲を付けたようにして立ち上がってくるもので出土例は少なく、全形をうかがう資料もない。（遺物番号　127・131）

A8類　有段口縁の素文のもので、体部に刷毛、削り調整が施されているものをまとめて本類とした。出土例は少ない。（遺物番号　566・608他）

B1類　有段口縁をもち、口縁部に擬凹線を施しているものでB類とした。施されている擬凹線は甕形土器のそれに比較して幾分かは丁寧に成されている。1類は内面の段が明確で、頸部がはっきりしているもので、胴部の最大径の位置がやや上位置に置かれているものである。（遺物番号　679・124）

B2類　有段口縁を持ち、口縁部に擬凹線を巡らしているもので、内面の段が丸味を持っていて頸部につながっていくものである。体部の最大径は中央に置かれているのが特徴的である。なお、第1号住居址出土例は小さな脚台が付いているが、同様の脚台の出土は各地点から出土していることを付記しておきたい。（遺物番号　204・1022）

C1類　口縁部が直立しているもので1例の出土がある。第14号住居址からのものである。（遺物番号　717）

C2類　わずかに外傾して立ち上がる口縁を持つもので、口唇部で面取りが施されて若干肥厚気味になっているものである。第22号住居址から1例の出土がある。（遺物番号　605）

C3類　頸部がやや内傾気味に立ち上がっていくもので、口縁部は外に開く形で立ち上がる。長頸壷の系統をひいているように感じられるものである。第4号住居址からの1例の出土がある。（遺物番号　340）

D1類　いわゆる装飾壷のものをまとめて本類とした。わずかに外傾して立ち上がる幅の広い口縁部を付けるのが特徴的で、頸部で小さな段を形成して短い頸部につなげる。胴部の最大径の位置は中央に置かれている。全体的に丁寧に作られているもので、おおむね赤彩が施されるようだ。（遺物番号　123・228）

D2類　小型の装飾壷で、有段口縁に丁寧に擬凹線が引かれているもの。焼成は堅緻で、赤彩が施されている。口縁の形状が大きく異なるが量的に少ないので、本類にまとめた。（遺物番号　34・318）

D3類　装飾壷の体部片であるが、本類にまとめた。おおむね偏平な体部を持つもので、胴部最大径の位置に突帯を貼付し凹線を加飾しているものである。第7・22号住居址からの出土がみられる。（遺物番号　423・619）

D4類　有段口縁に擬凹線と粘土紐を加飾するもので、全体の形態は不明である。（遺物番号　931）

D5類　横方向にのびる口縁を持つもので、口唇部が幅広の面を形成する。肥厚した口唇部と口縁の内面に加飾を施すものである。第14・22号住居址からの出土があるものの口縁部のみで全形は不明である。（遺物番号　613・700）

D6類　口縁帯を独立させた形で貼付するもので、擬凹線と円盤状の粘土で加飾する極めて特異な形態を持つものである。第23号住居址からの出土である。（遺物番号　932）

D7類　第21号住居址の覆土から出土し、復元完形となった1例がある。偏平な体部に大きく外展する口縁が付くもので、直線的に成型された各位置に加飾が施される。肩部には細く浅い沈線で加飾されている。（遺物番号　852）

D8類　1例のみの出土である。「く」の字状口縁で、頸部の位置に粘土紐を加飾しているタイプである。（遺物番号　811）

E類　直立する頸部に外傾する口縁が付くもので、第23号住居址930の1例がある。

F類　長めの頸部が付く有段口縁のもので1例の出土がある。（遺物番号　12）

G類　外展してのびる頸部にさらに外傾する口縁が付けられるもので、口唇部に面取りがなされている。おおむね丁寧な調整が施されている。全形をうかがう資料の出土は得られなかった。（遺物番号　128・647他）

H類　頸部の接合が丸味をもっているもので、口縁の端部で小さく外傾し口唇部に面取りが施されているもので、小数例の出土がある。（遺物番号　221・680）

I1類　短頸壷で長胴を持つものである。復元完形土器として第29号住居址出土例がある。短い頸部から大きく外弯して口縁が開き、有段口縁状を呈するもので、口縁の下端が突帯状に成型されるものである。第3・6・23号住居址からの出土がある。（遺物番号　13・409・889他）

I2類　短頸の長胴壷で、全形をうかがう資料は第1～2号住居址からの1例がある。口縁の成型が有段口縁の形骸化したものとも推定されるものである。（遺物番号　794）

J類　口縁がやや伸びている有段口縁状を呈するもので、出土例は少ない。（遺物番号　129・360）

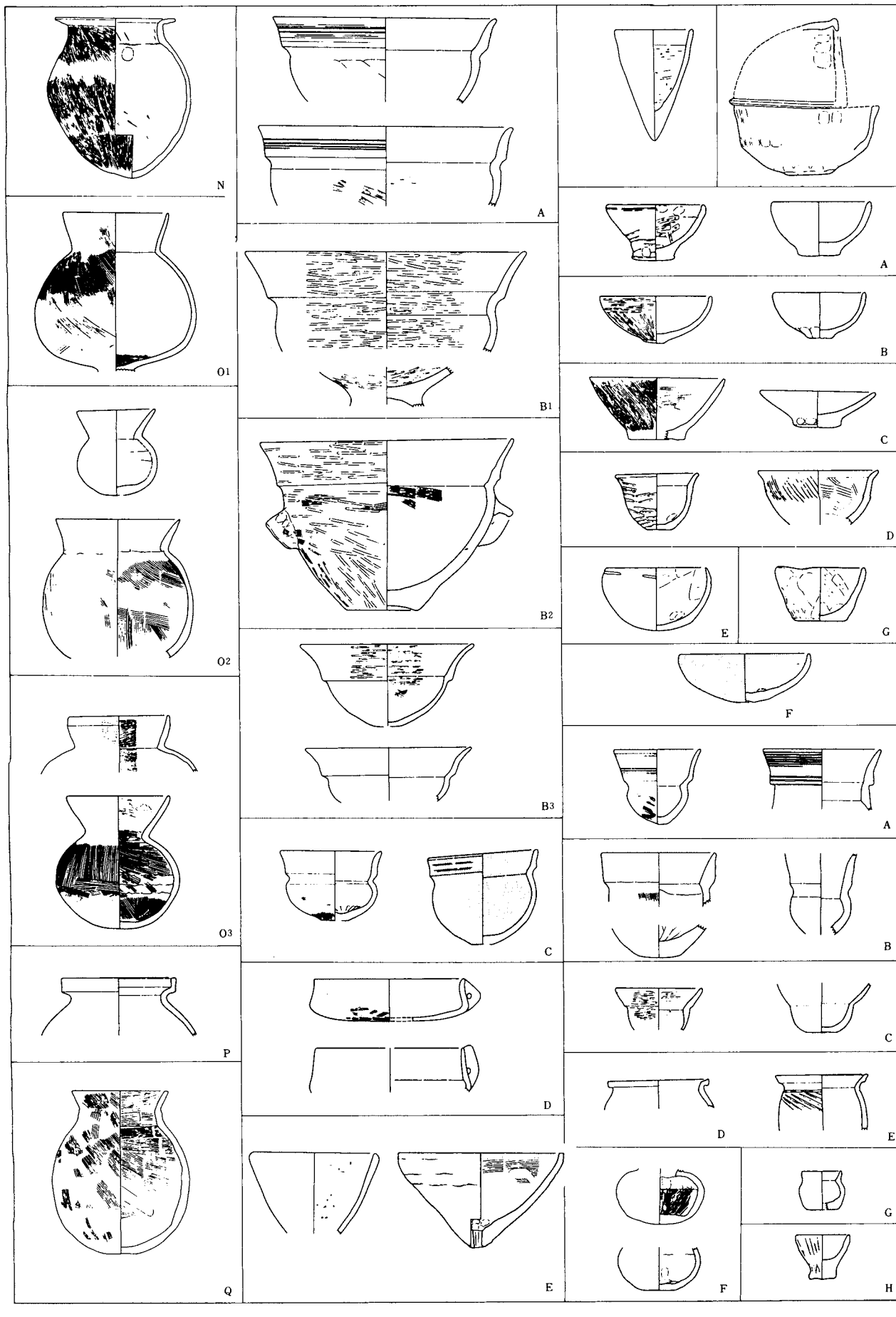
K類　直立する頸部に外に大きく広がる口縁が付けられているもので、出土例は少ない。（遺物番号　489）

L1類　頸部から弯曲して立ち上がる口縁が付くもので、頸部に突帯状のものが巡る。有段口縁の段の部分が形骸化したものとも考えられる。（遺物番号　565・978）

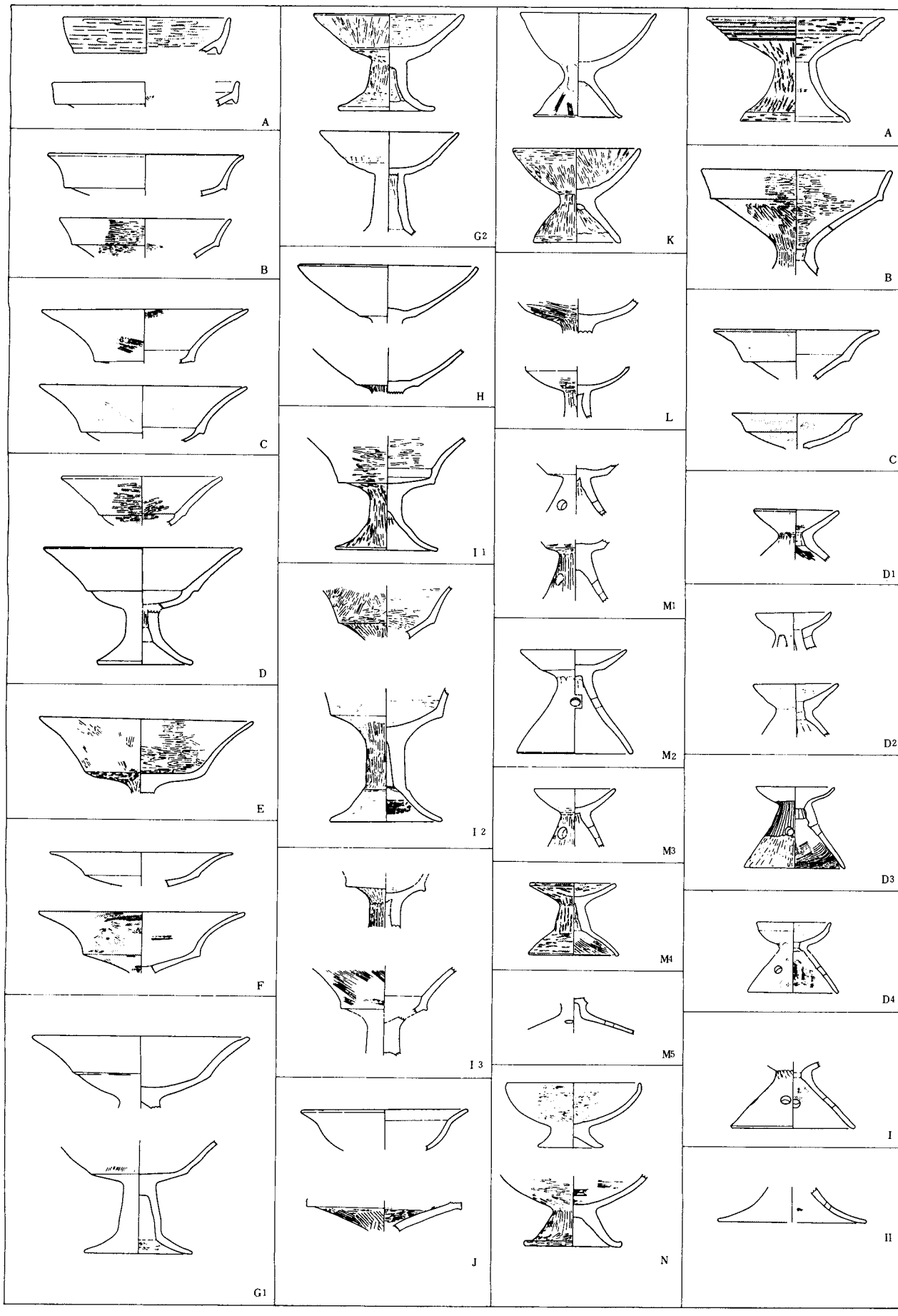
L2類　頸部に突帯が付いているもので、内面は鋭角的に胴部と分けられている。第7号住居址の1例が見られるのみである。（遺物番号　416）

M類　口縁の短いタイプのものでまとめた。いずれの例も資料の少ないものである。（遺物番号　336・419・646・1064）

N類　短い頸部に横方向に伸びていく口縁が付くもので、1例の出土であるが1類を設けた。第27号住居址から



第153図　壺形・鉢形・小型土器の分類



第154図　高坏・器台形土器の分類

の出土である。（遺物番号　1021）

O1類　卵形の体部を付けているもので、外傾気味に立ち上がる口縁が付いている。脚台を欠いているのであるが全形をうかがう資料として第21号住居址出土のものがある。（遺物番号　846）

O2類　脚台が付かないものと推定されるもので2類とした。中・小形土器としての在り方が目立つ。口唇部に向けて器壁が薄く成型され、尖り気味となっているものが目立つものの、口唇部で小さく屈曲するものもある。（遺物番号　392・797他）

O3類　口縁部分が微妙に内弯しているもので、口唇部に向けて器壁が薄くなり、端部で若干内屈気味に成型されている。全形をうかがう資料として第4号住居址出土のものがある。（遺物番号　271・341・1020他）

P類　受口状を呈した口縁を付けているもので、1例の検出である。（遺物番号　121）

Q類　短い頸部に口唇部に面取りした外傾する口縁が付くものである。（遺物番号　373）

鉢形土器

A類　有段口縁で擬凹線が巡っているもので本類とした。第10・23号住居址からの出土である。口径が25cmを越える大形のものである。（遺物番号　510・935）

B1類　有段口縁で素文のものでB類とした。第23号住居址出土の1例のみで脚台が付いているものである。内外面ともに丁寧に磨きが施されている。（遺物番号　937）

B2類　有段口縁の素文のもので、体部に一対の把手が付加されているもので2類とした。把手の形状は半円形を形成するもので、棒状を呈しているものも見られる。出土例としては小数である。（遺物番号　137・807・945）

B3類　有段口縁の素文のもので、鉢器形では最も出土例の多いタイプである。口径20cmを越えるものは少なく、おおむね20cm以下のものである。口縁部の形状によってさらに細分が可能である。内外面ともに丁寧に磨きが施されているもので、底部は丸底を呈しているようだ。（遺物番号　688・943他）

C類　有段口縁の小形土器で、甕形土器の小形土器としての分類が適当とも考えられるものであるが、赤彩が施されたものや丁寧な作りのものが目立ったところから本群に含めたものである。先の類と同様に口縁の形状によって細分が可能である。（遺物番号　136・512・887他）

D類　器高の低い把手の付く鉢器形で、出土例は2例を上げるにとどまる。（遺物番号　252・996）

E類　底部に穿孔が施されているいわゆる有孔鉢で、全形を推定できる資料の出土は限られている。しかし、穿孔部分の破片の出土はほとんど各住居址毎に認められるものである。（遺物番号　720・897他）

角形土器

角状を呈している小形の土器で、本遺跡では4例の出土があった。2例は全形がうかがえるのであるが1例は不注意から図示しなかった。図示しなかったものは赤彩が施されているものである。（遺物番号　320・321・1001）

手炙り形土器

第28号住居址の床面から1例の出土があった。（遺物番号　1060）

椀形土器

A類　比較的大きな底部を付けているもので、内弯傾向に体部が立ち上がり、口唇部を尖り気味に成型するものである。第23・24号住居址からの出土がある。（遺物番号　377・891他）

B類　小さな平底から内弯傾向にして体部が立ち上がるもので、口縁の端部は内屈気味にととのえられている。西地区の埋谷出土の例は、丁寧な磨き調整が施されている。（遺物番号　158・890）

C類　しっかりとした平底から体部が斜め方向に伸びていくもので、口唇部には面が取られている。刷毛調整

で内外面を整えている。器高の高低によってさらに分類ができる。（遺物番号　650・804他）

D類　幅の狭い口縁部分が外展しているもので、第4･9号住居址からの出土があった。（遺物番号　342･472）

E類　丸底となるもので、内弯して立ち上がる口縁部の端部が尖り気味に成型されるものである。第21号住居址からの出土例が1例見られる。（遺物番号　874）

F類　赤彩の施されたもの1例が出土している。底部は指頭によって窪ませているもので、口唇部は上に向いて尖り気味に成型されている。調整は丁寧である。（遺物番号　551）

G類　手づくね形土器に類似しているもので、平底から内弯気味に立つ口縁が伸びていく。第28号住居址床面からの出土である。（遺物番号　1048）

小形土器

A類　ミニチュア形土器を一括して小形土器とした。器形的に甕、壷等の形態を模倣しているものであるが、手づくねのものも含み込んだ。有段口縁の形態をとるもので、擬凹線がはいっているものでまとめた。段の形状によってさらに細分は可能である。（遺物番号　133・654）

B類　有段口縁の素文のもので、内外面の段はかなり形骸化している。底部は尖り気味に成型される体部が付いている。調整はかなり粗雑なものが多い。（遺物番号　660・998・999他）

C類　有段口縁の鉢器形を模しているもので、先に分類した鉢器形の小形品にかなり接近した成型となっている。（遺物番号　134・135）

D類　短頸壷の口縁を付けているもので、第1号住居址からの出土である。（遺物番号　222）

E類　「く」の字状口縁を有段状に成型しているもので、体部にヘラによる斜め方向の平行線が施されている。第19号住居址からの出土である。（遺物番号　543）

F類　壷器形となるものであるが、口縁部分を欠っしているもので全形は不明である。（遺物番号618・738・1040）

G類　底部は平底で、口縁が小さく外展する形で付けられるもの。第9号住居址からの出土品である。（遺物番号　485～488他）

H類　いわゆる手づくね形土器で、ほとんどが完形品としてとらえることができた。形状によってさらに細分は可能である。（遺物番号　254・317他）

高杯形土器

A類　外傾する受部を持ち、口縁帯が付いているもので、1例のみの検出である。高杯器形ではない可能性も考えられるものである。（遺物番号　639）

B類　口縁部が外弯して立ち上がるもので、受部との境界が鋭角的な形となっているもので、全形を見る資料の検出は得られなかった。器台形土器になる可能性がある。（遺物番号　229・743）

C類　長く伸びる口縁が外弯しているもので、体部との間が明確になっているもの。胎土、焼成は良好な物が多く、調整も丁寧に磨きが施されているものである。体部の部分を欠いているものを多く含めて考えた。（遺物番号　141・230・713・947他）

D類　口縁部分が外弯せずに直線的に伸びているもので、体部はやはり杯状を呈しているものである。全形をうかがえる資料は第23号住居址の例を上げうるに止どまる。（遺物番号　343・892他）

E類　内底面が平坦になっているもので、口縁部は外弯して伸びていく。口縁と体部との境界に段を成型しないものである。（遺物番号　308）

F類　口縁部分が外弯して伸びていくもので、体部との境界が鋭角的に成型されている。全形をうかがえる資料の出土は無かった。（遺物番号　231・623）

G1類　皿状を呈する受部と端部が大きく開くラッパ状の脚部を付ける、規格性の強くなっている「畿内系」

高杯である。口縁が屈曲する位置によって細分を行った。口縁の途中で屈曲が変化して、外反傾向に立ち上がっていくもので1類とした。（遺物番号　372・803・1052他）

G2類　体部と口縁の間がわずかに屈折するが、内底面は杯状を呈しているもの。（遺物番号　1049・1051）

H類　皿状に大きく開く口縁部で受部のほとんどを形成するもので、脚柱部の接合部分でわずかに屈曲が変化しているものである。受部片のみの検出であり、脚柱の成型は不明である。第27・28号住居址から出土している。（遺物番号　992・1024他）

I1類　受部の底面の位置で直角に近く屈折しているもので、口縁は外弯して立ち上がっていくもの。（遺物番号　948）

I2類　受部の底面がやや立ち上がる形となっているものでまとめた。（遺物番号　745・984）

I3類　やや小形になるなるもので、体部と口縁の境が突帯状に成型されているものである。（遺物番号　144・407）

J類　本遺跡では出土例の少ないタイプをまとめたものである。（遺物番号　19・138）

K類　杯状を呈する受部に、ラッパ状の脚部がついているもので、埋谷、第28号住居址から完形土器が出土している。（遺物番号　145・1050）

L類　小型品の高杯で、完形の資料は得られなかった。受部が杯状を呈しているもので、棒状の脚柱が接合される。（遺物番号　569・993）

M1類　小形高杯を一括してM類とした。受部と口縁の境が屈曲しているもので、I類に分類しているものの小型品である。（遺物番号　450・1057）

M2類　受部が屈曲しているもので、第16号住居址からの出土である。（遺物番号　746）

M3類　受部が杯状を呈したものである。（遺物番号　1061）

M4類　脚部が屈曲しているもので、赤彩が施されている1例がある。（遺物番号　746）

M5類　脚柱部が短くなっているもので、脚端部が大きく開いているものである。（遺物番号　23）

N類　ラッパ状に開く脚台が付くもので、体部は個体差が大きいものがある。杯状、カップ状を呈するもの等がある。（遺物番号　157・845・954他）

器台形土器

A類　器台形土器の検出は極限られたもので、その全形をうかがう資料はまた少ないものである。口縁帯を付けて擬凹線が巡らされているものは、埋谷から1点の出土があったのみである。脚台端部にも段が形成されている。（遺物番号　149）

B類　口縁帯が素文のものである。高杯器形に分類したB・C類の口縁部のみのものが器台になる可能性がある。（遺物番号　865）

C類　口縁部分が外反して伸びていくもので、受部の底面との間に段が形成されているもの。（遺物番号　1011・1012）

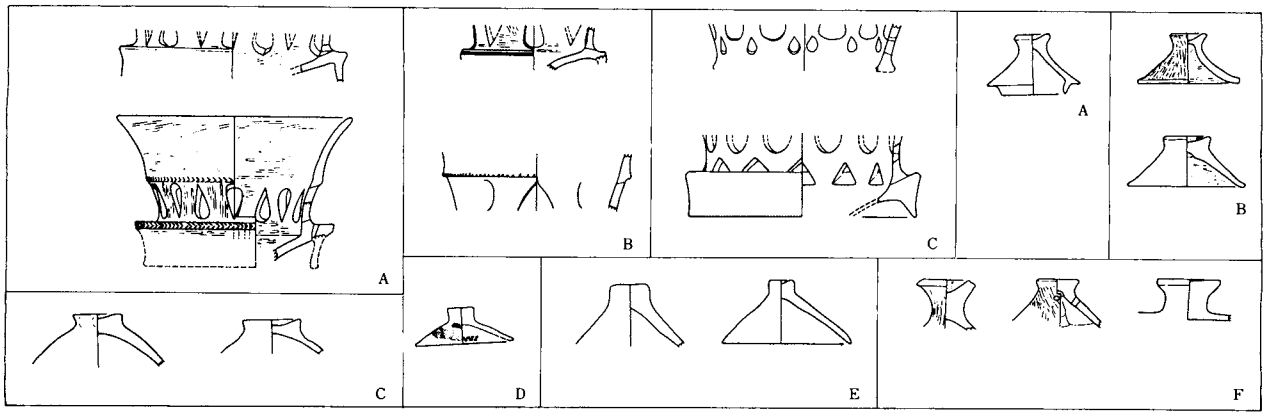
D1類　小型器台をまとめてD類とした。1類は受部の口縁が直線的に伸びていくもので、口唇部に面取りが施されている。（遺物番号　635）

D2類　受部がやや内弯傾向をもっているもので、口唇部は丸味をもって成型されている。小形器台で最も多いタイプである。（遺物番号　154・276・1026他）

D3類　受部が微妙な形で屈曲しているもので、第25号住居址の土坑から出土している。（遺物番号　1189）

D4類　受部が椀状を呈しているもので、4類とした。（遺物番号　275）

脚部片の出土は口縁部片に比較して多いのであるが、受部を想定するには至らず、大きく2類に細分できる程度である。直線的に開くものと（I類）、脚端部が外展傾向になる（II類）ものが認められる。（遺物番号　633・1013、446・1025）



第155図　装飾器台・蓋形土器の分類

装飾器台

A類　装飾器台の検出は各地点で見られたのであるが、全形を復元できる資料は極めて限られている。また、遺存状態も他の器種に比較して鍔の部分を除いて良くない傾向が指摘され、その中で穿孔を施している口縁部の遺存が良くないと言える。これは使用状況の影響が反映しているものと推定した。受部の底面にも穿孔が施されていることなどから、火を使用する祭祀器具を想定しているが、今後注意を払って観察していきたい。A類は涙滴形の透し孔が上下交互に置かれているものである。（遺物番号　638・958）

B類　受部の涙滴形の透し孔がやや大きくなっているもので考えた。（遺物番号　455・896）

C類　受部の涙滴形の透し孔が判然とはしないのであるが、同じ方向で置かれているもので、さらに小さな透し孔が加わっているものである。（遺物番号　500・748）

蓋形土器

A類　蓋形土器は小形品である事から、遺存状態の良いものが多くまた完形で見られるものも多かった。端部に返しを付けているもので、1例の出土である。（遺物番号　248）

B類　つまみ部の中が窪んでいて、やや弯曲した形で口縁が伸びていくもので、本遺跡では主体的な器形である。（遺物番号　159・575・751）

C類　つまみ部の径がやや大きく、内弯傾向に立ち上がるものである。（遺物番号　250・300）

D類　つまみ部の上が窪まずに成型されているもの。（遺物番号　851）

E類　つまみ部の上が窪まずに、口縁がやや内屈傾向に立ちあがっていくもの。（遺物番号　367・1015）

F類　上記の他に類例の少ないものでまとめた。（遺物番号　703・868・962）

2　出土土器の位置

石川県の弥生時代終末から古墳時代前期の土器編年は、吉岡康暢氏による「北陸における土師器の編年」1967年から出発したのであるが、その後地域開発に伴う事前調査によって膨大な発掘資料を加え、各地域ごとの編年に届くまでに精緻さを競っているのが現状と考えられる。

本遺跡出土の土器は、個々の形式を完形品として網羅するにはほど遠い資料であり、また、欠落している形式も考えられることから、先輩諸氏の考えに学び地域性を含めて、その変遷の方向をつかむ手掛かりとして位置づけを考えていきたい。北陸の編年観から見て、本遺跡出土土器は月影式期から高畠式期の時期幅に収まるものと想定されるが、この時期幅に幾つの土器型式を考えるかは、細分化の途上にある現状において、筆者が問題点を把握しきれていないことから十分には整理しえていない事をあらかじめお断りし、本遺跡に地理的に最も近い金沢市森本町塚崎遺跡の編年に沿って考えていくこととした。

なお、遺構としては検出できなかったが、包含層からではあるが古式須恵器が出土していることから本集落が

古墳時代後期の宮地式期にまで継続している可能性が高い事も併せて考えなければならないと言える。

甕形土器は7群30類に分類した。山陰系や近江・東海系、布留系の甕の出土はごく限定された形であり客体的な在り方を示していると言え、その細別は簡略なものである。最も多く出土したのは、有段口縁で擬凹線を巡らすものA類と同じく有段口縁で素文のB類および「く」の字状口縁の甕D類である。有段口縁で擬凹線の甕は、口縁部の形状によって7類に細分したものの体部、底部の形態を等閑視していることから、口縁部のみで時期差を判断するのはいささか冒険ではある。月影式土器の甕形土器を、吉岡康暢氏は「甕形土器の大部分は先端の外反が著しく、擬凹線でうめた幅広の有段口縁をなすタイプによって占められる」と指摘され（吉岡　76）、谷内尾晋司氏によって時期差を明確化する方向で整理がなされている（谷内尾　83）。口縁帯の幅広化、二段に渡る擬凹線の施文、口縁端部の外反、指頭圧痕等の変化そして肩部の張りや底部の形態、器表面の刷毛調整の変化によって、猫橋式土器からの変遷が後づけられている。本遺跡出土の有段口縁A類甕の変化を見ていく上で、さほどの齟齬をきたすものではなく有効な型式分類であると評価される。付け加えるならば、口縁内面の指頭圧痕が口縁帯の中央部分から位置を変えて口縁端部に移動していることが、手抜きの一定の方向性を示しているものと理解される。

A1類の甕は、内外面の段の成型がしっかりしていて、口縁部の器壁の変化がなく、直立気味に立つもので、口縁端部が外反傾向を示すA2類甕とともに塚崎III式（月影Ⅰ式）に考えられ、口唇部が尖り気味で外反するA3類が月影II式に位置づけられる。内面の段が消失し、また、口縁の下端の段が形骸化して「く」の字状口縁に近いA5類が、擬凹線甕の新相を示しているものと理解され、古府クルビ式期のものと考えられる。口頸部が「く」の字状を呈していて、口縁部内面が内弯傾向を示しているA6類は、前三者の出土遺跡数が枚挙に暇がない程各地で認められるのに比較して、現在的には類似例を呈示することができない。本遺跡においてもA5類甕とともに類例は少なく、出土地点も西地区埋谷や第1・23号住居址周辺部というふうに限定されていると言える。ひるがえって、本遺跡では外来系の甕形土器の類例が北加賀中枢部の遺跡に比較してきわめて小数である点から、本遺跡の地域的な独自性、保守性の強さを示しているとも考えられる。口縁部の内面が内弯傾向を示すのは、有段口縁が形骸化する事からも想定できるが、それ以上に外来系土器での特色として考え、谷内尾晋司氏の呈示した擬凹線甕形土器の変遷に加える形で考えたい。これは、在地甕形土器の扱いを一定程度考え直すものであり、地域的な問題を含めて進展させたいと考えている。

本遺跡出土の甕形土器の中で、庄内式土器の叩き調整を直接的に結び付けることは困難であるが、擬叩き調整と呼称して良いものが第1・2・10・12・29号住居址の覆土から出土している。口縁部の形状が把握できるのは第1・12号住居址例だけであり、その時期的な位置づけはいささか不安ではあるが月影Ⅰ式期の段階かと推定され、底部が比較的しっかりとした平底をなしていることに留意しておきたい。

有段口縁の外側の段が形骸化して「く」の字状に近い在り方をしているA5類を出土している遺跡は、野々市町御経塚ツカダ遺跡第80―1号住居址、金沢市押野西遺跡集石遺構、金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝上層、金沢市塚崎遺跡第6号竪穴、高松町二ツ屋遺跡などが上げられ、月影式の新しい時期での形態と考えられ、漆町編年第6群土器（白江式新）に位置づけられている小松市漆町遺跡群「金屋・サンバンワリ」298号土坑出土例も含めて考えられる。口縁下端が突帯状にになるA7類土器は、擬凹線の施文がそれ程顕著でないことから、有段口縁素文のB6類に含めて考えるべきかもしれない。

B類甕の口縁形態の変遷については、谷内尾晋司氏はA類甕とはやや異なる変化を呈示されていて、古府クルビ式期では口縁下端が突出する形態のものをあてられているが、本遺跡では三形態がA類甕に連動する形態を示していると理解される。B1類がA1・2類に、B3類がA3類に、B4・5類がA5類に類似した形を示していると考えられる。出土遺跡はA5類出土遺跡にダブルかたちとなり、金沢市無量寺B遺跡C土器溜り、金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝下層、金沢市松寺遺跡A1号溝等が上げられる。

B6類はA7類と同等に考えられるもので、頸部の内面に面を持っていることから、ややさかのぼって考える余地がある。口縁下端が突帯状に成型され、口縁幅が短く口唇部が尖り気味になるA7・B6類を山陰系甕形土器E

類に影響されたものとして考えるのは、いささか性急ではあるが、口唇部が尖り気味になっている点から月影式土器の典型としてのA2・3類甕に並行ないしは後続する形で考えていきたい。本類を出土している遺跡としては、金沢市南新保D遺跡A区、小松市吉竹遺跡第二次調査溝状遺構からの出土例を上げることができる。いずれも月影式から高畠式までの幅の中での検出である。

C類甕の出土数は各住居址で小数例が取り上げられる程度で、実測点数は32点を上げるに止どまる。C1類は第4・19号住居址からのものが大半で、内外面ともに刷毛調整が施されていることから、D1類甕器形とともに能登地域からの系統が考えられる。C1～3類は鹿島町徳前C遺跡、押水町宿向山遺跡第5号住居址に類似例が認められ、胴部の最大径の位置が中段にある球状の体部を呈している。内面の調整は刷毛とナデの二様が認められていて、ケズリが施されるものは小数例である。月影Ⅰ・Ⅱ式期での所産が推定され、塚崎Ⅱ古式期の志賀町鹿首モリガフチ遺跡のT18調査区甕形土器B6・8・9からの系統が考えられる。

D類器形は本遺跡においてはA・B類甕についで多い類で、口頸部の形態によって6細分したが、C類器形の一部を含むことも考えられる。口頸部の形態で、口唇部に面取りが施されるD1類、口唇部が尖り気味になるD3類、口縁部の内面が内弯傾向のD6類が編年における一定の指標としてとらえられるようだ。

D1類は各地域で検出されているもので、「く」の字状口縁で口唇部に面取りがなされ、口縁部を含めて内外面ともに粗雑な刷毛調整が施されているものである。塚崎Ⅱ古式期に位置付けられる金沢市塚崎遺跡、宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡での検出例は少なく、また、志賀町鹿首モリガフチ遺跡、七尾市奥原遺跡での出土例もさほど目立つほどではなく、かえって月影式期の金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝やさらに後出的な金沢市二口六丁遺跡での在り方が示唆的である。本遺跡では第2・29号住居址での出土が見られるところから、やや後出的なとらえ方が想定される。一方、口唇部が尖り気味で口縁部にナデ調整が丁寧に行われているD2・3類のものは、体部の形態が球状、長胴形、卵形を呈するものまでを含んでいるが、さらに特色をとらえた形で時期的な差が判断されていると言えるが、本遺跡では口縁部を中軸として分類したために幾分かの齟齬をきたしているものであり、さらに細分類が必要である。加賀市小菅波遺跡C区第1号住居址、漆町遺跡群「白江ネンブツドウ」7号溝上層、金沢市二口六丁遺跡、金沢市高畠遺跡土坑外出土土器に類似例が認められ、庄内式甕形土器に直接的につながるものではないが一定の系譜を推定させるものである。よりいっそう系統を考えられるものとしてはC5類が上げられるであろう。

D5類の甕は出土量としては少なく、第8・25号住居址からの1例ずつである。口唇部の微妙な形態から、C1・2類甕に系譜が考えられるものである。

D6類の甕は短い口縁部が内弯気味に立ち上がる「く」の字状口縁甕で、体部が球形を呈しているのが特徴である。同様の器形をなしているものに壷器形に分類したO3類を上げることができ、量的には多くはない。本遺跡では新しい時期に想定できる第2・8・28・29号住居址での出土が上げられるものである。甕形土器においては県下の並行遺跡での類似例を数え上げるのはいささか困難であり、小松市漆町遺跡群「白江・ネンブツドウ」7号溝上層例、金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝上・下層出土例を上げ得るにとどまるが、編年上の一定の指標ともなるものと理解される。

E類甕は有段口縁で口唇部が肥厚し、口縁下端が突帯状になる大形甕で、山陰系甕形土器である。形態によって2類に細分しているが本遺跡での出土例は、第3・4・9号住居址の3例のみで、いずれも覆土からの出土であった。橋本澄夫氏の高畠式土器の設定に含まれているもので、田嶋明人氏の漆町編年では細分化されて月影式新以降からの変遷が立てられている。出土遺跡は金沢市二口六丁遺跡、金沢市新保本町西遺跡第6号土坑、野々市町御経塚ツカダ遺跡81―1T、金沢市押野西遺跡E2区L4号土坑等が列記されるが、布留式甕形土器との共伴関係が推定できるものであり、本遺跡出土例に比較してやや粗略化しているものが感じられる。本類に並行すると考えられる壷形土器のⅠ1類は甕形土器に比較して量的に多いものであり、その変化も時期差を推察させるものがあると言える。布留式土器の甕に比定されるF類は、山陰系のE類甕と同様に出土量は限られたものであった。西地区の埋谷・第2・9・19・28号住居址からのもので、第28号住居址を除いて本集落の中では継続して営なわれ

た住居址に付いているものとして考えられる。口唇部の内面肥厚の形態から細分を行った。肥厚が口縁に対して並行しているものが先行し、口縁に対して角度を付けて肥厚しているものを新相を示すものと考えた。高畠式土器の標識遺跡である金沢市高畠遺跡ではF1類の形態のものよりはF2類の角度を付けたものの方が多いようである。高畠式の甕を出土する遺跡は近年増加してきたもので、高畠式土器の設定時期には限られたものであり、また、北加賀の金沢平野での検出が目立っていた。野々市町御経塚ツカダ遺跡81—1T、金沢市押野西遺跡E2区L4号土坑、金沢市南新保三枚田遺跡、同二口六丁遺跡、小松市漆町遺跡群等を上げていくことができるが、漆町編年では細分化が図られ月影期以降からの変遷が提示されており、本遺跡では出土資料が限られていることから単純には比定する事ができず課題として残した。

G類甕の出土は山陰系甕の在り方とともに出土資料の少ないもので、本遺跡では4例を上げるにすぎない。第8・14・28号住居址覆土からのものである。県下においても各遺跡で数例づつが出土している程度で、脚台を付しているのが通例の器形である。本遺跡では脚台部分を特定することはできなかった。金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝上層、同市近岡遺跡大溝中・下層、同市松寺遺跡B2号土坑、同市北安江遺跡C16溝下層などでS字状口縁の甕が出土していて、月影II式期から古府クルビ式期での所産に位置づけられている。脚台付の甕器形として分類からもれた第22号住居址出土の568があるが、脚台の形状が大きく異なっていることから不安がある。脚台を付したものとしては押水町宿向山遺跡第3号住居址出土例がある。有段口縁をつけた在地形の器形に脚台を付けているもので、共伴している高杯・器台から新しい段階が想定される。本遺跡においての在地形の変様として甕B6類の一部が想定される。

壷形土器は台付装飾壷から大形壷を含めて39種に細分した。大きくは有段口縁のものと「く」の字状口縁のものに分離して考えることができる。本遺跡では基本的に弥生V様式に特徴的な長頸壷を出土していないと言え、高杯器形においても円柱状の脚柱が出土していない事から本遺跡の開始時期を月影式期に求める指標となっているものである。

壷A類は有段口縁の素文のものでまとめ、口縁形状によって細分した。A1類は小数例の出土で、第9・16号住居址からのものである。口縁帯の部分が熱く成型され短い頸部がつくもので類例の乏しいタイプで、月影式期の金沢市無量寺B遺跡沼状遺構、同市南新保D遺跡A地区、あるいは高畠式期の金沢市田中B遺跡などとの類似が考えられるものの特定するには口縁部片のみであることから躊躇せざるを得ない。A2類は口縁部分が伸びて外傾して立つ大形品に想定できるもので、D1類に分類した装飾壷の口縁形態に類似するものとして考えられる。津幡町谷内石山遺跡第2号溝出土例が類似例としてあげられ、直立気味に立ち上っている点に相違が認められる。A3類は口唇部が尖り気味で定形化している短頸のもので、大・中・小形品が認められ、第5号土坑、第14・32号住居址で出土している。長頸壷のタイプとしては金沢市月影遺跡土坑に近似例を認めることができ、A4類に分類した短い頸部をはっきりと意図した類との間に時期的な差が生じる可能性が考えられる。A4類短頸壷は金沢市吉原七ツ塚墳墓群第13号墓出土例からの系譜が考えられるもので、擬凹線が施されているB1類とともに月影I式期に想定される。金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝下層、同市塚崎遺跡第6号竪穴式住居址覆土からのものに類似例が認められる。A5・A7類は台付装飾壷の傍系と位置づけられているもので、ほとんど例外なく赤彩が施されている。口縁端部が外反傾向を示しているA7類を後出的な位置で考えている。A6類の壷は2例の出土で（第5・11号住居址周辺）、A4類の小形土器に想定されるものである。A8類としたものはさらに細分が可能なもので、後出的な位置づけが推定される。

B2類は擬凹線を巡らしているもので、その体部の形態から細分が可能視できるもので、B1類より後出的としておきたい。

C1～3類壷口縁は弥生時代土器V様式の長頸壷の形骸化したものとして考えられるもので、出土例は各1例づつである。

D1類の台付装飾壷は西地区埋谷の最下層から出土しているもので、月影式期の通例の器形をもっている。口縁部分での検出は4例が上げられ、体部に加飾帯を貼付しているものも4例の出土があった。これらの定形的な台

付壷の他に、小形の装飾壷D2類が3例出土している。D1類は鹿島町徳前C遺跡、津幡町谷内石山遺跡第1号住居址、野々市町御経塚ツカダ遺跡80―3号住居址などで見られ、D3類は金沢市塚崎遺跡第6号竪穴式住居址、野々市町御経塚ツカダ遺跡81―2Tなどからの他に、富山県富山市杉谷A遺跡第1号方形周溝墓、同県小杉町中山南遺跡第2号住居址から良好な資料が認められている。宮本哲郎氏の整理ではその分布範囲は能登、北加賀、越中地域での出土が多く、南加賀では散発的と指摘されている。そして、装飾器台の在り方ともダブルことから月影式土器の分布圏およびその周辺地域という形での提言がなされている。

D3～7類は施文されている壷で、全形がとらえられたのは1例のみであった。D4･6は擬凹線に加飾を施しているもので、畿内系の二重口縁壷の系譜を引くD5・7類や素文としているF類とともに古府クルビ式期に比定できるものである。D7類、F類に類似する資料を出土している遺跡として、さきの金沢市古府クルビ遺跡の他に、金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝、野々市町御経塚遺跡（縄文時代集落址の南西端）、松任市法仏遺跡C群土器、宇ノ気町塚越第1号墳、押水町宿東山遺跡第1号墳などがあげられ、各地で定形化した古墳が作られていく時期に当てられている。

D8類、E類については類例を検索できなかったもの。なお、分類から欠落してしまった口縁が内弯傾向を示している第7・14号住居址出土の（417・675）のものをD9類として追加しておきたい。古府クルビ式期の「く」の字状口縁壷と考えておきたい。

G類は頸部が比較的長くなり口唇部に面取りが施しているのが特色で、西地区埋谷、第11号住居址から出土している。第5号土坑の大形品も含まれるであろう。月影式期の肩部の上端に突帯を貼付するタイプが推定される。金沢市近岡遺跡で類例が見られる。

H類は肩部が丸味をもってナデ肩状となる体部を持つもので、古府クルビ式期の段階での所産が推定されるが類似例を検討できなかった。

I1類は第3・4・6・22・23・29号住居址などから出土しているもので、有段口縁に突帯状のものがついていて甕、壷器形への分類に迷うものであった。完形品で見るごとく通常丸底を呈する。出土遺跡例は多く、金沢市古府クルビ遺跡D区中層、二口六丁遺跡大溝、高畠遺跡などがあげられる。

I2類とJ類は有段口縁の短頸壷で同一系譜に位置づけられ、時期的な差が頸部と器形に反映しているものと考えられる。後者が古くに位置付けられよう。

L1類は金沢市古府クルビ遺跡G区下層に類例が見られるもので、L2類とともに形骸化した器形を示しているもので、古府クルビ式期以降に位置付けておきたい。

N類の出土は第27号住居址の1例のみで、県下においては類例のとらえられない器形である。月影II式期以降の所産かと推定される。

O類の壷は口縁部が外傾して立つタイプでまとめたもので、O1類は脚台付で第21号住居址からのもの1例だけである。卵形を呈する体部の在り方は特異なもので、東海系の影響を反映しているものと考えられる。金沢市近岡カンタンボ遺跡竪穴状遺構出土の底部を欠いた大形品が類例として上げられる。O3類の口縁は内弯傾向に立ち上がっていくもので、甕形土器A6類、D6類に通底する在り方を示しているものと考えられる。第2・4・6号住居址から出土しており、類似例として松任市横江A遺跡包含層、松任市旭小学校遺跡、古府クルビ遺跡拡張区2およびD地区、畝田・寺中遺跡、野々市町御経塚遺跡を上げることができ、東海系の影響を反映したものとして考えることができる。

O2類は外傾して立ち上がり口唇部が尖り気味となる中･小型の丸底壷で、小型品での出土が多い。口唇部をつまみあげたように内屈させているものが、第16・28・29号住居址（遺物番号　16・759・1039）から出土しておりO4類として分類しておきたい。O2類は各遺跡から出土しているが、まとまりを持つものとしては二口六丁遺跡大溝の中形土器の一群と宮地式期に比定されている辰口町高座遺跡方形周溝状遺構が上げられる。口唇部をつまみあげるO4類が、O3類に伴うものとして考えたい。

P類は受け口状口縁のもので西地区埋谷からの1例が見られるのみである。

Q類はやはり第5号住居址の1例のみで、胴部最大径の位置が下位にあり長胴化していることから、本遺跡でも新しい段階のものと推定される。

鉢器形は変化の要素が判然とはとらえられない器種で、口縁の形態によって細分を行った。有段口縁素文の中形鉢B3類の出土が最も多かった。大形品の例は少なく、擬凹線をひくものは2例、脚台の付くものは1例、把手が付くものは破片を含めて4例の出土である。鉢器形の検出が多かったのは第23号住居址の周辺で12例をかぞえ、大形で五角形を呈する第23号住居址の性格の一端を示しているように思われる。坩器形とは断言は出来ないのであるが、第23・24号住居址の出土である941・980などのC類に分類した口縁がやや伸びているタイプや小型土器のC類などが考えられる。D類の鉢は把手がつくタイプで、塚崎遺跡などでの出土例が知られている。

E類とした有孔鉢の全形をうかがう資料の出土は限られていたものの、底部の部分の出土は各住居址に例外なく認めることができた。

角形土器は月影式の設定当時から知られているもので、押水町宿向山遺跡、金沢市下安原海岸遺跡での出土が上げられる。

手炙り形土器の出土は県下では初例であり、住居址床面での検出であることからも大きな意義を持つものと考えられる。

小形土器のA～F類は各遺跡ごとの変化が小さく、また、全形を復元できる率の高い資料でもあり、今後検討が必要な器形である。野々市町御経塚ツカダ遺跡の住居址群、金沢市近岡ナカシマ遺跡などでの資料と近似しているものである。

高杯は小形品を含めて14類22種に分類したが、さらに細分は可能である。A・B類は器台となる可能性も認められるもので、それぞれの出土点数は図示したものに限定されているとして良い。口縁帯を付けるA類、口縁部が角度をもって立ち上がるB類は、塚崎II古式の特色を備えているものと考えられるものの既述したごとく円筒状の脚柱部の検出がなく、また、同時期に特徴的なスタンプ文も見られないことからやや距離をおいて考えねばならない。

C・D類は有段口縁を持ち体部が鉢状を呈しているもので、長い口縁部が外反傾向に立ち上がるC類と口縁が直線的に伸びていくD類とに細分した。本遺跡では20例を越える最も多く出土したタイプである。C類は野々市町御経塚ツカダ遺跡82―2号住居址、金沢市塚崎遺跡第6号竪穴式住居址等に出土例が見られるが、D類は他の遺跡での検索が出来なかった。なお、本遺跡では高杯器形で口縁部の立ち上がりが強く深い鉢状のタイプが（御経塚ツカダ遺跡82―4号住居址）、きわめて少ない事が上げられ地域性を表すものとして注意しておきたい。

E類は段が消失して底面が平坦に成型されているもので、1例だけの検出である。

F類も出土数の少ない類で、C・D類の鉢状を呈する体部を持たないものであるが、器台形土器に含めたC類との判別が比較的困難な器種である。松任市法仏遺跡第6号住居址や金沢市七ツ塚墳墓群第1号墓からの系譜が考えられるものである。

G類は畿内系の影響下にあるものと推定され、脚部が一定程度円柱状を保ち大きく外折する脚端部が伸びていくもので、脚柱部がラッパ状に開いていて丈の低い宮地式期の高杯との差異を認めることができる。口縁部と体部の境界が稜として表われているものと体部全体が丸味をもって立ち上がっていくものとに細分した。並行期の遺跡としては金沢市高畠遺跡、古府クルビ遺跡、小松市漆町遺跡群「金屋・サンバンワリ」333A号土坑などが上げられる。

H類は脚柱接合部分から直線的に口縁部が伸びていき口唇部に面取りを施す東海系の高杯で、第27号住居址からのものである。口唇部を丸くおさめたものは第28・29号住居址から出土しているが、これをH2類としておきたい。口縁の内面に施文されているものが、押水町宿東山遺跡第3号住居址床面、金沢市南新保三枚田遺跡第8号土坑から出土しているが、月影式土器の高杯器形の指標とされるタイプの初めとして理解され、模倣形態としてH1・2類に分類したものが考えられる。H2類を出土している遺跡として、南新保D遺跡A地区、近岡ナカシマ遺跡2号溝上層などが上げられる。

Ⅰ1～3類は口縁部と体部の境界が鋭角的な稜を持つもので、全形をうかがえる資料の出土はなかった。C類器種とは脚柱部の形態を含めて別系統の変遷がたどれるものと理解される。県下では類例が乏しく金沢市北安江遺跡C16溝下層をあげるにとどまり、富山県小杉町南太閤山Ⅰ遺跡第3号方形周溝墓、同県小矢部市平桜川東遺跡第2号住居址出土例からの系統を考えたい。

J類は出土例の少ないタイプで、口縁端部が外傾するものは加賀市小菅波遺跡C区第1号住居址に類例が認められる。

K類も小数の出土で、体部と脚部が同じような大きさのもので、H2類との差は口縁部片だけでは判断が困難であるが、脚部との接合面での判断は可能で、東海系あるいは東日本系土器に系譜があるものと推定される。漆町遺跡群「白江・ネンブツドウ」第26号溝で類似例が認められる程度である。

L類の出土も少なく4例に止どまる。また、県下の遺跡においても検索が出来なかった。富山県上市町江上A遺跡に類似例が見られ、本遺跡の地理的な位置を示すものとしてⅠ類器形のものとともに注意しておきたい。

M1・2類は同一器種になるもので、口縁部と体部の稜が明確になるものとそうではないものとに分離した。本遺跡では体部断面が台形を呈する小形器台の口縁部片の検出ができなかったのであるが、M1類が相当する可能性が高いと判断できる。

M2類は浅い杯状を呈する受部を持つもので、後出的な位置が考えられる。M3類は金沢市新保本町西遺跡の第10号土坑、御経塚ツカダ遺跡81―1Tに類例が認められる。M4類は近岡遺跡大溝に小形器台ではあるがⅥ類に脚部が外弯して立つタイプが認められる。M5類は古府クルビ式期に所産するものであろう。

N類は高杯に含めるのはやや難があるもので、類例は判断が難しい。

器台で全形をうかがえる資料の出土は少なく、変遷をたどれるような形態分類はやや困難であった。A・B類はともに1例の出土で、本遺跡では古相を示すものと理解される。B類は谷内石山遺跡第2号溝に類似例が認められ、塚崎Ⅱ古式期の所産が推定される。C類は高杯F類に連動するような形を取るものと推定される。脚柱部片は20例以上が出土し、古手と考えられる有段となる資料が多く見受けられたものの、装飾器台となるものとの判別は困難である。

小形器台の出土例も多く、受部の形態から細分を行った。D2類に類似する資料は、金沢市押野西遺跡E区L4号土坑、漆町遺跡群「金屋・サンバンワリ」320号土坑、同「白江・ネンブツドウ」7号溝下層で見られる。杯状の受部となるD3･4類の出土例はとらえられなかったが、D3類は富山県下で通例的に認められる蓋と共伴していることからの推定が可能と見られる。Ⅰ・Ⅱ類に分類したものは小形高杯、小形器台の脚部片で総数にして30点を越えているが、その判別はきわめて困難である。

装飾器台は鍔の部分での検出が多く、全形をうかがえるものは少ないものの総数にして30例近くに上っておりほぼ各住居址に1・2例という割合で認めることができる。装飾器台は器台と壷器形が結合して月影式期に生まれたものとされ、月影式土器の大きな指標ともなっているものであるが、受部の涙滴状透かし穴の解釈についても装飾としてだけでとらえられているのが現状と言える。既述したように受部で火を使うをいう使用状況であれば、涙滴状の透し穴や底面に施されている穿孔についても燃焼を助ける機能が想定される。また、遺存状態においても受部での検出が困難であるということも頷けるように想像される。宮本哲郎氏によって変遷過程や分布圏の検討がなされていて、北加賀地域を中心とした100例近くの出土があるとの事である。最も古いものとして金沢市近岡遺跡大溝からのものがあてられている。形態の変化としては口縁部が長く伸び、脚部が矮小化して全体が縦長になっていくとのことである。遺跡ごとの差異は一般的に透し穴の大きさと数に現れると指摘されている。千葉県、福岡県などでの出土があるとのことである。大阪府亀井北遺跡B地区1号墓マウンド上面からの報告も知られる。宮本哲郎氏の分布圏の視点は、装飾器台と装飾壷を持っている地域が北加賀に限定されていることから、月影式土器の中核地域として把握できるのではないかとの興味のもてる提案である。

3　土器編年について

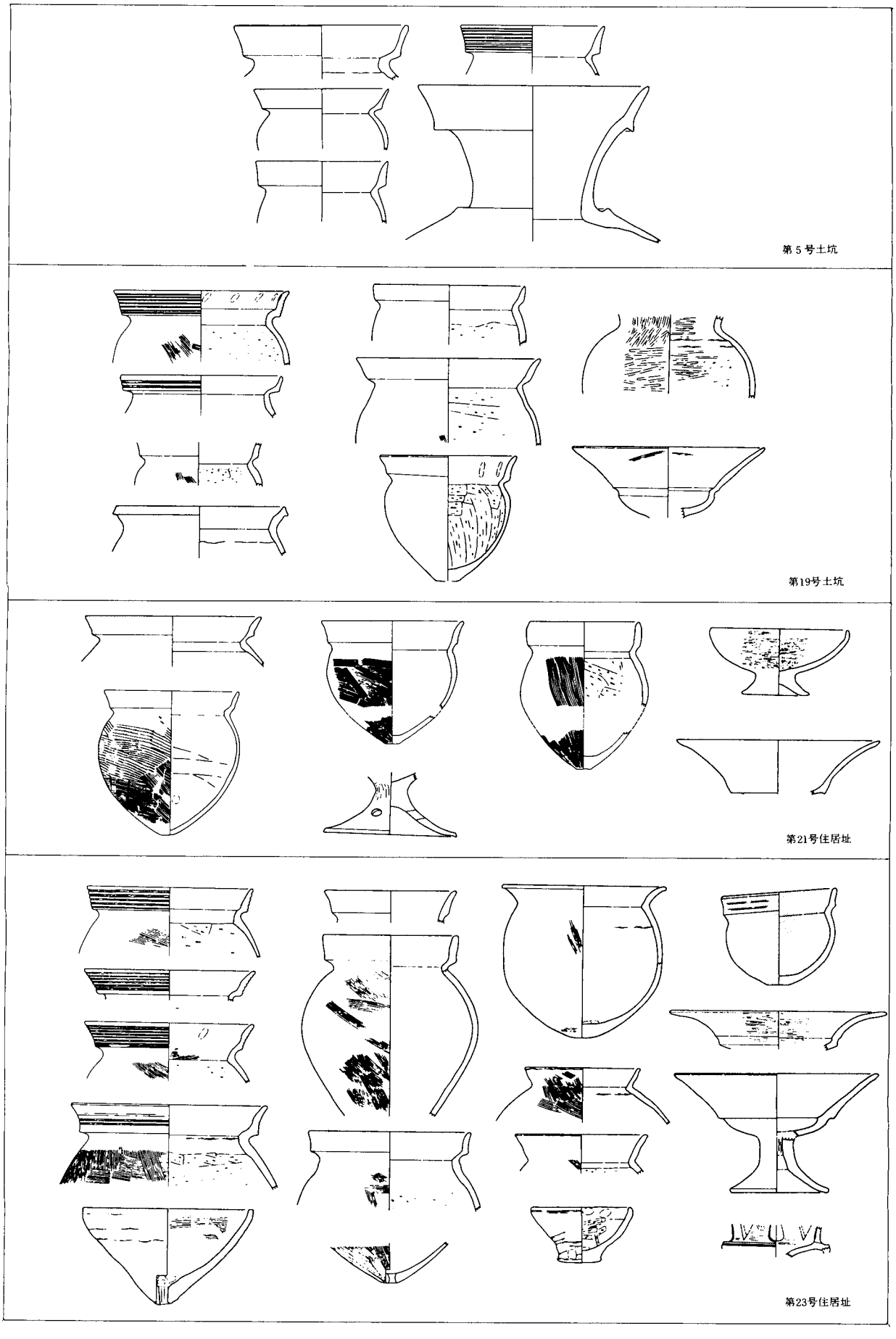
本遺跡から出土した土器を編年的に分別すると、塚崎II式期から宮地式期までの幅で考えることができるが、最も古い段階と最も新しい時期の資料はいずれも量的には少ないもので、本遺跡の始期と末期を示すものとすることができる。本遺跡の盛期は月影式期から高畠式期までの間に想定できるが、集落遺跡の出土土器の通例として土器の変遷は漸移的であり型式間の差異は微妙なものである。また、本遺跡の住居址の数例は同一地点で増改築を行い継続的に居住しているために、なお一層型式間の画期を把握するのは困難であった。さらに、本遺跡内での発掘調査地区が中核地域から若干距離を置いた地区に位置していることから、集落内の格差を十分に反映しているかどうか不明としなければならない。それは鉄器や管玉等の特殊遺物の所有が一定の指標として考えられるのであるが、本調査区では出土遺物による格差はとらえがたいと判断されるからである。以上の限定条件を考慮して、出土土器の編年を位置付け、幾つかの問題点を付け加えていく。

刈安野々宮Ｉ期として、猫橋II式（塚崎II古式）土器に比定されるもので考えたい。有段口縁甕Ａ1類の一部、高杯Ａ類、器台Ａ・Ｂ類が推定できるが、いずれの器種も出土量は限定されたもので、所産した遺構としては西地区埋谷をひかえた第32号住居址と最も規模の大きい第1号住居址が想定できるものの確実とは言い切れない。本遺跡の開始時期であり、第1・2平坦面の中核地点での展開を推定しておきたい。

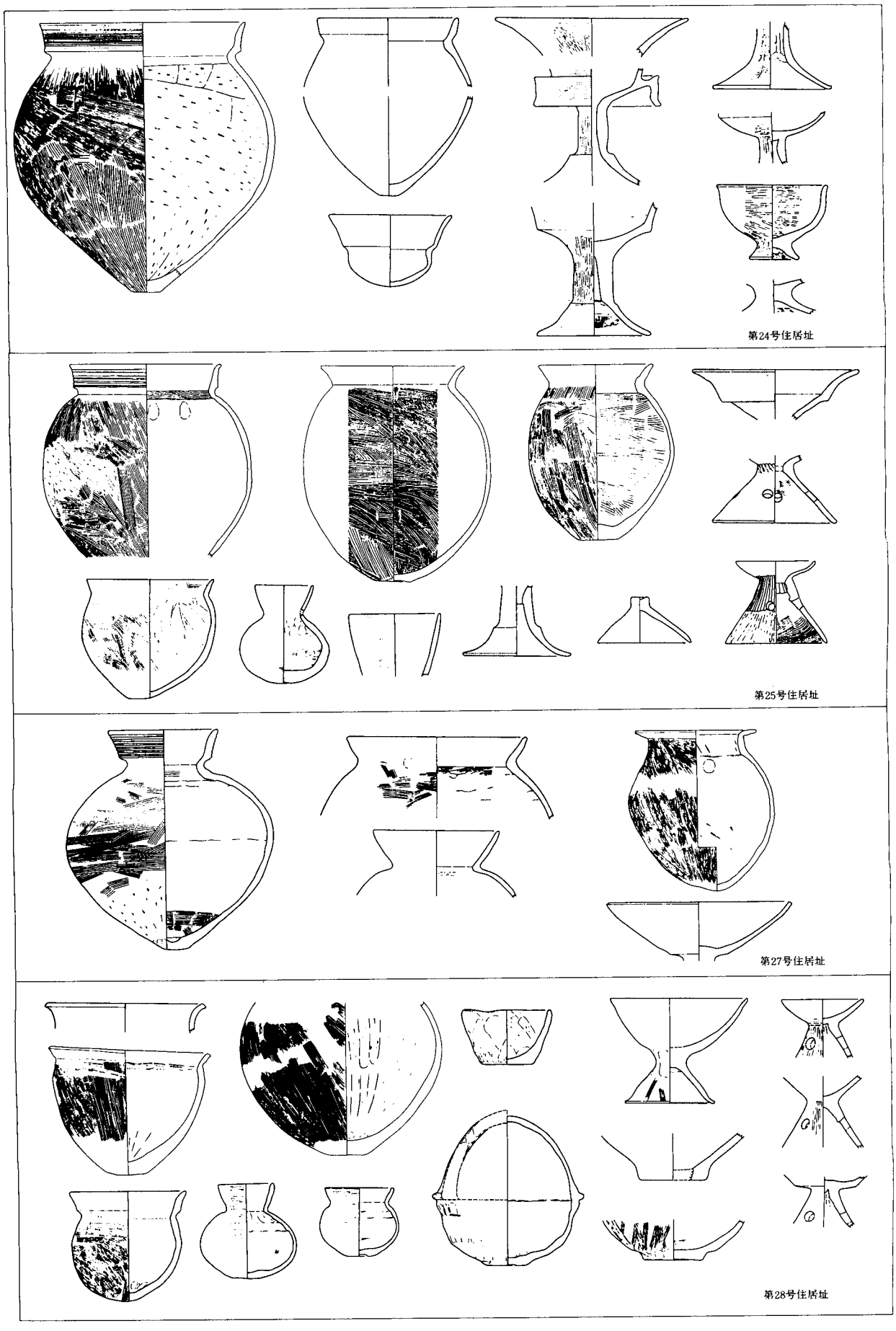
刈安野々宮II期として、月影Ｉ式土器に比定されるもので考えたが、筆者が誤解してとらえている可能性がある。有段口縁の甕形土器では、口縁帯が幅広で直立気味に立ち内面の段が明確になっているＡ1・2類、Ｂ1・2類があてられ、能登地域での月影式期の標識的遺跡である徳前Ｃ遺跡での主要な甕器形に類似するＣ1類や「く」の字状口縁甕のＤ1類、高杯Ｃ類、長頸壷の形骸化したＣ1～3類等が考えられるが、壷、鉢器形に関しては特定するのは困難である。月影Ｉ式土器の標準資料として谷内尾晋司氏は辰口町高座遺跡東調査区出土資料を上げ、金沢市無量寺Ｂ遺跡沼地状落ち込み、同市南新保三枚田遺跡出土土器が並行するものとされている。月影II式土器への過渡的な位置が付与されて、狭域的な地域においても型式の内容は流動的であると説明され、高地性集落を成立させた社会的変動期での特性を指摘しているが、塚崎遺跡で塚崎II式土器を新古の型式として設定し得なかった問題点を十分に乗り越えているとは考えがたく、流動的な地域性、型式内容を確定する事が今後の検討課題と思われる。本遺跡では10棟以上の住居が構築される時期であるが、後出する月影II式期との区分が困難である。

刈安野々宮III期としては、月影II式土器に比定され、在地的な器種構成でなるもので考えた。住居址の展開としては前段階からの継続と見られるもので想定し、10棟以上が含まれる。甕器形は口縁端部が外傾して尖り気味の断面となっているＡ3類、Ｂ3類を比定し、「く」の字状口縁甕器形は口縁が外反傾向のＣ5類を考えた。壷形土器はＡ3類、Ｂ1類が想定でき、Ａ4類はさらに細分が必要かと思われる。装飾壷のＤ1･3類が位置付けられ、Ｄ2類は先行する可能性が高い。鉢器形はＤ類が古くに当てられるものの、有段口縁のものは変化が微妙でありそれぞれを比定することはできなかった。月影Ｉ～II式土器として幅をもって考えたい。高杯はＤ類、Ｉ1類が推定される。並行する遺跡としては金沢市月影遺跡土坑、野々市町御経塚ツカダ遺跡80―3号住居址などが上げられる。

刈安野々宮IV期としては、月影II式土器から外来系の土器形式およびそれによって変様した在地系の土器を分離する形で設定した。1986年に小松市漆町遺跡群の報告書が刊行され、田嶋明人氏によって設定された漆町遺跡II型式5･6群土器に比定されるのであろう。金沢市近岡ナカシマ遺跡の調査報告では出越茂和氏によって2号溝出土土器が上層、下層出土として分離して型式設定が提案されているものでもある。また、押水町宿向山遺跡第3号住居址でもセット関係が把握できる状況が認められると言える。本遺跡では第8･27号住居址の床面からの出土資料が当てられる。甕形土器では最もその特徴を表しているのは、「く」の字状口縁で内弯して立ちあがっいくＤ6類のもので、在地系のＡ6類にその模倣形態を見ることができる。そして、有段口縁の下端部がある程度の段を保っている点に後出するとしたＡ5類との差異を見ていきたい。また、有段口縁甕器形の口縁下端が突帯状に成型されているＡ7類とＢ6類は基本的には同一と見て良いものと考えられ、山陰系の甕器形の特徴を取り入れた



第156図　遺構内床面出土土器(1/6)



第157図　遺構内床面出土土器(1/6)

ものとして想定できるのではないかと考えている。今後の検証課題である。中・小形の壷器形においても内弯傾向を示しているO3類が同時期に考えられる。高杯器形では口唇部が面取りされているH類が、宿向山遺跡第3号住居址出土の内面に条線を巡らしているタイプにつながるものとしてとらえられ、口唇部が丸味を帯びているものが在地の模倣として考えたい。つまり、外来系統の土器を引き金として月影式土器の解体が始まった段階に画期を設定するものである。従来の月影式土器のなかでは高杯H類は一定の指標として見られてきたものであり、前段階としている月影I式土器との峻別をも含めて考えていかねばならないと言えよう。

刈安野々宮V期として、従来からの古府クルビ式土器をあてた。有段口縁甕形土器はほとんど形骸化して「く」の字状口縁に限りなく近ずいてて行くもので、わずかに擬凹線が巡らされている。A5類・B5類の甕がそれである。「く」の字状口縁の甕器形は特定はできないもののD2・4類などの丸底を呈するものであろうか。壷器形では装飾をもった二重口縁壷D5・7類が指標として考えられている。高杯はG類およびI2類が想定される。標識的遺跡においても十分に器種を止揚しえなかった事に表れているように、壷器形を除いて器種構成を斉一的にとらえがたい時期であると言われている。前方後方墳が各地域で造営されていく政治的時代の反映を、土器にどのように表れているのかの考えていかねばならない。

刈安野々宮VI期として高畠式土器をあてた。布留甕のF類を指標とするもので、山陰系の甕E類、壷I1類や高杯G2類が並行するものとして考えられる。布留甕は口縁内面肥厚の状態によってさらに細分が可能と見られているものであるが、布留傾向甕についてはしぼりきれなかった。また、器台や坩形土器は特定するまでには届かなかった。

刈安野々宮VII期として宮地式土器を考えておきたい。明確な遺構としての検出はなかったものの、古式須恵器の杯、甕が出土しているからである。TK47式、MT15式に比定できるものと推定される。あるいは同時期に属する土師器甕を見落としている可能性もありうる。

第2節　集落の構造と変遷

1　住居址の分類

刈安野々宮遺跡で検出した住居址は40棟近くにのぼり、遺存状況は個々の住居址によって異なるが、調査区域外に展開していく4例を除いてほぼ完掘したものと考えている。4例の住居址についても規模や平面形の概略はとらえることができ、まったく想定できなかったのは第13号住居址と第16号住居址の2例のみと考えられる。住居址の平面形は隅円方形が大部分を占めていて、円形、五角形、方形を呈するものはごく一部である。隅円方形プランが卓越しているとはいえ、個々の住居址を比較するとその平面形と規模について差異が観取できる。床面積では10m²以下のものから100m²を越えるものまでがあり、煩雑ではあるが平面形を基にして形態分類を行ってみた。39棟の住居址から不明の住居址4例を除いた形で分類すると、次のように分類される。

I類	円形？	6本主柱？	104m²	第1号住居址　(1棟)
II類	五角形	5本主柱	90m²	第23号住居址　(1棟)
III類	胴張隅円方形	4本主柱	59m²	第9・24号住居址　(2棟)
IV類	隅円方形A	4本主柱	49m²	第3・6・29・30号住居址　(8棟)
V類	胴張隅円長方形	4本主柱	39m²	第21号住居址　(1棟)
VI類	隅円方形B	4本主柱	27m²	第27・28号住居址　(8棟)
VII類	隅円方形C	2・4本主柱	13m²	第3一B・25号住居址　(9棟)
VIII類	隅円長方形	2本主柱	7m²	第15・26号住居址　(3棟)
IX類	方形	4本主柱	35m²	第2・7号住居址　(2棟)

床面積は壁溝の内側の掘り込み面で計測し、柱穴、特殊ピットなどの部分を含んでいるものである点に留意していただきたい。面積的な比較では形態分類を外してみると漸移的な形で推移していくが、形態分類での比較では各類の平均であるが明確な数値で現れてくるといえる。面積が一定の法則のもとに増加していくもので、m²単位では10m²、坪単位では3坪がその基本的な単位として考えることができるようだ。

10m²以下では3棟、11m²以上で22m²以下では12棟、22m²以上から32m²以下では8棟、32m²以上から42m²以下では8棟、43m²以上から60m²以下では5棟、90m²以上は2棟という分布状況を示しているもので、面積的には22m²から42m²の範囲に含まれるものが16棟と最も多くなるといえ、本遺跡での主体的な平面規模と考えられる。

平面形で見ると、隅円方形プランが圧倒的な位置を占めていて25棟を上げることができ、北陸三県の弥生時代・古墳時代の住居址を検討された宮本哲郎氏らの成果から弥生時代終末から古墳時代初頭に限定される多角形（円形を含む）の住居址、古墳時代前期の高畠式期に顕著になると考えられる方形プランの住居址、そして、住居址内の特殊ピットが主柱穴を結んだ範囲内に置かれて平面形が胴張のプランを呈するIII・V類も先の限定された時期での所産とするならば、大部分の住居址は比較的等質な形で構成されていると見ることができる。

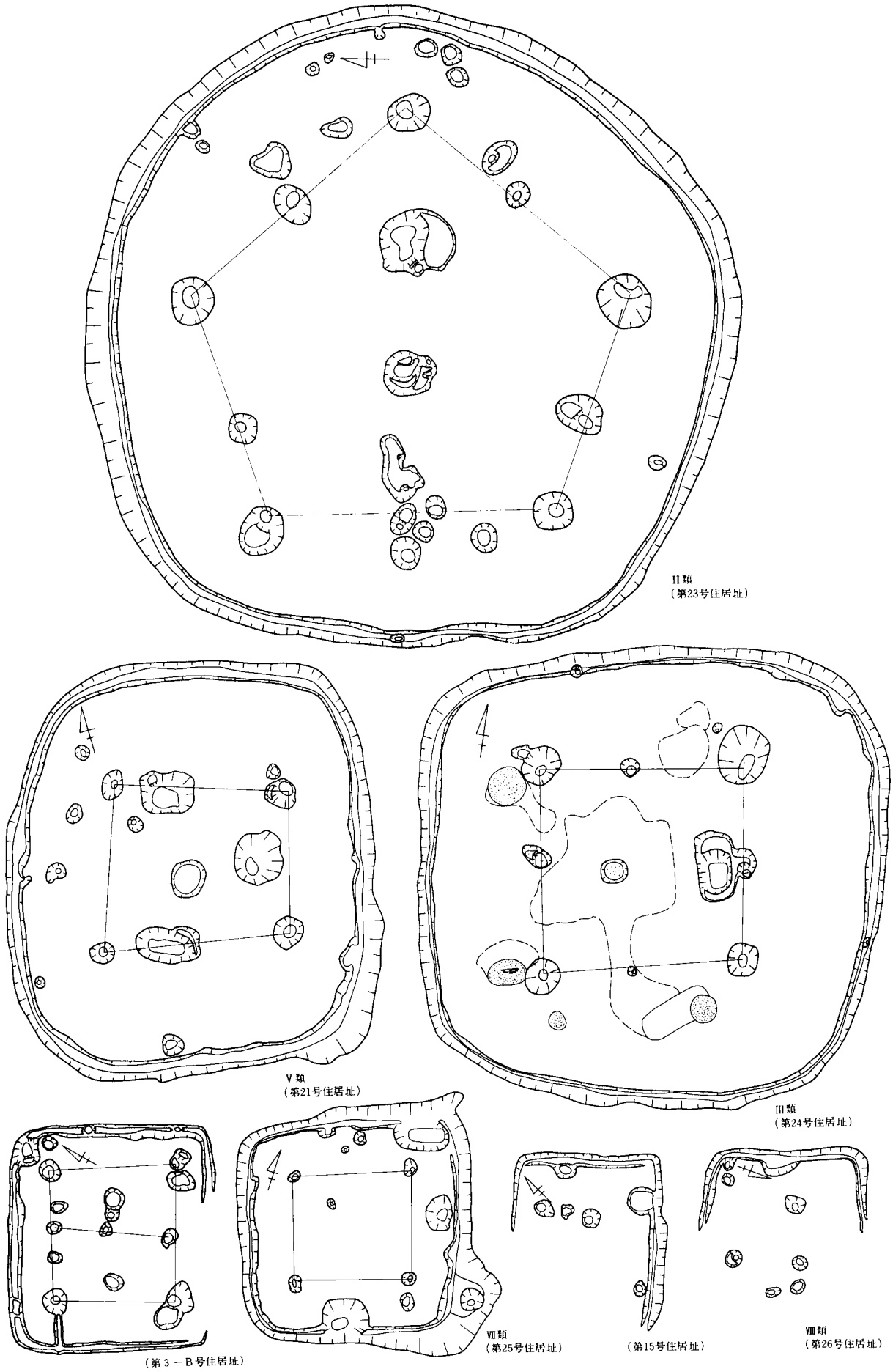
I類に形態的に類似しているものとして、七尾市奥原遺跡第3号住居址、同市赤岩山遺跡第16号住居址が上げられるものの、床面積では一回り小形といえる。同規模クラスでは野々市町押野タチナカ遺跡80—1号住居址が相当するようだ。II類のものは多角形として考えるならば、塚崎遺跡第6・10号住居址、加賀市二子塚遺跡第4・13号住居址が類似例として見られるようだ。I・II類の住居址はおおむね猫橋式期から月影式期の古い段階の所産時期が比定されるものと考える。胴張隅円方形となっているIII・V類のものは、御経塚ツカダ遺跡80—2号住居址、金沢市岩出遺跡第2号住居址、塚崎遺跡第11号住居址などが上げられ、特殊ピットが住居址の内側に入っている押野タチナカ遺跡82—2号住居址の在り方からI・II類のタイプと同時期かやや遅れる程度の時期差に位置付けることができるようだ。IV・VI・VII類は面積的規模によって細分したものであり、基本的な平面形は隅円方形で古墳時代初頭の住居址では通例的なものである。類似例としては御経塚ツカダ遺跡第81—1号住居址、宿向山遺跡第5～7号住居址などが提示される。月影式期での主体的な住居址形態で、多角形住居址に取って変わるものと考えられる。しかし、この類の中には4本主柱と2本主柱の例が見られ、平面的な規模の大小に分離して使い分

第5表　住居址一覧表

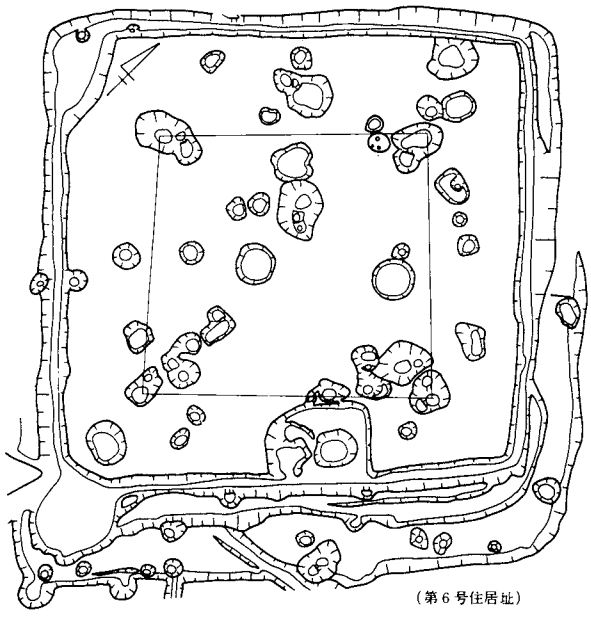
属性 住居址	地区	区画	形状	規模 外径	規模 内径	床面積	主軸方位	主柱穴	柱間	周溝	炉	特殊遺構	土器 履土	土器 床面	鉄器	分類	備考
第 1 号	中	M99	円形	1250	1150	104		5	550×530×500×370×330	○	○		○	○		I	
第 2 号	〃	M97	方形	620×642	600×590	35	北64度東	4	350×320×335×330	○			○			IX	
第 3 号	〃	L99	隅円方形	700×680	650×620	40	〃	4	230×225×220×230	○			○			VI	
第3-B号	〃	〃	〃	418×372	370×320	12	〃	2	150	○			○			VII	
第 4 号	〃	I 96	〃	560	508	26	北20度東	4	230×220×210×220	○		68×55	○	○		VI	
第4-B号	〃	〃	〃	430	400×380	15	〃	4		○		68×72	○	○		VII	
第 5 号	〃	E95	〃	490×440	460×—	(21)	北65度西	(4)	210×—	—	—		○	○		VI	
第 6 号	〃	B94	〃	680×640	590×570	34	北42度西	4	230×290	○	○	137×108	○			IV	
第6-B号	〃	〃	〃	720×—	710×—	(50)	〃	4	350×390	○	○		○			〃	
第6-C号	〃	〃	〃	660×—	—	(41)	〃	4	350	○			○			〃	
第6-D号	〃	〃	〃	650×—	—	(40)	〃	4	280×300	○		土壌120	○			〃	
第 7 号	〃	C99	長方形	720×625	680×600	41	北20度西	4	345×325×330×335	○	○	115×95	○	○		IX	
第 8 号	〃	B101	隅円方形	(540)	500×—	(25)	北15度西	—		○			○	○		VI	
第8-B号	〃	〃	〃	(500)	460×—	(21)	〃	—		○			○			〃	
第 9 号	〃	B103	〃	(770×800)	700×750	53	北43度東	(4)	390×420	○			○			III	
第 10 号	〃	D102	〃	(380×—)	360×—	13	北5度西			○			○			VII	
第10B号	〃	D103	〃	420×—	400×—	(16)	〃			○						〃	
第10-C号	〃	F103	〃	360×—	290×—	8	〃			○						VIII	
第 11 号	〃	P101	〃	490×420	420×380	16	北62度東	4	250×200×200×200	○		44×50	○	○		VII	
第 12 号	〃	Q101	〃	400×—	340×—	12	北0度	(2)	120	○	○		○	○		〃	
第 13 号	東	Q103	〃	—	—	—		—		○	—		—	—		—	
第 14 号	中	H102	〃	480×—	430×—	18	北18度西			○		64×58		○		VII	
第 15 号	〃	I 92	隅円長方形	(320×270)	300×240	7	北32度東	(2)		—					○	VIII	
第 16 号	〃	M94	隅円方形	—	—	—	—	—		○						—	
第 17 号	〃	L90	〃	600×—	550×—	(30)	北3度西	4	280×270×290×295	○		100×85				VI	切合？
第 19 号	〃	E104	〃	570×—	500×—	(25)	北5度西	—		○				○		〃	
第 20 号	〃	L103	〃	440×—	390×—	(15)	北0度	—	—	○	—		—	—		VII	
第 21 号	東	O104	胴張方形	740×660	660×590	39	北12度西	4	300×140×260×300	○	○	120×63、92×70	○	○		V	土坑
第 22 号	中	E99	（方形）	(400×—)	—	—	—	—	—	—	—		○	○		—	
第 23 号	東	I 107	五角形	一辺700	1080×1070	90	北1度東	5	420×520×520×420×520	○	—		○	○		II	中柱
第 24 号	〃	E108	胴張方形	840×850	760×770	59	北0度	4	360	○	○	130×70	○	○		III	〃 焼失
第 25 号	〃	B109	隅円方形	420×420	360×360	13	北18度西	4	210×200	○	—	80×70	○	○		VII	土坑
第 26 号	〃	D110	〃	(330×350)	260×—	(7)	北21度西	2	150	○	—		—	○		VIII	
第 27 号	〃	E112	〃	585×564	510×520	27	北27度西	4	260×260	○	○	90×90	○	○	○	VI	
第 28 号	東	B118	〃	600×600	530×510	27	北26度西	4	240×240	○	—	120×80	○	○		〃	
第 29 号	西	U78	〃	723×780	650×750	49	北70度西	4	390×410×390×380	○	○	—	○	○		IV	切合、貼床
第 30 号	〃	〃	〃	700×700	670×660	44	北57度西	4	300×320	○	○	130×110	○	—		〃	〃 〃
第 31 号	中	A95	〃	—	—	—	北35度西	—	—	○	—	—	○	—		—	
第 32 号	西	U79	〃	630×650	610×600	37	北57度西	4	290×310	○	○	140×90	—	—		V	切合

第6表　掘立柱建物計測値一覧（単位　m）

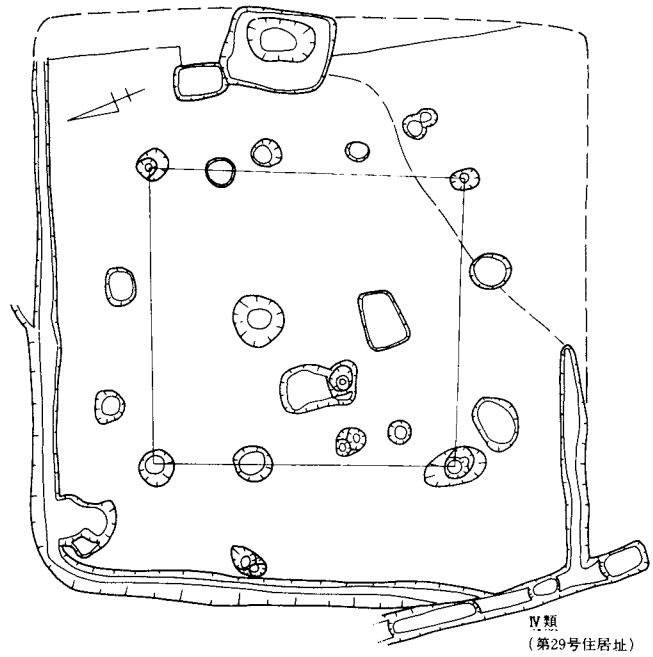
建物番号	地区	区画	柱間	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	桁長	梁長	面積 m²	面積 坪	方位	時代	備考
第 1 号	中	F97	2×4	2.00 1.80	2.70	7.60	5.40	41.04	12.4	北17度西	平安	
第 2 号	西	W78	2×5	21.0～29.0	3.60	11.50	7.20	82.8	25.1	北87度東	中世	
第 3 号	中	C103	1×2	1.50 1.80	290 270	3.30	2.90	9.57	2.9	北2度西	古墳	
第 6 号	中	I 101	2×(2)	1.70	2.05	3.40	41.0	13.94	4.2	北10度西	〃	布掘
第 5 号	中	I 97	3×(2)	1.90 1.80	—	5.35	—	(28.6)	(8.6)	北53度西	〃	布掘



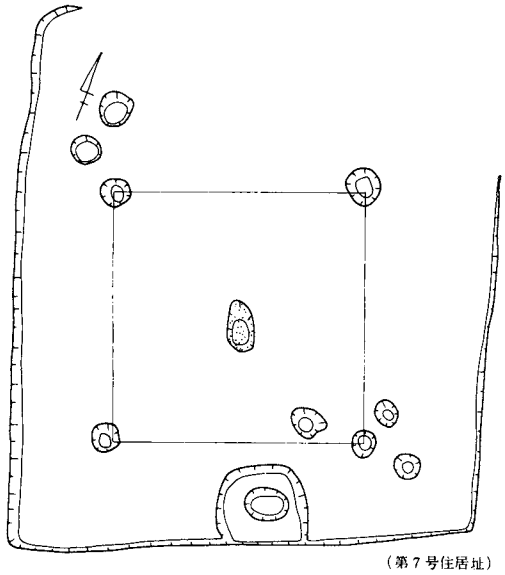
第158図　住居址の分類(1)



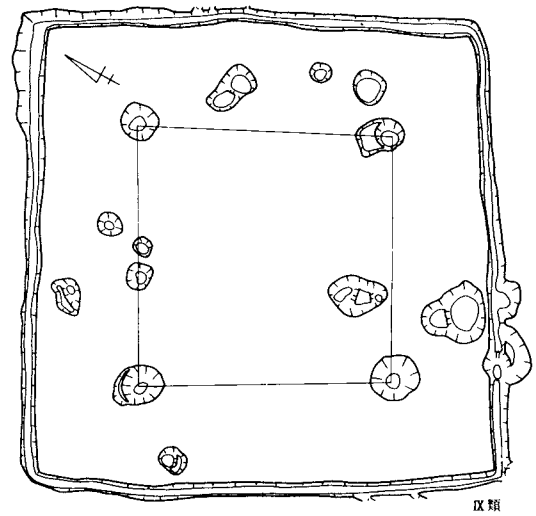
（第６号住居址）



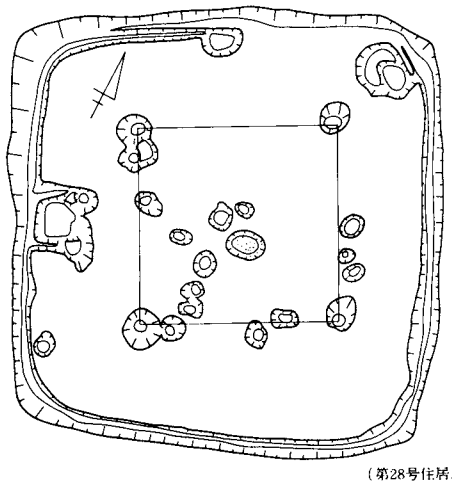
Ⅳ類
（第29号住居址）



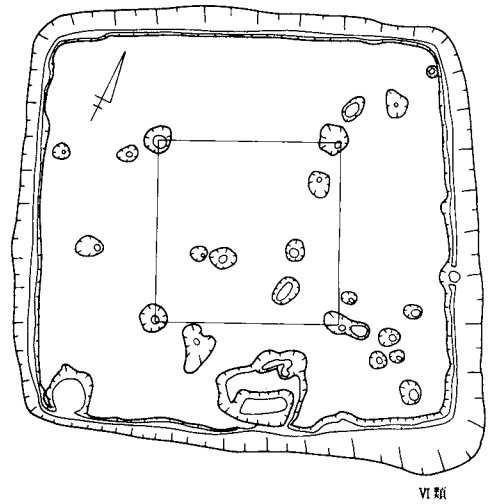
（第７号住居址）



Ⅸ類
（第２号住居址）



（第28号住居址）



Ⅵ類
（第27号住居址）

第159図　住居址の分類（２）

けられているとはとらえられないようだ。Ⅷ類の長方形で小形のタイプでは通例的に2本主柱であることなどから、長方形プランを呈する場合での選択がなされていると考えたい。奥原遺跡第2号住居址、宿向山遺跡第3･8号住居址、宿東山遺跡第1･5号住居址、御経塚ツカダ遺跡80―4号住居址などが類似例として見ることができる。時期的には猫橋式期から古墳時代前期と幅広く考えておきたい。地域的な差異や集落内での個々の在り方は、今後の検討課題であろう。

壁溝は第5号住居址を除いた残りの全てに、なんらかの形で巡らされていた。壁溝の幅、深さは個々の住居址によっての差異は小さいといえ、住居址の大小に拘りなく同じような施設が作られていた可能性が高いと言えるが、第19号住居址のように幅が30cmを越えるものも認められる。また、第1号住居址のように壁溝の掘り込み面の幅が不規則で小ピットを持つものがあり、壁溝の性格を推定させる。

住居址の掘り込み面から外側の傾斜面に向いている位置に、溝が施設されている例が認められた。第4・9・11号住居址の斜面側に幅30cm程度の規模である。しかし、掘立柱建物と複合しているものに第4・9号住居址が上げられ確実とは言えない。掘立柱建物の第6号では明瞭であり、掘立柱建物に付いたものである可能性が高いと考えられる。西地区の第30号住居址の西側に掘り込まれているものは、丘陵の端に位置していることから季節風を避けるための施設かと推定したが、東地区の標高の高い住居址群では認められず、さらに検討が必要である。
炉址は39棟の住居址のうち11例にとどまっている。金沢市塚崎遺跡の25棟の住居址のうち炉址のあるのは6棟だけという割合に近い在り方と言える。本遺跡の炉址は第1号住居址例のように床面が固く焼けついているというタイプと第7号住居址のようにピット状に掘り窪まれているものとに分けて考えることができる。検出した炉址で火をたくという行為が日常的になされたのか、特別な意義を持っていたのかの判断は容易には下せないが、検出した住居址の過半以上で炉址が検出できない在り方は深い意味をもっていると考えられる。炉址の位置は住居址の中央部に位置しているのが通例で、中央から外れているのは第1号住居址のみである。炉址そのものや周辺で特別の在り方を想定できるものはないと考えている。住居址から離れた位置での焼土の発見は皆無である。なお、消失した住居址として第24号住居址が上げられる。

主柱穴は小形住居址のⅦ・Ⅷ類が2本柱で、大形住居址のⅠ・Ⅱ類が5・6本柱であるほかは4本主柱が基本的な形である。Ⅱ類と胴張となっているⅢ類とが中柱を立てているが、中柱の位置が揃えられているものの主柱穴間の中間ではない点が注目される。柱間の距離は第1号住居址例が不明確ながら最も広く550cmを測り、次いで広いのは第23号住居址の520cmである。400cm前後のものは第9・29号住居址の2例だけで、他は200～300cmの間におさまるものが大半である。2本主柱穴の第15号住居址は最も距離が短く120cmを測る。柱の径がとらえられたものは皆無であるが、大形の住居址である第23号住居址では柱穴の掘り方も大きく70～100cmを測り二段掘りとなっているのが通例であるが、第9号住居址例のように住居址の内側の掘り方が直線的になっていて、柱を立てる際に外側から持ち上げたと推定されるものがある。大勢の人々で立てたものと考えられる。一方、小形の第12・25住居址では径が18～30cmと細くなっていて柱の径に極めて近い値が推定できるものは、数人の力で立てられるところから径の小さな掘り方のほうが合理的に対応できたものと想像される。

弥生時代終末から古墳時代前期で北陸の竪穴式住居址を特徴づけているのは、特殊ピットであるが、本遺跡においても17基の多数が検出された。加賀市片山津玉造遺跡で管玉未製品や碧玉剝片が周辺で検出され、白泥状のものが発見されたことによって管玉製作用の施設としてとらえられたことによるものであるが、塚崎遺跡の報告書で小嶋芳孝氏によって再検討が提起された如く、北陸地域の玉造遺跡に限定されるものではないようである。本遺跡では管玉は表採資料として3例が知られているだけで、管玉未製品および碧玉の検出も認められず、玉造を行う集落ではないことが現段階では確実である。塚崎遺跡では3棟の住居址に見られ、主柱穴を結ぶ線上にある例と住居址のコーナー近くへ移動している2例があるが、集落そのものが本遺跡より古くに位置づけられることから、特殊ピットの移動の形を明確に考えていくことができるようである。小嶋芳孝氏の検討では、弥生時代中期に西日本の各地で特殊ピットが住居址の中央付近に認められ、北陸地域では弥生時代後期から確実となってくるもので、時期的に新しくなると壁際に移動していくという在り方を示すとされている。現在までに報告され

ている遺跡の数は近年増加の傾向にあるが、玉造と直接結び付けられるところの資料は皆無のようである。野々市町御経塚ツカダ遺跡、同町押野タチナカ遺跡、金沢市西念・南新保遺跡、加賀市二子塚遺跡、津幡町谷内石山遺跡、宇ノ気町上山田遺跡、宇ノ気町塚越遺跡と加賀地域での検出が目立つ形となっていたが、近年では口能登地域の押水町宿向山遺跡、同宿東山遺跡、同竹生野遺跡等での検出が知られてきた。しかし、現在までのところ七尾市奥原遺跡や高井山遺跡などの能登地域では検出されていないようであり、地域性の一端を示しているようである。また、宿向山遺跡と宿東山遺跡出土例は月影式期の新しい時期かさらに下る可能性が考えられ、能登地域への導入は加賀地域と時期差があるように思われる。

本遺跡の特殊ピットは、胴張隅円方形プランを呈する第21・24号住居址が主柱穴を結んだ線上ないしは内側に位置していて、平面形が方形ないしは楕円形をなしている。主柱穴を結んだ内側に位置しているものとして、第23・30・32号住居址が上げられる。以上の5例は本遺跡の中でも古い段階の位置づけが考えられるものである。いずれのピットも覆土には特殊な状況は認め難く、若干の炭化物を見るのみで開口していたとする積極的な所見は得られてはいない。これらは方形プランで、中に円形のピットを掘り込むという定形的な特殊ピットではないことに留意が必要である。

住居址のコーナーによって作られているものとしては第6— B号住居址と第25号住居址例があげられるものの、第25号住居址例は覆土の状況から土坑墓の可能性が推定できるものであり、前者は開口していた円形プランのものである。以上の例を除いたものは定形的な特殊ピットで、壁の一辺の中央部に接する形で作られているのが通例である。覆土の在り方としてはピットの最下層に黒色土が堆積している例が多く、開口していたものとしてとらえることができるようである。第25号住居址で検出した例は、特殊ピットの上に甕形土器をうつ伏せにした状態で複数が併置されていたことから原位置を保っているものと推定でき、特殊ピットに蓋をしたものの上に甕が並べ置かれたものと想像される。片付けられた土器は、装飾壷や高杯といった祭祀用のものではなく煮沸形態の土器であることから日常的な機能を持つものと推定される。これらの状況から特殊ピットは食糧を貯蔵するためのピットで二段掘りとなるのは蓋を置くためのものであろうと想像される。

本遺跡では新段階に位置づけられる第27・28号住居址出土例が平面形が崩れ浅くなってきている点が指摘される。

押水町宿向山遺跡の第3号住居址の長方形二段掘り土坑は、砂利や地山土でないもので埋め戻されているとの状況が認められる性格不明の特異なものであるが、第6・14号住居址例のように開口していたものには、ピットからやや離れて溝遺構が作られているという形態をもっている。同様の遺構は宿東山遺跡第18号住居址でも検出されており、その性格を含めて地域性を表すのか時期差を表すのかは今後の検討課題である。

2　集落の構造と変遷

本遺跡で検出した39棟の住居址は、同一地点で改築している第1・4・6・10・29号住居址群の五地点と住居址が接近している第8号住居址の一地点を除いて、適当な空地をおいて配置されていると言える。間隔は住居址にしてほぼ1～2棟分であり、集落内部の規制が貫徹しているものと解釈される。後出的な時期が与えられる第28号住居址が、単独に近い在り方を表している事にも示されていると言える。

住居址の主軸方位は東地区の第三平坦面に構築されている住居址群で見られるように、大部分は地形的な状況を考慮しているものと理解できる。等高線の流れを越えようとしているのは第1・9号住居址群で、ともに集落内部で特殊な地位を占めている可能性が考えられるものである。

出土土器によって住居址の帰属時期を想定すると、次のように推移したものと考えられる。西地区の埋谷出土資料はは検出した3棟の住居址のみとするには量的に多いものと見られるが、各時期を網羅していることから幅広くとらえておく。

刈安野々宮Ⅰ期では第1・32号住居址が構築された可能性を持つものの、第一・二平坦面の中核地域での展開が予想される。

II期（月影Ⅰ式）では大形住居の第1・23号住居址と小形の第4・19・31号住居址が考えられ、それぞれが複数で構成されると考えるならば、第8・31号住居址周辺での展開が予想される。

III期（月影II式）は最も住居の数が増加する段階で、第30・6・15・17・8・7・22・4・3・11・12・19・21・23～25号住居址の16棟が想定され、位置的な状況から7ブロックに分離してとらえることができる。第30号、第6号、第17号（15号）、第22号（7・8・10号）、第3号（4号）、第21号（11・12・13号）、第23号（24・25号）の7群である。第6・7号の群は未発掘区の展開によっては変化する可能性がある。前段階から継続している5群に、新たに加わった2群はともに中核地域から距離をおいて配置されているのが特徴としてとらえられる。刈安野々宮III・IV期の祭祀的土器として装飾器台が考えられるが、7群の個々の住居址が所持している状況が認められ共同体的祭祀土器とは考え難いようである。

IV期は第29・6～8・14・2～4・16・19～21・23・24・26・27号住居址が想定され、7群が考えられる。第17号住居址の群は解体し、第2・23号住居址の群が棟数をふやし、第21号住居址の群は数を減らしている。

V期（古府クルビ式期）では各群は棟数を二棟程度に減らしている。第29・4～6・2・9・14・21・28号住居址が想定される。第5・9・28号住居址が新たに加わる他は前段階からの継続で、群全体としての力も弱体化していくととらえられる。一大勢力であった第23号住居址の群は途絶してしまう。

VI期（高畠式期）では第14・21号住居址の群を除いた形で前段階の群が継続しているが、住居址の平面的規模の格差はほとんどなくなっていると考えられる。II期から命脈を保ってきた第29・6（5）・3（4）・9号住居址の4群と第28号住居址が想定される。

VII期（宮地式期）における住居址は検出できず、刈安野々宮の集落そのものが中核部に縮小している可能性が考えられる。

掘立柱建物は3棟が中地区で見られ時期的に特定しなかったが、II・III期の前半の段階での構築と推定しておきたい。

以上の集落の変遷から、刈安野々宮遺跡は月影式土器という地域色を濃厚に打ち出した時期において最も繁栄し、外来系土器の移入が顕著になる段階から徐々に力を失っていく状況がとらえられる。そして、主として畿内系土器によって席巻された段階において、地域の自立的な文化基盤をも喪失する事態となったものと考えられる。それは、高畠式期の集落から畿内的祭祀にもちいる鍬形石や車輪石の製作が始まっていることに、端的に現れていると考える。地域色を弱体化させた要因として、鉄を基礎とした経済的な事由やそれにかぶさるところの政治的な背景が想定されている。

第3節　中世地下式坑の位置について

西地区で検出した中世に所属する大形の掘立柱建物は、他の集落遺跡（門前町道下元町遺跡、穴水町西川島遺跡群など）で通例的に見られるものとは、柱穴の掘り方や柱間の在り方が大きく異なっているものであった。各種の遺物を包含していた井戸にしても深さ8mを越えるものであり、地形的な条件を透徹した異常なものが感じられる。これらは掘立柱建物に深く関与している地下式坑の性格に起因しているものと推察される。本遺跡内には式内社に仮定されている野蚊神社があり、中地区で検出した第1号掘立柱建物が平安時代に所産しているとの調査成果の延長として、第1章に掲げた18世紀代の古文書に記載されている堂宇が並び建つとの伝承が確認される可能性が高いものと評価できる。

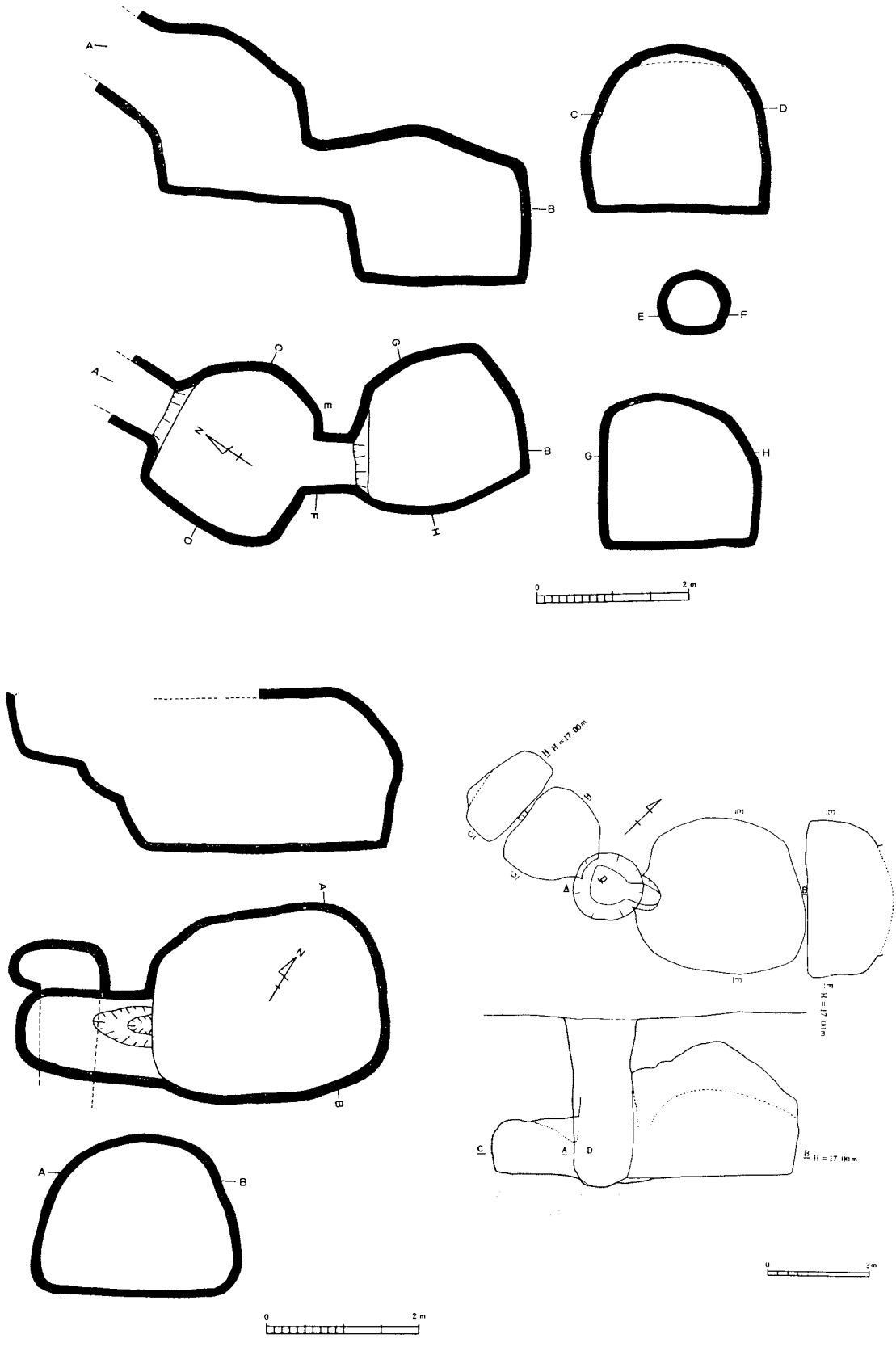
中世の遺物は13世紀代後半に位置づけられる珠洲焼などを含むものの、大部分は15世紀後半代に考えられるもので、一連の遺構の所産時期を示していると考えている。

県下における地下式坑の発掘は本遺跡を含めて7遺跡22基を数えるが、一部を除いては時代を特定しうる遺物の出土がなく、性格を含めて不明の部分が多い遺構とされてきた。

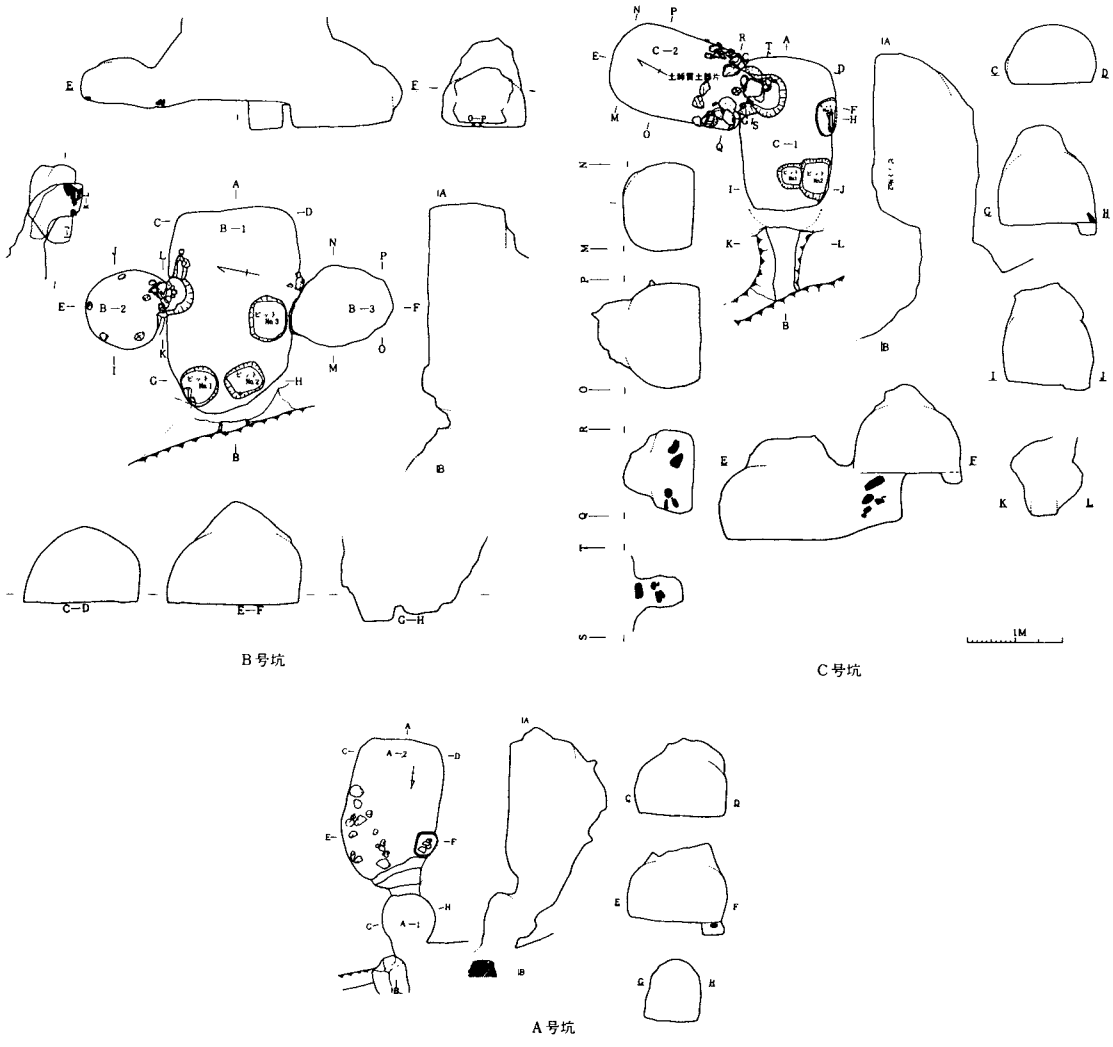
羽咋市柴垣ところ塚古墳に隣接する位置で、羽咋市教育委員会によって6基が調査されている。海岸段丘の高低差のある水田地帯に立地しているもので、4基は工事中に発見された。1号坑は奥壁部の幅が拡がる平面撥状を呈していて長径約3m、幅2m、高さ193cmを測る。2号坑は竪穴部と玄室部の高さが異なり階段状の施設が付いている。玄室の平面形は隅円方形を呈し、長径297cm、短径218cm、高さ190cmの規模を測り、竪穴部に小室が作り付けられている。3号坑は前室を付けるタイプで、竪穴部とは段差が付いている。平面は略隅円方形を呈し、長径208cm、短径186cm、高さ196cmの規模をもっている。約1mの段差をおいて不整方形プランの奥室が穿たれている。長径199cm、短径178cm、高さ185cmの規模である。4号坑も竪穴と玄室の床面とは約1mの段差が設けられているもので、玄室は隅円長方形を呈していて、長軸318cm、短軸210cm、高さ204cmの規模を測る。工事中に損壊した5・6号坑や天井部が落ちて小池となっているものが知られ、調査担当者の谷内硯央氏は数10基が所在する可能性を指摘している。いずれの坑にも時期を比定しえる遺物の出土は見られなかった。特徴としては入口部と玄室部との間に段が付き、玄室の平面規格がややくずれた形となっていると言える。玄室内では土坑や壁溝、ピットなどは見られず、竪穴部の閉塞においても特別な状況は認められないようである。

志賀町矢駄遺跡は丘陵斜面に作られた5基からなるもので、うち3基（7室）が砂防に係るダム工事に関連して、石川県教育委員会によって発掘が実施されている。A－1号坑は平面円形を呈し、径150×140cm、高さ約110cmを測る。A－2号坑は1号坑の奥壁に掘り込まれているもので、平面隅円長方形を呈している。長さ350cm、幅290cm、高さ165cmの規模で、玄室の入口近くで方形プランのピットが掘り込まれている。B－1号坑は隅円長方形を呈し、長さ約400cm、幅約250cm、高さ約150cmの規模を測り、玄室の入口に小ピット3個が掘り込まれている。B－2・3号坑は1号坑の側壁部に相対して穿たれている平面楕円形をなす小規模なものである。B－3号坑は径200×160cmの規模をはかる。C号坑も玄室が複室となるもので、入口部と玄室部の床面は約1mの段差がつけられている。C－1号坑は平面プラン隅円長方形で、長さ330cm、幅約200cm、高さ約150cmの規模を測る。玄室の入口近くに小ピットが掘り込まれている。C－2号坑は側壁の奥位置に掘り込まれているもので、閉塞状況を推定させる礫が散乱している。平面形はC－1号坑に類似している。長さ約280cm、幅約190cm、高さ約160cmの規模を測る。出土遺物は天目と土師質土器が各1点づつで、調査担当者の中島俊一氏は閉塞状況や小ピットの在り方から、中世の横穴墓として位置づけられている。

小松市津波倉ホットジ遺跡は、法燈寺跡との伝承のある地域で、宅地造成工事によって地下式坑6基が発見され、2基については北陸大谷高校地歴部が調査を実施している。1号坑は複数の玄室を穿つもので、竪穴部には閉塞石が積み上げられていた。前室は平面隅円方形状を呈し、長さ150cm、幅120cm、高さ120cmの規模である。奥壁の上部に小室が作られている。後室は前室の側面に掘り込まれているもので、不整方形プランを呈し、110×120cm、高さ約80cmの規模を測る。2号坑の玄室は平面隅円長方形を呈し、約160×120cmの規模を測る。1号坑か



第160図　県内発掘の地下式坑(羽咋市柴垣ところ塚・加賀市天神山遺跡)



第161図　矢駄遺跡の坑

らの出土遺物には美濃窯の鉄釉天目や香炉、越前焼などがあり、15～16世紀代の年代が推定されている。　以上の他には、羽咋市寺家ブタイ遺跡、加賀市天神山遺跡群D2調査区、加賀市美岬町千崎地内でそれぞれ1基づつが知られている。これらを本遺跡の4基の地下式坑と比較すると、平面的な規格が強く打ち出されていることや壁溝や玄門部のピット、土坑の存在などに相違点が指摘できるが、基本的には同一の性格をもった遺構として考えられる。

地下式坑は明治年間から知られているもので、江崎　武氏の研究によれば九州や関東を中心にして全国に700例以上の発見がある。半田堅三氏によって形態分類がなされている。江崎　武氏は地下式坑の少ない伴出資料から14世紀前葉から16世紀中葉にかけての時期に位置付け、一定の経済的基盤をもった有力者で、限定された葬送観念をもった集団の土葬墓と推定されている。

さて、掘立柱建物と第3号地下式坑は同時期に造営されたものと考えられ、本遺跡内での展開は把握できないものの、一定の地区を墓域として設定しうる力をもった有力者の存在が想定される。掘立柱建物で宗教的遺物の出土は認め難いものの通例の集落址とは考えられず、墓守的な草堂として推定しておきたい。発見した地下式坑は4基と小数であり、血縁的であるか地縁的であるかの内実を考えるのは今後の課題である。県下においても中世には積石墓から土葬墓までのかなりの幅をもった墓が検出され現在的には複雑な様相を示しているが、宗教、地域と年代を区切った形での研究が求められていると言える。

引用・参考文献

浜岡賢太郎・吉岡康暢　1962　「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』第32号　古代学研究会
吉岡康暢・橋本澄夫　1965　「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器」『石川考古学研究会々誌』第9号
吉岡康暢　1967　「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』6　ニューサイエンス社
小嶋芳孝　他　1973　「河北郡宇ノ気町宇気塚越遺跡」　石川県教育委員会
谷内尾晋司　1973　「柳田うわの遺跡」『羽咋市史　原始・古代編』　羽咋市
田嶋明人・湯尻修平・他　1974　「加賀市二子塚遺跡群調査概報」　石川県教育委員会
中島俊一　1974　「志賀町矢駄遺跡」　石川県教育委員会
橋本澄夫　1975　「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」『石川考古学研究会々誌』第18号
橋本澄夫　1975　「弥生土器ー中部北陸」『考古学ジャーナル』第106・107・109・111号
橋本澄夫・南　勉　1975　「金沢市高畠遺跡」　金沢市教育委員会
橋本澄夫・高橋　裕　1976　「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III　石川県教育委員会
平田天秋　1976　「金沢市南新保D遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III　石川県教育委員会
吉岡康暢・小嶋芳孝　他　1976　「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』II　石川県教育委員会
中島俊一　1978　「辰口町・高座遺跡発掘調査報告」　石川県教育委員会
小嶋芳孝　1979　「縄文時代以降の遺構と遺物」『上山田貝塚』　宇ノ気町教育委員会
宮下幸夫・小村　茂・上野与一　1979　「小松市津波倉ホットジ遺跡」『石川考古学研究会々誌』第21号
西野秀和・他　1980　「津幡町谷内石山遺跡」　津幡町教育委員会
宮本哲郎・他　1981　「金沢市南新保D遺跡」　金沢市教育委員会
宮本哲郎・他　1982　「金沢市無量寺B遺跡」　金沢市教育委員会
橋本澄夫・西野秀和　他　1982　「七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター
中島俊一　1982　「松任市上二口遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター
宮本哲郎・南　勉　他　1983　「金沢市二口町遺跡」　金沢市教育委員会
久々忠義・他　1983　「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告ー上市町土器・石器編ー』　上市町教育委員会
南　久和・他　1983　「金沢市二口六丁遺跡」　金沢市教育委員会
宮本哲郎・他　1983　「金沢市西念・南新保遺跡」　金沢市教育委員会
土肥富士夫・他　1983　「万行赤岩山遺跡」　七尾市教育委員会
麻柄一志　1983　「北陸の高地性集落とその評価」『富山市考古資料館紀要』第2号
南　久和・他　1984　「金沢市無量寺遺跡」　金沢市教育委員会
楠　正勝　1984　「金沢市南新保三枚田遺跡」　金沢市教育委員会
戸澗幹夫・他　1984　「金沢市近岡遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター
南　久和・他　1984　「金沢市畝田・寺中遺跡」　金沢市教育委員会
吉田　淳　1984　「御経塚ツカダ遺跡」　野々市町教育委員会
谷内尾晋司　1984　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会
高本　実・吉田　淳・宮本哲郎・楠　正勝　1984　「北陸の弥生・古墳時代の竪穴式住居址」『北陸の考古学』
栃木英道　1984　「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会
市堀元一　1984　「特殊ピットを伴う集落遺跡について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会
土肥富士夫　1984　「国分高井山遺跡」　七尾市教育委員会
谷内硯央　1984　「柴垣ところ塚古墳・ごぜん塚古墳」　羽咋市教育委員会
湯尻修平・他　1984　「羽咋市気多社僧坊跡群」　石川県立埋蔵文化財センター
楠　正勝　1985　「金沢市新保本町東遺跡・西遺跡・金沢市近岡カンタンボ遺跡」　金沢市教育委員会
出越茂和　1985　「金沢市松寺遺跡」　金沢市教育委員会
谷内尾晋司・栃木英道　1985　「金沢市北安江遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター
江崎　武　1985　「中世地下式壙の研究」『古代探叢　II』　早稲田大学
湯尻修平・他　1986　「鹿島町徳前C遺跡（III）」　石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人・他　1986　「漆町遺跡　Ⅰ」　石川県立埋蔵文化財センター
出越茂和・楠　正勝　1986　「金沢市近岡ナカシマ遺跡」　金沢市教育委員会
出越茂和　1986　「金沢市無量寺B遺跡　III・IV」　金沢市教育委員会
増山　仁・他　1986　「金沢市二口六丁遺跡II」　金沢市教育委員会
吉田　淳　1986　「野々市町押野タチナカ遺跡　押野大塚遺跡」　野々市町教育委員会
麻柄一志　1986　「弥生・古墳時代集落の変遷ー北陸地方の住居址群分析ノートー」『大境』第10号
石川考古学研究会　1986　『シンポジュウム「月影式」土器について』
南　久和・他　1987　「金沢市押野西遺跡」　金沢市教育委員会
米沢義光・藤田邦雄　他　1987　「宿向山遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人・越坂一也　他　1987　「永町ガマノマガリ遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター
北野博司・他　1987　「宿東山遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター

湯尻修平・栃木英道　1987　「吉竹遺跡」　石川県立埋蔵文化財センター
米沢義光・栃木英道　他　1987　「宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡」　宇ノ気町教育委員会
中島俊一　他　1987　「敷地天神山遺跡群」　石川県立埋蔵文化財センター

調査区全景航空写真（セントラル航業撮影）

西地区主要遺構

西地区全景（セントラル航業撮

第29～32号住居址（西から）

同住居址（東から）

同住居址（北から）

第５号土坑（西から）

同土坑（北から）

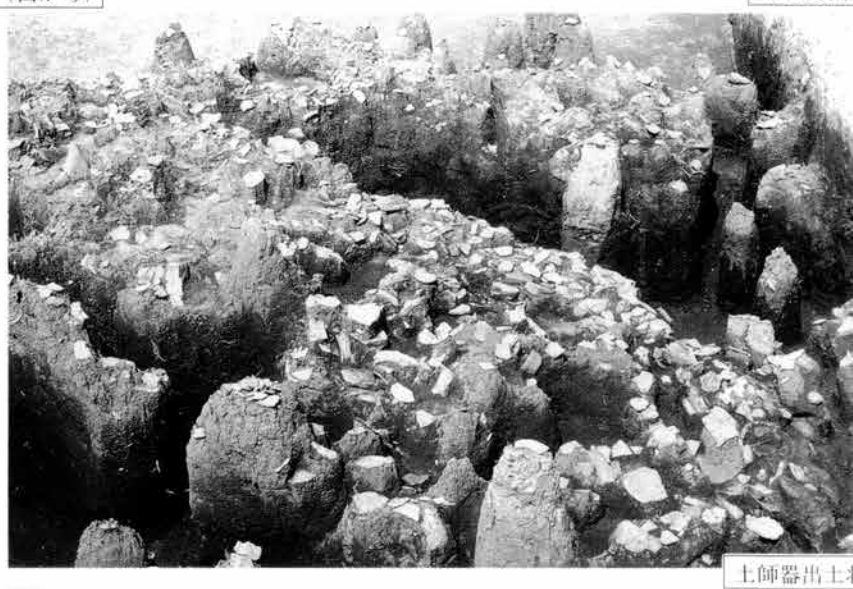
西地区近景（北から）

埋谷遠景（北か

埋谷近景（西から）

埋谷発掘

珠洲焼甕出土状況


土師器出土状

土師器出土状況

土師器出土

台付壺出土状況

西端埋積谷土層断面

埋谷土器出土状況全景（北から）

埋谷土層断面（北から）

掘立柱建物跡全景（西か

掘立柱建物跡近景（西から）

柱穴検出状況（西か

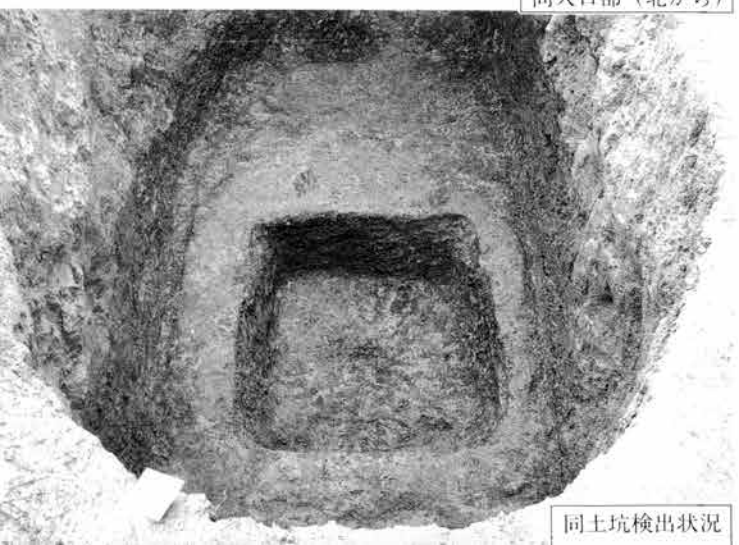
柱穴内遺物出土状況

柱穴土層

第1号地下式坑全景（東から）

同入口部（北から）

同内部



同土坑検出状況

同羨門部

第2号地下式坑全景（南か

同発掘状況

同入口部土層断

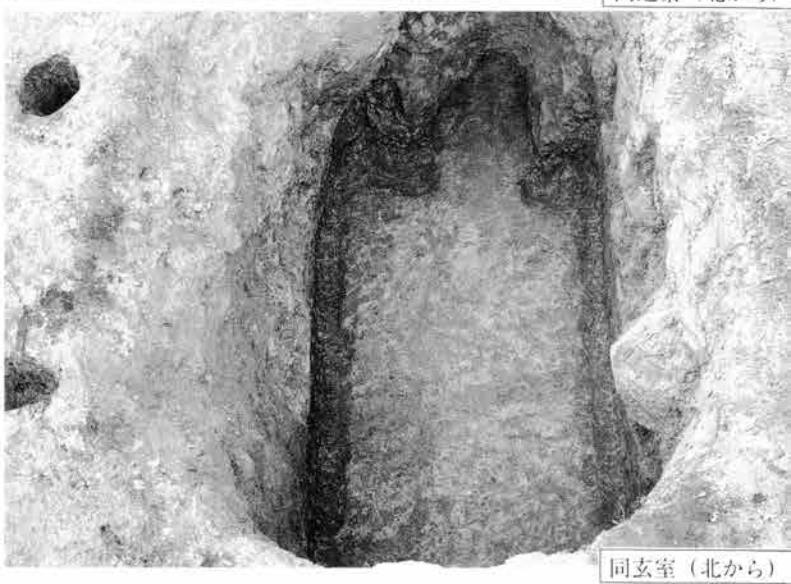
同玄室土層断面

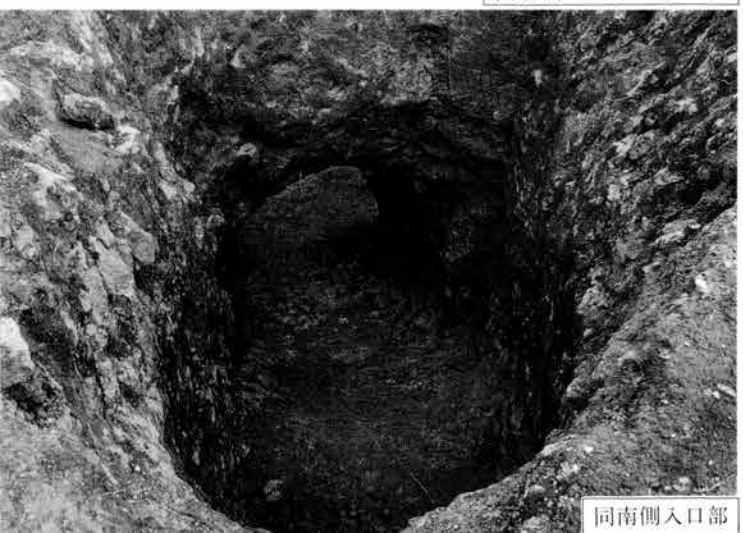
馬遺骨出土状

第2号地下式坑全景（北から）

同近景（北から）

同北側入口部（北から）


同玄室（北から）


同南側入口部

同羨門部

第2号地下式坑羨門部

第3号地下式坑全景（東か

同羨門部

玄室全

同土坑検出状況

第4号地下式坑全景（北か

中地区北東部航空写真

中地区南東部航空写真

中地区南西部航空写

中地区北西部航空写

中地区調査直前の状況（西から）

中地区調査状況（西から）

中地区調査終了全景（西か

中地区調査作業状況（西地区か

中地区調査状況（南西部）

同調査状況（北西部）

同調査状況（第1号住居址）

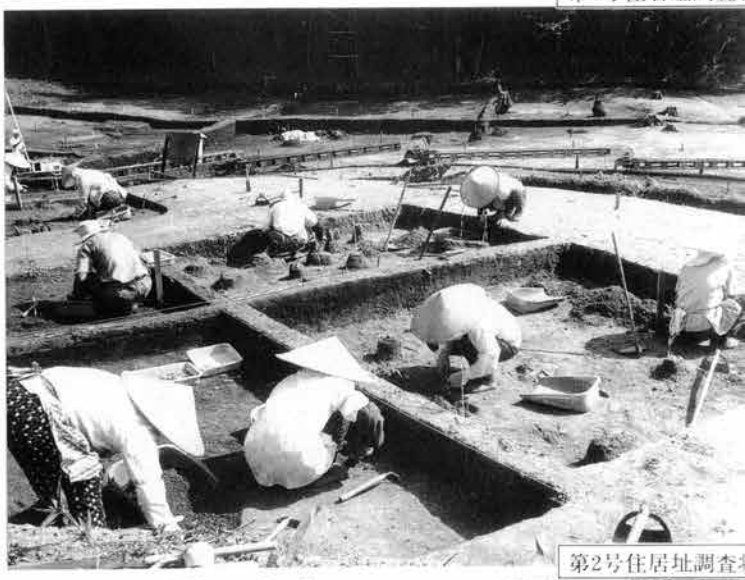
同調査状況（北東部）

同調査状況全景（東から）

第3号住居址調査状況

第1号住居址調査状

第3号住居址調査状況



第2号住居址調査状

第1～4号住居址調査状況（東方

第2号住居址全景（北から）

第2号住居址全景（北東から）

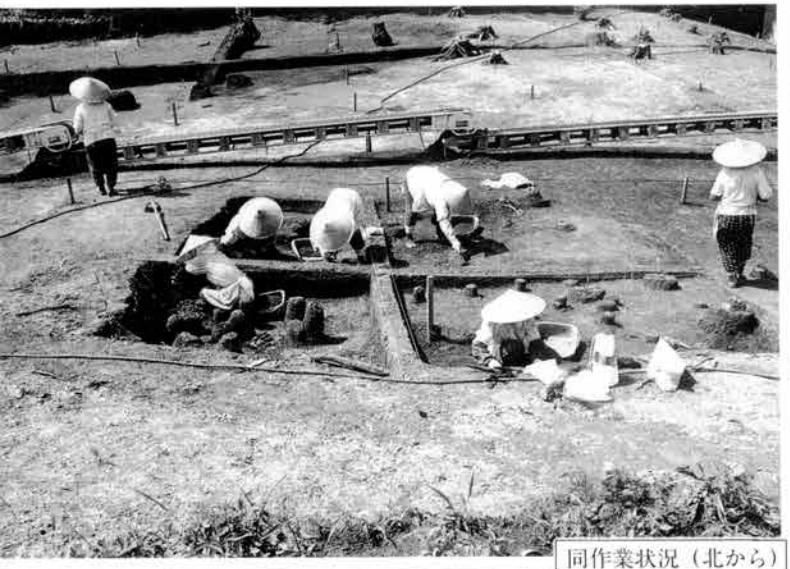
第1号住居址全景（北か

第3号住居址全景（東か

第1～3号住居址近景（北から）

第1～4号住居址遠景（東から）

第4号住居址全景（東か



同作業状況（北から）

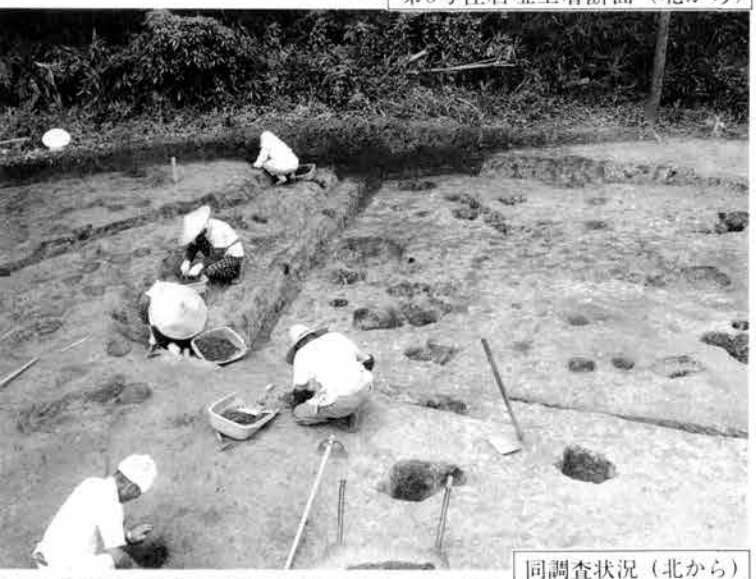
同作業状況（南か

同遺物出土状況（西から）

第4号住居址北側の溝土層断

第6号住居址土層断面（北から）

同調査状況（南東から）



同調査状況（北から）

同全景（北東から）

同全景（南東から）

第31号住居址全景（北東から）

同全景（北西から

第5号住居址全景（北から）

同全景（西か

第9号住居址遠景（北東から）

同全景（東から）

第10・14・9号住居址（南から）

第9号住居址の検出状況

第9号住居址全景（東から）

第8号住居址近景

同住居址甕出土状

第22号住居址土層断面（南から）

第6号掘立柱建物（北西か

第14号住居址遺景（東から）

同近景（北か

同ピット検出状況

同壁溝遺物出土状

第12号住居址全景（北東から）

同遺物出土状況（西から）

第11・12号住居址全景（西から）

第11号住居址遺物出土状況

第11・12号住居址全景（北から）

第10・19号住居址全景（西か

同全景（東か

第19号住居址近景（西から）

同近景（東から）

同近景（北から）

同近景（南から）

壁溝遺物出土状況

壁溝遺物出土状況

第15号住居址全景（西から）

第7号住居址全景（北から）

第16号住居址全景（東から）

同全景（南か

第20号住居址全景（西から）

同全景（北か

中地区北東部をの

第17号住居址全景（北から）

第1号土坑

第3号土坑

第1号掘立柱建物（北から）

中地区南西部をのぞむ

中・東地区航空

東地区航空写真

東地区北部航空写

同南部航空

東地区調査開始状況

東地区調査状況（南西から）

東地区南部調査風景（北か

東地区北部調査風景（南か

東地区北東部調査風景（南から）

東地区北西部調査風景（南から）

第21号住居址全景（北か

同調査状況（北から）

同遠景（北か

同覆土遺物出土状況

同床面遺物出土状

第23号住居址全景（北から）

同調査風景（北から）

同調査風景（南から）

同土層断面（南から）

同北側斜面の遺物出土状況

第24号住居址全景（北か

同住居址全景（南か

第24号住居址土層断面

同床面遺物出土状況

同床面遺物出土状況

第26号住居址（東から）

第26・27号住居址全景（西から）

第25号住居址全景（北か

同住居址全景（南か

第25号住居址調査状況

同住居址全景（南から）

同住居址床面遺物出土状況

同住居址土坑検出状況

同住居址ピット検出状況

同住居址ピット遺物出土状況

同住居址床面遺物出土状況

同住居址壁溝遺物出土状況

第27号住居址全景（東か

ピットと同住居址（南から）

ピット内甕出土状

同住居址ピット検出状況

同住居址床面遺物出土状

第28号住居址全景（西から）

同住居址全景（南から）

第28号住居址床面遺物出土状況

同床面遺物出土

同床面遺物出土状況

同床面遺物出土

同床面遺物出土状況

同床面遺物出土

同床面遺物出土状況

同検出

第13号住居址

第12号土坑

第10号土坑

第11号土坑

第17号土坑

第13号土坑

第15号土坑

第18号土坑

12

15

16

13

40

39

100

117

84

復 元 土 器

123

125

137

129

133

130

145

156

149

復 元 土 器

復 元 土 器

385

386

392

344

414

433

350

443

498

450

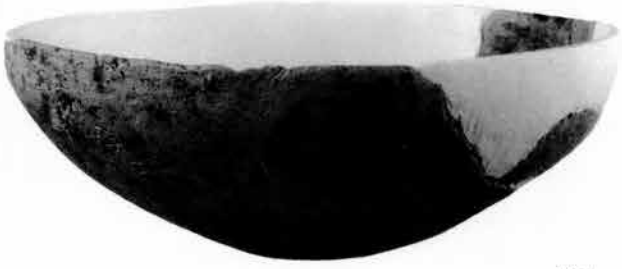
505

復 元 土 器

512

534

542



551

602

608

620

627

復 元 土 器

645

648

650

658

679

690

712

759

復　元　土　器

771

741

742

747

748

730

738

789

794

復　元　土　器

797

828

834

840

846

841

848

852

887

復　元　土　器

891

892

897

948

943

954

955

974

978

983

980

復 元 土 器

984

995

985

1005

1008

1006

1015

1020

1021

復　元　土　器

1022

1034

1035

1037

1038

1043

1048

1049

復 元 土 器

1052

1060

1189

1192

1188

1191

1190

1072

1073

1075

1076

1078

1079

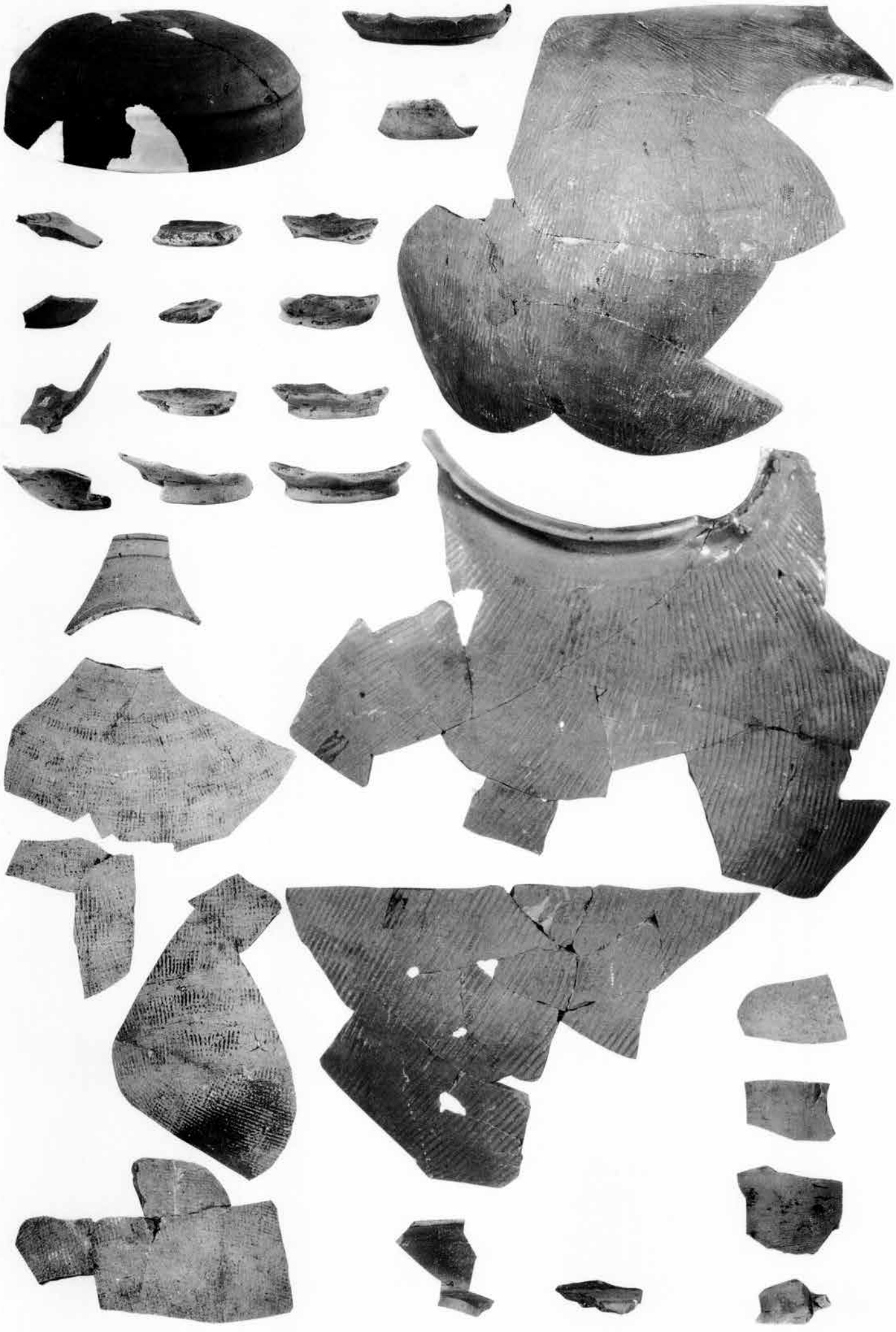
1080

1081

復元土器と石器

縄文時代の土器

縄文時代の石器



古墳時代後期・平安時代の土器

1164

1165

1166

1167

1169

1171

1170

1174

1173

1177

1178

1176

1178

中世陶器・石器

中世木製品

津幡町刈安野々宮遺跡

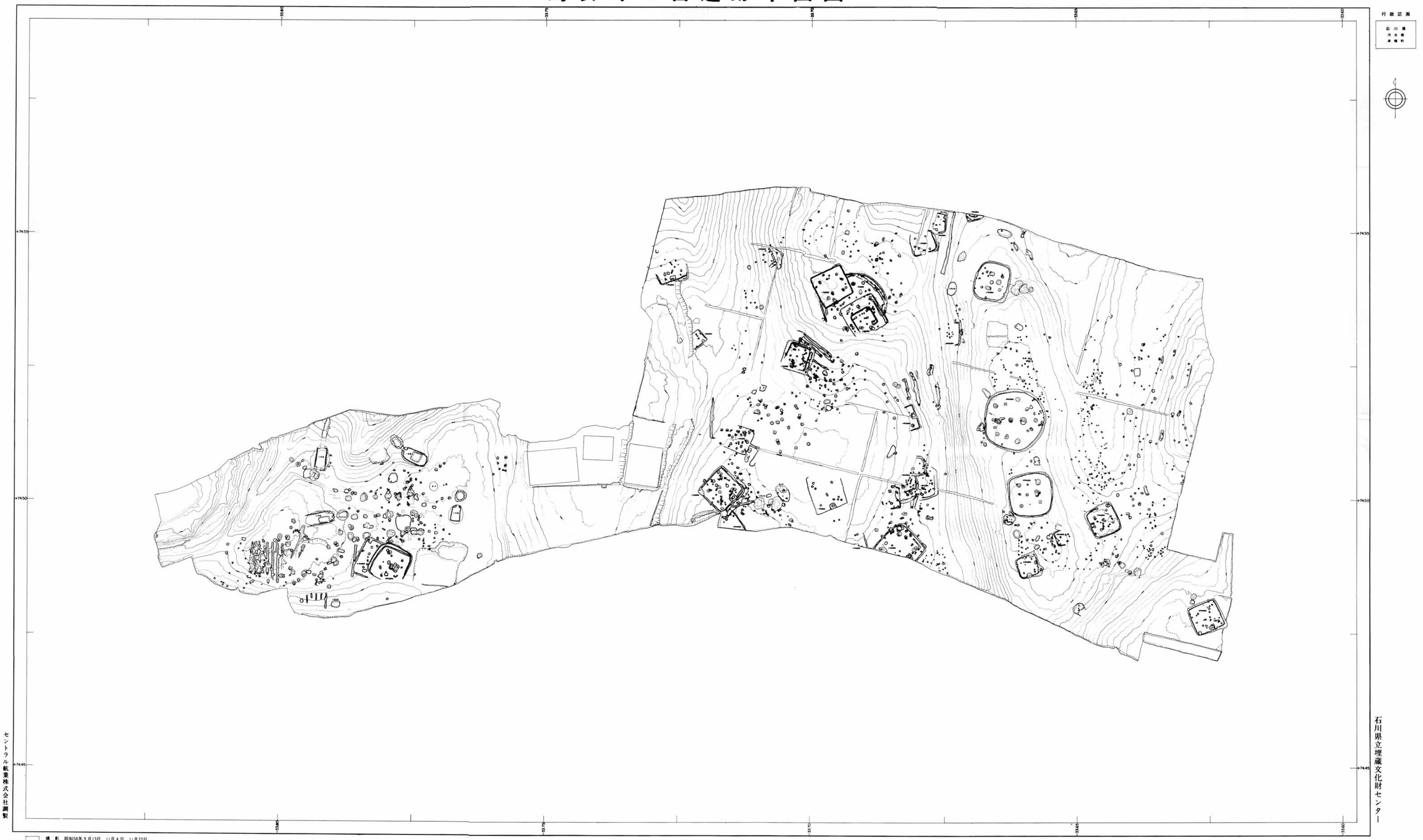
国道８号線改築事業に係る石川県河北郡
津幡町刈安野々宮遺跡緊急発掘調査報告

発行日　昭和63年３月20日（1988）

編集者
発行者　石川県立埋蔵文化財センター
〒921　金沢市米泉町４－133

印刷者　㈱　橋　本　確　文　堂
〒920　金沢市大手町２－35

刈安野々宮遺跡平面図



撮影　昭和58年9月13日　11月4日　11月22日
測図　昭和58年12月　オートグラフA7，アピオマップAMH　等高線間隔　25cm
現調　昭和58年12月

セントラル航業株式会社調製

石川県立埋蔵文化財センター